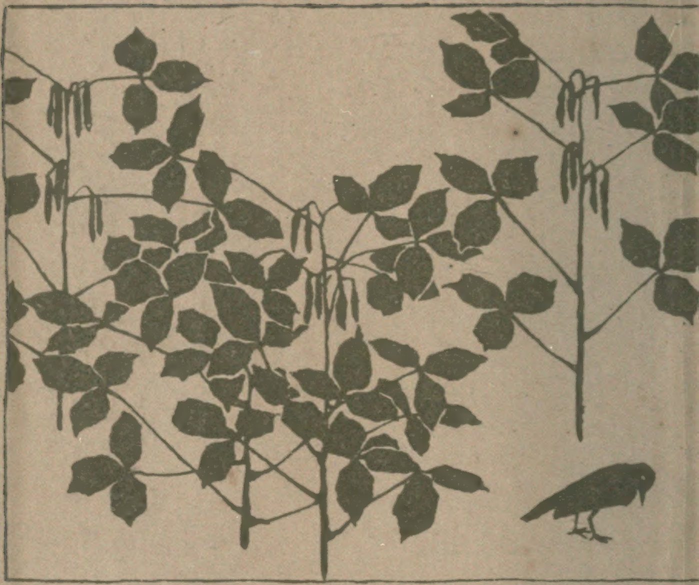
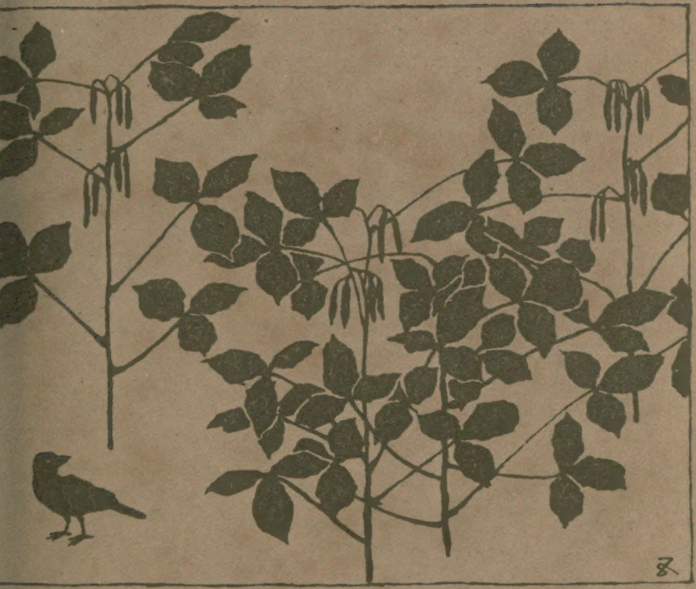
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03042 9104





（岡山製本）

明治四十五年一月十三日印刷
明治四十五年一月十六日發行

通俗漢楚軍談

定價金八拾五錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店

同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

孔子曰、仁者先難而後獲、然而學者宜先積小成大、從淺入深、而漸次極其玄妙矣。譬如行遠、捨近欲飛揚而直到于遠、豈可得乎哉。自古諸史百家之書行於天下者、雖不知其幾千萬卷、而非幼學俗流之所可得而讀焉。故近世往々多以和文而述之者矣。東道有一士。曾與予亡兄章峯爲友、一日來訪之次、求記漢楚興亡之事、章峯辭而不肯、士請之益堅矣、於是不得已、而將著此書十五卷也。及七卷成、不幸、而章峯罹疾卒、其後士又攜之來求予續貂尾、予素才微而且多疾病、再辭三讓而不許。嗚呼妄言俚語眞雖不足發明玄旨、而繼亡兄之志、終其篇數、以塞士之責。元祿甲戌暮春望京南徽庵謹跋。

通俗漢楚軍談終

忠厚の者多かりしかば、百姓みな稱嘆し歌を造て謠て曰、

蕭何爲法較若畫一、曹參代之守而不失、載其淸淨民以寧一。

曹參あるとき子弟に語て、我先帝に從て豐沛より起り、秦楚と兵を交こと四十餘年、百十餘陣を經て萬死一生の軍をしたり、意ざるに今日位人臣の貴を極め、坐ら太平を享て子孫祿を世にする時は、心に於て足り、去ば此位久く貪るべからず、宜く賢人に讓て安く餘年を保んとて、了に朝に出て、臣年老疾多して事を務ること能ず、願は故山へ放し歸して餘年を保しめ玉へと奏するに、帝敢て許玉はざりしかば、曹參再三哀で懇に訴へ、闕下に立て久く退ず。帝曹參が心を決して堅く辭するを御覽じて再び强玉はず、然らば退て安く老年を養べしとて、乃ち宣平侯を以て邑十萬戸を賜ければ、曹參恩を謝して退けり。帝乃ち高帝の遺詔に任て王陵を右丞相とし、陳平を左丞相とし、周勃を太尉とし、樊噲等に勅して常に軍兵を調練せしめ、朱虛侯劉章に詔して呂氏の一族を制服せしめ、宰相内を治め、武將外を治て、蠻夷賓服し、此より天下甚だ無事にして萬國咸く寧く、橐の紐を解ことも無りしかば、行人路を讓て、商賈は市に歌ひ、百姓は業を樂で路に捨たるを拾ず、夜戸を鎖ず、山野の土民三尺の童子までも皆萬歲を唱しは、誠に目出度かりける事共なり。

へば、曹參再拜し、臣安ぞ駑駘を盡して上は先帝陛下の聖恩下は蕭丞相の德に報ぜざらんとぞ申ける。曹參宰相と成りてより萬づ改め易る所なく、悉く蕭何が定め置たる法を守て郡吏を擇には皆文辯に踈く、只老成にして人望ある者を用ひ、凡そ深刻浮薄にして專ら聲名を務る者は了に用ず、又人の小なる過あるを見ては務て之を掩ひ隱し、常に伺候する小吏は一二人に過ず、平坐たゞ安靜にして日を送しかば、帝この由を聞し召、ある時召て問玉はく、卿すでに丞相となりては天下の大任に當れり、然れども終日靜坐して一事を治る體も見ざるは如何なる故ぞ。曹參申けるは、陛下の聖明神武自ら先帝に比せば、孰か愈れる。帝宣く、朕安ぞ先帝を望んや。曹參又申けるは、臣は才能蕭何に比せば、陛下孰か愈れりとし玉はん。帝宣く、卿少し蕭何に及ざるべきか。曹參が曰、誠に然り、陛下已に先帝に如ず、臣又蕭何に及ず、然る時は先帝の定め置玉ひし法令宜く遵ひ守り玉へ、蕭何が爲る所の善政臣又更め易べからず、君臣心を同し、遵て失ず、海宇を淸く寧からしめ、四方無事にして民その業を安じ、天下太平にして陛下は穆々淸々として深く禁宮の内に隱玉ひ、臣等各その職を盡して其位を安ぜば、豈美ならずや、臣が心すでに此の如なれば、安ぞ終日多事にして閙しきこと有んやとて、退て丞相府へ歸けり。曹參相國たること三年、悉く蕭何が法を用ける故、國風ます〳〵淳にして士民

の後早く此人を以て相國とし玉ふべし。帝宣く、丞相もし別に高見あれば再び朕が爲に之を諭せ。蕭何申けるは、先帝法を立玉ふ事甚だ好、王陵、周勃等は皆先帝の用る所の舊臣なり、陛下只よく先帝の法を守て失ことなく、舊臣に任用し玉はゞ、天下自然に無事ならん、此外は臣が知ところに有ず。帝別て朝に歸玉へば、此より蕭何次第に疾重りて了に命終けり。帝この由を聞し召て、羣臣と共に聲を放て大に悲み、詔を下して厚く葬の禮を行しめ玉ひ、早く曹參を召て丞相に任ずべしと議し玉ふ。曹參始蕭何と厚く交しが、後に蕭何次第に位を累て了に丞相に任ぜられしかば、曹參少し恨る心ありて、自然に交も疎なりけり。然れども其のち蕭何賢才を薦め擧たりしに、曹參を第一に薦しかば、曹參も心開け、蕭何私の恨を以て公論を廢ず、實に賢人なりと感じて、此より又恨る心分毫もなかりけり。此とき曹參は蕭何が薨ぜる由を傳きき、急に從者に命じて旅行の營をなさしめければ、家人みな怪み、何事の出來て何方へ赴んとか欲し玉ふぞと問ば、曹參答て我料に、近日朝廷より我を丞相に任ぜんとの勅使あるべし、此ゆゑに預め其用意をなすと云ければ、皆敢て信ぜざりけるに、數日ありて果して勅使來りしかば、諸人大に驚けり。曹參乃ち勅使と共に朝に入ければ、帝安撫して先帝崩御に臨で卿が事を宣ひ、蕭何も又朕に遺して卿を用べしと云り、卿必ず心を王事に盡して委託に負こと勿れと宣

玉ふ。其のち呂后を尊で皇太后と稱し、呂氏の一族を皆列侯に封じ玉ひければ、呂澤等を始として呂后の威を恃み、妄に權を擅にして紫闥に横行しけれども、滿朝の諸大臣みな其威を怕て敢て諫る者一人もなし。扨又丞相蕭何は先帝崩御の後より、老病日に重して朝に出ることも能ざりければ、帝この由を聞し召て深く患ひ、或日親ら彼が館へ行幸して病を問玉ふ。蕭何急に家人に命じて廳堂を掃ひ淨めさせ、朝衣朝冠を著し香を燒て迎へ奉れば、帝其手を執て丞相なにの病をか得たるぞと御尋あるに、臣老病日々に侵して飲食共に減じ、露命危こと旦夕にあり、何ぞ料ん忝も聖體を勞して陋巷へ來り玉はんとは、只恨らくは臣遂に此聖恩を報ずること能ざらんことをと云て、泪を流しければ、帝宣けるは、丞相晏然として心を養ひ良醫をして治せしめば、此病必ず再び平復すべし。蕭何が曰、臣先帝に隨て晝夜計略を運し、軍需を調度して心力を費し盡せしかば、五臟みな傷て了に疾を生ず、是一朝一夕の事にあらざれば、豈よく容易く治すべけんやとて、亦泪を濺ければ、帝も覺ず御泪を流し玉ひて、丞相百歳の後は誰をか宰相として朕を輔しめんと問玉へば、蕭何が曰、臣を知ものは陛下に如はなし。帝宣く、曹參は如何ん。蕭何申けるは、陛下誠に能人を得玉へり、曹參は乃ち當朝の舊臣、人となり素より忠誠なれば大事を任ずるに足り、況や先帝も曾て彼が事を稱し玉ひぬれば、臣死する

軍儀使、丹墀下有三公太師太傅太保、右三孤少師少傅少保、右六卿冢宰司徒宗伯司馬司寇司空、右九寺太常光祿衛尉太僕廷尉鴻臚宗正司農少府、右兩省中書省門下省、右三臺中臺外臺銀臺、右六軍左羽林右羽林左龍武右龍武左神武右神武、右八校中壘校屯騎校越騎校長水校胡騎校射聲校虎賁校、三軍肅整萬姓騰歡驚破外夷之膽懾服匈奴之心、天下太平百司承命、大殿上坐漢天子、頭戴十二旒平頂冠、脚踏雙彩鳳無憂履身著日月袞龍袍手執朝天白玉璧、鼉鼓齊塡、虬鐘響應、眞天上人間實蓬萊仙島始知聖主之尊、乃見漢儀之盛

惠帝甚だ喜玉ひ、是よく朕が意に合へりとて、即時に中外へ觸て用意を成しめ玉ふ。次の日帝大殿へ出御あり、大小文武の百官みな錦の袖を輝して左右に列坐せしめ、大に金門を開て待玉へば、單于乃ち匈奴竝に大小の酋長百餘人を引て朝に入しむ。匈奴酋長禁門に入て望ば、玉樓金臺日に輝て其華麗なること目を驚し、風に飄る蘭麝の匂は鼻を穿ち、伶人樂を奏して笙歌の聲心耳を澄しければ、皆心中十分に欽服し、大殿の前に立て天子を拜し、今始て中國の盛なることを知り、臣蠻夷の族遠く沙漠に生て、未だ曾て今日の如き朝儀を見ずと云て稱嘆しければ、惠帝乃ち群臣に勅し、光祿寺に大宴を設て匈奴酋長を饗應し、多の金帛を賜て悉く國に歸し

れば、惠帝斜ならず喜び、重く二人に恩賞を賜ひ、明日匈奴を引來て朕に見えしめよと勅し玉ふ。時に叔孫通奏しけるは、明日匈奴を召て朝見し玉はゞ、陛下まづ大殿に昇て、文武の群臣を兩邊に排列して、君臣の禮を明にし、宮殿樓閣を悉く飾り、軍器武具を夥しく立列て華麗を盡し、我中國の盛なるを外夷に示玉へとて、具に其樣を書寫して上れば、惠帝乃ち之を見玉ふに、其文に曰、

瓊樓瑞靄御路香生、戈戟輝芒旗旛雜彩、有日月雷電之形、有龍虎風雲之狀。車有十二車、有指南車記里車白鷺車鸞旂車辟惡車皮革車耕耘車安車冋望車羊車黃鉞車豹尾車。輅有十二輅、有蒼輅朱輅青輅黃輅玄輅玉輅金輅象輅革輅木輅白輅。輦有七輦、有大輦鳳輦大芳輦方亭輦小玉輦大玉輦。輿有三輿、五色輿常平輿雲羽輿。駕有三駕、有大駕八十一乘法駕三十六乘小駕一十二乘。麾有黃麾、有青麾、有赤麾、有白麾、有皂麾。竿有龍頭竿、有懸吊竿、有信竿、有長竿。旛有降引旛告止旛教旛通旛信旛。幟有朱雀幢玄武幢青龍幢白虎幢羽葆幢碧油幢。節有金節豹尾節龍節虎節響節。傘有黃羅傘紫羅傘青羅傘。扇有單龍扇、有雙龍扇雉尾扇繡花扇。有內教坊。有外教坊。有堂上樂堂下樂、笙簧節奏、律呂和鳴、左列二十五隊朝天軍、右列二十五隊護駕軍、盡是銀盔銀甲錦袍金帶、都執著大將

降參せぬかと喚き叫で蒐立しかば、盧綰大に亂れ騷ぎ、兵したゝか討れて散々に敗北す。樊噲すき間もなく追かけ、日も已に暮けるに、忽ち燕北より人來て漢の兵多少は知ず太原より殺到し、本陣の輜重數を盡して燒拂ひ、今この處を去こと五十里には過候はじと注進しければ、盧綰魂を失ひ、急に引回して燕の城へ逃籠んとするに、樊噲大軍を下知して攻戰こと益急なりしかば、盧綰容易く蒐通ること能ず、左に衝右に當り、如何にもして一方を斬破んと精神を振て防ぎ戰ふ。此とき夜も天明と明たりしに、忽ち又後より周勃大軍を驅て殺到し、生手を入替て彌急に攻鬪ければ、匈奴の勢は力盡て了に悉く降參す。盧綰これを見て天を仰で長嘆し、我運已に盡たり、如何ともすべからずとて、了に自ら刎て失にけり。樊噲金を鳴して捷軍を收め周勃と同く城に入て百姓を安じ、軍士を勞ければ、周勃乃ち樊噲に向て、御邊の計われ始より覺束なく思しが、果して一も違ざりけりと稱賀しければ、樊噲申けるは、今匈奴降參すと云ども、單于なほ一方に據て未だ王化に服せず、我等早く都に歸て群臣と相議し、單于を曉して和睦を成ん、況や帝いま新に即位の初、この匈寇を擒にしぬれば、中國の威を顯に足り。周勃この議然るべしとて、乃ち共に本部の兵二十萬、幷に匈奴より降參したる十五萬の勢を引て凱歌を奏し、日を經て長安に歸り、共に盧綰が自ら刎ね、匈奴降參して燕代の地悉く平定せる由を奏す

中上を下へと反すべし、其時われ汝と兵を合せて東に向ば、長安を取んこと掌にありとて、能約を定め、次の日自ら兵を引て打て出れば、樊噲これを見て、先張榮、李鼎、馬和、黨奉四人の驍將に各四萬の勢を授て左右に埋伏せしめ、一陣に馬を馳出し、盧綰を指て申けるは、先帝汝と共に兵を起してより三十餘年の間、汝を愛すること子の如く、了に燕王に封じて恩を盡し貴を極玉ふ、汝なほ之を足りとせず、匈奴と好を結で謀反をなす、今われ詔を受て來る上は、汝覺悟せよ、然るべくは空く力を費んより早々に其首を渡して三軍の塗炭を免しめよ。盧綰から〳〵と打笑ひ、汝みだりに其髭を自慢し、眼を張聲を勵して人を畏せども、我更に怕しからず、漢帝罪なきに功臣を誅戮して呂后の刑を用ること殊に甚し、我この故に兵を起して天下を圖んと欲す、汝もし機變の才あらば、今我と同く兵を合せ大議を圖て未央の禍を免よ。樊噲大に怒り、聞たくもなき雜言かなとて、戟を擧て斬て蒐り、金鼓地を動し、塵埃天に揚て二人三十餘合戰て、樊噲わざと敵を重地に帶き入ん爲に、佯て散々に打まけ、馬の足を立かねて逃走れば、匈奴の大軍又横あひに掩殺し、盧綰と力を盡して追かけしに、忽然として耳根に一聲の鐵砲を響すと齊く、兩方より漢の伏勢一度に起り、張榮、李鼎、馬和、黨奉等四人の大將刀を舞して巴の字に斬て囘ば、樊噲も急に取て囘し適の言ほどにもなき奴原かな、是にても尙

御邊まづ五萬の精兵を領じて漳河の東北より太原へ到て敵の後を攻よ、吾は直に燕南へ向て盧綰と迎へ戰ん、彼たゞ意を前に專にして其後を防じ、其とき御邊後より急に攻、敵をして前後相救こと能ざらしめば、盧綰必ず擒と成ん。周勃申けるは、匈奴今大軍を燕北に屯して盧綰と犄角の勢をなす、若わが後より攻蒐る由を聞ば、大勢を率る來て防ぎ戰ん、然る時は我たゞ空く軍馬を傷のみにあらず、將軍も又十分に勝こと能じ。樊噲が曰、然らず、我燕南へ攻かゝらば、匈奴決して前に向て求應し盧綰と力を合せて我を防ん、豈後を顧の暇あらんや、御邊その時思ひ寄ず後より急に討玉はゞ、敵必ず御邊は天より降れるかと、驚き疑て大に潰亂し、御方決して十分に打勝ん。周勃實もとて、乃ち五萬の兵を領じて漳河の東北より出去ければ、樊噲も三軍を整て徑に燕南の大路より進發し、盧綰が陣を五十里離れて寨を下す。盧綰この由を聞知て匈奴の陣へ早く兵を引て來り救へと注進す。樊噲よせ來てより已に三日に及べども一度も討て出ざりしかば、盧綰匈奴と議して申けるは、樊噲は漢の名將なれども年いま漸く老たり、已に此處へ寄來りぬれども、三日が間矢の一をも射出さぬは臆病風を發し、我勢の甚だ盛なるを見て先膽を冷たる者と見たり、我明日出て戰を交へ、汝又奇兵を出して揉合せ、力を盡して北を逐は決して大に利を得べし、樊噲もし一たび敗れば、漢の諸將再び手を出す者なく、關

せば深く三王の禮に合て允に天下の情に協ん。惠帝宣く、汝等が議する所よく朕が意に合へり、早く此由を天下に告示べしとて、郡國の諸侯に觸知せ、各廟を立て月々に祭を行せ、又先帝の嘗て沛縣にて父老と舞歌ひ玉ひし時の綸言を思し召出され、沛縣に廟を立て、之を祭る毎に向に歌舞を教玉ひし童子百人を集て舞歌しめ、若その數缺ること有ば、乃ち有司に勅して補しめ玉ふ。

○惠帝即位亨太平

惠帝即位し玉ひし後、各國の諸侯悉く來て朝賀しけるが、只燕王盧綰は高帝崩御の由を聞てより、兵を起し匈奴と好を結で謀反をなし、朝廷頻に召ども更に詔を受ざりしかば、惠帝乃ち先帝の遺勅に遵ひ、急ぎ樊噲周勃に勅して伐しめ玉ふ。二人詔を受て、即時に精兵二十萬を整點して燕代へ發向し、一日漳河に至て陣を取、まづ細作を出して盧綰が消息を聞しむるに、數日ありて歸り來り、盧綰が大軍は燕南に屯し、匈奴の軍勢は燕北に陣を取て、兩處の兵都合五十萬、燕代兩國の間に相連て陣屋を立續たること三百餘里なりと申す。樊噲之を聞て周勃に申けるは、盧綰匈奴を語ひ、勢甚だ大にして、力を以ては敵し難ければ、只計を以て取べし、

二大將統兵征討、竭力勤除毋負朕命、發喪之禮勿太費侈、恐傷民財非朕
初意、故茲詔示咸使聞之。

大小の群臣遺詔を見て皆聲を放て大に哭き、即時に喪を發して丙寅の日に長安の故城へ葬り、さらば天下一日も君なくんば有べからずとて、諸人相議し、己巳の日を吉日と定め、太子劉盈を册て皇帝の位に即奉る。乃ち大漢の第二主惠帝と申は是なり。角て即位の儀式了りければ、又詔書を作て天下に告玉ふ、其詔に曰、

朕乃帝長子、册立已久、帝崩群臣遵帝遺詔、立朕嗣皇帝位、朕自諒德薄、恐不足以勝天下之重、但帝命簡在不敢固遜、廼於大漢十二年夏四月己巳、入登大寶昭布中外、惟賴爾文武大小臣庶、匡朕不及以共保鴻業、期統續於萬年、衍子孫于不拔、故茲詔示咸使聞知。

叔孫通文武諸臣と共に表を上て即位を賀し、又先帝に尊號を獻て大漢創業の明主たることを後世に顯べき由を奏しければ、惠帝宣けるは、汝等先帝に尊號を贈んと云、これ又子孫の父祖を尊ぶ孝心なり、若舊例あらば汝等宜く其禮を行べし。群臣みな申けるは、先帝細微より起り亂を撥て正に反し、天下を平定して漢の太祖と成玉ひ、功業尤も高し、今尊で高皇帝と號

群臣みな疑ひ怪で、必ず異心を起ん、然る時は天下甚だ危し、況や今陳平、灌嬰は十萬の勢を領じて滎陽を守り、武陽侯樊噲、太尉周勃は二十萬の兵を統て燕代に據、その餘の諸大將も皆四方に散在して各數萬の精兵あり、若帝崩御の由を傳へ聞、又皇后の賺して殺んと謀り玉ふ由を漏聞ば、悉く謀反し、兵を引ゐ來て關中を攻ん、今朝廷にある諸臣彼等が謀反の由を聞ば、又共に力を協て內より起ん、然る時は是等閑の事にあらず、朝廷縱ひ百萬の雄兵ありとも容易く制し難からん、必ず輕々しくし玉ふな。呂后やゝ久く思案し、實に汝が申ところ悉く理に合へり、然らば又いかゞ計を成んと宣ふに、酈商奏しけるは、臣が愚見を以てするに、只急に詔を中外へ下して崩御の事を披露し、樊噲、周勃、王陵等を召て關中を防護せしめ、上は先帝萬年の基を失ず、下は少帝を保て安く太平の業を修し玉はゞ、皇后開創の功も彝鼎に銘じて萬世に傳へ、子々孫々永く泯沒すべからず。呂后喜び、是甚だ公論なりとて、急に叔孫通に勅して遺詔を草せしめて遍く中外へ傳玉ふ。

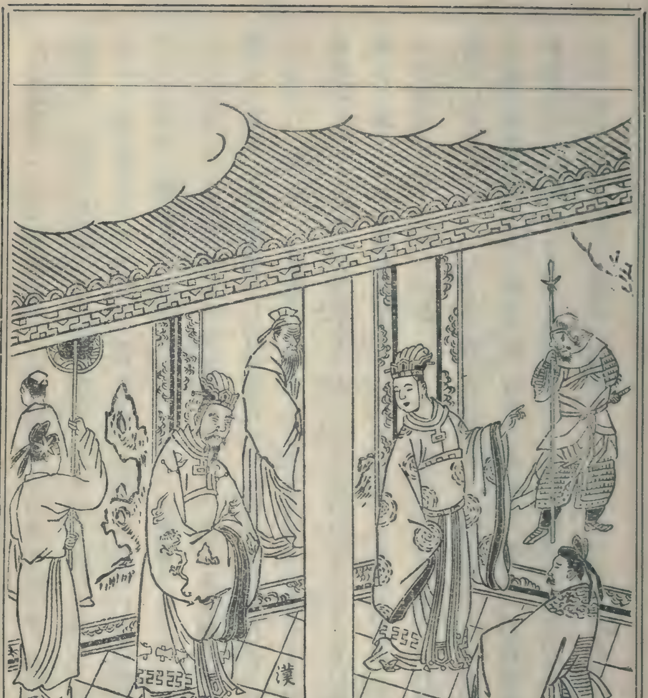
　朕起レ自二布衣一、還二定關中一、艱苦三十餘年、大業始定、方欲下安享二隆平一以臻上致レ治、不レ意寢レ疾不レ起、遂爾遐逝、幸賴二爾大小文武臣庶共贊一鴻猷一、仍冀輔二佐太子一嗣二登天位一、保二守海宇一、統二衍萬年一、天下元々奠二安漢土一、如有下弄レ兵潢レ地不レ遵二王化一者上、卽命二

の者は子も又これを愛す、之を至孝と云、汝必ず忘こと無して能養ひ安ぜよ。太子の曰、父君の恩手足の情二ながら失べからず、臣懇に養ひ保べし、陛下少も慮ること無、たゞ能龍體を保玉へ。時に帝御首を少し擡させ玉ひ、苦げなる御聲にて、朕いま天命已に盡たり、汝返す〴〵も遺詔に負こと勿れと宣ひ、忽然として息絶玉へり。時に大漢の十二年四月甲辰御年六十三歳なり。帝崩御し玉ひしかども呂后深く隱して喪を發せず。已に四日を過て密に呂澤、審食其二人を宮中へ召て議せられけるは、今朝廷にある功臣みな其功に伐て久く異心を懷く、若崩御の由を聞知ば、決して亂を成ん、豈身を委て少帝に事らんや、我思ふに、先崩御の事を披露せず、佯て帝御病甚だ重を以て後の事を付屬せんと宣ふと相ふれ、內外の諸臣を宮中へ召集め、兼てより左右に武士を多く伏置盡く殺して後の患を除んと欲す、汝等いかなる意見かある。審食其申けるは、先詔書を寫して中外へ傳へ、大小の群臣を召て朝に入しめ、又別に一人心腹の大將に勅し、多の武士を率て急に殺しめ玉へ、若備嚴からずして群臣一たび變を生せば、甚だ大事に及ん。呂后の曰、われ諸大將の中を見に、只酈商一人心腹の事を託すべし、速に召來て計を議せよ。呂澤命を受、卽時に行て伴ひ來りければ、呂后乃ち密に右の趣を語玉ふ。酈商申けるは、是甚だ長大の計にあらず、皇后今もし詔書を寫して中外へ傳玉はゞ、恐は

ずと云こと有べからず。呂后喜び、汝もし能之を治せば重く恩賞を與て富貴心の儘にせんとて、宮中へ伴ひ行て帝に見しむ。醫者奏しけるは、陛下の御病未だ治し難からず、臣いま良藥を獻て療治せば、近は二十日、遠は三十日の内に必ず平復し玉ふべし。帝左右に向て罵て宣く、汝等何ゆゑに山野の匹夫を重じて朕が前に引來れる、朕布衣より起り、三尺の劍を提て了に天下を有つ、是みな天命なり、朕が命は天にあり、今朕が死すべき時至りなば、縱ひ扁鵲が如き神醫なりとも、安ぞ治することを得んとて、了に脈をも窺しめ玉はず、黄金五十斤を與へて櫟陽へ歸し玉ふ。此より飲食次第に減じ、御病日に添て重りしかば、呂后深く之を患ひ、朝夕左右を離ず、少し御快き隙を伺て、萬一陛下萬歲の後蕭何もし死せば誰をか宰相とすべきと問玉ふに、帝宣く、曹參素より相國の才あり。呂后又その次を問玉へば、帝答て宣く、王陵を用べし、然れども王陵少し不足なれば陳平を以て輔べし、陳平は智餘あれども政を一人に屬し難し、又周勃は人となり重厚なれども文少し、宜く太尉に任ずべし、劉氏を安んずる者は必ず此人ならん。呂后又その次を問玉へば、此次は朕が知ところに有ずとて答玉はず。或とき又太子來て病を問玉へば、帝近く召て朕老たり、此病再び治すべからず、汝が人となり甚だ仁厚にして天下を保べきに足り、只趙王如意母子の命專ら汝が手に係れり、父の愛する所

が如し、今もし他所へ遷ば、病いよ〳〵重るべし、汝等再び云こと勿れ。時に樊噲すゝみ出、地に拜伏して奏しけるは、陛下匹夫より起て遍く四海に横行し、秦を誅し楚を亡し玉ふ、其壯なること天下誰か畏ざらん、今いかなれば始を忘て深く戚氏を愛し、戀々として離に忍玉はざる、臣想に呂后は陛下と數年の患難を同して共に大業を成玉ひしかども、常に陛下と正宮に相對することを得玉はず、大に天地配合の宜を失へり、此故に太子群臣と罪を冒して奏し玉ふ、陛下もし尚御心を堅して正宮へ還玉はざる時は、又父子の情に負き君臣の義を失なり、陛下何を以てか法を萬世に示玉はんやと云ば、群臣みな聲を揃て、陛下もし樊噲が諫に從玉はずば、臣等決して此處を立去じと申せしかば、帝已ことを得ず、了に病を扶て長樂宮へ還玉ふ。戚姬も今は力及ず、帝を正宮へ送り奉り、呂后に見て禮を施し、又西宮へ歸けり。呂后乃ち群臣を召れ、良醫を擇で帝の病を治せしめんと相議し玉ふに、陳平奏しけるは、長安を二百餘里隔て、櫟陽と云處の北山の下に一人の名醫あり、極て能脈理を知て、病を治するに愈ずと云ことなし、今使を遣し之を召て藥を獻しめ玉へ。呂后聽て禮物を備へ櫟陽へ使を送玉へば、數日ありて醫者出來れり。呂后具に帝の病症を一々に語玉へば、醫者申けるは、今病症を承るに、至て重と云へども帝素より元氣壯にして天性健なれば、良藥を以て療せんに愈

宮に御座す、若不虞の事あらば、如何が後の事を定べきと議せられければ、宮嬪みな申けるは、此事たゞ灌嬰、周勃等諸の大臣を率て太子自ら西宮へ到り、帝に勸て長樂宮に歸て病を養玉へと奏し玉はゞ、帝若も從玉ふこと有ん。皇后いかに諫玉ふとも、帝了に聽玉はじ。呂后尤とて、乃ち審食其、呂澤を遣し、周勃、灌嬰等に太子と同く西宮へ赴べしと命ぜらる。諸臣命を受て、皇后の宣ふ所極て理ありとて、乃ち太子と共に西宮へ到り、福順門の外に立て宮嬪を呼で帝に此由を報ぜしむ。帝宣く、此は必ず呂后が計にて朕を諫て本宮へ歸らしめん爲なるべし。戚姫これを聞て、陛下もし妾を此に捨て還玉はゞ、了に呂后に害せられて再び天顏を拜すること能じと云も敢ず、床の前にひれ臥て、雨々と泣悲む。帝宣く、汝慮こと勿れ、朕まづ諸臣の奏するを聞て宜く料ふべしとて、宮嬪を出して迎入しめ玉ふ。太子群臣内に入て、帝の御容を伺に面の色黃にして、五體瘦衰させ玉ひければ、皆首を叩て哀み告て曰、陛下春秋已に高て又此の如き重病を受玉へり、然れども久く此に在て朝夕歡樂を極玉ふ、是聖躬を養の處にあらず、陛下願は早く正宮へ還り、靜に御病を養て萬年を保玉はゞ、太子の至孝諸臣の至願ならん。帝宣けるは、朕が病を得たるは、久く兵馬に苦勞し、心中終日鬱々として暫も靜なること無りし故なり、近頃この處に在て靜に心を養しかば、身體少し舒たる


漢帝
劉盈
項東

高祖長樂宮ニ拒ム医ヲ

會に項莊劍を舞して陛下を殺んとせしも、臣が父又劍を舞し力を極て之を防しゆゑ、又虎口を逃玉へり、其のち成皐にて項王太公を俎に載て殺んと云しも、父が樣々に諫しを以て、項王やう〳〵に止れり、之を以て思ふ時は臣が父の功、紀信、夏侯嬰が下にあらず、陛下今日太子と二人が功を稱し玉へども一言も父が事を宣ず、臣あへて死罪を避ず、陛下の爲に之を奏す。帝聞し食、御心茫然として答ること能ず。良ありて宣けるは、朕久く昔日の德を思て二姓の好を修せんと思へども、今までは干戈定ずして暇なかりしかば、心の外に延引せり、今汝が言を聞て朕が心愧ことありとて、卽日に詔を出し、少華公主と云御女を項東に妻せんとて、叔孫通に勅し、日を擇で婚姻の禮を行しめ、項東を昭信侯に封じ玉へば、項東恩を謝して此より後は隆慶府に住居せり。

○高祖長樂宮拒レ醫

去年十月に帝英布を征伐し玉ひし時の矢瘡當分は平愈したりけるが、今年春の末に至て舊疾再び發り、又常に戚氏を愛し、久く西宮に御座ありて本宮に歸らせ玉ふこともなかりしかば、了に重き病を受玉へり。呂后乃ち宮嬪を召て、帝近ごろ重病を受玉ひしかども、今に至て倘西

たる者ありと云ども興劉破楚の功は竟に泯沒すべからず、朕今一の閣を立て其内に諸の功臣を圖に寫させ、後世の子孫に示して其初を忘ざらしめ、又は大漢人才の盛なるを顯んと思ふなりとて、卽時に工匠に命じて功臣閣を造らせ、又畫工に命じて功臣の容を四方の壁に寫させ玉ふ。角て程なく功臣閣已に成就せしかば、帝乃ち太子を伴て閣に登り、一々次第に功臣の出處來歷を說示して紀信に到けるとき、太子宣けるは、昔し滎陽にて若この人の命を捨て楚に赴に有ずんば、陛下豈今日あらんやとて、又夏侯嬰に到て、臣曾て彭城にて楚人に生捕れし時、もし此人の救に有ずんば、今日爭か陛下の子と成ことを得んやと宣ければ、帝深く叡感あり、我子實に其本を忘ずとて、其日了に紀信が子の紀通と夏侯嬰とを召て、重く恩賞を與玉へば、二人拜謝して出去ぬ。滿朝の諸臣も之を聞て、皆太子の仁德を贊嘆せしかば、帝いよ〳〵喜玉ふこと限なし。時に一人大に叫で曰、陛下太子と共に只紀信、夏侯嬰二人が功を稱して臣が父の莫大の功あるを思玉はず、何とて忘玉ひし。帝驚て之を見玉ふに、乃ち項伯が子の項東なり。進み出て奏しけるは、陛下昔し覇上に軍して楚と相拒玉ひし時、楚王密に夜討せんとせられしを、臣が父項伯張良と故舊の好あるを以て、了に同姓を忘れ親ら矢石を冒し、漢の陣に赴て陛下に注進し、又馳歸て務て項王を諫しかば、陛下了に其夜の難を免れ玉へり、次の日鴻門の

四海晏然たり、太子又仁孝にして素より賢を敬ひ士に下て萬年の基を繼に足り、臣四皓年みな八十に超て起居輕からず、臣良衰病日に重して事を務ること能ず、願は暇を賜へ、臣等今より終南山に入て仙を學び、一切の功名富貴心に關ことなく遠く雲水を弄で悠然として餘年を保ことを得ば、乃ち陛下の洪恩これに過べからず。帝張良に向て宣けるは、先年朕に從てより屢奇功を建られしかども未だ萬一も之を報ぜず、向に留侯に封ぜんと云しも先生又受ず、今別て遠く去らんと欲す、何の日か再び相見ることを得べきとて、又四皓に向て、朕つねに汝等は永く太子に從て政を扶るならんと思しに、今早々に相別れ遠く山林に遁て名を藏し、跡を韜んと欲るは如何なる心ぞやと宣へば、四皓申けるは、今君子朝に滿、善人道に當る、臣等は衰朽の人にして國家の爲に益なし、願は陛下たゞ田里に放し歸して老年を養しめ玉はゞ、臣身を終るまで聖恩を忘れ候はじ。帝五人の心を決して堅く暇を乞を見て、敢て强玉はず、了に金帛を與へ、親ら歩行して殿門の外に送り、四皓張良が飄々然として歸り去を見て、良久く嘆息して立玉ふ。張良山に歸て後、ある日帝忽ち開國の功臣を思ひ慕せ玉ひ、太子を召て語り玉はく、朕に從ふ諸臣或は朕と共に布衣より起りしもあり、又は楚を背き漢に歸して大功を立たるもあり、或は又中比より隨ひ、屢々奇謀妙算を以て朕を扶しもあり、其中罪を犯して誅戮せられ

も皆丞相を留て都を鎭守せしめ玉へり、此時に當て關中若等閑の人これを守らば國家了に陛下の者にあらじ、丞相この時にだも利を求るの心半點もなく、赤心にして國を守れり、今安ぞ民の賂を貪ること有ん、縱ひ左樣の事ありとも是尤も小なり、陛下なんぞ小過を忌で大德を忘玉ふや、臣敢て誅を畏ず、陛下の爲に之を奏す、願は能察し玉へ。帝沈吟して答玉はず。良ありて、是眞に朕が過なりとて、卽時に近侍の人に節を持せ、蕭何を獄中より出して朝に入しめ、安撫して宣けるは、丞相民の爲に地を闢しむ、是宰相の職なり、朕不明にして之を知らず、一旦誤て獄に下し、今後悔すれども及ず、丞相この難に遇て略辨んとする心なし、眞に賢宰相なり。蕭何申けるは、陛下素より聖明なれば、臣申開ずとも定めて程なく悟て放玉はんと思ひ、少も辭せずして縛を受たり。帝いよ〳〵感嘆し、賢なる哉賢なる哉と宣て、向に路にて蕭何が事を訴たる者を捉て了に首を刎玉ふ。此時張良は蕭何が獄に下れる由を傳きゝ、深く嘆じて申けるは、韓信、英布、彭越すでに誅せられて蕭何又獄に囚る、我いま道を修し穀を辟て閑居すと云ども、是なほ關中の地なり、況や太子を易ざりし計は乃ち我所爲なれば、帝もし之を知玉はゞ、決して害を免れ難からんとて、密に四皓に逢て計を相議し、終南山に入て仙を求め、其難を避んと云ば、四人尤と同じ、次の日伴て朝に出て奏しけるは、方に今天下一統して

に戒め、即日に打立て趙へ赴べしと宣しかば、如意まづ宮中に入て戚姫に別を告玉ふに、戚氏別に忍ず、我今日汝と相別て又何の日か再び相見べきと、母子互に頭を抱き聲を放て大に哭き玉へば、聞人泪を流ぬは無りけり。如意すでに旅行の用意をなして、洛陽城を出玉へば、帝も遠く郊外まで送玉ひしが、互に涙を流して尚別れ去に忍玉はず。周昌言を正して申けるは、夫天子は萬民の父母、いま四海の蒼生は悉く是陛下の赤子なり、如何なれば趙王一人を深く憐み兒女の如く戀々として別に忍玉はぬとて、趙王を守護して直に邯鄲へ赴きけり。帝は周昌に諫られ、泣々城中へ歸んとし玉へば、一人手に訴狀を執て路の傍に拜伏し、相國蕭何上林苑の中の空地を民に開せて五穀を作り、又つねに民の物を貪り取て自ら富貴を求め候ふと奏しければ、帝大に逆鱗あり、蕭何なにとて朕が平生の恩を忘て此の如の擧動をなす、甚だ臣の道に有ずとて、急に廷尉の官を召て蕭何を獄に下せと勅し玉ふに、蕭何敢て辨んともせず、少も辭することなくして縛れけり。數日を經て、王衛尉と云者、朝に出て奏しけるは、蕭丞相何の罪ありてか陛下獄に下し玉へる。帝宣く、彼私に民の賄を受、又上林苑の空地に五穀を作らせて百姓に媚を求む、朕この故に獄に囚たり。王衛尉が曰、凡そ民に便ある時は之を行ふ、乃ち宰相の職なり、陛下昔し楚と相拒こと數年、其のち陳豨、英布を征伐し玉ひし時

深き士を擇び出して如意を扶しめんと宣ば、戚姫喜で拜謝し、又盃を擧て歡樂をなす、次の日帝殿に昇て文武の群臣を集め、汝等が申す如く劉盈已に春宮に立てより年月久しければ、今さら更め易べからず、然れども如意漸く成長しぬれば、是も久く宮中に留がたし、今これを封じて趙王とし都を邯鄲に建しめんと欲す、汝等いかなる所存かある。群臣聲を齊して曰、若然る時は甚だ公論に合へり。帝又宣く、如意を趙王に封ぜば宜く老成の大臣を擇び之を輔て朝夕教へ導しむべし、卿等誰をか此任に當んと欲る。蕭何奏しけるは、御史大夫周昌人となり公正にして其心甚だ明爽なり、此人を趙王の輔とし玉へ。帝これ能朕が意に合へりとて、卽時に周昌を召て事の子細を告玉ふ。周昌申けるは、臣いま勅を蒙ると云ども敢て輕々しく受ず、臣三の願あり、之を許して自ら手勅を寫して戒玉はゞ、謹で詔に從ん。帝宣く、汝試に之を奏せよ。周昌が曰、第一には臣いま趙王に從はゞ、朝夕左右を離ることなく再び朝に入べからず、其ゆゑは地方を守る人なく、又は虛に乘て害を謀る人あらん、第二には趙王退て本國を守り、萬づ謙で臣が諫に從ひ玉ひ、第三には戚姫と常に音問を通ずべからず、其故は常に音問を通ずる時は、人みな疑ひ忌で母子共に了に自ら保こと能ず、陛下もし此三を以て臣が意に任玉はゞ、乃ち趙王を輔べし。帝聞し召、この事甚だ易しとて、卽時に手勅を寫して如意

祝す。帝つらく〱四皓が人表を見玉ふに、衣冠正く整へて器度甚だ奇偉なりしかば、眞に當世の神仙なりと深く心に嘆じて、直に長信宮へ到り玉へば、戚姫乃ち出迎ふ。帝具に叔孫通、周昌が堅く廢立を諫め、又四皓が羽翼あれば太子すでに動し難しと語玉へば、戚姫覺ず泪を墮し臥低首て悲けるを、帝様々に之を宥め、如意たとひ太子に立こと能ずとも安ぞ愁ること有ん、汝少も慮ること勿れ、朕必ず如意を大國の王位に封じて安く富貴を受しめんと宣ければ、戚姫恩を拜謝し、陛下願は慮を深して我母子が他日の難を救玉へとぞ申ける。

○張良從四皓歸山

帝或とき又戚姫に語て宣く、朕さきに英布を征せし時、兵を邯鄲に駐たりしが、此所風土淳厚にして人民富庶なり、前には燕臺の阻あり、後には漳河の險ありて地方千里、多く豪傑を出す、是又長安に劣ぬ要害なり、朕明日朝に出ば如意を封じて趙王とし、都を邯鄲に建て身を終まで快く富貴を樂しめん、況や關中を離ること甚だ遠し、是乃ち古の重耳が害を遠の道なり。戚姫喜で申けるは、若然ば妾死すとも愁なし、然れども如意なほ幼弱なれば、恐は彊土を保こと能じ、願は一人謀略ある士を擇で之を輔しめ玉へ。帝領掌し、明日群臣の中より智謀

暫くも相離ること無りけり。扨又帝は群臣を召て問玉はく、朕前日卿等に命じて太子廢立の事を議せよと云しかども未だ回奏せず、衆評如何とか定りし。叔孫通、周昌齊く出て諫て曰、昔し晉の獻公深く驪姬を寵愛し、彼が讒言を信じて太子を廢し、奚齊を春宮に立られしかば晉の國亂ること數十年、又秦の始皇は早く扶蘇を春宮に定ざりし故に、趙高詐て胡亥を立、了に社稷を滅せり、是は乃ち陛下の面見玉ふ所なり、今太子の仁孝なる天下たれか知ざらん、然るに陛下堅く嫡子を廢して庶子を立んと欲し玉はゞ、臣願は太子の爲に此にて自ら首を刎ん。帝これを聞し召て御心喜ず、了に袖を拂て入玉へば、群臣も悉く退散せり。其のち帝長信宮へ行幸せんとて便殿を過玉ひければ、太子劉盈文德殿より出迎玉ふに、四人の老人その跡に從ひ居たりしかば、帝怪で此四人は何より來れるぞと尋玉へば、四皓乃ち御前に近付て其姓名を奏す。帝驚て宣く、朕久く禮を恭して懇に招しかども、汝等了に來り見ず、今何故に太子には隨や。四皓申けるは、陛下素より高慢にして妄に士を輕じ玉ふ、此ゆゑに屢召ども敢て詔を受ざりき、今皇太子は仁孝恭敬にして賢を敬ひ士を尊玉ふを以て、天下の人頸を延て太子の爲に死せんことを願ずと云者なし、然る間臣等も身を委て太子に事んことを願ふ。帝喜で汝等願は能太子を守護し、正を以て導き敎よと宣へば、四皓再拜して帝の爲に壽を

の沙汰止べし、若此四人を得ば、百人の強將十萬の精兵に勝て、聲色を動ずして太子磐石よりも固からん。呂澤乃ち四人の名を尋れば、張良答て曰、一人は姓は唐字は宣明、東園に住居す、此故に東園公と號す、一人姓は綺名は里季、邯鄲の人にして初め商南に隱居せしが、後に東園公と友とし交る、一人姓は崔名は黃字は少通、齊の人にして夏黃に隱居す、此に因て夏黃公と云、一人姓は周名は術字は元道、河内の人、角里先生と號す、此四人つねに商山に隱れ居を以て世の人商山の四皓と稱す、御邊歸て此由を呂后に奏し、早く使を馳て懇に求よ、彼もし山を下らば大に太子の福ならん。呂澤喜び急ぎ歸て委く呂后に奏しければ、呂后斜ならず喜び、卽時に李恭を使とし、蜀の錦四千疋黃金四千兩名馬四匹を備て商山へ遣さる。四皓この時山中に靈芝を採て歸ければ、李恭坡の下に跪き、金帛名馬を捧て、皇太子劉盈仁孝恭敬にして久く四先生の高名を仰ぎ今某を使として召玉ふ、願は山を下て太子を輔け教へ太平の治を成しめよ、太子他日寶位に昇ば富貴四先生と共にせん、必ず辭すること勿れと告けるに、四皓始の程は敢て肯ざりけるが、李恭懇に哀み求め、地に拜伏して久く立去ざりしかば、已ことを得ずして了に禮物を取收め、李恭を留て山中に一宿せしめ、次の日相伴て山を下り、朝に入來て太子に見ふ。呂后深く喜び酒宴を設て四人を持なし玉へば、四皓此より朝夕太子を輔て道を敎へ、

智淺して大事を謀に足ず、密に張子房と相議し玉はゞ、彼必ず深き心あらん。呂后の曰、張良は道を修し、穀を辟、閑居して一向に出ず、安ぞ我爲に策を成べけん。呂澤が曰、臣子房が子の張辟強と常に親く交る、此人に告て父に達せしめば、張良必ず默すこと能じ。呂后喜で、然らば汝張辟強を伴ひ行て張良に計を求よと宣へば、呂澤乃ち張辟強に逢て事の樣を語り、伴て張良に見え、計を乞求るに、張良敢て答ざりしかば、呂澤申けるは、我呂后の命を受て此に來る、先生言玉はずば、我歸て呂后に如何が奏すべき、決して一言を聞ずんば、此所を出去じ。張良申けるは、我敢て云まじきにあらず、然れども輕々しく妄に云がたき事なり。呂澤が曰、先生の口より出て我耳に入、何の云がたき事か有ん。張良乃ち耳を附て低語けるは、帝平生重ずる所の者四人あり、しば〳〵禮を厚して徵ども、其人志を固して詔に應ぜず、商山の南に隱れ居、この山長安を離こと三百里、勢甚だ險阻にして多く靈芝を生ず、彼四人これを採て服し、泉を鑿て渴を救ひ、飄然として世上と相忘る、帝深く此四人を慕玉へども力を以て來し難ければ、每に之を除んと欲玉ふ。然れども世の人の議論を憚り、又は罪なきに賢人を殺すこと甚だ不仁なりとて、了に彼が心に任玉ふ、皇后いま使を遣し、禮を卑し幣を厚して懃に求玉はゞ、彼必ず來て太子を羽翼ん、帝一たび四人が太子を守護するを見玉はゞ、自然に廢立

帝の萬歳の後には、我必ず汝を虀粉とすべしと樣々に罵て出玉ふ。戚姫は敢て物を云ず、只泣咽で居たりしが、覺ず涙を帝の面に濺けり。帝始て目を醒し、戚姫が涙を墜を見て、驚て問玉はく、汝何事をか悲み哭くぞ。戚姫申けるは、陛下さきに妾が膝を枕として臥玉ひし時、料ざるに呂后外より來り玉ひしかども、陛下の驚き醒玉はんことを恐れ、動ずして坐し居たり、呂后これを怒て、帝の萬歳の後に汝を虀粉とすべしと、樣々に罵辱て去玉へり、妾この故に泣悲で誤て龍顏を汙たり、罪誠に萬死に當れりとて、又涙を流ける有樣、げに桃花の朝に露を濺ぎ、牡丹の夕に雨を過せる如なれば、帝深く憐れと思し召、袖を攬て安撫して宣けるは、汝必ず心に掛ること勿れ、朕明日朝に出群臣と議して必ず太子を易ん、汝皇后となり、如意天子とならば、呂后あに害を加ることを得んや。戚姫再拜して恩を謝しければ、帝別て歸玉ひ、次の日朝に出て文武の群臣を集め、向に太子廢立の事を議したりしかども、其比は干戈未だ定ず、朝廷事多かりし故、未だ一決せざりき、卿等いま再び公論を以て之を議せよ、必ず私の見を執こと勿れと宣て退玉へば、群臣みな丞相府に集て評論す。呂后この由を聞知て急に兄の呂澤を宮中へ召よせ、帝甚だ戚氏を愛して我舊日の德を思ず、しば〳〵群臣を集太子を廢して如意を春宮に立んと議し玉ふ、此事いかゞすべきと議せられければ、呂澤申けるは、臣もと

に禁宮に入て大に酒宴を設け、諸の將士を勞ひ玉ふ、此より後は兵亂やゝ收て天下少し靜なり。帝素より戚姫を深く愛し玉ひしが、近ごろ干戈治て朝廷閑なりける故、日々戚氏の宮中へ通ひ入せ玉ひしかば、呂后つねに嫉妬の心を懷き、隙を伺て害せんと深く恨み怒り玉へり。戚姫此由を聞て安き心も無りけるに、或日帝少し病ありて西宮へ入玉ひしかば、戚姫奏しけるは、陛下春秋漸く高て近き比は聖體病多し、若早く叡慮を回し玉はずば、我母子他日恐くは死すとも葬るに地なかるべし。帝宣く、此事甚だ易し、朕心靜に之を圖ん、汝少も患ること勿れ。戚姫左右に命じて酒を勸ければ、帝大に醉て、了に戚姫が膝を枕としてよく寢入玉へり。呂后は常に帝の西宮へ入玉ふと聞ては、密に人を遣して樣子を伺せけるが、此日も密に探り見せしむるに、帝戚姫が宮中にて只二人酒を飲で御座ありと告しかば、軈て輿に乘て西宮へ赴玉へり。宮門を守る人急に內へ入て只いま呂后來り玉へりと告けるに、戚姫は帝の膝を枕にして臥玉ふに因て、若動ば打驚き玉はんことを恐て、其まゝ床の上に坐し居たるに、呂后忽ち入來て大に罵り、賤婢我を見ごとに夷にして無禮なり、今汝が宮中へ入來れども尙高く坐して起ず、是いかなる道理ぞ。戚姫申けるは、妾皇后の來り玉ふと聞しかども、帝の驚玉はん事を恐れて出迎ず、無禮をなすには有ず。呂后いよ〳〵怒り、汝われを見ては必ず帝を以て言とす、他日

ち其廟に詣で、文武の群臣と大牢を以て祀を成て其子孫に封爵を加へ、又顔子、孟子の遺跡を尋ね、孔林并に其邊の勝境を遍く叡覽ありて、此より豐沛へ到り玉ひ、其地の故人父老を悉く召て酒を賜ひ、又沛中の童子二百人を擇で歌舞を敎へ、終日酒を飲で歡樂し玉ひ、半酣に至て自ら筑を擊て高く歌て宣く、

大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方。

二百人の童子同音に之を和しければ、帝御喜の餘に自ら立て舞玉ひけるが、又心に深く感激して覺ず泪を流し、父老に語て宣けるは、朕幼き時、日夜汝等と同遊して甚だ昵かりき、其のち此所に兵を起して遍く四海を漂遊し、百餘戰を經て了に天下を得たりしが、覺す已に齡高たり、汝等も今ことぐく白頭と成るを見て益昔を思ひ出たり、朕いま極て貴き身と成ぬれども、萬歲の後には魂魄又この處へ來て沛縣を湯沐の地と成べしとて、悉く租稅を免し玉ひ、父老と昔を語て數日を過ければ、帝別て打立んと宣ふに、父老苦に留め、願は今數日ありて歸り玉へと云。帝宣けるは、豐沛は小邑なり、朕いま多の兵を率たれば、恐は民の弊を成ん。父老敢て許ざりしかば、帝已ことを得ずして又三日逗留し、此より洛陽を過て直に長安へ歸り玉へば、呂后、太子、戚氏、如意竝に文武の諸臣遠く出て御駕を迎ふ。帝斜ならず喜び、共

たる由を聞て、深く喜び、急に呉成を召入玉ひ、左右に向て、其首を持來れ、一見せんと宣へば、陳平諫て曰、甚だ無用なり、英布は當世の驍將なり、昨夜欺き殺されて、魂魄未だ散ぜず、恐は惡氣ありて龍體を犯すことあらん。帝笑て朕豐沛に兵を起してより十餘年の間、百十餘度の合戰を經て首を見こと大小幾千萬と云ことを知ず、豈獨り英布が首のみを怕んやと宣しかば、左右の人乃ち首を捧て帝の御前に持來る。帝大に罵り、黒面の賊安く臣の節を守ること能はず、妄に謀反して今首を落されたり、汝なほ呉楚の間に縱横することを得べけんやと云も果玉はぬに、其首俄に眼を屹と見開き、髪髭倒に竪揚り、口より一陣の惡氣を吐出しければ、帝忽ち其氣に中て地の上に倒れ玉ふを、陳平等さればこそとて急に扶て閨の中へ入奉り、醫者を召て療治せしむるに、始め一兩日は尙人心地も無りけるが、十餘日を過て漸く平復し玉ひけり。帝乃ち呉成に重く恩賞を與て建忠侯に封じ、又手ら詔書を調へ呉芮を諭して堅く江夏を守らせ、劉重が子の劉濞を呉王に封じて江東の地を守らしめ玉ふ。

○四皓羽二翼太子一

十一月に帝兵を收て洛陽へ歸るとて、魯國を過玉ひしが、闕里は是孔子の出し處なりとて、乃

して只一戰に官軍に蒐破られ、這々この處へ逃來る、我若之を扶る時は、乃ち謀反人の徒黨なり、不レ如叔父の未だ歸ざる先に、之を殺して帝に獻らば、莫大の功ならんと思ひ、先左右に命じて酒宴を始めければ、英布問て曰、令叔呉芮は何方へか行玉ふ。呉成答て曰、叔父常に獵を好み候が、或は三日五日を經て歸ることもあり、今日大王の來り玉ふべしとも知ず、早朝より獵に出たり。英布が曰、われ前日兵を起して呉の國へ向ける時、幸に令叔の早く降參せられたるを以て、滯なく江を渡て、了に上蔡を取、直に蘄西へ抵しに、思ひ寄ず漢の兵に陣屋を劫され、散々に成て今こゝに逃來れり、暫く此處に逗留し令叔の歸るを待て再び人馬を整點し、漢と戰を決して若よく功を成ば令叔と共に富貴を享ん。呉成佯て答をなし、終日酒を勸けるに、晩に及で英布大に醉たりしかば、乃ち客屋に入て臥にけり。呉成は宵より密に用意をなし、四十人の武士を擇で、みな短き刀を帶せ、二更の比に及で、客屋の後より密に垣を超て內の樣を伺ば、英布よく寢入たりと覺て鼾の聲雷の如なりしかば、時刻よしとて直に閨の中に走り入、たゞ一刀に英布が首を斬て落しければ、從者共これを聞つけ、大王の閨の中に人音のするは誰やらんと、枕に立たる刀を追取て立出ければ、四十人の武士共了に一人も殘らず斬死す。角て夜明ぬれば、呉成乃ち英布が首を擕へ、江を渡て漢の陣に赴きしに、帝英布が殺され

ん、宜く虚實を伺て其後に寄玉へ。英布乃ち兵を二手に分て卽時に漢の陣に推よせ、頻に戰を催せども陣中には鎭り囘て矢の一をも射出さず、角て二日を過ければ、英布果して我料しに違ず、漢王の矢瘡重に因て主張する人なき者なり、今晩必ず陣を劫すべしと云ば、欒布又申けるは、陳平素より詭の計極て多し、必ず備のなきことは有べからず、其言未だ了ざるに、後陣より人來て、漢の大將紀通御方の本陣を奪とり、周勃等淮江の口を固め、陸安にある大王の御一族は悉く灌嬰に生捕れ、曹參又兵粮の道を塞で、御方の陣中兵粮すでに盡たりと注進す。英布大に驚き、魂を失て急に山の後へ退んと人馬を點檢する處に、漢の陣中より一彪の軍馬殺出し、猛將一人まつ先に進み、如何に樊噲を見知たるか、汝速に降參せば我宜く主上に奏して一命を救べしと云ば、英布甚だ怒り馬を囘して樊噲と五十餘合戰けるに、漢の兵陸續して雲の如く出來りしかば、叶じと思ひ、了に東南を望で逃走るを、帝大軍を下知して透間もなく追玉ふ。英布は僅に百十騎の兵を從へて江を渡り、直に吳の國の吳芮が許へ行て賴けり。此とき吳芮は城外へ獵に出て未だ歸ざりしかば、姪の吳成と云もの迎入て持成けるが、彼かつて度々英布に辱られたることを常々遺恨に思ひ居たりしかば、今わづか百餘騎にて逃來れるを見て、心の中に英布平生勇を恃み、獨り淮南に霸として心の儘に事を行へり、今又謀反

布は如何にもして彭越が仇を報ぜんと思へども、未だ其使を得ざりしが、今漢の兵に追れて山の内へ逃入けるに、傍なる岡に凹なる處ありければ、軈て身を側め、其内に隱れて待居たりしに、帝諸軍勢の中に打交て其前を通り玉ふを見て、欒布急に弓を執、よつ引て丁ど放つ、其矢過ず、帝の右の肩に中て馬より眞倒に落玉ふ。諸大將これを見て大に驚き、敵を追蒐るに心なく急に扶けて馬に乘奉り、這々陣中に逃歸て醫者を召て療治せしむるに、幸にして左までの深手にては無りけり。次の日帝病を扶て中軍に出玉ひ、諸將を召て宣けるは、昨日の軍に朕が流矢に中たる由を聞ば、英布必ず油斷して何の備も成まじきぞ、汝等この機に乘て急に攻寄て踏破れ。陳平申けるは、いや〳〵今日は先出て戰ふべからず、暫く數日を經て戰ずんば、英布決して陛下の矢瘡重きならんと料て自ら攻來るべし、其とき逸を以て勞を待ば、彼了に支ること能はじ。帝げにもとて先曹參に三萬の勢を授て、長沙へ遣して英布が粮道を阻させ、灌嬰に二萬の兵を與へ、陸安へ行き英布が一族を捕しむ。紀通は精兵二萬を領じて英布が大寨を刧せ、周勃等は淮江渡の口を固て陣を取べしとて、預め備て嚴して待玉ふ。案に違はず、英布は漢の兵の數日出ざるを見て大に喜び、是必ず漢王先日の矢瘡甚だ重して出て戰ふこと能ざる者ならん、我この弊に乘て速に討亡んと云ければ、欒布申けるは、恐は敵深き計あら

尋玉ふに、案に違ず英布まづ吳を攻たるに、吳郡の太守呂璋その威を畏れ、了に城を開て降參せしかば、此より直に淮を渡て蔡を取、いま此所を六十里隔て甕山の下に陣を取候と答ふ。帝大に笑せ玉ひ、果して薛公が料しに出ずとて、先王陵に一手の勢を付て先手とし、又灌嬰、周勃等を跡より陸續して進せ玉ふ。英布この由を聞て親ら一手の兵を率る甕山の西に出迎ければ、王陵間近く寄來り、英布を指て申けるは、汝は乃ち驪山の徒夫、一旦僥倖にして王位に昇り安く富貴を享ることを思ず、妄に謀反を企るは吾刀を試ん爲か。英布怒り罵て曰、汝は元沛縣にて酒を商し下郎なりしが、我等が力に依て今人がましき身となれり、漢主の不仁なる、去年すでに韓信を殺して今年又彭越を殺せり、此三人は同功一體の人、二人已に害せられぬれば、我殺さるべき時に至れり、安ぞ反ざらん、此時に乘て、汝も快く我と一同に義を起して名を世上に知れよかし。王陵聞も敢ず、刀を擧て斬て蒐ば、英布斧を振て二十四合攻戰しが、王陵力疲れて刀の法少し亂れしかば、周勃、灌嬰これを見て、二人一同に討て蒐り、挾で攻戰へば、又英布が陣より欒布多の將士を率て掩殺し、火出るばかり戰て時を移ところに、帝又後陣の大勢を驅て、生手を入易々々揉合せ玉へば、英布が勢これを防ぎ兼、山の後を望で散散に敗走す。帝白き龍馬に召れ、三軍を勵して餘すな洩すなと人馬の息をも繼せず追玉ふ。欒

の客あり、乃ち楚の令尹薛公と云者なり、素より智惠深く計多く候ふが、英布が謀反せし由を聞て大に笑ひ、螟蛉の輩何程の事をか仕出さんと云り、料に必ず深き計あらん。帝乃ち召寄て問玉へば、薛公答て曰、英布もし上の計を用ば、山東は了に漢の者に有ず、又中の計を用ば勝負の數知がたし、若下の計を用ば、陛下心を安じ枕を高して臥玉へ。帝宣く、如何なる故ぞ。薛公申けるは、彼もし東の方吳を取、西の方楚を取、齊を併せ魯を取て、檄を燕趙に傳て固く其所を守る時は、山東こと〴〵く漢の者に有ず、是英布が上の計なり、若又吳楚を取て韓を併せ、魏を取敖倉の粟に據て成皐の口を塞ば、勝敗料り難からん、是中の計なり、又東の方吳を取、西は上蔡を取、歸て越を重として其身長沙へ歸る時は、了に事を成こと能じ、陛下枕を安じて臥玉へ、是彼が下の計なり。帝問玉はく、汝が心英布何れの計をか用ふべきと思ふ。答て曰、英布必ず下の計に出ん。帝又宣く、何としてか之を知。薛公が曰、英布は元驪山の徒にして遠謀深慮なし、一旦高く王位に昇り、一向に身の計を成て其後を顧ず、此故に臣彼が深く慮ずして必ず下の計に出んことを知。帝甚だ喜玉ひ、卽時に薛公を封じて千戶とし、三軍に觸て用意を成しめ、蕭何を關中の留守として親ら大軍を領じ、直に蘄西まで出て寨を下し玉へば、英布も早先達て此所に陣を取たり。帝中軍に升て坐し玉ひ、細作を召て事の子細を

功を立られしこと今日悉く畫餅と成り、若向に韓侯彭王の大王と志を齊し、力を協するに有ずんば、漢主安ぞ楚を亡して天下を有ことを得ん、今故なきに韓侯彭王の三族を夷げて、殘る所は大王一人なり、大王もし力を極め兵を擧て兩王の爲に仇を報ぜられずんば、果して又同じ禍に遇玉ふべしと云ければ、英布喜で申けるは、我已に漢の使を殺して今兵を城外に屯し、不日に事を起さんと欲す、幸に又大夫の助を得たる上は、我功を成んこと疑なし。賁赫傍に在て申けるは、凡そ兵を擧には宜く地の利を明にして輕々しく動べからず、大王早く檄を燕趙に傳へ、山東に據て先根本を立、次に勝負を決し玉はゞ、尤も長策ならん、若一時の怒を恃で急に戰んとし玉はゞ、漢帝帶甲百萬四海に控連て、殊に張良、陳平が智、樊噲、灌嬰が勇あれば、決して大に敗玉はん。英布甚だ怒り、汝妄に無益の議論を成て諸軍勢の心を惑す、漢主いま齡已に高て、韓信、彭越共に誅戮せられ天下に我に敵すべき者なしとて、散々に賁赫を罵て追退け、即時に三軍を整點し、楚王劉交、劉賈と吳楚の間に戰て、了に劉交を虜にし劉賈を斬て東の方吳を取、西の方上蔡を取て郡縣を騷動すること斜ならず。此由早關中へも注進ありければ、帝大に驚き、諸臣を集て計を尋玉へば、皆申けるは、英布豎子安ぞ能事を成に足ん、陛下の天威一たび臨ば忽ち微塵に成ん。時に汝陰侯滕公奏しけるは、臣が家に一人

通俗漢楚軍談　巻之十五

○英布反レ漢被レ擒

大漢の十二年十月に、帝梁王彭越が三族を夷げて其骸を肉醬にし、使を以て天下の諸侯に分ち與へ玉ふ。此とき淮南王英布は文武の諸臣を率て望江樓に上り、酒宴を成て居ける折節、只今帝より勅使を馳て醬を贈玉ふと報ず。英布急ぎ起て勅使を迎へ、醬を拜受して是は何の肉にて造れる醬ぞと問に、使の人詐て曰、これ鹿の肉を以て造れり。英布喜び、軈て先蓋を開て嘗けるに、俄に心躁して其味常に易りしかば、急に江に臨で吐出しけるに、忽ち小き蟹と化したり。英布心に怪み、使者に向て、是は必ず鹿の肉には有じ、汝明に申せと云に、使英布が氣色只ならず見ければ隱すこと能ず、有の儘に彭越が肉なりと白狀す。英布甚だ怒り、劍を拔て使を只一刀に刺殺し、此より謀反して精兵二十萬を整點し、檄を傳て諸方の勢を招き集るに、或日麻の衣を披たる人杖に扶て出來り、淮南王に見んと云。英布乃ち迎へ入れて對面するに、梁の欒布なり。具に彭越が屈死したる由を語り、我思ふに梁王曾て大王と力を同して許多の大

反逆の罪あり、汝なに故に屈死と云。欒布申けるは、陛下昔滎陽に圍を受て、楚の四十萬の軍勢城を攻ること日夜を分たず、韓信は河北に在て召ども來らず、陛下の危こと恰も墜旒の如なりき、其とき彭王もし楚に力を合せば、陛下忽ち亡び玉はん、臣密に書を送て楚の粮道を塞せ、又兵粮數十萬石を送て助しかば、陛下了に項王を亡し玉へり、此より彭王相繼で五年の間、晝夜甲冑を解ず心力を勞せられたり、今天下すでに定りぬれば、宜く陛下と共に太平を享て富貴を子孫萬世に傳ふべし、豈料んや輕々しく讒言を信じ、已に首を斬て又その骸を醬にし、悉く三族を夷げ玉はんとは、陛下の刑を行玉ふ、誠に暴秦よりも甚し、前日蕭何が定し所の律令、いま何にか在や、滿朝の諸臣一人も爭ひ諫むる者なし、臣この故に不平の心を懐き、誅を畏ずして之を說、たゞ惜らくは此餘の功臣今より皆危み疑て、自ら身を全するの計を成ん、然る時は陛下誰と共にか太平の業を守り玉ふべきと云了て、又大に聲を放ち泣叫で止ざりしかば、滿座の人々皆泪を流さぬは無りけり。帝も半時ばかりは敢て物をも宣ざりしが、心の内深く憐と思しけるにや、欒布を都尉に封ずべしと勅詔ありければ、欒布首を叩て固く辭し、臣敢て官祿を求ず、只彭王の頭骨を收め、還て大梁に葬る時は、陛下の洪恩微臣が至願なりと奏するに、帝乃ち許玉ひしかば、欒布了に彭越が頭骨を拾ひ收て、即時に洛陽を出去ぬ。

に隨ひ來て帝に見んことを欲す、此故に帝いよ〳〵猜み疑せ玉ひ、汝了には必亂を成ん、不如速に殺して後の患を除んと宣ふ、古より禍福無門唯人自招と云り、是みな汝が自ら爲る禍なり、帝と呂后との恩なきに有ず、汝今は虎の檻に入が如し、決して逃るに道なし。彭越長嘆し、御邊の言極て我病に中れり、韓信が最後に申せし言、いま身の上に知れたり、悔らくは蒯徹が諫に從ざりしことを、我今は敢て言を費さじ、只快く誅戮を受んのみと云ければ、張倉乃ち歸て此由を奏聞す。帝呂后と相議し、彭越が罪誅に當れり、宜く韓信が例を以て首を斬て諸人に示んと宣へば、呂后宣く、陛下餘に仁慈深きを以て、天下の諸侯法を玩ぶ者多し、今彭越を誅し玉はゞ、其肉を醢にし、天下の諸侯に分ち與へて後日の戒とし玉ふべし。帝これに從ひ、即時に武士に命じて彭越が首を刎させ、了に三族を夷て洛陽城の東門に梟首し玉へば、忽ち麻の衣を披て布の冠を戴き、腰に麻の繩を繋たる人、貴賤群集の中を分入て、彭越が首を兩手に抱き、悼かな屈せる哉と、聲を放て大に哭く。左右警護の武士共しきりに尤めけれども、敢て耳にも聞入ざりしかば、急に生捕て帝の前に引來る。帝問て宣く、汝なに者なれば彭越を哭すること甚しき。答て曰、臣は昌邑の人に欒布と云者なり、曾て梁の大夫となりて深く彭王の恩を蒙る、此故に今彭王の屈死を見て、一處に死することを能ざるを恨む。帝宣く、彭越

申す所理あるを以て、今一命を扶廢して西川の民とすとて、乃ち扈徹を大夫に封じ玉へば、扈徹堅く辭して、梁王いま貶せらるゝに、臣もし官を受ば犬豕にだも如ず、願は放して田里に歸し玉はゞ、臣が志足りと云しかば、帝も敢て强玉はず。彭越は朝を出て行裝をなし、即日に西川へ打立しが、一日潼關まで到て思はず呂后に出合たり。彭越悲で告けるは、臣もと罪なきに今貶せられて蜀に赴く、皇后願は之を救へ。呂后の曰、汝われに從て再び帝に見よ、我宜く奏して必ず此難を救べし。彭越首を叩て拜謝し、臣身を終まで盛德を忘れ候はじとて、此より引回して又洛陽へ伴ひ行。呂后帝に見え、禮了て奏せられけるは、彭越は乃ち勇夫なり、今もし除ずんば、後必ず大なる患を成ん、之を放して蜀に入しむるは、是虎を山に放ち龍を海に入しむるに似たり、妾幸に潼關にて出あひしかば、欺て伴ひ來れり、速に殺して後の患を絕玉へ、若なほ御心を決すること能ずんば、他日いかに悔玉ふとも益なかるべし。帝げにもと思し召れけるにや、急に人を馳て彭越を縛らせ、跡より又張倉を遣して勘問せしめ玉ふ。張倉彭越に向て申けるは、帝昔汝に兵を起して陳豨を征せよと勅し玉ひしに、汝韓信と心を合せ、虛病して出ざりしかば、帝すでに殺んとの御心ありけれども、扈徹が忠義を感じて罪を免し、蜀に貶し玉ふ時は是莫大の恩なり、然るに汝が心必死を免れたるを以て足りとせず、又呂后

若いま臣が言に從玉はずば、他日必ず韓信が蒯徹が言を後悔せし如きこと有ん。彭越謝して申けるは、大夫の言確論たりと云ども我心たゞ帝に見んと欲す、敢て諫を拒に有ずとて、陸賈を伴て出ければ、扈徹は力及ず、泣叫で去にけり。帝は此とき洛陽へ出て巡狩し玉ひけるに、彭越出來れりと報じければ、乃ち城に入て召見え、大に怒て宣く、朕さきに陳豨を征せし時、汝なに故に來て力を扶ざりし。彭越申けるは、臣もと病あり、詔に負にあらず。帝宣く、今太僕來て汝が謀反を訴ふ、汝必ず誅を免ること能じ。彭越が曰、この人甚だ惰慢にして事を理ず、此故に臣向に罵り辱ければ、此より恨を含み、了に詐を以て讒言す、陛下の聰明萬里を照す、願は審に察して小人に欺れ玉ふな。帝急に御史臺に勅して、あれ拷問せよと宣ふに、忽ち左右の人報じて、只いま城外に一人帝に見て事を奏せんと云者ありと申す。帝急に召入て汝は何者ぞと問玉へば、答て曰、臣は梁の大夫扈徹なり。帝宣く、汝何の爲にか出來れる。扈徹申けるは、陛下昔滎陽に圍を受玉ひし時、もし梁王の楚の粮道を絕に有ずんば、必ず項王に滅され玉はん、今この大功を思ず一時虛妄の言を信じて梁王を殺んと欲し玉ふ、恐は天下の人これを聞ば、皆疑ひ怪ん。帝聞し食て少し御心を回され、未だ兎角の御言をも出し玉はざりしが、扈徹尙前に立て久く退ざりしかば、帝宣けるは、朕もと彭越を殺んと思しかども、汝が

らず、大王もし赴玉はゞ、必ず韓信が禍あらん、堅く行玉ふこと勿れ。彭越が曰、然らず、韓信は實に罪あり、此故に誅せらる、我は素より一點の罪なし、何の怕か有らん、若行ざる時は、太僕が言詐ならざるに似て、主上必ず我を實の謀反人とし玉ふべし。扈徹申けるは、いやいや功高き者は必ず忌れ、位極れる者は必ず疑はると云諺あり、大王功高く位極れり、今主上疑ひ忌の時に當て、大王まことに異心なしと云ども若行て見玉はゞ、必ず事を尋て害に陷入玉はん。彭越心決すること能ず、沈吟して居たりければ、陸賈申けるは、扈大夫の言理あるが如くなれども、目前の計に過ず、今日大王もし長安へ來り玉はずんば、帝必ず親ら大軍を統て征伐し玉はん、大王自ら陳豨に比せば孰か愈れる、彼智深く計多く、五十萬の雄兵を率て威を趙代の間に振しだも、了に勝こと能ざりき、況や梁人素より帝の威を畏る、若一たび來り玉はば、郡縣こと〴〵く歸服せん、大王安ぞ能獨立して事を成ことを得玉はんや。彭越これを聞て、口を閉て答ること能ず、了に心を決して共に打立んとすれば、梁の父老悉く送て城を出けるに、大夫扈徹縄を以て城門の上より倒に釣下り、爭ひ諫て已ず、彭越急に左右に命じて解下させ、大夫なに故に此の如く苦諫すると云ば、扈徹泣て曰、臣いま倒懸の苦あれば、大王之を救ふ、大王もし長安へ赴玉ふ時は、必ず又倒懸の危あり、臣ならずして誰か之を救ふ者あらん、

彼僥倖にして梁王に封ぜられ、自ら其功に伐て妄に人を罵り辱む、不如長安へ赴き、帝に奏して彼が王爵を失しめ、此恨を報ぜんとて來りしことなり。帝太僕が言を聞きて、急ぎ陳平等を召て商議し玉ふに、陳平申けるは、彭越若韓信が誅せられたる由を聞ば、必ず謀反せんと思しに、今果して然り、只何となく先使を馳て召玉へ、彼もし來る時は是異心なきなり、若來らざる時は反逆の罪明し、其とき兵を起して伐玉はゞ、師を出すに名ある者なり。帝これに從ひ、又陸賈を使として大梁へ遣玉ふ。彭越陸賈が來るを見て問て曰、大夫なにの故にか此に來れる。陸賈答て申けるは、頃日梁の太僕來て大王謀反の企ありと奏す、言語錯亂して前後甚だ分明ならず、主上深く疑ひ、是は太僕必ず大王に恨あるを以て、罪に陷入ん爲に角云ならんと思し食、大王に見て實否を正んとて、某を使として召玉ふ、早く長安に赴て、且は君臣の好を敍玉へ。彭越申けるは、太僕甚だ懶惰にして一向政を理ざりしかば、我先に罵り辱したり、此故に恨を含で讒せしならん、我速に御邊を作て都に上り、彼と對論して其罪なきを顯さば、主上安ぞ深く疑ひ玉ふべけんとて、酒宴を成て陸賈を持なし、次の日人馬を備て長安へ打立んとす。時に大夫扈徹諫て申けるは、大王必ず行玉ふな、行ときは決して禍あり、前日韓信が擒にせられしも此の如きの樣子なり、殊に漢帝は共に患難を同すべくして富貴を同すべか

しめ、臣を放して墳を守らしめ玉はゞ、此徳に仗て陛下も又億萬世の洪基を無窮に傳玉ふべし、帝深く嘆じ玉ひ、賢なるかな蒯徹、忠なるかな文通と宣ひ、乃ち韓信が首を出して蒯徹に與へ、有司に命じて墓を築かせ、楚王の位を贈て厚く葬しめ玉へば、蒯徹は恩を謝して出去ぬ。

○醤ニ彭越一賜ニ諸侯一

帝は長安へ歸て、文武の諸臣を集め、大に酒宴を設て諸軍勢を勞玉ふ處に、忽ち左右の人來て、只いま朝門の外に一人機密の事を告んと云者ありと報ず。帝怪で、今陳豨すでに滅び、韓信誅せられたるに、又變を告んと云は心得がたし、急ぎ召入よと宣へば、左右乃ち引て朝に入しむ。其人帝の御前に近づき、臣は梁の太僕なり、近ごろ彭越頻に諸方の軍馬を集め、梁の地を占て、不日に謀反を企んとす、二には陛下前日陳豨を伐玉ひし時、兵を起して力を扶よと勅し玉ひしかども、彼病と稱して詔を受ず、三には韓信が誅せられたる由を聞て甚だ痛く悲みけるが、此より三軍を整點して急に發向せんとす、臣いま梁に在と云ども實は元漢の臣なり、此ゆゑに彼が謀反するを見て默すに忍ず、夜を日に繼で注進すと申す。是は元來彭越大に酒に醉て散々に太僕を罵り辱たるに、太僕深く恨み怒て家に歸り、我もと彭越と同く漢の臣なり、然るに

の赤子なり、智者は必ず能時を識、賢者は乃ち能主を擇ぶ、今漢帝は當代の眞命、張良が數代韓國に相たるだに、猶漢の臣と成て侯に封ぜらる、況や其他をや、先生空く韓信が爲に死せんよりは、漢朝の臣と成て名を萬世に傳ば又美ならずや。蒯徹つく〴〵と思案し、良ありて申けるは、某佯狂すること年久し、今料ざるに先生に見賺されたり、快く行て帝に見べしとて、了に衣を整ければ、陸賈乃ち伴て次の日洛陽へ到る。此とき帝は朝に出て政を議し玉ひしが、陸賈が歸りたるを見て、跡なるは何人ぞと御尋あるに、陸賈答て曰、これ乃ち齊人蒯徹なり。帝問て曰く、汝昔日曾て韓信に謀反を教たるか。蒯徹答て曰、然り、是臣が謀反を教たるに有ず、秦その鹿を失て天下共に之を逐、高才捷足の者まづ得て之を跖、それ犬の堯を見て吠は、堯の不仁なるには有ず、犬は其主に有ざるを見て之を尤む、此時に當て、臣たゞ韓信ある事を知て陛下あることを知ず、韓信果して若臣が言に從ば、豈今日の如く淺猿きこと有んや、今韓信すでに死する時は、臣獨り生ることを欲せず、陛下速に烹殺玉へ、臣快く主の爲に死せん。帝笑て左右に向ひ、人おの〳〵主の爲にす、蒯徹は誠に韓信が忠臣なりとて、安撫して宣く、朕いま汝が罪を釋して官祿を授ん、汝必ず辭すること勿れ。蒯徹申けるは、官爵は臣が願に有ず、陛下たゞ韓信が天下を平定したる功勞を思て其首を臣に賜ひ、楚王に追封して淮陰に葬ら

に侍りき、何ぞ料ん韓侯故なきに奴僕の爲に譖られ、近ごろ未央宮にて空く呂后に三族を滅されへり、韓信死に臨で、悔らくは早く蒯徹が言を聽ざりしことをと云て長嘆せり、我等韓侯の屈死を見て、一處に死すること能ざるを恨み、了に功名を棄て此に逃走る、今御邊の狂歌を聞て、必ず文通先生ならんと思ひ、酒を勸て衷曲を敍、われ思ふに、韓侯十箇度の大功ありて當代の元臣なり、一旦女子の手に殺され、子孫ことごとく滅て一脈も遣らず、我平生に恩を感じ、儀容を思て胸中裂が如し、往日さしも武威三齊に振ひ、勇名四海を動して一世の英雄たりしに、今日忽ち畫餠と成しこと豈痛ざらんや、豈哀ざらんやと云て、雨々と涙を流しければ、蒯徹きゝ敢ず手を以て胸を扣き、脚を跌て聲を放て大に哭き、韓侯何ぞ早く悟ざりし、何ぞ早く悟ずして空く女子の輩に害せられ、我をして一身主なからしむるやと、叫び臥て悲む處に、忽ち外より誰とは知ず周章しく馳來り、蒯徹が髻を摑で、汝數年の間佯て狂人となり、今日了に妖を顯けるかと云。蒯徹大に驚て面土色の如く、汝なに者なれば此に來て狼藉をすると云に、我は是中大夫陸賈なり、漢帝の勑を奉り、汝を捕ん爲に出來れりと云も果ずに、又郡守李顯多の人を引來り、忽ち縛て引歸る。陸賈その索を釋放し、禮を恭して諭して曰、先生必ず佯狂すること勿れ、早く衣冠を整へ洛陽へ來て帝に見えよ、方に今四海一家、萬姓ことごとく帝

夫を迎て見しめよと云ば、二人命を受て直に市の邊へ出て尋るに、一人髪をさばき歌を謡て狂笑ひ、市の街を奔走する者あり、其歌に曰、

六國兼併兮爲秦所呑、内無豪傑兮罔遺後昆、秦始自失兮滅絶於楚、楚罔脩政兮屬之漢君、烏江逼項兮伊誰之力、十大奇謀兮豈容獨存、乃不自悟兮尚思國爵、一朝遭烹兮禍福無門、佯狂沉醉兮且自昏昏。

歌ひ了て南に向て去ければ、彼二人これ必ず蒯徹ならんとて、乃ち前に近づき、手を執て大に笑ひ、御邊も狂を病や、我も又然り、願は共に此酒店に入て一盃を勸んと云ば、蒯徹限なく喜び、了に伴て酒店に入、二人まづ數盃を飲で、我等は世上に奔走して功名を戀ひ富貴を貪ることを好ず、數日を經ば海外に遨遊して人間を出んと思ふなりと云ば、蒯徹これを聞て、心の中凡ならず覺ければ、乃ち問て曰、わが狂を病は甚だ深き心あり、御邊の風狂は又何の意ぞや。二人答て申けるは、我狂を病は御邊の知ざる所なり、元これ病にあらず、今この所妄に多言すべからず、恐は聞人あらん。蒯徹いよ〳〵心怪み、俄に容を改め色を正して、二公は決して等閑の輩に有ず、願は大名を聞んと云ば、答て曰、われ二人は元趙の人なるが、淮陰侯韓信の大賢を慕て、先に楚王たりし時始て行て見しが、言從れ計用られ、了に心腹の臣と成て日夜左右

なく喜び、韓信死に臨で何事をか云しと尋ね玉へば、呂后宣く、韓信武士共に引立られ、我悔らくは早く蒯徹が計に從ず、空く兒女子の爲に誤らる、豈天命にあらずやと云て斬れたり。帝左右に問て宣く、蒯徹とは何の人ぞ。陳平奏しけるは、蒯徹は齊の人、極て機變あり、韓信さきに燕を破し時より、始て相從て朝夕左右を離ず、共に計を議論せり、曾て累に謀反を勸しかども、韓信敢て從ざりしかば、此より佯て狂人となり、市の巷に徘徊せり、此人は只智を以て取べし、若力を以て捕んとせば決して來るまじ。帝又左右に向て、誰か齊に行て蒯徹を曉し來るべきと問玉ふに、陸賈すゝみ出て、臣願は行んと云。帝限なく喜玉へば、陸賈乃ち從者數十人を引て卽時に打立、ある日齊に到て先郡守李顯に見え、蒯徹が所在を尋るに、李顯申けるは、此人常に歌ひ笑ひ、市の街を狂ひ廻て、定れる住所なければ、人みな風魔なりとす、某曾て禮を恭して迎れども彼敢て顧ず、主上なに故に大夫を勞して此狂客を求玉ふ。陸賈が曰、足下其一を知て未だ其二を知ず、蒯徹が風狂は皆これ詐なり、足下いま辯舌よき人に命じ、蒯徹を尋て酒を與しめば、彼必ず狂ひ歌て之を飲ん、其とき又箇樣々々云せ、彼が痛く哭を待て、我乃ち出て說ば、彼自ら狂ずること能ず、了に我に從て帝に見ん。李顯聽て辯者二人を擇で多く黃金を與へ、能々計を敎て、汝箇樣々々に說ば、蒯徹必ず悲み哭くべし、其とき急に陸大

灌嬰も散々に罵り、逆賊自ら死を知ず、妄に狂言を吐かとて、刀を振て斬て蒐ば、陳豨槍を擧て二十餘合ぞ戰たる。左右に備たる陳豨が諸大將、合戰始てより程久し、唱行て力を扶んとて兵を引て進み來れば、周勃、周昌これを見て急に半途に出あひ、力を振て防ぎ戰しかば、一騎も近付ことを得ず、陳豨は定て救の勢來るべしと思ひ、灌嬰と火を散して戰けるに、漢の諸將力を併て一齊に斬て蒐りしかば、陳豨一支も支ず、北を望で散々に敗北す。劉武、楚招等は之を見て、彌戰んとする心なく、槍を棄刀を落して命を扶んと周章翔けるが、周勃、周昌なじかは逃すべき、忽ち追付て悉く首を取。帝これを御覽じ、急に三軍を指揮し、一人も餘すなと勢に乘て掩殺し玉へば、殘る兵みな旗を卷て降參す。陳豨は散々に蒐立られ、跡をも見ずして逃走るに、思も寄ず兩方より二手の軍勢斬て出て路を遮り、樊噲、王陵まつ先に馬を躍せ、逆賊爭か天の責を免るべき、速に首を渡せと罵る。陳豨大に震ひ怕れ、前後に度を失て、進んとするも叶ず、退んとするも叶ず、左に馳右に走て堪胡亂まはる處を、樊噲馬をつと馳よせ、只一槍に突殺し、忽ち首を取て指揚ければ、帝跡より大軍を率來り、捷軍を收て陳豨が首を獄門に曝し玉へば、趙代の郡縣ことごとく風を望で降參す。帝喜で之を安撫し玉ひ、趙代の地全く平定せしかば、此より御駕を促して洛陽へ歸り玉ふに、呂后大小の諸臣を引て遠く出迎へ玉ふ。帝限

兩日の内に決して漢の兵よせ來ん、不如嚴く備を成て待べしと云ける。其言未だ了ざるに、忽ち細作來て、漢帝諸方の勢を集て近日この處へ寄來んとす、今已に百里は隔り候ふまじ、速に其備を成玉へと告ければ、陳豨急に諸將の手配をなし、各攻口を固て防戰へと下知をなす。諸大將申けるは、我等大王に隨て一同に出て敵を迎ん、若別々に分ては、互に事の急を救がたからん。陳豨が曰、汝等たゞ左右二手に分れ、我戰を交るを待て兩方より討て出、挾で攻ば必ず大に打勝ん。諸將これに從ひ、各左右に分れて待蒐たり。帝は邯鄲に在て、韓信誅せられてより陳豨大に力を失ひ、固く守んとする心なき由を聞し召、さらば今諸方の勢も集りぬれば、此機會に乘じて速に賊を平んとて、直に打立て曲陽へ馳向ひ玉ひ、城を離ること三十里にして寨を下し、樊噲、王陵二人を召て、汝今宵一萬の精兵を領じて各枚を啣み、密に曲陽の北の路に行て左右に埋伏し、陳豨が敗れて逃走るを見ば、急に討て出て擒にせよ、又周勃、周昌は一萬の勢を率る、陣の後に引へて、若敵の救の勢あらば、半途に出て之を防げ、灌嬰は一手の兵を率し、一陣に進で陳豨と迎へ戰べし、其餘の諸大將は心を四方に配り、諸人に力を併よと宣へば、皆下知を受て出去ぬ。次の日灌嬰兵を引て推寄ければ、陳豨馬を乘出し罵り叫で申けるは、漢の兵前日大に敗軍し、倘降參することを知ず、又此に寄來るは、可惜命を失ん爲か。

薦しかば、朕拝して大将とせり、其後しば〳〵大功を建て、諸将も及ぶこと能はず、誠に天下の奇才なり、古の名将と云へども又これに過ぐべからず、朕此ゆゑに衣を脱で之に與へ、食を分て之に賜ひ、平生厚く恩を施したり、圖ざるに今度陳豨に内應して異心を企て、事顯て了に呂后に誅せらる、朕甚だ惜に堪ず、今より再び彼が如き良將あるべからずと云て、覺ず泪を流して臥沈み玉へば、左右の人々一度に泪を流して泣悲む聲、半時ばかりは止ざりけり。

○蒯徹淮陰葬韓信

此とき陳豨は、韓信が密書を得て、急に兵を分て小路より長安を攻んと、日夜に用意をなす處に、忽ち或人來て、韓信が謀反事顯て呂后に誅せられ、陸賈その首を傳へて邯鄲へ來り、今轅門の外に掛て三軍に示さると告ければ、陳豨聞も敢ず聲を放て大に哭き、地に倒て絶入けるを、左右急に扶け起せば、暫く有て蘇り、我數年韓侯の教を受て、異姓と云へども情は骨肉に異ならず、何ぞ料ん今日この誅戮に遇玉はんとは、已ぬる哉、われ了に大事を成こと能じと云て、又倒れ臥ければ、諸人様々に諌め、韓侯死すと云へども、大王少も志を墜玉ふな、我等願は大王と同じく邯鄲へ攻寄て、快く勝負を決せんと云へば、陳豨やう〳〵起あがり、我暫く兵を進じ、料に一

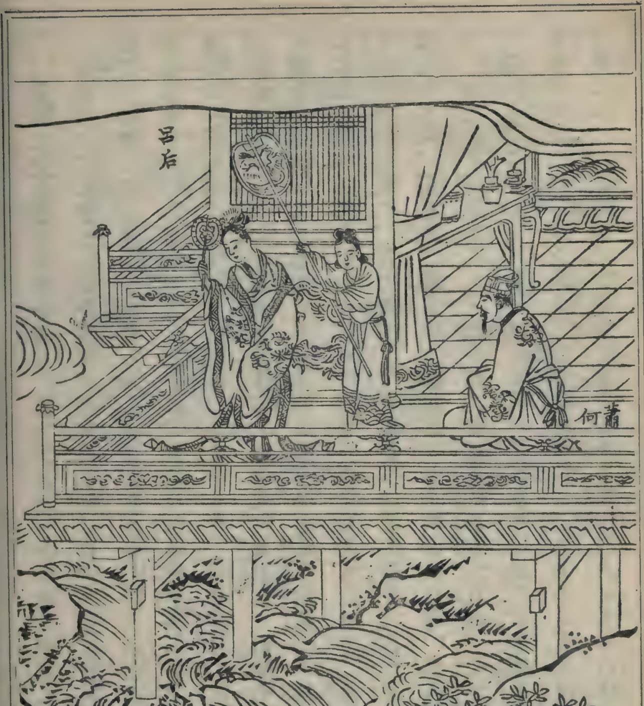
も惜玉へるかと覺て憐なり。長安の貴賤往來の商客までも、聞ごとに悲愴せずと云者なく、韓信昔始て褒中へ來りし時、漢帝敢て重く用玉はざりしを、蕭何樣々に心力を苦て君に勸め、了に天下を平定せり、今已に罪を得ては、其身死を逃ること能ず、此とき蕭何なんぞ呂后の前にて、彼は開國の功臣なれども、其罪誅を免れ難し、願は子孫を留て父が祭を成しめ玉へと奏して勸め救こと能ず、あへなく三族を夷て略心に挾むこと無は、何とて不仁の甚しきやと、嘆惜せぬは無りけり。呂后は蕭何に命じて表を寫させ、韓信が首と共に陸賈に持せ、夜を日に繼で帝に此由を奏し玉ふ。陸賈日を經て邯鄲へ到り、呂后の表を取て獻れば、帝披て見玉ふに、其文に曰、

大漢十一年九月日、皇后呂雉上言。伏以、刑以繩下用彰邦國之典、法以勑衆懋昭王者之威。仰惟、皇帝陛下神武布于萬方、威德加于四海、廼有淮陰侯韓信、既食漢祿不守臣憲、輙生異志、頓改初心、交結陳豨大肆謀叛、家奴告變實有顯跡。密從蕭何之請、明揚國法之公、斬首未央、夷其三族、傳報邯鄲、曉諭北伐、使陳豨以之喪胆、奸宄爲之消魂。大兵下臨指日奏凱、臣妾不勝欣抃之至。

帝表を御覽じて一たびは喜び一たびは悲み、左右に向て、韓信始て褒中へ來りし時、蕭何累に

走り出、忽ち韓信を引縛り、長樂殿の下に引來れば、韓信大に叫び、臣何の罪ありてか角はし玉ふぞと云に、呂后大に怒て宣く、帝昔汝を拜して大將とし、後に功あるを以て齊王に封じ、又改て楚王とし玉ひしに、汝謀反の企ありしかば、帝僞て雲夢に遊び、擒にして歸り玉ひしかども、聖恩の深き、汝が曾て大功あるを思て誅を加ず、又淮陰侯に封じ置玉へり、帝此の如く未だ嘗て汝に負玉はず、汝いかなれば其恩を思ず、陳豨に勸て謀反せしめ、又密に書簡を送て彼に長安を攻させ、汝却て內應せんとは圖けるぞ、此の如き罪惡、天地鬼神も容ざる所なり。韓信が曰、臣かつて左樣の事なし、願は能實否を詳にし玉へ。呂后の曰、汝が僕謝公著來て此事を告たり、汝爭か陳ずることを得ん。韓信申けるは、奴は素より詐多して常に人を欺く、皇后いかなれば實跡を明にせず、下郎の言を信じ玉ふ。呂后宣く、帝すでに陳豨が陣を破て汝が彼に送し自筆の密書を得玉へり、汝尙も詐べきか。韓信これを聞て再び辯ずること能ず、首を低て居たりしかば、呂后大に怒り、早く誅せよと宣へば、韓信天を仰で長嘆し、我悔らくは蒯徹が計を用ず、空く兒女子の爲に誤らる、豈天命に有ずやと云ば、武士共これを引て未央宮長樂殿の鐘室の下に到て、了に首を刎、ことごとく三族を滅けり。時に大漢の十一年九月十一日なり。此日天地晦冥して日月光を藏し、愁雲黑霧靄々として一晝一夜晴ざりしは、誠に上天

呂后未央ニ斬ル韓信ヲ
韓信


呂后
蕭何

て、蕭何は定て能この事を知ん、必ず詐あるべからず、帝朝に還玉はゞ、決して封爵を賜るべしと思ひ、了に諸人と約を定め、明日作て朝に出、一同に慶を述んと云て内に入、夫人蘇氏に向て、帝深く我を思ふて封爵を加んとの御意あり、明日諸臣と共に朝に出て捷軍の賀を述んと思ふなりと語ければ、蘇氏申けるは、帝前日都を打立玉ふ時、尊公病と稱して供奉し玉はず、其のち一度も朝に出て呂后に見玉ひしこともなし、今捷軍の注進を聞て、俄に始て出玉はゞ、呂后必ず疑ひ怪で、恐は害を加玉ふこと有ん、尊公宜く斟酌し玉へ。韓信が曰、いま群臣悉く慶を述に我一人は出ずして、帝近日還幸の時始て出見ば、却て疑ひ怪るべし、況や蕭何つねに我を愛する心深ければ、必ず別の子細は有るまじきぞ。蘇氏なほも心安からず、我この間尊公の氣色を見に、甚だ好ず、今朝に出玉ふこと我更に快とせず、願は熟之を思へと再三諫しかども、韓信敢て聽入ず、呂后は是一人の婦人なり、殊に蕭何は大識見ありて深く我を愛す、安ぞ怕ことあらん、況や諸人と已に約を定たれば、今さら變ずべからずとて、次の日了に群臣と同く朝に出て慶を述けるに、呂后蕭何に向て、丞相まづ群臣を悉く退け、淮陰侯一人を留て便殿に伴ひ來られよ、我機密を論ずることありと宣へば、蕭何急に殿を下り、韓信を迎て内に入。韓信尙も之を悟ず、立て徐々と宮中へ入んとすれば、俄に兩方より武士共四五十人

れしが、是は早く小路より密に長安を攻よ、我も兵を舉て内應せんとの事なり、我醉中に誤て妄言を出しけるを、韓侯怒て殺んと圖玉ふ、故に此に來て告申なり、若少にても詐あらば、後日重く罪を正玉へ。蕭何乃ち謝公著を伴て呂后に見え、具に右の趣を告ければ、呂后大に驚て宣く、韓信が逆心すでに顯たり、丞相宜く之を計られよ。蕭何申けるは、此事まづ外に沙汰せず、謝公著は暫く臣が家に隱し置、明日密に獄中より能陳豨が容に似たる罪人を引出して首を刎、佯て主上すでに陳豨を討滅し玉へりと披露して彼首を長安へ傳へ、關中に號令せん、群臣之を聞て悉く來て喜を述ば、韓信も必ず出來るべし、其とき左右に命じて軈て生捕せ、宜く其罪を正玉へ。呂后大に喜び、此計甚だ妙なりとて、密に牢の中より重罪の人を引出し、首を斬て匣に入、帝已に陳豨を滅し玉へりとて、遍く中外に示し玉へば、群臣これを聞て、皆丞相府に出來り、明日朝に出て慶を述んと云ば、蕭何申けるは、諸君明日韓侯を伴て朝に出、一同に慶を述玉へ、韓侯は開國の元勳にして、帝常に深く思ひ玉ふ、今諸君と官位相同じと云ども、是は只暫く廢置玉ふ者なり、此たび朝に歸り玉はゞ、必ず重く封賞の沙汰あるべし、安ぞ碌々として衆人と同からんや。諸人之を聞て、直に韓信が家に到り、具に蕭何が申せし事を告ければ、淺猿や韓信、さしも智謀ふかき良將なれども尚も心を決すること能ず、諸人の言を聞

大に驚き怒て內に入玉ひしが、今宵の內に殺んと圖り玉ふ由、我に告る人あり、速に何方へも逃去て命を全せよ。謝公著これを聞て益驚き怕れ、此體にては暫も此に留がたしと思ひ、奥の樣を伺ふに、韓信なほ甘く寢入て起ざりしかば、急に行李の用意をなし、密に門を開て走り出、すでに城外へ出んとしけるが、心に思ふ樣は、韓信僕從甚だ多ければ、若わが逃去たる由を聞ば、手分して追しむべし、不如此より行て相國蕭何に此機密を告ば、韓信は縱ひ害せらるとも我は全く命を保ことを得べしとて、直に丞相府を指て馳行ぬ。此とき蕭何は向に帝の密詔を受たりしかば、常に韓信が事を心許なく思ひ、若よき便もあらば早く殺して後の患を除んと深く思案を廻し、又より〳〵呂后と共に相議しけれども、施べき計もなく、空く日を送る處に、忽ち謝公著來て一大事を告んと申せしかば、近く召入て、汝なに事を告ん爲にか來れると問に、謝公著申けるは、韓侯陳豨に內通して頻に謀反を企玉ふ、相國これを知玉へるか。蕭何が曰、汝必ず妄に云こと勿れ、若少にても虛說ある時は、汝も又死罪を免がたし。謝公著が曰、これ程の大事を申すに、安ぞ分毫も詐ること有ん、前日陳豨番兵征討の詔を奉て都を打立とき、更に謀反の心なかりしを、韓侯しきりに勸られしかば、了に趙代へ到て謀反せり、其のち互に書簡を往復せしこと幾度と云ことなく、昨日又韓侯密書を寫し、從者に持せて曲陽へ送ら

相顧ること能ざらしめば、必ず全く打勝べしと書て、陰に心腹の人に持せ、陳豨が方へぞ送ける。其人命を受て出けるに、韓信が僕に謝公著と云者ありしが、遠く出て別を送り、二人酒を飲で覺ず大に醉ふし、日暮て家に歸りしかば、韓信怒て、汝なに事ありてか今朝より出て遲く歸たる、甚だ以て心得がたしと云けるに、謝公著この時酒未だ醒ざりしかば、大に周章て、我曾て外國に內通したることなし、何をか心得がたしとは宣ふぞと云ければ、韓信甚だ驚き、左右に命じて謝公著を扶て退しめ、心の中に此人すでに吾機密を知ぬれば生て置がたしと思ひ、立て內に入ければ、夫人蘇氏問て曰、謝公著いかなる過ありて尊公の怒を動したる。韓信が曰、この者妄に無禮の言を出せり、我これを殺んと欲す。蘇氏申けるは、謝公著大に醉て覺ず妄言をなす、安ぞ重く罪を正べけん、暫く酒の醒るを待て能々之を戒玉へ、今もし夜中に殺玉はゞ、左右悉く驚き疑ん。韓信實もと思ひ、夫人の言よく我意に合へりとて、了に閨に入て臥にけり。謝公著は五更の比漸く酒醒たりけるに、其妻傍に在て申けるは、爾今日甚だ遲かりしかば、韓信深く怪み玉ふ處に、漸々晚に及て歸り來り、又狂妄の言を出したる故、韓侯いよいよ怒玉へり。謝公著驚き、我如何なる事をか云たると問に、妻答て申けるは、汝さきに韓侯に向て、我曾て外國に內通したることなし、何をか心得がたしと宣ふぞと云り、此故に韓侯

びしかば、三軍に下知を傳へて兵粮を使せ、樊噲、周勃、王陵、灌嬰四人に兵を與て左右に埋伏せしめ、其餘の軍勢は枚を啣せ、其夜に悉く邯鄲へ引玉ふ。陳豨が細作この由を聞て急に注進しければ、陳豨諸將に向て曰、帝此所に陣を取ては戰に便あらず、其上兵粮快く通ぜざるに因て、暫く邯鄲まで引退き、再び諸方の兵を集て吾と戰を決せんとする者なり。諸將聞も敢ず、何條これを逃すべき、速に追蒐て討とり玉へと勇けるを、陳豨止て申けるは、帝久く戰場に馴て深く謀略あり、左右必ず伏勢あらん、我もし追かけば却て其計に中べしとて、乃ち人を出して伺しむるに、果して多く伏勢ありと告たりしかば、諸將みな理に服して追蒐ず、此に因て帝は故なく邯鄲へ退て陣を取玉ひ、此より兩陣相拒で暫く軍は無りけり。

○呂后未央斬韓信

初め漢帝兵を率て都を打立玉ふ時、韓信は病と稱して帝に從ず、猶留て閑居しけるが、其のち陳豨が曲陽に陣を取たる由を傳きゝ、心の內に思けるは、陳豨邯鄲に屯して漳河を阻る時は是上の計なり、圖ざるに今曲陽に屯す、帝若邯鄲に據玉はゞ、陳豨が敗んこと疑なしとて、急に密書を調へ、早く勢を分て、小路より直に長安を攻よ、我却て中より起り、帝をして首尾

に、漢の先手の勢大半討れ、しどろに成て亂れ騒ぐ處に、帝後陣の大勢を率ゐ來り、生手を下知して防ぎ戰て、漸々敗軍を收め玉ふ。此とき陳豨遠く退て日も已に晩ければ、帝退て陣を取玉ひ、今日の合戰御方利なくして人馬疲れ弱ると云ども、敵もし夜討せんも料り難ければ、快く寢ることは能ふまじきぞとて、諸將に命じて緊く陣門を守せ玉ふ。陳豨は兵を收て吾陣に歸り、劉武、楚招等を召て責て曰、汝等今日太刀長刀の鞘をも弛ず、敵を見ては俄に我先にと敗走し、我手滋く追れて十分危かりしかども略救んとする心なし、後日もし再び此の如くんば、必ず軍法を以て罪を正んと怒りければ、諸大將怕れ入て退きけり。次の日帝中軍に出て坐し玉ひ、諸の將士左右に列坐しけるに、王陵すゝみ出て奏しけるは、臣陳豨が兵を用るを見に、悉く韓信が軍法を學で、陣取の體たらく、軍馬の掛引、甚だ常ならず、況や御方糧草繼ざれば、恐は勝ことを取がたし、臣思ふに暫く此所を退て邯鄲に陣を取、再び諸方の勢を招き集め、力を盡して一たび伐玉はゞ、料に天威の臨む所、陳豨が及ぶ所にあらず。帝宣く、汝が言好と云ども今もし此を退かば、陳豨跡より急に追蒐ん。王陵申けるは、今日は兵を按て動ず、日の暮を待て徐々と退き、二手の精兵を左右に埋伏して、敵もし追來らば一度に起て蒐散ん、臣料に陳豨深く兵法を知たれば、御方の勢退くとも、決して追來るまじ。帝大に喜び玉ひ、已に日も暮に及

詔に從ふこと能ず、大夫願は歸て此由を奏せられよ。隨何今は漸く彼計も成就すべしと思ひ、乃ち別て外に出ければ、從者來て、敎の如く百斤の黃金を悉く陳豨が諸大將に分ち與て候へば、皆限なく喜あへりと申す。隨何乃ち路を急で馳歸り、具に事の樣を奏しければ、帝次の日親ら兵を領じて押よせ玉ふ。陳豨これを見て陣前に進み出、馬上に身を欹て曰、陛下御年漸く高たり、何ぞ聖體を勞じて親ら矢石を冒玉へる。帝宣く、朕かつて汝に負ず、汝なに故に謀反したる。陳豨申けるは、陛下亡秦の法を踵、項羽が惡に效て功臣を誅戮し、殘忍にして恩少し、我安ぞ反ざらん。帝大に逆鱗あり、後を顧て、誰か此逆賊を誅せんと宣ふに、樊噲、周勃齊く出て鋒を交へ二十餘合戰ふ處に、又王陵、周昌二人槍を提て蒐出、四方より夾で攻ければ、陳豨大に敗れ、兵を領じて南の方へ逃走るに、劉武、楚招等兵を引て見たりしかば、定て我を救んずらんと心を安じて逃けるが、彼等みな昨日隨何に賄を受たる故、陳豨を救んとする心なく、同く散々に成て四方へ散亂す。帝陳豨が敗走するを御覽じ、急に軍馬を驅て直に三十餘里掩殺し玉ふに、前面に大なる陣屋ありて、四門に夥く戰車を列ね、旗幟整々として隊伍を亂ず、鹿垣緊く結たる其內に、一聲の鐵砲を響す程こそあれ、四方の陣門一度に颯と開け、限なき軍勢雲の岩岫より起が如く、風擁して群り出、陳豨眞先に進で右往左往に斬て回る

を圖玉ふ、我苟も禮を失ば、將軍の劍を試玉はんことを怕て此の如し。陳豨笑て曰、大夫甚だ過り、某が謀反せし、豈其本心ならんや、實に已ことを得ざればなり、蓋し漢帝は天性苛刻にして共に富貴を享がたし、常に人を猜み疑て、大功あれども恩賞を賜ず、我この故に謀反せり、大夫いま何を說んと欲してか此に來れる。隨何申けるは、吾いま足下を諭して降參せしめよとの勅を奉り、詔書を持して此に來れり、早く兵を收て漢に歸降し玉はゞ、帝必ず足下を封じて代王とし玉ふべし。陳豨詔書を披て讀了り、心の中に是みな詐の計なり、若降參せば必ず擒にせらるべしと思ひ、隨何に向て申けるは、帝すでに大軍を統て此處に來り、未だ某と一度も戰を交玉はず、何ぞ大夫を來して吾を招き玉ふの理あらん、是みな必定詐ならん。隨何が曰、主上もと足下と勝負を決せんと欲し玉へども、此間群臣と相議し、全レ軍爲レ上、破レ軍次レ之、全レ國爲レ上、破レ國次レ之と云世の諺もあれば、願は軍を全し國を全して民の命を安ぜんとて、詔書を送て諭玉ふ、足下もし歸降の心なくんば、吾敢て强ることなし、乃ち歸て帝に其由を奏せんのみ。陳豨申けるは、韓信が楚を破て天下を定たる功勞、某が今度番兵を破たる功に較ば、豈百千倍のみならんや、韓信この大功ありて、本より一點の異心なきすら、尚僞て雲夢に遊で擒にし玉ふ、我いま縱ひ歸降すとも帝爭か罪を免玉はん、吾心決して

の法汝等が知べき所にあらず。左右みな拜伏し、陛下の聖見臣等が知所に有ずとぞ嘆じける。角て四人の壯士は代州の民に扮れ、曲陽へ到て能々陳稀が虚實を探きゝ、數日ありて邯鄲へ歸り、帝に見て奏しけるは、陳稀が用る所の大將は皆趙代の商人にして極て利を貪る、陛下もし黃金數百斤を費して彼等に賄し玉はゞ、皆陳稀が命を用まじ、其とき弊に乘て急に討玉はゞ、陳稀必ず擒と成ん。帝甚だ喜玉ひ、又四人に重く恩賞を與へ、乃ち群臣を召て、誰か今詐て陳稀が陣に到り、諸大將に賂を與て內變を生ぜしめ、兼ては又彼が陣中の虚實を伺ひ來るべきと御尋あるに、忽ち帳下より一人列を出て、臣願は行んと云者あり。帝之を御覽あるに、中大夫隨何なりしかば大に喜で、卿若行ば朕何の患かあらんとて、黃金百斤を出して授玉へば、隨何之を請取、まづ一通の書簡を調へ、從者數人を引て直に陳稀が陣に到り、帝中大夫隨何を勅使として詔書を送玉ふ、早く陣門を開かれよと云ば、陳稀これを聞て、隨何は說客なり、詔書と云は詐なるぞとて、左右に命じて迎へ入しに、隨何は密に從者に向て、我內に入ば陳稀と長僉議して時剋を移ん、其間に汝等この黃金を諸大將に分ち與よと低語て、乃ち內に入、君臣の禮を行て傍に立ければ、陳稀申けるは、大夫某と同列して共に漢朝の臣なり、如何なれば今この大禮を行玉ふぞ。隨何が曰、將軍百萬の兵を率て威を趙代の間に振ひ、漢帝と雄を爭て天下

事を成ことあらん、諸將且く此に在て動こと勿れとて、急に周昌を召て、汝邯鄲の軍民の中より數人を擇び出せ、朕之を案内者として賊を討んと宣へば、周昌卽時に出去、數日過て四人の壯士を作ひ來る。此とき帝は帳中に酒を飮で御座ありけるが、彼壯士を御覽じ、大に笑ひ罵て宣けるは、汝が輩爭か朕が爲に案内者として敵の虛實を探ことを得ん。四人みな申けるは、陛下の天兵遠く來て其勢尤も盛なりと申せども、未だ地の利を諳玉はざれば、輕々しく進み難し、先臣等が深く重地に入て敵の虛實を伺を待て、陛下よく其淺深を審にして而して後に兵を進め玉はゞ、必ず全く打勝玉ふべし。帝又罵て宣く、汝等妄に巧言を吐と云ども恐は皆詐ならん。壯士色を正し、臣等いま天顏に咫尺し、干戈紛々たる中に來て爭か欺き詐ることを得んと云しかば、帝乃ち四人に千戸の職を授け、又重く恩賞を賜ければ、皆大に喜び勇み躍て去にけり。左右の人申けるは、四人の壯士未だ一寸の功なきに、一旦かる〳〵しく重職を授て又厚く恩賞を與玉ふは如何なる故ぞ。帝宣く、重賞之下必有二勇夫一と云ことあり、四人の言もし詐なく、果して敵の虛實を探ことを得ば、朕了に功を成ん。況や陳豨向に檄を天下に傳て勢を招けども未だ至る者あらず、今集る所の者は、只邯鄲の軍民已ことを得ずして歸降したるなり、朕なんぞ四千戸を惜で趙の子弟を慰せざらんや、一人を賞して萬人を勸む、朕が兵を用る

きことか候ん。帝喜玉ひ、次の日又蕭何を召て諭して宣く、朕いま趙代へ行て陳豨を征す、關中空虚にして守るべき人なし、卿は是開國の元勳當朝の故老なり、能心を盡して皇后と共に國を守り、凡そ大小の政事に至ては陳平と相議し、萬謹で朕が委託に負こと勿れ。蕭何首を叩て拜伏して、臣安ぞ駑駘を盡ざらんや、只願は陛下早く凱旋して萬民の望を慰し玉へ。帝此に於て御駕を促して進發し玉へば、大小文武の群臣こと〴〵く城を出て、遠く數十里の外に送る。

○高祖御駕駐二邯鄲一

帝大軍を領じて一日邯鄲へ著玉ひ、城中に入て諸將を兩邊に列坐せしめ、親ら中軍に坐し玉へば、郡縣の官吏こと〴〵く來て拜謁す。帝問て宣く、陳豨いま何の處に陣を取て將士いか程かある。郡令奏しけるは、陳豨兵を曲陽に屯して本部の軍馬幷に諸方より驅集たる勢都合五十餘萬、劉武、楚招なんど云大將二十餘人ありて、日夜に殘暴を放にす、郡縣の百姓官軍の來るを望こと大旱に雲霓を望が如し、願は早く逆賊を滅して民の水火を救玉へ。帝大に喜で、群臣に告玉ひけるは、此邯鄲は乃ち中州の總路なり、然るに陳豨この處に據て漳河を阻ず、却て曲陽に陣を取ときは、智謀のなきこと明し、況や諸方より俄に驅集て調練せざる兵を率て安ぞ

精兵の處、武を用るの國にして事を圖やすし、是その謀反する、三なり、臣思ふに、陛下遠征を厭ず、暫く蕭何と臣とに勅して皇后と共に關中を守らせ、周勃、王陵を先鋒とし、樊噲、灌嬰を左右の羽翼とし、曹參、夏侯嬰を救應使とし、陛下親ら大軍を統て征討し玉はゞ、群兇ことごとく滅て天下の諸侯自ら畏服せん、然らずんば徒に兵馬を費して了に勝ことを取がたからん。帝甚だ喜玉ひ、此論大に好とて、卽時に四十萬の勢を起し、周勃、王陵を先鋒とし、十萬の精兵を授て先進發せしめ、跡に繼て發向せんとて、退て後宮へ入玉へば、呂后乃ち御宴を設て壽を祝し玉ふ。帝宣く、陳豨いま謀反して趙代を擾亂し自ら立て王となる、此間英布、彭越に詔して早く征伐すべしと下知すれども、共に病と稱して兵を起ず、又朝廷の諸大將は皆彼に敵するに足ず、此故に朕親ら兵を率て之を誅せんと欲す、此に韓信は久く異心を懷を以て、今廢置て閑居せしむと云ども、其心尚隙を伺て禍を成んとす、若朕が趙代へ赴たる由を聞ば、恐は兵を擧て中より起ん、然る時は是尋常の事にあらず、皇后願は朕に代て國を權し、若事の急あらば蕭何と相議し、凡そ事を決し計を定るが如きは、陳平と共に謀られよ。呂后の曰、陛下少も患玉ふな、韓信もし兵權あらば容易く制服し難からん、今すでに閑居する時は、是一匹夫なり、安ぞ患とするに足ん、若又疑しきことあらば、乃ち生捉て審に其罪を正んに何の難

越に兵を起して早く陳豨を伐べしと下知し玉ひぬと聞て、急に密書を調へ、心腹の人に持せて、夜を日に繼で淮南大梁へ送けり。英布、彭越二人は韓信が書を得て披き見に、我累に大功を建て天下を平定せしかども今廢て用られず、二將軍この度もし詔に應じて陳豨を討玉はゞ、繼で又二將軍の害せられんこと疑なし、蓋漢帝は共に患を同すべくして、太平を共にすべからず、如何となれば、帝の心患難の時に當ては重く人を用んと思ひ、太平の時に當ては殺し害せんことを思ふ、且陳豨が謀反せしも我廢て用られざるを見て、今度番兵を破て大功を成たれども亦重き恩賞はあるまじと思ふ故なり、二將軍もし陳豨を討滅さば、決して間もなく害せられ玉ふべし、安ぞ淮南大梁に安居して富貴を享ことを得玉はんや、我二將軍の悟ずして誤て陷穴に落入玉はんことを恐れ、夜を日に繼で注進す、願は詳に之を察して他日後悔すること勿れと有しかば、英布、彭越二人共に虛病して詔に應ぜず。使の人歸て此由を奏しければ、帝甚だ患玉ひ、蕭何、陳平を召て、英布、彭越共に病に託して兵を起ず、今これを如何すべきと問玉ふに、陳平申けるは、元來陳豨が謀反せし、三の故あり、彼平生たゞ韓信を畏る處に、今閑居して兵權なければ、其餘の諸大將は我に及ぶ者なしと思ひ、自ら才能を恃で更に他の慮なし、是其一なり、又陛下近ごろ兵馬を厭玉へば、親ら征伐し玉ふこと能はじと思ふ、其二なり、夫趙代は

我輩は數度の勳功ありと云ども、安ぞ韓信が半にも及べき、去ば今度番兵を破て心力を苦たれども、帝必ず重く賞し玉はじ、我愚見を以てするに、不如こゝに兵を駐て趙代の地を占、四方の豪傑を招き集て兵粮を貯へ、銳氣を養ば自然に天下を圖つべし、況や漢帝年漸く高て兵馬を厭玉ふ、縱ひ諸將に詔して追討せしめ玉ふとも、韓信が如き輩あるまじければ、更に怕ることなし、我もし王業を成就せば、諸君を王爵に封じて共に富貴を享ん、各もし所存あらば心底を殘ず申されよ。諸將みな尤と同じ、願は將軍の計に從て共に力を戮べしと云しかば、此年の七月より陳豨自ら立て代王となり、檄を傳て大將王黄等と約を定め、兵を起して在々處々を掠め劫しければ、郡縣の百姓にげ隱て、趙代兩國の騷動斜ならず。西魏王この由を傳へ聞て、急ぎ早馬を立て長安へ注進しければ、帝大に驚き玉ひ、軈て蕭何、陳平を召て問て宣く、朕つねに陳豨を愛して之を用ること薄からず、今なに故に謀反したる。蕭何が曰、陳豨素より謀略ありて、殊に武藝人に超たり、今朝廷にある諸將を見に、皆彼が敵手にあらず、只英布、彭越二人に詔して急に討しめ玉へ。帝この議に從ひ、速に兵を起べしとて、早馬打て英布、彭越に急を告、又別に關東の諸國へ使を馳て、諸所の要害を堅く守らせ玉ふ。此とき陳豨が謀反の事遍く諸方に沙汰ありしかば、韓信密に朝廷の議論を伺ひ、帝已に淮南大梁へ詔書を下して、英布、彭

方はや敵に破られたりと覺て散々に騒亂せしかば、急ぎ救んと飛が如くに馳行けるが、彼溪の邊に到て見ば、水勢以の外に大にして渡べき便なければ、上下を彼方此方へ走り囘り、如何せんと身を揉處に、後より報じて漢の兵大王の追蒐玉ふを見て、虛に乘て大寨を攻破り、四方より火を懸て兵粮秣を悉く燒掃たり。四箇所の陣屋を守る御方の兵、大寨に火の起を見て、急に救んとて打出けるに、漢の大勢八方より入亂て攻戰しかば、御方首尾相顧こと能ず、七斷八續みな何ともなく逃失たりと告ければ、番王これを聞てあきれ果、その體ならば引囘たりとも救ふこと能じとて、直に本部の軍馬を領じ、北番の大路を望で逃去ぬ。陳豨は番王の退を見て、扨は敵わが計に中て粮草を燒れたる者なりと思ひければ、乃ち兵を下知して溪の口を石を運でせき止しむるに、半時ばかりに水勢忽ち舊の如くに成しかば、陳豨師を收て溪を渡り、直に大寨に歸て點檢するに、今日の合戰に番兵四十餘萬を討滅しければ、大に勇み喜で、次の日趙城に入、酒宴を設て軍士を勞ひ、半酣に至て陳豨盃を執て諸大將に告けるは、今度番兵大に敗て遠く逃去り、是尤わが計中れりと云ども、誠は諸君の貳なく我を助る力に因てなり、我思に漢帝は共に憂を同すべくして樂を共にすべからず、韓信は數年の間血戰して若干の大功を建、了に天下を定たるだに、今廢て用玉はず、加之つねに罪を求て殺んと圖玉ふ、況や

をなす、我も數百萬の軍勢あり、若公主を送て我に妻ずんば、今忽ち踏潰ん、汝は名もなき小將、早々に退て漢王を出せ。陳豨大に怒り、我君は大漢の皇帝、汝番奴の輩いかんぞ拜謁することを得んとて、刀を擧て斬て蒐れば、番王が後より一人の大將斧を振て蒐出、一往一來たゞ二人二十四合戰けるが、陳豨佯て打まけ、南を望で散々に逃走れば、番將逃さじと馬を打て追かけ、已に十里ばかり進ば、前に一座の高山ありて、其麓に大なる溪あり、陳豨馬に鞭を加て直に溪を渡れば、跡より番將いよ〳〵大軍を驅て繼て急に溪を渡けり。初の程は溪水甚だ淺かりけるが、番兵こと〴〵く渡し了と齊く俄に大水漲り來て、其聲滔々たりしかば、番將大に驚き、急に退んとするに、逆浪天を浸して疾こと矢の飛が如く、前には高山聳て進べき樣なく、前後に度を失て周章翺く處に、陳豨高き阜の上より一聲の鐵砲を響せば、兩方の谷際より、二手の兵斬て出、鼓譟して矢を放こと蝗の飛が如くなれば、番將防かね、急ぎ山へ蒐上て戰んと、さしも嶮しき岩山を一二町が程馬を拍て馳上りけるに、陳豨兵を下知して山の上より大木を投懸させければ、番將が乘たる馬これに打れて倒ると齊く、番將は眞倒に地に落けるが、屛風を立たる如き斷崖なれば足もたまらず、數千丈深き谷の底へ覆びおち、微塵に碎てぞ死だりける。此番將は乃ち件の哈延赤なり。番王は後陣に備て追來りしが、遠く向の山根を望ば、先陣の御

殊に趙代は武を用るの國なり、況や主上つねに御邊を愛して、今度この大任を勅し玉ふも、心中少も疑玉はざる故なり、去ば今趙代へ到て後、御邊謀反を企ると沙汰ありとも、主上決して誠とし玉はじ、然れども後に諸方より頻に注進あらば、主上必ず怒て親ら行て征し玉はん、其時われ御邊の爲に内より起り夾で之を攻ば、天下圖つべし、此時節失べからず、必ず誤玉ふな。陳豨げにもと思ひ、謹で先生の教に從んとて、二人密々に合圖をなし、相別て直に趙城に到り、諸將に向て、吾まづ輕々しく動ず、能敵の虚實を聞定て其後に兵を進んとて多く陣屋を構へ、數多の細作を出して番兵の樣子を伺しむるに、數日ありて馳歸り、番兵四箇所に陣屋を立て、各五萬の勢あり、番王は別に代州の城外に大寨を構て三萬の人馬を率る、又百萬の騎兵ありて五箇所の陣を巡哨し、遍山滿谷番兵簇々として勢甚だ大なり、又一人の大將あり、其名を哈延赤と云、大なる斧を使て萬夫不當の勇あり、元帥まづ此者を打取玉はゞ、番兵自然に遠く逃去ん。陳豨甚だ喜び、重く恩賞を與て、大將劉武、李德、陳産、楚招等を前に近づけ、番兵勢盛にして力を以ては敵し難し、只計を以て破るべし、汝等如此々々にせば、御方十分に打勝んと云に、諸將みな計を受、兵を領じて出去しかば、次の日陳豨兵を引て討て出るに、番王一陣に馬を乘出し、大に叫で曰、漢王冒頓が勢を怕れ、公主を送て彼に妻せて和睦

大任を勅し玉ふ、臣敢て粉骨碎身して國の爲に力を盡ずんばあらず、然れども僅に十萬の兵馬を率ては爭か猛き番兵を平ることを得ん。帝これを聞召て乃ち元帥の印符を取出し、朕いま汝に之を與ふ、兵もし足ずんば、檄文を傳へ路々の郡縣を驅集めて之を用べしと宣しかば、陳豨詔を受、精兵十萬を率して卽時に進發しけるが、韓信が宅の前を過ける時、心の中に思けるは、我久く韓信が恩德を蒙り、又兵法の密事を傳授せしこと今に至て忘ること能ず、今一たび對面して番兵を破に良計あらば敎を受んとて、軍兵を門外に駐め、從者十餘人を領じて、内に入ければ、韓信迎へ入て各疎濶の情を述たり。陳豨申けるは、某いま詔を受代州へ行て番を征す、某先生前日の恩を忘ず、又此に來て敎を求む、若良策あらば此度の功を助玉へ。韓信乃ち酒を出して持なし、共に數盃を傾て左右の人を退け、長嘆して問て曰、御邊いま詔を奉て番を征す、若功を成ば某が楚を滅たる功と孰か大ならん。陳豨答て曰、これは如何なることを宣ふぞ、番を破の功は只一の小計のみ、楚を亡すは乃ち萬世の功なり、安ぞ大小を論ずるに及ん。韓信が曰、さればとよ、我此の如の大功を成たるだに、一旦廢て用られず、御邊もし番を破て凱歌を奏せば、朝には縱ひ王公と成とも暮には又匹夫と成て吾今日の樣子と異なることと無ん。陳豨が曰、願は先生敎を垂て此禍を救玉へ。韓信が曰、御邊いま十萬の精兵ありて

兵を罷、爭ことを息しめん、然る時は陛下北に顧るの患なく、豈長策に有ずや。帝げにもとて急に民の子を擇せ、詔書を調て劉敬を匈奴の陣へ遣し玉ふ。劉敬軈て進發し日を經て太原に到り、先人を馳て備に漢帝の公主を送て婚姻を結び、誓て互に再び相侵ことなく、各封疆を守んと宣ふ由を告ければ、冒頓斜ならず喜び、即時に城を開て劉敬を迎入、詔書を披て之を見に、其文に曰、

五帝相禪而道隆、三王德威而服遠、中外雖殊咸歸正統、玆者冒頓兵入寇侵中土、跋扈罔恭、似非率命。昔者白登之困誤中詭計、今已明章紀律、振赫王師張皇北伐、欲雪前憤、群臣屢叩闕上言、勸朕講和、復前日美人之盟、結胡越一家之好、仍封爾爲單于主、以公主配爾爲后、永結絲羅、百世不渝、詔書到日、勿違朕命、故玆詔示。

冒頓詔書を讀了り、南を望で首を叩て罪を謝し、胡樂を奏して急に公主を迎へ入、大に酒宴を成て劉敬を持なし、此より互に和睦して了に兵を收けり。劉敬は冒頓に別を成て朝に歸り、事の子細を奏しければ、帝大に喜で重劉敬に恩賞を與玉ふ。劉敬又奏しけるは、今秦中兵亂新に罷で、地饒なれども民少し、況や又北には胡虜の強あり、東には六國の盛なるあり、一旦もし變を生ぜば、陛下枕を高して臥玉ふこと能じ、臣思ふに齊楚燕趙韓魏の後、並に豪傑名家を

とを本意なく思ひ、又大軍を率て郡縣を騷亂し、居民を劫す由注進ありければ、帝深く患玉ひ諸臣を集て相議し玉ふに、劉敬奏しけるは、今天下始て定ると云ども、士卒久く戰に苦で物の用に立ず、必ず師を出し難し、況や冒頓は父を殺し同姓を娶て妄に力を以て威を振ふ、是狗彘の輩、仁義を以て說がたし、陛下たゞ御女を送て之に妻玉はゞ、彼素より荒婬なれば、必ず喜で閼氏とし、他日子を生ば定て太子とせん、然る時は冒頓は是陛下の婿、冒頓死する時は外孫乃ち匈奴の主と成、安ぞ外孫と外祖と相爭ひ拒む者あらんや。帝宣く、堂堂たる中國に君として奄に四海を有ち、兵甲なほ強く、國勢未だ弱からず、蠻夷を治るに豈別に計なからんや、汝いま朕が公主を以て犬羊の徒に妻せと云、是いかなる道理ぞ、天下の諸侯之を聞ば、笑ひ辱ざる者あらんや。劉敬が曰、白登の圍陛下の面り見玉ふ所なり、若陳平が計に有ずんば、決して亡され玉ふべし、況や數年以來楚と七十餘戰を經て、百姓を殺し傷玉ふこと幾百萬と云數を知ず、陛下いま天下の主と成玉ひては、宜く民の命を以て重とし玉ふべし、若師を興し衆を動して百姓を疲し玉はゞ、天下悉く望を失ん、今日和睦を請は、一時に屈すと云ども實は天下蒼生の爲なり、且陛下もし公主を送て彼に妻ことを快とし玉はずんば、密々に民の子を宮中に養ひ、假に公主と名て送り玉へ、臣願は勑使を承り、詔書を傳て和睦を議し、冒頓をして

張良託赤松子遊
張辟強

張良

妻妾前に列り、笙歌耳に盈て、只平生の志を談ずるを以て樂の極とす、然れども位人臣を極るは天下の忌ところ、高に處ては危からずと云ことなく、滿る時は溢ずと云ことなし、君は其權威の重を疑ひ、天は其甚だ盈るを惡む、奸人つねに隙を伺て謗を起し、幹に乘て讒を用て一旦君の心怒を動し、諸人交も妬み謗る時は、計の施べきなく、地の逃べきなくして身了に誅戮せられ、妻子奴と成て富貴榮華も眼を轉ずれば悉く空となる、世の利を貪る者あに此理を知んや、我いま醉裏の乾坤、壺中の日月を弄び、雲水の閑なるを愛して江湖の濶に笑傲し、獨り一室に坐して終日萬慮を消し、寂寥の濱に處と云ども胸中快く樂み、藜藿の食を甘と云ども、物外に逍遙として心を寵辱の間に驚さず、身を利名の中に苦しむることなく、靜に老子の玄虛を養ひ、萬物の自得を觀じて、眞を保ち精を養て天年を樂み、汝等をして安く家業を治しめ、永く朝廷の良臣たらしむ。是又大に春花の富貴に愈ずや。張辟彊地に拜伏し、吾今日始て大人の穀を辟玉ふの意を悟れり、實に明哲身を保の道なりと申ける。其のち張良出て穀城の東に遊けるが、傍に一の黄なる石あるを見て忽ち悟て曰、昔圯上の老人會て我に告て、他日穀城にて若一片の黄石に遇ば、是乃ち我なりと知べしと云しが、今果して其言に應ぜりとて、石に向て再拜し、祠を建て之を祀けり。扨又匈奴の冒頓は陳平が計に欺れ、圍を解て帝を放たるこ

前日の功に報ぜんと欲すること久し。張良申けるは、臣始め陛下に從て關中に入しより、言聽れ計用られて、其中たまく中ことありと云ども、是みな天より祐る所にして臣が能にあらず、今已に封じて留侯とし玉ふ時は、聖恩又薄からず、臣この年月つらく人間の事を觀ずるに、恰も水上の泡の如し、此故に如何なる深山にも分入、赤松子が遊に從て長生の道を求んと欲す、金臺紫閣の上に坐して玉食を前に連ることは、凡そ人の深く願ふ所にして、甚だ得がたき所なれども、臣たゞ體弱く病多して實に此榮貴に堪ること能ず、敢て聖恩に負に有ず。帝之を聞召て、扨は張良堅く封爵に心なしと思し召ければ、更に强玉はず、心靜に病を養ひ、今よりは一月に一たび朝すべしとて、咸陽の傍なる幽靜の地に閑居せしめ玉ふ。張良恩を謝し、此より門を杜て人に交ず、眞を修し性を養て、一月に一たび群臣と共に朝に出、退ては凡そ百事心に繫ず、晏然として日を送けり。或とき子の張辟强父に見て申けるは、大人いま忝も帝の師として累に大功を建、位三公の貴に登玉ふ、然る時は常に玉堂の上に坐して安く富貴を享、爵祿を子孫に傳て、萬代の元勲と成玉ふとも亦分に過たるに有ず、如何なればこの寂寞の地に蟄居し、門を杜て交を絕、自ら淸苦を受ことを甘玉ふぞ。張良が曰、是汝が知處にあらず、世上の富貴を貪る者は、功名の已に成を樂み、榮華の目を眩を喜で、一たび呼は百たび諾し、

通俗漢楚軍談　巻之十四

○張良託二赤松子遊一

韓王姬信が謀反してより後は、張良常に病に託して閑居し、終日五穀を服せず、人に語て、夫人の天地の間に生る、實に白駒の隙を過が如し、百年三萬六千日も又一瞬息の間なり、去ば我つら〳〵之を思ふに、一切の功名浮雲の往來するが如にして、漠然として中に動ことなければ、深山の中に身を隱し、仙人を尋て道を學び、長生不死の計を成んと欲れども、帝つねに聖恩を加玉ふこと深ければ、未だ捨去に忍ず、然れども我誠に金紫に奪り、繁華を戀ひ、高堂の上に坐して鼎を連て共に食し、人間の富貴を貪ことを好ず、況や又一身多病にして血氣日々に衰へ疲る、若急に養ひ治せずんば、恐は他日精神みな耗て其とき修治せんと欲すとも及ぶことなけんと申けるを、左右の人より〳〵帝に此由を奏せしかば、此より後張良しば〳〵病と稱して朝に出ざりけれども帝更に疑ひ玉はず。或とき張良を召て探て宣けるは、朕先生の教を得てより、累に奇功を建て了に天下の主となれり、朕敢て之を忘ず、先生を大國の王爵に封じて

に飽ことを得ざりし故にや、近ごろ疾を生じて覺ず不參せり、此間天顏を拜せんことを思て今日朝に出んと存ずる折節、幸に召玉ふに因て來り、見て鬱懷を慰するに足り。帝宣く、卿疾あらば何ぞ醫藥を用て療せざる、必ず忽にすること勿れ。韓信が曰、臣いま閑居して無事なる故に舊疾再び發れり、若事多き時は疾なし。帝宣く、卿は誠に用ること有の才なり、此故に能大功を建て天下を定たり、久からずして又重く用べしとて、諸大將の事を物語し、誰か能敵を防べき才あり、孰か多の兵を率べき能あると尋玉へば、韓信乃ち一々之を論說す。帝甚だ喜び、又朕が如きは幾の兵をか將べきと問玉ふに、答て曰、陛下は只兵十萬を將玉ふに過ざるのみ。帝又問て宣く、朕と卿とは如何ん。答て曰、臣は兵益多ければ益よく之を辨ず。帝笑て、然らば卿何とて朕に生捕れたる。韓信が曰、陛下は兵を將こと能ざれども又よく大將を將玉ふ、是臣が擒にせらるゝ所以なり、且陛下は天の祐ありて人力の及ぶ所にあらず。帝又大に打笑ひ、面には喜玉へども心は實に忌疑て、了に大に用玉はず。韓信は別て家に歸けるが、此より怏怏として心いよ〳〵樂ず、門を閉て病を養けり。

をして加へ益ところ無らしめんと欲してなり。帝宣く、今宮室已に成就せり、朕あに獨り之を樂んやとて、左右に命じて太上皇を迎しめ、未央の前殿に大宴を設て相待玉へば、須臾にして太上皇御駕を促して出御ありけるに、殿閣崢嶸として洞府瑤池金碧日に輝て恰も神仙の境に入かと怪れしかば、心中暗に喜び、車より下て殿中へ入玉ふに、伶人樂を奏して蘭麝の匂風に飄り、山海の珍味を備て王公宰相堂下に奔走し、文臣武官錦の袖を閃し、玉の冠を戴て階前に列坐したるを御覽じて十分喜玉ふ處に、帝親ら起て玉の巵を捧け、太上皇の爲に壽して宣く、上皇始め臣が無賴にして產業を治こと能ざるを以て、常に仲兄に及ずと宣しが、今日臣が業仲兄に較ば如何ん。太上皇大に笑て、今なほ及ずと宣へば、帝も大に打笑せ玉ひ、群臣も皆萬歲を呼で又大に笑ひ、父子君臣終日歡樂を盡し、暮に及で酒宴了しかば、帝群臣と共に太上皇を送て宮中へ回し奉らる、誠に古今例少き遊樂なり。次の日、帝獨り深宮の中に御座ありけるが、忽ち又韓信が事を思し召出され、近侍の臣を召て、韓信近ごろ病と稱して朝に出ず、朕常に彼が年來心力を竭して功勞あるを思て忘こと能ず、今一たび召來して此間の積欝を語んと思なりとて、軈て使を送玉へば、韓信乃ち使と共に出來る。帝宣く、朕久く卿に見ず、此ごろ頻に思ひ慕て使を送しに幸に出來れり。韓信が曰、臣昔し楚を破し時、常に十餘日を經ても食

朕が不明のみにもあらず、十人の細作敵の虚實を伺ふこと精からざりし故なりとて、又左右に命じて、さきに細作に出したる十人の士卒を捕へ、御前にて悉く首を刎させ、重く劉敬に恩賞を與て建信侯に封じ玉ふ。角て次の日兵を率て趙の城を出、進で曲逆縣と云處まで著玉ひしが、此處城地壯麗にして六街三市人煙湊集し、郷村鎮店相連て絶ざりしかば、帝左右を顧て、壯なるかな此曲縣、朕天下に横行して普く諸國の要害を見るに、洛陽と此曲逆縣とに似たる處なしとて、陳平を召て宣けるは、卿朕に從てより以來、しば／＼奇計を施して大功を建たること幾許と云ことなし、今度白登の危きを免れたるも又卿が計いみじきに因てなり、朕いま卿に此地を與へて曲逆侯に改め封ず、他日此處に安居して老を養ひ、快く一生を過すべしと宣へば、陳平首を叩て恩を謝し、是臣が能にあらず、皆陛下の仁徳四海に及して至る處天の祐ある故なりとぞ申ける。此より又大軍を統て長安へ歸り玉ふに、此時蕭何未央宮を造營して已に悉く成就しけるが、直欄横檻玉を鏤め金を飾て甚だ壯麗を極たれば、帝大に怒て宣く、方に今天下洶洶として干戈なほ止ず成敗未だ知がたし、去ば旦夕心を小て用を節にし、民に示に儉を以てして可なり、安ぞ角若干の寶を費し侈を極て民を傷べけんや。蕭何が曰、この費安ぞ民を傷に足ん、且天子は四海を以て家とす、若壯麗にあらざれば威を示ことなし、臣が心又後世の子孫

授けて追かくる敵を防がせ、取ものも取あへず即時に城を出て、趙を望で走り玉ふ。冒頓は漢の兵の悉く出去たるを見て、美人を取んとて急に城中へ込入て見るに、櫓の上なるはみな木偶人にして眞の美女一人もなかりしかば、勃然として大に怒り、急ぎ大將王壙を召て、汝兵を領じ早く漢帝に追付て悉く討止よと下知すれば、王壙命を受、飛が如くに追かけ、漸く三十里ばかり馳て漢の勢に追つき、奴原いづくまでか逃さん、蓬し回せと呼て驀地暗に討てかゝれば、樊噲、曹參、周勃、王陵これを見て踏留て鋒を交へ、四方より取卷て餘さじと攻たりしかば、王壙なじかは敵すべき、戰んとする心なく眞中に取込られ、如何はせんと目ばかり働ところを、後より樊噲戟を揚て斬てかゝり、大喝一聲その響太山の崩るゝが如く、怒れる鬼鬚倒に竪て、その有樣恰も夜叉羅刹の如くなれば、王壙大に震ひ慄き、覺えず馬より眞倒に落けるを、樊噲飛蒐り忽ち首を取て指擧ければ、匈奴の軍勢大將の討れたるを見て、我さきにと皆四角八方へ逃失しかば、樊噲、王陵等敢て之を追ず、兵を收て太原の大路を望で帝に追付奉り、共に趙の城へぞ入にける。帝いそぎ左右に命じて、劉敬を獄中より引出させ、親ら其繩を解釋し、安撫して宣ひけるは、朕不明にして汝が言を聽ず、誤て白登山に入て攻圍るゝこと七日七夜、事十分危急にして殆ど命を失んとせしが、幸に陳平が計に因て虎口を逃ることを得たり、是專ら

來し、美人の圖を送て和睦を求むと、是は皆詭の計にして、大王を欺て兵を退けしめんとする者なり、大王今日城を攻玉ふ時、まづ美人の有無を正し、果して城中に有ば乃ち圍を解て放し玉へ、若美人なくんば彌急に攻て之を滅し玉へ、城中決して美人あるべからず。冒頓之に從ひ人を城下に出して、漢帝さきに美人を送て和睦を求んと云、若城中に美人あらば明に之を出せ、我必ず圍を解て都へ放し回さん、若詭ならば今目の前に城を蹈破んと呼らせければ、帝これを聞て急に陳平を召て宣けるは、冒頓自ら美人を見て、其後に圍を解んと云、今この城中に美人なし、如何してか敵を欺ん。陳平笑て曰、臣すでに冒頓が決して美人を見んと云んずることを料り知て、此間多の木偶人を作て五色を以て彩飾し、花やかなる衣服を披せ置たり。今日晩に及で櫓の上に灯を挑げ、其陰に此木偶人を雙べ置て之を見せば、彼必ず實の美人なりと思ふて、忽ち兵を退けん。帝限なく喜び、人を櫓に上せて、今晩多の美人を櫓の上に出して見せ申さん、大王親ら揀び取玉へと呼らしめ玉へば、冒頓これを聞て甚だ喜び、晩に及で親ら城下に到て望み見るに、櫓の上に灯を點じて、其陰に二十餘人の美女齊く粧て雙居たるに、花の姿月の貌恰も眞の天仙かと怪るゝ程なれば、冒頓限なく喜び、急に下知を傳へて悉く兵を退けゝれば、帝すはやとて大小の將士を率ゐ、樊噲、曹參、周勃、王陵四人を殿とし、三萬の勢を

は、漢帝もし箇樣の美女を送られれば、冐頓必ず深く之を愛して我を何の處に棄置んも料り難し、不レ如禍の至らざる先にこの圍を解て、漢の天子を放し早く都へ歸らしめば、美女を送り來ることもなくして、後の患もあるまじとて、使に向て申けるは、汝歸て漢の天子に能々奏せよ、必ず美人を進め來ること勿れ、吾明日冐頓に勸て兵を退けしめん、若又わが言に從はずんば、忽ち城を攻破らん。使者しすましたりと喜び、夫人もし大王に勸て兵を退け玉はゞ、漢帝年々夫人に貢物を捧て永く好を結び、又美人を送ることもあるべからずと云て出去ぬ。閼氏その夜冐頓に見て申けるは、漢の天子いま攻圍るゝこと七日七夜、若干の軍馬内に在て略弱りたる氣色なし、是みな天の祐る所ありて上下の神祇も加護し玉ふ故なり、況や又天下の諸侯みな手を拱て歸服すること久し、必ず甚だ急に攻圍み玉ふな、倘國々の諸侯大軍を起して來り救はゞ、御方これに勝こと能ざるのみに有ず、大王と我と快く樂むことを得じ。冐頓之を聞て實もと思ひければ、汝よくも申したり、我明日圍を解て漢の天子を放し歸さんとぞ申ける。次の日韓王姬信、冐頓が漢帝を放んとする意ある由を傳へきゝ、急に來り見えて申けるは、大王いかなれば漢帝を放し囘んとは宣ふぞ、すでに孤城の中に攻圍で亡さんこと掌にあり、今若これを放さば虎を放て山に歸らしむるなり、必ず後に大患を成ん、某又承る、漢帝この間閼氏の方へ使を

陳平計解白登圍
冒頓

陳平帝の前に近づき臣一の計あり、匈奴つねに皇后を稱して閼氏と云ふ、冒頓素より荒婬にして深く閼氏を寵愛し、凡そ國の政も悉く彼に任せて暫くも相離れず、今臣が手下に李周と云者あり、此者極て繪を能す、臣此に一の美人の圖を寫させ、五色を以て之を彩飾せしめ、密に人を仕立て匈奴の陣に遣し、番の者共に多く賄を與へて深く陣中に入、金銀珠玉を備て此圖と共に閼氏に與へ、冒頓城を攻玉ふこと甚だ急にして漢の兵之に敵すること能はず、故に今この美人を送て和睦を求んと欲す、夫人願は此由を奏して兵を退け玉へと云せんに、閼氏美人の圖を見ば、心の中に漢帝もし此美人を送らば冒頓深く之を愛して必ず我に薄からんと思ひ、定て冒頓に勸めて兵を退しめん、其時陛下大軍を統て急に圍を出玉へ。帝大に喜で此計極て妙なりと宣ひしかば、陳平乃ち夜を日に繼で、李周に美人の圖を畫せ、心腹の人に命じて匈奴の陣へ遣しけるに、其人多くの金銀を出し、番の兵共に與へて、了に閼氏に見ることを得たり。乃ち彼美人の圖を金珠の贈物と共に獻りければ、閼氏之を得て漢の使に見えて申けるは、金珠の贈物は我謹で之を受べし、此美人の圖はわれ何にかせん。使答て曰、漢の天子冒頓大王に手しげく攻られて、孤城危きこと旦夕にあり、此故に美人を送て和睦を求んと欲し、先圖を寫して呈上す、夫人願は大王にこの由を奏して兵を退しめよ。閼氏圖を見了て暗に思ひける

るに妄に強弱を論じて吾軍情を阻て、諸人の心を惑す、汝必ず敵の賄を受て內通の心ある者ならんとて、了に武士に命じ、劉敬を縛せて趙城に留め置、卽時に三軍を整點して平城まで發向し、先樊噲に命じて敵の樣子を伺せらるゝに、暫ありて歸り來り、敵果して何の備もなく、城の北なる小松山に陣を取て候ふが、墓々しく旗幟をも立ず、隊伍甚だ亂れて其勢僅に四五萬には過じと相見え候ふと奏す。帝笑て宣けるは、劉敬匈奴と內應し朕が大軍を驅て急に攻蒐らんことを恐れ、妄に敵ふかく計ありと云て、朕に兵を進めざらしめ、密に敵を夜中に落んとせし者なり、朕冒頓が陣を破らんこと眞に朽たる木を碎が如し、何の畏れか有んとて、急に大軍を率て先城に入、自ら中軍に坐して諸軍の手配をなし玉ふに、已に黃昏の比に及で、城外に夥く鐵砲を響して匈奴の軍勢四方より數を知ず攻來りしかば、帝急ぎ人を櫓に上せて見せしめ玉ふに、彼人周章しく櫓より飛下、匈奴の大軍この城を圍で、昔日項羽が勢の強き類にはあらず、遠く數十里の外を望むに、火把の光相連て其數何百萬と云ことを知がたしと告ければ、帝大に驚玉ひ、悔らくは劉敬が言を用ず、果して奸計に中れりとて、急に陳平を召て計を求め玉ふに、陳平申けるは、番兵素より戰を好で甚だ勇壯なり、御方必ず力を以ては此圍を破ること能はじ、只奇計を以て敵の心を惑さば、此難を免ること有ん。帝宣く、いかなる計を用べき。

この時韓王姫信は晉陽に屯し、匈奴の冒頓は代谷に陣を取けるが、帝自ら大軍を統て打出、細作を出して虚實を伺ひ玉ふ由を聞て、態と究竟の精兵を山の後に匿し置、たゞ年老て疲れ弱りたる士卒痩衰たる牛馬を陣の表に出して相待けり。帝は此時趙の城に陣を取玉ひけるに、十人の細作歸り來て右の趣を奏しければ、帝聞し召て、さぞ有らん、蠻夷の賊徒いかでか朕が中國の兵に及ぶべきとて、卽時に兵を進んと宣ふを、陳平等諫て申けるは、匈奴素より詐り多し、況や韓王姫信晉陽に在て之を扶くれば、恐くは深き計あらん、陛下再び虚實を聞定めて其後に兵を進玉へ。帝宣く、冒頓、姫信が強き之を項羽六國に較べば、豈論ずるに足んや、汝が慮甚だ過たり。陳平押かへして、いや〳〵、敵を侮る者は必ず敗る、冒頓甚だ勍勇なり、陛下必ず侮り玉ふなと再三諫めし故、帝又劉敬に詔して敵の虚實を探り聞しむるに、數日ありて馳歸り、果して陳平が申せし如く、敵深く計ありげに候ふ、夫兩國相爭ふの時、敵必ず威を耀し武を盛にして其强を示すべきに、臣冒頓が陣を見れば皆疲れ弱りたる軍馬なり、此は必ず内に强を貯へ外に弱きを示して陛下の心を懈らしめ、却て奇兵强卒を出して討んと料りしならん、若輕輕しく進玉はゞ、決して計に陷入玉ふべし、宜く先然るべき大將を遣し、明に虚實を察して其後に打向玉へ。帝叱て宣く、汝本辯舌を以て高官を授り、曾て一度の勳功もなし、今又無益な

日天下大亂、兵革並起萬民苦レ殃、朕親披レ堅執レ鋭自帥ニ士卒一、犯ニ危難一平ニ暴亂一、立ニ諸侯一偃レ兵、息レ民天下大定、此皆太公之教訓也。諸王侯通侯將軍群卿大夫已尊レ朕爲ニ皇帝一、而太公未レ有レ號、今上ニ尊太公一曰ニ太上皇一。

帝大に酒宴を設け群臣を會して慶を述玉ふ處に、忽ち韓國の馬邑縣より早馬到來して匈奴の冒頓兵を起して韓國へ攻來りしに、韓王信これに敵すること能はず、了に本部の軍馬を領じ、却て之と心を合せて同く謀反し、太原白土等の地を攻從へ、又曼丘臣、王黃等故の趙の大將趙利を立て王とし、三十萬の勢を聚て郡縣を劫し百姓を亂暴する由注進あり。帝驚て諸臣と計を議し玉ふに、或は諸國に相觸大軍を集て征伐せんと云もあり、或は又小勢なりとも急に太原へ推よせて伐んと云もあり。衆議區々にして定らざりしかば、帝宣けるは、汝等が議する所未だ群兇を制服するに足ず、朕親ら大軍を率て征伐し、賊徒を平げて再び猖獗すること無らしめんとて、蕭何を留て關中を守せ、先太原白登山の邊へ細作十人を遣して、敵の虛實を探り聽しめ、親ら曹參、樊噲、靳歙、盧綰等二十餘人の大將と精兵三十萬を領じて卽時に咸陽を打立玉ふ。

○陳平計解ニ白登圍一

るに將軍故なきに楚の亡臣を隱し養ひ、密に異心を企んとす、朕重く其罪を正んとて今すでに捕へ來りしかども、卿は元開國の元勳たるを以て殺すに忍ず、姑く其罪を免し封じて淮陰侯とす、今より心を改て前非を悔、赤心にして國に報せば他日再び王爵を與ふべし、朕更に將軍の楚を滅したる大功を忘るゝに有ずと宣へば、韓信恩を謝して退出しけるが、悒怏として心樂ず、士大夫と同列することを恥て此より虚病して朝に出ず。角て帝は咸陽に御座ありて天下甚だ靜謐なりしかば、叔孫通に命じて禮を典らしめ、蕭何に禮を定させ、宗廟社稷を立て五日に一たび朝に出て政を聞玉ひ、太公を孝養して早晩定省の勤を懈せ玉はず、或とき近侍の臣太公に奏しけるは、古より天に二の日なく民に二の王なしと云り、帝は誠に君の御子なれども大寶の尊きに居して天下の人主なり、君は帝の尊父なれども國家を以て論ずる時は臣なり、豈天子の尊を以て下臣たる人を拜すべけんや。太公始て悟り、或日帝の來り玉ふを見て、自ら彗を擁して門の側に立玉へば、帝御覽じて大に驚き、大人いかなれば此禮を行ひ玉ふやと宣ふに、太公答て宣く、帝は天下の人主なり、安ぞ我一人を以て天下の禮法を亂るべけん。帝こゝに於て群臣と相議し、太公を尊で太上皇とし、詔書を作て天下に此由を告玉ふ。

人之至親莫㆑大㆓于父子㆒、故父有㆓天下㆒傳㆓歸于子㆒、子有㆓天下㆒尊㆓歸於父㆒、此人道之極也。前

言を聞て巡狩に事よせ、僞て雲夢に遊び、韓信を生捕て歸り玉ふ、夫關中は秦の形勝の國、山河の險に據て諸侯を隔ること千里、百萬の帶甲ありて天下の利百にして秦その二を得たり、地勢甚だ利ありて下に臨で諸侯を制すること、猶高室の上に居て瓶の水を建すが如し、又齊の國は東に瑯琊卽墨の饒なるあり、南に泰山の固あり、西は濁河に沿、北は渤海を帶て地方二千里、百萬の衆を率て、天下の利十にして齊その二を得たり、此兩國を得玉ふは皆これ韓信が功なり、臣思ふに陛下いま坐ら秦の地を享て他日又至親の宗族を封じて齊王とし玉はん、若事の宜きに從はゞ、始の如く韓信を齊王に封じ玉ふて可なり、然るに却て之を生どり、罪なきに誅を加んと欲し玉ふ、陛下いかなれば左樣に聖恩の寡きや。帝宣く、大夫の言誠に理ありと云ども韓信久く異志を挾む、恐くは久からずして亂を生ん、朕この故に疑なきこと能はず。田肯が曰、陛下もし彼を疑ひ玉はゞ、但これに兵權を假ず、咸陽に住居せしめ玉ふ時は自然に無事ならん。帝乃ち悟り玉ひ、汝が言極めて善とて、黃金五百斤を出して田肯に賜ひ、十餘日を過て韓信を朝廷に召れ、安撫して諭し玉ひけるは、將軍楚を背て漢に來りしより、朕壇を築て大將軍に拜し、付するに重任を以てする時は、是朕が將軍を用ること薄からざるなり、其のち頻に大功ありしかば齊王に封じ、又改めて楚王とする時は、是朕が功を賞すること厚しと謂つべし、意ざ

りぬれば、是わが烹殺さるゝの時至れり、悲べからずと云けるを、帝聞し食て、尙猶豫して心決すること能はず、先楚王の印を奪取て御車の後に縛らせ、御駕を促して進發し玉ひ、暮に及で此より雲夢へは如何ほどかあると御尋あるに、左右の人三十里ありと答しかば、御車より下て白き龍馬に召れ、手ら轡を執て大なる林を望で入んとし玉ふに、忽ち龍馬打驚き數聲長く嘶て進まざりしかば、帝御心の中に此林の中に必ず刺客あるならんと思し食、急に樊噲に命じて捜さしむるに、年三十ばかりなる一人の壯士弓に矢を矯て林の中に立居たり。樊噲馳て生捕て帝の御前に引出せば、帝問て宣く、汝は何者なれば此林に隱れ居たる。壯士答て申けるは、某は淮陰の者なり、陛下いま罪なきに楚王韓信を縛て都に歸り玉ふ、某曾て楚王の厚恩を蒙るを以て、如何にもして救ひ取んと存じ、此林に隱れて相待たり。帝怒て宣く、汝專ら韓信を救ん爲に有ず、實は朕を射殺ん爲ならん、幸に龍馬の進ざるに因て難を免れたり、若誤て林の中に入ば必ず毒手に遇んとて、左右を下知して卽時に擊死させ玉へば、韓信は後陣に在て此事を傳へ聞、深く嘆惜して覺ず泪を流しけり。帝は御駕を促して翟陽より洛陽を過て、次の日關中に歸り玉へば、文武の群臣朝に出て、兩邊に列坐す。時に大夫田肯列を出て奏しけるは、韓信陛下の爲に心力を苦めて關中を治め不世の業を成す、その功甚だ大なり、陛下いま諸人の

得玉ふと云ども、楚の餘黨なほ此彼に殘て徘徊す、若威武を示さゞる時は畏れ怕ることを知ず、了に又亂を生ぜん、此故に臣時々兵を率て郡縣を巡檢し、陛下の爲に殘賊を除て國家を安んぜんと欲す、安ぞ居民を刧さん、又鍾離昧は素より臣と厚く交て數十年の好あり、臣昔し楚に在し時、項王に殺されんとせしこと幾度と云ことを知ざりしが、皆彼が情に因て必死を免れ、今日陛下に事ることを得たり、此ゆゑに敢て其徳に背ず、暫く隱し置彼が賢德ありて智謀の深き由を奏し、陛下に薦めて重く用しめんと存ずる處に、陛下諸人の讒言を信じて深く臣を疑ひ玉ふ由を承り、已ことを得ずして之を殺し、今陛下に來り見えて他の心さらになし、安ぞ罪とせん、願は早々に縛を解玉へ。帝宣く、汝曾て齊を伐しかども急に下すこと能はざりしかば、朕別に酈生を遣して利害を說しめければ、齊王忽ち歸服せり、然るに汝詔を矯て之を伐、了に酈生を敵に殺させ、剩へ放に自ら立て齊に王たらんと欲し、其後朕成皐に圍を受て頻に救を求しかども、汝坐ら勝負を觀て略救ひ援るの心なく、近ごろ楚に改め封ぜられて甚だ不足の心を懷き、終日怏々として樂ず、密に謀反を圖らんとす、此の如き許多の罪あれば、朕之を正さずんば有べからず、安ぞ罪なしとせん。韓信これを聞て長嘆し、誠に世の諺に高鳥盡良弓藏、狡兎死走狗烹、敵國破謀臣亡と申すが、今果してわが身の上に知れたり、天下すでに定

て宣く、朕頻りに鍾離昧を尋ぬれども汝隠して之を出さず、今朕が雲夢に出たる故に其實跡の顯れんことを恐れ、已ことを得ずして之を殺すと云ども汝が本心に有ずとて、武士を下知して矢庭に縛らせらるれば、韓信大に叫び、臣何の罪ありてか角はし玉ふぞと云に、帝宣く、汝いま何の言句かある。韓信が曰、臣は乃ち當朝開國の功臣、いま罪なくして縛せらる、是わが屈に有ずや。帝宣ひけるは、汝放に民の田地を奪て父母を葬り、百姓をして深く恨を懐かしむ、是朕を輔るの道に有ず、其罪一なり、今天下事なくして甚だ靜謐なるに、汝多の兵馬を陳ねて出入し、郡縣を刧して威武を示す、之を見人寒心せずと云ことなし、二の罪なり、鍾離昧は項王心腹の臣、汝故なきに隠し置て朝夕事を相議す、罪の三なり、この三の罪あれば隠謀すでに顯れたり、朕この故に縛らしむ、汝爭か陳ずることを得ん。韓信申けるは、此三の事臣いま悉く申開ん、願くは明に察して縛を解玉へ、臣むかし匹夫たりし時、極めて貧窮にして父母を葬るべき地なかりしかば、假に他人の地に埋み置たり、今辱も楚王に封ぜられて榮耀身に餘りぬれば、其富貴を死たる父母にも推及んことを欲し、新に墳墓を造て改め葬りたり、此處民の田地に鄰て壇を設け垣を築たれば、百姓之を患ひて惡ざまに奏せるならん、臣安ぞ侵し奪ふの心あらん、又兵馬を陳ねて出入したるは、是も敢て事なきに民を擾さんとに有ず、陛下初て天下を

國の諸侯こと〴〵く來て御駕を迎ふ。此とき韓信は帝の雲夢へ御幸ある由を聞て、諸人を集めて議しけるは、向に隨何來て帝すでに我鍾離昧を隱置たることを知玉ひ、朝廷の諸臣も口々に帝に勸めて我を害せんと圖る由を告たり。我早く之を殺して罪を免んと思へども、鍾離昧は我數十年の故舊なれば、あへなく殺すに忍びず、然るに帝いま詔を傳へて雲夢へ御遊あるは、强に巡狩の御志のみにては有まじ、必ず我異心を企て角するならんと料り、此に事托て吾罪を正ん爲ならん、不如隨何が言に從ひ、早く之を殺して帝の疑を決し諸人の謗を免れんとて、鍾離昧を呼で申けるは、帝いま巡狩に事よせて雲夢へ出玉ふは、必ず某が御邊を隱し置は定て異心をも企るやらんと料てならん、されば吾御邊の故に君に反くの罪を得のみに有ず、又御邊にも益なし、此故に今御邊を殺し帝に獻て此罪を免れんと欲す、是又已ことを得ざればなり、御邊必ず恨ること勿れ。鍾離昧が曰、大王必ず自ら悞り玉ふな、もし今日われを殺し玉はゞ明日大王の殺され玉はんこと疑なし、前日申せし言われ安ぞ大王を欺ん。韓信申けるは、帝たとひ我に負き玉ふとも我は必ず貳なきを示さずんば有べからず。鍾離昧之を聞て大に詈り、胯夫なにとて左様に情なき、我數十年來の義を思はざるか、恨くはわれ汝が明日殺さるゝを見ざることをと云て、了に刀を拔て自ら首を刎たり。韓信その首を携て軈て雲夢に到れば、帝召見

信は等閑の輩に有ず、況や楚の地は淮蔡の衝に當て帶甲數十萬、もし一たび變を生ぜば、其勢ひ豈項王の强きが如きのみならんや、諸君いま一時不平の氣を恃で此と衡を爭んと欲す、誠に蟷螂が斧にもあらず。帝宣く、然らば如何なる計を以てか之を治めん。陳平が曰、韓信は只智を以て擒にすべし、力を以て取べからず、臣一の計あり、干戈を動すことを用ず、忽ち韓信を擒にせん。帝宣く、如何なる計ぞ。陳平申けるは、韓信は變詐萬出にして鬼神も測り知こと能はず、陛下たゞ僞て雲夢に遊び、韓信が迎へ見るを待て擒にし玉へ、蓋し古は天子四方へ巡狩することあり、春は東に巡狩し、夏は南、秋は西、冬は北に巡狩して民の風を觀、これ古來聖主の政なり、陛下いま御駕を促して雲夢へ御遊あり、諸侯を東楚の西の界に會し玉ひ、若來り見えざる者あらば、大將に詔し兵を遣て先之を伐玉へ。韓信此由を聞ば、必ず野外へ出て御駕を迎へん、其とき陛下武士に命じて軈て之を縛らしめよ、然る時は師を勞し衆を動して勝負を決することを用ず、只一人の力を費すのみ。帝深く喜び玉ひ、乃ち詔を降して東國の諸侯に告玉ひけるは、朕ことし十二月に雲夢に巡狩し、諸侯を會して國風民俗を見んと欲す、今より年々此の如にして定例とせん、若來り見えざる者あらば、必ず兵を統て罪を伐んとて、已に十二月に成ぬれば、文武の群臣を召具し咸陽を離れて陳蔡まで至り玉へば、英布、彭越を始として東

んこと疑なし、大王よく之を慮れ。韓信これを聞て、沈吟して決すること能はず、了に鍾離昧を殺す心を止りけり。隨何は數日楚國に留り居けるが、韓信さらに鍾離昧を殺んとする氣色なければ、密に書簡を調へ咸陽へ使を馳て此由を帝に奏し、韓信に別を成て直に郴州へ赴けり。

○高祖僞遊雲夢

或時帝朝に出て群臣と政を議して御座ありけるに、忽ち外より報じて、只いま何地の人とも知ず、帝に見えて機密の事を奏せんと云て來れる者ありと申す。帝驚て急ぎ召入玉ふに、其人帝の前に近付、某は楚の民なり、韓信楚王に封ぜられてより、放に民の田地を奪て父母を葬り、又日々多の兵馬を率ゐ來て郡縣を侵し擾り、其上楚の亡將鍾離昧を隱し置て頻に御穿鑿あれども之を出さず、隱謀の企あること已に久し、某よく實跡を聞定めて候ふ、願は早く之を除て楚の民を救ひ玉へと奏聞す。帝諸臣に向て、韓信みだりに功を恃で無禮をなす、向に已に齊の地に據て大事を圖んとせしを、朕早く聞知て近ごろ楚王に改め封ぜしかば、彼甚だ怨み怒れり、今又鍾離昧を隱し置て出さゞるは、愈謀反の企ある故なりと宣へば、群臣みな奮然として曰、安からぬ事かな、速に兵を起して其罪を伐玉へ。陳平急に止めて申けるは、甚だ不可なり、韓

を疑ふ、其のち季布又朝に出て、鍾離昧兼てより楚王と約を定め置、いま果して楚に在と奏せしかば、此より滿朝の諸人悉く之を知て、楚王こそ鍾離昧を隱し置玉へりと口々に申せしが、只蕭相國一人は諸人を制して爭か左樣の事あるべきぞと、再三奏せられしかども帝疑ひ玉ふこと尙甚し、某久く大王知遇の恩を被るを以て密に告申なり、早く思案を回して諸人の口を塞ぎ玉へ、若延引して帝その罪を問ば、大王開國の元功も了に畫餠と成ん、願くは熟これを思へ。韓信聞て大に後悔し、然らば吾如何してか帝の疑を決し、諸人の口を塞ぐべき、大夫願は計を敎へよと云に、隨何申けるは、大王たゞ早く鍾離昧を殺して咸陽へ獻り玉はゞ自ら無事ならん。韓信が曰、鍾離昧は我數十年の故人なり、安ぞ殺すに忍びん。隨何申けるは、大王もし朋友の義を重じて國法を輕じ玉はゞ、禍必ず踵を旋さじ。韓信了に悟り、誠に大夫の言の如し、吾必ず鍾離昧を殺して帝に獻んと云て酒を勸れば、隨何又數盃を傾けて客屋に退出せり。韓信は鍾離昧を殺んと思ひ定て、後園へ出けるに、折ふし傍なる小閣に鍾離昧たゞ獨り坐し居たり。軈て閣に上て隨何が申せし事、始終一々に告ければ、鍾離昧申けるは、然らば大王これを如何し玉ふべき。韓信が曰、たゞ國法に遵て御邊の首を咸陽へ獻らば、吾禍を免んのみ。鍾離昧が曰、我もし存せば、漢帝敢て大王を害せじ、我もし亡びば繼で大王の殺され玉は

らず、急なる時は彼必ず他所へ逃去ん、緩き時は是虎を養て患を成なり、久からずして必ず亂を生ぜん、陛下たゞ別事に托して一人心腹の人を韓信が許へ遣し、鍾離昧果して彼にあらば、箇樣々々と云せ玉へ、然らば韓信必ず已ことを得ずして鍾離昧を殺さん。帝これに從ひ、卽ち密に隨何を召て、汝いま朕が詔を承り、郴州へ行て義帝の陵を修造するに事託て楚國に到り、鍾離昧が實否を探り聞て、若果して彼に在ば汝箇樣々々にして韓信に鍾離昧を殺さしめよ、若功を成ば重く恩賞あらんと低語き玉へば、隨何詔を受て卽時に打立、一日を經て楚國に到るに、韓信聽て出迎へて問て曰、御邊いま如何なる故ありてか此に來れる。隨何答て曰、某大王に別てより日久し、いま義帝の陵を修造すべしとの詔を奉て郴州へ赴き候ふ故、前日の厚恩を思ふて來り見え候ふ。韓信限なく喜び、酒を擧て持なし、朝廷の政を尋れば、隨何一一に之を語り、左右を顧るに、近侍の人も見えざりしかば、近く依て密に低語けるは、某が此に來る只前日の恩を謝せんとのみに有ず、今一大事あり、專ら之を告ん爲に來れり。韓信驚て如何なる大事かあると問に、隨何申けるは、向に或人朝廷にて大王楚の鍾離昧を隱し置玉ふ由を奏しけるが、帝大に叱て、韓信は朕が心腹の人、殊に楚王に封ぜられて一國の君なり、豈叛臣を隱し置の理あらんやとて、了に彼人を追退け玉へり、帝は更に信じ玉はねども左右みな之

陛下以神武戡定四方、以威德制服萬國、華夷混一禮樂同文、垂山河帶礪之盟、慶龍虎風雲之會、建昌運衍大宗小宗之蕃、肇立皇圖成一世萬世之統、前臨沙苑浮旺氣以蘢葱、後枕滸江鎖烟雲而出秀、藍田右繞、華岳東環、依終南以爲城、乃天造嵬然之險、順涇渭以爲守。實地設自然之阻、奠安天府坐享金湯、臣等得以共沐王猷、同瞻夏紀、允升蓬萊之境、隨登鳳翥之臺。臣等不勝慶賀欣躍之至。

帝表文を御覧じて喜び玉ふこと斜ならず、群臣に恩賞を賜ひ、大に酒宴を設けて終日歡樂を盡し玉ふ。ある時帝獨り便殿に坐し玉ひしが、又鍾離昧がことを思食出され、此もの一向に消息を聞ず、恐らくは後に大なる禍を引出さんと、深く叡慮を惱され、次の日群臣を召て、鍾離昧久く來り見えず、如何に汝等も消息を聞ずやと問ひ玉ふに、季布すゝみ出て奏しけるは、臣さきに鍾離昧と楚の陣を沒落の時、汝は何地を志て落ゆくぞと尋ねて候へば、彼敢て隱さず、我素より漢の韓信と交り厚ければ、行て此人を賴んと存ずる由を申せしが、今果して韓信が陣にあるや未だ實否は承らず候ふ。帝これを聞し食て、いよ／＼憂ひ疑はせ玉ひ、陳平を召て宣ひけるは、韓信いま鍾離昧を隱し置は、必ず深き意あらん、朕速に捉へて後の患を除んと欲す、如何なる計を用てか捉ふべき。陳平が曰、この事は甚だ急にすべからず、又緩ふすべか

百姓業を安ずること能ざらしむ、然るに陛下自ら周室の隆なるに比せんと欲し玉ふは、又甚だ悞らずや、譬ば人と鬪ふに其吭を扼ずして只その背のみを拊ときは、全く勝こと能ざるが如し、夫秦の地は山に靠河を帶て天下の吭なり、陛下これを捨て反て洛陽に都し玉はゞ、他日もし勢弱して天下を制すること能はざる時に及で、誰にもあれ咸陽を守て殽函の固きに據ば、秦政項籍が如く强からんこと面り見るが如し、是乃ち天下の大事、臣が向に所謂萬世の業、子孫不拔の基と云者なり。帝乃ち群臣と此事を議し玉ふに、是等は皆山東の人なれば、洛陽を去ことを喜ず、周昔し洛陽に都して數百年衰へず、秦の始皇初て咸陽に都し、纔に二世にして亡たり、況や洛陽は東に成皐あり、西に殽澠あり、河に背き洛に向ふて天下無雙の要害なり、必ず動き玉ふなと云しかば、帝又張良を召て問玉ふに、答て申けるは、洛陽まことに成皐殽澠の固めありと云ども、四面に敵を受て武を用るの國にあらず、關中は左に殽函あり、右に隴蜀ありて、沃野千里、三面を阻て固く守り、只一面に諸侯を制す、是所謂金城千里天府の國なり、婁敬が申す所極て好。帝此に於て婁敬が敎に從ひ、日を擇で了に都を咸陽に遷し玉ひ、婁敬を奉春君と號して姓を劉氏と賜ひ、天下に詔を傳て寅の月を正月と定め玉へば、此より天下ますます治て路に捨たるを拾はず夜戸を闔さず、萬民歌ひ樂みければ、群臣表を上て、賀して曰、

婁敬議遷都咸陽

孫不抜の基を衍にし、天下を磐石より固く安からしめんと欲れども、帝に見て奏すべき樣なし、左右みな申けるは、汝左樣の見苦しき體にして爭か帝に見ることを得ん。婁敬が曰、布の道服草の履は是わが常の服なり、安ぞ改め易ん、吾愧ることなく怕ることなし。左右殿に入て此由を奏するに、帝乃ち召來れと宣ひしかば、軈て婁敬を引て殿に昇らしむ。帝宣く、汝朕が爲に一大事を告んと云、如何なる高論かある。婁敬申けるは、昔項王范増が諫に從ず、關中を捨て彭城を都とせしを、韓生叉極て諫たりしに、項王怒て烹殺せしかば、此を以て楚了に天下を失へり、今陛下は洛陽に都を建玉ふ、是まことに彭城の比すべきに有ず、然れども陛下の意は必ず惟隆なることを周室に比せんと欲するに有ずや。帝の宣く、然り。婁敬が曰、陛下の天下を取玉ふは甚だ周室と同からず、夫周は后稷よりして徳を積仁を累ること數百年、武王に至て紂を伐て天下を有つ、成王即位して洛邑を以て天地の中とし、四方の諸侯納貢述職すること相均し、凡そ徳ある時は天之に易るに興を以てし、徳なき時は之に易るに亡を以てす、此故に周の盛なる時、列國四夷賓服せずと云者なく、其衰るに及で天下朝せざれども周又これを制することを能ず、是徳の薄きには有ず、乃ち形勢弱ければなり、今陛下豊沛より起り、蜀漢を捲て三秦を定め、項羽と滎陽成皐の間に戰玉ふこと大小七十餘陣、天下の人をして肝腦地に塗れ、

亡國の臣一身を措に處なく、鉗首して奴となれり、今陛下の聖恩誅を加へ玉はざる時は足り、安ぞ高官を受べけん。帝宣ひけるは、官を辭して受ざるは是汝が楚を忘ざる所以、忠を憐で爵を予るは是又朕が下に厚して其外を勵す所以なり、汝心を安じて朕に事へよ、必ず辭すること勿れ。季布再拜して恩を謝し、了に官を受て退出せり。

○婁敬議レ遷二都咸陽一

田横海島に死して季布すでに來り服しぬれども、未だ鍾離昧が在所を告來る者なければ、帝ふかく患玉ひ、諸臣に向て、鍾離昧は楚の名將にして勇三軍に秀で、才智范增が下に出ず、若この儘にて指置ば、終に後の患をなさん、汝等いかにもして之を捕へ、朕が心を安んぜよと宣へば、左右の人詔を奉て、洛陽の城中城外へ、鍾離昧が在所を知るもの有ば、早々に申し來れと觸たるに、忽ち一人布の道服を披、草の履を踏で城下に來り、大に笑て、料るに一人の鍾離昧安ぞ大事を起すに足ん、吾一大事あり帝に見えて奏せんと欲すれども、只恨らくは吾を引て帝に見えしむる人なしと呼る。左右の人これを見て急に城中より出て、其名を尋るに、答て申けるは、吾は齊の國の人、姓は婁、名は敬と云、いま一言あり、漢の爲に萬世の業を立、子

罪なしと云ぞ。夏侯嬰が曰、臣としては各その主の爲に忠を盡す、季布その時は只楚あることを知て漢あることを知ず、項王あることを知て陛下あることを知ず、是季布が忠なり、安ぞ罪とせん、漢の諸臣をして皆彼が如くならしめば、陛下なんぞ天下の大に治らざることを患ひ玉はん、若この一人の罪を免して用玉はゞ、四方より季布が如き智勇の人爭ひ來て、臣たらんことを願ふこと水の下に就が如くならん、且萬乘の尊き四海の廣き、何ぞ一人の季布を容ること能ざるや。帝忽ち悟り玉ひ、汝が言大によし、季布、鍾離味共に皆罪なし、若自ら來り見えば、朕之を許して必ず舊の如く官職を與へん、若尚疑ひ怕れて來らずんば、却て其罪を正んと宣ひしかば、夏侯嬰退て家に歸り、朱家に此由を告るに、朱家大に喜び、拜謝して魯國に歸り、季布を呼で事の樣を具に語れば、季布深く喜び、再拜して恩を謝し、此より打立て直に洛陽へ到るに、帝召て宣ひけるは、汝四海に家なく一身置どころなし、何ぞ早く來て朕に見ざる。季布申けるは、國破れて君亡ぶ、臣たゞ項王と同く烏江に死すること能ざるを恨とす、何の面目ありてか陛下に見えん。帝宣く、汝さきには何とて甚だ朕を辱たる。季布はら〳〵と泪を流し、臣項王の命を受て陛下に敵す、其とき尚たゞ陛下を罵ることの足ざるを恐ると云ければ、帝深く嘆じ玉ひ、季布まことに忠烈の士なりとて、卽時に郎中とし玉へば、季布首を叩て奏しけるは、

玉はゞ、是わが賢公に報ずる所以なり、更に恨むることなし。朱家申けるは、我豈人を殺して千金の賞を求むることをせんや、縦ひ天下に雙なき富人となるとも、心中まことに忍ず、吾一人の友あり、滕公夏侯嬰と云、幼より共に厚く交りしが、今洛陽に在て漢帝に事ふ、吾此人を頼で汝が命を救ふべし。季布拜謝して、若然らば誠に所謂生レ死而骨肉と云者なりとて、限なく喜びしかば、朱家卽日に打立、直に洛陽に赴て夏侯嬰が館に到る。夏侯嬰乃ち迎へ入て斜ならず喜び、酒を出して持なしければ、朱家問て曰、季布いかなる罪ありてか角は緊く尋玉ふぞ。夏侯嬰申けるは、此人昔し楚に在し時、しば〳〵吾君を詈り辱たり、此に因て其罪を正んと欲す。朱家申けるは、凡そ臣としては各主の爲に職を盡す、何ぞ季布のみならん、帝いま始て天下を平定し玉ひ、私の恨を以て人を殺んとし玉ふ、是なんぞ機量の廣からざる、況や季布は賢才にして驍勇の大將なり、之を求め玉ふこと甚だ急ならば、彼必ず北の方胡に走るか或は又南の方越に去ん、然る時は朝廷一人の賢將を失ふのみに有ず、反て他人を扶けて後大なる害を成ん、御邊この由を帝に奏し、季布が罪を免して賢を求むるの道を廣め玉はゞ、天下の豪傑ことく〴〵く頸を延て其臣たらんことを願ふべし。夏侯嬰乃ち朝に入て奏して曰、季布罪なし、陛下これを求め玉ふこと何ぞ甚だ急なるや。帝宣く、彼しば〳〵朕を辱たり、汝なにとて

て、若季布、鍾離昧を生どり來る者あらば、非職凡下を云ず黄金千兩を恩賞に與ふべし、若又隱して出さゞる者あらば、國王諸侯たりとも同罪に行んと、遍く諸國に觸知せ辻々に高札を書て立玉ふ。此とき季布は咸陽に隱れて周長と云者を賴み居たりしが、或とき周長この札を見て、季布を呼で申けるは、漢帝いま將軍を求むること甚急なり、若この處に隱し置て事露れば、吾一族こと〴〵く罪に行れん、吾強に之を患るにも有ず、且は又將軍にも益なし、將軍これを如何せん。季布が曰、御邊少しも憂ひ玉ふな、我自ら身を全ふするの計ありとて、了に刀を拔て自ら髻を切て落し、鉗首して奴と成、周長を別れて魯國の朱家に行、身を賣て奴と成れり。朱家つら〳〵之を見に、容は鉗首して實に奴なれども行坐進退その體たらく甚だ尋常の人に替りしかば、心の中暗に是必ず季布ならんと思ひけれども、左あらぬ體にて拘へ置しが、帝之を求め玉ふこと急にして、日々に觸廻りしかば、乃ち呼で申けるは、汝は楚の大將季布なり、朝廷いま汝を求ること甚だ嚴し、吾もし藏し置ば恐くは禍一族に及ん、吾早く汝を縛て帝に上んと欲す、汝必ず包むこと勿れ。季布申けるは、某は實に楚の季布なり、假に名を隱ん爲に鉗首して奴となり、此に來て身を賢公に賣與ふ、賢公憐で平生深く恩を加へ玉へども、吾これを報ずるに由なし、幸にいま帝われを求む、願くは賢公はやく縛て朝廷へ上り、千金の恩賞を得

けるが、共に議して申けるは、田横素より漢に事ることを快とせず、二には五百の義士の漢の兵に圍れて害せられんことを恐れて自殺し玉へり、眞に大丈夫の志なり、吾二人豈苟も富貴を貪て其難に死せざらんやとて、了に田横が墓の傍に土穴を掘、其中に二人齊く腹かき切て失にけり。次の日帝此由を聞し食て大に驚き玉ひ、田横が自殺せし、實に庸人の及ざる所、二人の客の墓を掘て死たるは彌難き所なり、田横人の心を得ること此の如なれば、恐くは海島にある五百人、田横が死だるを聞ば、平生の恩義を思て必ず亂を成んとて、急に海島へ使を馳、詔諭して之を召玉ふに、五百の義士田横が死たる由を聞て、互に顔を見合せ泣倒れて申けるは、田將軍われ等が爲に漢に赴て死玉ふ、我等いまは誰が爲にか命を惜んとて、五百人同じ枕に自害して死たりしかば、漢の使いそぎ馳歸て此由を奏するに、帝ます〳〵驚て宣く、天下何とて此の如く義を尙ぶの士あるや、古今例し少きことなりとて、再び人を遣して五百人の骸を海島に葬らしめ玉ふ。此に因て後の人、この島を田横島と名づけ、今に至て田横が廟の古跡ありとかや。帝ある時又宣ひけるは、田横久く海島に在て賓服せざりしかば、朕甚だ患ひしに、今悉く自殺しぬれば已に心腹の疾を除けり、然れども楚の大將季布、鍾離昧絕てその所在を知ず、朕昔し睢水の敗軍に、此二人さま〴〵詈り辱めたれば、如何にもして捕へばやと思ふなりと

一たび怒を發し玉はゞ、將軍服せんと欲するも叶ず、歸んと欲するも能はず、大に後悔あらん、不如この島に夥く陣屋を構へ、岸の四面に鐵砲石火箭を嚴く備へ、吾等五百人心を齊し力を合せて將軍と之を守らば、滄海萬里たとひ漢帝百萬の雄兵ありとも、豈近付ことを得んや、然らば將軍坐ら强弱を觀、優遊して快く樂み玉ふことを得ん。田横申けるは、是長策にあらず、我この處へ來てより未だ分毫も汝等に恩を施さず、今帝遠く勅使を勞して召玉ふに、我もし歸服せずんば必ず兵を起して罪を伐玉はん、然る時は汝等自ら矢石を冒して千苦萬辛するのみに有ず、若一旦戰ひ敗れば悉く鋒鏑に罹ん、是わが忍びざる所なりとて、了に二人の客を伴ひ陸賈と同く洛陽を差て打立けるが、已に卽墨縣を二十里離れて俄に心替り、つく〴〵と思ひけるは、漢帝むかし齊王を殺されたるを以て、吾この島へ逃れ來れり、今漢すでに天下を有て詔を下して我を召、吾生て主の讐を報ずること能はず、却て膝を屈め北面して他人に事へ、其封賞を受て自ら心を安ずるは、大丈夫の爲ところに有ず、何の面目ありてか身を天地の間に立んやとて、忽ち刎て死にける。陸賈も二人の客も大に驚き飛かゝりて止んとするに、早息絶たりしかばすべき樣なく、共に骸を取收て洛陽へ到り、事の子細を奏しければ、帝深く歎息し、王の禮を以て洛陽城の東に葬らしめ、二人の客に都尉の官を授け玉ふに、二人拜謝して朝を出

去こと二十五里なり、此島滄海四面を環て風浪甚だ悪し、大夫もし此處へ到んと欲せば、先大船を用意し順風を待て進み玉へ。陸賈之に従ひ、従者に命じて大船を用意させ、多くの水手楫取を備て順風に乗じて直に即墨縣へ赴くに、田横漢の使の至れる由を聞て急に物具ひし〳〵と固め、兵を下知して緊く陣門を閉たりしがば、陸賈乃諭して申けるは、漢帝西楚を亡して天下を一統し玉ひしに、汝ひとり未だ賓服せず、今われを勅使とし詔書を下して諭し玉ふ、必ず相拒ぐことなく、早々に陣門を開て相見えよ。田横これを聞て急に陣門を開て迎へ入詔書を披て之を讀に、其文に曰、

夷齊恥レ食二周粟一而周武王卒有二天下一。介子推不レ欲レ事レ秦、而秦卒霸二一國一、田横雖レ居二海島一、終爲二漢士一。獨能超二出人間一而與二夷齊介子推一齊レ名乎。否則可二速來一、大則爲レ王小則爲レ侯、永保二田氏一不レ失二宗祀一、不二亦愈一于遠處二海島一與二魚鼈一爲レ友乎。如執レ迷不レ來擧レ兵而東、身爲二俘馘一滅二絶田宗一其愚甚矣。幸其速來勿レ誤。

田横詔書を拜讀し了て陸賈を持なし、早く都に上て漢に降んと云に、左右の人みな止て申けるは、決して降り玉ふな、漢帝は外寛なれども内まことに嚴く、量大なれども心まことに苛刻なり、將軍いま詔書を得て服し玉ふとも、帝もし將軍の海島に在て久く賓服せざりしことを思て

益す忠心を以て君に仕ふべし、丁公が如き擧動をして必ず命を失ふなと云て、上下悉く悦服せり。

○田横義士死二海島一

數日を經て張良又朝に出て奏しけるは、陛下雍齒を封じ丁公を誅し玉ひてより、群臣みな心を安じて悦服すと云ども、齊の田横遠く海島に逃れ居て靜に强弱を觀、その志甚だ小ならず、陛下早く計を運し玉はずんば、後大なる患を成ん。帝宣く、如何なる計を以か之を平げん。張良申けるは、海島は洪濤萬項煙波渺茫として都を阻ること數千里、陛下たとひ兵を遣して伐玉ふとも遽に勝ことを得がたからん、臣思ふに只使を以て詔書を下し、齊の後を立て田氏を君とすべしとて、其罪を免し利害を說て召玉はゞ、彼必ず德を慕て來り服せん、然らずんば徒に軍馬を費して事に益なかるべし。帝これに從ひ軈て上大夫陸賈を召て、汝詔書を携へ海島へ到て田横を召來れと宣へば、陸賈詔を奉て進發し數日にして海島へ到り、四方の風景を望むに、羅山その東に亙り、濰水その西を阻て、神山南に聳え、渤海北に枕て洪濤巨浪一望涯なくして田横が行衞を知ず。處の人に尋れば、此より東北一百里に卽墨縣と云島あり、田横が陣屋は岸を

る。扨又衡山王呉芮を長沙王に改めて臨相に都せしめ、淮南王英布、梁王彭越、燕王臧荼は皆舊の如く、劉賈等を始として劉氏の一族こと〴〵く封じて王とし、蕭何等が如き功臣二十餘人みな列侯に封ぜられしが、其餘の功を爭て決せざる者共心安からず、こゝ彼に五人三人づつ集て低語もの語りしけるを、帝高き樓の上より御覽じ、急に張良を召て子細を問玉ふに、張良答て申けるは、陛下の天下を取玉ひしは、大小の諸將强弱親疎となく皆忠誠にして力を同し心を合せたるを以てなり、然るに今封爵を與へ玉ふは皆親み愛する所の人、誅戮し玉ふは元より怨ある人にして、其餘は更に論じ玉はず、此ゆゑに皆恨を含で謀反を企て、箇樣に相集て評議を仕り候ふ。帝驚て宣く、如何してか之を治めん。張良が曰、陛下の平生甚だ憎み玉ふて諸臣も共に知ところの者は誰ぞ。帝答て宣く、雍齒なり。張良又曰、陛下の常に深く愛し玉ふは誰ぞ。帝宣く、丁公なり。張良申けるは、陛下昔し睢水に敗軍し玉ひし時、丁公、雍齒項王の命を受て、陛下を追かけしに、雍齒は主の命を重とし力を盡して陛下を追たり、是忠臣なり、速に侯とし玉へ、丁公は又主の命に反て陛下を扶たり、是不忠の人なり、遽に誅戮し玉へ、然る時は人の心自ら定らん。帝これに從ひ、卽時に雍齒を召て十萬侯に封じ、丁公を市に出して首を刎、三軍に示し玉へば、此よりみな心を安んじ、雍齒だも尙侯に封ぜらる、吾輩又なにをか患へん、

して、又數盃を傾け君臣共に歌ひ樂で喜こと限なし。時に韓信奏しけるは、臣昔し楚を反て褒中に入とき、山路を踏迷ひ、跡よりは追手急に蒐て如何ともすべからざる處に、一人の樵夫に逢て路を尋ねしが、若楚の兵の此に臣が行衛を問て、又追來らんことを恐れ、情なく樵夫を斬殺せしかば、了に虎口を逃れて陛下に從ふことを得たり、續て孤雲兩脚山へ到て義士辛奇と云者に遇たりしが、後に臣に從て楚を伐、累に大功を立て、向に廣武の合戰に漢の爲に討死せり、然れども今に至て封賞なし、願は樵夫が廟を立て祭をなし、辛奇に官を贈り子孫を錄して用ひ玉はゞ、陛下の聖恩枯骨に及ぶなり、殷湯周武の大德も安ぞ之に過べけん。帝驚て、若汝が奏するに有ずんば、朕了に樵夫が路を教へ、辛奇が討死したる事を知ず、殆ど大義を失んずる者をと宣ひて、其日も已に暮ければ、群臣拜し別れて悉く退出せり。帝次の日 詔 を下し、急に樵夫が祠を立て四時祭らせ、又辛奇に建忠侯を贈て子孫こと〴〵く官祿を授け玉ふ。張良又漢帝に奏して、韓王の孫姬信を立て韓王とし、翟陽を都として韓王の宗廟を建んことを求ければ、帝乃ち勑許し玉ふ。次に王陵又母の爲に祠を建んことを奏するに、帝宣けるは、汝が母大賢にして預め朕が了に天下を有べきことを知て、子を不義に陷入しめざりけりとて、卽ち祠を建させ、月々に香燭を給ふて祭を懈らしめ玉はず、今に至て陵母が祠の古跡 沛縣にありとぞ 承

酒宴を設て群臣を會し、酒半酣に至て宣ひけるは、朕滿座の諸臣に問べきことあり、必ず心底を殘さず之を奏せよ、朕は元泗上の亭の長たりしかども、能天下を保つことを得たり、項羽は力鼎をあげ氣山を貫て武勇天下に敵なかりしかども、了に天下を失へり、是いかなる故ぞ、汝等必ず忌憚ることなく之を論ぜよ。高起、王陵二人答て申けるは、陛下は高慢にして甚だ人を侮る、項羽は仁ありて能人を愛す、然れども陛下人をして城を攻地を略せしむるに、若功ある時は重く恩賞を與て天下と共に利を同す、是天下を得玉ふ所以なり、項羽は素より仁ありて、寒たる人を見ては泪を流し、自ら披たる衣を脫で之に與へ、飢たる人を見ては憐で自ら之に食を分ち與ふと云ども、是みな婦人の仁なり、常に賢士を猜み能者を妬で功ある者は之を害し、戰ひ勝ても人に功を與へず、地を得ても人に利を與へず、是天下を失ふ所以なり。帝宣ひけるは、汝その一を知て未だ其二を知ず、夫籌を帷幄の中に運して、勝ことを千里の外に決することは朕張良に如ず、國家を鎭め百姓を安じ兵粮を運送して、三軍を養ふことは朕蕭何に及ず、百萬の勢を率て、戰へば必ず勝、攻れば必ず取ことは朕韓信に如ず、此三の者は皆人傑なり、朕よく之を用るは是天下を得る所以なり、項羽は一人の范增あれども用ること能ず、忠諫を拒で韓生を烹殺す、是わが爲に擒にせられて天下を失ふ所以なり。群臣地に拜伏し、誠に陛下の言の如

卽て民の心を安んじ玉へ。漢王の宣く、吾きく帝位は賢者に在ずんば有つべからず、空言虚語の人の居べきに有ずと、吾素より才微にして德薄し、安ぞ帝位に昇るべき。群臣みな申けるは、大王細微より起て暴秦を滅し、楚賊を誅して四海を平定し、凡そ功ある者は悉く王侯に封じ玉ふ、今もし帝位に卽玉はずんば、何を以てか信を天下に示し玉はんや。漢王再三辭讓し玉ひしかども、群臣敢て許さず。漢王已ことを得ずして、此こと若國家に利あらば吾安ぞ强て辭すべきと宣しかば、群臣こゝに於て日を占て、二月甲午の日を吉日と定め、鑾駕を整て漢王を迎へければ、漢王汜水の陽に幸して大禮を行ひ、卽位の儀式事了りしかば、詔を作て天下に告玉ふ。

朕惟周宗不レ祀、秦僭二大統一六國兼併、四海紛擾、三世益衰天命乃絕。朕本沛民、賴二上天眷佑祖宗靈庇一資二爾文武之力一克レ秦滅レ楚平二定天下一。群臣議欲レ尊レ朕爲二皇帝一爲二生民主一、乃於二楚漢六年二月甲午一告二祭天地一卽二皇帝位於汜水之陽一定二天下一號曰二大漢一、改二楚漢六年一爲二大漢六年一、是日恭詔二大廟一追二尊四代考妣一爲二太上皇帝一、立二社稷於洛陽一封二呂氏一爲二皇后一、長子劉盈爲二東宮皇太子一、凡秦楚苛刻之刑皆赦除、布二告天下一咸使二聞知一。

文武の百官萬歲を唱へて拜賀の禮了りしかば、乃ち洛陽に社稷を立、呂氏を册て皇后とし、長子劉盈を太子として天下に大赦を行ひ玉ふ。其年の四月に漢帝洛陽の南宮に御座ありて、大に

に釣せし時、漂母に一飯をうけぬ。市にて少者共に辱られて胯を潜りしことを思ひ出し、多の人を出して尋ねしむるに、十日ばかりを經て漂母並に少者共みな來て地に拜伏す。韓信左右に命じて漂母に黄金千兩を賜ひ、吾昔し淮下に釣せし時、汝一飯を與へしかば、我ふかく其志を感じ、後に富貴にならば重く恩を報ぜんと云しに、汝怒て大丈夫の士自ら一飯を得るの助もなし、我憐で食を進む、安ぞ報を望むべきと申せしが、今日汝が心いかんと云ければ、漂母拜謝して出去ぬ。韓信又少者共を召出して中尉の官を授くるに、皆頓首して申けるは、吾さきには愚昧粗鄙にして斯貴く成玉はんとは知ず、誤て無禮を成り、今已に誅を加へ玉はざる時は、大王の仁徳至れり盡せり、吾何の理ありてか此高官を受べけん。韓信色を正し、われ安ぞ小人の所爲に效て恩讐を懷て報復をなし、徳怨に徇て喜怒を成んや、汝必ず辭すること勿れと云ければ、了に恩を謝して出にけり。韓信左右に向て彼等は皆壯士なり、昔し吾を辱めたる時、われ若之を殺さば豈今日あらんや、吾よく之を忍で今已に此の如きに至れるは、是彼等が吾を助けて功を立しむるなり、吾安ぞ之に官祿を與ざらんと云ば、皆感嘆し、是所謂德を以て怨に報るの道、實に等閑の輩の及ぶ所に有ずとぞ申ける。明れば大漢の六年正月に、趙王張耳、楚王韓信以下漢王に朝して奏しけるは、いま天下靜謐にして百姓業を樂む、大王願は早く皇帝の位に

下知を傳て、衆の諸侯は各本部の軍馬を領じて皆分國へ歸べし、其餘の大小文武の將士は洛陽へ赴き皆その功勞の品に因て恩賞を行んと觸玉ひ、又心の中に思ひ玉ふは、韓信齊の七十餘城を保て國大に權重ければ恐くは後に患を成ん、楚國は一隅に偏て荊蠻の地なり、縱ひ數十萬の軍勢ありとも此國に居ては容易く事を圖ること能はじ、況や齊に較るに強弱大小甚だ異なれば、韓信を楚に改封ぜんとて、乃ち召出し安撫して曰、吾將軍の力に因て到る所勝ずと云事なく、了に天下を平定せしかば心中暫も忘ること能ず、然れども只恐らくは將軍功高く威重ければ、小人に猜み妒まれて永くその位を保つこと能はじ、將軍早く元帥の印を還し、楚の地を鎭守して人の心を安じ、全く君臣の義を保て子孫萬世の業を修せよ。韓信これを聞て手足の措どころを知ず、了に元帥の印を解て漢王に還して奏しけるは、大王臣を齊王に封じ玉ひてより年久し、今若改め封じ玉はゞ甚だ宜き所に有ず。漢王嘆じて宣く、將軍誤れり、昔し漢楚相爭て人の心未だ定らず、殊に齊の國は素より反復常ならず、此故に將軍を齊に封じて鎭守せしむ、今天下大に定て四海一家心服せずと云者なし、況や將軍は淮陰の人にして楚は乃ち父母の國なり、其上楚を滅したるは、全く將軍の力なれば旁以て其宜しきに合へり、必ず心を惑すこと勿れ。韓信力及ばず、又齊王の印を解て漢王に還し、楚王の印を帶て了に楚の國に赴きぬ。韓信昔し淮下

へ到り玉ふに、案に違はず城の上に夥く旗を立列ねて緊く四方の門を閉たり。漢の兵四方より圍で數日攻けれども城中さらに弱りたる氣色なく、只琴を彈じて高く歌ふ聲ばかり聞えしかば、漢王少し怒を發し、急に多の鐵砲火箭を用意して一揉に攻落さんと宣ふを、張良諫て申けるは、魯は乃ち周公の後にして素より禮義を重じ、孔子又此國の尼山に生れて萬代帝王の師と成玉へば、天下の人甚だ魯國を尊び仰ぐ、今漢の大軍を見て早く降らざるは、是大王と力を爭んとに非ず、只主の爲に節に死んと欲する者なり、大王唯項王の首を城下に置て大義を示し玉はば彼自ら心服せん、豈勢力を以て勝べけんや。漢王之に從ひ、急に項王の首を城下に出して見せ玉へば、城中の父老之を見て哀み號ぶ聲止ず。漢王士卒に命じて諭さしめ、項王放に義帝を弑して百姓を殘害す、我此故に四方の諸侯を語ひ、義帝の爲に喪を發して素縞の服を披、義兵を擧て天下の爲に殘賊を除て楚すでに亡たり、汝等なんぞ早々に降らざる、是天の意に逆て大義を知らざるなり、甚だ聖人の敎に愧ること有と呼らせ玉へば、父老是を聞て了に城を開て降參す。漢王城中に入て百姓を安撫し、項王の首を屍と共に取收め、魯公の位を以て穀城の東十五里に葬り廟を立て四時の祭を行しめ玉ふ。角て天下こと〴〵く平定して、率土の濱も王の有にあらずと云こと無りしかば、齊王韓信大小の諸侯文武の將士と同く賀を述て暇を乞ければ、漢王次の日

通俗漢楚軍談　卷之十三

○漢王即二帝位一封二功臣一

項羽烏江に亡て、天下大に定りしが、只山東の魯國いまだ賓服せざりけれども、漢王更に事ともせず、魯は元より小國なり、安ぞ歯に掛るに足んとて、兵を收め歸て、都を河南に建んと議し玉ひけるを、張良止めて申けるは、魯國小きなりと云ども、若この儘にて捨置玉はゞ、是後の患を貯るなり、久からずして必ず干戈を起ん、大王その時いかに悔玉ふとも晩かるべし。漢王大に驚て宣く、料るに一の魯國何とて此の如きの利害あるや。張良答て曰、魯は素より禮義の國、昔し懐王項羽を封じて魯公とせられしかば、乃ち項羽が根本の地なり、大王もし棄置玉はゞ、此國の人項王の爲に讐を報ぜんとて義兵を起し、東吳の豪傑を語て荊楚を下し湖襄を占ば、大王あに容易く平定し玉ふことを得んや、況や項王昔會稽に兵を起せし時、甚だ東吳の人の心を得たり、魯人若一たび起らば吳人決然として之に應ぜん、然時は由々しき大事なり。漢王乃ち悟て宣ひけるは、若先生の敎に冇ずんば殆ど大事を誤んとて、了に兵を牽て直に山東

陣へ來りしかども、之を奏するに暇なかりき、此人は元臣が故人、其上昔し鴻門の會にて大王虎口を逃れ玉ひしは全く此人の力なり、願は麾下に用て官祿を與玉へ。漢王乃ち召見え、先生しきりに大功あり、況や已に婚姻を約して一家の好あれば、我遍く尋ね求んと思しに、幸に捨ずして自ら來り見らる、深く朕が意に合へりとて、卽時に射陽侯に封じ姓を劉氏と賜ければ、項伯再拜して恩を謝す。淺猿や項伯久く項王の臣として殊に同宗の至親なるに、楚の爲に節に死すること能ず、甘心して漢の封爵を受のみか、剰へ姓を劉氏と改て恬然として人間に恥辱のあることを知ざるは、誠に財を貪り生を偸の小人なり、結句周蘭、桓楚は同宗の至親にもあらず、又項王の恩德常に項伯が半にも及ざるだに、亂軍の中にて主の爲に討死せしに較ば、豈彼此を論ぜんや、安ぞ年を同して語るべきと、聞人ごとに誹ぬ者こそなかりけり。

月、年三十一歳なり。呂馬通は項王の首を取て歸んとする處に、楊喜、楊武、王翳、呂勝も續で來りしかば、共に兵を收め退て漢王に奏しければ、漢王乃ち項王の首を見玉ふに、面目平生に易ず尙生るが如なりしかば、泪を流して宣けるは、我昔し大王と兄弟の義を約せしが、その後互に天下を爭て了に仇と相成り、然れども大王さきに太公呂后を捕玉ひしかども、三年の間敢て分毫も犯玉はず、是古の烈丈夫の爲ところ誠に我及ざる所なり、意ざるに大王いま薨じ玉ひて吾甚だ惜に堪ずとて聲を放て哭玉へば、滿座の諸人も覺ず哀を催して袖を濡ぬはなかりけり。角て西楚の地全く定りしかば、漢王了に呂馬通を中水侯に封じ、王翳を杜衍侯、楊喜を赤泉侯、楊武を吳防侯、呂勝を涅陽侯に封じて皆重く恩賞を與へ、烏江に項王の廟を立、有司に命じて四時の祭禮惰らせ玉はずとかや。其のち宋の紹興年中に金主亮と云人、烏江を通り項王の廟に詣て事を祈しが更に其驗なかりしかば、金主怒て其廟を燒拂んとせしに、俄に山岳鳴動して祠の中より大蛇現れ出、林木震ひ動て其ひゞき恰も百萬の甲兵の一度に喊を造が如なりければ、金主大に驚き怕て、了に燒拂ふ沙汰を止たりと云傳ける。扨又項伯は楚の陣を逃れ出、張良が許へ行て賴けるに、其折節は日夜合戰の止時なかりし故、張良之を奏するに暇なく吾陣中に留め置しが、今項王已に亡て少し閑なりしかば、漢王に見て奏しけるは、適に楚の將士沒落の時、項伯臣が

悶ふし、泪に咽で言こと能ず、諸人共に轡を執て漸々舟に引乘ければ、亭の長棹を取て舟を押出すに、烏騅尚も別を惜み、人影の見る程は此方をのみ詠しが、已に二町ばかり推出しける時、苦げに續て數聲永く嘶き、只一跳に大江の中へ飛入しは誠に哀と云も愚なり。亭の長はあきれ果夢の覺たる心地して、暫時波間を詠め居たりしかども、力及ず了に舟を盪てぞ去にける。

項王は烏騅が水に入て死だるを見て、彌痛く悲み居ける處に、漢の兵はや稻麻竹葦の如く追來しかば、乃ち二十六人の兵と徒歩立になり、各短刀を持て命を限と左に當り右に突、かけ入ては首を取引回しては薙倒し、矢庭に又數百人を討取しが、其身已に十餘箇所の手を負ければ、今は叶じ是までなりと思ひ定て後を顧れば、漢の大將呂馬通戟を擧て向ひ來る。項王聲を擧て、汝は吾故人にあらずやと云に、其聲恰も石山の崩れ鳴神の落かゝるが如なれば、呂馬通馬の上に畏すくんで動ことを得ず、首を仰で正く視こと能ず、震ひ聲にて申けるは、臣は誠に大王の故人なり、大王何事を付囑せんとか欲し玉ふ。項王の曰、我きく、漢王三軍に觸て若項羽が首を取得たる者には、千金を與て萬戸侯に封ぜんと云しとかや、我もと汝と故舊の好あれば今この首を汝に與るぞ、早く漢王に上て萬戸侯に封ぜられ、千金の恩賞を受よと云あへず、了に劒を拔て自ら刎て失にけり。項王秦の始皇帝の十五年己巳の年に生て、此とき大漢の五年己亥冬十二

すとも我何の面目ありてか之に見ん、彼或は言ずとも我安ぞ獨り心に愧ざるべき。亭の長おし囘して申けるは、陛下甚だ悞れり、夫勝負は兵家の常の習、漢王昔し睢水に陛下と戰て大に敗れ、三十餘萬の兵を失て睢水の大河も屍にせかれて流ざりしとかや、去ども漢王志を墜ず、只一人山を越水を渡り或は古井の中へ隱なんどして命を扶かり、了に此の如く盛なるに至れり、今日陛下の敗軍も尙昔し漢王の睢水に破し時の如し、少き忍で計を運玉はゞ大業再び圖つべし、如何なれば區々として角機量の狹ことを宣ぞ、去ば古より圖二大事一者不レ矜二細行一と云り、漢の兵早追來ん、陛下たゞ速に渡玉へ。項王さらに聞入ず、御邊の言好と云ども我心甚だ之を愧、もし漢の兵追來らば只早々に首を渡んのみと云ければ、亭の長なほ捨去に忍ず嘆息して立居たり。項王は亭の長の久く去ざるを見て、心の中いとやさしく覺ければ、乃ち近く呼で、我深く御邊の志を感ずと云ども今報ずるに由なし、此馬は烏騅とて一日に千里を蒐る駿足なり、我年久く之に乘て數百度の戰場へ出たるに向ふ所敵なし、今こゝに捨おかば恐は漢王に得られん、然れども又殺に忍ず、幸に御邊に送て今日の德に報ぜんと云ば、亭の長拜謝して引去んとするに、此馬畜類とは申せども流石に主の名殘や惜かりけん、頻に首を囘し項王の顏をつくゞゝと見て踊り嘶き、戀々として進ざりけるを項王一目見て、あつと一聲叫で地の上に

十八騎の兵約を違ず三處に磐て待居たり。軈て其中へ交り入て立けるに、漢の大勢又三手に分て來り圍む。項王ちつとも跟ず槍を擧て三方の敵に渡あひ、矢庭に漢の大將李佑、都尉王恆二人を馬より斬落し、竝に士卒數百人を討取けるが、楚の兵は只二人ばかりぞ討れにけり。呂勝、楊武これを見て甚だ怒り、項王箇樣に成果ても尙わが兵を討取か、何とて左程には驍勇なるぞとて、二人刀を舞して斬て蒐しが未だ十合にも及ざるに了に叶ずして敗走す。項王一日に漢の大軍と九たび戰て大將九人士卒千餘人を討取しかども、其身は更に一手の疵をも被ず。左右に向て如何に我向に申せし言相違せりやと問に、士卒みな拜伏し、陛下さきに三たび戰て一人の大將を斬んと宣しが、今日九度戰て九人の大將千餘人の兵を斬玉ふは、兎角申すに言なし、陛下は眞に天神なりと云ければ、項王打笑ひ馬を飛して烏江の北の岸に到しに、烏江の亭の長一艘の舟を用意して相まち、項王に向て申けるは、江東は小なりと云ども地方千里あり、陛下彼に至て勢を集玉はゞ尙數十萬に及ん、早々に御渡ありて必ず大事を誤玉ふな、況や此處に臣が此舟より外には一艘もなし、漢の兵たとひ追來るとも爭か江を渡ことを得ん。項王長嘆して曰、天すでに我を亡せり、縱ひ江を渡とも了に免こと能じ、殊さらわれ昔し江東の子弟八千人を率る來りしが、今一人もなくなりぬれば、江東の父老深く我を恨ん、縱ひ若恨ずして憐で王と

て近付んとする者一人もなかりしかば、直に五十里走て烏江と云所まで到り、馬を勒して四方を望に、漢の兵重々疊々として野に滿山に漫れり。項王心に思けるは、我たとひ翼ありとも容易く此圍を出ること能じ、況や昨夜の夢も只事ならず覺れば、運命すでに盡たり決して逃べからずとて士卒に向て申けるは、我兵を起してより八箇年の間數百度の合戰に凡そ當る所の者は破れ撃ところの者は悉く服して、未だ一度も敗北せず、了に天下に覇王たりしが、今此の如くに困らるゝは是我勇力なきにあらず、天の我を亡せるなり、今日われ死戰を決せん、若三たび戰て之に勝ば、汝等明に天の我を亡して其勇なきにあらざる事を知べしとて、僅に二十八騎を四手に分て討て向ば、漢の兵鼓躁して攻圍こと益急なり。項王又士卒に向て、我いま敵の大將一人を斬て路を開ん、汝等早く東山の下に到り三處に分て我を待、必ず違こと勿れと云ば、士卒聲を揃て、願は陛下の命に從んと云。項王此に於て咄と喚て蒐入、忽ち一人の大將を斬て落ければ、漢の大軍恰も風の雲を捲に異ならず、四方へ颰と亂ちる。楊喜は適に項王の鞭に打れしが、此とき瘡已に愈たりしかば、其恨を報ぜんとて馬を跡せて路を横ぎる。項王之を見て眼を瞋し大に一聲叱ければ、楊喜戰んとする迄もなく大に怕れ慄て、持たる戟を地に落し乘たる馬も驚き馳て五十歩ばかりしざりしかば、了に跡をも見ずして逃走る。項王直に東山の下に到れば、二

は乃ち西楚の境内、われ等は皆陛下の民なり、今幸に一飯を獻るとも安ぞ償を求んとて、米一石を出して飯に炊ぎ、野菜を採て羹として之を進ければ、項王限なく喜び、士卒と共に分ち服して其夜は院中に宿しけり。

〇項羽烏江自刎

項王は老人の情に因て飢を救ひ、古院の中に鎧を枕として臥たりしに、漸く夜半の比に至て忽ち一輪の紅日大江の面に浮び出たるを、漢王五色の雲に乗て馳來り、彼日輪を懐の中に抱て去んとす。項王これを見て急に衣を褰て水を渡り、追付て日輪を奪ひ取んとするを、漢王雲の中より一足に蹴落し、了に日輪を抱て西方へ飛去しが、其跡に祥光隱々として異香紛々たり。項王忽然として打驚たるに、一場の夢なりしかば大に嘆息し、天命有ㇾ在不ㇾ可ㇾ强と云ける。其言未だ了ざるに俄に鼓角の響天に動て喊の聲地に振ふ。項王甚だ驚き、物具取て肩に打かけ馬に跨り槍を提て林の中を殺出するに、夜も朗々と明て四方八面漢の兵雲の如く、一人の大將眞先に馬を跳せ、我は漢の大將灌嬰なり、楚賊速に首を渡せと呼る。項王怒て戰を交れば、又後より楊武、呂勝、柴武、靳歙ぬき連て勇み來る。項王戰を好ず、彌怒て眞一文字に蒐通けるに、敢

の前に到れば、忽ち潺々たる水の聲あり。軈て馬に飲んとて尋行ば、一溪の清水細く流て怪岩奇石磊々たり。項王帶たる刀を拔一人の士卒を呼で、あれなる石にて之を磨と云に、彼士卒十分飢疲て刀を揚こと能ざりしかば、軈て馬より飛で下、自ら刀を磨んとて、數多の石を推倒しければ、石の下より清水わき出て、忽ち大なる泉となる。此處は興教院とて、烏江を離こと七十五里、今に至て大なる林の中に、項王の飲馬泉卓刀泉の古跡ありとぞ承る。項王馬に飲ひ了て院の前に到り、兩廊の邊を伺ども人ひとりも見ざりしかば、院の後へ廻て見に數多の老人爐を圍で坐し居たり。士卒内に入て此院内何とて人少やと問に、老人答て申けるは、元この院を守る人二十人ありしが、近年漢楚の亂起てより悉く逃散たり、去間互の人々この院の破却せんことを悲み、我等が如く年老て無用の人を置て守しむ、方々は何の人なれば夜中に此所へ來れるぞ。士卒申けるは、今西楚の霸王漢の兵に追れ夜中に路を失て此に來り玉へり、願は院内へ迎へ入て一夜を明させ、又は一飯を進せられよ。老人之を聞て急に走り出て地に拜伏して、山野の愚民陛下の臨幸を知ず、甚だ禮を失へり、願は罪を宥玉へとて迎へ入ければ、項王乃ち院中に入て、汝等米あらば飯に炊で我に與よ、我江東へ到らば汝が一石を百石にて償んと云に、其中一人の老人素より書を讀で道を知たりけるが進み出て申けるは、陛下は是西楚の君、この地

なり果玉へり、縦ひ江東へ到り玉ふとも、決して大事を成こと能じ、吾漢に仕て重く用らる、今主の命を受て大王に追付たれども、昔の好を思ふてあへなく殺に忍ず、早く甲を脱で漢王に降り永く王爵の貴を失玉ふな。項王甚だ怒り槍を舉て直に突て蒐り、二十餘合戰て槍を左の脇にかい挾み、右の手に鐵の鞭を振あげて、楊喜が眞甲を微塵に打碎んとするを、楊喜急に身を側めて之を避けるが、左の臂をしたゝか打れて馬より倒にどうと落。項王又槍を引て之を突んとするに、早楊武、王翼、呂勝、呂馬通、一齊に競ひ來り、楊喜を救て項王と火を散して戰ふ處に、又英布、彭越、王陵、周勃後より群り來り挾で之を討、項王大に力弱り兵僅に二十八騎に討成れしかば、急に馬を打て東に向て走るに、此所樹木叢々と生茂て路もなき山中をそことも知ず分迷ければ、身體甚だ飢疲て日も早西に沈めり。時に左右の人申けるは、陛下數日遠路を馳玉ひぬれば、定て飢疲玉ふらん、臣等も萬死一生の軍をして未だ一飯をも得ず、馬も久く水草を與ざれば、皆物の用に立がたし、此處樹木叢雜にして山深く路なければ、漢の兵俄には來まじ、陛下この亙の民家に入て、今宵は休息し玉ひ、夜あけば又路を尋て走り玉へ、若夜中に奔走して悞て溪澤の中へ落入ば、人馬いよ〱疲れ苦で如何ともすべからず。項王これに從ひ、徐々と歩で林の中を望に、幽に燈の光見たりしかば、之を指南に分入けるに、一の古き院あり。項王進で門

を望で走りけるに、岸に小舟一艘ありけるを、是こそ究竟の事よとて、皆これに取乘て事なく向の岸に上り、又五六里馳て陰陵と云所へ至て、忽ち路に蹈迷ひ四方を望に、皆これ細き谷路なれば、如何はせんと胡亂堪まはる處に、俄に四方より金鼓を鳴して喊の聲天に震ふ。項王膽魂も身に沿ず、互を顧に一人の農夫路の傍に立居たりしかば、江東へは何の路よりか行べきぞと問に、農夫心の中に此人錦の袍金の甲を被たれば、尋常の人にあらじ、必ず楚の項王ならん、久く彭城に都して專ら殺伐を行ひ百姓を殘害して曾て仁德を施ず、我もし之を救て正しき路を指教ば、却て天の尤もや有んと思ひて沈吟して答ず。項王頻に問て曰、汝必ず畏こと勿れ、我は西楚の霸王なり、今漢の兵に手滋く追れて江東へ逃行んと欲るに路を知ず、汝速に敎よ。農夫乃ち佯て曰、江東へは左の路より進玉へ。項王敎に任せ、左の路を一里ばかり馳けるが、誤て大なる澤の中へ陷入、泥土甚だ深して出ること能ず。項王急に鞭を加に烏錐流石の名馬にて、了に只一踊に立あがりしかば、息をも繼ず走り行に、向より楊喜一手の勢を率して路を横ぎる。項王馬を止て申けるは、吾いま大澤の中へ陷入て漸に立出、力弱り馬疲て戰こと能ず、汝昔日數年の間我に仕たり、願は昔の好を思ひ同く江東へ來て再び軍馬を整ば、他日萬戸侯に封じて共に富貴を享ん。楊喜が曰、大王賢士を侮て忠諫を聽ず、大逆無道にして了に角

ざるを見て、作て申けるは、願は君の寶劍を借玉へ、妾之を帶て假に男の形に出立君の跡に從行ん。項王これに欺れ、了に腰なる劍を拔て虞氏に與へ、然らば我跡より來れとて、馬に打乘て出んとすれば、虞氏手に劍を握り跡より呼で、妾君の大恩を受て未だ萬一も之を報ぜず、今より必ず妾を以て心に掛玉ふな、是までなりと云も果ず、了に首を刎て死だりければ、項王之を見に目もくれ心も消果て、鎧の袖を顏に當、さめ〴〵と泣沈で已に馬より落んとす。周蘭急に抱き止め、陛下たゞ天下を以て重とし玉ふべし、何の左程に悲玉ふぞと諫しかば、項王泣々八百餘騎を二手に分て、自ら先手に進み圍を突て出んとするに、漢の大將灌嬰本部の軍馬を引て路を遮る。項王馬を踊せ槍を撚て十餘合戰しが、灌嬰叶ずして逃走り、急に中軍へ馳歸て漢王韓信に報じ大軍を以て追蒐しむ。項王は敢て灌嬰を追ず、只圍を開て逃んとするに、樊噲山の上より之を見て急ぎ合圖の旌を動せば、漢の兵八面より討て出、大將曹參、副將劉賈、王遂、周從、李封四人を率て斬て廻に、周蘭、桓楚が後陣に備て走に出合、おつ取込て露塵ばかりも餘じと揉だりしかば、楚の兵今は只二十餘人に成にけり。周蘭、桓楚天を仰で長嘆し、我力こゝに至て支こと能ず、空く敵の手に掛て死んよりはとて、二人共に腹かき切て失ければ、二十餘人の兵は忽ち漢の勢に討れてけり。項王は這々圍を切ぬけ、此時なほ百餘騎の兵ありしかば、急に淮河

ふぞとて、項王の甲の袖にすがり付、絶入ばかりに悲ければ、項王さしもの勇夫なれども、心亂て爲方もなく、自ら盃を執て虞氏と數盃を傾け、一首の歌を造て曰、

力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈レ若何。

項王歌ひ了て、又數盃を飲ければ、虞氏は餘の思に堪かねて、又一首の歌を造て和して曰、

漢兵已略レ地、四方楚歌聲、大王意氣盡、賤妾何聊レ生。

項王は虞氏と共に歌ては泣、泣ては歌ひ、尙も別に忍ず、覺えず時刻を移して已に五更の鼓も鳴しかば、周蘭、桓楚帳外より聲を揚て曰、いま夜すでに明んとす、陛下急々に打立玉へ。項王泣て又虞氏に向ひ、我は敵の亂れ入ぬ先に何方へも逃ゆくぞ、汝たゞ能命を全せよ、我もし運命未だ盡ずんば、再廻り逢べきぞと云に、虞氏泪に咽で申けるは、君いま此處を去玉はば妾を何にか置玉ふぞ。項王の曰、汝元より容色世に勝たれば、劉邦決して殺まじ、少も之を患こと勿れ。虞氏今はいよ〱堪かねて、妾願は君に從て此圍もし出べくんば、何地までも伴ゆき、若出ること能ずんば早く自害して死ん、縱ひ骸は空しくなるとも魂魄は君に從て江を渡り、再び故郷へ歸べし。項王申けるは、是固く無用なり、今亂軍の中戈戟地に滿て驍勇の者だにも容易く進こと能ず、增てや汝女性の身として爭か此を逃ることを得ん。虞氏項王の從

面に楚歌を歌ふ聲洋々として耳に喧かりしかば、忽ち目を醒し陣中の體を望み見て大に驚き、漢已に楚を得たるか、是何ぞ楚人の多きやと云ければ、周蘭、桓楚悲み泣て申けるは、韓信計を用て山上に簫を吹ければ、御方の諸軍頻に悲を生じ、季布、鍾離昧等を始として八千の子弟も抜々に皆逃うせ、今大將は臣たゞ二人、士卒は僅に八百餘人殘り留れり、陛下たゞ急々に此所を落玉へ、然らずんば漢の兵虚に乘て亂れ入ん、陛下兵微に大將寡して何を以てか防玉ふことを得ん。項王これを聞て泪泉の涌が如く、帳中へ蒐入て天を仰で長嘆し、上天われを亡せりやと云ば、滿座の上下一同に泪を流して泣叫ぶ聲止ざりしかば、虞氏急に走り來り、陛下何事ありてか頻に悲玉ふと問に、項王泪を抑て申けるは、今わが將士悉く逃失て漢の兵せめ圍むこと甚だ急なり、我いま汝と別て何方へも落行んと思へども、心中碎るが如にして展轉反側の情遽に捨去に忍ず、思ふに我汝と相馴て數年の間、千軍萬馬の中だにも朝夕相伴て暫も離こと無りしに、今長き別となることは如何なる運の極ぞやと、又地の上に倒ふし聲を放て泣號ぶ。虞氏は此由を聞よりも兎角の返答にも及ず、堪ぬ思に臥沈み、良ありて申けるは、妾いく年か君につき傍奉て深く恩愛を受たれば暫も忘ことなく、縱ひ虎ふす野邊鯨よる浦なりとも、伴ひ行て死ば一處に死べしと常々心に思しに、今いかなれば情なく此に捨おき去んとは宣

王に見え一家の好を結で王侯に封ぜられれば、宗廟の祭も絶ず楚家の後を失ざるなりとて、直に漢の陣へ尋ゆく。周蘭、桓楚は此由を見て二人相議しけるは、我等久く項王知遇の恩を蒙たれば、縱ひ如何なる目に逢とも捨去べからず、今にげ去もの共は皆これ利を貪り死を怕の輩にして犬豕にだも及ず、豈歯に掛に足んや、今陣中に逃残たる兵八百餘人あれば、我等之を領じて固く中軍を守り項王の睡さめば、共に何方へも落行て、再び舊業を恢復せん、天もし楚を祚せずして項王難に遇玉はゞ、我等も同じ枕に討死し、生ては君臣一處に相集り、死しても又魂魄暫も離べからず、是こそ大丈夫の所爲と云べけれとて、廣き陣中に只二人八百餘人の士卒を率て帳下にすご／＼と立居たり。韓信は兼てより角あるべしと思ければ、張良が未だ簫を吹了ざる内より、灌嬰に命じて諸軍に令を傳へ、今宵楚の大將士卒に限ず、若圍を破て逃去ものあらば、悉く之を許して必ず遮り止ること勿れと云ける故、季布、鍾離昧を始として皆無事に圍を出去にけり。

○項羽悲歌別二虞氏一

項王は諸軍勢没落の事を夢にも知ず、尚中軍に休み居けるが、早漢の兵間近く來れりと覺て四

命を救ん爲に神仙を下し、此洞簫に托して告玉ふならん、我等たとひ飢を忍び寒氣を凌で空陣を守るとも、若漢の兵一たび攻入ば皆忽ち死果て再び父母妻子の面を見こと能ず、又は上天の意にも逆なり、不如今宵月の明なるに乘じて早々に逃去ん、若又漢の兵に捉られば乃ち天の教に任せ漢王に見て哀み告ん、料に漢王は仁德深き君なれば必ず我等を害し玉はじ、豈空く此に餓死するに勝ずやとて、諸人商議極りしかば、面々卽時に行李の營をなし、了に項王の命に從ず拔々に逃れ出て、半時ばかりに八千の子弟すでに十が八九は落失たり。諸大將急に中軍に入て告んとするに、此とき三更の時刻にして項王は虞氏と熟く寢入て、頻に呼ども應ざりしかば、皆退て相議して曰、いま諸軍勢ことごとく散失て殘る所は只我等十餘人のみなり、此時若漢の兵虛に乘て四方より込入ば項王忽ち擒にせられん、我等も命を保こと能じ、不如いま諸軍の中に紛て逃去ば、猶命を全する事を得べし、然る時は再び計を運して項王の爲に仇を報ぜん、若又この所に在て項王と一所に討死せば、生て國家に益なく死しても又草木と同く朽果ん、是愚の甚しきにあらずや。季布、鍾離味これに同じ、諸君の言甚だ好、さらば片時も早く打立んとて取物も取あへず、我先にと諸軍の中に紛れ入て皆行方知ず失たりしが、項伯は心の中に、われ昔し鴻雁川にて張良が一死を救ひ、又漢王と婚姻を約して深き因緣あれば、今張良を賴で漢

兮衰草濛梁、魂魄悠々兮罔レ知レ所レ倚、壯志寥々兮付ニ之荒唐一、當ニ此永夜一兮追思退省、急早散レ楚兮免レ死ニ殊方一、我歌豈誕兮天遣レ告レ爾、爾其知レ命兮勿レ謂渺茫、漢王有レ德兮降軍不レ殺、哀告ニ歸情一兮放レ爾翺翔、勿レ守ニ空營一兮糧道已絕、指レ日擒レ羽兮玉石俱傷、楚之聲散ニ楚卒一、我能吹時協ニ六律一、我非レ胥兮品ニ丹陽一、我非レ鄒兮歌ニ燕室一、仙音徹時通ニ九天一、秋風起兮楚亡日、楚既亡兮爾焉歸、時不レ待兮如ニ電疾一、歌兮歌兮三百字、字々句々有ニ深意一、勸レ爾莫レ作ニ等閑看一、入レ耳關レ心熟當レ記。

張良兼てより數百人に此歌を教へ、此彼に亂れ散て聲々に歌せ、自ら簫を吹て雞鳴山より九里山を上り下て數十返奏しけるが、其響淸和にして甚だ悲く怨が如く訴が如く、一曲は高く一曲は下く一聲は長く一聲は短して五音亂ず、六律よく和で露の梧桐に落が如く、風の玎玲を送が如く、鶴の九皐に唳が如く、漏の銅壺に滴が如くなれば、之を聞人不覺の涙を抑かね、鐵石の肝腸も之が爲に摧け、雄烈の武夫も爭で心を動さゞらん。殊に今宵は月冷く風も身に入折なるに、其聲凄涼としていとゞ悲かりしかば、楚の陣中大將も士卒も之を聞に心亂れ、落る泪は雨の如く頻に故郷の方を詠やり、地の上に倒れ臥て口々に申けるは、是必ず上天我等を憐で

領じて自ら先手に進み玉へ、臣等は本部の人馬を率る虞后を守護して後陣に備ん。項王これに從ひ、然らばわれ明日自ら先陣に進で圍を開ん、汝等は後陣を督して跡に續けとて、諸軍に觸て預め用意を成しむ。諸軍勢これを聞て共に相議して申けるは、我等久く從軍して故郷の消息をも聞ず、今秋も早暮に及で漸く寒冷なるに、衣服は破れ綻て縫補ふことを得ず、況や此程は糧つきて飢を救ふことだに叶ねば、爭か漢の雄兵を破ることを得んと云て、已に其日も暮果て颯々たる秋風に木の葉の落る音寥々と聞ければ、諸軍勢これに哀を催され、いとゞさへ旅は物うき習なるに、此間は皆飢疲て、夜は山路の露を片しき、晝は雲居に首を回して故郷戀しき折からなれば、物すごき秋の夕を送かね、此に五人彼に三人集て、互に心のうさを物語して漸く初更の頃に及けるに、忽ち遙の山の上に簫を吹て、一曲の悲歌を奏する聲風に隨て聞しかば、諸人心を鎭て之を聞に、其歌に曰、

九月深秋兮四野飛霜、天高水涸兮寒雁悲愴。最苦戍邊兮日夜疆場、披堅執鋭兮骨立沙岡、離家十年兮父母生別、妻子何堪兮獨宿閨房、故山腴田兮孰與之守、鄰家酒熟兮誰與之嘗、白髮倚門兮望穿秋水、稺子啼飢兮泪斷肝腸、胡馬嘶風兮尙知戀土、人生客久兮寧忘故鄉、一旦交兵兮蹈刃而死、骨肉爲泥

悠々たる餘韻耿々たる悲聲、たれ人か之を聞に忍ん、楚の將士之を聞ば心中頻に悲を生じて元帥の弓を張、矢を放ことを用ず自ら散亂せん。韓信地に拜伏し、先生この妙藝あり、弄玉蕭史も及ざる所なりと云ければ、張良よく〳〵約を定て我陣に歸けり。此に因て韓信次の日は兵を按て戰を交ず。四方に夥く戰車を設け、軍兵を手配して緊く備をなし、蕭何を催促して兵粮を運送せしめ、又樊噲に向て汝は山の頂に上て鑼を鳴し鼓を打て疑兵をなせ、灌嬰は楚の陣の左右に伏て、項王もし戰車を破て逃去んとせば、急に齊く出て力を奮て討止よと云ければ、皆命に從て出去ぬ。項王は聖女山の下に陣を取て已に三日を過ける處に、季布、項伯來り見て奏しけるは、今日陣中粮つきて馬に食べき秣もなければ、三軍密に恨を含む者多し、今敵もし計を用て其心を惑ば必ず亂を生ぜん、事すでに急なり、陛下早く臣等と八千の子弟その外の諸軍を統て如何にもして此所を逃れ、荊州襄陽或は又江東へ到て鋭氣を養玉へ。項王之を聞て大に力を失ひ、軍中すでに粮なくんば安ぞ暫も支ことを得ん、然れども何方へも逃去んと思ふに、漢の大軍四方を取圍みたれば、是も容易く出がたし、我これを如何せんと云ば、季布申けるは、臣八千の子弟を見に一向ら陛下の爲に鋒を使して敵にむかひ、意氣甚だ盛にして到る處勝ずと云ことなく、漢の兵之を見ては皆震ひ怕れて敢て鋒を交る者一人もなし、陛下これを

生を招て教を求む、願は一言を惜ず某が惑を開玉へ。張良が曰、これ何の難ことか有ん、只楚の諸將の心を懈しめ八千の子弟を分散せしめば、項王一人の力安ぞ久しく持ことを得ん、必ず十日の內には擒と成て天下自然に定ん。韓信手を打て申けるは、奇なる哉奇なる哉、某も向に李左車と此事を議したりしが、只此計を行べき人なし、先生必ず深き慮あらん、如何してか楚の將士を離散せしむべき、願は早く之を教よ。張良乃ち二人が前に近く居寄て密に申けるは、我少かりし時下邳と云處に遊で一人の異人に逢けるが、此人よく洞簫を吹、その聲悠揚として呂律哀切なり、我終日共に酒を飲で簫を習ければ、一月ばかりを經て了に其妙を學び得たり、異人常に語けるは、此簫は乃ち古樂にして源黃帝より始れり、竹を截て筒として長一尺五寸、五行幷に十幹十二支を按じ、八音克諧て以て天地を和ぐ、乃ち中呂の氣なり、其後大舜簫を改め造て、其形少し變れり、曾て秦女弄玉、仙人蕭史と云人簫を吹て、二人共に名譽を得たり、常に此簫を吹ば鳳凰來儀し孔雀白鶴階の前に來り舞、されば又よく人の心を感激して、心に樂ある人之を聞ては彌樂み、憂深き人之を聞ては益悲を增、關外の旅人は轉た望鄉の淚を濺ぎ、深閨の孤婦はいとゞ遠塞の征夫を思ふ、今秋の末に當て金風始て動き、草木黃み落て旅人故鄉を思て情思尤も切なるの時なり、某夜ふけ人鎭て後雞鳴山に上り、此洞簫を吹て一曲を歌ば

自然に騷亂せん、縱ひ逃去んと欲すとも、彼戰車に支られて出んとするも叶ず、守んとするも糧なくんば安ぞ亡ざることを得ん、是古の所謂る内無二糧草一外無二救兵一なり、若たゞ此と力を爭んとせば、徒に軍馬を傷て甚だ良策にあらじ。李左車が曰、項王まことに英雄なりと云ども是匹夫の勇なり、只御方の患とする者は季布、周蘭、鍾離眛等と八千の子弟となり、此者ども常に心を同し力を合せて項王を扶く、元帥いかにもして妙策を用ひ諸將の心を懈しめて八千の子弟を離散せしめば、項王たとひ天に上り地に入程の神通ありとも、一人の力豈よく守ることを得んや、然ずんば彼たとひ兵糧なくとも、尙始の如く諸將八千の子弟と心を合せ力を奮ば御方了に破こと能じ、加之ず項王もしこの所を逃て江東へ到り、再び軍馬を整て銳氣を養ば、いよいよ容易く平定し難からん、元帥たゞ此時に乘て彼計を用ひ、一戰に楚を亡して大事を定玉へ。韓信が曰、先生の言極て好と云ども我この計を施べき方便なし、張良は素より智深して機變尤も多し、今この所へ招て商議せん、彼必ず奇計あらんと、急に陸賈を遣して招けるに、暫ありて張良馬に跨て出來る。韓信李左車迎へ入て申けるは、某この間樣々に計を運せども、項王甚だ驍勇なるに、手下の諸將季布、鍾離眛等八千の子弟と心力を合せて防ぎ戰へば中々破ること能ず、只恐は項王もし此圍を破て江東へ逃去ば彌急に亡し難からん、此故に夜ふけて先

帳中に坐し、虞子期に命じ虞氏を迎へしむれば、虞氏乃ち車より下て帳中へ入來る。項王申けるは、汝今日漢の兵の夥きを見て心中さこそ畏からん。虞氏答て曰、妾陛下の天威に依、又は諸將の力を以て了に畏き目に逢ず、只陛下は終日漢の大將六十餘人と戰て定て御身疲玉はん。項王打笑ひ、いやとよ、我昔趙を救し時、章邯と九たび戰て數日食に飽ことを得ざりしかども、猶疲ことなかりき、今日の軍の如きは安ぞ勞とするに足んと云ければ、滿座の人々駭然たらずと云ものなし。時に周蘭すゝみ出て申けるは、陛下今日若干の敵を討玉ふと云ども、漢の兵なほ勢盛なり、恐は夜討すること有ん、陛下心を忽にせず預め能陣々の備を成玉へ。項王げにもとて卽時に諸軍に下知して陣の四方を固く守せ、八千の子弟は中軍の左右に在て我を守護せよとて、其身は帳中に入て虞氏と終夜ら酒宴をなす。

○張良吹レ簫散二楚兵一

韓信は九里山に大軍を伏て十面より攻圍けれども、項王の勇力甚だ壯にして生どり得ざりしかば、急に李左車を召て相議しけるは、項王の英雄萬夫も當がたし、我明日は合戰をせず、只九里山の四面に多の戰車を以て取圍み、遍く旗幟を立大軍を伏て相待ば、一日の內に楚の陣兵粮盡て

に、先手より報じて敵はや彭城を奪とり、櫓の上に夥く紅の旗を立列て、緊く鎧たる兵四方の門を固たりと申す。項王之を聞て急に甲の緒をしめ腹巻取て引しめ、其勢烈風の如く、鷄鳴山を望で九里山へ蒐向に、忽ち山の頂に一聲の鐵砲響て大なる旗を動す程こそあれ、四方八面より漢の伏勢一度に起り、西北より王陵、北より盧綰、東北より曹參、東より英布、東南より彭越、南より周勃、西南より張耳、西より臧荼おつ取圍で殺氣天に沖り金鼓地に振ふ。項王大に怒て、左に突右に當り一上一下一往一來、龍の大海に躍り虎の山岳を走が如く八人の大將に渡り合、時移まで戰て了に悉く追散せば、又薄昭、孫可懷、高起、張倉、戚思鋒を雙て討て蒐る。項王少しも怕る氣色なく、戰ひ二十餘合にして忽ち孫可懷を一槍に突落を、戚思急に馳寄て救んとせしが、項王の乘たる烏騅に蹈倒されて二人了に同じ枕に死だりけり。薄昭、高起、張倉は之を見て甚だ震ひ怕れ行方なく逃失しが、又聖女山の東の谷際より陳稀、傅寬、柴武、吳芮生手を率て進み來り、暫が程せめ戰けるが、未だ十合にも及ず是も叶ずして了に悉く逃去ぬ。項王一日の間に漢の名將六十餘人と戰しに一度も槍を地に點ぜず、乘たる馬了に倒に退ず。手下の諸將を顧て、我いかに力弱たるかと問ば、皆地上に拜伏して曰、陛下は誠に天神なり、今日の御擧動只今例少く覺え候ふ、今已に暮に及で候へば此所に陣を取て休み玉へ。項王乃ち鎧を脱で

し、夜半に兵粮を使て直に東の大路より進發し、已に蕭縣へ到て此より彭城までは五十里あれば、暫く休んと云處に、何とも知ず頻に鐵砲の聲聞しかば、驚て四方を望に、南の路に漢の兵と覺て雲霞の如く集り、又遙に東の山を望ば、數萬の赤旗風に飜て其陰に限なき軍勢きら星の如に雙居たり。項王大に驚き左右に向て申けるは、此處なにとて漢の兵此の如く多や、料に天下の諸侯兵を合て悉く此に集たるならん。鍾離昧申けるは、前には漢の兵路を塞ぎ後よりは韓信追蒐ること甚だ急なり。此には又天下の諸侯兵を會して集たれば、彭城は已に敵の者となれり、陛下此より臣等と八千の子弟を領じ、直に江東へ行て再擧を圖玉へ、空く此處に戀々として御身を誤り玉ふな、若早く臣が言に從玉はずんば、後に悔玉ふとも益なかるべし。周蘭も頻に諫め、鍾離昧が申す所極て理あり、陛下早く之に從ひ玉へと云けれども、項王天性躁しき者なれば更に聞入ず、却つて大言を放ち、我兵を起してより以來、到る所拉ずと云ことなし、敵いま大勢なりと云ども其中に我に敵する者あるまじければ、何の怕か有ん、若又この所を逃れ去ば、天下の諸侯大に嘲り笑ん、汝等たゞ我跡に從ひ來て、わが漢の諸大將と戰を見よ、若槍の法少にても亂れば、自ら首を刎て其弱を示ん、我命の有んずる程は決して人の辱を受ことをせずと云ける故、諸大將再び諫んとする者なく、了に人馬を調て彭城へ打向ひける

大軍を率ゐ來り八方より攻圍む。季布、鍾離昧は如何にもして項王を救ひ出さんと、左手や右手に心を配て勇を振ひ、漸々一方を斬破て脫出んとすれば、靳歙、柴武、孔熙群り來て打止んとす。項王この時戰を好ず。勇將と共に圍を破て走けるに、韓信が大軍風擁して進み來る勢は、恰も山の崩れ海の沸にも異ならず。項王いよ／＼散々に亂れ、纔に四五千騎に打なされ、跡をも見ずして敗北する處に、忽ち楚の大將周蘭本部の軍馬を率て殺到し、生手を下知して四方八面を薙で廻しかば、漢の兵紛々擾々として兩方へ颯と引退く。項王これに氣を得て共に敗軍を收め、暮に及で這々わが陣に逃歸り、暫く息を繼で虞氏に向て申けるは、漢の軍勢甚だ盛なれば、吾久く此に留がたし、不如今夜の内に彭城へ立歸り、再び軍馬を整て別に思案を廻んと欲す。虞子期申けるは、未だ實否は知ねども、韓信ひそかに彭城へ一手の大將を遣し、陛下の一族を悉く生捕たる由風聞あり、陛下たとひ彭城へ歸り玉ふとも、若この事果して實ならば是空事なり、今この所に尙二萬の兵あり、又今日の合戰に逃歸たる兵五萬あり、此等を合せて今夜ひそかに荊楚湖襄の方へ赴き、威を養ひ銳氣を蓄て諸方の勢を集玉はゞ、舊業又恢復することを得ん。項王申けるは、いや／＼、傳來の言恐は虛說あらん、朕まづ彭城へ歸て一族を伴ひ、山東の魯郡へ行て勢を整ん。諸大將これに同じ、陛下の聖見大に好とて、急に三軍に下知を傳て用意をな

て斬て出ければ、項王やがて鋒を交へ二三合戰しが、向を見ば漢王馬に跨て高き坂の上に立たり。項王歯を切り、靳歙、柴武を打すて驀地暗に突て蒐ば、半途にて夏侯嬰一軍を引て迎へ合せ、未だ二三合にも及ざるに、東北を望で散々に敗北す。項王三軍を勵し、鼓を打鑼を敲て五里ばかり追蒐るに、漢の兵兩方へ颯と引分れ、隊伍を亂ず奔走しければ、季布急に止て曰、漢王にげ走ると云ども人馬雲の如にして隊伍を亂ず、恐は詐の計あらん、陛下暫く此に留て樣子を伺玉へ。項王げにもとて馬を引止んとするに、漢の兵の中より忽ち李左車走り出、大に笑ひ呼けるは、臣さきに楚に在し時、深く陛下の恩を蒙れり、今陛下すでに韓信が計に陷入玉へり、此上は早々に甲を脱で降參し玉へ、臣漢王に奏して一命を乞うけ前日の恩を報ずべし。項王甚だ怒り、朕さきに誤て匹夫が計に中り、常に汝を寸々に斬碎て恨を報ぜんと欲る處に、今又こゝに來て、妄に舌を動すかと云て、又馬を飛して追かくる。始の程は李左車たゞ前面に在て奔走せしかば、項王急に追付んとて覺ず十里あまり馳けるが、忽然として李左車が行衛を見失ひ、只漢の兵四面より一齊に殺到す。楚の兵は二十里ばかりの路を飛が如くに馳來て、身體疲たるに、漢の生手の兵に蒐立られて、一支も支ず四方へ亂れて逃走に、討るゝ者數を知ず。項王心の中已に重地に入たりと思ひ、又鐵砲の聲の絶ざるを聞て、急に退んとするに、韓信又

詐の計を施しめば、是大丈夫の所爲にあらずと呼ければ、漢王緊く鎧て馬に打のり、孔熈、陳賀を左右に備へ風擁して出玉ふ。項王申しけるは、汝前日固陵に敗軍せし時、朕一命を扶たり、今それにも懲ず、又こゝに寄來るは、朕と勝負を決せん爲か、朕汝と五年の間相爭て、七十餘戰に及と云ども、未だ曾て一度も鋒を交ざれば、汝が武藝の程を知ず、汝必ず臆病風を發ず、速に出て快く雌雄を決せよ。漢王笑て宣く、汝いつも血氣の勇を恃で、妄に大言を放ども我少も畏ことなし、凡そ兵を用て勝ことを決するは、計にありて勇にあらず、吾今日汝と只智を闘しむべし、安ぞ力を戰しめん。項王大に怒り、槍を擧て突て蒐ば、漢王の左右より孔熈、陳賀齊く出て迎へ戰ふ。項王あざ笑ひ、汝やさしくも出向たり、我まづ槍を試んとて、塵埃を踏あげ、戰ひ五十餘合にして未だ勝負を分たず。項王ます／＼精神を勵し、大喝一聲その響恰も鳴神の落が如く、眼は爛々として電光の如なりければ、孔熈、陳賀が乘たる馬、これに驚て數十歩しざりけるを、陳賀急に轡を執つて立直さんとするに、項王烏騅に鞭を加へ、飛かゝりて只一槍に馬より突落す。孔熈これを見て早く救はんとすれば、項王又槍を取のべ、孔熈が盔の眞甲を天窓の腦まで突通んとす。孔熈急に首を低て之を避けるに、盔は已に地に落たりしかば、大に膽を冷し、髪をさばきながら本陣を指て逃走る。之を見て靳歙、柴武二人又ぬき連

は前に麾き、退べき時は後に麾く、百萬の軍勢こと〴〵く此旗の動に隨て進退をなす、去ば今日の勝負三軍の生死全く此旗を動す人の手に係れり、將軍いかに之を務玉はんや。樊噲が曰、願は行ん。韓信が曰、然らば將軍三千の兵を領じ、諸將と共に九里山に到り、高き岡の上より敵の往來するを見て、機に隨ひ變に應じ、旗を以て三軍を指揮せられよ、苟も心を忽にして、大事を誤ば必ず軍法に行ん。樊噲申けるは、若夜中ならば、敵御方を見わけ難からん、縦ひ之を辨とも晝は旗を動して合圖を成ん、夜は又何を以てか號令を成べきぞ。韓信聞も敢ず是も又われ已に用意せり、夜は大なる燈籠を揚て之を動すべし、凡そ夜軍には諸軍みな火把を用ふ、其火把を持て動ことなく、各方面を守は御方の兵なり、若又往來奔走して定ることなきは楚の勢なり、將軍たゞ火把の動と動ざるとを見て、敵御方を辨よ、返す〴〵も深く謹で必ず誤こと勿れと申ければ、樊噲下知に從ひ、三千餘騎を領じて、諸將と同く密に固陵の路より發向す。扨又項王は諸大將を集め、朕さきに細作を出して敵の樣子を伺しむるに、果して漢の兵大に勢重し、汝等前後六手に分て、鍾離昧、周蘭は朕が左右に在て力を助よ、朕自ら二十萬の兵を引て先手に進ん、其餘の三十萬は六人の大將これを分ち領ぜよとて、虞子期を留て本陣を守せ、嚴く隊伍を整て、漢の陣前に推よせ、漢王早々に出よ、若又例の如く韓信をして密に

逃ることを得ん、我預め此の如く計を定め置、楚の兵をして左右前後に首を回すこと能ざらしむ。諸大將地に拜伏し、元帥の妙算實に鬼神も測り知こと能じとて、卽時に悉く打立んとす。時に又帳下より一人大に聲を勵し、元帥いかなれば某を侮て土木の如し玉ふやと呼る者あり。滿座驚て之を見に、武陽侯樊噲なり。韓信笑て曰、われ安ぞ御邊を侮ん。樊噲申けるは、主上褒中を出玉ひしより、數百度の合戰に某一度も出ずと云ことなし、項王すでに勢弱て、楚の亡んこと今日の一戰にあり、元帥いま手配を定て、了に戰場へ出たることもなき無名の小將までも、皆一方々々を命じ玉ひ、某一人は今朝より名をも呼玉はず、是いかなる道理ぞ。韓信が曰、誠に將軍の言の如く、我已に手配を定て、凡そ大將と呼るゝ者は、强弱を論ぜず皆用ひ盡し、將軍たゞ一人を殘したるは、是將軍を侮るにあらず、今一大事あり、我これを將軍に命ぜんと欲すれども、若一たび誤る時は、百萬の軍勢眼なきが如し、我この故に輕々しくせず。樊噲が曰、元帥いかなる大事かある、某願は力を盡して之を務めん、若少も誤ば必ず軍法を以て罪を正し玉へ、我死すとも更に恨ることなし。元帥申けるは、我大軍を九里山へ遣し、十面に埋伏して項王を討んと欲す、然れども入り亂て戰ふ時に當ては、敵御方を辨がたし、此に因て中軍に大なる旌を立て、左に當べき時は左に指、右へ廻るべき時は右へさし、進むべき時

師いま某等に命じて九里山に埋伏すべしと宣ふ、夫九里山は沛縣を去こと百八十里、いま楚の五十萬の軍勢四面に夥く陣を取て進べき樣なし、某等甚だ心惑へり、何の路より進で何の處にか埋伏せん、又元帥は何に在て敵を迎へ給ひ、主上は何の所に在て敵を引玉ふや、願は詳に教へ示して某等が疑を決し玉へ。韓信申けるは、我未だ此所へ來ざる先に、預め先人を出して此邊の地理埋伏の處すでに委く考へ置たり、凡師を用るに、其法たとひ孫子、呉子を欺く程なりとも、若地理を知ずんば何を以てか勝ことを取ん、九里山は徐州の城北九里にあり、項王いま李左車に欺れ、沛縣まで來て、心中甚だ後悔す、今日我と戰て若敗軍せば決して彭城へにげ走らん、我この故に諸君を此山に伏おき、又密に陳豨、呉芮等四人を遣し、虚に乘て彭城を乘取しむ、項王もし打負て此處へ來らば、進で行ところなく、退て守る所なく、決して江東へ行て身を逃ん、我又楊武、呂勝等四人を烏江に伏置たれば、項王又江を渡んとするも叶ず、了には生捕とならん、諸君早く兵を引て固陵の北より黄河の岸に沿て歸德郡を過て虞城縣を遶り、九里山に入て埋伏せよ、此山舊の名は九嶷山と云、相續て四座の高山あり、東北に雞鳴山、西に楚王山、北に聖女山あり、周り繞こと二百里、項王彭城へ到て櫓の上に漢の赤旗あるを見ば、決して城に近付ず却て北に向て走べし、其とき諸君四方より出て攻圍玉はゞ、彼いかゞして

西南に埋伏せしめ、兌を澤として大將臧荼を西に埋伏せしめ、皆おの〳〵始の如く副將十六員士卒四萬五千を與へ、六十四面の旗を指てさも美々しく出立せ、前には八卦を列ね後には五行を設て、左輔右弼一として備ずと云ことなし。又夏侯嬰は十萬の勢を領じ、漢王の後に在て不時の急を救ひ、張良を防護使とし、十萬の兵を付て左に禦へ、陳平を救應使とし、十萬の勢を付て右に備へ、孔熙、陳賀は二萬の兵を率ゐ、左右に分れて漢王の前に立、呂馬通、呂況は精兵二萬を領じて日月を表し、靳歙は一萬二千の兵十二人の副將を引て、十二方位を象り、柴武は士卒二萬八千副將二十八員を率して、二十八宿に準へ、任敖は二萬五千の勢を領じて漢王の大寨を守れ、劉澤は三千餘騎を引て雞鳴山に到り、空く旗幟を立て疑兵をなせ、劉高は三千の精兵を率て後陣を巡哨せよ、薄昭、孫可懐、高起、張倉、戚思は各一萬の勢を領じ、四方に分て諸軍の隊伍を整へ、或は路に滯る者あらば驅て之を進しめよ、陳豨、陸賈、傅弼、吳芮は各五千の勢を引て小路より密に徐州へ廻り、楚の兵の城を空して出るを見ば、急に彭城へ込入、項王の妻子一族を悉く生どりて、百姓を安撫し、四門に立たる楚の旗幟を皆ぬき捨て漢の赤旗を立よ、灌嬰は伴り負て項王を會垓へ帯き入よ、中郎騎將楊喜、五軍都尉楊武、左軍司馬楊翼、右軍司馬呂勝は烏江へ行て左右に埋伏すべしとて、手配全く備しかば各兵を率て進發す。時に王陵等進み出て曰、元

大王明日孔煕、陳賀二人を左右の羽翼とし、詐り負て西の方會垓を望で走り玉へ、臣預め此所に備を成て待うけ候べし。漢王斜ならず喜び、明日手配を定て打向んと、其夜は君臣三人密々に計を議し玉ふ。

○九里山十面埋伏

次の日未明に、韓信中軍に出て端坐し、諸大將を集て申けるは、主上褒中を出玉ひてより以來五年の間、師を勞し衆を動し、千辛萬苦して項王と戰ひ玉ふこと七十餘度、いま項王勢孤に力弱て、勝負の決今日の合戰にあり、諸君ます〱心を勵して敵に向ひ、進では當に勇を振ひ退ては固く守り、左に麾ば左に移り、右に麾ば右に廻り、只某が指揮に從て、共に王事を協け、各列侯に封ぜられて、萬年の業を創立せんことを圖られよ。諸大將頓首し聲を揃て、願は元帥の號令に從んと云しかば、韓信此に於て、周易を按じて陣を布、まづ乾を天として大將王陵に副將十六人精兵四萬五千を授け、六十四面の旗幟を立て、西北に埋伏せしめ、坎を水として盧綰を北に埋伏せしめ、艮を山として曹參を東北に伏しめ、震を雷として英布を東に埋伏せしめ、巽を風として彭越を東南に伏しめ、離を火として周勃を南に伏しめ、坤を地として張耳を

信急に召入て子細を問に、李左車乃ち季布、周蘭が諫し事、風の旗を折馬の長く嘶し事、并に項王の了に欺れて沛郡まで來れる由始終一々に語ければ、韓信限なく喜び、若先生の到るにあらずんば、項王爭か此所へ出來ん、此上は彼が救の勢の到ぬ先に早く合戰を催すべし、然れども如何にもして敵を深々と重地に欺き入ずんば、件の計用ひ難し、先生必ず方略あらん、願は又之を論ぜよと云に、李左車申けるは、元帥定て疾妙算あらん、某も一の計あり、未審し、元帥の意旨と同か、異ならんか。韓信が曰、願は金玉の論を聞ん。李左車が曰、前日元帥項王と戰ひ給ひし時、しば〳〵佯り負て、敵を難所へ帶き入、却て伏勢を以て破り給ひしこと數度に及べり、去ば今度又この計を用玉ふとも、項王前日打破られたるに手ごりして必ず追來まじ、明日の合戰には、主上自ら陣前に出玉ひ、樣々に惡口して項王の怒を激し、西に向て走り玉はば、項王天性躁して心怺ぬ者なれば、決して急に追來ん、某其とき又中途に出て、大に笑ひ辱ば、彼必ず某がさきに詐て降參したる恨を思ひ、益急に追かけて、縱ひ左右より諫め止る者ありとも、豈耳にも聽入んや、若然らば件の計、思の儘に成就せん。韓信手を打て大に喜び、此よくも我意に合へりとて、漢王の大寨へ伴ひ行て、右の趣を奏するに、漢王この議尤も然るべし、然らば朕が左右前後に驍勇の大將を備て守護せしめよと宣へば、韓信申けるは、

厚く恩賞を與へ、帳中へ入て虞氏に見え、悔らくは汝が諫に從ず、誤て敵の奸計に陷入たりと云ければ、虞氏申けるは、妾が言は惜に足ず、陛下たゞ諸將と心を同じ力を協て敵を破り、洪基を恢復して、早く凱歌を奏し玉へ。項王これ能朕が意に合へりとて、次の日諸將を召て申けるは、汝等朕に從て戰場に臨こと數百度、未だ曾て一度も敗北せず、今漢の兵勢重して輕々しく敵し難し、只よく心を盡して備を怠こと勿れとて、鍾離昧に三萬の精兵を與へて左備とし、季布に三萬の勢を授て右備とし、桓楚を先鋒とし、虞子期を後陣の大將として、汝等おの〳〵力を竭して攻戰ひ、敵たとひ敗走するも、必ず長追すべからず、御方もし打負ば互に救ひ扶よ、料に一月の中には漢の陣中、粮つきて自然に亂れ騷べし。諸大將地に拜伏し、陛下の神機妙算、臣等が及ぶ所にあらずとぞ申ける。淺猿や、項王たゞ漢の陣に兵粮つきば、久く支へ難からんことを知て、却て我陣中の漢より先に兵粮の盡ることを思ず、諸大將も項王の議論を聞てみな神機妙算なりと思ひ、君臣上下一人も之を曉る者なきは、是乃ち楚の滅亡すべき所以なり。此とき韓信は日夜に三軍を操練し、諸大將にも各その向ふ所を示し、又は埋伏の地を教しかば、皆よく其守る所を失ず。兵多して紀律あり、機に隨て施し用て變化常ならず、十分嚴整に備て偏に楚の勢の來るを待ところに、外より人來て、只いま李左車來れりと申す。韓

酒を飲で高く歌ひ、營寨絡繹として斷ず、人馬簇々として雲霞の如し。韓信は九里山の東に大寨を構へ、大に四門を開て、人の往來を禁ぜず、日夜に軍馬を調練して更に退んとする氣色なしと告ければ、項王急に李左車に問んとて、左右を顧るに座中には居ず。項王甚だ心せき、頻に聲を揚て、五六度呼ども音もなし。時に近侍の人、外より來りしかば、早く李左車を召と云に、彼人申けるは、李左車は昨晩從者を引て陣外へ出たりしが、今に至て歸り來ず、その行方を知ものなし。項王齒を切り、足ずりして偖こそ奴は是韓信が間者、わが陣中の虛實を伺ん爲に詐て降參し、我を欺て此所へ帶き寄たるなとて、急に項伯を召て大に叱り、汝李左車が來歷を審にせず、輕々しく薦め擧て謀士とす、朕一時之を曉ず、其巧言に誘れて、了に大事を誤れり、是みな汝が罪なりと云ければ、項伯も大に後悔し、臣李左車が素より世上に名を得たるを以て詐とは思も寄ず、誤て奸計に中れり、誠に臣が罪なりと云に、項王怒の氣なほ止ざりしかば、周蘭又諫て曰、項司馬たゞ忠心を以て國の爲に士を擇ぶ、今度李左車が實否を明にせず、輕々しく擧用ふと云ども是一時の失なり、必ず重く罪すべからず、今すでに大王こゝに至て、俄に退け難し、只合戰して敵を破る計を運し玉へ、必ず女兒の如くに前事を悔玉ふな。項王これに從ひ、了に項伯が罪を責ず、季布、周蘭が先見の才ありて、向に屢爭ひ諫しことを感じて

李左車
項王

季布
鍾離昧
周蘭
項伯

久く氣を養たる兵を驅て西に向玉はゞ、韓信兵を用ること能ず、張良も爭か計を施ことを得んや、果して然らば成皐滎陽は手に唾して取べし、陛下もし臣が言に從ず、城を空して打出玉はゞ、寡不ㇾ可ニ以敵ㇾ衆、なにを以てか勝ことを取玉はんや。項王これを聞いて心決せず、立て宮中へ入ければ、妻の虞氏問て曰、妾承る、漢王百萬の兵を引て、近日この所へ攻來ると、陛下その備を成玉へるか。項王乃ち周蘭が諫る由を有の儘に語れば、虞氏申けるは、周蘭が申す所極て道理あり、陛下之に從玉はゞ、社稷自ら無事ならん、然ずんば勝こと能ざるのみにあらず、恐は彭城も又保ち難かるべし、陛下つら〳〵之を思へ。項王いよ〳〵猶豫して心定ず。次の日群臣を集て周蘭朕を諫て、漢と戰こと勿れと云、諸人の意見いかにと問に、李左車傍に在て申けるは、陛下もし自ら行て征し玉はずんば、漢の兵楚を怯と侮り、急に來て此所を攻ん、彭城もし一たび失あらば、陛下はた何にか佇玉はんや、今この計を思に、陛下たゞ兵を統て之と戰玉はんに如べからず、若果して御方勝ことを得ば、漢の兵必ず逃去ん、若又勝ずんば、退て彭城を守て根本とし、諸方へ早馬を立て救を求んに、誰か來ざる者あらん、加之ず漢の兵久く此に止らば、次第に兵粮乏して自ら亂ん、其とき陛下敝に乘て追討に攻玉はゞ、漢の兵大に破んこと疑なし、陛下いま必ず勝の計を捨て群臣株を守るの計に從んと欲し玉ふは、

るを見て暗に喜び、八句の詩を作つて一面の木牌に書つけ、高く樓上に掛させければ、楚の細作この詩を見て、軈て書寫し路を急で彭城へ歸り、漢王大軍を沛縣に屯して、早せめ寄んとする由を注進しければ、項王以の外に打驚き、寫し來れる韓信が詩を披き見に、

倡ㇾ義會二諸侯一　平將無二道收一　人心咸背ㇾ楚、　天意屬二炎劉一
指ㇾ日亡二垓下一　臨ㇾ時喪二沛樓一　劍光生二烈燄一　馘斬項王頭一

とありしかば、甚だ怒り西を望で大に罵り、朕この誇夫を殺ずんば、誓て師を班じとて、急に三軍に令を傳へ、卽日に打立んとひしめきけるを、季布、周蘭諫て曰、甚だ不可なり、此は韓信が敵を誘の計にて、陛下の兵を按て出ざらんことを患ひ、此詩を作て陛下の怒を激ものなり、若輕々しく進玉はゞ、必ず奸計に陷入玉ふべし。項王首を掉て曰、これ汝等が知事にあらず、朕天下に縱橫して、未だ會て一日の辱をも受ず、今この胯を潛し夫甚だ我を侮て、惡口を吐こと此度に限ず、若この儘にて討て出ずんば、天下の諸侯指をさし唾を吐て嘲り笑ん。周蘭又申けるは、漢の兵勢重して殊に韓信極て詭計を用ふ、陛下必ず妄に敵し玉ふな、臣思に只堀を深し屏を高して戰を交ず、諸國へ檄文を馳て兵を集め、會稽へ人を遣して兵粮を運送せしめ、堅く守て日數を過玉はゞ、敵陣兵粮つきて自然に疲れ苦ん、其とき陛下逸を以て勞を待、

○季布周蘭諫二項羽一

大漢の五年秋八月、漢王大小の將士と共に、百萬の雄兵を整て成皐を打出玉ひ、人壯に馬強く、數百里に連續して進けるが、先陣の大將孔熙、陳賀到る所諸軍を制して秋毫も居民を犯ざりしかば、百姓安堵して常の如く簞食壺漿して漢の師を迎へ、郡縣風を望で來り服する者幾許と云ことを知ず。此に因て大軍路に滯ず、程なく九里山に到ければ、韓信諸大將の手配を定め、沛郡に夥く陣屋を構て、預め合戰の用意をなす。時に孔熙、陳賀二人漢王に見て奏しけるは、大王の威德四方に施して、到る所の郡縣招ざるに自ら歸服し、大軍容易く此に來ることを得は、皆これ今度大王の必ず楚を滅し玉ふべき前表なり。漢王喜悦淺からず、皆汝等が力なりとて、重く恩賞を與へ、中軍の左右に二箇所の陣屋を立て孔熙、陳賀に守せ、蕭何を催促して夥く兵粮を運送せしめ、又多く細作を出して密に彭城の消息を聞しめ玉ふ。夫漢王の師を用る此の如く子細にして、內外の用心一として欠たること無れば、聞人ごとに師出以レ律好レ謀而成者也と古人の云しは、彼漢王の事をや申らん、誠に王者の師なりと、今の世までも稱嘆せずと云者なし。韓信は日夜心に計を思案して居たりしが、沛縣の內に小高き一の樓あ

て進には、宜く先智勇兼備れる大將二人を擇で先鋒とすべし、元帥の帳下に、若この大任を命ずべき人あらんや。韓信が曰、臣さきに趙を破しとき、久く彼に留て、四方敢勇の士を招き集し中に、兩員の大將を得たり、長り忠直に事を行に安靜にして、皆萬夫不當の勇あり、若これを召て先鋒とし玉はゞ、必ず能主上の爲に大功を建ん。漢王いそぎ召と宣ひしかば、韓信やがて呼出す。二人の大將進で帳下に到り、禮を行て立たりしに、身材凛々相貌堂々として誠に類なき驍勇の大將なりしかば、漢王斜ならず喜び、乃ち姓名を問玉ふに、答へて曰、一人姓は孔、名は熙、先祖は元蓼縣の人、一人は姓は陳、名は賀、先祖は費縣の人たりしが、後に東齊へ移て住居せり、二人共に幼より家の産業を務ず、只弓馬の道を嗜み、其のち秦の亂を避て太山登雲嶺の邊にありしが、韓元帥の博く士を求玉ふと承り、同く來りて麾下に屬せり。漢王ますます喜び、即時に孔熙を蓼侯とし、陳賀を費侯に封じ、朕いま汝二人を先鋒とす、我大軍の向ふ所、汝只よく百姓を恤み、諸軍を制して秋毫も擾し騷しめず、又郡縣の守護、諸所の城守、凡そ來て降參する者あらば乃ち能安撫し、舊官に仍て始の如く各その地を管理せしめ、必ず苟も驚しむること勿れとて、精兵三萬を授玉ふに、二人恩を謝し、兵を引て驅て出去ければ、漢王韓信と百十二萬の勢を整點し、跡に續て成皐を出玉ふ。

詮將軍の前に死して其異心なきを顯んとて、自ら劍を拔て刎んとするを、項伯急に抱き止め、先生深く怪るゝこと勿れ、今干戈擾亂の時に當て、先生漢の陣より出來る、我何ぞ疑ざるべけんや、只われ天性言語粗卒にして動ば賢者を敬の禮を失ふ、願は其罪を免せとて、自ら立て李左車を上座に請じ、其夜は酒を擧て持なし、次の日伴て朝に出、具に李左車が降參の由を奏するに、項王限なく喜び、朕が左右、ちか比一人の謀士を少ところに、李左車が來り降る、甚だ朕が心に合へりとて、乃ち召見て申けるは、朕素より廣武君の名を聞て、曾て趙に在し時いかにもして御方に招んと思しが、今了に望を遂たり。李左車が曰、臣昔し趙に仕て趙王用ること能ざりしかば、去て韓信が謀士と成けるに、韓信亦用ず、此に因て一身よる方なく、此に來て陛下に見ること誠に小兒の父母を望が如し、陛下幸に捨玉はずば、臣駑駘を盡して國の爲に死を效ん、若又疑て用玉はずば、臣直に東海に赴て死せん。項王申けるは、汝實を以て我に歸す、今より朝夕左右に侍て朕を輔よとて、了に留て謀士としけるが、李左車が言語衆に出、容貌人を動を見て限なく喜び更に心に疑ず。此時漢王は韓信を召て大軍こゝに屯すること日久し、恐は糧草續まじ、元帥いかなれば早く師を出さゞると問玉ふに、韓信答て申けるは、臣連日軍馬を訓練して調度齊く備りぬれば、今日御駕を迎て進發せんと欲す。漢王の宣く、大軍陸續し

人を出して迎へ入、禮を施して申けるは、先生は元趙の人、近ごろ齊に在て韓信が幕賓たりと聞しが、今いかなる故ありてか出來れる。李左車答て曰、昔し趙王某が諫を聞ず陳餘に欺れて漢と戰れしに、韓信背水の陣を設て陳餘を泜水に斬、了に趙を滅せしかば、某一身を容に所なく、韓信が帳下に在て謀士となる所に、何ぞ料ん韓信さきに齊王に封ぜられしより、妄に尊大にして凡そ事みな自ら決斷し、手下の將の言從れず計用られず、此ゆゑに恨を含で已に過半にげ失たり、幸に楚王いま漢と戰を交玉ふ、某不才なりと云ども願は麾下に投じ、旦暮に計を相議して犬馬の勞を效ん、思ふに韓信が凡そ用る所の計、一として某が推量に洩こと候まじ。項伯が曰、いま兩國相爭の際互に詐謀奇計きはめて多し、先生敵國より來り降る、若御方の虛實を伺ん爲に、詐て降り玉ふも料がたければ、我敢て堅く信ずること能ず。李左車色を正して申けるは、將軍甚だ誤れり、某は一人の儒士、鎧を著馬に跨て、鋒を爭ひ敵を破こと能ず、只常に將軍の左右に在て計を論ずるのみ、聽と聽ざるとは將軍にあり、況や楚の虛實は韓信つねに細作を出して探きく、安ぞ某を詐り降して而して後に知ことをせん、我誠に楚王の威德を慕て來り服すれば、却て此の如く疑る、悔らくは智暗して人を見こと能ず、只暫に諸人の楚王を稱嘆するを聞て、遙々こゝに來れり、是わが失なり、縱ひ此を去ても身を寄べき處なし、所

未だ項王を欺き賺して此所へ帶き入しむべき計を知ず、先生定て妙算あらん、願は國家の爲に之を教よ。李左車が曰、項王たとひ兵を起して寄來んと欲とも、項伯、鍾離昧等元より智惠ふかき者共なれば必ず遮り止べし、彼もし溝を深し壘を高し、坐ら守て戰ずんば、御方百萬の陣中日用の費幾千萬と云ことを知がたし、豈よく久く住ことを得んや、彼もし其弊に乘て、一たび討て出ば、我兵決して大に敗亂せん、今の計を思に、誰にもあれ一人御方より詐て楚に降參し、言を巧にし利を說て其心を惑さば、項王の人となり智淺して讒を信ずる者なれば忽ち兵を率て寄來ん、彼一旦もし此に來らば、元帥の計に陷入んこと疑なく、楚を亡の功たゞ此一擧に在ん。韓信大に喜で申けるは、先生にあらずんば、此大事を成就すること能じ、殊に先生は元趙の臣にして諸人の望甚だ重し、若一言を說玉はゞ、彼必ず深く信ぜん、果して然らば今度わが楚を亡の功、全く先生の助る所なり。李左車喜で曰、某久く元師の帳下に在て深く知遇の恩を蒙ると云ども未だ萬一も之を報ぜず、元帥只速に備を成玉へ、某願は楚に赴き項王を欺て九里山へ來らしめ、元帥この度の大功を助べしとて、元趙の國より附從る從者數人を引具し卽時に打立て彭城へ到り、先客屋に入て休息し、次の日大司馬の府に行て、項伯に見んことを求るに、項伯之を聞て、李左車はもと趙の謀士、いま我に見んことを求るは必ず故あらんとて、

却て盗賊を以て重とするや。周殷が曰、汝は只漢楚の合戰を以て重とす、我は又この地を保て老を養の計を成んと欲す、豈暫も去べけんや。李寧之を聞て、周殷すでに逆心ありと知ければ、敢て再び言ず、了に別て江を渡り、日を經て會稽へ到て、項王の檄文を傳に、太守吳丹乃ち迎へ入、檄文を見了て副將鄭亭を呼で相議し、漢王いま百萬の勢を統て彭城へ寄んとす、此に因て項王檄を馳て急に吳の國の勢を招玉ふ、速に用意せらるべしとて、即日に八萬の兵を起し、十日より中に打立んと云しかば、李寧は先達て彭城へ歸り、周殷謀反を企て王命を受ず此故に直に會稽へ至て檄文を傳ければ、太守吳丹、副將鄭亭十八萬の勢を揃て十日の內に馳參んと約せし由を奏するに、項王周殷が逆心を聞て甚だ怒り、朕まづ此賊を誅して次に漢王を破んと云を、項伯諫て申けるは、周殷は乃ち疥癬の疾にして慮るに足ず、漢王は是心腹の患、陛下宜く急に馳向て攻亡し必ず忽にし玉ふこと勿れ。項王此に從ひ、三軍を整點し近國の軍兵五十萬を集て、預め漢王を防んと用意をなす。去ほどに韓信は人を出して、九里山の地理を尋ね勘しむるに、數日にして馳歸り、其地の高低遠近一々圖に寫して呈上す。韓信見了て大に喜び、廣武君李左車を召て商議しけるは、我この間九里山の地理を伺しむるに、左は山陵に靠右は川澤に沿て天下無雙の戰場なり、吾この所に兵を隱し、大將を伏て敵を伐んと思へども、

んに、彼もし命に反て來り救ずんば、速に大將を遣して罪を伐しめ、其歸るさに近邊の郡縣へ檄を傳て招玉はゞ、彼これ數十萬に及ぶべし。項王の曰、周殷久く舒六に在て素より英布と厚く交る、今英布すでに漢に降ぬる上は、彼あに能獨り存せんや、狼子野心終非籠中物と云ことあり、不如さあらぬ體に賺して此所へ召よせ、早く先目前の患を除き去べし。項伯聞て、陛下の言極て好と云しかば、項王即時に檄文を調へ、千戸李寧を使として周殷を招ける。李寧命を受て舒六に到り、項王の檄を傳ければ、周殷乃ち披き見に、其文に曰、

周殷久守舒六、兵馬想已精練。目今漢兵與楚會戰、差千戸李寧齎檄請、爾星夜前來、會兵與漢決戰、不可如前徵取不至、以踏抹風後來之咎、實取罪戾、非假空言、故檄。

周殷自ら思けるは、項王すでに勢孤にして力弱し、又天性强暴にして人を疑ひ嫉む、我もし行て見ば、忽ち誅戮せられんこと疑なし、不如今より謀反して獨り舒六を守り、坐ら勝負を見て漢王楚を亡して後英布を頼で漢に降ば、必ず封侯の位を失じとて、李寧に逢て申けるは、舒六元より盜賊多して動ば亂をなす、我暫も離べからず、汝歸て此由を項王に告よ、我賊を平て後必ず兵を起して到べし。李寧申けるは、凡そ事みな緩急あり、尤も此所盜賊ありと云ども是一時の患に過ず、漢楚いま戰を交て事甚だ危急なり、然るに將軍速に行て救んとせず、

たらんこと豈又美ならずや。韓信が曰、大軍こゝに屯して安ぞ久く住るべき、數日の内に必ず主上を請じて發向せん。張良乃ち別て城中に歸り、韓信が申せし事共一々漢王に奏聞す。楚の細作は此由を聞て急ぎ彭城へ歸り、漢王天下の諸侯を會し、百萬の精兵を統て、滎陽より成皐まで八百里の際、前後二百餘箇所に陣を取て、夜は篝の光天を照し晝は旌旗日を蔽て勢甚だ前日の類にあらず、陳留廒倉より兵粮を運送すること日夜引も切ず。韓信毎日軍馬を操練し、日を擇で陽武の大路より徐州へ到て、陛下と雌雄を決せんとする由を注進しければ、項王聞て以ての外に仰天し、頻に聲を放て大に哭く。項伯、項莊、季布、周蘭、鍾離昧等なに事やらんと急に出て、何をか哭玉ふぞと問に、項王答て曰、范增、昔漢王は志小ならず、後日必ず心腹の害を爲ん、速に殺して後の患を除けとて、爭ひ諫しこと幾度と云こと無りしかども我さまでの事は有まじとて、了に諫に從ざりしに、此比漢王百萬の勢を起し、不日に此所へ攻寄んとす、我いま三十萬に足ぬ兵を以て、爭か此に敵することを得ん、果して范增が申せしに違ず、痛かな亞父、惜かな亞父と、又大に聲を放ち地に倒て哭き哀けるを、諸將急に扶け起して樣樣に諫め、江東は昔し兵を起せし處にして人の心久しく歸服す、早く使を馳て勢を集玉はゞ、會稽より南に數萬の精兵を得べし、今又周殷舒六を守て是も數萬の兵あり、今急を告て召玉は

下の諸侯兵を會して此にありと聞ば、縦ひ戰書を送るとも安ぞ自ら攻來ん、不如たゞ主上親ら彭城へ赴き近く陣を取て、頻りに戰を催し玉はゞ、項王怺ること能ず、了に自ら打て出ん、臣其とき調練したる軍勢を率て之と戰ば、項王あに再び生ることを得んや。漢王尤とて大に喜び、又數日を過けるに、人馬の懸引ます〳〵熟して隊伍亂ず、旗幟嚴整にして進退節に當り行坐悉く法あり。時に漢王張良を使とし、酒と羊とを持せて韓信に賜ければ、韓信喜で乃ち諸軍勢に分ち施し、諸將と共に酒宴を設て持成に、張良問て申けるは、軍馬今調度すでに熟せり、元帥なんぞ早く日を擇で進發し玉はざる。韓信答て曰、それ師を行には先地の吉凶を占て、然して後に兵を屯すべし、我數日以前より多く人を出して陽武より徐州までの間を勘しむるに、未だ宜かるべき處なし、只九里山の南に垓下と云處あり、岡高く峯峻えて、前には兵を埋伏すべく、後は敵を遮り防べし、此處決して宜からんと思ひ、今朝より人を遣して伺ひ見しむるに、未だ歸り來らず、若果して然らば我早々に進發せん。張良が曰、某夜天文を見に、漢の運甚だ盛にして紫薇星大に光り耀き五星ます〳〵明朗なり、是正に主上大業を成就し鴻基綿遠として子孫永く太平を享玉ふべき瑞に應ぜり、甚だ近代の比すべきにあらず、元帥早く奇功を建て天下を安じ、萬民倒懸の苦を解玉はゞ、某等も攀龍附鳳することを得て、盛朝に臣

に元帥の印を與て、大小の三軍悉く其號令を聽しめ玉ふ。韓信又元帥の詔を承り、陣前に出て諸國の軍兵を點檢するに、燕王の勢十五萬、英布が兵五萬、彭越が兵五萬、兩魏の勢二十萬、蕭何が兵十五萬、臧荼が勢三萬、漢王の勢三萬、洛陽の勢五萬、三秦の勢六萬騎、合して七十七萬騎、又漢王の手勢二十萬、韓信が軍勢十五萬を加て都合百十二萬餘騎、又英布、彭越樊噲、王陵、周勃等が如き英勇の大將八百餘人、左右の謀士輔弼の大臣五十餘員、韓信一々具に書寫して漢王に獻りければ、漢王喜玉ふこと限なく、了に蕭何、陳平、夏侯嬰に命じて三秦より運送したる兵粮幷に廒倉の粟を出して三軍を養しめ、凡そ病る者あれば、醫藥を與て療治せしめ、死する者あれば棺槨を賜て厚く葬しめ玉ひしかば、諸軍深く聖德を感じて勇み喜ずと云者なく、人強く馬壯にして調練漸く熟しければ、漢王韓信を召て御方いま軍馬の調練すでに備れり、元帥いかなる方略かあると問玉ふに、韓信申けるは、人馬すでに整と云へども未だ手配を定ず、臣明日より諸大將を手配して、彼はこゝ何は彼と云ことを指教へ、各向ふ所を知て悉く自由を得ば、其とき御駕を迎て進發せん。漢王の宣く、今若使を以て戰書を送り、項王の自ら攻來るを待て逸を以て勞を待ば、御方全く勝ことを得べし、汝が意いかん。韓信が曰、項王しば〳〵遠く出て戰しかども每度破を取たるは、兵粮の續ざる故なり、今殊に天

兮思黄犬、酈生被烹兮念酒卮、臨危思安兮悔已晩、遇難始悟兮意已遲、何如據齊士登高而視卑、成敗可立見。漁人收兩持、功成一翻手、何乃不自爲、捨此萬世業、冒彼湯火危、吾言本金石、奈何不三思、佯狂以自廢、恐爲涅所淄、我歌君且聽、不聽吾何之、放蕩南海上、遠害全鬚眉、

韓信が近從の人、この歌を聞て韓信に語ければ、韓信笑て是前日常に談論せし所にして更に珍からず、安ぞ是非を論ずべけんとて、已に三軍の用意も備しかば、卽時に打立て數日にして成皐へ著到し、漢王に見て封爵の恩を謝し、陣を取て日夜に軍馬を調練す。扨又張良は彭越を大梁王に封じ、別に臨で將軍たゞ速に兵を起して韓信に力を添よ、必ず事を悞ること勿れと再三苦に告ければ、彭越打諾き、先生少も心を勞し玉ふな、我跡より不日に成皐へ到んと云ける故、張良此より路を急で成皐へ歸り、漢王に見て具に事の樣を奏しければ、漢王欣悦淺からず、若先生の到るに有ずんば、三將軍あに容易く兵を起さんや、韓信は已に先生より先に著到せりと宣へば、張良申けるは、是臣が力にあらず、大王の威德を感じて彼自ら來り服せりとて、未だ十日を過ざるに、英布、彭越も淮南、大梁の勢を統て參向し、其外諸國より馳集る軍勢幾千萬と云ことなく、成皐滎陽數百里の間に充滿して雲霞の如なれば、漢王深く喜び、又韓信

地を分て與らると云ども是誠に大王の大功あるを思ふにあらず、只餌を與て大王の心を喜しめ、自ら軍を起して楚を破せ、漢の天下を一統せんことを欲してなり、我料に天下もし平ならば、大王あに能高く王位に居て晏然として富貴を享ることを得玉はんや、漢王必ず大王の自ら立て齊に王たらんことを求め、又は滎陽成皐固陵の危を救ざりし罪を唱て忽ち誅戮せられん、不如今日漢楚未だ定らざる時に乘て、大王又齊の地を占、天下を三分して鼎足の如く並び立玉はば、自然に永く無事ならん、若なほ迷を執て臣が言を聽玉はずば、楚滅て後必ず涯なき禍あらん、大王つら〳〵之を思へ。韓信が曰、張良自ら來て君の命を傳ふ、我すでに兵を起して楚を伐んと約せり、今もし行ざる時は三の不義あり、一には臣として君の命に違ふ、二には朋友に信を失ふ、三には恩を受て德に負く、此三の不義あらば我たとひ三齊を保とも、天下の諸侯譏り罵て、他日何の面目ありてか漢王に見ん、先生の言金玉の教なりと云共、只わが心實に漢に背に忍ず。蒯徹申けるは、大王いま臣が言に從玉はずば、他日害せらるゝ時必ず大に悔玉ふこと有ん。韓信遂に從ず、袖を拂て內に入ければ、蒯徹力及ず又始のごとく佯狂して市の街を往來し、歌を造て謠て曰、

隆準遭困兮公罔救、加以厚封兮乃出師、楚若存兮公勢重、羽若亡兮公必夷、李斯東門に

通俗漢楚軍談　卷之十二

○漢王大兵出成皐

去程に韓信は三齊王に封ぜられて喜ぶこと限なく、漢王の檄文を諸郡に傳て、十五萬の勢を集め、日を擇で成皐へ進發せんとす。此とき蒯徹は向に韓信に謀反を勸しかども更に肯ざりける故、此より佯て狂人となり、笑ひ歌て市の邊を徘徊せしが、韓信この間漢王の命を受て成皐へ赴んとする由を傳きゝ、急に城下に來て見んことを求む。左右の人この由を告ければ、韓信乃ち迎へ入て對面し、先生前日頻りに我に說れしかども、我心漢に反くに忍ず、遂に教に從ざりしかば、先生夫より別れ去て久く相見ず、今又こゝに出來るは必ず高論あらんと云ば、蒯徹申けるは、某深く大王の厚恩を感ず、此故に大王の面り涯なき禍を踏玉ふを見に忍ず、恥辱を避ずして又こゝに來り見ふ。韓信が曰、涯なき禍とは扨いかに。蒯徹が曰、漢王さきに固陵に圍を受て事十分危く、早馬打て急を告ること日夜止とき無りしかども、大王兵を此處に住て行て救玉はず、茲に因て漢王いかんともすべき様なく、已ことを得ずして三齊王に封じ

風景を望見に天の中區を鎖して地の四部を控、岡阜繚り繞て龍の盤れるが如く、虎の伏たるに似たり、渇河その北を限て清洛その内を貫き、四達に都會して誠に九州の咽喉中夏の閫域六街三市人烟簇々として民豊に土肥たりしかば、張良深く嘆息し、項王形勢を知ず地を擇こと能ず、咸陽を捨て彭城に都し、大梁を守ずして徐州を守り、厫倉の粟を取ずして常に兵糧に飽こと能ず、此の如にして豈天下を失ざる者あらんやとて、此より成皐へ歸りけり。

蓋し項王は寔に將軍不世の讎人なり、讎未だ滅ずんば、將軍この位豈よく久く保べけんや、今韓元帥兵を舉て已に成皐へ赴けり、將軍も早く軍馬を催して共に楚賊を亡し、大功を建て永く富貴を享玉はゞ、誠に烈丈夫の所爲ならん。英布ますく\喜び、急ぎ三軍に令を傳て、卽日に打立んと用意をなす。此に於て張良相別れて直に又大梁を望で發向す。此とき彭越は客と酒を飲で居たりしが、張良が來れる由を聞て、急に衣を整て出迎へ、禮了て座定りければ、張良乃ち漢王の大梁王に封じ玉ふ由を告て、印と詔書とを出して與るに、彭越案の上に詔書を披き香を燒て之を讀に、其文に曰、

分レ茅咋レ土所三以爲二建國之典一、錫レ馬蕃庶所三以報二康侯之功一、爾魏相國彭越屢撓二楚後一、絕二其糧道一、不レ避二矢石一、爲レ漢立レ功、久在二梁地一未レ有二分土一、玆封レ爾爲二大梁王一、凡五十郡城皆爾統理、尊以二王爵一、隆以二厚祿一、子孫世レ廕萬年永懷、爾其益勵二初心一勿レ違レ所レ命。

彭越見了て頭を叩て恩を謝し、心中深く喜で大に酒宴を設て持成ければ、張良申けるは、將軍しばく\大功ありと云ども主上未だ恩賞を與玉はず、今すでに此の如くなれば、將軍宜く本部の人馬を統て成皐へ赴き、韓元帥と共に早く楚を亡し玉ふべし、必ず遲引すること勿れ。彭越喜ぶこと限なく、卽時に三軍を整點して是も不日に打立んとす。張良數日逗留して熟大梁の

然る時は元帥は坐ら王位を享て永く子孫の業を立、無窮に至て開國の元勳と稱せられ玉はんこと豈美ならずや、若漢楚未だ定ざる時は、元帥も亦自ら安ことを得ず、縱ひ齊の地に居玉ふとも、兩王の間に掛て了に定ること無ん、元帥よく自ら慮れ。韓信申けるは、前日廣武の合戰に楚賊すでに亡べかりしを、主上たゞ一向に太公の楚に在を患ひ、一旦和睦を約して天下を兩分し玉ひ、其上わが輩にも未だ地を裂て賜ざりしかば、鬱々として心樂ず、屢召ども至ざりしが、今先生の言を聞に誠に心肺に切なり、況や已に大恩を蒙る上は、早く楚を滅して天下一統の王業を成就し、君を大寶に登せて中國に安坐せしめ、四夷を撫安じて天下の諸侯を朝せしめんこと我素よりの願なり。張良起て謝して曰、元帥もし此心あらば、大に社稷の福なり、此時を失ず早く兵を起し漢王に會して楚を伐玉へ、われ此より直に淮南大梁へ到り、英布、彭越に勸て共に兵を起して元帥を協しめん。韓信大に喜び、我速に大軍を擧て不日に成皐へ赴べし、先生早く行て英布、彭越に此由を告よと云しかば、張良別て直に淮南へ到るに、英布乃ち迎へ入て對面す。張良淮南王の印を出し、漢王詔あり、將軍を淮南王に封じて九江より南の郡縣悉く將軍に賜ふと云ば、英布斜ならず喜び、西に向て恩を拜謝す。張良申けるは、將軍いま淮南王と成玉ふ時は、人臣の位已に極れり、然れども項王未だ滅ざれば、將軍の心了に安こと能ず、

して宜く、先生の言肺腑を貫けり、朕いま韓信を三齊王に封じ、英布を淮南王とし、彭越を大梁王として各その國の土産米穀金帛の類悉く三人に供給せしめんと欲す、先生願は勞苦を辭せず印符を携へ行て三人を封じ、檄文を傳て早く兵を起さしめよ。張良此に於て三國の印と檄文とを請とり、即日に打立て先齊の國へ到けり。韓信は張良が來れる由を聞て、急に迎へ入て禮了り、伴て便殿に上て、張良を上客の位に請じければ、張良申けるは、元帥いま大國に王として坐ら七十餘城を鎭玉ふ、甚だ昔日の比にあらず、我あに賓主を分て坐すべけんや。韓信笑て曰、われ若先生の力にあらずんば、今日爭か此の如なることを得ん、況や先生は漢王の軍師、われ師の禮を以て事るとも尙心に足りとせず、豈王爵を以て自ら倘るべけんや。張良乃ち齊王の印を取出し、漢王いま某を使として元帥を三齊王に封じ、當國七十餘城を全く元帥に與へ賜ふと告ければ、韓信限なく喜び、再拜して恩を謝し了に酒宴を設て持成けり。張良又檄文を出して韓信に與へ、項王今勢孤にして力弱し、此故に主上已に鴻溝の約を背き、頃日再び兵を起して戰を交玉ひ、某の計を用て楚の積貯たる兵粮を悉く燒掃しかば、項王了に支ること能ず、彭城へ逃去り、此とき元帥もし急に兵を會して楚を打玉はゞ、漢の天下を一統せんこと疑なし、

だ患ひ、御方常に兵粮の快く通ぜざるを苦む處に、今已に燒盡されたれば、彌暫も留り難し、急々に退て歸んとて桓楚、虞子期を殿として追くる敵を防せ、卽時に四方の圍を解て、半日の間に大軍ことごとく引去ぬ。漢王櫓の上より之を見て、果して子房が料しに出ず楚の兵ことごとく退たるは、必ず張倉等が兵粮を燒たる故ならんとて、諸將に命じて火急に追蒐よと宣ふを、陳平押止め、決して無用なり、楚の兵一度も戰を交ず兵粮の乏を患て引去る、彼殊に隊伍を亂さず徐々と退き去は、漢の兵の追來んことを料てなり、今もし追かけば必ず其計に陷入んと云ければ、漢王尤とて兵を按て追玉はず。項王は彭城へ歸て柳州の兵粮奉行を召出し、汝晝夜の用心を怠り若干の兵粮を敵に燒れて、我をして久く戰こと能ざらしむ、罪免し難しとて、了に武士を下知して首を刎させ、軍門に掛て三軍に戒め、又人馬を整點して預め合戰の用意をなす。漢王は成皐に兵を駐め、張良、陳平を召て宣く、韓信、英布、彭越しばしば召ども尙未だ出來らず、是いかなる故ぞ。張良が曰、韓信已に王爵に封じ玉ふと云ども未だ地を裂て與玉はず、彭越累に大功あれども是も封爵の御沙汰なし、英布も又楚を背て御方に降しより、未だ了に優禮を加玉はず、況や此三人は利を見て義を忘れ貪て自ら矜る、大王若之に厚く恩を施し、早く地を裂て各郡邑に據しめば、彼大に喜で、縱ひ召ずとも來て力を盡ん、況や王命一たび臨ば使より先に出來

張良が曰、大王成皐へ到玉はゞ、決して三日の内に楚の勢自ら退ん。漢王の宣く、先生妙策ありや。張良が曰、項王戰ふ每に久く支ること能ざるは、陣中兵粮の續ざるを以てなり、今彭越又粮道を隔て楚の陣漸く粮乏し、大王さきに項王と戰ひ玉ふ間に、臣又密に張倉、臧茶二人に五千の精兵を授け、小路より柳州へ到て項王の積蓄たる兵粮を悉く燒掃へと下知を成たり、料に項王たとひ成皐へ攻來るとも決して久く留ること能じ、大王御心を安じて片時も早く進玉へ。此に於て漢王諸軍を督して一晝一夜に三百餘里の路を馳、數日を經て了に成皐の城に入玉ふ。項王は漢王沒落の由を聞知と云ども、其夜は伏勢あらん事を恐て追蒐ず。次の日諸大將に向て、漢王未だ幾程も隔じ、汝等速に用意をせよ、朕何までも追付て逆賊を生捉んとて飛が如くに追たりしが、漢王すでに成皐へ入たりと聞しかば、急に城下へ推よせ、四方より取圍て晝夜を分ず攻かゝり、已に二日を過て、すはや此城いま目の前に崩やすらんと十分危く見けるに、季布、鍾離昧項王に見て奏しけるは、陣中いま兵粮つきて纔に半日の用意あり、然るに今日柳州より早馬到來して御方の貯へ置たる兵粮、漢の張倉、臧茶に悉く燒盡されたる由注進あり、加之ず韓信大軍を引て成皐の救の爲に已に間近く出來れりと申す、旁以て陛下早く兵を回し玉はずんば、韓信不日に來て其外を攻、漢王内より討て出て進退兩ながら難からん。項王此を聞て甚

の夜討を用心すべしとて、此日の軍は止にけり。漢王は城中に在て諸將と議して宣けるは、楚の兵勢重して殊に此城要害堅固ならざれば、必ず久く守がたし、汝等いかなる計をか用べき。張良、陳平が曰、楚の勢終日の戰に將士みな疲て何の備も成ず、大王今宵密に城を出て成皐へ走り玉へ、料に項王夜中の事なれば、必ず遠くは追來るまじ。漢王の曰、事すでに急なり、暫も延引すべからずとて、急に三軍に令を傳て用意をさせ、先人を櫓に上せて敵陣の樣を伺せらるるに、此の門に敵小勢なりと申ければ、漢王乃ち樊噲、周勃、柴武、靳歙四人を先陣とし、諸軍跡に續て殺出し玉ふ。元來此の門には楚の大將桓楚陣を取て居たりしが、暗さは暗し殊に終日の軍に悉く疲れ果て、素より何の備もなく、左のみ防ぎ遮んともせざりしかば、漢王一人一騎をも損ず了に飛が如くに去玉へり。鍾離昧此を聞て急ぎ項王に見え、漢王いま力孤にして守こと能ず、城を出て走ると云ども、陛下必ず追蒐玉ふな、恐は路に伏勢あらん、只よく陣々を守て夜明ば再び計を議し玉へと奏せしかば、項王乃ち諸軍を制して追しめず、此に因て漢王事故なく已に八十餘里走り玉へば、夜も朗々と明にけり。張良、陳平申けるは、大王終夜の遠路に左こそは疲玉はんずれども、片時も休息し玉はず、早く成皐へ行て守り玉へ。漢王の宣く、朕たとひ成皐へ入たりとも項王跡より來て又四方を攻圍ば、外に救の勢なくして了に防こと能じ。

く朕が意に合へりとて、次の日嚴く隊伍を整へ、色々の旗を指あげ鼓を打て攻蒐れば、漢王急ぎ王陵、樊噲、灌嬰、盧綰四人を下知して馬を出さしむ。項王陣前に馬を立、漢王に逢て問答せんと呼はりければ、王陵等戟を横へて曰、漢王いま汝を俎に載て、前日太公を烹んとせし恨を報ぜんとて、我四人に命じて立處に汝を生捕しむ、汝早く馬より下て縛を受よ。項王大に怒り槍を擧て驀地暗に蒐り三十餘合戰て、王陵了に力弱て一度に颯と引退けば、漢の陣より之を見て、靳歙、周昌、高起、呂馬通等十餘人ぬき連て討て蒐れば、楚の陣よりも季布、鍾離昧、桓楚、虞子期、鋒を揃て咄と喚て蒐り、兩陣入亂れて金鼓大に震ひ、漸く日の暮まで攻戰ひけるが、忽ち楚の陣中に一聲の鐵砲を響し、大將周蘭一手の勢を引て殺出し、生手を下知して四方八面を斬て囘に、漢の軍勢夥く討れて右往左往へ逃走る。項王ますく\精神を抖擻し、諸軍を驅て追討に討たりしかば、漢王了に防こと能ず、急に固陵の城中へ逃籠て堅く四門を守玉ふ。項王諸軍に令を傳へ、汝等息をも繼ず城を圍み早く劉邦を生捕て朕が數年の恨を報ぜよと云ければ、諸大將申けるは、陛下今日未明より合戰して恐は御身疲玉はん、況や已に日も暮て候へば、今宵は陣を取て人馬を休め、明日又城を攻玉へ、料に此小城に充滿したる勢なりとも何の畏か候はん、必ず三日の内には破るべし。項王此に從ひ、然らば今宵は人馬を休息せしめ、只よく敵

を告玉ふ。角て數日を經て項王は三十萬の精兵を領じ、徐州より進發して所々の民家を刧し、路々の田畠を蹈荒しければ、郡民悉く逃隱れて百姓業を安ずること能ず、此より又晝夜に合戰の止時なし。

○漢王成皐會㆓諸侯㆒

項王大軍を領じ、固陵を三十里隔て陣を取たる由注進ありければ、漢王諸將に向て宣く、楚の人馬初て來て勢甚だ盛なり、朕まづ兵を動ず暫く彼が鋭氣の衰るを待て討て出ん。陳平申けるは、大王の見ところ甚だ高し、緊く四方に鹿角を結、多く烽火を立て、暫く敵の樣子を伺ひ玉へとて、未だ戰を交ず已に十餘日を送ければ、項王は諸大將を集て、漢王さきに使を以て戰書を送り、今又固く守て出ざるは何故ならんと議するに、季布、鍾離味申けるは、此は漢王鈍兵の計を用ひ、御方の兵の疲を待て戰んとする者ならん。時に周蘭進み出て曰、二將軍の意見大に相違せり、漢王いま韓信が軍馬未だ至ず、城中兵少して防ぐこと能ざる故に、固く守て出合ず、況や御方遠路を來て急に戰ふ時は利あり、此ゆゑに漢王ます／＼戰を交ず、遷延として御方の鋭氣を挫んとす、陛下明日勢に乘て鼓躁して攻かゝり玉へ。項王これに從ひ、汝が言よ

上、蓄恨懐恨非止一日、欲擧兵極力征討、又恐投鼠忌器、盻前思後、持此兩難不得已以講和分界、實乃爲太公呂后歸漢計耳。蓋人子爲親無所不至、雖損軀亦所不恤、况用智乎。所謂利以惑愚、詐以蹈貪、成呑鈎之謀、設引獵之計、王乃不悟遂以爲然、今太公呂后倶已還國、無所管轄、大張旗鼓、與王會兵固陵、王如不懼、速起兵前來決戰、勿違。

項王勃然として大に怒り、忽ち書簡を微塵に裂碎き散々に罵て申けるは、劉邦反復の小人、朕を欺て太公を取回し、忽ち約に背て又戰を決せんとす、朕會稽に兵を擧てより、已に三百餘戰を經て向ふ所敵なく、天下の諸侯手を束て歸服せざるはなし、然るに奴原暫時志を得て妄に侮り輕ずること甚し、汝速に歸り劉邦に頸を洗て快く朕が刀を待と申せ、朕今度この匹夫を誅せずんば、誓て師を班じ。陸賈乃ち別をなし、路を急で固陵へ歸り、漢王に見て事の子細を奏し早く使を飛し韓信等を召て備を成しめ玉へと申ければ、漢王之を聞て甚だ後悔し、張良、陳平に向て已に此の如なれば、項王はや不日に攻來るべし、今韓信等諸方の軍勢未だ出來ず、朕いかがして之を防ん。張良が曰、まづ諸大將に命じて備を成しめ、再び早馬打て諸方へ急を告玉へ、漢王之に從ひ王陵、周勃等に命じて諸所の備を成しめ、又韓信、英布、彭越が方へ使を馳て此趣

あらず、速に來て力を扶くべしと宣はゞ、諸侯爭ひ來て項王を滅んこと此一戰に在ん。漢王之に從ひ、陸賈に命じて書簡を寫させ、去ば誰をか彭城へ遣んと議するに、陸賈乃ち行んと云。漢王の宣く、必ず無用なり、項王は天性躁して怒の氣甚し、汝もし至らば恐は害に遇ん。陸賈申けるは、臣機に臨で變に應ず、項王あに害することを得んや、臣三寸の舌を動して項王の怒を激し、自ら兵を起して攻來らしめん、大王御心を安じ玉へ。張良、陳平も陸大夫にあらずんば叶まじき由を奏しける故、漢王乃ち許容し玉ふ。陸賈卽時に打立て次の日彭城へ到りければ、項王召入て對面し、汝何の故にか出來れると問に、陸賈答て申けるは、前日漢王陛下を欺き假に和睦に托して太公を取回し、未だ纔に半月をも過ざるに約を背て、群臣の諫を聽ず又陛下と兵を固陵に會せんとて今某を使として戰書を送る、某思ふに陛下の英武天下に敵なきこと誰か之を知ざらん、今已に東西を分て各その疆を守るときは、漢王に於て足り、然るに尙止ることを知ず土地を貪て又兵を起んと企るは愚の甚しきにあらずや、某陛下の天威を畏ざるには有ず、誠に已ことを得ずして出來れり。項王の曰、朕汝が未だ來ざる先に、已に劉邦が約に背んことを料り知て預め用意を成たりとて、書簡を拔て之を讀に、其文に曰、

漢王劉邦書奉ニ霸王麾下一、前太公呂后在レ楚亦承ニ優養一、但久拘不レ令レ還レ國、臨レ陣又置ニ於俎

べしと下知すれば、鍾離昧命を受て、毎日怠ず人馬を訓練す、角て漸く半月ばかりを過ける處に、案の如く滎陽より早馬來り、漢王約に背て諸方の兵を集め、大軍を固陵に屯して楚と戰を決せんとす、向に鴻溝にて和睦を成たるは、只太公、呂后を取回ん爲の假の計なりと注進しければ、項王之を聞て甚だ怒り、劉邦匹夫我を侮ること爭か此の如なる、果して周蘭が申しに違ずとて、諸大將に向て、汝等早く用意をせよ、奴原が未だ備を成ざる先に、急に攻て微塵に成んとひしめきけるを、季布急に諫て曰、遠路の注進未だ信とし難し、陛下必ず輕々しく打立玉ふな、只三軍を整點して預め用意を成玉へ、若急に兵を動し玉ふ時は、陛下彼より先に約を背にして其罪陛下にあり、今暫く彼が自ら攻來るを待て、陛下その罪を聲し、諸國に告て之を伐玉はゞ、名正く言順にして戰に勝ずと云こと無ん。項王この議げにもとて暫く兵を按へ、細作を出して漢王の消息を探り聞しむ。此とき漢王は張良、陳平等を召て議せられけるは、朕今汝等が諫に從て兵を起んと欲すれども、向に鴻溝にて和睦の後、韓信、英布、彭越等おの〳〵分國へ歸したれば、今縱ひ召とも容易く來り援じ、汝等之を如何せん。張良申けるは、大王まづ項王に書簡を送て約を背由を告、又韓信等に檄文を傳て、前日鴻溝にて和睦を約せしは只太公一族を取回ん爲の計なり、今太公すでに國に歸り玉ひぬれば、楚賊を許して坐ら東土を保しむべきに

として列國の諸侯を朝せしめ、臣等も亦萬世に至て盛朝の功臣と稱せられん事を欲してなり、願は早く御心を決し玉へと云ける故、漢王始て領掌し、此より了に約を背て、又諸方の勢を驅集め、彭城へ攻入んと日夜に用意を急玉ふ。扨又項王は兵を収て彭城へ歸り、諸の將士を各〻その家に還して休息せしめ、心を安じて終日虞氏と樓上に酒を飲で徒に遊樂を事とし、宴然として日を送ければ、周蘭表を上て諫て曰、

自古聖帝明王安不忘危、治不忘亂、雖當無事之時、未嘗廢弛武備、況今漢王劉邦新結盟好、心志未定、謀臣詭詐事多變更、陛下尤當整飾兵馬、訓練甲士、日修文德、閑習武備、精選智謀勇敢之士賢明練達之才、以充將佐之用、臥薪嘗膽、恒如會稽起兵之時、戰驚惕厲以戒不虞。縱使外侮有變、陛下號令一行、則攻無不勝戰無不克、威武可以制服天下、又何外患之足慮哉。若今苟安於一隅而略不爲備、倘劉邦聽謀臣變更之議復鼓而東、陛下何以禦之。臣猥有所見、實本愚衷、惟賜采納、臣不勝戰慄恐惧之至。

項王見了て良久く沈吟し、周蘭に向て申けるは、劉邦已に誓書を寫して堅く約を定む、安ぞ心を變ずることあらん、然れども汝が奏する所も又聽ずんば有べからずとて、鍾離味を召て、周蘭いま表を上て朕に武事を廢すること勿れと云、汝等つねに三軍を調練して預め漢の敵を防

と和睦して西に歸り、慮を安じて再び楚を征する御心なくんば、諸人みな寒心し故郷を思て了に次第々々に逃去ん、然らば大王誰と共にか天下を守り玉ふべき、況や太公、呂后すでに國に歸り玉ひて兵勢大に振ひ、四方風の如く靡て成敗勝負の機誠に悉く大王にあり、若又天下を兩分して楚と雙び立玉ふ時は、禮樂征伐一人に統ず四方の諸侯孰か君たり孰か臣たることを知らじ、是豈帝王混一の德ならんや、臣きく古人も天無二日民無二王と云り、大王いま天下を有こと已に十が八九を得て、楚賊殆ど滅んとする時、一旦之を許して東に歸し玉はゞ、彼他日銳氣を養ひ成て再び軍を起し來ん、其とき大王あに西土に安居することを得玉はんや、養虎遺患終成大害とは此謂なり、願は詳に之を察して必ず機會を失玉ふな。漢王宣けるは、然と云ども朕すでに誓書を寫して盟約堅く極れり、いま若之を變ぜば信を天下に取に足じ。張良が曰、大王甚だ誤れり、小信に拘て大義を失ことは明智の者はせず、昔し湯武の天下を有つ、若君臣の義に拘ば、桀紂了に伐べからず、天下了に得べからず、大王もし鴻溝の約を以て自ら拘玉はゞ、一統の洪基空く項羽に得られて、臣等いかに心を勞し力を盡とも亦益なかるべし、人間の恥辱孰か之より甚しからん。陳平、陸賈、隨何等も聲を揃て子房の言極て理あり、臣等年久く大王に從て奔走勞苦する者は、專ら天下蒼生の塗炭を救ひ、大王を四海に君

ふな、漢王は反復して信なきの人、他日若約に背ば陛下恐は防に計なけん。項王申けるは、いやいや我若餘に久く太公を捕へ置ば、天下の諸侯われ漢を破る計なく、只人の父を捕て質とすと云て、甚だ侮り輕ぜん、況や人と已に約を定て、今又改め更は大丈夫の所爲にあらず。項伯が曰、太公久く楚に在と云ども更に害を加玉はず、剰へ恩を厚して養玉ひぬれば、陛下の仁德既に至れり盡せり、今もし釋して還し玉はゞ、漢王ますます盛德を感じて必ず再び謀反せじ。項王之に因て彌心を決し、次の日文武の將士を召具して悉く甲冑を帯せず、太公、呂后を跡より引せて鴻溝と云所まで出ければ、漢王も文官武將を左右に從て出合、誓書を寫して項王に授られば、項王も自ら誓書を寫し漢王に與て申けるは、朕今より大王とおのおの境を守て再び相爭ことなく、軍を收て東へ歸り去べしとて、左右に命じて太公、呂后竝に漢王の一族を悉く引渡しむ。漢王限なく喜び、先諸將に命じて一族を陣中へ送らせ、項王に向て拜謝し、太公久く楚に在て大王の恩養を蒙り、今又全く許して國に還し玉ふ、是所謂る生死而肉骨と云者なりと宣へば、項王大に喜で相別れ、卽日に兵を收て彭城へ引歸る。漢王は吾陣に歸て喜玉ふこと限なく、去ば軍を收て西に歸んと宣へば、張良急に諫て曰、漢の諸將數年大王に從て千辛萬苦する者は、只一たび東の方故鄕へ歸て父母妻子に對面せんと欲してなり、然るに今一旦楚

界鴻溝
漢楚約和
漢王

項王
太公
呂后

金帛を與へ、侯公を作て再び楚の陣に遣玉ふ。二人乃ち作て楚の陣に入ければ、項王侯公が來るを見て問て曰、汝いかなる故ありてか又此に來れる。侯公が曰、漢王深く陛下の德を感じ、再び某に命じて此事を奏せしむ、一には陛下明日相見ば、必ず前日龍戰虎爭せし時の如く、共に甲冑を帶することなく、又大軍を率べからず、只雍容揖遜し、禮を以て昔年兄弟の好を復し玉へ、二には太公一族を悉く送り還し、漢王をして父子夫婦完く一處に集しめ玉へ、此乃ち仁愛を推及すの至なり、陛下の盛名四海に溢て萬民自ら歸服せん、如何となれば、陛下人の父を殺玉はざるは其孝を廣る所以、人の妻を汚ざるは其潔を昭にする所以、久く拘て悉く送り還すは其義を明ゆゑんなり、若なほ留て還し玉はずんば、恐は他日事の變を生じて必ず長策にあらじ。項王甚だ喜で曰、明日われ必ず太公、呂后を送て國に還ん、汝早く歸て此由を漢王に告よ。侯公申けるは、臣が命は陛下一言の下に係れり、臣いま歸て陛下の宣ふ所を告ば、漢王ます〳〵喜で陛下の言金石の如にして易ることなしと思ん、去ば若少にても變ずることあらば、臣忽に誅戮に遇ん、願は之を憐み玉へ。項王の曰、大丈夫一言すでに出てば壁立萬仭の如し、豈信を失べけんや、汝速に歸り去べし、必ず少も心を苦しむること勿れ。侯公之を聞て喜で出去ければ、季布、鍾離昧諫て申けるは、陛下いま漢と和睦し玉ふとも必ず太公を還し玉

白骨暴レ野積レ屍如レ山、有二父母之心一者獨能忍乎。今遣二侯公一與レ王講レ和、以二鴻溝一爲レ界、鴻溝之西屬レ漢、鴻溝之東屬レ楚、各定二疆宇一罷レ兵息レ爭、永保二富貴一不レ失二兄弟之情一、尚存二懷王之約一使下百姓安中於枕席上、吾二人亦得二坐享二燕樂一、而諸將王亦爲二寧息以安一妻子一、勿二徒爲一蒼生苦一也。王熟思レ之以爲二進止一。

項王見了て自ら思けるは、吾久く漢と相拒で、糧つき兵疲て了に勝ことを得ず、不レ如彼が求に從ひ、兵を收て彭城へ歸り、日に玉樓の上に坐して虞氏と共に歌ひ遊なば、豈樂しからざらんやとて、乃ち侯公を近く召で、朕もと漢王と戰を決して雌雄を定んと思しが、今この書簡を見に甚だ道理あり、早く使を以て和睦を成ん、汝まづ歸り去べし、朕明日漢王に見て互に誓書を寫し、永く兵を罷て各封疆を守んと云ければ、侯公別て漢の陣に歸り具に事の樣を奏しければ、漢王斜ならず喜玉ふ處に、楚の使出來り、明日いよ〳〵出合て舊好を修せんと申す。漢王宣けるは、我明日項王に見て再び前日兄弟の好を復すべし、然る上は必ず共に多の兵を率べからず、又身に甲冑を帶すべからず、御邊願は再び侯公を伴ひ歸て項王に見え、明日相見るの時、必ず太公一族を悉く還して和睦の實を顯し玉へと能々奏せられよ。使者領掌し、某いま侯公を伴ひ歸て右の趣を申さば、項王決して太公を留るの理あるべからず。漢王大に喜て重く

心の中に是必ず漢王の和睦を求るならんと思ひ、兩邊に多の大將を列ね、究竟の武士共を並居させ、自ら劍を帶て中央に坐し、左右に命じて侯公を召入しむ。侯公内に入て、項王の眼を瞋し虎の如くに威を振を見て、聲を擧て大に笑ひ、從容として進ければ、項王甚だ怒て曰、汝漢の使として此に來り、何を妄に嘲り笑ぞ、吾劍を試んと欲るか。侯公いよ〳〵笑て曰、陛下は萬乘の君黎民の父母、威武天下に震ひ號令四方に布て、聞人畏ずと云ものなし、今某は一人の儒士、元より貧賤にして才管仲、樂毅に及ず、然るに陛下兩邊に多の武士を列ね、自ら劍に仗て威を外に示玉ふ、必ず之を以て敵國を制せんと欲玉ふならん、某此故に大に笑ふ、陛下もし威を示ざる時は、誰人か怕ずして輕んじ侮る者候ふや、願は其人を聞ん。項王これを聞て忽ち怒を止、急に帶たる劍を地上に投すて、左右の武士を叱て悉く退け、乃ち侯公に向て、汝何の爲にか出來れると問に、答て曰、漢王某を此に來らしむるは、只漢楚兩國の兵を罷て舊好を修し國を保ち民を安じて共に永く富貴を樂んと欲してなりとて、書簡を出して呈しければ、項王乃ち披て之を見に、

漢王書奉二項王麾下一。邦聞天之立レ君所二以爲一レ民也。苟民命未レ遂徒以二干戈一擾攘、使下天下日蹈二鋒鏑一而不上レ能レ安二其生一、何足二以爲一レ君、何足二以爲一レ民也。邦與レ王爭レ衡數年、經二七十餘戰一

容して太公を送り回べし、然れども御方に此使を命ずべき人なきを如何せん。時に列坐の中より一人聲を揚て、軍師いかなれば人なしと宣ふぞ、臣願は楚の陣に到り、項王に利害を說て太公御一族を送り回しめんと呼る。諸人驚て之を見に、洛陽の侯公と云者なり、此人少かりし時より豪氣ありて、數代洛陽に住居せしが、秦の亂を避て仕官せず、嘗て隣家に兄弟二人家財を爭て數年睦からざりしを、侯公ある時禮義を說て諭ければ、共に泪を流して前非を悔、一言の下に兄弟了に和順せり、此に依て鄉人甚だ敬ひ貴びしが、其のち漢王洛陽へ到り玉ひし時、董三老と共に出見て國の政を論じ、極て時の弊を陳たりしかば、漢王大に喜で了に帳下に留玉へり。今楚の陣に行て和睦を議せんと云を聞て、張良、陳平申けるは、項王は天性躁暴にして氣剛なり、御邊苟も一言の失ありて、彼もし怒を發さば御邊忽に害せらるゝのみならず、太公長く國に歸ることを得玉はじ、只深く慮て必ず君の命を辱ること勿れ。侯公が曰、先生の言の如んば、項王了に見ること無らんに如はなし、若左樣に震ひ怕て空く年月を送ば太公いつか國に歸り玉ふべき、主上久く厚恩を垂て我輩を養ひ玉ふも、了に物の用に立ことなく安ぞ犬豕に異ならん。漢王宣けるは、侯公すでに行んと云、必ず吾大事を成就せんとて、即時に書簡を調て與玉へば、侯公乃ち楚の陣門に行て項王に見んことを求む。項王この由を聞て、

聖人なり、其父を鯀と云、堯の詔を受て水を治しかども、功を成こと能ず、了に堯王に誅せられたり、其のち大禹又相繼で水を治ること三年、三たび其門を過れども入ず、了に大功を建て、夏の四百餘年の洪基を開玉へり、漢王今陛下と天下を爭て太公禁獄せらるゝこと已に三年に及べども、略相顧ざる者は是天下を重しとする故なり、且陛下たとひ太公を殺し玉ふとも勝負の數に益なく、天下の人却て陛下人の父を殺し玉へりと罵て、甚だ盛德の累を成ん、今もし漢の兵を退んと欲せば、豈別に良策なからんや、況や陛下の威武天下に震て人みな畏れ服す、然るに僅の漢の兵を退んとて箇樣の怯き計を成玉はゞ、必ず大事を誤ん、不レ如且く兵を收め本陣に歸て、二たび計を運し玉へと云ければ、項王げにもとて急に諸軍を制して太公を鑊の上より引下させ、兵を收て我陣へ歸けり。

○界二鴻溝一漢楚約レ和

漢王は陣中に歸て大に哭き、太公今日暫く必死を免れ玉ふと云ども、了には必ず楚賊の手に害せられ玉はん、我誠に天下の罪人なりとて、張良、陳平を召て計を求玉ふに、張良申けるは、今楚の陣中糧乏して將士疲れ苦む、大王もし一人辯舌の士を遣して和睦を求玉はゞ、項王必ず許

べし。項伯喜び卽時に回書を調へ、汝わが爲に之を能々傳よとて多の錢を與へ、左右心腹の人に命じて陣門を送り出さしむ。士卒直に漢の陣に馳歸り、具に事の樣を告て項伯が返書を出しければ、張良披て之を讀に、

久睽素好、心切遐思、來示教言、敢不如命、但罷兵講和乃益國家耳。太公久稽於此、某實朝夕維持、料供給不至缺乏、然不剖意息兵、太公豈得還國。某雖救援不過爲一時之計、近左右每勸殺太公、倘一怒不回、恐難永保、望足下籌之。

とありしかば、張良斜ならず喜び、士卒に恩賞を與へ、吾他日君に奏し重て厚く爵祿を充行べしとて、軍政司に命じて士卒の名を錄せしめ、漢王に見て具に項伯が太公を救んと云由を奏しけり。去程に項王は自ら大軍を卒して又漢の陣に推よせ、大なる鑊を居て油を沸し、太公を俎に載て鑊の上に置、兵を下知して漢王早く退き去ずんば、忽ち太公を烹殺んと呼しむるに、漢王これを聞て走り出、大に聲を揚て吾昔し汝と共に北面して懷王に事へ、嘗て兄弟の義を約せり、然る時は我父は是汝が父なり、汝今太公を烹たらば幸に我にも一盃の羹を分ち與よとて、言笑こと常の如く更に愁傷する氣色なければ、項王甚だ怒り、諸軍を下知して太公を鑊の中へ押入んとする處に、項伯傍に在て急に止め、凡そ天下を爲る者は必ず家を顧る、大禹は古の

に、人ひとりも無りしかば前に近付て、某漢の陣を出る時、張良一通の書簡を封じ、楚の陣に歸らば慥に項伯將軍に達すべしと申されたりとて、懷の中より書簡を取出して與ければ、項伯怪で之を披き見に、

舊交故友張良書奉大司馬項老將軍麾下。昔承館穀之恩、後託雲水之遊、自意富貴無心功名絶念、豈料志有齟齬、不遂所願、羇縻於此、不過苟延歳月、非有他望也。但漢王仁厚長者、終成大業、不忍捨去、以此戀戀左右、如鳥依人自愛之、安得晏然高坐不畫一籌邪。因昨者霸王欲烹太公、實爲退漢兵計耳。漢王駐兵於此實無所歸、漢兵不退霸王必烹太公、太公被烹不可復生、他日漢王與將軍復藍田之約、成秦晉之交將軍何顏相見乎。良因鴻使持書上瀆、倘太公欲烹之時、望一言力阻得賜救援、太公蒙再造之德、漢王免不孝之名、恩義兼至仁覆無窮矣、如允所請乞、付回音以慰漢王惕勵望救之懷、下情無任懇切惓々之至。

項伯見了て士卒に向て、我よく汝が樣子を見に、逃歸たるにはあらじ、必定張良が心腹の人ならん、汝隱すこと勿れと云ば、士卒答て曰、今は何をか隱し申べき、誠に尊命の如く張良の使として此に來れり、逃歸りたるには候はず、將軍返簡あらば早く出し玉へ、歸て張良に達し候ふ

送んと欲すれども其便を得ず、汝は元楚の軍勢なれば、父母妻子定て尚楚の陣に在ん、汝いかにもして彼に到り項伯に逢て密に我書簡を傳よ。士卒答て曰、此に過たる易き事や候べき、軍師心を安じて、早々に書簡を調玉へ、某今日楚の陣に到て項伯に達し、返簡を取來て軍師に獻ん。張良限なく喜び、先錢を出して士卒に與へ、書簡を寫して汝深く懐の中に隱し、彼に到て人に奪るゝことなく、萬づ心を小て忽にすること勿れと云ければ、士卒命を受、卽時に出て楚の陣に到しに、巡哨官はや之を見付て、汝は向に漢の兵に生捕れて降參せしが、今何としてか歸ることを得たると尤む。士卒答て曰、われ一旦敵に囚ると云ども父母眷屬みな彭城に在ば、如何ぞ漢に止べき、願は御邊明日我を引て項伯將軍に見しめ、名を錄して舊の如く隊伍の中へ入玉へ。巡哨官これに因て心疑ず、角て次の日項伯軍兵を點檢しけるに、巡哨官乃ち彼士卒を引て來り見え、此者は前日漢の兵に生捕れしが、昨日にげ歸て始の如く隊伍に入んことを求め候と告ければ、項伯乃ち近く召て汝漢の陣中にて張良と云人を見ずやと問に、答て曰、あり、今乃ち漢王の軍師なり、常に將軍の事を語られし故、某は項將軍の手下の者なりと申ければ、此より深く某を憐愍せられたり、某たゞ父母妻子の彭城に在を以て、遠く離に忍ず密に逃歸て候ふ。項伯これを聞て彌心床しく思ひ、張良常に我事を何とか申されしと苦に尋れば、士卒左右を見

を右往左往へ蒐散し、了に項王を救て本陣を指て逃歸る。項王路にて諸大將に向て、誰か韓信が陣法を知て我危を救たると問に、周蘭すゝみ出て申けるは、韓信が今日の陣は太乙の陣なり、此陣には生門あり、死門あり、陰陣あり、陽陣あり、向背ありと云ども四面合一八卦の陣に似たれども又大に異なり、若生門よりして陽陣に入ときは必ず活路を得、もし知ずして妄に入ときは忽ち擒にせらる、臣昔し華山の李少仙に從て道を學し時、つねに太乙の陣を論ぜしを承り、能その法を諳じたるゆゑ、今日諸將を伴て生門より込入ければ、果して陛下を救ことを得たり。時に又鍾離昧奏しけるは、陛下今日は先戰を交べからず、明日又太公を縛て車を催玉はゞ、漢王了には兵を退ん、若然らば早く彭城へ歸て諸方の勢を招き集め、士卒を養ひ休て再び計を運し玉へ。項王之に從ひ、乃ち軍を收て了に我陣へ入にけり。張良、陳平は晝夜太公を救ふ計を商議し、或とき楚より降參したる雜兵の內を尋て、智惠賢き士卒を一人よび出し、言を以て安撫して申けるは、我よく汝が容を見に、尋常と異にして甚だ凡ならず、定て今まで數度の功名あらんずれども、汝諸軍勢の中に雜り居ゆゑに之を知者なければ、何の日か恩賞に預ん、我いま汝に一大事を命ぜん、若この功を成ば我漢王に奏して必ず重く恩賞を與べし。士卒申けるは、軍師いかなる大事かある。張良が曰、われ楚の大司馬項伯に一通の書簡を

報ず。韓信は之を鬪て兼て巧しことなれば、急に平川の上に陣勢を排き張、例の戰車を以て四面を圍み、兩方に旗幟を嚴く挾み、刀槍を立列ね、肅々として十分に威儀を刷ひ武を輝して待蒐たり。漢王は諸將を召具して馬を出し大音あげて宣けるは、項賊汝いま兵窮り勢逼れり、早く出て降參せば安く楚王の位を保て福祚永く子孫に傳べし、若惑を取て降ずんば、其首忽ち地に落ん。項王大に怒り、劉邦匹夫妄に大言を吐て我を辱ること甚しとて、槍を提て突て蒐れば、漢の陣より樊噲、灌嬰、周勃、王陵ぬき連て斬て出時うつるまで戰しに、忽ち一聲の鐵砲響て中軍の黄旗を動すを、合圖に左右前後より漢の伏勢一齊に起りて項王を眞中に取こめ、樊噲、王陵等おの〳〵一方々々を支て楚の勢を討取こと幾許と云ことなし。項王は左に衝右に突ても出ること能ず、四方を望み見ば、漢の大軍團々として連城の如く、愁雲漠々慘霧濛々として東西を分ず、出入を辨がたければ、心の中に思ふ樣、われ又胯夫が計に中れり、若輕々しく圍を突て出んとせば、必ず擒にせらるべし、諸將もし我圍れたる由を聞ば定て來り救べし、我諸大將の中によも此陣法を知たる者のなきことは有じとて、首を延て望み見に、漢の陣忽然として東の方より亂れ騷ぎ、楚の大將周蘭、周殷、季布、鍾離昧一手の勢を引て殺入し、各死力を振て漢の勢

あり、明日兩陣相對する時、太公を爼に載て見玉はゞ、漢王深く悲で必ず兵を退けん、然らば乃ち太公を宥して歸し玉へ、若又退ずんば速に烹殺し玉ふべし、漢王これを見ば決して和睦を乞ん、若勇を恃で共に戰を決せんとせば、又胯夫が奸計に中ん、陛下宜く之を察せよ。項王の曰、太公を殺こと更に難ことなしと云ども、朕たゞ天下の人の笑ひ辱んことを恐のみとて、次の日自ら軍兵を率ゐる太公を馬上に縛て陣前に牽り出たるを、漢の兵望み見て急に中軍へ報じければ、漢王聲を放て大に歎き、我生て父母を孝養すること能ず、天下を爭ひ取んとする故に、太公此の如く苦を受玉ふ、不如早々に降參して父の命を救んと宣へば、張良、陳平急に諫て申けるは、大王いかなれば慮なき、此は項王手滋く攻られ十分危して防に計なきを以て、大王に兵を退しめん爲に角はする者なり、太王いま大事漸く定り、項王首を授んとするの時、あに遽然として降り玉ふべけんや、願は御心を寛し智を以て勝ことを取玉へ。漢王の宣く、我太公の馬上に縛られ玉ふを見て心中悲に堪ず、天下を得と得ざるとは安ぞ論ずるに足ん、父を目の前に敵に殺しむるは、事これより大なるはなし。張良、陳平が曰、大王甚だ惑玉へり、只御心を安じて臣が言に從玉へ、項王今日定て鑊に油を沸し太公を其上に載て、若兵を引て退ずんば忽に烹殺んと罵べし、其とき大王箇樣々々にし玉はゞ、項王手に一も殺すこと能じ、其言未

ね來り、項王を救て這々本陣へ逃歸る。韓信は十分に打かち三軍を收て陣中に歸ければ、漢王起て謝して宣く、朕元帥の妙策に因て大に戰ひ勝ことを得たり、項王今より漢の兵の寄る由を聞ば、戰ずして膽魂を失べし。韓信が曰、臣大王の天威に仗て幸に勝ことを得たりと云ども、項王を討洩したるを恨とす、今この鋭氣に乘て急に攻亡し、誓て再び彭城へ歸らしむべからず。漢王の宣く、元帥たゞ宜く計を用ひて早く凱歌を奏し、天下の蒼生をして永く鋒鏑の苦を免しめよ。韓信是に於て又三軍を整點し、不日に楚を攻んと手配をなす。

○項羽欲レ烹ニ太公一

項王は散々に打まけ、這々我陣に逃歸りて軍兵を點檢するに、三萬餘人討れて季布、虞子期、桓楚、周殷等もみな深手を負て、物の用に立ざれば甚だ之を患ひ、已に三日を過けるに、忽ち細作來て、韓信この間四方の諸侯を語ひ、五十餘萬の勢を集て明日又攻來んとす。蕭何又滎陽より兵粮を運送して、成皐まで五百里の間牛馬綿々として絕ずと注進しければ、項王驚き項伯、鍾離昧を召て、漢の兵雲の如にして殊に韓信よく兵を用ふ、我久く此に在て陣中粮盡たれば共に鋒を爭ひ難し、汝等いかなる計をか用んと問に、鍾離昧申けるは、漢王の父太公この所に

軍を統て跡に續けと云すて、大の眼を瞋し奮然として突出しける有樣、さながら夜叉羅刹の如くなれば、漢の軍勢見に膽冷く畏れ慄て近づく者さらになし。周殷、桓楚は後陣に備へて已に五里ばかり走りけるに、山の凹なる處より忽然として鼓角大に起り、喊の聲地を響して一彪の軍馬殺出し、大將二人まつ先に馬を進て、我は漢の周勃、周昌なり、楚賊早く首を渡せと呼る。項王耳にも聞入ず、槍を擧て渡りあひ、未だ二三合にも及ざるに、周勃、周昌叶ずして逃走りしかば、山の北なる大路を望で馳けるに、又一聲の鐵砲を響して漢の伏勢四方より起り、引包で揉たりければ、楚の勢又大半討れ、漸々圍を突て五六里走る處に、又向より喊を造て漢の靳歙、盧綰手を引て路を橫る。項王馬を交へ槍を打すて、鐵の鞭を振て平打に打けるに、盧綰左の臂をしたゝか打れて、馬より眞倒に落たるを、靳歙急に踏止り死力を振て防しかば、諸軍漸々に盧綰を扶て逃去ぬ。項王了に靳歙をも蒐散し又五七里にげ走て、漸くわが陣も近なりけるに、忽然として何とも知ず、弩を放こと蝗の飛よりも尙多かりしかば、楚の兵いよ〳〵亂れ騷で僅に五千の人馬矢庭に四千餘人討れてけり。項王神出鬼沒の祕術を現し、馬を拍て馳通り、鞭を振て之を拂に、さしも雨の如く射かくる矢紛々として地に落て一も身に中ず。周殷、桓楚も身に數箇所の疵を被りて跡より逃來り、共に敗軍を集る處に、季布、鍾離昧一軍を引て大路より尋

武、王陵二人迎合せて、項賊早く降れと詈る。項王ますく怒り、近づく奴原數を知ず薙倒し馬を飛して南の山の麓を走りけるが、此とき已に夜に入て月の光も甚だ暗に前に深き澗ありと覺て、水の聲潺々と聞しかば危んで進み得ざる内に、又漢の軍勢簇々として追來る。項王暗に思けるは、前には澗水深して渡こと能ず、後よりは敵の追こと甚だ急なり、殊に今宵は黑闇にて東西を辨ざれば我又生ること能ず、運命すでに盡たりとて、心の中悶え苦けるに、漢の兵忽然として後陣より亂れ騷ぎ、一彪の軍馬殺到して大將二人まつ先に進み來る。項王驚て誰ぞと問に、答て曰、臣は楚の周殷、桓楚なり、陛下の敵に圍れ玉ふて甚だ危き由を承り、本部の兵五千を率て尋ね來れりと呼る。項王大に喜び、急ぎ一手に成て逃走るに、此とき夜も天明と明たりしかば、首を回して望み見に、山々峯々谷の奥まで漢の兵稻麻竹葦の如く、紅の旗天に閃て金鼓の響地に振ふ。項王周殷に向て申けるは、朕會稽に兵を起してより以來、諸侯と戰を交ること三百餘陣、未だ了に韓信が如く兵を用る者を見ず。周殷が曰、陛下の武勇天下に敵なきこと久し、此故に韓信の容易く破り難からんことを料り、楚の勢を欺て難處へ帶き入、滿山に兵を伏置て圍し故、御方此の如く敗績せり、片時も此所に留べからず、若時刻を移す内に、敵急に取圍で逸を以て勞を待ば、如何して防玉はん。項王これに從ひ、朕自ら先に進ん、汝等は敗

き、敵の勢は次第に多して幾許と云ことを知がたし、此前に一條の路あり、甚だ狭く細しと云へども敵の備ありとも見ず、陛下速に此路より走り玉へ。項王これに從ひ、馬を拍て細路へかゝり、廣武山を望で走りけるが、向の山の頂を見ば、韓信床の上に高く坐し、笙を吹歌を謠ひ、悠々として酒を飮居たり。項王勃然として大に怒り、諸軍に向て、腐夫われを侮ること何とて此の如なる、汝等急に攻上て奴を生どれと下知するに、韓信山の頂より大木大石雨の如く投下させしかば、楚の兵一人も近付こと能ず。項王齒を切り眼を瞋し自ら斬て上んとひしめくを、季布急に諫て、甚だ無用なり韓信箇樣に傍若無人の體をなすは、陛下の怒を發して自ら攻上り玉はんを、鐵砲石火箭を以て討ん爲なり、暫く先退て陣をとり、明日敵の勢の少き方を伺て走り玉へと云ども、項王なほ怒止ざりしかば、又鍾離昧自ら項王の馬を引て、是非なく退んとするに、四方八面より早漢の兵渦まき來り、高き阜の上より鐵砲火箭を飛すこと雪の散ごとくなりければ、滿山の草木みな火もえ付て明なること白日の如なれば、楚の勢又大に亂れ立て、或は討れ或は生捕るゝ者いく千萬と云ことなく僅に百十騎に討なされしかば、項王今は戰を好ず、諸將と力を振て一方を切破り、路を奪て逃んとすれば、婁煩一手の兵を引て路を遮るを、項王雷の落る如く喚て蒐り、七八合戰て了に婁煩を馬より下に突落し飛が如くに馳けるに、又柴

して路なければ、大軍急に進むこと能じとて、僉議未だ定ざる處に、俄に四方より鐵砲火箭を一齊に放ち合せ、北より樊噲、灌嬰、周勃、周昌、西より靳歙、盧綰、呂馬通、楊喜、左には張耳、張倉、右には夏侯嬰、王陵、中軍より漢王多の大將を率ゐ一擁して殺到せしかば、楚の兵落々として戰ざるに自ら亂る。項伯、鍾離昧等聲を擧て、逃る者は斬て捨んと呼しかども敢て鎭ず、項王甚だ怒り、我昔し秦を破りし時だにも、釜を破舟を沈て未だ嘗て敗北せず、今いかなれば僅の漢の兵に遇て勝こと能ざるとて、槍を擧て殺出しければ、九江王英布路を遮て打止んとす。項王大に罵て曰、叛國の賊何の面目ありてか我に見る。英布も又罵て申けるは、汝昔し我に命じて放に義帝を弑させ、却て其罪を悉く我に歸し、天下の諸侯に觸て我を恨み詈しむ、我いま義帝の爲に此悖逆を誅し、且は我心中の憤を散ぜんとて、斧を振あげて驀地暗に打て蒐り、人まぜもせず只二人五十四合戰て、未だ勝負を分ざるに、番將婁煩又一手の勢を引て殺到しければ、楚の勢いよ〳〵散々に成て敗北す。季布、桓楚急に馬を馳出し聲を擧て、陛下且く退玉へ、臣忽に此賊を誅せんと呼りければ、項王乃ち槍を收め傍なる阜に上て息を繼、英布、婁煩は勢に乘て大に進み、又季布、桓楚と良久く攻戰けるに、又曹參、柴武が二手の勢出來り、次第々々に大軍潮の沸が如く圍繞しければ、鍾離昧急ぎ項王に奏して曰、今すでに日も西に傾

信一戰にも及ず、佯り負て東南に向て逃走る。項王三軍を勵し、今日誓て此胯夫を生どり、我無窮の恨を雪げと呼り電光の如く追殺すれば、項伯、項莊、周蘭、周殷、虞子期、鍾離昧、桓楚、丁公、雍齒等跡に續て追かけ、漸く廣武山の中に入ける時、鍾離昧急に項王に奏しけるは、此山樹木生滋り甚だ險阻にして外に路なし、敵もし兵を伏て山の口を截塞ば、御方の勢いかんともすべからず、陛下餘に長追し玉はず、暫く後陣の來を待て、先この所に陣を取玉へと云ける處に、先陣より報じて韓信遠く逃失て行方を知ず、前面は土山險して進べき路なしと申す。項王これを聞て、暫く陣を居後陣を待て徐々と退んと云けるに、忽ち士卒來て、後陣の勢は漢の大將樊噲、漢嬰に阻られ、大半討れて進ことを得ずと注進しければ、大に驚く處に、耳根に一聲の鐵砲を響す程こそあれ、四方八面より金鼓天に喧く、喊の聲山壑を震動し、漢の兵雲霞の如く群り出て山の口を截塞ぐ。鍾離昧が曰、前には大山聳て進れず、後には漢の大軍路を塞で退れず、若久く此所に留ば、敵の勢いよ〳〵重て如何に防とも出がたからん、陛下早く此を突破て、後陣の圍れたるを救ひ玉へ。項王の曰、敵大勢にて山の口を固たれば、容易く通ること能ず、却て大に打破られん、不如勢に乘て韓信を追かけ、向の土山を過越ば、必ず逃路あるべし、汝は諸軍を點檢して我跡より進み來れ。項伯が曰、たゞ恐は前の山甚だ險難に

れば大小の諸將を集て手配を定む。其人々には、第一に樊噲、灌嬰、第二には周勃、周昌、第三には斬歙、盧綰、第四には呂馬通、楊喜、第五には張耳、張倉、第六には番將婁煩、第七には夏侯嬰、王陵、第八には曹參、柴武、第九には九江王英布、第十隊には漢王自ら大小の將士を從へ、各精兵五千を領じ、山を繞て埋伏し、鐵砲を鳴を合圖に急に一度に打で出べしとて、手配すでに定ぬ。去程に項王は自ら大軍を統て風擁して推よせ、先季布に命じて漢王に逢て申べき事ありと呼せければ、漢の陣より韓信馬を乘出す。項王これを見て陣前に立出、大音あげて申けるは、韓信汝は元楚の臣、朕さきに武涉を使として頻に召ども惑を取て從ず、汝今日例の奸計を施ことなく、明に我と勝負を一戰に決せよ。韓信申けるは、陛下は當代の帝王天下の人主、宜く穆々として深く九重の內に藏れ、大將に命じて外の侮を防しめ玉ふべきに、安ぞ親ら槍を提げ戈を執て凡下の輩と勝負を論じ、自ら辱を取ことをし玉ふぞ。項王の曰、汝妄に無用の舌を動す、今もし我と十合戰ふことを得ば、我早々に戈を倒し兵を息て、天下を悉く漢王に讓り與ん。韓信が曰、勇不レ可ニ自恃一、强不レ可レ持レ久、もし陛下一たび某が手に破られ玉はゞ、空く一生英雄の名を失て如何に後悔し玉ふとも及まじ、然るべくは一人の大將に命じて某と戰しめ、陛下は深く陣中に在て威儀を失玉ふな。項王聞も敢ず大に怒り、槍を横て突て蒐ば、韓

り來て申けるは、元帥の陣中更鼓甚だ明にして一つも誤ず、諸所の守も十分嚴なるが、未だ元帥の行方は知候はず。漢王心の中いよ〳〵安からず、汝再び行て韓信が陣の邊に竚み、韓信が歸たるを見ば、早々に來り報ぜよとて、自ら燈を挑げ沈吟して坐し玉ひ、已に三更の鼓も鳴て月も早西に傾ける處に、士卒馳歸て、元帥いま陣中に歸れりと報ず。漢王なほ疑て信とし玉はず。蕭何を召て、汝行て韓信が消息を聞來れと宣ければ、蕭何乃ち從者を引て到けるに、灌嬰夜廻に出て之を見つけ、丞相いかなる故ありて何方へか行玉ふと問。蕭何答て曰、われ元帥に見ん爲に出來れり。灌嬰が曰、元帥なほ未だ寢玉はずとて、中軍に伴ひ入て見しむ。韓信申けるは、丞相夜深て來り玉ふ、必ず心に疑こと有ならん。蕭何が曰、元帥今晩なに事ありてか遠く出て深更に及で歸玉ふ。韓信が曰、われ明日の合戰大に楚の勢を破んと欲す、項王の武勇元より天下無雙なれば、容易く勝ことを取がたし、此ゆゑに我項王を破る地を見立ん爲に、晩方より出て只いま歸り來れり、明日よく〳〵諸將に教へ、機に隨ひ變に應じて奇妙の計を用べし、君臣父子の間と云ども、預め妄に語べからず、丞相主上と共に明日某が項王を破を見玉はゞ、自ら此計を知ん。蕭何これを聞て甚だ喜び、別て急に馳回り、事の樣を子細に奏しければ、漢王始めて心を安じ喜玉ふこと限なし。韓信は敵の夜討を心元なく思ふて終夜眠ず、夜明け

て攻ること能じとて、諸將に命じて精兵二十萬を擇び、諸所の要害に陣を取しむ。此とき漢王は矢疵漸く平愈しければ、韓信を召て楚を攻る計を問玉ふに、韓信奏しけるは、項王久く兵を廣武に屯して粮乏しく力疲る、臣いま軍馬の調練よく熟したれば、此時節を失ず今日大王と共に進發せんと欲す。漢王喜び、只元帥の意に任と宣へば、韓信乃ち大軍を統て發向し、漢王は諸の將士と共に後陣に備て進玉ふ。韓信は此日廣武を二十里隔て寨を下し、諸將を集て、我今日遠路を來ぬれば、敵必ず御方の將士の疲れ果て陣中何の備も有まじと料り、急に來て夜討することも有ん、各緊く陣々を守るべしと云ば、皆命を受て出去ぬ。漢王も跡より來て、別所に陣を取、晩に及で張良、陳平、蕭何等と軍評定し玉ひ、韓信をも召寄て、一同に議せんとて、軈て使を送られけるに、暫ありて周章しく馳歸り、某元帥の陣に行て見に、元帥は陣中に居玉はず、左右の人に尋て候へば、今晩數十騎を率ゐ、東南に向て去玉ひしが、今に至て行方を知ずと申し候と奏しければ、漢王大に色を失ひ、今漢楚相拒で數十萬の軍馬こゝに屯す、然るに韓信元帥の職を掌ながら、之を捨て逃れ去は、是楚の敵を畏にあらず、必ず項王と内應し、却て我を伐んと企るならんと宣ふに、張良等も更に思ひ寄ざることなれば、敢て一言も云出さず、心疑てあきれ居たり。漢王又士卒に命じて再び韓信が陣中の樣を伺せらるゝに、歸

經ざるが如く、已に見了りて、我昔項王と同く懐王の前にて兄弟の義を約せり、然る時は我父は乃ち汝が父、いま楚にありと云ども漢の陣に在と異なることなし、何ぞ彼此を較べ論ぜんや、汝もし太公を殺さば、唯天下の人われを罵のみにあらず、汝前日ひそかに英布を下知して義帝を弑せしこと今に至て天下の諸侯歯を切る、然るに若又わが父を殺さば、益々唾を吐て汝を罵ん、此故に孟子も曾て殺二人之父一人亦殺二其父一と云りとて、宋子連に向て、汝歸て太公に見ば、只心を寛して暫く楚の陣に居玉へ、縱ひ漢に歸玉ふとも更に楚と異なることなき由を能々傳よと云了り、二人の侍女に扶られて帳中に入玉ふ。張良、陳平等酒を出して持なしけるに、宋子連は今一度審に問囘んと思へども、漢王再び出玉はざりしかば、了に張良等と別て楚の陣へ歸けり。項王は宋子連遲しと待ところに、忽ち左右の人、只今歸り來れりと報ず。項王乃ち召て子細を問に、宋子連右の事共一々に奏しければ、項伯傍に在りて申けるは、臣つら〱漢王の所爲に見に、了に大事を成こと能じ、大王たゞ備を嚴にして之を防玉へ、漢王決して勝ことを得じ。項王申けるは、劉邦は乃ち酒色を貪る小人、父母妻子を見こと草芥の如し、安ぞ是非を論ずるに足ん。宋子連が曰、臣成皐へ到しに、漢王なほ熟醉して、書簡を見了ても更に太公を念とせず。項王の曰、然りと云ども太公楚の陣にある間は彼尙も力を盡し

して衣冠せる者なりとて卽時に中大夫宋子連を使として成皐へ遣けるに、日を經て成皐に到り、楚の使宋子連、太公の書簡を傳へ來れりと告ければ、漢王乃ち張良、陳平を召て之を議し玉ふに、張良申けるは、此は項王の大王に兵を引退しめん爲の計なり、大王書簡を見玉はゞ、必ず歎き哀玉はず、只箇樣々々に答玉はゞ、十日を出ずして太公國に歸り玉ふこと有ん、縱ひ楚にありとも項王決して殺ことを得じ。漢王打うなづき、宋子連を迎へ入て書簡を見玉ふに、其文に曰、

太公付書漢王劉邦、嘗謂虞舜大孝、棄天下如敝屣、爾以富貴爲重、視我如路人、自雎水遭虜、今經三年、幸蒙項王垂好生之德、不卽加誅、拘處公所、日給飲食、得延性命。王后呂氏思想太子、涙不能乾、爾任意縱橫天下、略不以爲念、所謂鐵心腸土木形骸也。卽今項王取我至廣武、累次要誅、欲懸頭成皐、以彰爾不孝之名、我再三哀告、特修家書付爾、爾可思、此身從何而來、　世間萬物以何爲重、若解此理、使如大舜棄天下如敝屣耳。作速罷兵取我還國、使父子夫妻完聚、豈不美乎。若仍前屯兵相爭、決我命難保、爾縱有天下、是捨父命而圖富貴、萬世唾罵。爾心豈能自安邪。臨楮泣血、爾當自省。

宋子連密に漢王の體を伺ひ見に、宿酒未だ醒ず、太公の書簡を見に、醉眼朦朧として總て意に

漢王
張良
宋子連

廣武山
漢楚大戰
陳平

○廣武山漢楚大戰

項王は廣武に陣を屯し、項伯、鍾離昧等を召て申けるは、漢王いま天下の諸侯を會し、諸國の勢を招き集めて、われと戰を決せんとす、我軍中粮乏して久く防こと能じ、汝等いかなる計かある。項王が曰、大王さきに太公を彭城に囚へ置給へり、急ぎ此所へ召よせ、書簡を送しめて、漢王もし兵を退ば乃ち太公を放して成皐へ歸らしめよ、若又兵を退ず尙始の如く相拒ば、早く太公を殺して劉邦が不孝の名を萬世に傳玉へ、陛下もし此計を用玉はゞ、大に百萬の雄兵に勝ん。項王之に從ひ、卽時に武士に命じて彭城へ到しむるに、次の日軈て太公を引て廣武へ歸る。項王太公を安撫して申けるは、汝が子劉邦、久く朕と相拒で更に汝を以て念とせず、汝いま一通の書簡を劉邦に送り、兵を罷て退しめよ、然らば汝を呂后と同く成皐へ送り歸して、父子夫婦みな一所に集しめん。太公の曰、劉邦幼より財を貪り色を好で父母を顧ず、今たゞ富貴を重として我を此に棄ること忘たるが如し、縱ひ書簡を贈とも決して從まじ。項王の曰、汝まづ試に書簡を贈れ、劉邦果して退ずんば、朕その時別に思案あり、太公乃ち書簡を寫して項王に呈せらるれば、項王見了て、劉邦もし此書を見ても尙退き去ずんば、眞に所謂る禽獸に

首尾相應ずること能じとて、各手配を定て晩に及で進發し、一夜に悉く引退ぬ。漢の細作いそぎ角と注進するに、張良聞て、果して我料しに違ずとて、諸將に命じて跡より進せ、漢王も車の內に臥て徐々と發向し、已に二日を過けるに、先手より報じて、夏侯嬰、周叔出來れりと申す。漢王乃ち召玉ふに、二人馬より下て車の前に拜伏し、韓信すでに成皐まで來り、大王と同く兵を會して楚を伐んとて、臣二人に一萬の人馬を授て御駕を迎しむと奏しければ、漢王斜ならず喜び、路を急で次の日成皐に著玉へば、韓信大小の將士と共に城を出て遠く迎へ奉る。漢王直に城に入て百官の朝拜を受、韓信に向て宣けるは、元帥久く遠方を征し、屢奇功を建て多く勤勞せり、朕しきりに項王に困られ、已に七十餘戰を經て、百姓業を安ずることを得ず、將士甲を解ことを得ず、今元帥遠く大軍を率ゐ來て朕を扶く、楚賊あに亡ざらんや、只太公久く敵に囚て國に歸玉はず、朕日夜これを悲で食咽に下ず、元帥もし計を運して父子相對することを得せしめば、乃ち萬世の大功ならん。韓信が曰、項王あに故なくして太公を放し歸さんや、臣いま大王と兵を合せて急に攻戰ひ、彼が心力疲れ苦を待て宣く計を施ん、大王御心を安じ玉へ。漢王の宣く、朕專ら元帥に任す、早く凱歌を奏して朕が心を慰せよ。韓信乃ち拜し別て大軍を引率し、城外に出て廣き野に陣を取、日を擇で廣武へ寄んと、晝夜に軍馬を調練す。

て戰ずして自然に亂れ、右往左往へ敗走せしかば、項王之を制すること能ず、急ぎ師を收めて、了に我陣へ引歸る。張良、陳平等は帳中に入て漢王に見に、矢疵左程の深手には有ざれども、急所の痛手なれば、苦痛忍び難して起ことを得玉はざりしかば、張良諫て、楚の勢已に弱て引退き、韓信も又大軍を總て成皐まで參向せり、大王少し忍で三軍の心を安じ、早く成皐へ赴て韓信に會し、勢に乘て楚を伐玉はゞ、大事必ず此に決せん、今一大事の時に當て安ぞ少の矢疵に惱されて病臥玉ふべきやと云ば、漢王軈て起あがり、朕謹で先生の敎に從んとて、自ら出て諸軍を勞玉ふ。張良限なく喜び、諸將に向て、今楚の勢彭越に兵粮の路を阻られて將士疲れ苦む、我料に、久く此所に住こと能ず、一兩日の內に必ず逃去べし、諸將密に跡より徐々と進發し、成皐へ到て韓信と兵を一手に合せて楚を破るべしと云ければ、皆令を受て退て用意をなす。扨又項王は諸大將を集て商議しけるは、彭越御方の粮道を阻て三軍食に飽ず、韓信又成皐に在て漢王を扶れば、滎陽急には破り難からん、不如暫く退て廣武に陣をとり、快く兵粮を運送して其のち又進み來んは如何に。鍾離昧が曰、陛下の聖見甚だ宜に當れり、今宵乃ち密に退べし、陛下は自ら一手の勢を率る、後陣に備て追蒐る敵を防玉へ、某等は諸軍を督て本道へは進ず、密に南の小路より山越に退て韓信が奸計を避ん、もし前路を敵に阻られば、

罪の七なり、放に義帝を逐て自ら彭城に都し、漢梁の地を奪て自立して王と稱す、罪の八なり、大江の中に兵を伏て陰に義帝を弑しむ、罪の九なり、政を施こと平ならず、民に臨に信を以てせず、大逆無道にして天下を殘害す、罪の十なり、我この故に義兵を起し、諸侯に從て殘賊を誅す、安ぞ戰を好んや。項王これを聞て大に怒り、戟を舉て驀地暗に打て蒐ば、漢王一戰にも及ず散々に成て逃玉ふに、項王手滋く追かけて甚だ危く見ければ、諸大將急にかけ塞て戰ける間に、漢王は後陣を指て逃玉ふ。鍾離昧は兼てより項王の命を受、漢王の歸る路に夥く射手を伏て漢王を射殺んと待かけしが、漢王の馳通るを見て、急ぎ一聲の鐵砲を響しければ、之を合圖に兩方より數千の弩一度に起て、矢の飛こと雨の如し、漢王魂を失ひ馬を拍て走り玉ふに、矢一つ心に中て箆深に射こむを、急に拔すて玉へば、其痛み堪がたく、血流て止ざりしが、諸人の鋭氣を失んことを恐れて、急に袖を以て疵を掩ひ、手に足を捫て今敵に足の一指を射られしかども幸に恙なしと宣へば、諸大將漢王の手を負玉ふを見て戰んとする心なく、我も我もと逃走れば、項王三軍を驅て透間もなく蒐かけ、漢の陣に亂れ入てまくり斬に薙で囘れば、漢の兵數を知ず伐れて十分危かりける處に、忽ち東南の方より早馬一騎到來し、韓信大勢を引て已に成皐まで出來り、彭越又楚の兵粮の道を切塞ぎ候と報じければ、楚の將士この注進を聞

弓を開て射んとするを、眼を瞋して大に一聲叱りけるに、婁煩魂を失ひ、目見こと能ず、手矢を放こと能ず、馬も驚て數十歩しざりしかば、了に退て陣中へ逃歸る。項王いよ〳〵大軍を下知して追殺するに、漢の兵手負打死その數を知ず。漢王左右に向て婁煩を追蒐るは誰ぞと問玉ふに、項王なりと答しかば、大に驚き玉ふ處に、項王はや漢の陣門まで攻來れりとて、上を下へと騷亂す。漢王急に陣の後へ逃隱れんとし玉へば、項王馬を勒して大音あげ、吾一言あり漢王快く出て之を聞と呼りければ、乃ち多の將士を左右前後に引從へ緊く甲て馬を出し玉へば、項王申けるは、楚漢鋒を爭ふこと數年、われ未だ自ら汝と戰を交ず、汝いま速に出來て快く我と勝負を決せよ、終日相拒で三軍を苦しむること勿れ。漢王の宣く、我汝と天下を爭て相拒にあらず、但汝が惡逆天地を貫て神人共に怒る、我この故に天下の諸侯と同く共に無道を伐て民の爲に害を除んと欲す、吾いま大槩汝が罪惡を數て之を說ん、兩方の軍勢も能憶にきけ、汝懷王の約に背て我を漢中に左遷す、是罪の一なり、矯て卿子冠軍宋義を殺す、罪の二なり、趙を救て之を報ぜず、擅に諸侯を刧して關中に入、罪の三なり、秦の宮室を燒滅し、始皇の墓を撥て其財寶を貪とる、罪の四なり、秦の降王子嬰を殺す、罪の五なり、秦の子弟二十萬を新安にて土阬に埋殺す、罪の六なり、諸侯を悉く王爵に封じ、善地を分ち與て其故主を逐徙す、

しめらる。項王は滎陽を三十里離て陣を取、まづ使を以て申けるは、天下洶々として久く安からざるは、徒に吾と汝と相拒で止ざる故なり、願は今日雌雄を一戰に決して天下の赤子を憐み安ぜんと欲す。漢王笑て、吾力を闘しむることを欲せず、願は智を闘しめんと云て使を反されければ、項王聞て以の外に怒り、丁公、雍齒、桓楚、虞子期四人を下知して馬を出さしむれば、漢の陣より婁煩刀を舞して蒐出、兎角の問答にも及ず、左に撥ひ右に逼り、前に當り後に冲り、只一人四人の大將と五六十合戰けれども、氣力ますく加て刀の法少も亂ざりしかば、楚の諸將これに敵すること能ず、急に馬を回して逃んとするに、楚の陣より又季布、李蕃、張月、項昂四人戟を横て討て出けるに、婁煩屑ともせず、喚き叫で此を先途と戰たり。王陵、周勃等は婁煩が久く敵の大將と戰ふを見て、其過あらんことを恐れ、急に兵を進て力を協ければ、楚の勢忽然として大に亂れ、我先にと逃走るを、婁煩得たり賢と持たる刀をからりと投すて、腰なる弓を取て馬上より矢を放ち、忽ち李蕃、張月二人を射て落しければ、季布は二人が射殺されたるを見て大に膽を冷し、這々本陣へ逃歸る。項昂は李蕃、張月を救んとて、急に馬を馳寄たるに、又婁煩に左の頬を射られて驚き媰く處を、王陵刀を擧て後より飛で蒐り、了に馬より斬て落して楚の勢を散々に蒐破る。項王之を見て大に怒り、自ら戟を提て馳出ければ、婁煩又

縦ひ天下を有とも一朝も居ことを得じ、汝等もし良策を用て太公國に歸ることを得玉はゞ、是不世の功ならん。張良が曰、項王太公を以て質とす、豈敢て放し歸さんや、若今大軍を起して火急に息をも繼せず攻かゝり、彼が力疲れ心困とき、却て使を遣して和睦を求ば、或は太公を歸すことも候べし。時に外より人來て、蕭相國たゞ今北番の人馬を率ゐる一人の番將を伴て關中より出來れりと報ず。漢王喜び、北國勢遠く來る、必ず楚を破ことを得んとて、急に召て對面し玉へば、蕭何乃ち番將を引て見しむ。漢王禮了て問て宣く、番將何の所よりか來れる。蕭何が曰、番將姓は婁名は煩、北貉燕の人、大王の德を慕て咸陽へ來り、力を同して楚を破んと欲す、臣よく實跡を審にして伴ひ來れり、此人騎射を能して萬夫不當の勇あり。漢王婁煩が身の長一丈面目甚だ猙獰なるを見て大に喜び、御衣一襲黃金百兩を出して之に賜ひ、重く帳下に用玉ふ。項王は武涉を使として韓信を招けれども更に從ざれば、龍沮を彼に討れたることを十分恨み怒り、十萬の勢を起して徑に滎陽へ推寄る。漢の細作急ぎ此由を注進しければ、漢王大に驚き、群臣を召て商議し玉ふに、蕭何申けるは、番將婁煩に命じて防ぎ戰せ、諸の大將をことごとく出して力を協しめ玉はゞ、韓信も其間に後より來り挾で之を攻ん、然らば項王何を以てか勝ことを得ん。漢王これに從ひ、婁煩を下知して敵を防せ、王陵、周勃等に命じて之を協

を得て、人の心これに歸し、天命默して之を祐く、蕭何宰相の才ありて、忠貞にして貳あらず、張良、陳平、孫呉が智ありて機變測り難し、加之英布、彭越、樊噲が勇、周勃、王陵、灌嬰等が如き、萬夫不當の大將其數を知ず、福德綿々として萬世不拔の基已に定れり、然るに汝形勢を察すること能ず、妄に唇舌を動して狂言を吐出し、元帥を欺て漢に反しめんと計る、元帥もし慮ずして一旦之に從玉はゞ、是虎を畫て成ず却て狗に類するの喩に似たり、亦大に悞ずや。蒯徹これを聞て痴なるが如く、醉が如くにして口を開こと能ず、密に心に思けるは、我いま韓信に從て一同に楚を伐、たとひ如何なる功勞を建るとも、若わが韓信に謀反を勸たる由を漢王に告る人あらば、酈生が如く烹殺されんこと目の前にありとて、此より暇を乞て佯て狂人となり市に出て或は歌ひ或は笑ければ、韓信も其意を悟て、了に再び對面せず、急に三軍に下知を傳へ日を擇で大軍を起し、滎陽へ到て漢王と同く楚を伐んと用意をなす。

○項羽伏弩射漢王

漢王は滎陽に在て、晝夜太公を思ひ慕玉へども、施べき計なく、或とき陳平、張良に向て宣けるは、太公一族久く彭城に囚て國に歸ることを得玉はねば、朕が心欝々として舒こと能ず、

畧震主者身危、功蓋天下者不賞と云り、大王いま主に震の威を戴き、不賞の功を挾で安に歸せんとか欲玉ふや、願は深く之を慮れ。韓信これを聞て、御邊暫く言こと勿れ、吾つらつら思案せんとて、數日を過けるに、蒯徹又來て申けるは、大王御心を決し玉へるか、夫時は事の候なり、計は事の機なり、苟も過を聽、失を計て能久く安き者は少し、故に智は決の斷なり、疑は事の害なり、毫釐の小計を審にして天下の大數を遺こと、智ありて能之を知ると云ども、又決して行こと能ざるは百事の禍なり、夫功は成がたくして敗れ易し、時は得がたくして失ひ易し、時なる哉時なる哉、一たび失ば再び遇がたからん。韓信これを聞て心の中に、我しば〳〵大功を建たるを以て、漢王了に我に負玉はず、安ぞ反に忍んとて、猶豫して決せざる處に、忽ち階下より一人大音あげて、大王必ず蒯徹が言を聽入玉ふな、甚だ人臣の節を失ふことあり、我蒯徹を伴ひ漢王の前に出て明白に是非を決せんと呼りければ、蒯徹膽魂を失ひ、大に驚て之を見に、大中大夫陸賈なり、進み出て又申けるは、善事を言ものは先その勢を見て次に其形を觀べし、苟も勢強して形弱は實に弱に有ず、形勝て勢衰は是實に衰るなり、當世を以て之を論ぜんに、楚は勝るが如なれども形の勝るなり、漢は弱に似たれども形の弱なり、元帥強弱勝衰の間未だ一つも定ず、漢王いま暫く利あらずと云ども、天下の勢已に八九

習ひ得たり、臣つねに大王の面を相に、貴こと封侯に過ず、今日大王の背を見に其相貴こと云べからず。韓信が曰、御邊いま何とて此言を出せる。蒯徹が曰、昔秦の政甚だ苛刻にして四海深く之を患しに、今又漢楚これに繼で別れ爭ひ、干戈已とき無して、天下の人肝膽地に塗れ、骸を中野に暴こと幾千萬と云ことを知ず、楚人力に乘じて席の如に五國を捲、威を天下に振ふ、然れども西山に迫られ、已に三年に及で進ことを得ず、漢王鞏洛を距ぎ、山河を阻て日夜に苦戰すれども、是も尺寸の功なし、是兩王智勇共に困の時にして、其命みな大王に懸れり、我大王の爲に計に、宜く兩つながら利して共に之を存し、天下を三分して鼎足の如く立て動ことなく、大王强齊に據て燕趙の二國を從へ、民の欲する所に任て西に向玉はゞ、天下影の如く靡て響の如くに應ぜん、古人も天與不取、反受其苦、時至不行、反受其殃と云へり、大王よく詳に之を察して機會を失玉ふことなかれ。韓信申けるは、漢王われに遇すること甚だ厚し、安ぞ利を貪て義に背に忍ん。蒯徹が曰、昔張耳、陳餘二人共に刎頸の交を結しかども、張黶、陳澤が事を爭に及で、張耳了に陳餘を泜水の南に殺して頭足おき處を異にす、今大王漢王と交こと、必ず張耳、陳餘が如きこと能ずして、事張黶、陳澤より大なる者多し、此故に臣竊に大王の漢王を危からずとし玉ふを以て甚だ誤れりとす、古より野獸已盡而獵狗烹と云、又勇

て兩國の好を通じ、共に無窮の富貴を享んと欲してなり。韓信が曰、それ人の極て貴は王に如はなし、吾すでに齊王たれば、人間の位極れり、又何ぞ外に求ること有ん。武渉笑て申けるは、大王もし某が言に從玉はゞ、齊王の位永く保べし、若然らずんば、今日たとひ楚を亡し玉ふとも、明日は此位に居こと能じ。韓信が曰、これ如何なる故ぞ。武渉申けるは、項王某を此に來らしむるは、大王と好を通じて漢王と天下を三分にし、鼎足の勢を成て各封疆を守んと欲してなり、大王の奇謀妙算元より兩王の上にあれば、永く富貴を失玉はじ。韓信申けるは、大夫の言一々理あるが如なれども心の中よく之を思ふに、我昔楚に在て項王に事しとき、官は郎官に過ず、位は執戟に過ず、言聽れず、計用られず、此故に去て漢王に歸服せしに、萬項王とは引替り、我に大將の印を授て數萬の衆を掌らせ、自ら衣を脱で我に披せ、食を分て我に賜ひ、言ば聽、計ば從ふ、我この故に齊王と成ことを得たり、漢王われに親に信を以てすること此の如なるに、苟も若之を負て楚に歸する時は甚だ不祥なり、我縱ひ粉骨碎身せらるとも此心は易ことなし、大夫願は吾爲に深く項王に謝せよとて、金帛を受納ず悉く回しければ、武渉韓信が動すべからざるを見て力及ず、了に別て彭城へ歸けり。蒯徹は韓信が前に在けるが、天下の大權已に韓信に歸することを知ければ、乃ち近く寄て申けるは、臣昔異人に逢て相法を能

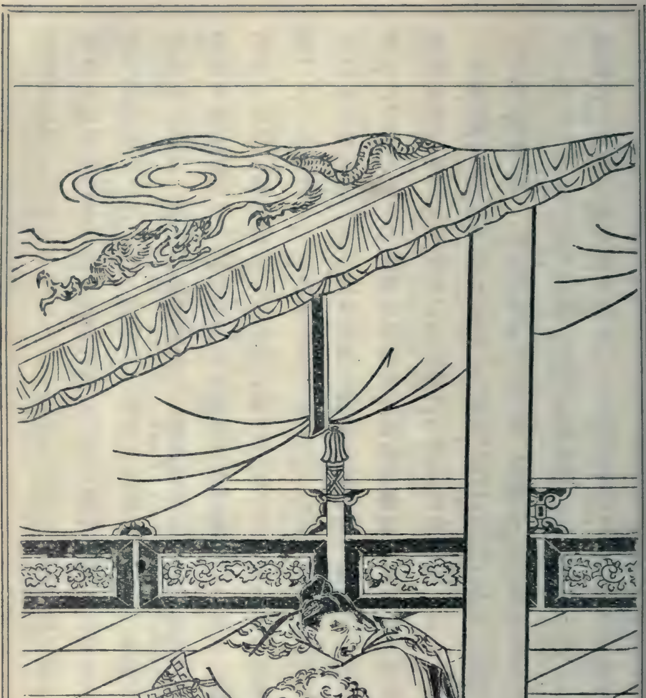
を冷し、急に項伯、鍾離昧を召て申けるは、韓信褒中を出しより、屢戰ひ勝と云ども、さまでの事は有まじと思しに、今度龍沮を斬たる計を見に、誠に等閑の徒にあらず、漢王又大軍を滎陽、成皐の間に屯して勢甚だ盛なれば、朕兩所を防こと能ず、今一人辯舌の士を遣し、韓信に說て再び楚に歸服せしめんと欲れども、恨は朕が手下に此使を命ずべき人なし。項伯、鍾離昧が曰、臣すでに此心ありと云ども未だ之を奏するに暇なかりしに、今尊命を承る、若此の如んば大に社稷の福ならん、韓信もと楚の臣なれば、一旦敵に降ると云ども若心を改て初に復ときは、是理の當然なり、今大夫武涉は智蘇秦に過、辯子貢に超たり、陛下この人を使として說しめ玉はゞ、韓信首を俛て降參せん。項王喜び、卽時に金帛を備へ、武涉を召て、汝韓信に說て御方に歸復せしめよと云ば、武涉命を受て直に臨菑に到り、門を守る人に告て達せしむるに、韓信申けるは、武涉は素より辯舌を能す、料に今こゝに來るは、必ず我を說ん爲なるべしとて、乃ち迎へ入て對面するに、武涉金帛を捧て卽位を賀す。韓信申けるは、我昔大夫と同く楚に事て一國の臣たりしかども今は各その主に事て是敵國なり、我安ぞ此贈物を受ん。武涉が曰、大王百萬の師を統て三齊を保ち、威武大に振て遠近畏服す、敢て昔日楚に在て臣たりしことを論ずるにあらず、今某を使として金帛を贈る者は、項王深く大王の勇名を仰ぎ、昔日の罪を述

かば、張良別を成て韓信に申けるは、漢王兵を滎陽に屯して、日夜に太公の久く楚に囚を悲み思ひ、此ごろ又項王の成皐へ攻寄る由を聞て、彌御心安からず、足下速に兵を起し、共に楚を伐て太公を救へ、必ず遲延し玉ふな。韓信が曰、われ急に諸の郡縣へ檄文を馳て兵を集め、十日の内に必ず此所を打立ん、先生まづ歸て此由を主上に奏せられよとて、又周叔を使とし、張良と共に滎陽へ遣して恩を謝せしむ。二人伴て齊を出去ければ、韓信日を擇で齊王の殿に陞り、冕旒を具て大小百官の朝賀を受、即位の儀式事了ぬ。韓信はさしも智謀の大將なれども、蒯徹が佞言に惑され、君を要して齊王たらんことを求む、漢王この時項王と衡を爭ふ最中なれば、已ことを得ずして之を封じ玉ふと云ども、其心甚だ喜ず、惜らくは韓信たゞ急に立て王となり、目前の富貴を圖ことを知て却て大なる禍の到を知ず、漢王初め睢水に敗軍して頻に召ども行て之を救ず、其のち成皐に圍を受て甚だ危かりしかども亦之を援ず、今天下分れ爭の時、君の命を待ずして齊に王たらんことを求む、此三の罪あれば漢王心の中深く恨で、後に未央宮にて誅殺し玉ひしも理なり。扨又龍沮が敗軍は、彭城へ逃歸て、具に韓信が龍沮を斬り周蘭を追て大に楚の勢を破り、齊王を擒にし田横等を蒐散して了に齊の七十餘城を乘とり、今大軍を臨菑に集て、不日に漢王と同く此所へ攻寄んとする由を報じければ、項王これを聞て大に膽

漢王足を跌て長嘆して宣けるは、酈生昔し高陽に始て見しより一向に忠烈を以て朕を扶け、若干の大功を建たり、朕大業未だ定ざれば、萬一も其德に報ざるに一旦空く齊王の爲に烹殺さる、嗚呼惜べし憐べし、朕他日天下を有ことを得て、功を論じ賞を行ば、彼が子孫みな爵祿を與べしとて、卽時に紀錄官を召て酈生が前々の功績を悉く錄せしめ、又手ら勅書を寫して韓信を東齊王に封じ、張良に齊王の印を持せて臨菑へ遣さる。張良臨菑へ到て韓信に見え、禮了て申けるは、將軍表を上て假に齊王たらんことを求む、漢王將軍の趣を破り齊を下して其功甚だ大なるを以て、假にするまでもなし、正く立て齊王に封ぜんとて、某に命じて齊王の印を送玉ふ。將軍速に位に昇り三齊を鎭撫して諸侯を制服し、早く軍馬を整て成皐の困を救ひ、兵を還して楚を滅し、漢の天下を定玉はゞ、將軍も又坐ら太平を享ことを得ん、韓信限なく喜で印符を受納め、勅書を捧て之を讀に、其文に曰、

　建國親侯、所以連屬天下而成其治、三代之制也。相國韓信屢建奇功、克定疆宇、不世之勳、當銘鍾鼎。新破齊地、甚難制服、不有隆爵重權、何以號令群下、卽封信爲齊王、俾治齊地、以安東土、仍調本部兵馬、克日期會、戮力伐楚、爾其欽哉、故諭。

韓信見了て南に向て恩を謝し、大に酒宴を設て數日張良を饗應し、諸の將軍みな拜賀の禮了し


周叔

張良躡足封韓信
漢王
陳平
張良

到得捷、斬龍沮於濰水、擒田廣於成陽、軍威雖振、而民心未定、古嘗稱、齊民多詐變之國、反復不常、恐或爲亂。臣願請齊王印、暫爲假王、以鎭之、待民心寧輯、卽統兵、隨車駕伐楚、則彊宇奠安海隅賓服世爲漢土、於變時雍矣。臣未敢擅便、賚表上請定奪。不宣。

漢王表を讀了り、勃然として大に怒りて、孺子いかなれば欺き詐ことの甚しき、我こゝに困こと日久し、然るに來て之を救んとせず、却て自ら立て齊王と成んと欲するやと宣ければ、張良、陳平是を聞て急に踊り出、漢王の足を躡で密に低語けるは、大王いま楚の郡縣數十を得玉ふと云ども、項王なほ廣武に兵を屯して日夜に漢を攻んと計る、大王もし韓信が齊に王たらんと望を制せんとし玉はゞ、甚だ御方に利あるまじ、不如彼が望に任て快く立て齊王とし玉はゞ、彼大に喜び彌大王の爲に心力を盡して敵を伐ん、若又これを許玉はずば、彼憤を發して大に御方の利なきのみにあらず、別に又一の大患を增なりと諫ければ、漢王元より諫に從ふ事流水の如なれば、忽に心悟りて宣く、誠に汝等が言の如し、我必ず從ん、夫大丈夫天下を定め諸侯を制服せんと欲せば、宜く明に位に卽て眞王と成べし、安ぞ假王となるの理あらんやとて、周叔を近く召て、韓信が齊を取たる次第、酈生が烹殺されたる樣を問玉ふに、周叔乃ち酈生、韓信が兩度書簡を往來し、竝に燈籠を掛て龍沮を斬、齊王田廣を擒にせし始終一々に奏しければ、

取勝、非假兩勢之威、何以成萬全之策。茲差使星馳召諸將、急來相議、協力破楚、料將軍以勝齊之師、而克久困之楚、兼以奇謀妙算、其奏績可立而待矣。將軍宜速來以慰惓惓。

とありければ、韓信卽時に下知を傳へ、三軍を整點して成皐へ參向せんとしけるに、蒯徹又進み出て申けるは、將軍まづ表文を寫し、周叔に持せて漢の使と共に滎陽へ到らしめ、齊王の印を假て早く王位に昇り、然して後に兵を起して共に楚を討玉へ、若この時を失ば、後に悔玉ふとも及ぶまじ。韓信喜び、是よく我意に合へりとて、次の日使者を呼で、今齊すでに平定すと云ども國風素より詐多して反復常ならず、我もし此地を去ば恐は事の變あらん、暫く齊王の印を假て此を鎭め、能軍民を心服せしめん、其のち師を起して楚を伐とも又遲からじ、我いま滎陽へ表を獻り、此事を奏せんと欲す、御邊いかに、我使を伴ひ行べきやと問に、子細あらじと領掌しければ、韓信大に喜び、多の金帛を出して使者に與へ、卽時に表を寫して周叔に持せ作て滎陽へ赴しむ。周叔命を受て打立、次の日滎陽に著しかば、乃ち漢王に見て韓信が表を獻る。漢王之を披き見玉ふに、其文に曰、

漢大相國臣韓信稽首頓首上言、國無其主、難以化理、民非權令、何以制服。臣仰仗天威、隨

通俗漢楚軍談 巻之十一

○張良躡レ足封ニ韓信一

韓信すでに齊の國を平定して民を安じ、大軍を臨菑に屯して、自ら齊王の宮殿を繞り見に、高樓層臺金銀珠玉を鏤て、其華麗なること云ばかりなければ、心の中斜ならず喜び、覺ず莞爾と打笑ければ、蒯徹傍に在て已に韓信が意を喩り、乃ち前に近付て申けるは、夫齊は五岳の東に當り、海に憑山を負て、東に瑯琊あり、西に濁河海岱の間ありて、都會の地、西塞の固、東道の雄なり、今元帥悉く之を平て軍威大に振ひ、郡縣畏れ服す、元帥宜く早々に使を馳て漢王に表を獻り、齊王の印を假に之に鎭め、根本の地とし玉ふべし、此機會必ず失べからずと云ける處に、忽ち外より漢王いま使を來して詔書を送玉ふと報じければ、韓信乃ち大小の將士と共に使を陣中へ迎へ入、禮了て詔書を披き見に、

寡人用ニ將軍計一、得ニ楚十數大郡一勢亦少振。而覇王久稽ニ太公一、志尚不レ悛、使ニ我父子離間一。方寸日亂、楚又欲下會ニ兵成皐一與レ我鏖戰以決中雄雌上。但相距日久士馬益困。遽與レ爭レ横、恐難

するに出あひ路を遮て生捕たるなり。扨又韓信は齊王の城を落たる由を傳きゝ、急に自ら大勢を領じて廿里ばかり追蒐たるに、向より夏侯嬰すでに齊王を生捕て出來り、事の子細を告ければ、韓信喜び只惜らくは田横を討洩せしことをと云て、高密へ伴ひ歸り、百姓を安撫し檄文を傳て諸の郡縣を諭けるに、悉く風を望て來服し、齊の地全く平定しければ、乃ち陣を移して大軍を臨菑に屯す。

けれども力孤にして出ること能ず、了に只一刀に曹參に斬て落さる。此は韓信始より龍沮が人となり驍雄にして性の烈こと火の如なるを能知ける故、まづ柴武に命じて一萬餘の嚢に沙を盛て濰水をせき止させ、河下に燈籠を懸て、之を切落す時は河上の嚢沙こと〴〵く崩れて、せき止たる水の一度に急に流る樣に操り、又龍沮が怒を激して燈籠を切落させん爲に、榜を立て六字を書つけ置ければ、案に違ず龍沮大に怒て、了に燈籠を切落しける故、嚢沙忽ち崩て大水俄に來り、果して一人も殘ず死たるなり。齊王は高密の城に在て、救の勢すでに敗れたりと聞て、針の席に坐するが如く、甚だ怕れ戰て急に姪の田光幷に田横を召寄て、龍沮さしもの驍將なれども、已に韓信に斬れたり、我勢孤にして如何に守るとも豈よく久きことを得んや、不レ如韓信に城を圍れぬ先に、密に兵を引て城を出海島に入て難を避、遙に漢楚の成敗を伺ひ、天下承平の時を待て再び計を運べし、今たとひ降參すとも漢王恐は許容せじとて、君臣終夜商議し、次の日早朝に人馬を整點し、東の門より一擁して出去けるに、向より一手の軍馬出來て路を遮り、一人の大將眞先に進で齊の兵を四角八方へ打散して忽ち齊王を生捉ければ、田光、田横大に膽を冷し敢て戰を好ず、這々圍を斬ぬけて直に海島へ逃去ぬ。彼大將は漢の夏侯嬰なるが、楚の周蘭を追蒐しかども、已に行方知ず逃失しかば、空く兵を引て歸んとするに、齊王の沒落

いよ〳〵氣に乘て大軍一度に河半に打入けるに、向に大さ斗の如なる一の燈籠を高く懸たり。龍沮心怪み馳寄て之を見に、燈籠の下に一の榜を立て弔燈毬斬龍沮と云六字を書付たりしかば、大に怒り諸の將士に向て曰、韓信わが大軍の追かくること餘に急なる故假に此計を設け、我軍心を惑してためらひ怪む其間に、遠く逃去んとする者なり。周蘭聞ていや〳〵輕々しく進玉ふな、今すでに夜深て今宵は殊に黑暗なれば、爭が俄にこの計を設ることを得ん、此は韓信預め此邊に兵を伏おき、我等が此に來るを待て、燈籠を印に四方より打て出て攻圍んと巧しならん、不如早く燈籠を切落し玉はゞ、敵必ず自然に亂るべしと云ければ、龍沮急に刀を拔て燈籠を切落しけるに、忽ち喊の聲大に起り、限なき漢の軍勢兩方より群り出たりしかば、諸軍大に驚く處に、又河上より俄に大水漲り來り逆浪滔々として天を浸し、其疾こと箭の如くなりしかば、楚の勢河半に在て前後に度を失ひ、我先にと岸へ上らんと、互に推あひ踏合ける間に、早大波渦まき來て、了に一人も殘ず溺れ死たり。龍沮は河下に在けるが、浪の音に驚て急に馬に鞭を加けるに、此馬は元來千里の名馬なれば、只一躍に北の岸に上り、暫く後陣の體を伺ふ處に、忽然として一聲の鐵砲を響して、漢の大將曹參、夏侯嬰等大勢を率ゐ來り、四方より取圍で緊きこと鐵壁の如し。龍沮暗の夜の事なれば、何れを其とも辨がたく、刀を擧て當るを幸に斬て囘

し、尚止ることを知ずして又此に來て天兵を拒んとす、汝誠に武勇あらば、快く出て我と勝負を決せよ、若戰ふこと能ずんば速に降れ、一命を扶て麾下に用ん。韓信天を仰で大に打笑ひ、汝は已に死人なり、然るに尙これを知ず妄に唇を掉ひ舌を動すかと云ければ、龍沮聞も敢ず刀を擧て飛で蒐れば、韓信槍を提て迎へ合せ、一往一來互に祕術を出して二十餘合せめ戰しに、龍沮精神ますく加て少も弱りたる體なかりしかば、韓信軈て詐り負て東南に向て逃走る。龍沮大に笑ひ、我元より奴が臆病なるを知、いま生捕ずんば何の時をか期せんとて、力を盡して追殺すれば、周蘭も人馬を驅て跡より進に、前に濰水と云る河あり、是は天下に隱なき大河にて、古より舟筏にあらざれば渡こと能ざるに、今水僅に帶の如く流て、漢の兵すでに向の岸にあり、周蘭屹と心付て、急に龍沮が馬の轡を執て引止め、將軍必ず進み玉ふな、濰水はさしもの大河なるに今却て水なし、此は定て韓信が計にて河上をせき止、楚の勢の半河を渡り過る時、急に切流んと巧しならん、若然らば我等爭か一人も命を全することを得んと云ば、龍沮申けるは、韓信已に大に戰ひ敗て身を逃んとするに暇なし、豈深き計あらんや、況や河水は旱澇に隨て多少あり、當に今十一月隆冬の節にして水の涸る時なり、此故に此の如し、安ぞ異に足んとて、馬を飛して追蒐しに、士卒來て韓信前面に在て遠からずと報じければ、龍沮いよ

を遣して漢の陣に至しむ。韓信戰書を得て之を見に、

楚大將軍龍沮書付二漢諸將知會一、韓信用レ兵未レ遇二勍敵一、如三魏豹不レ聽二周叔之諫一以致レ喪レ師、陳餘不レ用二左車之計一而斬二泜水一、燕王畏二聲勢一而暫降非二心之服一、三秦失二地利一而偶敗、非二戰之罪一、吾今受レ命救レ齊、與レ信決レ戰、則非二諸國可一レ比、爾速延レ頸以待、勿二自退悔一。

韓信見了て大に怒り、楚の使を斬て捨んとひしめきけるを、諸大將急に押止め樣々に命を乞ける故、韓信武士に命じて三十枚打せ、額の上に朱を以て來日決レ戰と云四字を書つけ、亂棒に打出しければ、使者首を抱へ這々にげ歸て龍沮に見え、韓信種々に罵り辱て已に斬て捨んと申せしを、諸人しきりに止めける故、纔に命を扶しかども三十枚策れしかば、皮肉破れ骨節折碎て、痛み堪がたしと云て大に哀み、地上に倒て絶入ばかりに煩悶しければ、龍沮面に朱にて文字を書たるを見て、以の外に怒り、只いま急に攻て腭夫を生捕、この恨を報ぜんとて、物具取て肩に投かけ、已に馬に乘んとするを、周蘭急ぎ引止めて樣々に諫ける故漸に止り、次の日未明に兵粮を使ひ、三軍の隊伍を亂さず十分に威儀を嚴にし、武を耀して自ら先陣に進で推よせければ、漢の陣より之を見て、韓信馬に跨り陣門を開て迎出たり。龍沮大に罵て申けるは、汝は元楚の臣、いかなれば義に反て漢に降り、妄に逆威を振て已に關中の郡縣を擾亂

で進發す。韓信は高密の城を圍で數日を過けるが、彭城より救の勢來れりと聞て、態兵を五里退て陣をとり諸大將を集て、龍沮は楚の名將武勇尋常に超たるを以て、此たび大將軍として齊を救ふ、必ず力を以ては敵すべからず、我智を以て之を破ん、諸將若箇樣々々にせば龍沮を討取んこと疑なしと云ければ、諸將計を受て皆次第々々に出去ぬ。龍沮は高密を三十里離て寨を下し、齊王の消息を聞しむるに、韓信この間城を攻ること甚だ急にして危こと旦夕にありと申す。龍沮これを聞て周蘭に申けるは、御邊韓信が人となりを知りや、吾きく韓信曾て一身を養べき資なくして食を漂母に乞、市に股を潛て恥辱を受、元より一寸の勇力なくして畏に足ぬ族なり。周蘭が曰、然らず、韓信三秦を破てより以來、至る處風の如く靡て敢て敵する者一人もなし、向に項王も彼が車戰に破られて彭城へ逃歸り玉へり、元より智深く計多して變詐測り難し、將軍よく備を成て必ず輕々しく敵し玉ふな、彼が昔し食を乞胯を潛しは、自ら今日大功を建んことを料り知てなり、若その時辱を忍ずんば、空く犬死して豈名を世に知れんや、是智能の益ふかき所以なり。龍沮が曰、實に御邊の言の如く韓信が向ふ所攻るに取ずと云ことなく、戰に勝ずと云ことなし、然れども彼未だ勍敵に遇ず、若某が如き智勇兼備れる大將に遇ば、豈その計を用ることを得んや、我まづ明に戰書を送て明日快く戰を交んとて、使者

を取て追々早馬を飛し、彭城へ急を告て救の勢を求るに、項王表を得て披き見に、

齊王田廣稽首上言。國不㆑可㆓以獨治㆒、勢不㆑可㆓以孤立㆒、獨治則不㆑足㆓以弘㆒㆑化、孤立則不㆑足㆓以禦㆒㆑侮。仰惟　陛下威德所㆑加、海内附順、一統之基可㆓立而待㆒、豈意劉邦作㆑孽、疆宇振動、韓信弄㆑兵封埴侵擾、三秦既失二魏敗亡、燕趙新破、五侯瓦　解、惟　齊乃陛下之孤柱楚國之嗉喉、苟復爲㆑漢所㆑得、則陛下孤立而獨治、欲㆑圖㆓大統㆒弘濟㆑恢㆓復皇猷㆒非㆓歲月可㆑計也。伏乞、早遣㆔大將統㆓率精兵㆒拯㆑溺救㆑焚以解㆓倒懸㆒。若齊封一破沿路郡縣迎㆑刄而下、彭城亦恐搖動也。萬惟陛下速賜㆓乾剛㆒急爲明斷、齊國幸甚、百姓幸甚。

とありければ、急ぎ龍沮、周蘭を召て申けるは、韓信いま齊を攻て事已に危し、齊王頻に早馬打て救を求む、汝三萬の精兵を領じ、速に臨菑高密へ到て漢を破て齊を救へ、日夜路を急で早く凱歌を奏せよ、必ず路に遲滯すること勿れ、若事の變あらば、早馬を馳て注進すべし、朕自ら大勢を領じて行て救ん。龍沮申けるは、陛下御心を安じ玉へ、臣誓て韓信を誅し、首を帳下に獻ん。項王限なく喜び、自ら著たる狐の裘を脱で龍沮に賜ひ、又手ら盃を執て二人に別の酒宴をなし、城下まで出て送ければ、龍沮、周蘭恩を謝して彭城を離れ、威風凜々として旌旗天を掩ひ劍戟日に耀き、忽ち胯夫を生捕て、田氏の一族を重圍の中より救ひ出さんと、上下喜び勇

韓信が大軍城を攻圍こと甚だ急なりければ、齊王大に驚き怕れ、田横を召て、今彭城より救の勢未だ到ず、此國目の前に破んとす、如何なる計を用てか然るべきと問に、田横答て申けるは、只坐ら虜にせらるゝを待んよりは、不如今宵討て出て一戰に勝負を決し玉へ。齊王この議尤とて、即時に人馬を整點し、晩に及で先士卒に命じて櫓の上より敵陣の様を窺しむるに、漢の陣には夥く篝を燒て明なること白日の如く、刁斗亂ず隊伍嚴整なりと告ければ、田横聞て、我料に愬を潛し夫何の惧ることか有んと云て、城の東門を推開き、大軍を驅て直に漢の陣に込入けるに、此所は大將曹參本部の軍馬を領じて固たりしが、齊の兵の出たる由を聞て急に兵を引て出迎るに、田横長き槍を撚て眞先に馬を進め、胯夫みだりに志を得て無禮をなすこと甚し、速に出來て我と快く雌雄を決せよと罵れば、曹參大に怒り、刀を擧て驀地暗に斬て蒐り、二人火を散して三十餘合戰て未だ勝負の色見ざりしに、韓信急に大勢を下知して四方より揉合しかば、田横なじかは支べき、這々一方を切破て散々に逃走る、此とき夜已に深たりしかば、韓信諸軍を制して、必ず力を盡して追こと勿れ、恐は敵の伏勢あるべしとて軍を收ける故、田横漸齊王を守護し、敗軍を集て城中へは入ず、直に高密縣へ逃行ぬ。次の日韓信兵を進て齊の城に入百姓を安撫し人馬を休て、又齊王を追蒐んと評議をなす。齊王は散々に打まけ、高密に陣

又使を馳て我に此事を告知せ、師を收て成皐へ歸らしむべきに、深く隱して我に知しめず、密に齊に說て某が功を奪んとす、是如何なる道理ぞ、今齊王已に歸降すと云へども、其本心にあらず、我大軍の趙に在を怕てなり、今日降參すとも久からずして必ず又叛ん、其とき再び兵を起して遠く征せば、往返の費幾許と云ことを知がたし、不レ若今日一鼓に齊を亡して後の患を除ん、酈夫夫一人の命を傷と云ども我よく功を成て一國を定めば、他日功を論じ賞を行の日、大夫の子孫みな列侯に封ぜらるべし、必ず今日の事を以て我を恨ること勿れと申せとて、回簡を授ければ、使者急ぎ馳歸て事の樣を具に語る。酈生大に驚き、我誤て胯夫に賣れたりと云て、罵て止ざりけるを、齊王聞て大に怒り、豎儒人に信を取ことだも能ず、妄に此に來て我を欺き侮ると云て、急に左右に命じて大なる鑊に油を沸させ、酈生を縛て其首を布に包み、鑊の内に挐り入て忽に烹殺しければ、滿城の諸人一同に聲を揃て嘆惜せずと云者なし。韓信この由を傳へ聞て甚だ怒り、諸軍に下知を傳て各死力を盡して目の前に蹈破れとて、自ら先陣に進んで大軍一度に攻かゝる。

○囊沙計韓信斬二龍沮一

酈食其頓首再拜韓元帥麾下、前蒙手書、卽旋師成臯、齊王得書甚喜、隨寫表差人申報漢王、今將軍復統兵取齊、似與前書不同、致使齊國君臣以我爲欺誑、將欲斬首以雪其恨。某死不足恤、而王命差遣、齊表已行今又反復不定、使漢使遭誅、而王命不能取信於天下、將軍獨能安於心乎。某命懸於旦夕、惟將軍其垂救焉。食其頓首泣血拜。

韓信見了て猶豫して心決すること能ず、沈吟して居たりければ、蒯徹傍に在て申けるは、元帥なに事をか沈吟し玉ふ。韓信が曰、酈生王命を受て齊王を招き降せり、然るに我もし兵を進て之を伐ば、齊人必ず酈生を殺ん、加之われも王命に負の罪を免ること能じ。蒯徹が曰、漢王すでに元帥に詔して齊を伐しめ、今又酈生を遣して齊王に說しめ玉ふ、是何ぞ御心の定ることなき、されば其失漢王に在て元帥にあらず、安ぞ心を惑し玉ふべき。韓信が曰、然と云ども我日の前に酈生を敵に殺しむるに忍ず。蒯徹が曰、一人の命は惜に足ず、一國を平定するの功は再び遇がたし、輕重大小の分明然として見べし、又何ぞ兒女の如く區々として事理を察すること能ざる。韓信又これに心を惑され、御邊の云ところ一理ありとて、卽時に返簡を調へ、使者を召て、汝歸て大夫に見ば、能わが言を傳よ、酈大夫さきに齊へ赴ば、宜く先趙へ來て我に漢王の詔を傳へ、暫く兵を動ざらしめて、然して後に直に齊へ到り、齊王果して歸降せば、

此は先生われを賺して備を成ざらしめ、却て韓信に火急に攻させんと巧しならんと云ば、酈生怒て曰、某明に君の命を受て此に來る、一人の私にあらず、然るに韓信約を背て寄來る、只我を賣のみにあらず、又是君を欺なり。齊王の曰、先生已に我を勸て漢に歸せしめ玉ふ、安ぞ詐り欺き玉ふこと有ん、然ども此の如く韓信早城下まで攻來りぬれば、我疑なきこと能ず、願は先生再び書簡を調て韓信に使を送れ、彼果して若兵を退けば、先生實に我を欺ざるなり、若又退ずんば別に議論あらん。酈生申けるは、いや〳〵書簡の分としては、恐は言を盡こと能じ、我自ら大王の使を伴ひ行て子細に說示ば、韓信決して退き去んとて、座を立て出んとすれば、齊王急に引止め、あざ笑て申けるは、先生今行て說んに、韓信もし其言を聽入て兵を退けば、先生再この所へ歸り來ることもあらん、韓信もし退ずんば先生あに歸り來んや、是虎を放て山に入しむるに似たり、我先生を留て質とせん、決して此を去ことを許ず。酈生長嘆し、大王すでに我を疑ふ、嗚呼死生存亡の機實に此に決せりとて、卽時に書簡を寫し、從者を召で、汝この書簡を携へ行て元帥に見え、われ王命を受て齊王を招ぎ降せり、元帥いかなれば速に兵を退け玉はざる、我一人の命は實に惜に足ずと云ども、君の命又重からずやと能々申べしと云ければ、從者命を受て直に城下へ到り、韓信に見て書簡を呈するに、韓信乃ち披き見ば、其文に曰、

くる。齊王は酈生と數日酒を飲で遊び樂む處に、忽ち人來て、韓信大軍を統て已に齊の境へ攻きたれりと報じければ、齊王大に驚き、急に諸將を集て商議するに、田横申けるは、韓信いま三十萬の勢を領じて長く驅て進み來る、其勢甚だ盛なり、若出て戰んとせば、必ず彼が計に陷入ん、不如溝を深し壘を高して出で戰ふことなく、急ぎ早馬を飛して救を楚に求めば、項王程なく出來ん、其とき城中よりも打て出、挾で之を攻ば、韓信必ず敗るべし。齊王の曰、今まづ酈生を如何すべき。田横が曰、大王暫く酈生を殺ず漢の兵の城下へ到るを待て、今一度彼に書簡を送しめ、韓信もし兵を旋ば、必ず始の如く漢に降り玉へ、若又韓信退がずんば、其とき早く酈生を殺し玉へ。齊王の曰、孤已に酈生が言を聽て漢に歸降せしに、韓信又大軍を驅て攻來る、料に是は酈生必ず孤を欺て備を爲しめず、却て不意に韓信をして急に伐しめんと巧しならん、孤誤て腐れ儒者に欺れたり。田横申けるは、今韓信が來ると云も未だ虚實を知ず、漢の勢の城下まで來るを待て、酈生が舉動を見玉ふべしとて評議區々なる處に、俄に城中騷ぎ立て、韓信すでに此處を三十里隔て寨を下し、夥く旗幟を設け、金鼓大に震ひ、隊伍嚴整にして其鋒當るべからずと報じて上を下へと囘ければ、齊王急ぎ酈生を召出して先生向に書簡を送られしに、韓信已に兵を收て成皐へ歸んと領掌せしが、今又大軍を推て攻來るは何事ぞ、料に

かば、乃ち問て申けるは、汝何の見所ありてか師を旋すこと勿れとは云ぞ。蒯徹が曰、元帥數萬の帶甲を領じ已に一年に餘て僅に趙の五十餘城を下し玉ふ、今酈生は乃ち一人の儒者なるに三寸の舌を掉て一言の下に齊の七十餘城を下せり、元帥の威德を以て却て一人の豎儒にだも及ず、空く師を收て滎陽へ歸り玉はゞ、何の面目ありてか漢王に見玉はん、某が愚見を以てするに、今齊の備なきに乘て、三軍を整點して急に攻入玉はゞ、必ず瓦の如に解ん。韓信が曰、然らず、酈生が齊に行は是私に行にあらず、乃ち漢王の明詔を奉てなり、然るに吾もし兵を擧て攻入ば、恐は王命に負に似て且は酈生にも利あらじ。蒯徹申けるは、漢王初め元帥に命じて、齊を伐べしとて其心已に定れり、安ぞ又酈生を遣して說しめ玉はん、此は必定酈生が元帥の功を奪んとて言を巧にして漢王を激したる者ならん、決して漢王の本心にあらじ、然るに元帥俄然として師を旋玉はゞ、人みな元帥を無能なりとし、漢王も又今より儒士を重じて元帥を輕じ、縱ひ楚を破り玉ふとも亦光輝なからん、願は熟之を察せよ。張耳も又申けるは、蒯文通が言極て理あり、元帥已に閫外の權を專にす、安ぞ王命に拘玉ふべき。韓信二人が言を聞て實もと思けるが、此より滎陽へ歸る支度を止て、張耳と共に人馬を整て、卽時に趙の國を打たち、北の方黃河を渡て大路より進發しけるに、過る所の郡縣大に亂れ騷で百姓こと〴〵く逃か

利害を說て喩されければ、齊王了に歸降し、已に滎陽へ使を馳て降表を獻り、齊の七十餘城ことごとく漢に屬せり、書簡こゝに在とて指出せば、韓信取て披き見に、其文に曰、

漢大夫酈食其頓首書奉韓元帥麾下。生奉王旨出使於齊、罷兵息爭、委心帖附、順天休命、悉歸王化、偕仰附漢王之聖明、實賴元帥之威德、不動聲色、下齊七十餘城、免三軍汗馬之勞、救一國生靈之命、茲遣小啓上達。乞罷干戈旋師成皐、休養軍威、擧衆伐楚、六國謹從恢弘大業、元帥之功銘刻彝鼎、某不敢貪天功爲己有也。食其再拜。

韓信甚だ喜び、使者に向て申けるは、酈大夫已に齊を下し玉ふ、我速に師を收て滎陽へ歸り、漢王と一手に成て楚を伐ん、汝歸て齊王に此由を奏し、漢の兵徐州に到らば、早く兵を起して出あひ、力を同して楚を破らるべしと申せとて、返書を調て與ければ、使者路を急で齊に歸り、右の趣を酈生に語る。酈生返書を披き見て、乃ち事の樣を告けるに、齊王限なく喜び、酈生と日夜酒を飲で歌ひ樂み、心を安じて何の備も成ざりけり。韓信は酈生が書簡を得てより、張耳と共に兵を收て滎陽へ歸んと議するに、忽ち階下より一人大に聲を揚て、無用々々、若酈生が言を聽入玉はゞ、元帥一生の大事を誤ん、我一の計あり、齊の七十餘城を手に唾して得せしめん、然る時は其功悉く元帥に屬せんと呼る。韓信驚て之を見に、燕の士蒯徹字は文通なりし

に在て楚に在ざることを知、大王急に戈を倒し甲を卸し、城を開て歸降し玉はゞ、一國の生靈塗炭を免て誠に萬世の長策ならん、されば某が此に來るは、專ら齊の爲にして漢の爲にあらず、大王つらつら能これを察せよ。齊王大に悦服し座を立て謝して曰、先生の此に來るは誠に齊國の爲なり、孤智暗して之を曉ず、向に誤て無禮の言を出せり、願は幸に恕されよ、早々に先生の敎に從て今より漢に歸附すべし。酈生が曰、然らば大王まづ降表を調へ、使を馳て漢王に告玉へ、吾は且く此に滯留して、漢王の來るを相まち、大王を伴て出見ん。時に田横傍に在て申けるは、大王必ず輕々しくし玉ふな。韓信いま大軍を屯して趙にあり、一旦もし不意に攻來ば、何を以てか防べき。酈生申けるは、某が此に來るは一人の私にあらず、乃ち漢王の明詔を奉てなり、韓信爭か縱にすることを得ん。齊王の曰、先生願は韓信に書簡を送て兵を退しめよ、然らざる時は孤心を決すること能ず。酈生さらばとて卽時に書簡を寫し從者に持せて、齊の使と共に韓信が陣に行て、軍を收らるべき由を傳しむ。此とき韓信は久く趙に留て人馬の氣力を養しかば、近日齊へ攻かゝらんと軍評定しける處に、外より報じて、只いま酈大夫使を來して書簡を贈れりと申す。韓信乃ち召入て對面するに、使者申けるは、酈大夫漢王の詔を奉て齊に來り、百姓を安撫して天下を虎の如くに視、吾この故に天下の歸する所、まことに漢

を救て永く社稷を保んとならば、爭か吾言に從ひ玉はざるべきや。齊王の曰、わが國地方數千里、西に魏趙あり、東は海隅に接し、南は楚淮の勢を阻て、北は燕境の雄を鎭て、國富兵強く文臣は内を治め、武將は外を制して坐ら勝負を見、汝妄に危こと旦夕にありと云は何事ぞ。酈生嘆じて曰、大王何とて甚だ吾を欺玉ふぞ、大王自ら項王に比せば、武勇孰か勝れる、項王關中を得て守ること能ず、彭城へ走て漢に敵すること能ず、五國みな叛て關中了に悉く失へり、今齊僅に千里の地を保て、全く勝の漢を抗んとし玉ふは、又大に誤ずや。齊王これを聞て沉吟して言ざりしかば、酈食其又申けるは、大王必ず心を苦め玉ふな、宜く先天下の歸する所を見て、而して後に興亡の決する所を知べし、大王いかに天下の歸する所を知玉へるか。齊王の曰、知ず。酈生が曰、大王もし天下の歸する所を知玉はずば、某を禮義を知ぬ人とし玉ふは理なり、方に今天下の勢を論ぜんに、楚は强が如なれども其實は弱し、漢は弱が如なれども其實は强し、天下の封疆を以てするに、漢は已に七八を得て楚は僅に二三分なり、然れども項王は妄に殘暴を放にして尙德を脩ることを知ず、漢王は義帝の爲に喪を發し、仁義の兵を起て縞素を以て服とし、恩威を四海に布、施の至る所信服せずと云ことなく、明日月に齊く、德堯舜に同じ、今又滎陽を取て敖倉の粟に據、成皐の險を塞で飛狐の口を拒ぎ、太行の道を杜て白馬の津を守

せず、元より田氏の一族甚だ强大なるに、項王又外より之を扶れば、御方いま數萬の勢を遣すとも中々急には破ること能じ、臣願は大王の詔を奉り、三寸の舌を動して利害を說、齊王を諭して漢に降しめん、是所謂る不㆑勞㆑張㆓弓矢㆒而能屈㆓人之兵㆒なり、豈計の良に有ずや。漢王深く喜び、先生果して能齊王に喩して御方に歸せしめば、互に干戈の禍を免て一國蒼生の福百世無窮の利ならん、今幸に韓信が未だ軍馬を動ざる先に、早く發向せよと宣しかば、酈生卽時に從者を引て滎陽を立出、日を經て齊の國に到て、漢の使酈食其齊王に見んことを求と告ければ、門を守る人內に入て此由を報ず。齊王乃ち召入て對面せらるゝに、酈生中門より徐徐と步で直に內に入、旁若無人の體なりければ、齊王怒て曰、汝こゝに來るは必ず說客を成ん爲なるべし、吾國には尺寸の兵もなしと思へるか、何とて甚だ禮義を知ざるぞ。酈生申けるは、漢王いま帶甲百萬武威中外に振ひ、韓信又大軍を趙に屯し席の如く卷て來んとす、齊の民恰も魚の釜の中に遊が如く危きこと旦夕にあり、大王も又久く齊王の位を保こと能じ、某が此に來るは一には萬民の命を救ひ、二には大王を保て永く齊王の貴を失ざらしめんと欲してなり、然る時は我は是齊國の盟主上國の使命にして、苟も大王に求ることをなし、安ぞ禮を屈して見ることをせん、大王もし齊國を保つことを欲せずんば、速に吾を殺して臣の禮を正せ、若又百姓

四人の大將に重く恩賞を與て、諸軍を勞ひ玉ふ。扨又項王は兵を驅て成皐へ馳向けるに、早曹咎戰破れて自殺し、漢王已に城を乘取て、英布、陳同二人に守らしむと聞て、大に力を失ふ處に又早馬來て、鍾離眛已に滎陽へ到り、未だ陣屋をも構ず何の備をも成ざりしに、漢の兵急に四方より攻來りしかば、俄の事にて防こと能はず、大に軍馬を損て逃歸たりと告ければ、項王いよいよ驚き、兩處の利あらざるを見て、心中甚だ恨み怒と云ども如何ともすべき樣なく、了に退て廣武に陣をとる。

○齊王怒烹酈食其

此とき韓信は兵を趙に屯して近日齊を攻んと思ひしが、項王大軍を率し、鍾離眛と二手に分れて滎陽、成皐へ馳向たりと聞しかば、漢王もしも打負玉はゞ、速に行て救んと思ひ、未だ齊へは攻寇ず、扨又齊の國には韓信急に推寄ると聞て、國中の騷動斜ならず、齊王田廣晝夜安き心もなく甚だ患ひ苦む由滎陽へ聞ければ、酈食其密に心の中に、齊王此の如に驚き怕る、今もし一たび行て利害を說ば、必ず歸降することあらん、若聲色を動さずして齊の七十餘城を下さば、我功韓信が上に在んと思ひ、或とき漢王に見て奏しけるは、今燕趙すでに定ると云ども齊未だ服

り、先王陵に命じて敵の消息を聞しめ玉ふ、城の内には兵元より少して多は百姓なりしかば、守將吳丹諸の父老を召集て、漢王は長者なり失べからず、我等早く城を開て降參し、干戈鋒鏑の禍を免んは如何にと云に、皆尤と同し、只將軍の命に從んと云ければ、吳丹乃ち父老と共に城を開て降參す。漢王喜で城に入百姓を安じ玉ふ處に、左右の人來て今楚の鍾離昧一萬餘騎にて滎陽を三十里隔て陣を取候ふと報ず。漢王の宣く、鍾離昧遠く來て定て人馬みな疲たらん、未だ備を成ざる先に、急に行て蒐散せとて、王陵、周勃、灌嬰、周昌四人に各三千の勢を授玉へば、皆命を受て出去ぬ。鍾離昧は遠路を來て未だ陣門をも構ず、暫く息を繼んとする處に、俄に鐵砲所々に響て喊の聲地を動しければ大に驚き、此は何の敵ぞとて、急に戟を横へ馬に跨て出たるに、左に王陵右に周勃、前より灌嬰後より周昌、大軍を下知して早四方より取圍み、生手を入替々々攻戰ふ。鍾離昧は思ひ寄ざる事なれば、大に亂れ騒て一支も支ず、了に陣を棄て逃ければ、楚の勢大將の逃を見て、我先にと戟鼓を打すて跡をも見ずして散亂するを、漢の兵すき間もなく追かけて、生捕きり取その數を知ざりしが、路々に夥く旗戟を棄たりけるを、互に爭ひ取て敵を追んとする心も怠しかば、之に因て鍾離昧は這々にげ延て僅に敗軍を集め、大路を望で馳去ぬ。王陵等は十分に打かち、兵を收て滎陽へ歸ければ、漢王甚だ喜び

馬通四人の大將大勢を下知して、楚の兵を中に取こめ、餘すな洩すなと揉だりければ、楚の兵矢庭に大半討れて曹咎いかに防ども出ること能ず、周勃等はいよ〳〵精神を振て斬て回るに、曹咎迎へ合せて二三合戰しかども、力疲て敵することを得ず、馬を回して逃んとすれども、敵の圍ます〳〵重り、團々として鐵壁の如くなりしかば、天を仰で長嘆し、敵此の如く大勢にして殊に四人の大將甚だ勇猛なり、我兵は悉く討れて防べき樣なく、後には汜水の大河ありて退くこと能ず、進退共に極れりとて、了に自ら首を刎、汜水の岸より落て死にけり。漢王乃ち金を鳴して軍を收め玉へば、成皐の百姓大に喜び、簞食壺漿して來り迎ふ。漢王悉く之を安じ、直に城中に入玉ふに、楚の財寶數を知ず得たりしかば、限なく喜び、酒宴を設て將士を勞ひ玉ふ處に、忽ち外より報じて只いま九江王英布、陳留の太守陳同と共に二萬餘騎を率して加勢の爲に出來れりと申す。漢王斜ならず喜び、朕此より滎陽へ攻かゝらんと思へども、成皐を守しむべき者なかりしに、英布が來るは能も朕が意に合へりとて、軈て召見て禮を施し、陳同を安撫して宣けるは、我前日陳留を過し時、御邊夥く兵粮を送て費を資け、今又英布と兵を合せて力を助らる、此功他日必ず金石に錄すべしとて、又英布に向て、將軍幸に陳同と共に此處を守れ、我は楚の勢の未だ到らざる先に、急ぎ滎陽を攻取んとて、次の日兵を進て直に滎陽へ到

り難からん。項王の曰、朕かつて曹咎に堅く守て出合ず、只朕が大軍を率る來るを待と云置たり、今行て内外より挾で攻ば、漢王決して敗走すべし。鍾離昧が曰、臣まづ一手の兵を領じて滎陽へ向はん、陛下は自ら大軍を統て成皐を救玉へ、此二箇所を取て其勢に關東を平定して彭城へ歸り玉はゞ、大事必ず定ん。項王この議尤とて、鍾離昧に精兵一萬を授て滎陽へ向せ、自ら三軍を整て成皐へ發向す。此とき漢王は趙より兵を進て先直に成皐へ到り、王陵に命じて三日が間城を攻させ玉へども、曹咎たゞ固く守て出ざりしかば、諸軍に向て、此は必ず項王かつて曹咎に命じて固く守らせ、大梁を平定して後自ら大軍を統來て、内外より攻んと云置たるならん、朕聞曹咎は楚の大司馬、天性甚だ躁して心剛なる者なり、汝等城下に到て樣々に詈り辱ば、必ず怒て打て出べきぞと下知し玉へば、諸軍命を受て城下に到り、或は地の上に座して惡口し、或は赤躶に成て倒れ臥、又は白き旗に曹咎が名を書付て、六日が間罵り辱ければ、其案に違ず曹咎この體を見て、身を燒して腹を立、了に一萬の勢を領じて城門を颯と推開き、其勢猛風の如く殺出しければ、漢の兵佯て散々に亂れ、馬物具を捨旗鼓をも取あへず、氾水を渡て逃走れば、曹咎のがさじと其馬を驅て又氾水を渡り、大軍過半河中まで打入ける處に、忽然として兩方の岸より漢の伏勢一度に旗を搖し喊を造て雲の如く打て出、周勃、周昌、灌嬰、呂

を知ず、若陛下の外黄を屠り玉ふ由を傳へ聞ば、皆城を閉て堅く守り、或は又遠く逃走て天下此より陛下を愛せじ、民は是國の本なり、陛下もし天下の民に惡れ玉はゞ、誰と共にか四海を有ち玉ふべき。項王これを聞て甚だ喜び、汝が言悉く理に合へりとて、卽時に三軍を制して、毫髮ばかりも百姓を掠め侵さば忽ち首を刎んと觸れたりしかば、外黄の百姓は深く仇叔が德を感じ、項王むかし秦の降卒二十萬を新安にて土坑に埋殺せし時、一人も爭ひ諫る者なかりき、其時もし奇童の如く言を極て苦諫する人あらば、項王あに心を動ざらんや、惜かな范增一言も之を諫ず、只晝夜心を盡し慮を苦て、漢王を殺んとのみ巧しかども了に殺こと能ず、陳平が反間の計にて却て其身を失へり、是いかなれば七十の老翁、却て五尺の童子にだも及ばざるやと云て、喜あへること限なし。須臾ありて守將仇明、副將周同等伴ひ來て罪に伏しければ、項王みな之を安撫し、大梁の地全く又平定せしかば、暫く外黄に陣を取て諸將と相議し、急に彭越を追蒐んと云に、季布、鍾離昧申けるは、彭越は疥癬の病にして齒に掛に足ず、漢王いま又成皐を取て滎陽を奪んとす、此は心腹の疾なり、大司馬曹咎が分としては久く守ること能じ、陛下まづ成皐の危を救ひ、勢に乘て關東の地を恢復し玉はゞ、漢の兵長く驅て大に進ことを得ず、韓信も急に救ふこと能ずして味方全く打勝ん、若少し遲き時は漢王根を堅し本を定て容易く破

二三なるが從容として歩み來る。項王問て曰、汝は孩提の童子、いま如何なる故ありてか軍威を怕ずして此に來れる。仇叔答て曰、臣は是陛下の赤子、陛下は乃ち臣が父母なり、赤子にして來て父母に見ゆ、戀々の情たゞ及ざらんことを恐る、豈軍威を避んや。項王大に喜び、汝軍威を惧ずして此に來るは我に說ん爲かと云ば、仇叔申けるは、陛下德湯武に齊く功堯舜に同して、天地の心を開き好生の德を垂て、四海一家萬邦慶を稱す、臣いま陛下の前に出で、安ぞ唇を振ひ舌を動して說客を成ん。項王の曰、汝然らば說客にあらざるな、朕いま外黃の民を悉く城東に埋殺んと欲す、汝が此に來るは必この爲ならん。童子申けるは、臣きく天下を愛する者は、天下の人みな之を愛す、天下を惡む者は天下の人又これを惡む、天下を利する者は天下みな之を利す、天下を害する者は天下又これを害す、愛惡利害みな上より起て下は乃ち之に從ふ、彭越さきに大軍を率ゐ來て州郡を掠亂りしかば、百姓その殺されんことを恐れ、已ことを得ずして降參すと云ども、終日首を翹て目を拭て、專ら陛下の仁義の兵を引來て、倒懸を救ひ玉はんことを望むこと、誠に赤子の父母を慕ふが如し、然るに案に相違して陛下又一城の民を悉く阬にせんと宣ふ、若然らば百姓はた何にか歸すべけん、民の父母たる者豈此の如ならんや、只外黃の百姓のみ陛下の德愛を蒙ざるのみに有ず、此よりして東の方大梁の郡縣尙幾許と云こと

童子
仇叔

童子外黄説項羽
項羽

く旗ばかりを立て御方を惑す者と相見たり、陛下まづ三軍を驅て急に一攻せめて御覽候へ。項王これに從ひ諸軍を下知して、金鼓を打たて鐵砲弩を雨の降如く放ちければ、城中の百姓一齊に聲を揚て大に哀み、守將仇明に告て申けるは、項王一たび怒れば千里に火を飛す、今楚の大軍城を圍で目の前に踏破んとす、此城もし破れば我等數萬の百姓みな屠り殺されん、將軍願は我等が罪なくして鋒鏑の禍に逢ことを憫み、早く城を開て降參し玉へ。仇明乃ち副將周同と相議し、急ぎ四門に降旗を立、香を燒て大に城門を開き、百姓に命じて、外黃は元楚の地、一旦彭越に降ると云ども、是已ことを得ざればなり、安ぞ敢て天兵を拒ぐべき、願は早々に御駕を進て城に入給へと、高聲に呼らせければ、項王やがて大軍を進て內に入、項伯を召て、外黃すでに彭越に降て、朕甚だ急に攻圍しかども久く拒ぎ守り、今數日を經て漸々に降參すと云ども其本心に有ず、朕いま此處の百姓男子十五歲以上を悉く捕て城の東に土阬を掘、一人も殘さず埋殺して此恨を報ぜんと怒りければ、滿城の百姓之を聞て、又一同に聲を揚哭き叫で上を下へと囘しけるを、件の仇叔急に走り出て押止め、汝等百姓必ず哭くこと勿れ、恐は項王いよ〳〵怒を激ん、我自ら項王に說て汝等が命を救んずるぞと云て、乃ち行て見んことを求れば、士卒中軍に入て此由を奏す。項王軈て召入けるに、一人の童子眉目甚だ淸秀にして年の程僅に十

殺されん、願くは之を憐玉へと云ければ、忽ち傍より年十歳あまりなる童子一人聲を揚て、諸君少も患玉ふな、此城もし破れば、某願は項王に利害を說示し、戈を倒し爭ふことを息させ全く外黃の民の害を免しめんと呼る。彭越大に驚き、此は何人ぞと問ば、仇明答て申けるは、是某が長子仇叔と云者にて今年十三歳なり、母曾て大康懷に入と夢みて此子を生り、已に五歳にして能詩を裁し、七歳にして書を讀、目を過せば乃ち誦をなす、此故に諸人呼で奇童と稱す、某つねに客を迎るに、滿座の人と遍く能應對し、或は詩或は文口に隨て成ずと云ことなく平生極て膽氣あり。彭越童子に向て、汝項王に見ば何を說んと欲すると問に、童子乃ち近く寄て箇樣々々に說んと私語ければ、彭越限なく喜び感嘆して申けるは、汝幼と云ども誠に一城の百姓を救に足り、後に必ず天の報ありて福德量べからずとて、晩に及で三軍を整點し、各枚を啣で密に北の門より出て徑に穀城へ到りけるに、向ふ所城を開て悉く降參し、了に昌邑の二十餘城を乘とり、粟十餘萬斛を得て滎陽、成皐へ陸續して運送せしかば、漢の大軍聊か兵粮に乏こと無りけり。角て項王は十餘日を經て外黃へ推よせけるに、城の上には夥く旗幟を挾み、四門堅く閉て兵一人も出ざりしかば、暫く樣子を伺んとて、陣を取て已に三日を過けれども、城中には彌堅く守て人音もせず、時に項伯奏しけるは、此は必定彭越この城を沒落し、只空

此とき彭越は大梁を攻て四方響の如くに應じ、外黄に陣を取て密に細作を出して項王の消息を聞しむるに、數日にして歸り來り、項王自ら大軍を統て東の路より攻來り、路々の郡縣すでに城を開て悉く降參し、勢甚だ大にして其鋒當るべからずと告ければ、彭越大に怕れ、諸人を集て計を議するに、欒布と云大將すゝみ出て申けるは、項王自ら攻來ば中々力を爭ひ難からん、某三の計あり、北の方穀城へ走て又昌邑を取、楚の兵の退き歸るを待て、再び梁の地を取ん、此を上の策とす、若力孤にして敵すること能ざらんことを恐れば、專ら意を漢に屬し、兵を合せて共に楚を拒ん、之を中の計とす、若又自ら武勇を恃み、孤城に據て項王と雌雄を決せんとし玉はゞ、忽ち楚の爲に亡されん、此を下の策とす、將軍宜く自ら擇で用玉へ。彭越が曰、上の計よく我心に合へり、速に穀城へ走んとて急に手配を定め、大將仇明は周同と共に留て外黄を守り、虛く旗幟を立緊く四門を閉て我遠く遁れたるを敵に知しむること勿れ、我その間に力を盡し、昌邑を攻取て根本とせん、若然らざる時は楚の兵急に後より追來て我兵疲れ苦のみに有ず、又昌邑を得こと能ず。欒布が曰、將軍の見ところ甚だ高し、楚の兵の未だ至らざる先に、今宵密に城を出て走り玉へ、必ず郡縣の百姓にも知しむべからず。仇明すゝみ出て、將軍たとひ遠く遁ることを得玉ふとも、孤城もし一たび破れば、外黄の民決して悉く項王に屬り

圍を解て退きしかば、乃ち城中に入て一族を安じ、酒宴を設て將士を勞ける處に、忽ち早馬來て彭越すでに梁の十七城を攻下し、今外黄に陣を取て居民を擒にし、郡縣爭ひ服して梁の國の騷動斜ならずと注進しければ、項王大に怒り、朕向に成皐にて已に漢王を亡すべかりしに、此賊御方の粮道を塞しゆゑ、朕支ること能ずして機會を失ひ、今に至て深く恨る處に、又梁の地を擾亂す、只恨らくは朕が手下に漢の紀信周苛樅公が如く義を重じて死を避ず、節を守て屈せざる大將なく、國家の爲に忠を效す臣なくして、外黄了に他人に奪れたり、朕急に兵を率て外黄を恢復し、城中の軍民を悉く屠り殺して此恨を雪べしと云しかば、項伯、鍾離昧諫て曰、料に彭越は一人の勇夫、安ぞ大事を成に足ん、陛下久く遠征して今僅に歸り玉ひ、此程の小事に何ぞ聖體を勞し玉ふべき、只龍沮に命じてこの賊を伐しめ、陛下は暫く休息して氣力を養玉へ。項王の曰、然らず、英布いま漢を扶て亂をなし、韓信又齊を攻て事甚だ危し、此故に齊王田廣が日夜に早馬打て救を求ること、櫛の齒を引が如なれば、今まづ龍沮に齊を救しめて唇齒を安じ、朕自ら彭越を誅滅せんとて、次の日つひに三軍を整へて直に大梁へ進發す。

○童子外黃說二項羽一

安からず、先生願は心に掛ること勿れ、凡そ事を論ずるには、先時勢の强弱を觀べし、漢いま楚の半を取得たりと云ども、項王なほ將士盛にして且强し、豈六國を封じて自立せしむべけんや、先生たゞ大槩漢の湯武に同きことを知て、未だ子細に知玉はず。酈生拜伏し、誠に先生の言の如し、我安ぞ懐に挾んやと云て、又數日ありて張良と相議しけるは、項王さきに滎陽を得たりしかども、敖倉を棄て守らず、味方いま再び滎陽を取んは如何に。張良が曰、これ甚だ好るべし、先生速に主上に奏せよ。酈食其乃ち張良を伴ひ漢王に見て奏しけるは、古より王者は民を以て本とし、民は食を以て先とす、夫敖倉は天下の粟を運び輸して藏し納る所極て多し、然れども項王これを棄て守ず、東の方彭城に都す、是天の漢を資る所以なり、願は大王急に兵を進め再び滎陽を取て敖倉の粟を收め、成皐の險を塞で太行の道を杜、蜚狐の口を距て白馬の津を守り、坐ら天下の諸侯を制し玉はゞ、自然に大事を圖るべし。漢王乃ち張良に此議いかにと問玉ふに、張良も甚だ確論なり、早く兵を進玉へと云ける故、漢王喜び即時に三軍を整點して滎陽へ發向し玉へば、韓信は留て趙城に陣を屯す。扨又王陵は彭城へ到て四方より攻圍み、十餘日を經て諸方の消息を伺に、項王已に成皐を引て、程近く歸り來れりと聞しかば、軈て兵を收め北の小路より密に滎陽を望で引歸る。項王は夜を日に繼で彭城へ歸りけるに、王陵すでに

を戴き義を慕て、皆漢の臣たらんことを願べし、然して大王は南面して霸と稱し玉はゞ、楚必ず秬を斂て來り服せん。漢王喜び、是甚だ好とて、即時に工匠に命じて六國の印を刻しめ、乃ち酈食其を使として六國の子孫を封ぜんと事すでに極りたるに、忽ち張良來り見しかば、漢王乃ち右の事を告玉ふに、張良色を失ひ、誰か此計を獻けるぞ、臣請古を引て大王の爲に說ん、昔し湯武の桀紂が後を封ぜしは、能其死生の命を制せんことを度てなり、今大王よく項籍が死命を制し玉はんや、武王は殷に入て粟を發し錢を散じ、馬を休め牛を放て再び用ざらんことを示せり、大王又これを能せんや、且天下の遊士親戚を離れ、父祖の墳墓を棄て大王に從ふ者は、徒に封爵を受んことを欲してなり、今もし六國の後を立玉はゞ、漢の將士みな國に歸て各其の主に事ん、然らば大王誰と共にか天下を圖玉はん、況や六國の中に楚より强はなし、若其後を立て之に封爵を授玉ふとも、安ぞ漢に臣として來り事ん、誠に此計を用ば大事去矣と云ければ、漢王始て悟り大に酈生を詈て、豎儒妄に籌策を設て朕が大事を誤んとせりとて、向に造せたる六國の印を手ら微塵に摧き玉へば、酈生甚だ愧怕て此より數日朝に出ず。張良は心の中に扨は向の計は酈生が獻れるなりと思ひ、乃ち其家に行て對面し安撫して申けるは、某曾て向の計は先生の獻られしことを知ず、只國家の爲に謀て忌憚る所もなく奏し、今始て之を知て心中甚だ

て干城の良將を捨玉ふ、此事もし鄰國に聞えば必ず大なる患ならんと奏せられければ、衞公悟て子思の諫に從ひ、了に荀變を重く用られたり、韓信今此失ありと云ども豈前々拔群の大功を沒すべけんや。漢王これに因て了に二人を召出し、朕さきに滎陽、成皐兩處に圍を受て甚だ危かりしに、汝いかなれば急に來て救ざりけるぞと責玉へば、韓信答て曰、燕齊の兩國變詐常ならず、吾兵一たび動ば恐は亂を生ぜん、況や遙に滎陽圍ると聞しかども未だ實否を知ざりしかば、輕々しく兵を動ざりき。漢王又宣く、趙すでに破れたれども齊久く下らざるは如何なる故ぞ。答て曰、士卒久く用る時は疲る、大將久く守る時は懈る、國久く圍む時は弊ゆ、敵久く拒む時は破る、臣數十萬の勢を統て累に戰て勝ことを取、齊魏の間に往來して行こと數千里、もし人馬を休息せずして急に輕々しく攻蒐んに、敵もし逸を以て勞を待ば、決して大に破んこと疑なし、臣この故に暫く此に屯して三軍の鋭氣を養ひ、近日すでに齊を伐んと存ずる折節、意ざるに大王臨幸し玉へり、臣不日に齊を伐て六國を定ん、大王は兵を修武に屯し玉ふべしとて別て我陣に歸けり。斯て數日を經て酈食其漢王に見て奏しけるは、昔成湯桀を放ち武王紂を伐て、其子孫を封じ玉ひしかば、皆數百年の基を開けり、又秦は六國を滅して其子孫を封ぜざりしかば、了に社稷を覆せり、大王いま六國の後を立て封爵を與玉はゞ、君臣百姓必ず聖德

を叩て罪に伏す。漢王又責て宣けるは、汝すでに副將たれば、宜く孜々として軍務を協け、萬づ愼で敵に虛實を見賺されじと、晝夜嚴く非常を警め防べきに、今この陣を見ば、旗幟正からず關防密ならず、往來奔走する人あれども尤る人もなし、是恰も小兒の戲に異ならず、若軍法を論ぜば、韓信は廢斥すべく、汝は首を刎て諸人に警べし、然れども朕たゞ汝二人が屢功勞あるを思ひ、殊に今天下事多して宜く將士を擇び用べきの時なれば、面り罪を正すに忍ず、若再び此の如ならば、決して軍法に行んとて本陣に歸り玉へば、韓信、張耳後に從ひ行て、再三哀で罪を謝す。漢王は諸臣を集めて、韓信、張耳軍紀律なく兵節制なし、朕さきに中軍へ馳入て元帥の印を奪しかども彼更に知ず、敵もし此隙を伺て密に迯入ば、何を以てか防ことを得ん、再び用べからず、朕別に才能ある人を擇で元帥とせんと宣へば、張良、陳平密に奏しけるは、甚だ不可なり、御方の諸將の中に韓信が才に似たる者一人もなし、今實に罪ありと云ども是小事なり、安ぞ小を以て大を捨べけん、昔し衞の國に荀變と云大將あり、曾て百姓の家の雞の卵二つを取て食へり、衞侯これを聞て大に怒り、了に廢て用ざりしかば、子思之を諫て、夫聖人の人を用るは、尙木を用るが如し、其長ずる所を取て其短き所を棄、この故に古人も杞梓連抱而有數尺之長、良工不棄と云り、今君戰國の世に當て爪牙の臣を擇び用べきの時、この卵に代

日一夜に悉く退しかば、周勃、柴武も跡に續て馳て行、曹咎は漢の勢の遠く退たる由を聞て乃ち兵を進め、成皐の城に入て百姓を安じ、固く四門を閉て守りける。

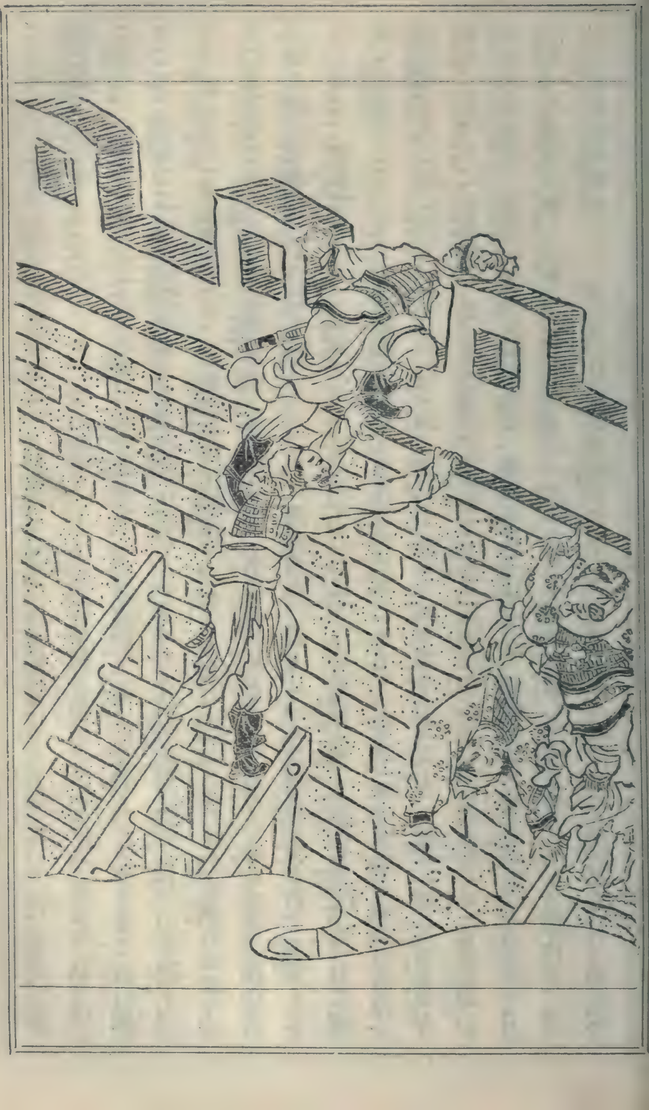
○漢王走趙奪韓信印

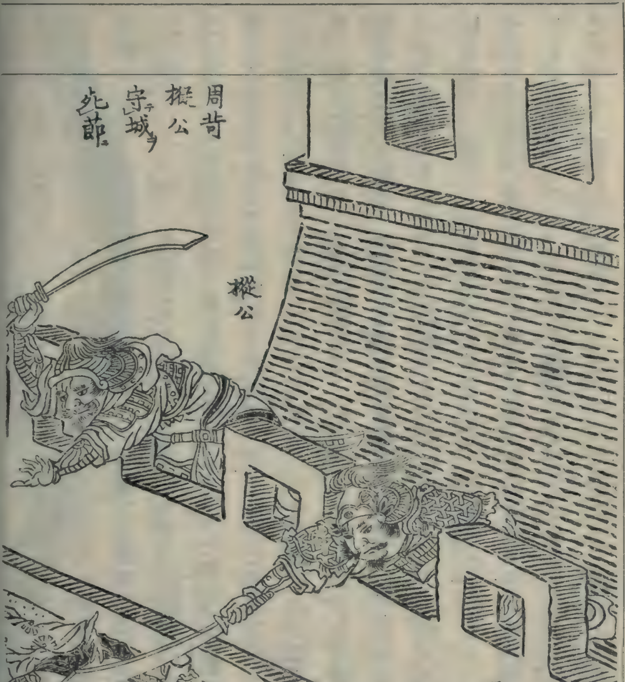
漢王は成皐を出て晝夜を分ず趙の國へ走り、城を離ること五十里にして寨を下し、數十騎を引て徑に韓信が陣に入玉ふに、此とき夜すでに明けれども、韓信、張耳は昨夜の大酒に醉臥て未だ起ず。漢王遍く陣中を遶て帳中に入て見玉へば、床の傍に一の桌を設て其上に元帥の印を錦の囊に入て置たりしかば、軈て奪ひ取て出んとし玉ふ時、韓信始て目を覺し、漢王を見て大に驚き怕れ、急に床を下て地に拜伏し、臣更に大王の營に入玉ふを知ず、遠く出て迎へ奉るの禮を失へり、罪誠に萬死に當れりと申ければ、漢王嘆じて宣く、我いま數千騎を引て遍く陣中を徘徊すれども汝なほ甘く寐入て之を知ず、又元帥の印を奪ひ取ども左右聊か尤る人なし、此の如ならば敵もし漢の使なりと詐り、密に帳中へ入て汝が首を取んこと囊の中を探て物を取よりも尚易からん、汝坐ら一國を鎭守して敵人新に降るの時踈略なること此の如し、豈横を天下に爭に足んや。韓信これを聞て甚だ慙愧し畏れ入て居たりしに、須臾ありて張耳又出來り、頭

の計を思ふに、先今宵密に此處を退き、勢を分て彭越を外黄に誅し、英布を南溪に討、王陵を防で彭城を守玉へ、是乃ち一時急を救の計なり。項王これに從ひ、先大將曹咎を召て申けるは、汝一萬の勢を領じて成皐の西に埋伏せよ、朕今宵この處を退かば、漢王必ず朕が再び來んことを恐れ、城を捨て逃走ん、汝その跡へ囘り、城を乘取て堅く守り、漢王たとひ又出來るとも必ず出て戰ふことなく、朕が再び大軍を引て來るを相待べし。曹咎命に從ひ兵を率して出去ければ、項王乃ち三軍を整點し自ら殿として其夜に悉く引去ぬ。漢の細作急ぎ此由を注進すれば、漢王乃ち張良、陳平等を召て問玉はく、項王この間一度も戰を交ず、今俄に退きたるは何故ならん。張良が曰、これ乃ち英布が南溪口に出彭越が外黄を取、王陵が彭城を攻る故なり、大王早く此城を出て韓信と會合し、又滎陽へ行て人馬を調練し、時を待て楚を滅し玉へ。漢王これ能朕意に合へりと喜玉へば、張良又申けるは、然ればとて大王かるぐしく進み玉ふな、敵もし伏勢を以て味方の兵の半ゆき過を討ば、決して大に敗れん、其備なくては叶ふまじ。漢王げにもとて周勃、柴武二人に五千の兵を授て、成皐の西の路に出し置、大軍陸續して城を出玉へば、曹咎早此由を聞て急に追蒐んと馳出たるに、先手より報じて、向に漢の兵多少は知ず陣を取て大將周勃、柴武と云旗を立たりと告ければ、曹咎怕て兵を按て追蒐ず、是に因て漢の兵事なく一

び即時に王陵を召て、汝五千の精兵を引率し、直に彭城へ到て其備なきを攻よ、若項王の退き歸る由を聞ば、汝も兵を收て引歸るべしと宣へば、王陵命を受、即時に五千の兵を領じ、密に小路を回て馳向しかば、漢王は預め備をなし、項王滎陽に在て此を去こと遠からざれば、定て近き内に攻來るべしとて、韓信が造りし戰車を城の四方に夥しく雙べ布、用心緊して待玉ふ。項王は大將吳丹を留て滎陽を守らせ、自ら大軍を統て又成皐へ進發し、城を離ること二十里にして陣を取、次の口城下に進で急に攻かゝらんとするに、四方に多く戰車を設て、旗幟甚だ嚴整なりしかば、扨は敵すでに備ありとて、輕々しくは進み得ず、陣を十里退て只鼓を鳴し旗を動し、或は喊を造て空く攻蒐る體をなし、互に一度も戰を交ず、已に數日過ける處に、忽ち彭城より早馬來て、漢の大將王陵小路より密に兵を率ゐ來りて、彭城を攻ること甚だ急なりと告ければ、項王大に驚く處に、又早馬來て、彭越外黃の十七縣を攻取て楚の兵粮の路を斷塞ぎ候ふと注進して、其使未だ退ざるに、又細作來て、只いま英布大勢を引て成皐の救の爲に已に南渓口まで打出、此を阻ること遠からずと報ず。項王一度に三方の注進を聞て色を失ひ、項伯、鍾離昧等に向て、成皐備ありて急に下し難きに、又英布が救の勢出來り、加之彭越御方の粮道を阻て、王陵又彭城を攻て事已に危し、朕いま如何してか宜からんと議すれば、項伯が曰、今

ば、乃ち封じて萬戸侯とせんと云に、周苛申けるは、樅公紀信は吾と皆漢廷の人物、豈敢て暴楚に降て生を貪ることをせんや、汝猴の身として此周苛將軍を欺ことは叶ふまじきぞ。項王大に怒り、武士を下知して大なる鑊に油を沸させ、周苛を縛て忽に烹殺し、大軍を率て直に城中に入、滎陽の百姓軍民數を盡して屠り殺んとひしめきけるを、項伯急に諫て曰、いま陛下の共に鋒を爭ふ者は漢王なり、百姓は皆陛下の赤子、初より罪なし、若悉く之を屠り玉はゞ、大に天下の心を失ん、宜く撫恤して其心を安じ、暫く此に休息して又成皐へ攻かゝり、漢の兵の歸る路を截塞ば、劉邦ゆく處なくして了に降參せん、然らば乃ち兵を遣し齊を救て羽翼とし玉ふ時は、楚孤立せずして大業定るべし。項王これに少し心を鎮て暫く滎陽に屯し、不日に成皐へ攻蒐んとて、又人馬を整點す。此とき漢王は成皐にありて、張良、陳平と議せられけるは、韓信張耳久く趙に住て、朕さきに滎陽に圍れしかども來り救ず、又英布、彭越に使を遣て救を求めしも、了に消息なし、此ごろ滎陽已に破れて周苛、樅公は節に死し、項王勝に乘て又此處へ攻來らんとす、汝等いかなる計かある。張良申けるは、英布、彭越が許へ使を遣てより已に一月に及べり、今は漸く出來らん、大王速に一人の大將を彭城へ遣して遙に勢を成しめ玉はゞ、項王必ず彭越の失あらんことを恐れて忽ち退き去べし、是乃ち彼を撃て此を救の計なり。漢王喜




周苛
摐公
守城
死節
摐公
周苛

ときは、決して降ざること明し、陛下強に求玉ふな。項王力及ず、彼もし降ずんば罪宥べきにあらず、速に誅せよと云しかば、武士共やがて陣外へ引出すに、樅公神色少も變ぜず欣然として斬れしは、實に比類なき忠臣かなと、嘆稱する聲半時ばかりは絶ざりけり。龍沮は馬に鞭を加て追行しが、向に大なる林ありて、其陰に周苛刀を横へ馬を勒して立たりしかば、大音あげて、周苛よく我言をきけ、漢王すでに落失て行方を知ず、城破て汝が一族みな擒にせられたり、然るに尙迷を執て天兵を拒んとするは、何とて甚だ愚痴なるやと呼るに、周苛大に詈り、臣としては忠に死し、子としては孝に死すべし、今滎陽破れて守を失ふたれば、我心深く之を恥とす、若又膝を屈めて逆賊に降らば、何の面目ありてか身を天地の閒に立んやと云て、刀を擧て驀地暗に斬て蒐る。龍沮甚だ怒り槍を撚て二十餘合戰ければ、周苛力弱り急に馬を囘して林の中へ逃入んとするに、冑の袖大木の枝に懸て迯んとすれども迯ざる處に、龍沮早背へ追來り槍を延て、汝もし甲を脫で快く降參せば一命を扶んと云ども、周苛耳にも聞入ず、刀を以て木の枝を切落し、急に馬を拍て逃走れば、楚の大軍すでに林の四面を取圍で、緊きこと恰も鐵桶を見が如なりしかば、周苛左に衝右に突ても出ること能ざる處を、龍沮兵を下知して了に馬上に生捕せ、師を收て馳歸りければ、項王周苛に向て、樅公すでに楚に降參せり、汝も又快く服せ

り出走りければ、龍沮戟を舞して蓬し回せと呼り、馬を拍て飛が如に追てゆく。項王は後陣に備て城下に居けるに、諸軍樅公を縛て來り見えければ、大に叱て曰、料るに汝は一匹夫何の武勇ありてか妄に天兵を防んとせし、今已に擒にすと云ども朕敢て殺ず、若心を傾て降參せば、乃ち此地を管領せしめて滎陽の太守に封ぜん。樅公申けるは、我力盡勢窮り城破れて擒となる只死せんのみ、安ぞ鼠の輩に降るべき、早々に首を刎て我節義を全せよ。項王樅公が忠義慷慨なるを見て殺すに忍ず、又季布を召て、汝樅公に說て朕に降らしめよと云ば、季布乃ち樅公に向て、夫人は功を建、業を立て、佳名を千載に傳るこそ大丈夫とは云べけれ、若空く死を甘て寂々として世に聞ることなくんば豈惜ざらんや、汝速に心を決して降參せよと云ふに、樅公申けるは、生る時順なれば死して心安し、我たゞ心に愧ることなからんことを求む、今力を振ひ城を守て此心を盡せり、我氣撓み志怠て城を破られたるに有ず、楚の兵は勢重く我は力孤にして支ること能はざるに因てなり、汝多く言を費して委曲に說こと勿れ、我たとひ今日降るとも明日は又叛ん、只漢あることを知て楚あることを知ず、忠心のみにして貳なし、我この忠心は萬金にも易ず、汝早々に退け。季布これに因て再び口を開くこと能ず、退て項王に奏しけるは、樅公心鐵石の如く頸を延て刀を待、彼が今日たとひ降るとも明日又叛んと云を見

項王これを患ひ、項伯、鍾離昧を召て、朕此の如く火急に攻れども城中更に弱りたる氣色なし、汝等いかに、計はなきかと議すれば、項伯申けるは、凡そ城を攻るには只兵の力を用ざるを患とす、若命をだに惜ずば、縦ひ鐵壁石城たりとも豈破れざらんや、今味方の兵の内に十餘人命を捨て急に攻上て、諸所の櫓に火を掛る者あらば、大軍其跡より一擁して上て忽ち城を踏破ん、箇樣に遷延として日を過す内に、漢王もし諸國の諸侯を語て來らば、滎陽了に得がたからん。項王乃ち諸軍を驅て四方より雲の梯を以て攻上んとするに、城中より又大木大石雪の飛よりも尚滋く投出ける間、楚の勢すゝむこと能ず、少し引色に見ければ、項王大に怒り、諸將に命じて退く者は悉く斬殺せとて擁殺して上るに、石に當り木に打れて立處に死する者數十人、項王は之にも怕れず尚も心を四方に配て只一揉に攻上れと下知して曳や〳〵と進みしかば、漢の兵如何ともすべき樣なく、周苛、樅公急に刀を拔て、撫斬に斬落さんと前後左右を走り廻りけるが、早楚の大將龍沮一方を攻破て一陣に込入ば、大軍跡に續て雲霞の如く殺入し、忽ち樅公を生捕けり。周苛これを見て、急に救んと力を振て斬拂へども、楚の兵大勢にて取卷たれば、容易く救ふこと能ざる處に、又季布、鍾離昧東の門より攻上て、角櫓に火をかけ大軍喚き叫で亂れ入こと潮の湧に異ならざれば、周苛力孤にして防ぐこと能ず、了に西の門よ

て庶人となり、諸軍勢の中に交て滎陽に在けるが、項王城を攻ること甚だ急なるを見て、周苛、樅公に見えて、漢王すでに城を捨て走り玉ひ、此城勢孤にして外に救の兵なし、然るに二將軍いかなれば堅く守て降參せず、徒に自ら苦を受玉ふぞ、是國家に益なきのみに有ず、不日に城一たび破れば、二將軍爭か命を全することを得玉ふべきと云ければ、二人大に怒り、汝は乃ち反復の小人、死を怕るの匹夫、誠に狗彘にだも及ず、妄に無用の唇を動して諸軍の心を惑す、況や漢王別に臨で此城を我二人に托し玉ふ、是よく我二人が素より忠貞なるを知玉へる故なり、然るに未だ數日をも過ざるに、苟も富貴を貪て大義を忘れ、恥を忍で逆賊に降らば、上は君の命に負き下は民の望を失ん、大丈夫たる者あに此の如ならんや、縱ひ此身は微塵になるとも、此志は鐵石の如し、今もし汝を生て置ば、決して大なる害を爲んと云も果ず、周苛矢庭に魏豹が髻をかい摑で引倒せば、樅公急に劍を拔て只一打に斬殺し、首を城門に掛て三軍に示し、魏豹敵に內通せんと企し故、いま已に誅せり、汝等よく心力を盡して城を守れ、若貳を懷ば悉く魏豹が如にせんと云ければ、諸軍聲を齊して、願は二將軍と共に死力を效して防ぎ守んとぞ申しける。項王は此由を傳へ聞て甚だ怒り、三軍を下知して益急に攻けるに、周苛、樅公四方に高く屛を塗て、彌堅く守りしかば、又十日餘を過て猶破こと能ず、諸軍も攻あぐんで退ん

○周苛樅公守城死節

項王は紀信を燒殺して漢の兵を悉く追散し、季布、龍沮を召て、汝一萬の精兵を領じ、急に漢王を追かけて擒にせよと下知すれば、二人即時に兵を引て追かけ、二日が間一足も休ず馳けれども漢王の行衛を知ず、人馬みな倦疲れしかば、暫く鄭村と云處に休みけるに、先手より報じて、漢王已に成皐の城に入て、又英布彭越が救の勢も出來んとする沙汰ありと告ければ、季布申けるは、漢王すでに成皐へ逃籠て又救の勢も出たれば、吾等進むとも破ること能じ、不若滎陽へ歸て此由を奏し、歸て彭城を守るか進で成皐を攻るか、項王の下知を聽ん。龍沮この儀尤とて共に兵を引て馳歸り、事の樣を奏しければ、項王の曰、彭城空虛にして守なし、今成皐を攻るとも急に破り難からん、不如早く滎陽城を踏破て彭城へ歸り、再び軍馬を整て劉邦を擒にせんとて、即時に令を下し、五日を限て必ず此城を攻落さんと、夥く雲の梯を造て、南の門よりは季布、西よりは龍沮、北よりは鍾離昧、東よりは項王自ら大軍を下知して四方より鐵砲弩を一齊に打かけたるに、城中には周苛、樅公、諸軍を督して大木大石を擲せ、晝夜少も怠ず守りしかば、已に五日に及べども項王未だ破ること能ず。此とき魏豹は向に漢王に死罪を宥され

せんとて、今は已に二百里の外に出たり、向に書簡を送て降參せんと云しは皆詐の計なりと云ければ、楚の將士こは如何なる天狗の所行ぞやと、以の外に興を醒し、急に項王に見て、車の内なるは劉邦にあらず、乃ち漢の臣紀信なりとて、云し事ども一々に奏すれば、項王大に仰天し、一たびは怒り一たびは嘆息し、劉邦が遁るは甚だ易く、紀信が之に代るは實に難し、是眞の忠臣なり、朕文武の將士その數を知ずと云ども、彼が如なる者一人もなしとて、急ぎ季布を召で、朕深く紀信が忠義を愛す、汝よく彼に說喩して楚に降らしめよと云ば、季布乃ち車の前に至り、紀信主の命に代て此に來る、誠に忠臣なり、我君項王深く其志を憐で殺すに忍ず、剰へ重く爵祿を與んと宣ふ、汝宜く此大恩を感じ速に車より下て降參せよ、必ず王命に負こと勿れと云に、紀信大に詈て曰、汝等は元沐猴にして人にあらず、安ぞ禮義を知ん、大丈夫の君に事るは、忠心のみにして貳あらず、縱ひ此首は地に落るとも決して禮義も知ぬ猴には降らぬぞ、我生ては漢の臣となり、死しては漢の鬼と成て了に逆賊を滅さんと欲す、烈々の志あに汝等が妄言に惑されんや。項王これを聞て甚だ怒り、武士を下知して車の四方に夥く柴を積、一度に火を付けるに、紀信少も動ず、猛火の中に在て詈る聲つひに止ず、忽ち灰塵と成て失ければ、聞人ごとに皆袖を濕さぬは無りけり。

車の内に坐せしめて用意悉く備りしかば、晩方に東の門を開て龍車を少し押出し、美女二千餘人を左右より陸續して出しければ、楚の陣より望み見て、急に此由を項王に告るに、項王は計とは思も寄ず大に笑て、劉邦素より荒婬にして、今この時節に至ても婦女を貪戀て尙捨ること能ず、安ぞ能大事を成に足ん、范增が慮甚だ過たりと云て待居たり。斯て陳平は數千の美女を花の如く粧ひ飾て、引も切ず出したるに、案に違ず、楚の軍勢大將も士卒も我先にと皆東門の前に集て爭ひ見て、覺ず隊伍を失ひ行列を亂して、四方の圍自然に解たりしかば、漢王すはやとて諸の將士と共に枚を銜で、密に西の門より馳出、飛が如くに成皐を望で落玉ふ。項王は今や今やと待居たるに、已に二更の鼓聞えしかば、劉邦は何とて早く來らざるとて、自ら陣前に出て望み見ば、一輛の車を推て數千人の美女四方を圍み、前後に多く赤旗を立て徐々と間近く進來る。項王甚だ怒り、劉邦何とて無禮なる、朕を見て車より下んともせず、端坐して木偶人の如し、必定車の内にて醉死したるならんとて、兵に命じ火把を撚して見せしむれども、尙言ず動ざりしかば、彌怪で漢王何ゆゑに言ざると呼りけるに、車の内より吾は漢王にあらず漢の大將紀信なり、吾君の難に代て此に來る、漢王は韓信、英布、彭越その外國々の諸侯を語ひ、虛に乘て急に彭城を攻破て、項王の一族を生どり、兵を廣武に會して楚と雌雄を一戰に決

漢王劉邦頓首上ニ書覇王皇帝陛下ニ。臣邦蒙レ封守ニ關中ニ、到レ彼水土不レ服、思レ欲ニ東歸以棲ニ故址ニ。不レ意人心苟從、志尙狂蕩、遂得ニ關中之地ニ。後値ニ睢水之敗ニ、已喪レ膽矣望々無レ歸、依ニ身滎陽ニ苟全ニ性命ニ、非レ有ニ他圖ニ。韓信東征皆彼自爲、招レ之不レ來、麾レ之不レ去、非ニ邦之罪ニ也。陛下今乃大兵臨レ城指レ期可レ破、威武之下鈇鉞難レ免、從ニ文武羣臣之議ニ、情願面縛出降、惟免ニ一死ニ、王若念ニ懷王之約昔日之情ニ、悉赦ニ往愆ニ誠沾ニ再造ニ。惟陛下其憐レ之。不宣。

とありければ、使を召て、劉邦いつか城を出て降るべきと問に、今晩必ず降參せんと答しかば、乃ち返書を調て使を還し、諸大將を召て、劉邦今晩出で降んと欲す、汝等預め帷幕の內に究竟の兵を伏おき、奴が北面して朕に見るとき、急に出て微塵に斬碎き、朕が平生の恨を雪べしと云ば、季布、鍾離昧等命を受て用意をなし、今や〳〵と待居たり。張良は陳平と相議し、先主上を遠く落して其後に紀信を出さんと云ば、陳平申けるは、いや〳〵項王は心の躁しき者なれば、若遲き時は又城を攻ん、況や四方に楚の兵未だ退ざれば、主上を出し難し、吾又計あり、多の美女を城中より出して、其跡より紀信を出さん、然る時は四方の圍自ら解て時刻も押移らん、其とき急に後より落し奉んとて、漢王に勸て衣服を改て馬に乘しめ、諸の諸士も皆かるがると出立せ、周苛、樅公二人は留て滎陽城を守るべしとて、紀信に漢王の袞龍の御衣を披せ、龍

今日もし此計を用ずんば、城忽ち破ん、臣その時死すとも大王に益あらんや、況や臣が今日君の爲に捨る命は鴻毛よりも猶輕く、大王を救て美名を不朽に留る事は泰山の如し、今日もし鴻毛の如くなる命を惜む時は、佳名を千載に失ふのみに有ず、此城忽ち攻破られ、君臣共に空く犬死して何の益か有ん。漢王なほ猶豫して肯ひ玉はざりしかば、紀信大に叫び、大王扨は臣を詐とし玉ふか、若臣が心に任せ玉はずば、今自ら刎て其志を顯んとて腰なる劍を拔て已に首に押當けるを、漢王急に飛かゝりて抱止め、泣て宣けるは、將軍の忠誠天日を貫く、千載にも泯べからずとて、座上に請じて問玉はく、將軍父母ありや。答て曰、一人の老母あり。漢王の宣く、是乃ち朕が母なり、謹で之に事へん、將軍妻ありや。答て曰、あり。漢王の宣く、是わが妹なり、必ず養ん、將軍子ありや。答て曰、たゞ一子あり、尙幼し。漢王の宣く、乃ち朕が子なり、能撫育せん、此三の者は朕身を終るまで懇に養べし、將軍少しも心に掛ること勿れ。紀信頭を叩て拜謝し、臣が死誠に其所を得たりと云しかば、張良、陳平乃ち降參の表を書て楚の陣へ使を遣し、漢王久く圍れて內强兵なく外救の勢なければ、今は早支ること能ず、陛下幸に誅を加へ玉はずは、速に關中の地を獻り城を出て降參せんと云送りければ、項王書を得て披き讀に、

得は臣の忠なり、孤もし之を殺さば、甚だ不祥ならんとて、了に田父が命を宥れたり、此繪は乃ち之を寫せり、其のち景公了に晉を亡して能伯業を成就せられしかば、田父の名靑史に錄して萬世に至て朽ず、今漢王久く圍れて危こと旦夕にあり、吾思ふに、時澆季に及で古の田父が如く義を重じ忠を尙ぶ人なければ、主上了に楚賊に亡され玉ひて、我等も皆擒にせられんことを悲み、昔を思て此繪を掛たり。諸將これを聞て皆奮然として起て申けるは、父難あらば子當に之に代べし、君難あらば臣乃ち之に代べし、古は田父だも尙忠義を知、ましてや我等久く君に事へて重き爵祿を蒙りながら、爭か田父に劣るべき、願は君の爲に命を捨て難に赴ん。張良大に喜び、諸君已に此の如く忠心あれば、主上の運命なほ賴あり、然れどももし主上の容儀に似たる人に有ずんば、楚人を欺くことを得じ、今諸君の中を見に、紀將軍一人よく主上に相似たりと云ば、紀信踊り揚り、是わが素よりの願なり、熱湯に入烈火を踏と云ども安ぞ畏ること有んと云しかば、張良、陳平限なく喜び、急に伴ひ行て漢王に見え、具に紀信が君の爲に詐て楚に降んと申す由を奏するに、漢王叱て宣く、朕大業未だ定らざるを以て、手下の將士つひに毫髮ばかりも恩を施ず、今紀信忠心にして難に死せんと申せばとて、我喜で此を逃れ去ば、不仁之より大なるはなし、人を損て己を利することは仁者はせず。紀信が曰、事すでに急なり、

茂たる林ありて、其陰に一人逃隱れたる體を寫たる繪なり。諸將その意を解ず、乃ち張良に問て申けるは、是は何を寫たる繪にて候ふぞ、願は其意を聞ん。張良申けるは、昔し齊の景公晉と戰て散々に打まけ、諸軍勢みな四角八方へ逃失て、後よりは晉の大軍すき間もなく追來りしかば、景公いかんともすべき樣なかりしに、一人の田父車を御したりけるが、景公に告て申けるは、事すでに急なり、大王早く車より出て林の中へ隱玉へ、臣恐ながら大王の御衣を著し、御車の内に坐して敵を欺ん。景公敢て從ず、孤縱ひ難を遁るとも汝必ず殺さるべしと宣へば、田父押回して、夫君の祿を食ふ者は、當に君の事に死すべし、臣一人死するは、大なる林の一葉を減ずるに似たり、若大王なき時は天下の萬民父母を失ふが如しと云ける處に、早追手間近く來りしかば、田父急に景公を車より引出して林の中へ隱し、自ら其御衣を著して車の内に端坐せしに、晉の兵二百餘騎四方より取圍み、了に生捕て歸りければ、晉公大に怒り、此は景公にあらず速に殺せと下知せらるれば、田父申けるは、我景公の爲に此に來る、早々に死を受ん、然れども今もし吾を殺し玉はゞ、後の世に到て臣として君の爲に難に赴んと欲する者ありとも、又殺されんことを怕て敢て力を效さじ、吾命を惜にあらず、君願くは之を察せよ。晉公聞て深く感嘆し、其身は賤き田父なれども其志貴ぶべし、臣死を畏れずして君難を免ることを

さんと欲す、況や此間夥く彭城より兵糧到來して候へば、益す退く志なし、只恐くは味方此の如く久く圍れて外に救の勢なきに、敵若滎河の水をせき止て城中へ灌ぎ入ば、如何ともすべき樣なかるべし。時に陳平すゝみ出て、臣一の計あり、必ず此圍を解て大王を救ひ奉ん、然れども如何せん、御方の諸大將の中に、君の爲に此計を行ふべき人なしと云ければ、周勃等を始として滿座の諸將、一同に聲を揃て曰、先生いかなれば人なしと宣ふぞ、某等久く君に事て常に義を金石に類し、命を塵芥よりも輕じて國の爲に忠を盡し、功名を萬世に傳んと欲す、白刄頸に臨み鼎鑊前にありとも我何の畏か有ん。陳平笑て、是人臣の常の志なり、安ぞ難とするに足ん、我深き計あり、諸君の知ところに有ずと云ば、漢王問て宣く、如何なる計ぞ。陳平乃ち耳根に寄て箇樣々々と低語けば、漢王大に喜び、此計極て妙なりとて、密に張良に告知せ、宜く陳平と相議して施し行ふべしとて、其日の評議は止にけり。張良は樣々に思案を囘し、何とぞして諸將の心を激し、陳平が計を行せて君の難を救んと思ども、施すべき方便もなく、退て家に歸りけるが、屹と一の計を案じ出し、次の日大に酒宴を設け、使を以て諸大將を招ければ、暫ありて皆出來り、各賓主を分て坐したりしに、床に一軸の繪を掛たりしかば、立よりて之を見に、一輛の車を畫きて其跡より緊く鎧たる武士數十騎、急に彼車を追蒐る體あり、又傍に

陳平
張良

紀信滎陽詐降楚

り玉ふ。

○紀信滎陽詐降楚

項王は范増が死たるを深く悲み、日夜泪を流して、范増久く我を扶けて其志父に異ならず、今よく彼が別に臨で云し言を思ふに、異心なきこと明なり、是必ず張良、陳平が反間の計なるべきを、朕悟ずして誤て忠良を害し、一の股肱を失へりとて甚だ後悔し、急に鍾離昧を召て安撫し、汝必ず異心を生ずること勿れ、心を安じて益忠誠を盡して朕を扶よと云ば、鍾離昧頓首して申けるは、臣等久く陛下に仕て才能なしと云ども、一點の赤心動ざること泰山の如し、亞父元より丹忠にして一向國の爲にす、安ぞ他の志あらん、向に虞子期が得たる所の書簡は皆敵の計なり、陛下願は明に察して必ず奸人に惑され玉ふな。項王いよ〳〵後悔し、即時に項伯を軍師として大小の軍務を管理せしめ、又軍馬を整點して滎陽へ押よせ、四方より取圍で目の前に踏破んとぞ攻たりける。漢王大に怕れ急ぎ群臣を集めて議し玉はく、項王手滋く攻て此城殆危し、今韓信も未だ歸ず、又國々より馳集たる諸侯の内に、項王に敵する程の勇者なし、汝等如何が計を用ん。張良申けるは、項王近頃范増が死たる故に、心中いよ〳〵躁して急に城を攻落

して勤勞せしことを思ひ、覺ず泪を催して流石に誅を加るに忍ず、望に任て了に人を付て故鄉へ送り歸らしむ、范增長嘆し、我もと心を空して楚に事ふ、何ぞ料ん君王私を懷て吾を疑んとは、是わが屈に有ず實に楚の不幸なりと云て、心中怏々として樂ず、已に彭城まで到けるが、鬱憤の餘にや、背に大なる疽出來て、腫痛忍び難く、寢食共に廢て起こと能ざりしかば、送の人を呼で、臥牛山に楊眞人と云人あり、是は昔し我師として道を學し人なり、汝等今行て此由を告ば、必ず苦痛を救の靈方あるべしと云ば、人々乃ち金帛を備へ、直に臥牛山に到て事の子細を告けるに、楊眞人申けるは、范增昔し我に從て年久く道を學べり、別に臨て我深く戒め、汝つねに密謀奇計を好む、必ず能明主を擇で事へよと云しに、今却て假を扶け眞を滅して百姓を殘害せしかば、了に天の罰を蒙て重病を受たり、是自ら成る禍にして他人の知事に有ず、我若これを救ば又天に逆なりとて、了に金帛を受收ず、使を山より逐下しける故、力及ず逃歸て右の趣を告ければ、范增之を聞て大に悲み、あつと一聲叫で地に倒れけるが、忽ち息絕て死にける。時に大漢の四年戊戌夏四月行年七十一歲なり。項王は此由を傳へ聞、聲を放て大に哭き、急に人を彭城へ遣し禮を厚して葬の儀式を行しむ。漢王は數日ありて范增が死たる事を聞て甚だ喜び、我心腹の患を除けりとて、陳平に重く恩賞を與へ、彌勢を增て四方を緊く守

以て和睦を求しに幸にして許さる、今より關の西を漢とし、東を楚として各師を收め、永く疆土を守んと欲す、足下吾ために此由を再び項王に奏せよ。虞子期が曰、楚王已に此事を領掌し、一たび大王に見て明に舊日の好を述んと欲し、今日某を使たらしむ、大王三日の内に必ず城を出て楚王に見え玉へ。漢王の宣く、我よく諸人と相議し必ず城を出て見べし、足下まづ歸て此由を傳られよ。虞子期乃ち別れて楚の陣に歸り、城中の體たらく張良、陳平が擧動、始終一々に奏して彼書简を出して見けれぱ、項王見了て勃然として大に怒り、老匹夫何とて此の如なる、是尋常の事に有ず、速に拷問して其罪を正んと云けるを、范增傳へ聞て甚だ哭き、急に走り出て地に拜伏し、臣久く陛下に仕て國の爲に肝膽を碎く、豈敢て異心あらんや、此は是張良、陳平が臣を陛下に疑せ、陰に誅殺せしめんと巧し反間の計なり、願は能察し玉へと云ば、項王いよ〳〵怒て曰、汝無益なるに言を費して詐ること勿れ、虞子期は朕が心腹の人、已に其實跡を委く見來れり、安ぞ虛說あらん。范增長嘆し、心の中に項王元より疑多して內決斷なければ、終に大事を成こと能じと思ひ、大言して申けるは、天下の事大に定れり、君王自ら心の儘に行玉へ、臣陛下に仕てより數年、心力を盡して屢功勞を建たり、願は故鄉へ放し還して老を養しめ玉はゞ、乃ち陛下天地の大恩なりとて、淚を流しければ、項王も范增が年來忠精を勵

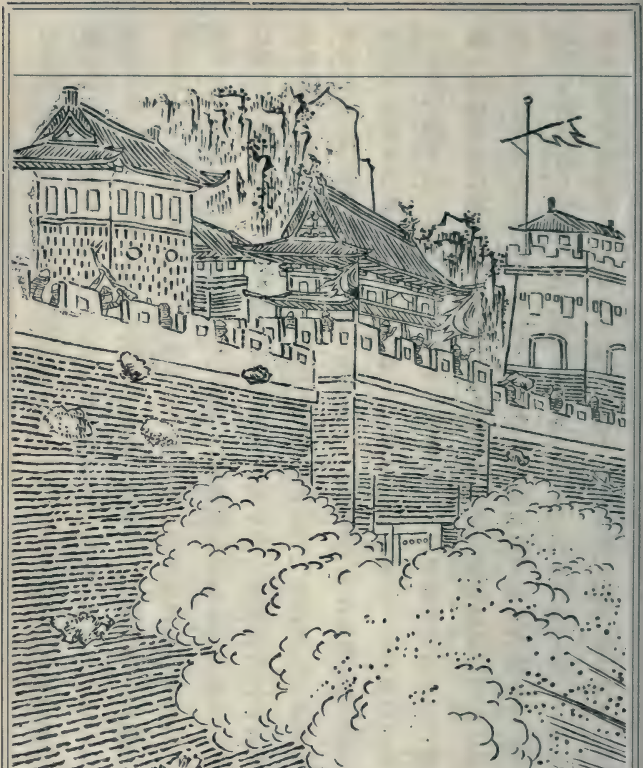
漢王いま漸く眠醒て未だ梳洗せず、足下暫く此に待玉へと云て外に立出たり。虞子期乃ち立て其邊を伺ひ見に、文案の上に諸方より往來の書簡を多く積置しかば、一々に披き見ば、其中に誰とも名字を書ざる書簡一あり、怪く思ふて之を讀に、其略に曰、

項王彭城失守、提兵遠來。人心不歸、天命離叛、大兵不過三十萬、勢漸孤弱、大王切不可出降、當急喚韓信回滎陽。老臣與鍾離眛等爲內應、指日破楚必矣。黄金不敢拜領、破楚之後、願裂土封於故國、子孫綿延百世、臣之願也。

虞子期見了て大に驚き、是紛べくもなき范增が書簡なり、近ごろ彼漢と內通して共に楚を亡んと企る由沙汰ありしかども、定て虚說ならんと思しに、今日張良、陳平が舉動只事ならず、今又この書簡を見に、扨は人の申すも實なりけるよと思ひ、密に書簡を袖の內へ藏しけるを、張良、陳平は壁の隙より伺ひ見て、計已に成就せりとて喜あへり。暫ありて隨何又出來り、虞子期を引て漢王に見えしむ。漢王宣けるは、吾昔し項王と共に秦を伐とき、懷王約を定て早く關に入者を王とせんと宣へり、吾項王より先に關に入て、早く秦を亡したれば、宜く關中に王たるべし、然に項王約に背て吾を險難の蜀に封ぜられしかば、吾日夜父母の國を思て了に兵を起せり、今すでに關中の地を取て平生の望足ぬれば、久く苦戰して民の命を傷ことを欲せず、使を

ば、漢王掌を打て、此計もし成就せば、范增休矣と云て喜び玉ふ。項王は范增が諌を用ず、了に虞子期を召て、朕今汝を滎陽へ使たらしむ、汝漢王に見ば、三日の内に必ず城を出て朕に見え、再び前日の好を修すべしと云て、能々城中の虚實を伺ひ來れと云ば、虞子期命を受て直に滎陽へ到りけるに、門を守る人、漢王昨夜大に酒を過して未だ起ずと申せしかば、暫く客屋に入て休み居たるに、忽ち張良、陳平二人出迎へ、伴て一の高閣に上り、金杯玉碗を陳ね美酒嘉肴山海の珍味數を盡て持なし、乃ち問て申けるは、范亞父恙なしや、今日なに事ありてか、足下を勞して此に來らしむる。虞子期怪で、我は范增が使にあらず、乃ち項王の使なりと答れば、張良、陳平興さめ顏にて、我等この人は亞父の使なりと思しに、扨は項王の使なるかと云て左右に向て、汝等楚の使を客屋へ伴ひ行て懇に持なせと云すて、二人共に油幕の内へ入ければ、左右の人乃ち虞子期を引て閣より下しむ。虞子期は彌心怪で客屋の內に入けるに、萬づ始に引替り器皿の類も欠損じて全からず、下部一兩人粗食村醪を以て持てし、張良、陳平も再び出ざりしかば心中甚だ安からざる處に、從者外より來て、漢王いま眠覺たりと告しかば、乃ち衣を整へ客屋より出て內に入ければ、隨何出迎へて一の密室に請じ入しむ。虞子期ひそかに室中の樣を伺ひ見ば、數千卷の書籍案に堆く、兩邊に帷帳器皿の類齊く備たり。時に隨何申けるは、

日二たび計を運んは如何に。范增申けるは、決して無用なり、滎陽いま空虚なるに、陛下の攻玉ふこと甚だ急なるゆゑ、是非なく和睦を乞と云ども其本心にあらず、益力を盡して攻玉へ、臣等も心を盡して計を設け、不日に滎陽を蹈破て玉石倶に焚ん、韓信たとひ百萬の雄兵ありとも必ず大事を成こと能じ、豈輕々しく隨何が一言を聞て此機會を失べけんや。項王猶豫して心決せず、隨何に向て汝暫く退け、朕再び能商議して事を決せんと云ば、隨何申けるは、陛下自ら御心を決し玉へ、必ず他人の言に惑され玉ふな、且韓信すでに北國を平定して近き内に歸り來んとす、陛下久く此に在て糧乏く士卒疲たるに、若韓信が大軍後より來り、城中よりも伐て出、夾で攻る程ならば、陛下如何とかし玉はん、其とき縱ひ和を求め玉ふとも漢王反て從じ、加之ず天下の人樣々に笑ひ辱ん、臣今漢に在と云ども元楚の臣なり、今日の言誠に心腹を吐出す、陛下前に斧鉞あり、臣あに欺き誑ことを得んや、只早く聖裁して他日の後悔を免れ玉へ。項王大に喜び、汝が言悉く理に合へり、朕が意すでに決せり、汝まづ歸り去べし、朕跡より使を遣して和睦を成んと云しかば、隨何別て城中に歸り此趣を委く奏し、速に陳平に命じて計を行しめ玉へと云ば、漢王乃ち陳平を召れ、項王果して隨何に欺れ使を來らして和睦せんとす、汝いかなる計をか施すべきと問玉ふに、陳平近く寄て如此々々にせんと私語けれ



反間計
范増憤死

と甚だ急なり、今もし使を遣し詐て降參し玉はゞ、項王必ず和睦せん、其とき却て陳平が計を用て君臣の間相疑しめば、大事決して成就せん。漢王の曰、項王若許容せずんば如何ん。張良が曰、項王は天性躁して氣剛なれども內に決斷なし、今城を攻ること已に七八日に及べども、味方更に弱たる氣色を見ざれば、心中甚だ悶え苦ん、若漢の使一たび至らば、忽ち兵を退けて和睦せんこと疑なし。漢王乃ち隨何を使として楚の陣へ遣玉ふ。隨何命を受まづ櫓に上て大音あげ、我漢王の命を受一大事の使として楚の陣に赴く、人々必ず聊爾し玉ふなと云て、城の東門より出て直に楚の陣に到り、項王に見て申けるは、漢王始め陛下と共に懷王の命を受て兄弟の約をなし、二手に分て秦を伐たり、其のち褒中險難の地に封ぜられしかば、遠く父母の國を離に忍ず、一旦兵を起して攻上ると云ども、其志もと天下を圖んとに有ず、今すでに關中の地を得たれば平生の望足り、願は師を收めて滎陽より東を楚の界とし、西を漢の界とし、速に韓信を召囘して各封疆を守り、百姓干戈の禍を免しめて、共に永く富貴を保んと欲す、陛下望らくは之を察せよ。項王これを聞て良久く兎角の答もなかりけるが、了に范增を召て議しけるは、漢王いま隨何を使として和睦を求む、能々思案するに、朕彭城に都すと云ども地方甚だ狹し、殊さら近き比は四方の諸侯離反て漢その七八を得たり、不レ如彼が望に任せ、暫く師を班て他

り、項王の常に恃む所の骨骾の臣は、范增、鍾離昧、龍沮、周殷等五六人に過ず、今度この處へ攻來るも元項王の意に有ず、乃ち彼等が勸に因てなり、今もし反間の計を行ひ楚の將士に賄を與へ、范增、鍾離昧等が異心を企る由を流言せば、項王素より慮淺して讒を信ずる者なれば、必ず實なりと思ひ、縱ひ范增等いかなる妙計ありとも疑て用まじ、其とき臣又一の計を施ば、項王怒て了に誅殺すべし、楚もし范增なくんば、項王爭か其勇を用ることを得ん、其弊に乘て大王急に討玉はゞ、楚忽ち亡べし。韓王限なく喜び、卽時に黃金四萬斤を出して授玉へば、陳平これを請とり、密に心腹の人を遣して、楚の將士に分ち與へ、偖て范增、鍾離昧等數度の功勞あれども、項王了に封爵の沙汰なければ、皆恨を含で漢と內通し、力を合せて楚を亡し、其土地を分ち取んと企る由を云せければ、案に違ず項王この流言を聞て色を失ひ、朕誤て奴原に欺き賺されんとせりとて、此より後は敢て共に事を議せざりけり。角て大軍を領じ滎陽へ到て寨を下し、次の日自ら先陣に進で城下に推よせ、四方より取圍で三日が間息をも繼ず攻けるに、城中には只堅く守て出合ず。項王急に下知を傳へ、是は空城なるぞ速に打潰せとて、射手を揃て鐵砲火箭を一齊に放合せければ、城中より是を見て、大木大石を雨の降ごとく拋しかば、楚の兵大に騷亂して一人も近付こと能ず。時に張良漢王に奏しけるは、項王城を攻るこ

通俗漢楚軍談　巻之十

○反間計　范增憤死

大漢の三年丁酉冬十一月、韓信すでに魏代燕趙の四國を平げて、威風遠近を動す由、その聞ありければ、范增、鍾離昧等項王に見て、近ごろ韓信魏豹を擒にし夏悦を斬、趙を破り燕を下して到る所勝ずと云ことなく、漢王坐ら滎陽を守て、四方の諸侯も楚を反て漢に歸する者多し、若この儘にて指置ば、根を深し蔕を固して、後容易く除き難からん、陛下速に兵を起して征伐し玉ふべし。項王の曰、朕すでに此事を聞て、不日に兵を擧んと欲する處に、汝等が奏する所よくも意に合へりとて、卽時に下知を傳へ、十萬の勢を整て滎陽へ寄んと用意をなす。漢の細作はや此由を聞知て馳て注進しければ、漢王急ぎ張良、陳平を召て議し玉ひけるは、今韓信遠く北方を征して未だ歸ざるに、項王虚に乘て又此處へ攻來らんとす、御方英布は已に九江へ歸り、王陵は母の別を嘆き病に染で未だ愈ず、其外の諸大將も多く韓信に從て北國にあれば、城中空虚にして防こと能ず、我之をいかゞすべき。陳平が曰、少も御心を苦玉ふな、臣一の計あ

韓信深く喜び、乃ち燕王に降參の表を書せ、滎陽へ使を馳て漢王に奏聞し、此より又齊へ攻かゝらんと諸軍に相ふれ、夜を日に繼で用意をなす。を以て此事を申せしに、元帥幸に許さる、願は漢王に奏して永く麾下に用玉へ。

願くは再び元帥に見て、且は兩國の好を修し、又は某も今より麾下に屬して攀龍附鳳を圖るべし、先生わが爲に此由を告よ。李左車大に喜び、乃ち伴て韓信が前に出、大夫深く元帥の寛仁にして、敵國の使なりとせず禮を厚して持成玉ふを感じ、早く歸て燕王に勸て降參させ、其身も今より永く麾下に屬せんと欲す、願は兵を罷て降參を待玉へと云ければ、韓信斜ならず喜び、卽時に曹參、樊噲二人に一萬の勢を付て、蒯徹と共に燕へ遣し、城外に陣を取て降を受しむ。

此とき燕王は蒯徹が久く歸ざるを怪み心中深く憂る處に、忽ち外より蒯徹たゞ今歸たりと報ず。燕王いそぎ召入て事の子細を問ば、蒯徹具に韓信、李左車が事を語り、漢王は誠に賢德の君なり、必ず楚を亡して天下を一統せらるべし、不如早く降參して蒼生の塗炭を救玉はゞ、萬全の計ならんと奏しければ、燕王喜て曰、われ始より早く降らんと思ひしかども、汝まづ行て虛實を伺んと申せし故に事延引せり、今すでに其まことに降るべきことを知、汝速に二將軍を迎へて城中へ入しめよ。蒯徹乃ち大に城門を開て迎へければ、曹參、樊噲兵を引て內に入、燕王酒宴を設けて慇懃に持なし、次の日自ら百餘騎を從へ、曹參、樊噲と共に趙城へ到れば、韓信禮了て申けるは、某不日に大軍を統て燕より齊に下て、北方の地を悉く平定せんと思しに、料ざるに賢王駕を枉て遠く來らる。燕王の曰、われ素より元帥の威德を慕て早く歸降せんと思ひ、向に蒯徹

に逆ふ者は亡ぶ、漢王義帝の爲に喪を發して義兵を起し、德愛百姓に及び威令諸侯に行はる、誠に天下の義主なり、加之ず韓信兵を用ること鬼神の如くにして、天下に敵手なし、されば明達にして能天命を知ものは、戈を倒にして歸降す、苟も一偏の見に規々として專ら强暴の楚に事る者は、是飛廉、費仲が輩にして紂を助て惡を爲なり、豈罪を天に得ざらんや、我つねに趙王に利害を說て降參を勸めしかども更に用ざりしかば、果して了に身を誤り國を滅せり、我向の所謂る天に逆ふ者は亡ぶとは是なり、且大夫は燕の名士なり、宜く先時の勢を見て細に興亡を察せよ、大夫いま自ら料るに、漢王と項王と孰をか眞命の主とせん。蒯徹答て曰、漢王は芒碭に大蛇を斬て、神母夜號五星相聚る、之を以て見ときは、漢王乃ち眞命たること疑なし。李左車又曰、韓信、張良、蕭何、陳平等を以て楚の范增、龍沮、季布、鍾離昧等に比せば、大夫孰をか優れりとする。蒯徹が曰、韓信等大に優れり、楚の諸大將安ぞ及べき。李左車申けるは、今大夫の言の如くんば、漢は方に興るべく楚は方に亡ぶべきこと儼然として明なり、然るに如何なれば有道の漢に逆て將に亡んとする楚に從んと欲するや、天命を知もの安ぞ此の如ならん。蒯徹首を垂て言ず良久して申けるは、我よく先生の言を思ふに甚だ理あり、我もと韓元帥に說て兵を收しめん爲に來て、却て元帥に說れ深く感ずる處に、今又先生に逢て意いよ〳〵決せり、

内に入て伺ひ見に、旌旗日を掩ひ、甲士精壯にして韓信中央に端坐し、禮節從容言論溫雅にして謀士は左に列り、武將は右に竝居たりしかば、深く心に感じて已に言を出さんとしけるに、韓信色を正して申けるは、大夫こゝに來るは、定て某に利害を說て合戰を止させんと欲してならん、燕王もし早々に城を開て降參だにし玉はゞ、我安ぞ戰を好ん、且六國の中に燕より强きはなし、我いま大夫の一言に因て俄然として師を收んに、燕尙舊の如く楚の藩鎭たらば、天下の人必ず我を怯と云ん、漢王いま軍威漸く盛にして、四方の諸侯風を望で來り服するの時、決して此辱を受ること能ず、我誓て兵を易水の前に擧、武を燕臺の上に試ん、縱ひ樂毅なほ死せず荊軻再び蘇生すとも我何の怕か有んとて、左右に向て汝等大夫を客屋へ伴ひ行て休息せしめよ、我燕を伐齊を破て後再び大夫に對面せんと云ば、諸人乃ち蒯徹を引て客屋に入しめ、幃帳を引陳ね、其外飮食器用の類を齊く備て持成けり。蒯徹は元來利害を說んと思けるが、韓信が一言に氣を奪はれて口を開くこと能ず、心中怏々として客屋の中に閉籠て人に逢ず、角て數日を過けるに、或日廣武君李左車來り訪ふと報ず。蒯徹急ぎ迎へ入、大に哭て申けるは、燕趙は唇齒の國なり、料ざるに先生一旦漢に歸して、趙王擒にせられ陳餘敗亡す、此故に今燕又殆ど危し、是甚だ哀に堪たり。李左車が曰、足下何とて甚だ心惑る、夫天に順ふ者は昌え天

ぞ天命歸することありと云ん。隨何申けるは、大に誤れり、我漢王睢水に敗績すと云ども、大風圍を解て白光路に引、これ豈上天の默して祐るに有ずや、然らずんば爭か此難を免ることを得ん、此故に聖王は百靈の助あることを知、いま又僅に滎陽を守て四方に敵を受、もし睿智神武あるに有ずんば、何を以てか天下を制服することを得ん、此ゆゑに聖王は文武の勇あることを見、況や麾下に韓信よく兵を用ひ、張良よく計を設け、蕭何又兵粮を運送して帶甲百萬、名將雲の如く從て大勢すでに定れること辯論するに及ず、又西楚は勢尤も强と云ども沐猴にして人にあらず、項王久く殘暴を放にして天下一人も恨ざるはなし、我料に近くは數月、遠くは一年を過ずして必ず滅絶せん、然るに大王時勢を度ず成敗を審にせず、妄に漢の王業未だ定ずと宣ふは、又大に誤ずや、況や今趙すでに亡て、趙歇生どられ陳餘敗死す、是方に唇齒寒、剝床以膚の時、大王あに能孤立して久く安きことを得玉はんや。燕王これを聞て答べき言なく深く心に嘆服し、密に蒯徹を召で私語けるは、隨何が云ところ悉く理あり、汝行て韓信に見ば、宜く斟酌して必ず事を誤ること勿れ。蒯徹打うなづき、少も慮り玉ふな、臣彼に至らば能虛實を伺て君の命を辱め候はじと云ければ、燕王懇に隨何を持なし、蒯徹を伴て趙へ赴しむ。韓信これを聞て、燕すでに味方の者と成りと、甚だ喜で人を出して迎へ入しむ。蒯徹

はんとて、即時に隨何を使とし書簡を調て燕王に送り、大軍を趙城に屯して動ず、此とき燕王は韓信が代趙を破て威風甚だ盛なる由を聞て大に驚き怕れ、諸臣を集て計を議するに、一人列を出て奏しけるは、韓信いま兵勢大に振と云ども屢戰場を經て三軍みな疲勞せり、臣料るに韓信暫く趙に留て兵を動さず、必ず使を來して大王に降參を說ん、大王まづ輕々しく許容し玉ふな、臣願くは使を作ひ行て韓信に見え、機に臨み變に應じて說べくんば說、降るべくんば降らん。諸人これを見ば、燕の謀士蒯徹字は文通なり、燕王疑で信とせざりけるに、案の如く忽ち外より報じて、韓信いま隨何を使として書簡を送れりと報ず。燕王驚き乃ち隨何を迎へ入て對面し、書簡を取て披き見に、其文に曰、

漢大將軍韓信書奉燕王麾下、信聞、天命靡常、惟歸有德、秦惟無道滅絶墳典、殘害百姓、繼以項氏益肆暴酷、放弑義帝、惡貫于天、海內震號神人共憤、漢王倡爲義擧、兵皆縞素、席捲三秦立降二魏、虜豹誅悅破趙斬餘、非兵之强也、德之召也。所向風靡罔不順服、獨燕未附、寧知命之所歸乎。方今屯兵趙城、遣書北指、若能倒戈納款、憫恤民命、不失王封、分茅百世、趙鑑不遠。王其思之。

燕王見了て隨何に申けるは、漢王睢水に敗軍し、今僅に滎陽に身を寄て、王業未だ定らず、何

薄く才微にして用るに足ずと云へども、願は愚忠を效して將軍の爲に肝膽を吐出さん、將軍已に魏豹を生どり夏悦を誅し、今又陳餘を泜水に斬て雄兵二十萬を高邑に破り、一鼓して趙を平げ玉ひしかば、勇名天下に振ひ武威四海を動して、農夫は耕を輟耒を釋て稱嘆し、孩提の嬰兒も啼を止て、其名を畏ずと云ことなし、是乃ち將軍德の盛なる也、然れども數箇度の戰場を經て、人弱り馬疲て今は物の用に立がたし、此疲弱たる人馬を率て能燕を伐んと欲し玉ふ、燕尤も弱しと云へども、若堅く守て數日出ずんば、將軍粮乏く兵苦で了に破ること能じ、燕もし降ずんば齊は益從じ、是將軍智の及ざる所なり、されば古の能兵を用る者は、不レ可ニ以レ短擊ニ長而以レ長擊レ短、いま將軍いかに攻玉ふとも、燕恐らくは破り難からん。韓信申けるは、然らば如何なる計を用てか可ならん。李左車が曰、いま將軍の爲に計るに、宜く先兵を收て趙を鎭め、百姓を安じて、三軍の鋭氣を養に如はなし、然る時は燕の將士大に畏れて、晝夜心を安ずること能じ、將軍又一人の辯者を擇で一紙の書簡を送り、燕王に利害を說て、御方の威德を彰し玉はゞ豈服せざらんや、燕すでに服せば、齊は自ら風を望で降るべし、此の如なる時は、刄に血ずして燕齊を得のみに有ず、自然に天下を圖つべし、古の大兵固有ニ先レ聲而後レ實者ニと云是なり。韓信限なく喜び、誠に先生の言の如んば、所謂る不レ戰而屈ニ人之兵ニなり、謹で教に從

俄に諸方より馳集りたれば、曾て兵法を調練せず、是所謂る敎ざる民なり、調練せざる兵は敵に逢て逃やすし、我この故に大河を背にして陣を取ければ、諸軍みな逃ること能ずと思ひ、命を捨て戰ける故果して十分に利を得たり、諸將悉く嘆服し、元帥の神機妙算鬼神も料り知ること能じとぞ申ける。されば後の世まで語り傳へて、韓信が今日の軍を背水陣とは名づけたり。韓信は諸軍に令を下して、若廣武君、李左車を生どり來る者あらば、黄金千兩を恩賞に下し與んと觸たりければ、數日を經て了に縛り來る。韓信その人に恩賞を與へ、急に李左車が索を解宥し座上に迎へて東面して坐せしめ、自ら西に向て師の禮を以て敬ひ、乃ち問て申けるは、我いま北の方燕の國を伐んと欲す、如何なる計を用ば功を成ん、先生ねがはくは敎を垂よ。李左車が曰、古より亡國之大夫不レ可二以圖レ存、敗軍之將不レ可二以語レ勇と云り、我は是亡國の俘、いま又何をか說ん。韓信が曰、昔し百里奚虞に在て虞亡び、其のち秦に行て秦了に霸業を成り、是百里奚虞に在し時は愚にして、秦に行ては賢なるに有ず、只君の計を用ると用ざると、言を聽と聽ざるとに因てなり、向に趙王もし先生の計を用ば、我決して擒と成ん、陳餘に誤られて用ざりしかば、我了に趙を破ることを得たりとて、再三懇に乞求れば、李左車申けるは、我きく智者千慮必有二一失一、愚者千慮必有二一得一と、此故に狂夫の言と云ども聖人は之を擇ぶ、我智

陳餘諸軍を下知して敵大河を背にして陣を取たるぞ、急に追つめて悉く河中へ突落せとて、大軍一度に喚て蒐に、路に旗鼓を捨たること足の踏處もなかりしかば、趙の兵俄に德づいて我劣らじと爭ひ取ける間に、韓信は行方なく逃失て、思も寄ぬ漢の大將曹參、樊噲、周勃、靳歙四人大軍を下知して掩殺し、一足も退く者は忽ち首を斬んと喚き叫で蒐立しがば、趙の兵大に亂れ騷ぎ、一支も支ず我先にと城下まで逃歸り、早く門を開けと呼はりけるに、城中さらに人音もせざりしかば、皆心怪て櫓の上を望み見ば、夥しく赤旗を立列ねて、漢の軍勢きら星の如く並居たり。趙の勢は大に膽を冷し、上を下へと騷動して互に踏合て死する者數を知ず。陳餘甚だ怒て忽ち五六人斬殺しけれども更に鎭らず、彌亂れ立て逃んとするに、早漢の大軍野に充山に漫て出來り、須臾の間に四方を百重千重に取圍で其緊しきこと水漏せども通ぜず。陳餘は死力を振て左に突右に當り、前を衝後を打ども出ること能はざりしかば、長嘆して立たる處を、灌嬰後より馬をつと馳よせ、只一刀に斬落して了に趙王を生捕ければ、韓信乃ち軍を收め直に城中に入て兵粮を使ふ。諸大將みな地に拜伏して申けるは、兵法に右ニ背山陵一、前ニ左水澤一と云り、然るに元帥今日水を背にして陣を取、却て大に打勝玉ふは如何なる故ぞ。韓信が曰、諸將知玉はずや、古より陷ニ之死地一而後生、置ニ之亡地一而後存と云事あり、御方の兵は皆

れば、敵陣兵粮つきて十日より内に悉く擒と成ん、若臣が計に從ふ玉はずば、決して韓信、張耳に亡され玉ふべし。陳餘申けるは、是みな詐の謀なり、我もと義を以て兵を起せり、安ぞ詐謀奇計を用ん、兵法にも十則圍之倍則戰之と云ずや、韓信いま魏代を破て疲れ果たる將士を引來り、詐て十萬と稱すれども、其實は四五千に過ず、況や御方の兵は久く鋒を藏し、氣を養て調練よく熟したれば、韓信爭か當ることを得ん、若又引籠て出ずんば、天下の諸侯みな我怯きを侮り、今より不時に兵を引て攻來ん。是甚だ長久の計に有ずとて、了に李左車が計に從ず。漢の細作は早この事を聞知て急ぎ馳歸て一々に告ければ、韓信限なく喜び、十人に重く恩賞を與へ、さらば打寄んとて夜半に手配を定め、まづ騎卒二千人を擇て、汝等密に小路より廻て山中に埋伏し、趙の兵の城を空して出るを見ば、急に跡へ廻て城を乘とり、趙の旗幟を悉く拔棄て漢の赤旗を立列ね、緊く守て動こと勿れとて、又諸軍勢に向て、汝等今日の合戰必ず心を忽にすること勿れ、早く趙を破て城中にて心靜に兵粮を使べきぞとて、立ながら僅の食を與へければ、皆驚き怪ずと云者なし。韓信未明に打立て先一萬の兵を分て綿蔓水と云河を背にして陣を取せ、張耳と共に大將の旗を眞先に進め、鼓を打立て攻蒐れば、趙の兵打て出てやゝ久く戰ひけるが、韓信張耳兼ての約束なれば、旗鼓を打すて詐り負て散々に逃走れば、

とす、元帥少しも慮り玉ふな、彼縱ひ奇謀ありとも決して行はれじ。韓信が曰、いや〳〵成敗利鈍預め見べからず、凡そ戰を交るに、先敵の虛實を詳にして而して後に進む時は、意氣甚だ盛にして戰に勝ずと云ことなしとて、乃ち士卒十人を擇で汝等密に趙の城に入て敵の虛實を能々伺ひ來れ、重く恩賞を與ふべきぞと云ば、皆命を受て商人の體に出立、直に趙城に入て門を守る人に多の錢を與へ、或は終日酒を飮で、共に越方行末の物語して數日を過ければ、了に親く相狎たり、浩しかば凡趙王の陳餘、李左車と議する所の計一として聞ずと云ことなし、此とき趙王趙歇は漢の兵の攻來る由を聞て、乃ち陳餘と共に二十萬の勢を整て井陘まで出張し、李左車を召て計を問に、李左車申けるは、某承る韓信西河を涉て魏豹を虜にし夏悅を斬て、勢に乘て攻來り鋭氣甚だ壯なるに、又張耳が輔あれば其鋒ます〳〵當べからず、然れども千里の外より兵粮を運送するを以て、軍士つねに食に飽ず、況や井陘の路は甚だ隘して車軌を方ること能ず、騎馬列を成ことを得ず、料るに粮食必ず後陣に在む、臣願は三萬の奇兵を領じ、小路より敵の後へ廻て其輜重を絕ん、大王たゞ溝を深し壘を高して固く守り玉はゞ、韓信進でも戰ふことを得ず、退ても歸ること能じ、殊更いま十月の末に及で、田野に掠め取べき五穀なけ

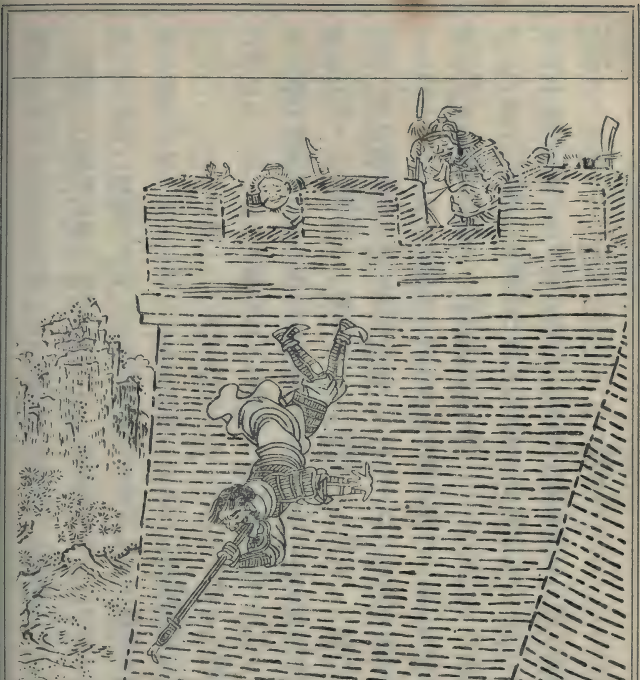
固く守れ、必ず某が故を以て空く胯失に降ること勿れ。韓信今は怺へかね、憎き匹夫が言かなとて、忽ち首を斬て指擧ければ、張同これを見て聲を放て大に哭き、我今は誰爲にか此城を守るべき、惜からぬ命を惜で敵に辱を受んより、不レ如死して平生の徳に報ぜんと云も果ず、劒を口にくはへ櫓より倒に落て失にけり、城中の副將王存謀士單忠を呼で相議し、我内には強兵なく外には救の勢なし、縱ひ緊く守り得ても益なきことなりとて、了に城を開て降參す。韓信乃ち城中に入て百姓を安撫し軍兵を數るに、西魏代州兩國の勢を合せて已に三十餘萬に及びしかば、斜ならず喜び、さらば此勢に乘て趙を伐んとて、又三軍に觸て用意を成しめ、王存に命じて代州を守らせ、滎陽へ早馬を立て捷軍を注進す。

○背水陣韓信破レ趙

次の日韓信十萬の勢を率して代州より趙の國へ進發し、井陘を三十里隔て陣を受、張耳を召で相議しけるは、趙の謀士廣武君李左車は極て能奇妙の計を用ふと聞り、我まづ細作を入て趙王の虛實を聞定め、其後に兵を進むべし、若輕々しく重地に入て敵に兵粮の路を隔られば、我進で戰ふこと能ず退て守ることを得じ、是甚だ兵家の忌ところなり。張耳が曰、いま成安君陳

に、向より敗軍の士卒十餘人馳歸り、夏將軍餘りに長追して敵の計に中り、兵こと〴〵く討れて只一騎谷の中へ逃入玉ひしが、今は定て討死し玉はん、某等も已に討るべかりしを、漸に馳脫たり、將軍輕々しく出玉ふな、夜も深て候へば、恐くは敵の伏勢あらんと告たりしかば、張同魂を失ひ、さればこそ我料りしに違ずとて、急に城中へ引回し緊く四方を守りけり。韓信は本陣に歸て夥しく燭を燃し、刀槍劍戟を立列ねて十分に威儀を嚴にし、兩邊に諸大將を雙居させて、自ら中軍に坐しければ、武士共夏悅を縛て引出す。韓信申けるは、我漢王仁德華夷に施し威名遠近を動す、汝等なに故に久く賓服せざりし、今より前非を改て專漢に事へ、再び王命に違ふことなくんば、放して元の如く代州へ還さん。夏悅申けるは、我もと王位に昇んと圖しに、今日誤て擒にせられて志を遂ること能はず、汝速に殺せ、安ぞ胯夫に降參すべき。韓信大に怒り、匹夫無禮甚し、今誅すべけれども、夜中なれば暫く閣き、明日張同を生捕て一度に首を斬、城門に掛て三軍に示んとて、檻車の内に縛て多の武士に守らしむ。次の日韓信大軍を推て城下へ攻寄けるに、張同たゞ固く守て出ざりしかば、軈て夏悅を檻車より取出して城下に引すゑ、兵を下知して張同早く降れと口々に呼せたり。張同櫓の上より望見て大に哀み、我將軍の苦を受玉ふを見に、心中碎るが如しと云ば、夏悅叫で曰、御邊願はくは死力を盡して

韓信斬二夏悅長今
韓信
夏悅


張全

夏悅のがさじと兵を下知して、已に二十里ばかり追蒐たるに、忽然として鼓の聲地に振て、左に灌嬰右に盧綰二手の勢殺出して後の路を横ぎる、之を見て曹參も急に取て回し、三方より揉合せければ、夏悅が兵夥しく討れ、四方より打かくる鐵砲火箭は雨の如く、火把を拋こと蝗の飛に異ならず。日も早西に沈みしかば、夏悅大に震ひ慄き、僅に百十騎を引て山陰の小路を逃走れば、三人の大將一手に成て跡より追こと甚だ急なり。夏悅は馬に鞭を加へて這々十里ばかり逃延けるに、忽ち又喊の聲天に響て一彪の軍馬討て出、一人の大將大の眼を瞋して眞先に進み、舞陽侯樊噲こゝに在て汝を待こと久し、速に首を渡せと呼る。夏悅膽魂も身に添ず、横きりに路もなき谷の中へ馳入けるを、樊噲えゝ何までか逃んと兵を驅て、さしも險しき谷際の岩石欹て鳥も翔り難き所を魚貫して追かくれば、夏悅如何ともすべき樣なく、了に馬を乘すてゝ跣になり、木の根岩稜に爬み付峯を越て逃走れば、又谷の奥に鐵砲一聲聞て俄に金鼓の響天に喧し。夏悅今は身も疲れ夜も痛く深たりしかば、こは如何にせんと、あきれ果茫然として立たる處に、早韓信大軍を引來て四方より取圍み、了に生捕て引縛り兵を收て本陣へ歸りける。張同は留て城を守り居けるが、心に屹と思ふ樣は、夏悅午の剋より出て今に歸らざるは、必定深入して敵の計に中れるならん、早く行て救んとて、五千の兵を率る火把を燃して城を出たる

けるは、韓信すでに魏豹を擒にし、勝に乘てこの處へ寄來り、氣撓み心驕れり、我久く鋭氣を養て人馬甚だ壯なれば、急に打て出て其未だ備なきを攻ば、必ず十分に打勝ん、是所謂る以逸待勞なり。張同この儀尤とて、乃ち諸軍に下知を傳て預め合戰の用意をなす。韓信は代州の城を三十里隔て寨を下し、諸將を集て申けるは、夏悅、張同は兵法の達者、わが遠く來て未備へ無らんことを料り、必ず急に出て戰ふべし、汝等たゞ辛苦を厭ずして能心を盡ば、彼等みな擒と成ん、諸將頓首して願は號令を聽んと云ければ、韓信又曰、曹參まづ一軍を引箇樣々々にして敵を欺け、灌嬰、盧綰二人は左右に伏て、敵の行過るを待て歸る路を截塞げ、樊噲は一軍を引て山陰に埋伏し、敵の打負て逃るを見ば、一度に起て討取べし。諸將みな計を受て出去しかば、韓信は自ら五百の精兵を率して谷の奥に埋伏す。去程に夏悅は張同を留て城を守らせ、午の刻に自ら一萬の勢を引て直に韓信が陣へ押よせ、胯を潛し夫この內に在か、早々に出て降參せよと呼れば、忽ち一人の大將馬を踊してかけ出、漢大將曹參と大文字に書たる旗を指揚たり。夏悅大に打笑ひ、人みな韓信は能兵を用ると申すが、今この陣取の體を見に恰も小兒の戲に似たりとて、曹參に向て、胯夫は何とて出ぬぞ、我名を聞て早腰が拔たるか、汝は名もなき匹夫われ先刀を試んと罵れば、曹參甚だ怒り戟を擧て十合ばかり攻戰ひ詐り負て散々に逃走る。

豈今日あらんや、汝は元一國の王爵なるを以て其罪を正すに忍ず、免して平陽へ還し置處に、汝その恩を思はず、却て恨を懐て謀反を計る、今は必ず死罪を免ること能はじ。魏豹たゞ首を低て物をも云ず居たりけるに、年八十ばかりなる老母すゝみ出哀で奏しけるは、魏豹が罪誅を免れ難しと云ども、妾、子とては此より外になし、今もし之を殺し玉ふ時は、西魏の後裔一脈も遺ず、願くは一命を助て先王を祭しめ玉はゞ、大王の盛德これに過べからず。漢王嘆じて宣く、魏豹男子として却て老母が賢なるに及ばず、今決して誅せんと思へども老母の面を見に忍ずとて、官を剝で庶人とし、其妻薄氏、管氏二人容色甚だ麗して共に傾國の姿ありければ、乃ち后宮に留め玉ひ、其餘は左右に命じて悉く城外へ追出させ、使を送て大夫周叔を假に平陽の守とし玉ふ。此時韓信は又軍馬を整て已に代州へ發向せしかば、漢王乃ち王陵を大將として備を成しめ、咸陽へ使を遣して、相國蕭何に堅く關中を守り、昭に法令を布て軍民を治め、凡そ奏するに及ざる事は、自ら宜に隨て施し行ふべしと云送り玉へば、蕭何謹で王命を領じ、晝夜孜々として政を治め、日々に兵粮を運送して滯ることとなければ、漢の大軍人強く馬壯にして向ふ所勝ずと云ことなし。此時代州の夏悅、張同は共に諸方合戰の樣を物語して居けるに、忽ち細作來て、只いま漢の軍勢夥しく攻來て、此處を三十里隔て陣を取たりと注進す。夏悅申

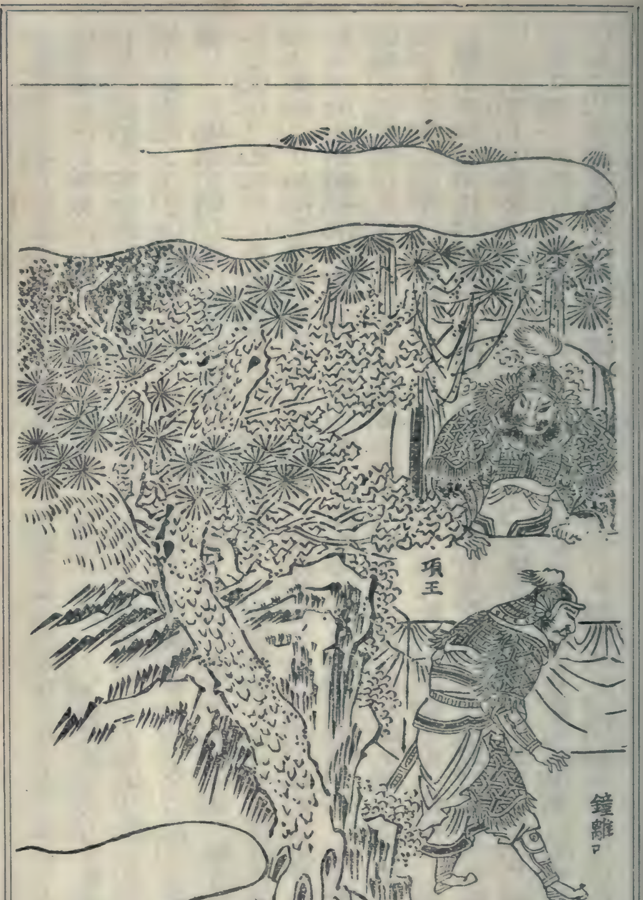
陛下始終こと〴〵く敵の計に欺れ玉へり、叔孫通は久しく漢に仕へて劉邦が心腹の人なり、安ぞ味方に降参せん、韓信いま魏を征して未だ歸らず、城中空虚にして迎へ戰ふこと能ざる故に、何とぞして只楚の兵を退けんと巧し者なり、叔孫通が陛下に申せし事も、又彼が殺されたりと云も、皆詐にて候ふ。項王始て悟り、匹夫何ぞ朕を侮ることの甚しき、朕再び攻よせ、誓て劉邦を誅せずんば有べからずと怒りけるを、范増押止め、いや〳〵此は長策にあらず、韓信今は漸く魏より歸らん、不如まづ鋭氣を養て暫く時節を伺ひ玉へと云ければ、項王少し怒を鎭め細作を出して韓信が消息を尋ね聞しむ。

○韓信斬夏悦張同

韓信は魏豹を擒にして平陽の民を安んじ、兵を收めて滎陽へ歸りければ、漢王限なく喜び、乃ち問て宣けるは、平陽すでに定れり、元帥いま又何の敵を伐んとか欲する。漢信答て曰、代州の夏悦、張同久く王化に服せず、臣まづ此賊を誅し勢に乘て趙を伐、燕を破て齊を下し、次に楚を亡して一統の王業を開くべしとて、兵に命じて魏豹が一族を悉く引出さしむれば、漢王大に罵て宣く、汝五十六萬の勢を率て睢水の一陣に三十餘萬を失へり、朕もし天の祐あらずんば、

を待て果さず、若この儘にて閣ば項王虚實を探きゝ、叔孫通が言みな詐なりと知て、急に攻來らん、我一の計あり箇樣々々にせば、項王氣を失て忽に引去べし、陳平この議甚だ然るべしとて、共に漢王の前に出て奏しけるに、漢王も此計大に妙なり、速に行ふべしと宣しかば、張良乃ち典獄の官に命じて、死罪に事極たる囚人二人を牢の中より引出させ、密に首を斬て城門に曝し、叔孫通項王に內應して王陵と共に謀反を企て、事顯れて二人共に誅せられたりと詐て披露し、榜を立て軍民に示しける。案に違ず項王は此由を傳へ聞て大に力を失ひ、我計又成ず、殊に此城要害堅固なれば、急には破り難し、此の如く空く日數を送る內に、韓信もし虛に乘て彭城を攻ば、果して叔孫通が云し如く朕進でも行處なく、退ても歸る所なかるべしと云ば、龍沮申けるは、陛下たゞ次第々々に兵を閑に退け玉へ、若急に退んとせば、必ず漢の兵跡より追來らん。項王これに從ひ密に令を傳て、一日一夜に大軍こと〴〵く引去ぬ。漢の細作この由を急で報じければ、漢王諸將に向て曰、果して張良が計に出ず、項王すでに退たり、汝等急に追付て討止よ。張良申けるは、必ず無用なり、楚の兵次第を亂さず徐々と引退く、范增定めて深き計あらん、御方ます〳〵用心すべしとて、周勃、周昌二人に一手の勢を與へ、滎陽を五十里離れて陣を取しむ。項王は退て彭城へ歸り、范增を召て具に事の樣を語れば、范增嘆息して曰、

王陵も久く陛下を慕ふ心あれば、臣歸て共に合圖をなし、不日に伴ひ來て降參せん。項王問て曰、漢王いま將士いか程あれば久く降參せざる。答て曰、今滎陽にある兵二十餘萬大將は六七十人、敖倉の粟を得て兵粮又乏からず、然るに固く守て戰を交ざるは、深く慮る所ありてなり、韓信此ごろ已に魏豹を平げたれば、直に虛に乘て彭城へ推よせ、太公、呂后を奪ひ取て漢に還し、又代州を破て次に燕齊の兩國を攻從へ、陛下をして進で行處なく退て歸る所なからしめんと料る、此ゆゑに漢王遷延として空く日を過し、一向に韓信を待、もし韓信が大軍後より廻り、城中よりも打て出、夾で攻ば陛下恐らくは防ぎ難からん、速に其備を成玉へ。項王又曰、汝何の日か王陵を伴て來り降らんと問ば、叔孫通が曰、臣宜く隙を伺て來べし、陛下たゞ早く彭城の守を固し玉へとて、別れて滎陽へ歸り、陵母が自害したる由を奏しければ、王陵これを聞て大に哭き、あつと一聲叫で地に倒れけるを、諸人急に扶け起せば、暫ありて蘇り眼を瞋らし齒を切り、項羽匹夫情なく我母を殺したり、誓て共に天を戴じと罵て止ず。叔孫通は心の中に、若項王の老母が屍を收め置たる由を告ば、王陵若も心を動すことや有ん、不如心を專にして漢に仕へしめんと思ひしかば、了に隱して告ざりけり。數日を經て張良密に陳平を呼で相議しけるは、項王叔孫通に欺れ、韓信が彭城を襲んことを恐て、急に引退んと思へども二人が降參


項王
鍾離ア

其二
陵母
叔孫通

事を宣ふぞ、漢王は大度ありて寛仁の長者なれば、了に天下蒼生の父母と成玉はん、我子幸に之に仕て實に其主を得たり、若よく忠誠を竭して早く奇功を建、萬世までも大漢の名臣と稱せられば、我死すとも尙生るが如ならん、安ぞ某が故を以て貳を懷き、逆賊に降て桀紂が如き輩を助るの理あらんや、御邊歸らば、願くは此由を我子に能々語り傳よと云了り、急に武士の帶たる劍を拔て自害しけるを、叔孫通飛かゝりて止んとするに、陵母の首已に地に落ければ、滿座の諸人一度と咄と驚嘆する聲一時ばかりは止ざりけり。項王は大に怒り、老媼何とて甚だ愚癡なるぞ、早く其屍を微塵に斬碎て諸人に戒めんと云ば、季布急に諫めて曰、老媼罪ゆるし難しと云ども若その屍を收め置て密に告知さば、王陵せめては葬りの禮を成んと思ひ、了に御方に來り降らん、然らずんば彼いよ〳〵怨を含で永く漢を扶け、他日母の仇を報ぜんとて、命を捨て攻來らば、御方必ず防ぎ難からん。項王これに少し怒を鎭め、陵母が屍を收て沛縣へ送らせ、叔孫通に向て申けるは、汝滎陽へ歸らば、王陵を諭して快く朕に降らしめよ、若遲き時は朕忽ち城を踏やぶり、漢王も汝も諸共に悉く首を斬て罪を正すべきぞ。叔孫通近く寄て密に佯て告けるは、漢王妄に賢士を慢り罵て甚だ無禮なり、臣つねに之を恨で、陛下に降らんと欲すること久し、今日こゝに來るも專ら王陵が爲に有ず、事託て此を奏せんが爲なり、殊に

るゝとも行て救ずんば有べからす、臣身は楚の陣に在とも心は常に大王の前に有ん、決して敵の爲に力を用ひ候ふまじ。張良傍に在て申けるは、將軍大に誤れり、項王前日將軍に數萬の軍馬を亡されしかば、牙を咬で恨み怒り、如何にもして將軍を殺んと圖る、然るに今老母の有無を詳にせず、輕々しく使の一言を聞て走て虎穴に入んと欲す、是匹夫の見なり、今まづ心腹の人を遣して實否を伺せ、老母果して楚の陣にあらば、自筆の書簡を求て、其後に早く行て救ひ玉へ。漢王聞て子房の言理に合へりとて、乃ち謀士叔孫通に命じて陵母が虛實を尋しむ、叔孫通命を受て楚の陣に到ば、項王出見て申けるは、王陵は元沛縣の人、來て朕に仕ず、却て劉邦を扶て惡をなす。朕すでに老母を捕て此にあり、王陵もし早く降參せば、母子共に無事ならん、若なほ迷を取て降らずんば、忽ち老母を殺して王陵に萬代不孝の名を得せしめん。叔孫通が曰、願は老母に一見することを得んや。項王左右に向て此へ引出せと云ば、劍を帶たる武士共陵母を引來て項王の前に跪しむ、陵母叔孫通に向て、御邊なにの故にか我に見んことを求るやと問ば、答て曰、孝子王陵老母の苦を受玉ふと聞しかども、未だ虛實を知ざれば來て救ふこと能ず、此故に我漢王の命を受て消息を聞ん爲に出來れり、願くは早く自ら書簡を寫されよ、某歸て王陵に告、速に楚に降參して此難を救はしめん。老母聲を勵して曰、御邊これは如何なる

て兵を計に、百餘人討れしかども楚の勢三萬餘人を亡しければ、漢王喜で、汝一戰に楚の大勢を蒐破し故に、項王の驍勇なるも、鋭氣を失て遠く退たり、汝ます〳〵志を勵せ、他日必ず重く賞せんと宣へば、王陵申けるは、臣兼ては四五日も固く守て出合まじと思ひけれども、楚の勢遠路を來て定て疲たらんと推し、其未だ備なきに乘て急に攻たりしかば、果して大に利を得たり、然ども項王尙未だ遠く退ず、料るに必ず再び攻來らん、我早く其備を成ずんば叶まじ。張良、陳平等申けるは、此ごろ韓信已に魏豹を平たりと云沙汰あり、不如力を盡して堅く此城を守り、韓信が不日に歸り來るを待つて計を議すべし。漢王これに從ひ、乃ち三軍に下知して弓鐵砲を備へ、四門を緊く守らせ玉ふに、楚の兵未だ一度も攻來らず、角て十餘日を過ける所に、忽ち士卒一人城下に來り、王將軍に逢て一大事を申さんと呼る。王陵急ぎ櫓の上より何事ぞと問ば、答て曰、項王いま將軍の老母を彭城より取よせて急に殺んとす、此故に老母いかにもして今一度將軍に見んことを欲し、某を使として招しむ、將軍早く來て不孝の名を免れ、且は老母の命を救玉へ、若遲き時は御對面は叶ひ候はじ。王陵これを聞て聲を放て大に哭き、急に漢王に見え哀で告けるは、臣が老母すでに七十に餘れども臣一日も孝養すること能ず、項王いま之を捕て殺さんと欲す、此故に使を來らして一たび見んことを願ふ、臣縱ひ身を寸々に切

猛勢われ先にと亂れ入一人も餘さじと喚き叫で、其勢恰も十萬の甲兵天より來れるが如なれば、楚の兵俄の事にて大に周章翊き、或は目を摺々槍よ戟よと堪ニ胡亂ニ、回て斬るゝもあり、或は互に自ら踏倒され、蹂躪られて死もあり。王陵は彌氣に乘て人なき處を行が如く左右前後を薙で回れば、楚の勢數を知ず討れて、屍は遍野に充滿し、流る血は河の如し。項王は中軍に居たりしが、陣中に夜討ありと聞て、急に馬に打のり槍を提て蒐出けるに、御方はや散々に蒐破られ、一人の大將槍を横て亂軍の中を往來せしかば、項王大喝一聲槍を舉て直に突て蒐れば、彼大將やがて鋒を交へ二十餘合戰ひしが、叶じとや思けん、急に兵を引て陣外へ逃出たり。項王士卒に向て、今宵の大將は誰ぞと問ば、漢の王陵なりと答ふ。項王心の中に此人の槍の法尋常と同からず、今若除ずんば後に大なる害を成んと思ひ、急に馬を拍て追かけんとすれば、季布、鍾離昧、龍沮一度に引止め、必ず追玉ふな、漢の兵十分かち傲て鋭氣甚だ盛なり、殊に韓信計を遣たりと覺て、宵より城下に火の手を擧て、兵雲霞の如く集れり、臣等一の計あり、向に囚置れし王陵が母を此處へ取よせ、密に心腹の人を遣して招き玉はゞ、王陵元より深く孝ある者なれば、必ず來て御方に降ん、然る時は滎陽を破ること手を反すよりも易からんと云しかば、項王尤とて陣を三十里退け、急に彭城へ人を遣して王陵が母を捕へ來らしむ。王陵は城中に歸

て箇樣々々と低語ければ、漢王限なく喜び、汝已に妙計あり、朕何の患かあらんとて、乃ち大將の印を與て、陳平を軍師とし玉ふ。楚の先鋒李奉先は三千餘騎を引て漢の陣に推寄けるに、四門堅く閉て敵一人も出ざりしかば、心怪み急ぎ退て項王に此由を語る。諸將みな申けるは、此は必ず陛下の自ら來り玉ふと聞て大に驚き怕れ、滎陽を捨て遠く逃去たるか、或は又韓信未だ歸らざる故に、內强兵なくして防ぐこと能ず、堅く守て出ざるならん。項王の曰、汝等血氣の勇を恃で妄に事を仕損ずな、御方遠路を來て諸軍みな疲れたれば、今宵は休息し、明日敵の虛實を能々見定めて攻蒐んとて、馬は鞍を卸し人は甲冑を脫で休みけり。王陵は密に用意をなし、先城の四方に夥く乾ける柴を積、精兵五百を擇で皆火把を持せ、我今宵楚の陣を夜討せんと欲す、汝等よく本陣を守り、敵もし我出たる跡へ攻來らば、一度に火を掛て防げ、夏侯嬰は三萬の勢を率る我後に隨て力を扶けよとて、自ら五千の精兵を擇び、皆赤き帛を以て頭を包み、各短き刀を持せて枚を啣せ、又五百の兵に鐵砲を持せ、暮に及で直に楚の陣に推よせ、先細作を入て密に內の樣を伺しむるに、楚の兵この間の遠路に疲たるにや、未だ何の備も成ずと告ければ、王陵喜び風擁して一度に込入けるに、陣中には倘人音もせざりしかば、扨は時刻よしとて急ぎ一聲の鐵砲を響せば、此を合圖に五百の兵四方に分れて鐵砲を放ち合ひ、五千の

項王は彭城に在て、韓信が消息を伺ひ居けるに、或日細作來て、此間西魏王魏豹兵を起し、漢を反て楚に降らんと企て候ふが、韓信これを傳きゝ、軈て大軍を引て平陽へ攻よせ、只いま合戰の最中なりと注進しければ、斜ならず喜び、范增を召て申けるは、果して亞父の料りしに違ず、韓信いま魏豹を征して滎陽空虛なり、朕この虛に乘て急に伐ば、劉邦必ず擒と成ん。范增が曰、この時を失ず速に打向て滅し玉へ、然れども韓信元來計の深き者なれば、定て其備あらん、陛下萬づ愼で必ず輕々しくし玉ふな。龍沮申けるは、亞父なに故に甚だ敵を畏れ玉ふぞ、主上の神文聖武向ふ處敵なし、料るに此滎陽を破んに何ほどの事か有ん。范增が曰、然らず、古人も好レ計而成と云り、凡そ大將たる者は預め備を成ずんば有べからず。項王卽時に下知を傳へ、驍將李奉仙に三千の精兵を授て先手とし、自ら後陣に備て滎陽へ進發す。此由先達て注進ありければ、漢王大に驚き、張良、陳平を召て計を議し玉ふに、張良申けるは、何ぞ韓信が云置し如く王陵に命じて防しめ玉はぬ。漢王急ぎ王陵を召て、項王自ら大軍を統て此所へ寄來る、汝早く計を設て防くべしと宣へば、王陵奏けるは、項王の軍威甚だ盛にして力を以て敵し難し、臣思ふに暫く旌を伏鼓を止、溝を深し壘を高して一人も出合ず、彼が氣疲れ志の懈るを待て一の計を施さば、悉く逃去べし。漢王の宣く、汝如何なる計をか用ん。王陵乃ち耳を附

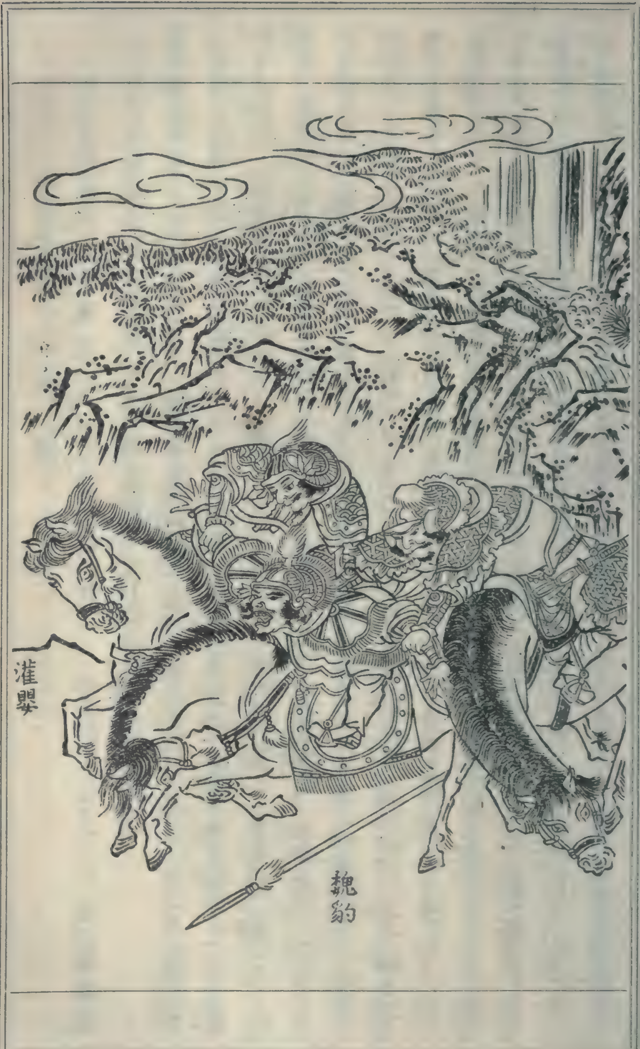
已に間近く出來りしかば、陣中大に騒ぎ立て、上を下へと揉合處に、又韓信、灌嬰後陣の生手を驅て前より掩殺す。魏の兵前後に度を失て戰んとする者一人もなく、馮敬、栢直等を始として皆われ先にと逃失しかば、魏豹力を失ひ散々に成て、臨晉を望で逃んとすれば、灌嬰、曹參すき間もなく攻圍み、曳や聲を出して蒐立ければ、魏の勢了に一騎も殘らず討れにけり。魏豹これを見て大に怕れ慄き、如何せんと身を揉ところを、灌嬰、曹參急に兩方より蒐よりて、了に馬上に生どり、兵を收めて韓信に見えければ、韓信大に魏豹を叱て曰、主上さきに汝を大將として楚を伐しめ玉ひしに、汝專ら酒色に溺れて軍事を務ず、三十餘萬の勢を亡せり、然れども主上寬仁にして其罪を正さず、只元帥の印を取回し、退けて平陽を守らせ、王爵を失しめ玉はず、汝深く此恩を感じ忠心を勵して前罪を償ふべきに、却て輕々しく相士の言を信じて、妄に謀反を企つ、我いま首を刎べけれども汝は元一國の王なれば我かる〲しくせず、宜く主上の命を受て罪を正すべきぞとて、魏豹を檻車の內に縛り、武士に命じて緊く守らせ、直に平陽城に入て民を安撫し、大夫周叔を牢の中より扶け出して權に國事を掌しむ。

○王陵母伏劍自殺

ん。韓信乃ち其法を書寫して與れば、灌嬰これを見に、其法に曰、

木罌者縛二甕缶一以爲レ筏、甕缶容レ受二二石一、力可レ勝二一人一、其甕間容二五寸一、下以レ繩勾聯、編二槍於其上一、形要二長而方一、前置レ筏或板頭或置レ稍、左右置二棹可一以渡二軍械一也。

灌嬰聽て數百人の巧匠を集めて、法の如く木罌を夜を日に繼で造らせ、二日の内に悉く成就せしかば、中軍に入て告るに、韓信申けるは、御邊一萬の兵を引て百餘艘の舟に取のり、多の旌旗を立列ね、河に沿て大軍の攻かゝる體をなし、魏の兵の後陣より亂るゝを見ば、速に蒐て打破れ。灌嬰命を受て出ければ又曹參を密に呼で、御邊は二萬の勢を領じ、木罌を用て下陽より河を渡り安邑を襲て急に敵の後を攻よ、我は後陣に備へ、灌嬰と共に本道より蒐て夾で討ば、魏豹決して擒と成べしと云ば、曹參計を受て暗に下陽を望て發向す。魏豹は河に傍て陣を取、敵今や來ると待處に、忽ち喊を造て鼓の聲遠近に聞えければ、すはや敵の寄たるはとて、急ぎ出て望み見に、向の岸に百餘艘の舟を雙べ夥しく旌を立て、漢の兵雲の如く集りたり。魏豹乃ち諸軍に觸て堅く四方を守らせ、晝夜自ら陣中を巡檢して懈ず用心しけるに、忽ち安邑より早馬きたり、漢の曹參木罌を以て下陽より河を渡り、安邑を攻破て御一族を皆生どり、勢に乘て早この所へ攻來り候ふと申す。魏豹甚だ驚き急に兵を引て退んとするに、曹參後より兵を驅て、


灌嬰
魏豹

其二
曹参

魏の大將は誰々ぞ。答て曰、總大將は栢直、歩將は項宅、騎將は秦の大將馮無擇が子に馮敬と云者なり。漢王の宣く、栢直は乳臭の小兒なり、爭か朕韓信に敵すべき、項宅勇ありとも曹參に及ばんや、馮敬尤も賢なれども、灌嬰に當るに足じ、我患ることなしとて、卽時に韓信を召て、汝十萬の精兵を領じ、曹參、灌嬰と三手に分て早く魏を伐べしと宣へば、韓信申けるは、臣いま此事を奏せんと欲する處に王命を蒙る、項王もし臣が魏を征する由を聞ば、必ず虛に乘て此所へ攻來るべし、臣諸大將の中を見に、王陵より外に大事を屬すべき人なし、大王この人に命じて敵を防がしめ玉はゞ、自ら無事ならん。漢王宣けるは、王陵が母今囚て楚の陣にあれば、王陵恐くは力を盡して魏を破ること能はじ。韓信が曰、少しも御心を苦玉ふな、陵母素より賢貞にして子を敎ること甚だ嚴なれば、王陵が志金石の如し、決して變ずること有べからず、大王之を大將として陳平を輔とし、若不時の急あらば、張良と相議し玉へ。漢王大に喜び、汝早く魏を平げて捷軍を報ぜよと宣しかば、韓信退て用意をなし、曹參、灌嬰と十萬の勢を率して蒲坂まで出ければ、早魏の兵河より向に陣を取たり。韓信諸將に向て曰、敵已に向の岸に陣を取て橋を引たり、御方いま百餘艘の舟あれども、安ぞ十萬の人馬を渡すに足ん、我一の計あり、多の木罌を造て渡るべし。灌嬰が曰、木罌とは如何なる物ぞ、我等これを知ず、願くは敎を受

が曰、某が此に來るは身の計を成んとに有ず、實は故舊の情を思て利害を說んと欲してなり、從ふと從はざるとは先生の心にあり、我敢て強ず、何とて左程には疑玉ふ。魏豹が曰、利害とは如何に。酈生申けるは、夫大丈夫は心不レ可ニ兩持一事不レ可ニ反復一、貳ある時は疑多して敗をとる、反復多き時は事輕々しくして辱を取、先生初め楚に從ひ久からずして漢に降れり、今心に不平を懷て又謀反せんとす、是何とて反復多きや、恐くは必ず敗闕あらん、況や時の勢を論ずるに、楚は勢大なれども暴にして愚なり、漢は勢微なれども寛にして智あり、されば愚人は楚を強しとすれども、智ある人は楚の了に滅て漢の方に興るべきことを知、興亡安危論ずることを待ずして自ら明し、先生すでに漢に事玉ふは、誠に其計を得たり、然るに今又貳を懷き萬全の漢を棄て、危亡の楚に降らんと圖る、是あに大丈夫の所爲ならんや、我思ふに、早く兵を收め心を專にして漢に事へられば、自然に安く富貴を保て、永く魏王の位を失ふことなけん。魏豹敢て從ず、漢王みだりに嫚り罵て甚だ無禮なり、我すでに此の如く思ひ立たれば、爭か心を動ん、大丈夫の士豈碌々として空く人の下に屈せんや、我心已に決せり、縱ひ蘇秦、張儀再び蘇生して晝夜に說とも此心は移すまじきぞ、先生再び言を費こと勿れと云しかば、酈食其事の叶ざるを見て、了に別れて滎陽へ歸り、事の子細を奏すれば、漢王問て宣く、

あり、安ぞ強弱に拘ん、許負決して我を欺じ、汝みだりに言こと勿れ。周叔又曰、大王誤れり、先人事を論じて而して後に天命を云べし、苟も相士妄誕の言を信じて輕々しく兵を起し玉はゞ、身を亡し家を失んこと此一擧にあり、願は能これを察せよ。魏豹勃然として大に怒り、我いま大儀を思ひ立に、妄に不吉の言を出して我心を亂す、汝必ず漢に内通して我を滅んと巧む者ならんと罵れば、周叔笑て曰、臣久く大王の厚恩を蒙る　安ぞ異心あらん、今忠言を以てすれども、敢て用ひ玉はず、後日必ず悔玉ふな。魏豹ますく怒り了に左右に命じて追出させ、卽時に栢長を軍師とし、栢直を大將とし、馮敬を騎將とし、項宅を歩將として十萬の兵を整點し、平陽關を固て先表を上て項王に降らんことを求む。漢王この由を傳へ聞て大に笑ひ、鼠の輩いま謀反すと云ども何程の事か有ん、急に討手を下して後の患を除んと宣へば、酈食其申けるは、御方近ごろ楚と戰て未だ暫の休息もなきに、又遠く魏を伐んと宣ふ、これ軍民を恤の道に有ず、臣元より魏豹と深き好あり、願くは一たび行て利害を説、謀反の心を止しめん、彼もし從ずんば、大王その時兵を起し玉へ。漢王喜で汝若魏豹に喩して永く我に事へしめば、其功莫大ならんと宣しかば、酈食其卽時に打立て直に平陽へ赴けり。魏豹は酈生が來れる由を聞て、乃ち迎へ入禮を施して申けるは、故人いま遠く來り玉ふは、漢王の爲に說客を成ん爲か。酈生

後宮を望に旺氣尤も勝たり。魏豹が曰、然らば先生内に入て委く見玉へとて、伴て宮中へ入けるに、魏豹が妻の内に居けるを許負一目見て、大に驚たる體にて地に拜伏し、夫人の貴きこと云べからず、久からずして必ず天下に母儀たるべしと云ば、魏豹いよ〳〵喜び、我いま先生に逢て胸中洗が如しと云て、多く金帛を出して與ければ、許負拜謝して歸りけり。魏豹は心の中深く喜び、大夫周叔を召て申けるは、漢王さきに我を大將として楚を伐しめたるに、不幸にして敗軍せり、然れども勝負は兵家の常の習なれば、一たび打負たればとて大將の罪にあらず、然るに漢王甚だ我を罵り辱め、元帥の印を奪ひ取て剰へ此所に左遷す、近ごろ韓信幸にして楚の兵を破りしかば、此より彌諸人と共に我を罵る、此體にては又如何なる目に逢んも料り難ければ、此時を失はず漢を反て假に楚に降參し、漢王を破て咸陽に都を建、漢楚と天下を三分せんと欲す、汝速に其用意をせよ。周叔止て申けるは、此甚だ然べからず、漢王素より寛仁大度にして天下その德に服せずと云者なし、殊に韓信は鬼神不測の計ありて、項王の英勇なるも尙これに敵すること能はず、況や大王は勢力孤弱にして將士多からざれば、決して鋒を爭難からん、不如心を專にして漢に事へ玉はゞ、自ら天の祐あらん、今已に坐ら魏國を保て王爵の貴に居玉ふなれば、人臣の望恐は其上あるべからず。魏豹が曰、然らず、凡そ事みな天命

又何をか慮んと云しかば、項伯乃ち書簡を調へ、從者に持せて平陽へぞ送りける。許負書を得て披き見に、魏豹に說諭して楚に降らしめよとの事なりければ、心の中に我つねに項伯と交深く、殊に今項王の勢甚だ大なれば、旁以て從はずんば叶ふまじと思ひ、軈て魏豹が許へ行て見んことを求む。左右の人この由を告ければ、魏豹喜で急に迎へ入、禮了て申けるは、我久く御邊に見えず、此間少し心に思ふ事ありて、御邊に問て志を決せんと思ふ折節幸に來られたり、願は我相を見て吉凶を說示し玉へ。許負これを聞て、此人はや我計に中れりと思ひ、乃ち問て曰、大王今日いまだ酒を飮玉はずや。答て曰、未だ飮ず、早に起てより獨り閑座して神思甚だ精爽なり、願は先生の一見を勞せん。許負乃ち魏豹を伴て、日の照す所に出て、良久く其相を窺ひ見に、紅黃の氣身に纏ひ其間に一條の白氣ありて天に沖り、日月光を藏し水土位を失て十分不吉なりければ、密に思けるは、我もし實を以て告ば、彼必ず志を改て楚に降らじ、然る時は上項王の命に違て下項伯が情に負くなり、不如欺て喜しめんとて詐て申けるは、大王甚だ貴き相あり、今紅黃の氣滿面に起て喜氣重々たり、百日を過ずして四方爭ひ服し、大業忽に成就し、吉地に徙て必ず九五の位に登り玉ふべし、豈たゞ王爵のみならんや。魏豹斜ならず喜び、先生の言果して相違なくんば、我他日必ず重く賞すべしと云ければ、許負又申けるは、某

喜ぶこと限なし。季布申けるは、陛下たゞ速に退き玉へ、此ところ敵陣を去こと遠からず、若漢の兵再び追來らば、如何ともすべからず。項王げにもとて此より兵を收めて、直に彭城へ引歸る。

○魏豹背レ漢被レ擒

項王は散々に打まけ彭城へ歸て敗軍を點檢するに、三十萬の兵二十餘萬討れしかば大に後悔し、乃ち范增を召て申けるは、朕誤て亞父の諫を用ず、果して若干の軍馬を損ふたり、汝いま又いかなる妙計かある。范增答て曰、漢の魏豹さきに睢水に敗績せしを以て、追放たれて平陽に居候ふが、心の中日夜に漢王の罪を正んことを怕て、此ほど謀反を企る由臣に告る人あり、陛下いま使を送り利害を說て喩し玉はゞ、彼必ず御方に歸すべし、韓信これを聞ば必ず怒て平陽を伐ん、その時陛下大軍を領じ、虛に乘て急に滎陽へ攻寄玉はゞ、漢王備なくして忽ち滅ぶべし。項王掌を拊て大に喜び、甚だ好々是乃ち一擧して兩ながら得の計なり、さらば誰をか遣さんと云に、尚書令項伯すゝみ出て曰、臣が友に相士許負と云者あり、素より魏豹と深く交り無二の好ありて今平陽にあり、臣これに書簡を送て魏豹に說しめんは如何に。范增喜び、若然らば我

足も逃延玉へ、臣この敵を防ぎ候んとて、刀を横て馬を乗放ち、四方八面を薙で廻ば、漢の大將李必、洛印これを見て、汝なに者なれば我すでに討んとする敵を救ふぞと罵て、二人齊く斬って蒐る、蒲將軍眼を瞋し何條汝に討すべき、天下に隱なき蒲將軍を見知ぬかと云て二十餘合せめ戰ひ、忽ち李必を一刀に斬て落せば、洛印震ひ怕れて逃走るを、蒲將軍急に弓を執、よつ引て兵と放つに、其矢過ず洛印が背より胸を貫ければ、了に倒に落て死にけり。蒲將軍いよ〳〵兵を下知して追立々々馳たりしかば、漢の兵大に亂れて我先にと本陣へ逃歸り、李必、洛印が討れたる由を告ければ、韓信甚だ後悔し、古より窮寇勿レ追とて、兵家の深く忌ところなるに、我誤て長追し果して二人の大將を失たりとて堅く守て出合ず。蒲將軍は十分に打かち兵を收て引回し、夾河の邊に到れば、項王僅に敗軍を集て陣を取たり。蒲將軍馬より下て奏しけるは、陛下甚だ韓信を侮り玉ひしかば、范亞父その失あらんことを恐れ、臣に三萬の勢を授て救しむ、臣陛下の洪福に仗て漢の大將二人を討取たり、亞父再三臣を戒め、韓信は尋常の輩にあらず必ず輕ずなと云り。此ゆゑに敢て戰を好ず、敵の退きたるを幸に罷り歸りて候ふ、項王申けるは、朕數年戰場に臨で戰ふに勝ずと云ことなく、攻るに取ずと云ことなし、未だ今日の如く見苦しき目に遇ず、若亞父の汝に命じて救しむるに有ずんば、朕決して胯夫に生捕るべかりけりとて

士卒一人來て、御方の本陣は已に漢の兵に奪れたりと告ければ、項王大に力を失ひ、然らば此より直に彭城へ歸て再び軍馬を整へ、胯夫を誅して此恨を報ぜんと云も果ぬに、又漢の兵間近く追來て喊を造る。項王諸軍に向て、胯夫みだりに勝に乘て猶止ることを知ず又こゝに追來る、朕この所に支て快く雌雄を決すべし、汝等力を盡して朕を助よと云ば、鍾離昧止て決して無用なり、韓信計を用ること鬼神の如し、況や御方すでに大に敗れ、將士みな銳氣を失て一人も戰んとする心なし、兵法にも畏レ敵者亡と云り、片時も早く逃玉へと云ける間に、早漢の兵野に充山に漫て、金鼓天に喧しく喊の聲地に震ひければ、楚の兵又大に潰亂して四角八方へ逃崩る。項王は少とも怕れず槍を横て立けるに、流矢一つ來て胸にぐさと射こむ。項王膽を冷し急に馬を拍て東の方へ敗走すれば、兵又したゝか討れて纔に百餘騎ぞ殘りける。項王一日一夜に二百餘里の路を馳て、今は身も疲れ馬も弱り果たるに、俄に大雨しきりに降來り、後よりは敵の追こと益急なりしかば、安き心もなく馬を飛して奔りけるに、又向の林の中より一彪の軍馬殺出す。項王これを見て、われ今は遁れぬ處なり、不レ如見苦しき體にて逃走んより此にて快く討死せんと思ひ定て、槍を擧て彼勢に突て蒐りければ、敵にはあらで楚の大將蒲將軍なり。馬上より聲を揚げ呼りけるは、臣范亞父の計を受、三萬の兵を引て救の爲に出來れり、陛下一

らずば、御方一騎も生殘るまじきぞと云て、二人鋒を揃へ、敵の村雲立たる眞中へ喚て蒐入、當るを幸に斬て廻る、楚の兵これに氣を得て內よりも喊を合せ、死力を振て了に一方を斬破り漸々圍を出て、季布、鍾離昧と一手になり、南を望で逃走り、敵も漸く遠りしかば、止て敗軍を集るに、大將于英は亂軍の中に討れ、桓楚は背をしたゝか射られて動こと能ず、其外手負討死數を知ざりしかば、項王甚だ悶え苦み、朕誤て胯夫が奸計に出し拔れたりと、齒を切て立たる處に、忽ち又鐵砲の聲頻に響て、南の方より漢の大將柴武、酈商、東南より傅寬、傅弼、東より李畢、洛甲、西南より靳歙、盧綰、西より周勃、周昌、西北より薛歐、陳沛、北より紀信、王陵、東北より辛奇、曹參十六人の大將、聲々に楚賊早く降參せよと呼はり、又夥しく戰車を驅て楚の勢を中に取圍み、餘さじとぞ戰ふたる。項王甚だ怒り槍を執て渡りあひ、忽に辛奇を馬より一槍に突落せば、曹參大に驚き怕て了に本陣へ逃歸る。楚の勢は東北の圍少しやぶれたるを見て脫出んとすれば、又韓信が生手の大勢群り來て面を向べき樣もなし。季布諸軍を勵し、此とき人人君の爲に命を捨ずんば、何の時をか期すべきぞ、如何にもして圍を切ぬけ、我さきに來りし南溪の小路より退けと下知して了に又一方を打破り、項王を守護して這々溪の口まで逃延たり、此とき日已に晚けれども、四方に喊の聲なほ絕ざりしかば、人馬の息をも繼せず馳行に、忽ち

項王も續て橋を渡り、諸將も跡より大軍を驅て又二里ばかり追けるに、忽ち後陣より報じて京索河の橋すでに敵に切落され、水の勢甚だ盛にして御方の兵過半は渡ること能ずと申す。楚の軍勢これに氣を失て上を下へと騷動しけるが、兎角する内に韓信は行方なく逃失たり。項王始めて後悔し、諸軍を下知して早く退けと云ける其言いまだ了ざるに、四方より鐵砲を鳴して漢の伏勢一度に起り、須臾の間に數千輛の戰車四面を圍で矢を放つこと雨の如し。項王大に驚き敵の勢の重らぬ先に早く打破て出よと下知して、急に兵を二手に引わけ、死力を振て戰ひしかども、韓信大勢を下知して、鐵砲弩を放つこと蝗の飛よりも尙茂く、彌戰車を驅て其圍恰も鐵壁銅山の如くなれば、楚の兵一人も出ること能はず、討るゝ者數を知ず。季布、鍾離味は留て本陣を守り居けるが、項王餘りに長追して敵に圍れたりと聞しかば、二人共に兵を引て馳出、京索河まで行て見るに、橋すでに落て渡るべき樣なかりければ、急に南溪の小路を廻て進に、向より一手の勢來て路を横ぎり、漢の大將祖德まつ先に進み來る。二人大に怒り槍を横て二十餘合戰ひければ、祖德叶ずして逃んとするを、季布急に追つけ忽ち馬より下に突落せば、殘る兵みな我先にと散亂す。季布勢に乘て北るを逐て掩殺し、遙の向を望めば、漢の大軍雲の如く、楚の勢を眞中に取籠て、攻戰ふ最中なりければ、鍾離昧に向て我等もし命を捨て圍を破

ば、皆命を受て去にける。季布、鐘離昧は兵を引て漢の陣に忍び入、こゝ彼を伺ひ見に、敵一人も見ざりしかば、急に馳歸て其由を報じけるに、項王申けるは、今韓信堅く守て出ざるは、朕が自ら寄るを待者なり、汝等力を盡して此陣を守り、若御方の打負たる由を聞ば、早く出て救ふべしとて、桓楚、于英、項莊、虞子期四人を左右に備へ、自ら大軍を引て推寄たり。漢の陣に之を見て門旗開る處、韓信まつ先に馬を出し、大音あげて申けるは、大王咸陽に別しより久く相見えず、我いま甲冑を帶したれば、禮を施すこと能はず、願くはゆるせ。項王眼を瞋し朕汝に辱められて、恨骨髓に徹せり、誓て其首を取ずんば、一足も退じと云も敢ず、槍を撚て驀地暗に突て蒐れば、韓信一戰にも及ず、詭り負て散々に東を望で逃走る。項王勝に乘胯夫を遁すな續けや〱と下知して馬を飛して追蒐れば、季布、鍾離昧急に止めて曰、韓信一軍もせずして逃走るは、必ず敵を引の計ならん、陛下まづ此所に止り、能その實否を見定めて、其後に追玉へ、若輕々しくせば、彼が計に落入ん。項王申けるは、いやとよ、朕會稽に兵を起してより合戰數百度に及べども未だ曾て一度も退ず、今胯を潛し夫に逢て安ぞ怕ること非じとて、彌人馬を驅て掩殺す。項王急に追ば韓信急に走り、緩く追蒐れば又緩く走りしかば、項王ますます怒り、胯夫われを侮ること甚しと云て、已に京索河まで到れば、韓信槍を引て橋を過たり、

信急に迎へ入しむれば、張良、陸賈諸の大將樊噲等を作て内に入、主上いま某等を使として詔書を送り、再び將軍を大元帥とし玉ふと云て印を渡しければ、韓信いそぎ先詔書を披て之を讀に、其文に曰、

嘗聞將者國之司命、將得其人則國有攸賴、苟非其人卒至敗亡、而安危所係非尋常也。卿韓信才兼經濟學冠天人、屢建奇功眞國家之柱石、當代之豪傑也。前遣鎭守三秦誤用魏豹爲帥、乃致喪師睢水。今已奪豹印罷斥閑居。大將之位久虚闖外、茲特命卿復掌元帥印統率將士伐楚、益竭忠貞勿負委託。故茲詔諭。

韓信斜ならず喜び、元帥の印を納て、御邊各まづ歸り玉へ、我明日城に入て恩を謝せんと云ければ、張良等乃ち別れて出去ぬ。次の日韓信城に入て恩を謝し、臣昨日王命を蒙る、益忠誠を竭して賊を滅し、四海を平定して百姓干戈の禍を免れしめんと云て退出せり。去ほどに項王は范增を留て彭城を守らせ、自ら三十萬の精兵を率して進發し、滎陽を五十里隔て陣を取、まづ季布、鍾離昧に命じて敵の虚實を伺しむ。漢の細作いそぎ此由を注進しければ、韓信乃ち諸將を集て、項王いま二人の大將に命じて御方の虚實を探らしむ、我先堅く守て少しも動ず、項王の自ら來るを待て悉く擒にせん、汝等この間教し如く各次第を守て、必ず計を仕損ずなと云へ

漢大將軍領東征大元帥事韓信上書

西楚霸王麾下。昔日信雖歸楚、官授執戟、後共立懷王、百司執事皆北面尊爲義帝、信非楚臣亦明矣。不意大王獨霸西楚、恣肆暴横放弑義帝、天下切齒、信欲仗劍以誅大逆而報君父之讎、但力微勢小恐難爲敵、乃投告漢王、明正其罪、昭布天下、共伐無道。信兵住扎咸陽、漢王先臨雎水、誤入陷穽、兵遭屠戮。今信統率三軍、衣皆素縞、試武滎陽爲義帝報讎、懸頭兩觀之門、逼死馬陵之道、信之願也、王其察之。

項王見了て勃然として大に怒り、胯夫甚だ朕を侮てみだりに戯れ辱む、誓て此賊を誅せずんば再び國に歸らじとて、卽時に諸軍に令を傳て、軍の用意を成しめける。范增この由を聞て、急に來り見て諫めけるは、是は韓信陛下の怒を發して自ら攻來らしめ、却て伏勢を以て討んと計りし者なり、陛下少し忍で心靜に大事を圖り玉へ、今もし輕々しく出玉はゞ、必定彼が計に中り玉ふべし。項王聞ず、胯夫朕が使を欺き降表なりと詐て戰書を送り、此の如くに恥辱を與ふ、汝再び止ること勿れ、朕が意すでに決せりと云しかば、范增すべき樣なく長嘆して退きけり。韓信は思ふ儘に楚の使を欺き、項王わが戰書を見ば、必ず怒て不日に攻來るべしとて、預め備をなし、軍馬を調練して居たりしに、左右の人たゞ今張良、陸賈來り玉ふと報ず。韓

使未だ歸らずして尙客屋にあり、元帥密に此に賂を與へ、戰書を調て直に項王に達せしめよ。韓信喜び、此ほどの能使や有べきとて、退て急に楚の使を呼よせ、左右の人を退て密に低語けるは、我は元項王の臣なり、不幸にして久く相別ると云ども、常に楚に歸るの心止ことなし、今密に表を獻て此事を楚王に奏せんと欲す、御邊わが爲に之を達せんやとて、先黃金二十兩を出して與へければ、彼人喜で申けるは、項王某を此に來らしむるは、强に王陵を招ん爲ばかりに有ず、實は元帥の消息を聞ん爲なり、元帥果して楚に歸るの心あらば、項王必ず大に喜び玉はん、速に表を書玉へ。韓信軈て戰書を調へ、御邊楚に歸らば、直に項王に獻りて必ず他人に見せしむること勿れ、若外に洩聞るときは大事なり、項王必ず御邊が罪を正し玉ふべきぞと云ば、彼人領掌し少しも心を苦め玉ふなと云て、書簡を懷の中に深く藏し、別れて彭城へぞ歸りける。

○韓信車戰破二楚兵一

楚の使は韓信に欺れ、多の黃金を得て喜び勇で彭城へ歸り、項王に見て密に韓信が云し事を物語し、かの書簡を出して呈しければ、項王乃ち披き見に、

を聞ん。韓信申けるは、戰車を造るの法つねの車に異なることなし、槍二筋を車の表に立、後に大なる瓶を設け、水を貯て敵の火攻を防ぎ、上に櫓を置て鐵砲弩を施し、多の士卒に戟楯を持せて先に進せ、其跡より此車を牛に駕して引しめ、又多の兵に弓鐵砲を持せて跡に續しむ、敵もし至れば前後の士卒を車一輛に四人づつ乘て之を防せ、鼓を鳴すを合圖に忽ち櫓に上て鐵砲弩を連べ放つ、敵これに少し色めく處を、又騎兵を出して急に擊ば悉く微塵になる、若又敵の打負て逃走る時、この車を險難の地に引雙て路を斷塞げば、力を費ずして自ら虜にす、加之進む時は多の兵粮を積、又退て陣を取とき、四面に是を雙べ置ば、敵たとひ夜討に來ても内に入こと能ず。漢王大に喜び、元帥すでに此の如きの備あり、我何をか患んとて、卽時に巧匠に命じて又三千輛の戰車を造せらろ。是に於て韓信滎陽城を遠く離て大寨を構へ、日々に諸大將を集て計を敎へ、士卒を調諫して車戰を習せければ、兩月を過て悉く自由を得たり。丞相蕭何は別て咸陽へ歸りけるが、日夜に兵粮を運送し又諸方の勢を驅集て滎陽へ送りしかば、程なく漢の兵又五十萬にぞ及ける。韓信ある時城に入て奏しけるは、臣久く軍兵を訓練して用意一々備れり、若よき便あらば、先項王に戰書を送て彼に十分怒を發させ、自ら攻來るを待て擒にせん。漢王宣けるは、項王久く王陵が才を慕ひ、老母を捕て此ごろ頻に王陵を招く、幸に其

燕齊の兩國近ごろ楚に降參して、項王の威風ます〳〵强し、御方の賴む所は只元帥一人の力なれば、決して敵すること能じと思ひ、已に降參の書を送りけるに、項王その使に逢て、向に韓信たま〳〵老衰したる章邯を破りたればとて、今妄に威を振ふ、我もし一度打て出ば、忽ち生捕にせんと云り、我これを聞て彌意を決し、早く降參せば、長久の計ならんと思ひ、張良に命じて蕭何と共に册を造らせたり、元帥始め三秦を攻られし時は、敵備なくして容易く勝ことを得たり、睢水の合戰に項王たゞ一人御方の大將六十餘人に敵したる擧動怕しと云も愚なり、元帥必ず之に敵すること能はじ。韓信これを聞て面に汗を流し、大王たゞ敵の威風を稱して臣が鋭氣を滅し玉ふ、臣いま本部の軍馬を領じて一戰に雌雄を決し、誓て項王を擒にして階下に持來ん、この言もし相違せば、必ず軍法を以て罪を正し玉へと大に叫びければ、漢王謝して曰、わが敵に降んと云、豈心に快らんや、是已ことを得ざればなり、元帥すでに楚を伐んと欲す、如何なる妙計かある、願は金玉の論を聽ん。韓信が曰、臣久く咸陽に在て、預め楚を伐ん爲に數百輛の戰車を造れり、軍書にも平坦之地可レ用ニ車戰一、山險之地可レ用ニ步戰一、追襲攻擊可レ用ニ馬戰一と云へり、臣この邊を望み見に、滎陽を離ること三十里にして廣く平なる野あり、此所に彼戰車を用て敵を迎へば、一人も殘ず擒にせん。漢王の宣く、車を用るの法いかん、願は其大略

中甚だ喜び、急ぎ歸て軍馬を點檢し、次の日張良、蕭何と共に滎陽を望で進發す。張良は先達て城に入、漢王に見えて事の子細を奏し、蕭何いま韓信を伴て此に出來る、大王見え玉はゞ只箇樣々々に宣ふべしと云ば、漢王限なく喜玉ふ處に、左右の人蕭何、韓信來れりと報ず。漢王乃ち迎へ入、まづ蕭何が手を執て、朕丞相に別てより褒中よく治りて百姓業を樂む、加之ず朕が百萬の軍中數年の間常に兵粮に乏しきことなし、是みな丞相の力なりと宣へば、蕭何申けるは、御方いま勇猛の將士多く屢〻强敵を破て若干の地を略し、四方の諸侯爭て來り服す、是眞に大王の洪福に仗てなり。漢王又韓信を近く召て、朕不知にして忠諫を聽ず果して大に敗軍し、今元帥に見て愧ること甚しと宣へば、韓信地に拜伏し、臣大王の命を蒙り三秦を鎭守する處に、幸にして盜賊やゝ治り、郡縣少し安靜なり、近ごろ臣病を受て事を務ること能はざりしかば、退て咸陽に閑居せり、此に因て向に睢水に敗軍し玉ひし時も、行て救ふことを得ざりき、圖ざるに此間張子房咸陽へ來て、大王楚に降參し玉ふとの披露あり、大王なに故に左樣の怯き計を成玉ふ、臣褒中を出しより晝夜心力を費して關中の地を攻とり、未だ數月をも過ざるに、一たび敗軍し玉ふたればとて、豈空く敵に降るべけんや、願は慮を遠して必ず此事を止り玉へ。漢王の宣く、御方いま大に敗れたる上に、太公を始として一族皆敵に生捕れ、殊に

長久の計なりと思ふてなり。韓信怒て申けるは、先生むかし某が才を稱し漢王に勸めて大元帥とし玉ひ、今いかなれば角は輕じ玉ふぞ、今楚の勢雲霞の如く集ると云ども我は腐木の如く思ふなり、一たび打向はゞ忽ち微塵に成ん。張良が曰、元帥必ず侮り玉ふな、我よく范增が計を用るを見に恰も鬼神の如く、其外龍沮、鍾離昧なんど云輩は世にも怕しき大將なり、元帥爭か之に敵することを得ん。韓信いよ〳〵怒り、我もし范增を生どり、龍沮、鍾離昧等を討とること能ずんば、先生必ず某が首を刎玉へ、少しも恨ることなしと云ければ、張良乃ち蕭何に向て、元帥已に此の如く宣ふ上は、兎角異儀を申すに及ず、然れども今もし册を造らずんば、主上必ず某等を罪し玉はん、又これを如何せんと云ば、韓信が曰、少しも愁玉ふな、某二先生と同く滎陽へ到り、主上に見て此趣を奏し、先楚の使を斬て御方の威を示さん。蕭何が曰、いやいや今兩國相爭の時一人の使を斬たりとも、左のみ益なき事なりとて、先册を造る人をみな退しめ、四門に掛たる榜をぞ引たりける。韓信は二人と約を定め、明日滎陽へ伴ひ行んとて別れて丞相府を出ければ、路々にありける百姓共これを見て互に物語し、今四門に掛たる榜を引れしは、定て降參の沙汰を止られたる者ならん、我等すでに項羽が民となり、干戈の禍に逢べかりしに、元帥の盛德に仗て再び安穩なることを得たりと喜びあへりしかば、韓信心の

張良
韓信

韓信滎陽
見漢王
漢王
蕭何

御一族に易んと欲し玉ふ、諸大將は只早く楚を破て仇を報ぜんと勇めども、張良一人しきりに降參を勸るに因て、主上も實もと同じ玉ひし事なり、張良はもと韓國の人なれば、只わが身の富貴を失ふまじきが爲に合戰を好ず、此間つひに楚の使を伴ひ來り、三秦咸陽の家數人數を點檢して册に寫しむ、已に降參に事極まれり、某も此こと補意なく思へども君の命負くこと能ざれば、力及ばず此の如し。韓信色を正し、座を起て申けるは、丞相何とて角は器量の狹きことを宣ふぞ、某褒中を出しより、主上の威德に仗て關中の地十にして已に七八を得たり、夫勝負は兵家の常の習、睢水の敗軍に御一族敵に捕れ玉ふと云ども是愁るに足ぬ事なり、項王は誠に暴逆を行へども、范增極て心の深き者なれば必ず之を殺すまじ、今これを取返んと欲せば、豈別に計なからんや、安ぞ一旦空く降參して逆賊に事るの理あらんや、願は諸將を留て此所を守らせ、某自ら本部の軍馬を領じて速に楚賊を滅し、誓て御一族を取返さんと欲す、丞相の心いかん。張良これを聞て、しすましたりと喜び、屏風の陰より躍り出、禮を施して申けるは、我向より元帥の言を聽に甚だ高論なり、然れども項王勢大に盛なれば、恐くは元帥これを破ることと能ず、又睢水の禍あらん、然る時は人の嘲を受るのみならず、太公、呂后も國に歸り玉ふことなく某等も身命を保つこと能じ、此ゆゑに諸人と相議し、不レ如早く降參して身を全せば、

整として隊伍を亂さず、威風凛々として人の耳目を驚す程に出立たり。咸陽の百姓これを見て路の傍に相集り互に物語しけるは、元帥いま丞相府へ赴き玉ふは、必ず降參の事を本意なく思ひ、張良、蕭何と議して共に漢王を諫ん爲なるべし、我君もし楚に降り玉はゞ、項王忽ち來りて此所を都とせん、然る時は我等塗炭の苦を受て安ぞ業を修することを得べきとて、斜ならず喜ぶ氣色なりければ、韓信いよ〳〵憤をなし、果して彼事疑もなく實なりと思ひ、先丞相府へ人を馳て出來りたる由を報ず。蕭何これを聞て張良と共に手を打て大に笑ひ、此人つひに吾計に中れりとて、册を造る人を數多兩邊に侍座せしめ、張良は先暫く出玉ふなと、合圖を成て待處に、韓信來て馬より下ければ、蕭何乃ち迎へ入て禮を施し、我この間しば〳〵見んことを求れども、内に入ることを得ず、今いかなる故ありてか此に來れる。韓信が曰、某主上の廢て用ひ玉はざる故に、丞相に見ることを愧て閑居して候き。蕭何申けるは、元帥頻に東征を諫め玉ひしかども主上更に聽玉はず、了に元帥を棄て魏豹を大將とし果して大に敗績し玉ふたれば、その過主上にありて元帥に在ず、何の愧ることか候はん。韓信申けるは、某承る、此ころ張子房こゝに來り、主上關中の地を悉く楚に獻て降參し玉ふと、こはそも如何なる事にて候ふぞ。蕭何が曰、雎水の敗軍に太公、呂后敵に生捕れて苦を受玉ふ、此ゆゑに關中を項王に獻て

某に命じて此所の家數人數を悉く册に書寫しむ、早く老幼男女を點檢し、其數を寫して出し玉へ。韓信乃ち召入て申けるは、吾は是大元帥なり、安ぞ百姓と同からん。彼人答て曰、丞相某に命じて官宦軍民を論ぜす、何れは官戸何れは民戸と云ことを、次第を亂さず分明に書寫べしと云玉へり、況や楚の使極めて性の躁き者なれば、若少も相違あらば、某必ず罪を蒙ん、元帥願は之を憐め。韓信が曰、汝今日は先他所に行て册を造り、明日こゝに來て寫せ、我必ず約を違へじ。彼人哀で告て曰、然る時は次第甚だ亂れて、丞相の命に背く、元帥たゞ一筆書つけ玉ふ時は、某も罪を免れて自ら無事ならん。韓信さまぐ\に諭せども彼人敢て出去ず、中門に座して終日哀み告しかば、韓信心の中に此體にては若も實事なることも有ん、恨らくは漢王某が心を勞し力を盡して大敵を破り、若干の地を攻とりたる勳功を思はず、一旦空く敵に降んとし玉ふ、是いかなる道理ぞ、我この間引籠て出ざるは、漢王素より人を侮り輕じ玉ふ故に、此の如して重を示し、君の自ら禮を厚して來り迎へ玉ふを待て我乃ち出見ば、外の望も重して諸將も心服すべしと思ふてなり、圖ざるに今すでに此の如なれば我敢て默がたし、早く丞相府へ行て張良、蕭何に實否を尋ね聞んとて、左右に命じて用意をさせ、心に深き所存ありければ、夥く旌旗を立列ね、左鈇右鉞劍戟日に映じ、手下の將士思ひ〳〵の鎧袍を著し、軍馬整

し玉へる由を聞て、引籠り門を閉て一人も内に入ず、我しばく行て訪へども一度も見ることを得ず、此は必定主上の自ら來り禮を厚して迎へ玉はんことを欲するならん、大に人臣の體を失へり、先生たとひ行玉ふとも見參は叶ふまじ、如何計を施さるべき。張良やゝ久く思案し、耳を附て箇樣々々にせば、韓信必ず自ら出來んと低語ければ、蕭何深く喜び、此計極めて妙なりとて、即時に心腹の人を呼で密に計を教へ、又咸陽城の四門に高札を立、漢王關中の地を悉く項王に獻て降參すと、書つけ遍く軍民に示しける。韓信は此由を傳へ聞、心疑て居たりけるに、左右の人申けるは、此ごろ張良滎陽より來て丞相府に居候ふが、主上關中を楚に獻りて降參し玉ふと云沙汰あり、元師これを知玉へるか。韓信が曰、これは張良が詭の計にて、我を欺て自ら兵を起して、楚を伐しめんと巧みし者なり、汝等が知事に有ず。其内一人進み出で、いやく虚説にては候ふまじ、某外に出て見に、四門に札を立て遍く諸人に示すとの事なり、元師必ず油斷し玉ふなと云ける處に、忽ち門を扣て來れる者あり。韓信人を出して誰ぞと問しむるに、答て曰、これは丞相府よりの使なり。向に睢水の敗軍に太公、呂后楚に生捕れ玉ふ、漢王ふかく之を悲て頻に求玉へども、項王更に許さず、若關中の地を獻て降參せば、太公一族を送り回さんと申す、此ゆゑに張良漢王の命を受、楚の使を伴て丞相府へ來り、

通俗漢楚軍談　巻之九

○韓信滎陽見二漢王一

漢王は九江王英布を招き降し、又大梁へ使を遣して彭越を諭して、楚の兵粮の路を截斷せしめ玉ふに、彭越すでに漢に降れることとなれば子細あらじと領掌す。漢王大に喜び張良を召て宣けるは、今英布、彭越共に御方に歸服すと云ども、韓信一人なほ未だ來り見えず、願くは先生計を以て招き寄、早く吾に見えしめよ。張良が曰、幸に今丞相蕭何兵粮を運送して咸陽にあり、臣明日行て蕭何と計を相議し、韓信を伴ひ來て大王に見えしめん。漢王限なく喜び玉へば、次の日張良滎陽を打たち、日を經て咸陽に到て、先丞相府へ行ければ、蕭何乃ち衣服を整て出迎へ、共に疎濶の情を述て喜ぶこと限なく、酒を擧て持成に、張良問て申けるは、我韓信と別れてより久く消息を聞ず如何、定て無事ならん。蕭何が曰、韓信さきに洛陽より歸て後、たゞ日夜鬱々として樂ず、我に語て申けるは、主上某が三秦を破り咸陽を攻取たる功を忘れて忠諫を用ず、元帥の印を奪て無謀の魏豹を用玉ふ、我甚だ喜ずと申せしが、其のち主上睢水に敗軍

黥面の賊何とて此の如くなる、諸將速に用意をせよ、朕誓て此賊を誅し、次に韓信を擒にして反逆の罪を正さんと云けるを、范增諫て曰、これ何の患ることか有ん、陛下怒を息玉へ、今暫く軍馬を訓練し、先大梁の彭越を除て御方の粮道を快く通じ、次に韓信を破て三秦を恢復し、都を咸陽に立て諸方の勢を招かば、英布等は云に及ばず、天下の諸侯來り服すること水の下に就が如くならん、是最上の計なりと云ければ、項王少し氣を鎭めけり。

に斬殺して、項王の詔書を微塵に裂碎き、謀士費赫を召て我已に漢に降れり、汝は我一族を守護して跡より來るべしとて、自ら人馬を整點し、隨何と共に打起て直に滎陽へ到りけり。隨何まづ内に入て事の樣を奏し、次に英布を引て見えしむ、英布乃ち内に入けるに、漢王床に踞して足を洗ひながら對面せられしかば、大に後悔し、退て隨何に申けるは、「我漢王は大度ありて能人を敬ひ玉ふと聞しに、案に相違して甚だ無禮なり、我は乃ち一國の王なれば、此の如く侮り玉ふべきにあらず、恨らくは御邊に欺れて進退兩ながら難し、不如早く自害して死んとて、已に劍を拔んとしけるを、隨何急に推止め、大王暫く忍び玉へ、漢王いまだ宿酒醒ず、思はず禮を失へり、後再び見えしめんと云へば、英布やう〳〵に劍を收めて暫く休み居ければ、張良、陳平等出見え禮を盡して持なし、飮食器用みな漢王と少しも異なることなかりしかば、心中ひそかに喜ぶ處に、文武の諸將出來り引て漢王の前に到れば、漢王衣冠正しく整のへ、禮貌謙恭談笑豁達にして君臣の間ほど疑ひ隔つることなかりければ、英布深く心に感じ、漢王は實に長者なり、隨何が申しに違ずと云て喜あへり。英布すでに降參して漢王又三萬の勢を得玉ひしかば限なく喜び、さらば彭越に此由を告て、楚の兵粮の道を絕塞がしめんとて、梁の國へ使を馳て書簡を送らる。項王は英布が使者を殺し、詔書を裂碎て已に漢に降れる由を傳へ聞て甚だ怒り、

くは能これを察せよ。英布坐を起て隨何が前に近く寄て、我近ごろ楚と睦からず、深く漢王の寛仁なるを知て心に慕ふこと久し、先生暫く留り玉へ、我よく商議して心を決し、伴ひ行て漢王に見んと云ける處に、左右の人報じて只いま楚の使項王の詔書を持して來れりと申す。英布いそぎ使を召て對面し、詔書を拔き讀に、其文に曰、

君國舉レ兵臣惟協助、心膂之托也。九江王英布坐二守江淮一、偸レ安自逸、楚兵伐レ齊、假レ病不レ起、雖水會戰坐二觀勝負一、朕勞二軍旅一、久未二一言奉一レ慰、失二君臣之義一、非二同遊之好一、恃二爾武勇一、恐罹二狂逆一、徃問二三罪一、爾當レ知レ儆、自レ今會レ兵伐レ漢、星夜前來毋レ悞、故茲詔諭。

英布見了て心決すること能はず、沈吟して居たりければ、隨何急に進み出で、九江王すでに漢に降り玉へり、安ぞ楚を扶け玉ふことを得んと呼りしかば、楚の使大に驚き、汝は何者ぞと問に、答て曰、我は漢の使隨何なり、今英王と約を定め、共に大逆の楚を討て義帝の爲に仇を報ぜんと欲す、汝なほ之を悟らざるか。楚の使これを聞て又英布が言ざるを見て只事ならずと思ひ、急に階を下て走らんとす。隨何又英布に向て、我項王の詔書を見に、果して其身の罪を悉く大王に歸し、事に托して殺さんと欲する心あり、大王何ぞ先使者を殺して漢を扶け、楚を攻るの心を示し玉はぬぞと云に、英布勃然として大に怒り、自ら劍を拔て楚の使を引摑み、只一刀

へ諸國に觸て我を殺し、永く其身の罪を免れんと計る、我誓て此恨を雪んと叫びけるを、隨何急に止て曰、大王怒を止玉へ、此由もし彭城へ洩聞えば、項王いよ〳〵怒を發せん。英布が曰、さな云玉ひそ、我昔日項羽が下知を受て、秦王子嬰を殺し、始皇の墓を撥き、大江の中に義帝を弑したり、此三の事、他日人みな我を疑んと常に後悔せしに、案に違ず已に此の如くなれば、此恨み死すとも安んぞ盡ることあらん。隨何申けるは、大王天下の人の疑を開んと欲せば是甚だ難からず、只力を同して漢を扶け、兵を合せ楚を伐て明に項王の罪を正し玉はゞ、渏濁自ら分れん、若坐ら九江を守り玉ふ中に、漢王四方の諸侯と同く來て、共に前の罪を討ば、大王いま楚の封爵を受て居玉ふことなれば、如何に辯じ玉ふとも、了に其罪を免ること能じ、某が愚見を以てするに、不如早く旗を捲兵を休て、意を漢に屬し玉はゞ、天下の人項羽眞に義帝を弑して大逆の人なりと知ん、然る時は大王自ら惡名を洗ひ淸めて、弑逆の罪を免れ玉ふのみにあらず、きく人ごとに、九江王こそ無道の項羽を誅し玉ひて、實も義勇の人かなと、萬世までも稱嘆せば、豈長策にあらずや、況や今漢王諸侯を集めて滎陽に屯し、蜀漢の粟を貯て堅く守て動ず、楚人は深く敵國に入て、老弱の人遠く兵粮を運ぶ、楚の漢に如ざること自ら明なり、然るに大王萬全の漢に與せず、枉て危亡の楚を扶け玉ふことは、我大王の爲に取ず、願

てわが計に中れりとて、使と共に到りければ、英布座を下て禮を施し、堂上に請じて問て曰、御邊久しく漢に事へて能その虚實を知ん、漢王睢水の軍に何とて韓信を用ず、果して大に敗軍せられけるぞ、今又滎陽に在て如何なる議論かある。隨何答て曰、漢王向に義帝の爲に喪を發し、檄文を馳て天下の諸侯を語らはれければ、皆ふかく項王を恨で、來り服する者雲の如く、共に力を合せて楚を滅さんと誓ひし故、漢王喜で韓信を三秦に留て其根本を守らしむ。然るに思も寄ず、項王密に諸國へ使を馳て、義帝を弑したる者は九江の英布なり、早く兵を起して共に天を戴かざるの仇を報ぜんと觸たりしかば、天下これより悉く大王を疑て漢王を扶けず、殊に齊、梁、燕、趙の四國堅く約をなし、共に大王を伐て弑逆の罪を正さんとて、不日に大軍を起して此處へ攻來る由、其沙汰あり、無道の項羽己が惡名を悉く大王に歸して其身の罪を免れんとす、然るに大王恬然として之を知玉はず、今もし諸侯兵を合て一たび攻來らば、天下の人いよ〳〵大王を極惡とせん、大王たとひ家々に說、人ごとに曉し玉ふとも、誰か實とせん、然らば大王何の處にか身を安じ玉ふべき、未だ禍の及ばざる先に、何ぞ早く計を成玉はざる。英布これを聞て躍り揚て甚だ怒り、北を望んで大に罵り、項羽匹夫諸人の諫を聽ず、我に命じて放に義帝を江中に弑させ、却て其罪を悉く我に歸して惡名を萬世に傳んとするのみならず、剩

將みな國に歸る、某も六安へ歸て、父祖の墓をも拜掃せばやと思ふなり、我英王の威德を慕ふこと久し、今日幸に此處を過るを以て、一たび見えんことを求むれども、英王某を漢の說客ならんと疑て、虛病して見え玉はず、我力及ばず、直ちに歸り去んと思へども、然る時は英王の疑つひに釋ず、此ゆゑに來て先生に告申なり、願くは某が說客にあらざる由を告て、英王の疑を釋玉へ、英王坐ら九江を鎭守し、己を恭して四方の賢士を求め玉ふ、誠に當代の明主なり、天下たれか其德を仰ざらん、加之先生常に左右に侍して輔弼の道を失ず、然るに某いま義を慕て來れども却て疑を懷て見え玉はず、是士を敬ふの禮にあらず、四方の賢士も此由を聞ば一人も來り仕ふる者なく先生も又輔弼の任に負て人の誚を免れ玉はじと云ければ、費赫大に驚嘆し、御邊今宵は此に宿し玉へ、明日われ英王に奏して見えしめんとて、酒宴を設て持成ければ、隨何謝して曰、某元より酒に勝ず、明日英王に一見することを得ば平生の願足りと云て、客屋に入て休みけり。次の日費赫英布に見て、臣昨日隨何に對面して事の體を伺ふに、案に相違して漢の說客にては候はず、故鄕へ歸んとて此處を通り、大王の德を慕て見えんことを求む、願くは召て一たび見え玉へと奏しければ、英布が曰、人われを慕て來る、若對面せざるは甚だ無禮なり、早く行て伴ひ來れ。費赫乃ち使を以て招けば、隨何心の中暗に喜び、英布費赫果し

を追かけしかども、生どり得ざりしゆゑ、項王甚だ怒て樣々に罵り辱めしかば、英布これを恨で九江に歸り、兵を集めて久く謀反の企あり、今一人辯舌の人を遣して利害を說しめば、必ず來て降參せん。漢王大に喜び、卽時に隨何を召て、汝九江へ行て、英布を諭して漢に降らしめよと宣へば、隨何命を受、從者を引て直に九江に到り、六安の隨何、英王の威名を慕ひ此に來て見んことを求むと告ければ、英布いそぎ謀士費赫を召て、今隨何がこゝに來るは如何なる故ならんと議するに、費赫答て申けるは、是は漢王新に敗軍の後、項王に敵すること能はざる故に、此人を說客として大王を漢に招き降し、共に楚を討んとの心ならん、大王まづ對面し玉はず、只さあらぬ體に持成て歸らしめ玉へ。英布これに從ひ人を出して、英布この間疾に臥て見ること能はず、御邊まづ歸て疾の愈るを待て再び來らるべしと云はせければ、隨何心の中に是必ず費赫が所爲ならん、先この人を諭さずんば英布に見ること能はじと思ひ、直に費赫が館に到て、門を守る人に告て見んことを求むと報じければ、費赫これを聞て是隨何英布に見ることを得ざる故に、我に逢て說ん爲に來れるならんと云て自ら出迎へ、請じて堂に上て禮了り、御邊いま此に來て何を說んとか欲すると問に、隨何答て曰、某は元六安の人、久く故鄕を思ふと云ども、軍中暇なくして歸ることを得ず、近ごろ漢王滎陽に屯して、少し事なきに因て、諸

置て、虞子期に命じて守らせ、又齊を攻んとて兵を整へて發向す。此とき齊王田廣は、久く楚の大將龍沮、鍾離昧に圍れ、兵糧次第に乏して、疲れ困む處に、項王近ごろ漢の大軍を破て軍威ます〳〵盛なる由を傳へ聞、つひに城を開て降參しければ、項王喜て兵を收め、歸て彭城を治めて又都とす。漢王は滎陽に陣を屯し、諸方の勢を招き集て勢漸く盛なりしかば、或とき張良を召て宣けるは、今御方の軍威殆ど大なりと云へども治め掌る者なければ、恐らくは事の變あらん、朕再び韓信を大元帥として、三軍を統しめんと欲すれども、向に元帥の印を奪ひ取てより一向に消息なく、朕大に敗軍しぬれども、了に來て救ず、今たとひ召とも恨を含で來るまじ、先生いかなる妙策を用てか、彼自ら來て朕に見ん。張良が曰、これ何の難きことか候はん、臣一たび行ば一言の下に忽ち來り見ゆべし、只惜らくは韓信が外に二人の名將あれども、大王これを知玉はず。漢王の宣く、二人とは誰人ぞ、願は教を聞ん。張良が曰、英布、彭越なり、若この二人を得て韓信と共に敵を討しめば、天下を得玉ふこと掌を反すよりも易からん。漢王の宣く、彭越すでに御方に降參せしかども、朕大に敗軍せしに因て、暫く梁の國に在て兵を整へ、時を待て御方に應ぜんとす、今使を以て招かば乃ち來り見えん、英布は久く楚に事て項王と深き志あり、爭か朕に降るべき。張良申けるは、英布さきに項王の命を受て、太公、呂后

甚だ怕るぞ、彼もし計あらば、適に漢王と共に彭城へ來て、睢水の敗軍はあるべからず、之を以て彼が智謀のなきを知べしと云ければ、范増再び言ず。時に外より報じて、司馬欣、董翳二人、漢王の一族を縛て來れりと申す。項王乃ち召て對面し、大に叱て申けるは、朕汝二人を三秦に封じて、第一の地を守らせけるに、適に廢丘の城圍を受て甚だ危かりしかども、汝之を救ず、見々章邯を討せ、剩へ敵に降參して、朕に三秦の地を失しむ、今漢王敗散して依方なきに因て、是非なく又朕に降る、反覆の小人安んぞ用るに足んとて以の外に怒り、左右に命じて早く誅せよと下知すれば、武士ども司馬欣、董翳を轅門の外に引出して、了に首を刎たりけり。項王又漢王の一族を悉く引出させ、太公に向て、汝が子劉邦は元泗上の亭の長たりしを、朕封じて漢中王とす、宜しくその職分を守り朕が恩を感ずべきに、妄に兵を起して關中の地を掠め取、古より謀反人は九族を滅す例なれば、汝等一人も免るべからずとて、武士に命じて引出させければ、范増大に驚き、急に出て諫めて申けるは、漢王いま新に敗軍すと云ども、韓信なほ關中に在て軍勢雲霞の如し、御方もし太公、呂后を囚へ置て人質とせば、彼縱ひ攻來るとも急に戰を決すること能はじ、今もし之を殺し玉はゞ、敵いよ〳〵恨を結で命を捨て攻來らん、其時いかに後悔し玉ふとも及ぶまじ。項王これを聞て實もと思ひけるにや、漢王の一族を悉く囚へ

とて、元帥の印を奪ひ取玉へば、魏豹大に怕れ、首を拘へて平陽へぞ逃歸りける。

手討にせんと思へども、諸大將の乞に任せて、暫く首を預けおく、早々に魏の國へ歸り去べし

叱て宣けるは、汝みだりに酒を過し、樂に耽て軍中の務を怠り、浩る禍を引出せり、朕いま

も五千三千敗軍を集て馳參り、其外諸方より馳加る勢、又日夜引も切ず。漢王魏豹を召て大に

乃ち城を出て遠く迎ふ。漢王喜で直に城中へ入玉へば、數日を經て樊噲、周勃、王陵、魏豹等

○隨何說₂英布₁歸ₗ漢

楚の大將丁公は、密に漢王の命を扶け、雍齒と共に兵を收めて馳歸り、項王に見て、臣等王命を受て日夜を分たず追蒐しかども、漢王ゆき方なく遠く落のび候ゆゑ、力及ばず引歸て候ふと奏しければ、范增傍に在て申しけるは、漢王この度大に敗軍すと云へども、是みな魏豹一人の所爲なり、此人元來才なく計少して甚だ實なき者なるを、漢王誤て大任を附し、果して此の如く敗を取り、然れども韓信なほ咸陽に在て久く軍馬を養ひ、兵粮山の如く貯たり、臣料るに、漢王睢水の恨を報ぜん爲に、不日に兵を起して寄來らん、此人は又魏豹が如き輩にあらず、陛下必ず侮り玉ふな。項王笑て曰、韓信初め楚に在て、朕すでに其才を知、汝なに故に

此日し大王の洪福に依ずんば爭か敵の大勢を討取ことを得ん、是臣が功にあらずとぞ申ける。汴河の東に陣をとり、兵粮を使ふて休み玉ふ處に士卒來て、只いま河に沿て一彪の軍馬夥しく塵埃をあげて來り候ふと申す。漢王之を聞て、汝等少も驚くこと勿れ、是必ず御方救の勢ならんと宣ふ内に、彼勢はや間近く來れり。漢王立て見玉ふに、眞さきに紅の旗を指あげて、興劉破楚大元帥韓信と大文字に書つけ、其跡に司徒張良と云旗もありければ、斜ならず喜び、夏侯嬰と共に出迎へ玉へば、張良、陳平二人地に拜伏す。漢王問て宣く、韓信も來れるか。張良答へて曰、臣大王の大に敗軍して行方知ずなり玉ふ由を承て、急に兵を率ゐ、元帥の旗を借て救の爲に出たりしに、陳平も救に出たりとて途中出合しかば、共に路を急で馳來れり、韓信は來り候はず。漢王宣けるは、先生しば〳〵忠諫せられしかども、朕愚にして之を曉ず、若干の人馬を失ふたる上に、一族こと〴〵く敵に生捕れたり、只恨らくは魏豹匹夫智薄く才微にして軍を治るに紀律なく、五十六萬の勢一日の間に大半滅されたることをと云て大に後悔し玉ふ。張良が曰、臣深く計あり、大王少しも患ひ玉ふな、今この處前に大河あれば、若敵の勢追來らば如何ともすべからず、まづ早く滎陽城へ御入ありて、再び諸方の勢を集め、又信に命じて睢水の恨を雪ぎ玉へ。漢王これに從ひ、兵を引て進み玉ふに、滎陽の守將韓日休この由を聞て、

數日この處に留り玉へ。漢王謝して宣けるは、漢の兵四方に亂れ散て、文武の大將行方を知ず、久く此に留るは甚だ忍ざる所なり、朕早く敗軍の將士を招き集め、先住處を定て、近き内に必す臧氏を迎へ取ん。老人これに因て敢て留ず。漢王乃ち別て馬に打のり、南に向て漸く十里ばかり進み玉ふに、又向より塵埃を擧て一手の勢出きたる。漢王こは如何にせんと膽を冷し、急に林の中へ逃隱れ、近くなる儘に之を見ば、敵にはあらで滕公夏侯嬰なりしかば、大に喜び て踊り出、汝いかゞして彭城を遁れ出たると問玉ふに、夏侯嬰申けるは、司馬欣、董翳心替して太公御一族を擒にし敵を引入しかば、臣命を捨て戰ふと云ども力孤にして救ふこと能はず、只一人西の門より出たりしに、二人の御子を馬に乘て走る者あり、臣軈て追かけ、近づく奴原數を知ず斬殺して救ひ奉り、敗軍を集むるに千餘人に及びしかば、共に守護して東南の小路より逃走り、幸にして恙なきことを得たり。漢王哭て宣く、今汝が勇力に依て二人の子無事なりと云ども、太公、呂后いかゞ成せ玉ふを知ざれば、朕が心いかでか安きことを得ん。夏侯嬰申けるは、太子は天下の根本なり、大王たとひ天下を得玉ふとも、若太子なき時は恰も小兒の戲に似たり、必ず左程に哭き玉ふな。漢王乃ち二人の御子を近く召れ、夏侯將軍亂軍の中に命を捨て、汝が必死の難を救へり、他日必ず此恩を忘ること勿れと宣へば、夏侯嬰地に拜伏し、臣も

漢王
戚氏

漢王至戚家

と彭城に戰て大に敗軍し、夜に入て路に迷て此に來れり。老人驚て地に拜伏し、僕素より大王の仁德天下に遍きを知、今日思ひ寄ず尊顏を拜することを得て、其喜に堪ずとて、席を改め酒宴を設て慇懃に持成ければ、漢王その志を感じて、乃ち名字を問玉へば、老人答て曰、臣が家は戚氏なり、此村に家わづか六七十ありて、多くは臣が一族なるゆゑ、村の名も戚家庄と申し、臣に至て已に五代この處に住居仕り候ふ。漢王又問て宣く、老人子ありや。答て曰、臣たゞ一人の女子ありて今年十八歲なり、曾て相士許負と云人、その相を見て甚だ驚き、此女後必ず大に貴からんと云り、幸に大王今日臣が家に來り玉ふ、願は此女を獻りて左右に奉侍せしめん。漢王の宣く、朕敗軍して此に來る、只今宵枕を安じて宿することを得ば足り、決して此事を寬せ。老人聽ず、了に女を呼出して漢王を拜せしむ。漢王つく〴〵と見玉ふに、其容繪に書とも筆も及び難き程なるが、金翠の粧を凝し桃顏の媚を含で、げに類なき美人なれば、心の內暗に喜び、自ら玉の帶を解て引出物に賜ひければ、老人拜謝して受收め、又數盃を進むるに漢王大に醉ふし玉ひ、すでに深更に及びしかば、其夜は戚姬が閨に入て寢玉ふ。次の日晨に興別を成て出んとし玉へば、老人ひき留て申けるは、大王この度もし敗軍し玉ふに有ずんば、安んぞ臣が家に來り玉ふことを得ん、臣年老て再會料り難ければ、早々に別るに忍びず、願くは

丁公答て曰、われ已に漢王に追つき、多く矢を放ちしかども中らず、了に何くともなく見失ふたり。雍齒が曰、御邊何とて早く生捕ざりし、未だ遠くは逃去まじ、いざ追付んとて、揉に揉で馳たりける。漢王は虎口を遁れ、一晝一夜息をも繼ず馳玉ひ、今は早身も疲れ馬も弱りて一足も進み得ず、日も漸く暮ければ、馬より下て休んとし玉へば、又雍齒、丁公一手になり、大勢を引て間近く追來る。漢王事の急なるを見て、今は遁ぬ所ぞと思ひ、已に自害せんとし玉ひしが、いやく事叶ざらん期に臨で、自害せんことは最安かるべし、一まづ隱れて見ばやとて、傍を見玉ふに、一の古井ありて荊棘しげり合ければ、究竟の事よと思ひ、急に飛入て隱れ玉ふ。雍齒夜中の事なれば、古井ありとは思ひ寄ず、直に飛が如くに蒐通りぬ。漢王は必死の命を續玉ひ、乃ち井の中より踊り出、急ぎ馬に打乘玉へば、身體いよく飢疲れて、そことも知ず這々又二三里ばかり落ゆき玉ふに、向に人家ありと覺えて、犬の聲遙に聞えければ、少し心を安んじ、大なる林を過て一つの在家に到り、立寄て見玉ふに、燈の光幽に見たりしかば、乃ち門を扣き玉へば、一人の老翁鳩の杖にすがりて立出、漢王の錦の袍金の甲を著玉ふを見て、是たゞ人にあらず必ず王侯ならんと思ひ、請じ入て酒食を進め、君は何くの王公にてましますぞ、如何なる故ありてか來り玉へると問に、漢王答て宣けるは、我は褒中の漢王なるが、項王

項王

其二
漢王

餘り馳玉ひければ、漸々風定り霧も程なく晴にけり。項王は兵を一所に集め、漢王を討洩したることの無念さよと怒りければ、范増申けるは、漢王たとひ逃去とも、已に夜に入ぬれば、未だ幾程も隔り候はじ、速に兵を馳て追しめ玉へ、今もし生捕ずんば、他日又大なる憂を成ん。項王これに從ひ、即時に丁公、雍齒二人を召で、汝三千の兵を引て急に漢王を生どり來れと下知すれば、二人命を受て飛が如くに出去ぬ。漢王は心の中に、若さきに大風の起るに有ずんば、朕安んぞ一命を全することを得んと深く感じて、馬を早めて走り玉ふ處に、又後より馬煙を踏たて、鼓を鳴して來者あり。漢王膽魂も身に付ず、如何せんと悶玉ふ内に、早楚の大將丁公背に來て生捕んとす。漢王事の叶はざるを見て、急に馬の首を立直し、哀で告玉ひけるは、劉邦こゝに至て遁るに路なし、我きく、賢者不二相厄一而相愛と、御邊もし我を憐んで遠く遁れしめば、他日天下を得て必ず此恩を報ずべし、若又わが孤弱なるを憐ず、強暴の楚に殺さしめんとならば、我敢て辭せず、早々に縛を受ん。丁公が曰、今日の事は君の事なり、臣敢て廢せじ、然れども臣元より漢に志あれば、あへなく生捕に忍ず、大王速に逃去玉へ、臣かりに追蒐る體を成て、諸人の疑を免れんと云ければ、漢王喜び、東南に向て走り玉へば、丁公跡より空しく矢を放て歸らんとするに、雍齒又一手の勢を引て馳きたり、如何に漢王を見玉はずやと問に、

遍野に充滿せり。漢王は這々に逃のび玉ひ、暫く息を繼で軍兵を點檢するに、三十餘萬討れしかば、大に力を失ひ玉ふ處に、劉澤たゞ一人彭城より走り來り、司馬欣、董翳楚に降參して、御一族みな奪ひ捕れたりと告ければ、漢王甚だ後悔し、朕誤て韓信、張良が諫に從ず、かくゝ若干の軍馬を損ふたる上に、一族ことごとく敵に捕はれたりと宣ふ。其言いまだ了らざるに、忽然として喊の聲四方より起て、金鼓天地を震動す。漢王彌膽を冷し、急に馬に打乘て逃んとし玉ふに、早楚の大勢とり圍で緊きこと恰も鐵桶の如く、兵も僅に百騎ばかりに討なされ、日も已に西に迫りければ大に嘆息し、朕たとひ翼ありとも爭か此圍を出ることを得ん、天命すでに盡たりと宣ひ、十分危く見けるに、不思議や漢王まことに天の祐や有けん、忽ち東南の方より一陣の強風さつと吹來て、沙を飄し石を飛し、俄に大霧深く起掩ひ、須臾の間に四方黑暗になりて、咫尺の間も見わけ難かりければ、楚の軍勢大に驚き怕れて、蛛の子を散すが如くみな四角八方へ散亂す。漢王不思議の思をなし、路を求めて逃んとし玉ふに、霧いよゝ深く前後濛々として東西を知がたければ、あきれ果て立玉ひしに、一條の白光隱々として路を照し、其明なること杲々として白日の如くなりしかば、彌深く怪み、之を指南に馬を飛して二十里

ふことを得ば、朕必ず甲を脱で降參せん、若戰ふこと能ずんば速に首を渡せ。漢王の宣く、汝自ら匹夫の勇を恃んで猥に大言を放つ、爭か天兵を防ぐことを得ん。項王聞も敢ず、左に方天戟を提げ、右に龍泉の劍を執て、馬を飛して討てかゝれば、漢の陣より樊噲、周勃、柴武、靳歙、盧綰五人の大將一度に咄と喚て出、塵埃天に暗く、喊の聲地に響て、四方より引包で攻戰ひしかども、項王少とも牢籠ず、精神を勵して防ぎけるに、又項莊、季布、桓楚、虞子期、大軍を驅て力を合せ、一人も餘さじと蒐立ければ、漢の兵散々に亂れ、我先にと逃走る處に、大將軍魏豹後陣の生手を引て進み來る。項王之を見て大に叱て曰、恩を忘れ義に反くの賊、何の面目ありてか此に來れる。魏豹が曰、汝こそ恩義を忘れて放に義帝を弑して諸侯を左遷し、始皇帝の墓を發き、降卒二十萬を坑にし殺せり、此ゆゑに天下の人恨骨髓に入て、生ながら汝が肉を食んことを願ふ、汝いたづらに甲斐なき命を失んより速に退けかし。項王甚だ怒り槍を橫たへて飛で蒐れば、魏豹も斧を振て鋒を交へ、二十餘合戰ふて勝負を分たず。項王軈て槍を打すて、鐵の鞭を執て魏豹が甲の眞甲を破よ碎けよと打けるを、魏豹急に身を側て避んとせしが、背をしたゝか打れて、馬の上にうつ臥に倒れたるを見て、諸大將急に引回し、かけ塞て防ぎ戰しかば、諸軍やう〳〵に扶て本陣へ逃歸る。項王ます〳〵兵を驅て一人も餘すな

の爲に無道を誅して、天下の人の恨を雪んと欲す、汝却て謀反と云こそ可笑けれ。項王大に怒り、槍を横て戰ひしが、司馬卬なじかは敵すべき、戈を捨て逃けるに、項王の乘たる馬は烏錐とて、千里の駿足なれば、忽ちに追付て了に馬より下に突殺し、急に軍馬を驅て掩殺するに、申陽又馬を躍して斬て蒐る。項王又曰、汝なに故に楚を反て漢に降れる。申陽が曰、漢王の仁德天下に施して、大軍の向ふ所手を束ね膝を屈めずと云者なし、我一人のみにあらず、汝も早く甲を脫いで降參せば、永く楚王の位を失じ。項王怒て驀地暗に攻かゝれば、申陽からからと打笑ひ、われ汝を憐で降參を勸れば、却て迷を取て我を討んと欲す、何とて左ほどに愚痴なるぞとて、槍を撚て二十餘合戰ひ、申陽力弱て逃んとする處に、張耳一手の勢を引て横あひに蒐出挾んで戰ひしかども、項王神出鬼沒の祕術を振て、槍の法少しも亂れず。申陽いよいよ防ぎ兼て、急に馬を回して走りけるを、項王飛かゝり槍を延べて突よと見しが、忽ち馬より落て死だりけり。張耳之を見て叶はじと思ひければ、跡をも見ずして逃走る。項王すき間もなく追殺し、漢の陣を望み見れば、旌旗日に耀き金鼓天に震ふて、漢王左右に多くの大將を引具し、白馬に乘て立玉ふ。項王齒を切り大に罵て申けるは、逆賊汝は元泗上の亭の長、いま漢王に封ぜられ、坐ら西蜀を保て猶足ことを知ず、妄に朕が境を掠め侵す、汝もし朕と只三合戰

漢王

項羽大戰彭城
彭越

挿んと云て、卽時に精兵三萬を領じて晝夜を分たず馳ゆき、彭城を三十里離れて睢水の邊に陣をとり、合戰は明日と定て、まづ使を以て彭城へ戰書を送りければ、漢王披き見玉ふに、其書に曰、

西楚霸王書付劉邦曰、朕封爾爲漢王、坐守西土帶甲十萬安享天祿、亦當知止不自揣度、恣肆狂悖侵擾關中、所降諸侯皆猥才庸調、不足以爲捍禦、乃爾解戈、朕今與爾會戰。爾當延頸以試吾劍、使爾片甲不歸。魚遊釜中耳。速來出敵、勿自退悔。

漢王見了て卽時に返簡を遣し、魏豹を召て角と語り玉へば、魏豹乃ち國々より馳參りたる諸侯を集めて手分を定む。其人々には、第一隊に殷王司馬卬、第二には洛陽王申陽、第三には常山王張耳、第四には漢王自ら諸の大將を率ゐて進み玉ふ。第五隊には大將軍魏豹、大軍を領じて後陣に備ふ。司馬欣、董翳、劉澤三人は彭城に留つて太公、呂后、二人の御子を守護すべしとて手分一々定りしかば、次の日早朝に彭城を十里出て陣を布、鼓を打鑼を敲て攻蒐れば、楚の陣より之を見て、陣門を颯と押開き、項羽左右に龍鳳日月の旗を立列ね、眞先に馬を出し、大音あげて、劉邦匹夫早く出て降參せよと呼りければ、漢の陣より司馬卬戟を取りて出迎ふ。項王申けるは、朕汝を封じて殷王とす、何とて恩を忘れて謀反したる。司馬卬笑て曰、われ義帝

を賴み置しが、思ひ寄ず彭越敵に降て彭城を漢王に奪れたれば、虞子期心の內に、我久く君の恩を蒙りながら、逆賊に從て一旦空く敵に降參せん事は、義者の爲ところに有ずと思ひ、身近き者共を呼で用意をさせ、其夜ひそかに虞氏及び項王の一族を悉く伴ひ、彭城を忍び出て直に齊の國へぞ走りけり。漢の諸大將これを聞て急に追かけて生捕んと云けるを、漢王止て宣ひけるは、汝等必ず追こと勿れ、縱ひ此者どもを生捕とも、安んぞ楚を滅すの便とするに足ん、朕暫く此處にて軍馬の氣力を養ひ、了に項王を誅せんとて、日夜酒を飮で樂み玉ひしが、大將軍魏豹は天性躁しくして日ごろ諸人と睦からざるに、此間酒を過して妄に士卒を鞭うち、諸將を罵り辱しめければ、軍中甚だ穩ならず、上下恨を含む者多かりけり。

○項羽大戰ニ彭城ー

虞子期は夜を日に繼で齊の國に馳ゆき、項王に見えて、彭越心替して漢王に降り、後宮の美人財寶こと〴〵く奪はれしが、臣ひそかに御一族を守護して、夜に紛れ忍び出、這々馳きたり候ふと告ければ、項王大に怒り、劉邦匹夫、みだりに威を振て朕が境を擾る、速に討滅して此恨を雪んとて、急に龍沮、鍾離昧を召て、汝二人は兵を率して齊を攻よ、朕自ら行て漢王を生

今彭城を守る大將は誰ぞと問玉ふに、彭越と云者なりと答ふ。漢王宣けるは、汝朕が書簡を携へて彭城へ行、彭越を諭して御方に降らしめよ。陸賈命を受て即時に馳ゆき、彭越に見えて書簡を與へければ、彭越乃ち披き見に、

漢王手書付彭將軍足下、項羽放弑義帝、大逆不道、已發書布告天下、兵皆縞素、爲義帝發喪、諸侯聞有此擧、莫不同心稱快、將軍有鷹揚之勇、素有大志、今乃與逆賊爲臣、實爲將軍恥也。將軍肯仗義、與漢合兵、共伐大逆、成功之後、垂名竹帛、爲萬代元勳、子孫綿延世享王爵、大丈夫之所爲、自與尋常萬々不同矣、足下其思之。

彭越限なく喜び、我久く漢王は寛仁の長者なるを知、今又慇懃に書簡を送て招き玉ふ、我何ぞ從ざらんとて、即時に城門を開き、陸賈と共に遠く出て迎へ、臣いま三萬の勢を引て漢に降る、大王願くは魏の後をとり立、早く楚を滅して天下の苦を救玉へと云て地上に拜伏しければ、漢王喜で之を安撫し、乃ち拜して魏の相國とし玉ひ、直に彭城へ入て先魏豹に命じて預め軍の手分を成しめ、後宮へ入て見玉ふに、財寶は山の如く積貯へ、多の美女花を粧て並居たりしかば、限なく喜び大に酒宴を設て諸軍を勞ひ玉ふ。此に項王の妾に虞氏と云美人あり、容貌世に雙なく誠に傾國の姿あてやかなれば、項王の寵愛尋常ならず、向に齊梁へ下る時、虞子期と云者

出んとしければ、漢王又宣けるは、汝陳留へ到て韓王を封じ了らば、片時も早く歸り來れ、朕旦夕汝と計を議せざる時は、決して敵を破ること能ず。張良申けるは、大王萬謹で必ず輕輕しくすることなく、先一人の總大將を立て三軍を司しめ玉へ、臣陳留へ行ば、當月の中に彭城にて出合申んとて去にけり。次の日漢王進んで汴河を渡り玉ひしに、一人の士卒水に落て死ければ、數萬の軍勢大に騷動し、悍る所もなく大音あげて呼はりしかば、漢王陸賈、酈生二人を召て、軍中紀律なくして士卒此の如に無禮をなす、朕諸大將の中に尤も人望ある者を擇で總大將とせんと欲す、魏豹は元來魏王の子孫にして諸人尊び重ず、朕この人に元帥の印を與へて諸軍を掌らしめんと思ふは如何にと宣へば、陸賈申けるは、魏豹は言を巧すれども嘗て實なき者なれば、軍事を司しめ難し。酈生も申けるは、張良も常にこの人を敬ず、殊更諸將と不和なれば、恐くは大事を成こと能はじ、大王よく察し玉へ。陳平又進み出て奏しけるは、魏豹小しき才ありと云ども大器にあらず、焉ぞ大事を屬するに足ん。漢王の宣く、然らず、魏豹はもと魏國の王孫にして人望甚だ重し、韓信が胯を潛り食を乞て辱を受しに較ば、豈日を同して語るべけんや、今拜して大將とせんに、誰か服せざるべきとて、了に三人の諫に從ず、即時に召て大將に拜し玉へば、魏豹欣然として命を受、人馬を點檢して彭城を指て進發す。漢王陸賈を召て、

虚なり、此とき急に大軍を率して其備なきを討ば、豈勝ずと云ことあらんや、汝は本部の兵を領じて關中を守り、若わが打負たる由を聞ば、速に出て救ふべし。張良こらへ兼て又すゝみ出て樣々に諫めしかども漢王さらに從ず、朕が心すでに決せり、汝等再び云ことなかれと宣へば、韓信事の叶ざるを見て、又奏しけるは、項王の武勇天下に秀て向ふ所敵なし、御方の大將の中に恐らくは彼に對する者候ふまじ、大王凡そ事審に察して輕々しくし玉ふこと勿れ。酈生が曰、元帥すでに此の如き先見あり、何ぞ主上に從て共に東征して大功を顯玉はぬや。韓信が曰、然らず、今この所始て御方に屬して民の心未だ服せず、主上もし敗軍し玉はゞ恐くは事の變あらん、某本部の人馬を總て三秦を鎭守し、其根本を失ざる時は、是萬全の計なりとて、大將の印を解て漢王に獻り、拜し別れて咸陽へ行てぞ守りける。角て用意一々備りければ、漢王大軍を率して進發し、すでに陳留へ近付玉ひし時、張良奏しけるは、臣が故主韓王項王に滅されて其孫姬信いま僅に民間にあり、願は大王これを憐み、立て王と成て陳留を守らしめ玉はゞ、乃ち漢の臣なり、某も又故主の恩を報ずるに足ん。漢王喜び、汝よくこそ知せたれ、早く望に任て姬信に封爵を與へんとて、張良に節を持せて陳留へ遣し、別に臨で告て宣けるは、汝陳留へ行て、韓王の一族の中に若賢才の人あらば、陳留王に封じて姬信を輔しめん。張良命を受て

天下共立義帝、北面事之、今項羽弑之、大逆無道。寡人卽發關中兵、收三河士、願從諸侯王、擊楚之殺義帝者。

この時項王の政甚だ亂れて、此彼に謀反せんと思ふもの多かりしかば、此檄文を見て天の祐なりと喜び、我も〳〵と馳參る程に、未だ一月をも過ざるに、其勢すでに五十六萬騎にぞ及ける。漢王韓信を召て、御方いま董三老が一言に依て、諸方より馳集る兵漸く六十萬に近し、元帥この勢を領じ、早く項王を滅して天下の心を快せよと宣ければ、韓信答て曰、それ兵は凶器なり、戰は危事なり、三軍の生死國家の安危こと〳〵く此に係れり、此故に良將は先天の時を察し地の理を明め、次に其歲の運氣を料て、然して後に師を出す、豈士卒の多を賴で輕々しくすべけんや、臣この間天文を見に甚だ不吉なり、未だ兵を動すべからず、暫く兵粮を蓄へ軍馬を調練し、來年に及んで楚を伐ん。漢王の宣く、卿昔年始めて褒中へ來て未だ二月を經ざるに朕に勸て東征せしむ、今すでに關中の地を得て軍威甚だ盛なるに、却て遲滯して進まざるは何事ぞ。韓信申けるは、項王今齊梁を攻て未だ勝ざるに、又燕の國趙の國、楚に反て勢殊に大なり、臣料に項王必ず近き内に兵を分て燕趙を伐ん、其とき大王虛に乘て不意に出玉はゞ、滅さんこと掌にあり、臣この故に尊命に從ず。漢王宣けるは、今楚の兵悉く齊梁に在て彭城空

是は先年項羽が義帝を弑し奉りし時、大江の中にて御死骸を尋ね、郴州へ葬りたる者なり。進み出て申けるは、臣等漢王の兵を起して楚を討玉ふと承り一言の諫を獻ん爲に出來れり。漢王の宣く、願は一言を聽ん。董三老が曰、それ德に順ふ者は昌に、德に逆ふ者は亡ぶ、項羽無道にして放に其主を弑ず、是天下の賊なり、仁者は勇を以てせず、義者は力を以てせず、凡そ兵を擧るに其名正からざる時は人從はず、漢王いま無名の師を出して徒に土地を貪り玉ふ、縱ひ楚には勝玉ふとも天下必ず歸服せじ、宜く義帝の爲に喪を發し、諸侯に告て共に楚を討玉はば、誰か命に反く者候はん。漢王宣けるは、汝が言誠に理の當然なり、必ず諫に從はんとて、近く召て、汝今日より朕に事んかと問玉へば、董三老答て曰、臣年すでに九十に及で世に望なし、大王始め咸陽へ入玉ひし時、早く秦の苛政を除て法を三章に約し玉ひしかば、庶民大に喜んで大王の四海に君たらんことを願ふこと大旱の雲霓を望が如し、臣この故に來て諫を上る、官を求め祿を貪るの心にあらず。漢王喜び、數十人の老人に各米一斛と絹一疋づつを賜ひければ、みな拜謝して去にけり。漢王洛陽城に入て韓信と相議し、卽時に義帝の爲に喪を發し、手ら檄文を書て國々の諸侯に告玉ふ、其文に曰、

信と共に此賊を誅して萬民塗炭の苦を救んと思ふは如何に。群臣答て申けるは、陛下の神文聖武向ふ所敵する者なし、今又久く鋭氣を養うて兵多く粮足り、速に打向て無道の楚を滅し玉はば、臣等再び故郷へ歸ることを得ん。張良すゝみ出て曰、御方の軍威漸く盛なりと云ども、臣天文を見に甚だ利あらず、暫く時の至るを待て東征し玉ふべし。漢王の宣く、朕日夜故郷を思て夢寐の間も忘れ難し、久く此に留るは其本心にあらずとて、了に諫に從ず、諸軍に命じて急ぎ用意すべしと宣へば、人々大に喜び、我等早く家に歸て一族に對面せんと勇み踊て、數日の間に用意一々に成就しければ、漢王乃ち太公、呂后、二人の御子を伴て、都合其勢四十三萬餘騎大將二百餘人を召具し、先洛陽へ行て韓信と一手に成んとて、日を擇で打立玉ふ。

○董三老遮レ道說ニ漢王ニ

漢王大軍を率して河南へ來り玉ふ由、その聞ありければ、洛陽王申陽自ら城を出て遠く迎へ奉る。漢王進で遙に洛陽の要害を望み見玉へば、前に嵩高の險あり、後に大河あり、左は成皐に據、右には沔池の流を帶て、東は崤函に聯り、西は潼津に接して天下無雙の風景なりしかば、心の中喜で進み玉ふに、先手より報じて洛陽の百姓來て御駕を迎へ奉ると申す。漢王召て見え

首の交を結しが、項王さきに張耳を封じて常山王とせしを、陳餘深く恨み我身の封爵に預らざるを怒て齊王田榮を語ひ、趙の常山を攻て了に張耳が一族を悉く斬殺し、代王趙歇を迎て趙王としければ、趙歇又陳餘を立て代州の王とす、然れども陳餘代州に居ことを欲せず、假に夏悦と云者を代州の守とし、其身は趙歇に從て今趙の國に居とかや、さるに因て張耳一身を置に所なく、今日この所に來て一向に臣を賴む由を申し候ふゆゑ、只いま此に伴ひ來れり。漢王大に喜び早く召と宣へば、夏侯嬰乃ち張耳を引て見しむ。漢王宣けるは、朕久く御邊の勇名を聞、今日一たび逢て平生渴仰の情を慰するに足り。張耳泣て申けるは、臣幼より陳餘と交て刎首の約を成たりしに、一旦私の恨を結で一族こと〲く彼に殺されたれば、是共に天を戴ざるの仇なり、臣承る、陛下は寬仁大度にして神母夜號、五星相聚て天の祐る瑞あれば、必ず天下を一統して民の父母と成玉はん、此故にこゝに來て事んことを願ふ、幸に捨玉はずんば、臣陛下の威を假て陳餘を討滅し、一族の仇を報じて身を終るまで聖恩を忘れ候はじ。漢王斜ならず喜び、重く張耳に恩賞を與へて旗下に用玉ふ。浩りしかば漢の軍威日々に盛にして其勢雲霞の如くなりしかば、或とき漢王群臣を召て宣けるは、朕褒中を出しより四方の諸侯爭ひ服して兵すでに四十萬に餘れり、項王久しく逆威を振て天下こと〲く齒を切る、朕自ら大軍を率し、韓

陳平縱ひ古の尾生孝己が如き行ありとも、計を運し兵を用ること能はずんば、何の用にか立候はんと云ければ、漢王これに因て少し怒を止玉ひ、又陳平を召て責て宣けるは、汝むかし魏の國に在しとき、曾て一寸の功をも成ず、いま又楚を反て漢に降り、妄に人の賂を貪り取、豈忠信ある者の所爲ならんや。陳平答て申けるは、凡そ君臣の間遇あり不遇あり、魏王暗鈍にして臣を用ること能はず、此ゆゑに去り楚に仕ふ、項王自らその才に傲て甚だ士を侮る、臣久く大王の聖徳を慕て千里を凌で來り服す、是所謂る暗を捨て明に就なり、臣さきに漢に來るとき、黄河にて盜賊に出あひ、赤躶に成て這々命を扶りたれば、若賂をうけざる時は、一身を掩ふべき衣服もなし、大王少き忍で用玉はゞ、臣忠誠を盡して國に報ぜん、若用ひ玉ふこと能はずんば、此間うけ納たる金銀こゝにあり、悉く出して漢王に獻り、故郷へ歸て閑居せん、早く御心を決し玉へ。漢王これに心とけて始て後悔し、朕誤て賢人を失んとせりとて、厚く恩賞を與へて又護軍中尉の官に遷し玉へば、此より後は敢て云出す者一人もなし。浩る處に大元帥韓信が方より使來れりと告ければ、漢王なに事やらんと急ぎ召て問玉ふに、河内の地全く平定して司馬卬降參仕り候ふと答ければ、掌を打て喜び玉ふ處に、又外より報じて夏侯嬰きたれりと申す。漢王乃ち召入玉へば、夏侯嬰奏しけるは、常山王張耳素より成安君陳餘と云ものと刎

て志を得ず、深く陛下の徳を慕て昨日こゝに來て用られんことを求む、陛下もし此人と共に萬計を議し玉はゞ、必ず大なる利あらん。漢王の宣く、此は昔年鴻門の會に朕を救ひし人にあらずや。魏無知が曰、然り。漢王限なく喜び、朕久く此人に見んことを願ふ、速に召來れ、對面せんと宣へば、魏無知軈て陳平を伴て來り見えしむ。漢王宣けるは、朕むかし鴻門に於て已に項羽に害せらるべかりしを、御邊の力に依て虎口を遁れ、今に至て忘ることなし、幸に再び見ることを得て、平生の願足りとて、即日に都尉に拜して參乘典護軍を兼しめ玉ふ。周勃、樊噲等此由を聞て安からざることに思ひ、諸人と議して申けるは、陳平項王に追放たれ、赤躶に成て走り來り、未だ數日をも經ざるに、主上いかなれば甚だ敬て白地に大官を與へ玉ふや、其上片時も左右を離ることなければ恐くは事の變あらん、いざ行て諫んとて、共に朝に出て奏しけるは、臣等陳平が爲人を見に、容貌甚だ麗しく、能辯論を成と云ども胸中更に一物もなし、曾て嫂を盜で己が妻とし、今又護軍となりて多く諸人の賄を貪る、誠に反覆亂法の徒なり、早く追出し玉はずんば必ず大なる害あらん。漢王これを聞て急に魏無知を召て、汝しきりに陳平が才を稱して薦め擧しが、今周勃等が奏するを聞に、一つとして取ところなし、速に追退けよと怒り玉へば、魏無知拜伏して、諸大將の奏する所は彼が行なり、臣は只この人の大才を愛す、

某は河南の商人なるが楚の國より故郷へ歸るとて、今日黃河を通りしに、船の中にて盜賊に出合て衣服を奪はれ、赤裸に成て這々命ばかりを助り候ふ、御邊もし同鄉の義を思ひ、憐を垂て一つの衣を賜ば、家に歸て他日必ず盛恩を報ずべし。家主陳平が容甚だ麗しく其言の凡ならざるを見て、只人ならずと思ひ、乃ち衣服をとり出して與へ、酒を酌て持成ければ、陳平恩を謝して衣を著し、夜明ぬれば家主に別を成て路を急ぎ、直に洛陽を過て次の日咸陽に著しかば、先故人魏無知が館に行て、楚の陳平來れりと云ければ、魏無知乃ち迎へ入て座定り、共に昔を語て喜ぶこと限なし。陳平申けるは、項王甚だ強暴を放にして人の諫を用ず、賢人を輕じて國の政大に亂る、某素より漢王の寬仁にして計を好で決斷多く、身を下して厚く賢者を敬ひ玉ふを知、この故に千里の遠を辭せず、來て事へんことを願ふ、先生もし故舊の情を思ひ、漢王に薦めて一官を與られば、我身を終るまで盛德を忘れ候はじ。魏無知申けるは、漢王心を虛して廣く天下の士を求め玉ひ、四方の豪傑一時の英才爭て來り見ゆ、漢王久く御邊の才能人に超玉ふを知、もし一たび見え玉はゞ、薦め擧ることを待ずして必ず重く用玉はん。陳平喜で拜謝しければ、次の日魏無知朝に出て奏しけるは、臣が同國の友に陳平と云者あり、久く楚に事

陳平

陳平逃楚
歸漢

早く行て漢王に降らんと思ひ、密に旅行の用意をなし、未明に家を出て武陽より洛陽を望で走りけるが、黄河に到て日すでに西に沈み、路ゆく人も絶たりしかば、陳平渡るべき樣なく案じ煩ひけるに、向の灘に小船たゞ一艘幽に見たりしかば、究竟の事よと喜び大音あげて、我は急用ありて洛陽へ行者なり、願くは渡して玉はれと云ふに、彼舟程なく岸の邊に近づきぬ。陳平これを見に、其容はなはだ醜き男の年の程二十四五なるが、只二人乘たりしかば、心の内に是必ず黄河の盜賊ならん、若にげ去んとせば、却て彼に害せらるべしと思ひ、少も動ず立居たり。彼男この體を見て心中暗に喜び、乃ち陳平を引て舟に乘、すでに黄河の眞中まで推出したる時、二人手に刀を拔て早きり殺さんとする氣色なりしかば、陳平思ふ樣、彼が我を殺んと欲するは、只金銀衣服を奪はん爲なりとて、急に告て申けるは、御邊暫く休み玉へ、某元より水練を得て候へば、身を輕して舟を漕申んとて、衣服を脱て貯たる金銀と共に舟底へ投すて、赤裸に成て立出たり。二人の賊これを見て、密に笑て申けるは、吾等かの者は定めて金銀をも貯へたらん、殺して奪ひ取んと思ひしに、今この體なれば殺しても益なき事なりとて、共に刀を收めて、舟すでに岸に著しかば、陳平別れて路を急ぎ、已に夜に入て身も疲れければ、傍なる在家に入て茶を乞に、家主陳平が赤裸にて來れるを見て大に驚き、あら笑止や、御邊必ず黄河に

○陳平逃レ楚歸レ漢

項荘、季布は齊の國へ歸て項王に見え、臣等晝夜馬を早めて發向しけるに、河内の城已に落て司馬卬生捕れぬと聞えしかば、角ては打向ふたりとも空く人馬を傷て事に益なかるべしと思ひ、是非なく路より罷り歸て候ふと奏しければ、項王甚だ怒り、汝等一月あまりを經て、敵と一軍もせず、空く半途より歸て朕に河内の地を失はしむ、その罪誅を免し難しと云ければ、陳平すすみ出て申けるは、救の勢いまだ到らざる先に、河内すでに破れたれば、全く二將軍の罪にあらず、況や韓信が兵を用ること孫呉に髣髴たり、陛下必ず怒を止玉へ、臣亞父と計を議し、一手の兵を領じて再び河内の地を恢復せん、陛下その間に齊梁を定め、大勢を率て跡より來り玉はゞ、韓信爭か敵することを得ん、若臣が言を用玉はずんば、關中の地みな漢に屬せん、豈河内のみならんや。項王いよ〳〵怒り、向に司馬卬救を求めし時、汝朕が傍に在ながら兎角の一言もなく、今河内すでに破れたるに、却て人馬を費して遠く打向んと云、汝も又罪ありとて、左右に命じて項荘、季布を追出させ、卽時に陳平が官を剝で朝に出ることを得ざらしむ。陳平私宅に歸て心中欝々として樂ず、項王素より不仁にして強暴を恃み、妄に人を侮り辱しむ、如じ

り難し、剰へ三人の大將も皆生捕れて、救の勢來らざれば如何ともすべき樣なし、如じ早く降參して一命を全せんとて、將士五千餘人と共に城を開て降りければ、韓信喜で河内の城に入、法を出して妄に民の財寶を掠め取ば忽ち首を斬んと云ければ、皆悅服せずと云者なし。時に樊噲司馬卬を縛て階下に來り見ゆ。韓信自ら立て其縄を解ゆるし、座上に請じて持成ば、司馬卬地に拜伏して申けるは、臣は是亡國の俘、すでに元帥不殺の恩を蒙る、何ぞかく慇懃に持成玉ふことを用ん。韓信が曰、漢王專ら仁義を以て師を出し、素より厚く賢者を敬ひ玉ふ、豈みだりに殺伐を行んや、御邊今より心を盡して吾君に事へば、子孫永く侯王の位を失はじ。司馬卬限なく喜び、諸郡縣に檄を傳へて、悉く招き降らしめ、河内の地全く平定しければ、韓信使を馳て此由を漢王に奏聞す。扨又楚の大將項莊、季布は晝夜路をいそいで河内へ馳向ひけるに、追々早馬きたりて、司馬卬勢盡て敵に降り、韓信いま大軍を河内に屯して威風遠近を動すと告ければ、項莊大に驚き、已に此の如くなれば、我等行ても何かせん、此より引囘して事の子細を奏し、項王に勸て自ら大軍を以て漢王を伐しめんと云ば、季布然るべしとて、急に兵を下知して又齊の國へと歸りける。

一聲の鐵砲を響す程こそあれ、前なる林の中より、漢の伏勢潮の湧が如く渦まき出、周勃、柴武二人一陣に馬を踊らせ、戟を舞して斬てかゝれば、孫寅も槍を提て迎へ合せ十餘合戰ひしが、なじかは敵すべき、引回して逃走る。周勃、柴武急に人馬を驅て一人も餘すな繼けや者共と下知すれば、楚の勢大に亂れて、只秋の木葉の風に散ごとく、寥々落々として右往左往へ散亂す。魏亭は二陣に進みけるが、早先手の勢うち負て、漢の兵雲霞の如く來るを見て、膽魂も身に添ず、這々孫寅を救うて跡をも見ずして逃失ぬ。司馬卬は此をも知ず、後陣に備て進む處に、追士卒はしり來り、二手の先陣すでに敗れて敵の大勢ま近く來ると呼はりければ、司馬卬大に怕れ、急に馬を回して逃んとするに、思ひも寄ず傍なる坡の陰より、一人の大將刀を提て踊り出、たゞ一合に司馬卬を馬上に生どり、殘る勢を四角八方へ蒐散す。これ乃ち漢の舞陽侯樊噲なり。孫寅、魏亭は散々になりて逃たりしが、夜も痛く深て司馬卬が消息も知ざれば、如何せんと議する處に、早漢の大軍追きたり、纔なる楚の勢を百重千重に取圍み、韓信高き阜の上より大音あげて降る者は一命を免さんと呼り、息をも繼せず揉だりしかば、孫寅、魏亭左に突右に衝ても出ること能はず、兵一騎も殘らず討れ、敵は次第に大勢なれば力及ず、二人急に馬より下て降參す。都萬達は留て河内を守りけるが、此由を聞て大に驚き、御方勢少して孤城守

等早く行て委く樣子を伺ひ來れと下知しければ、皆命をうけて卽時に城を出、すでに十里あまり行けるに、傍なる茶店に兵粮の器武具なんど擔たる士卒多く休み居たるを見て、漢の人々は何ゆゑに城を攻ず俄に悉く引て歸るぞやと。さあらぬ體にて問けるに、彼士卒かねて韓信が教なれば、乃ち答て申けるは、去ばとよ、項王河北より自ら大軍を領じて不日に咸陽へ攻來る由注進あり、漢王兵少して之を防ぐこと能はず、此ゆゑに早馬を飛して急に召玉ふ、韓元帥は早六七十里も行玉はん、某等はこの間病をうけたるに、又箇樣の重き物を持たれば、快く走ること能はずとて、左右に向て、我等此の如く跡に滯らば、元帥恐くは罪を正し玉はん、いざとく行んと云に、其内一人の士卒申けるは、元帥はたゞ片時も早く咸陽へ歸て敵を防んとこそし玉ふべけれ、何ぞ某等が罪を正すに暇あらん。楚の細作これを聞て、又こゝ彼に行て伺ひ聞に、皆始の如くなりしかば、急ぎ馳歸て事の樣を具に語る。司馬卬大に喜び、わが料りし に違ず、速に用意をせよとて、都萬達に精兵五千を授け留て河内の城を守らせ、孫寅、魏亨二人に各一萬の勢を付て先手とし、自ら二萬五千餘騎を引いて勢に乘て追かけ、已に五十里ばかり馳けるに敵一人も見えず。孫寅さては計ありと思ひ、急に令を傳へて餘りに長追すべからず、日すでに暮たれば恐くは敵の伏勢あらん、暫く後陣の來るを待て、一同に追蒐んと云も果ぬに、耳根に

ら大軍を率して打向ひ玉はゞ、是最上の計なり。項王これに從ひ、卽時に項莊、季布を召て、三萬の精兵を授け、王儒と共に河内へ行て敵を防げと下知をなす。韓信は河内の城を圍で晝夜攻れども司馬卬緊しく守て一人も出ざりしかば、諸將に向て、我この城を圍で已に數十日に及べども敵一向に引籠て一度も戰を交へず、其上要害十分堅固なれば、急には中々やぶり難し、此の如く日數を送る内に、若救の大勢來て内外より挾んで攻戰はゞ、御方一人も生のこる者あらじ、我一の計あり、汝等箇樣〳〵にせば必ず勝ことを得んとて、密に計を低語ければ諸將みな尤と同じ、乃ち諸軍を下知して旗を伏鼓を止、四方の圍を解て、次の日こと〴〵く次第々々に退しむ。楚の兵これを見て、急ぎ司馬卬に告ければ、司馬卬乃ち櫓に上て望み見に、果して漢の兵一人もなし、扨は韓信この間わが出合ざるに退屈し、殊に救の來るを聞て、定めて項王の自ら打向ひ玉ふならんと推量し、驚き怕れて引たるならん、然らずんば故なきに爭か此の如くならんとて、諸將を下知して、急に追かけて悉く討とれと云けるを、謀士都萬達おし止て申けるは、いや〳〵韓信は詭の計極めて多し、是必ず詐て退きたる體を見せ、御方の城を出て追蒐るを、却て伏勢を以て討ん爲の計ならん、先ひそかに細作を出して敵の實否を窺ひ、果して詐にあらずんば、其とき追蒐玉はんこと又遲からず。司馬卬げにもとて、士卒數十人を呼で、汝

けて、一足も退く者は忽ち首を斬んと呼り、追立々々攻ける間、司馬卬これを防ぐこと能はず跡をも見ずして敗走するを、韓信軍馬を驅て透間もなく追殺しければ、楚の兵大に亂れて、我先にと城中へ逃入、堅く守て出合ず、王儒は夜を日に繼で彭城へ到りしが、此とき項王齊梁を征伐して未だ歸らざりければ、直に又齊の國へ馳行て司馬卬が書簡を呈上す。項王驚て披き見るに、

殷王臣司馬卬頓首上言、劉邦失職入寇關中、三秦敗亡、咸陽被虜。郡縣承風、魏離叛。兵圍河內、事在危急、蓋河內乃關中之要害、西楚之襟喉也。此地失守、河南振動、陛下疆土漢得其半、言至於此、臣寔寒心。伏乞、早發救兵、急爲經畫。齊梁可緩、漢兵爲要。廟堂之議當爲預定。燎眉之勢、懸望救援。若或少伺延緩、陛下貽宵肝之憂、臣等爲亡國之虜矣。臨表涕泣不勝懇切之至。

項王見了て以の外に仰天し、河內は御方第一の要害なり、若失ある時は彭城とても保ち難しとて、急に范增を召、司馬卬が書簡を見せて計を問に、范增申けるは、是容易の事にあらず、陛下の自ら征伐し玉ふに無ては叶ふまじ、然れどもいま齊梁未だ定らざれば、暫くも此處を去玉ふこと成がたし、先項莊、季布二人に命じて河內を救はしめ、齊梁を平定して其のち陛下自

軍勢遠路を來て、將士みな疲れ果たり、急に打て出て其いまだ備なきを討ば忽に微塵に成ん、若又戰ふて勝ずんば、其とき引籠て堅く守らんに何の遲きことか有ん、豈救の來るを待て徒に日數を送るべけんや。司馬卬が曰、孫寅が計よく吾心に合へり、速に用意をせよとて、先大將王儒に書簡を持せ、彭城へ遣して救を求め、孫寅に兵を授て魏亨と共に出て敵を防がしむ。韓信楚の勢の出たるを見て一陣に馬を馳出し、大に叱て申けるは、我漢王仁義の師を出して威風遠近を動し、國々の諸侯來り服すること水の下に就が如し、然るに汝等天の時を知ず人事を曉らず、逆賊を扶て妄に天兵を拒む、速に降參せば一命を宥すべし。孫寅大に怒り、漢王すでに咸陽を掠め取て其心なほ足ず、又此に來て境を擾る、己は胯をくゞりし餓夫、無用の舌を動して無禮をなす、早く退ずんば、我いま悉く首を刎んと言りければ、韓信が後より樊噲大の眼を瞋し、刀を舞して斬て蒐り、孫寅と五十餘合戰ふて勝負を分たず。魏亨これを見かねて、急に戟を取て馳出ければ、漢の陣よりも薛歐、陳沛二人ぬき連て打てかゝり、入亂れて攻合ひ、殺氣天を突鼓角の聲地を動していつ果べしとも見ざりしに、司馬卬自から生手の兵を率ゐ喊を造り鑼を鳴して一人も餘さじと揉だりしかば、漢の兵夥しく討れ、樊噲等も散々に亂て馬を囘して逃走る。韓信これを見て、急に周勃、柴武、盧綰、靳歙四人に大勢を授て防がせ、大音あ

て宣ひけるは、朕久く此處を治めて民の心も懷き、近國の諸侯も御方に心を寄る者多し、朕この時節を失はず、大軍を起して楚の賊を討んと欲す、汝等いかなる計かある。韓信申けるは、楚いまだ討べからす、宜く先四方の豪傑を招き集め、精く軍兵を調練し、明年を待て兵を起し玉はば、一鼓して天下を定むべし。漢王宣けるは、汝が云ところ尤も好と云ども、御方久しく鋭氣を養て人馬共に強く、兵粮武具等までも一々備りたれば、今まづ一軍せんと欲す、汝宜く計を運すべし。韓信が曰、大王必ず軍を出さんと思ひ玉はゞ、先殷王司馬卬を伐て河内の地を平定し玉へ、然るときは明年楚を伐んに外の援なくして一戰に滅すべし。漢王然るべしと喜び玉へば、韓信乃ち諸軍に令を下し、數日を經て用意こと〴〵く備りしかば、日を擇で進發し、河内を離ること五十里にして陣をとる。司馬卬この由を傳へ聞て大に驚き、兵を殘して河内を守らせ、自ら三十里出て陣屋を構へ、諸大將を集めて申けるは、今漢の大軍聞近く寄來て、殊に大將韓信極めて能兵を用ふ、諸將いかなる妙計かある。謀士都萬達すゝみ出て曰、韓信は尋常の輩にあらず、只よく手分を定めて四方を守り、密に彭城へ使を馳て救の勢を求め玉へ、若かるぐ〵しく出で玉はゞ、恐くは彼が計に中らん。大將孫寅が曰、この計しかるべからず、漢の

をなし、武勇尋常に勝れしかば、漢王に見えて用らるゝことを得たり、其餘黨周吉、周利なほ南陽に在て久く制し難かりしに、此たび英將軍一人も殘ず殺し玉ふ、是御方一の害を除くなり、今王陵が弟王澤母を養て沛縣にあり、若その母を捕て此所へ召よせ、書簡を以て招かしめば、王陵必ず御方に來り降らん。項王喜び、卽時に武士を呼で、王陵が母を捕へ來れと下知すれば、武士共命を受て沛縣へ馳ゆき、家を圍で老母を生どり、次の日彭城へ歸りければ、項王自らその繩を解ゆるし、座上に請じて申けるは、南陽は朕が彭城と程近し、然るに汝が子王陵來て朕に事へず、却て遠き咸陽に在て逆賊の劉邦を扶く、是甚だ天の道に負けり、朕元より汝が賢貞なるを知、速に書簡を調へ、王陵を招き寄て永く楚に事へしめば、朕萬戶侯に封じ、子孫に至て富貴心の儘なるべし。王陵が母これを聞て、只首を低て言ず、沈吟して居たりければ、范增申けるは、此事まづ急に成べがらず、暫く老母を此所に留めおき、厚く恩を加へて養ひ玉へ、臣重て宜く計ふべし。項王之に從ひ、老母を彭城に捕置て、武士に命じて守せらる。

○樊噲擒二司馬印一

漢王は事故なく太公御一族を迎へ取玉ひ、今は心に掛る事なしと喜び、大小文武の大將を集め

多く旗を立て篝の光も絶ざれば、恐らくは伏勢あらん、必ず追べからず、主上久しく太公御一族を思ひ慕て寢食共に安からず、今幸に恙なく咸陽へ入ことを得玉ふ、是御邊の功莫大なり、片時も早く歸て御對面なし奉り、三年の御思を慰め申さんとて、申陽に別をなし、諸將と共に路を急で已に灞關まで到りければ、多くの軍民路の傍に拜伏し香を燒て迎へ奉る。太公大に喜び進んで臨潼に著玉へば、漢王自ら文武の大將と共に迎へ玉ひ、淚を流して宣けるは、不孝の子項羽が奸計に依て褒中に左遷せられ、久く定省の情を失ふ、今再び尊顏を拜することを得て歡抃の至に堪ず。次に又呂后幷に太子に見て、共に三年の情を述て限なく喜び、早く咸陽へ入玉へとて、士卒に命じて車を巾らせ樂を奏して迎へ玉ふ。太公車に召れ直に咸陽へ到り玉へば、城郭日に映じ旌旗天を掩ふて威風凛々たりしかば、大に感嘆して、何ぞ料らん、我子の此の如き身とならんとはとて、心中斜ならず喜び玉ふ。漢王乃ち立德宮を掃ひ清めて太公を入奉り、宦官數十人に命じて常に左右に侍しめ、呂后太子その外の御一族こと〴〵く禮を厚して養ひ玉ふ。去ほどに英布、鍾離昧は太公を捕ふること能はず、殊に若干の人馬を失ひしかば、力及ばず這々に彭城へにげ歸て事の樣を具に奏するに、項王大に怒り、王陵なに者なれば左樣の無禮をなすぞ。范增が曰、王陵は沛縣の人、老母に事て甚だ孝あり、昔南陽に兵を集て盜賊

漢の大將周勃、陳武なりしかば、大に喜び士卒を下知して、喊を造り鼓を打て、餘すな洩すなと戰ふたり。英布は數日遠路を追きたり、上下こと〴〵く疲れければ、三方の敵を防ぐこと能はず、散々に亂れて逃んとするに、又洛陽の申陽大軍を率して本道より掩殺し、十重二十重に取まいて一人も餘さじと揉たりしかば、英布いよ〳〵力極り、左に衝右に突ても出ること能はず。鍾離昧は後陣に備て追蒐しが、楚の勢の圍れて甚だ危き由を聞、急ぎ兵を二手に分て殺到し、勇を振て漢の勢を四角八方へ蒐散し、漸々英布を救ひ出して、且戰ひ且走る。此とき日すでに暮ければ、王陵も金を鳴して軍を收め、遠く退て陣をとる。鍾離昧は敗軍を一處に集め、英布に向て申けるは、敵は大勢なり、御方は小勢なるに、大に敗軍の後なれば、輕々しく敵しがたし。今宵月の明なるに乘じて密に引退んと欲すれども、又跡より敵の追來らんことを恐る、我一の計あり、此所に空しく篝を燒、多く旗幟を立て人ある體を見せば、敵必ず計あらんことを怕れて追來るまじ、然る時は御方全く無事に歸ることを得ん。英布然るべしと喜で、乃ち諸軍を下知して其夜に悉く退きぬ。次の日漢の細作急ぎ此由を注進しければ、王陵申けるは、英布昨日大に打負たれば、再び出て戰ふこと能はず、必ず密に引去んと思しが、今果して此の如し。周勃が曰、韓元帥つねに某等に命じて窮寇は追こと勿れと戒め玉ふ、殊に楚の陣を望み見に、

るを、英布追きたりて首をとり追立々々攻る程に、周吉、周利が三千の勢、一人も残らず討れにけり。日すでに暮ければ、英布山に傍て陣をとり人馬を休めて兵粮を使ふ。鍾離味が曰、英將軍の武勇今に初めぬことながら、今日漢の二將を討取玉ふは、古今未だ聞ざる所なり。英布が曰、もし足下の後陣を驅て進み玉ふにあらずんば、敵の勢なかなか破ることを得じ。鍾離味が曰、向に塵埃を擧て敵の勢多く集りたり、今夜もし夜討することもやあらん、其用心をなし玉へ。英布げにもとて、手分を定めて要害を守り諸軍終夜眠らず、五更に兵粮を使ひ、夜の明るを待て、飛が如くに追て行。王陵は太公を守護して路を急ぎ、山際の樹木滋りたる處に兵を少々のこし、多く旗なんどを立て疑兵をなしければ、英布、鍾離味も計あらんことを恐れて輕々しくは進み得ず。此に因て王陵やうやう落のびて、暫く人馬を休め居たる處に、追々人馳きたりて、昨日の合戰に周吉、周利勢つきて討死し、三千の兵も悉く殺されたりと告ければ、王陵大に驚き、角ては叶ふまじとて、取ものも取あへず、兵を下知して馳ゆき、已に二日を經て漸く洛陽も近くなり、少し心を安じけるに、忽ち後陣より楚の軍勢夥しく追來れりと報じて、早喊の聲地を動す。王陵事の急なるを見て、如何せんと周章さわぐ處に、忽然として山の後より一彪の軍馬殺出し、大將二人鋒を雙べて楚の勢に斬て蒐る。王陵驚て指あげたる旗を見に、

思ひ、日夜を分たず馳けるが、老少男女を作たれば、急に走ることを得ずして河南の商城を過る處に、後に馬烟を起てきたる者あり。王陵申けるは、追手の勢間近く來れり。我は太公を守護して落ゆくべし、周吉、周利は此に留て一軍し玉へ。二人一儀にも及ばず、我この處にて敵を支んと云まゝに、兵を下知して待蒐ければ、程なく楚の勢うづまき來り、英布、鍾離味大音あげて申けるは、逆賊早く太公を渡せ、汝が一命を扶べし。周吉、周利進み出て曰、われ漢王の命を受て太公を迎へ取、汝等なんの爲に渡せと云ぞ、强て求めば忽に首を取ん。英布大に怒り、斧を提て蒐ければ、周吉、周利むかへ合せて、一往一來五十餘合ぞ戰ふたる。時に楚の勢急に金を鳴して軍を收めければ、英布驚て引退き、今何とて金を鳴すぞと問に、鍾離味申けるは、遠く敵の後を望めば、馬煙を擧て來る者あり、恐らくは漢の伏勢ならん、況や敵の大將甚だ勇猛なり、如じ彭城へ歸て項王に奏し、重て計を運すべし。英布申けるは、已に此所まで來て空く歸るの理あらんや、縱ひ敵の勢重るとも何の怕かあらんとて、鼓を打て攻かゝる。周吉、周利怒て蒐出、殺氣天を突、黑煙を立て揉あふ處に、鍾離味又後陣を驅て急にすゝめば、英布いよ〳〵氣に乘りて周吉を馬より斬て落す。周利兄の討れたるを見て亂れ立ちて走りけるを、鍾離味とり圍で雨の降ごとくに矢を放つ。周利背をしたゝかに射られ、眞倒に落け

馳向ひ、家を圍で太公并に一族百二十人を擒にし、豐沛を離れて三十里ばかり歸る處に、茂りたる林の中より鐵砲ひゞいて、一彪の軍馬かけ出、大將三人馬を進めて、早く漢王の一族を渡さずんば悉く殺さんと呼はる。劉信怒て申けるは、我項王の命を受、太公を捕へて歸る處に、汝等なに者なれば路を遮て無禮をなす。三人の大將あざ笑ひ、無益なるに汝首を失んかと云て、馬を交て十合あまり戰ひ、劉信を一槍に刺殺し、楚の勢を追ちらして、太公を檻車より扶け出し、地に拜伏して申けるは、臣急々に馳きたりて幸にして見奉る、若半日おそく來らば、如何ともすべき樣なかるべし、是まことに漢王の洪福なり。太公問て宣けるは、三人の將軍いかなれば此に來て、老夫が危を救へるぞ。答て申けるは、臣は乃ち沛縣の王陵、これなる二人は、南陽の周吉、周利と申す者なり、漢王の命を受て密に迎へ奉ん爲に來りしに、天の助ありて今日この路に出合たり、暫くも留るべからずとて、夜を日に繼で急ぎけり。劉信が敗軍彭城へにげ歸て、具に事の樣を告、豐西の澤にて盗賊に出あひ、劉信討れて漢王の一族百二十人はみな奪ひ取れたりと云ければ、項王大に怒て曰、我彭城の近邊に豈左樣の盗賊あらんや、是は必ず漢の兵ならん、定て咸陽を指て走り行べし、急に追かけて擒にせよとて、英布、鍾離昧に三千餘騎を授ければ、二人卽時に打立ちて飛が如くに追かくる。王陵は追手定めて蒐んと

然る時は外に知るものなくして無事に咸陽へ引取ん、今もし遥々と此處より迎の勢を遣し玉はゞ、項王必ず聞知て急に奪ひ取こと候べし。韓信が曰、この計極て妙なり、御邊よく此事を成就せば、開國第一の功ならんとて、事の樣を漢王に奏しければ、漢王大に喜び、朕褒中に在こと已に三年、日夜父の事を哀み思ふ、王陵もし此事をなし得ば、朕何の患か有ん、心を安じて楚を伐べしと宣ければ、王陵拜謝して、漢王の書簡を請とり、商人の體に出立て、徐州を指て打立けり。此とき彭城には、項王兵を指向て、齊梁の兩國を攻させけるに、追々早馬きたり、西魏王魏豹、河南王申陽、ちか比漢に降て、近邊みな爭て服すと告ければ、項王大に驚き、范增を召て申けるは、齊梁久く我命に背を以て、此ごろ兵を遣して攻戰ふに、又西魏河南も漢に降る、況や韓信褒中を出てより、我地方七千餘里を侵し奪へり、我速に韓信を誅して、次に西魏河南を伐んと思ふは如何に。范增申けるは、今楚の諸大將、齊梁を攻て破ることを得ず、國々の諸侯楚を反て漢に心を通ず、然るに大王かるぐ〵しく咸陽へ向ひ玉はゞ、彭城空虛にして恐くは守り難からん、如じ沛縣へ人を遣し、漢王の一族を彭城へ迎へ取て人質とし、諸方に守の勢を緊して暫く齊梁の平定するを待、その後に漢王を伐玉へ。項王この義げにもと同じて、大將劉信に步卒千餘人を授け、沛縣へ行て漢王の一族を奪ひとり來れと下知しければ、劉信いそぎ

通俗漢楚軍談　卷之八

○王陵迎二太公一歸二咸陽一

漢王は咸陽に在て勢いよ〳〵盛なりければ、國々の諸侯風を望で來り服す。大元帥韓信諸大將を集めて申けるは、今漢の軍威日々に盛なれば、主上東に向て項王を伐んと宣ふ、然れども太公を始め奉て、御一族みな豐沛に御座あれば、常に慕ひ哀んで、密に咸陽へ迎へ取んことを欲し玉ふ、諸將いかなる計を成てか主上の御心を安ずべき。王陵すゝみ出て申けるは、某往日南陽に謀反して諸方の兵を招きし時、周吉、周利と云兄弟の者と深く交る。此二人力強く心剛にして、手下に二千餘騎の精兵あり、山林に深く藏れ、軍士に田苑を開かせて、無事なる時は耕作をなし、事ある時は軍士を集めて敵を破る、向ふ所勝ずと云ことなし、常に民を害せず里を亂さゞれは、數年の間人馬強壯にして、此ごろは二萬人に及ぶと申す、然れども義を守る者共なれば、人の頼む事を避ることなし、某今この兄弟の者を語ひ、密に豐沛へ行て太公御一族を迎へ來り、楚の勢もし追かけば、二人の者に防がしめん、元帥又兵を出して半途にて待受玉へ、

るに驚き、殿門に伺候しければ、漢王まづ張良が事の樣を奏するを聞て宣けるは、若先生の妙計にあらずんば、爭か一擧兩得して平陽洛陽を服すべきとて、左右に命じて申陽、陸賈を招せらるゝに、申陽乃ち階下に來て再拜す。漢王宣ひけるは、賢主洛陽を治めて威名遠く顯る、朕この故に張良を遣して好を結んことを説しむるに、幸に捨ずして許容せらる、朕深く久懷を慰するに堪たり。申陽奏して申けるは、陛下の聖德日に盛にして、天下の百姓父母を慕ふが如し、臣なんぞ心を盡して漢に服し、天の命に從はざらんや。陸賈傍に拜伏して懇入たる體なりければ、漢王近く召て宣けるは、人各その主あり、汝は本洛陽の人、すでに朕を辭して本國へ歸りたれば、安んぞ他人を扶るの理あらん、今日又申陽に從て來り見ふ、朕敢て罪を責ず、汝必ず愧ること勿れ。陸賈拜謝して申けるは、臣陛下に從て三年の聖恩を蒙る、豈片時も忘ること有らんや、然れども臣本國に歸り候へば、父母年老て棄離るに忍びず、戀々として覺えず日を送れり、罪誠に萬死に當れり、然るに鈇鉞を加玉はず、却て撫恤の恩を受、これ陛下天地の量覆育の仁なりとて退きければ、漢王大に酒宴を設て羣臣を勞ひ、次の日申陽に暇を賜ふて舊の如く洛陽へ歸し、陸賈を留めて韓信が麾下に屬玉ふ。

城の上には漢の赤旗を立て多の兵固く守り、灌嬰高櫓に立て呼りけるは、我張子房の計を受て已に此城を奪ひ取たり、來る者は誰人ぞ。申陽これを見ていよ〳〵驚き、張良は誠に神通の人なりと思ひ、後を顧れば張良すでに馬を早めて來り、城門を開せて內に入ければ、軍民安堵して靜なること平生の如し。申陽嘆じて申けるは、漢王よく人を用ること此を見て知べしとて、張良に從て進みけるに、灌嬰制して申けるは、輕々しく入玉ふこと勿れ、俄に取たる城なれば恐は人の心變を生ぜん、某すでに一陣を構て共に四方を守らしむ、大王は子房と共に此陣中に居玉ふべし。申陽ます〳〵驚嘆し、漢王此の如きの名將多ければ必ず天下を取玉はんとて、矢を折て誓をなし、大丈夫一言すでに出て何ぞ變ずること有んや、城郭すでに漢に屬す、諸公疑ひ玉ふなと云ける所に、城外に一手の勢來て陣を取たりと報ず、張良櫓より見れば、漢の大將周勃、柴武二人まつ先に馬を立て申けるは、軍師咸陽を出玉ひて已に二日になれども未だ消息なし、韓元帥もしは失あらんことを恐れ、某二人に三千餘騎を付て迎へさせらる、某すでに潼關まで來て、軍師の洛陽を取申陽を服しめ玉ふと聞て、驛馬を飛して五百里の路を一晝一夜に咸陽へ報じたり。申陽これを聞て大に驚き、門を開て迎へ入、酒宴を設て持なしければ、張良次の日申陽、陸賈を伴ひ咸陽を指て打立ける。申陽咸陽に入て漢の軍馬整々として文武の嚴然た

將樊噲なり、張子房の情にて汝が首は切ぬぞと呼はる。申陽膽魂を失ひ急に逃んとするに、伏の勢四方より圍で一人も殘さず擒にす、張良は山の間に陣をとり燭を燃して坐したるに、申陽を縛り來りければ、急に其繩を解ゆるし、拜伏して申けるは、漢王本より足下と力を合せ、項王を伐て天下の爲に害を除んと欲し、某を以て此意を達せしむるに、足下却て某を捉て項羽が方へ送んとす、此は某すでに計を定て足下の必ず此の如くならんことを推し、兼てより用意したることとなり、今陸賈哀で足下の命を救んことを乞、某この故に樊噲に命じて必ず殺すこと勿れと云り、漢王は有德の君項羽は强暴の獨夫なり、足下もし心を改て漢に歸せば、長く河南王の位を安じて富貴子孫に傳ふべし。陸賈すゝみ出て申けるは、大王必ず子房の勸に從ひ玉へ、若漢に歸し玉はゞ、御身長久にして富貴ならん、況や大王洛陽を出玉ひて後、子房かねて計を設て、大將灌嬰を密に洛陽へ遣し、已に城を攻取たれば、大王いづくへか歸り玉はん。樊噲必ず大王を斬んと罵しを、某さま〲に乞て救ふことを得たり、漢王は仁德の君なり、大王よく思ひ玉へ。申陽二人の言を聞て大に喜び、事の勢すでに此の如くなれば、我何ぞ漢に歸せざらん、暫く洛陽城に歸り、陸賈を咸陽へ遣して漢王に奏せしむべし。張良が曰、大王これより城に歸り玉へ、某も同く行て民を治め、其のち陸賈を伴て咸陽へ赴んとて、相伴て洛陽へ到るに、

にすれども、漢王は寛仁の君なるを知ずや、如何なれば申陽を勸て漢に降らしめず、却て楚に仕て敵を成んとする。陸賈申けるは、申陽素より楚の官爵を受て心專ら楚にあり、某このゆゑに先生を擒にして楚に送り、申陽明に楚に貳なきを知しめんとす。樊噲大に聲をあげて、申陽すでに先生を楚に獻て己が功を顯んとす、某も陸賈を漢王に獻て某が忠を顯ん、何の論にか渡るべきとて、陸賈を縛て馳歸る、始め洛陽の士卒は樊噲に斬散されて我先にと逃歸り、申陽に見て、我等張良を送て、洛陽を離れて五六十里行けるに、林の中に一手の勢まちかけ馬物具を剝んと呼る。郭麋怒て戰ひけるに、怕げなる大將たゞ一戰に郭麋を斬て落し、張良を奪取り、我等急に走りければ、彼つよき大將飛が如くに追來りて、又陸賈をも生どり去りと告ければ、申陽これを聞て大に怒り、其所に如何なれば強き人ありて此の如きの無禮をなす、我速に誅せんと云て、千餘騎を率して先の林の中を尋るに人ひとりもなし、所の者に尋ぬれば、今朝一手の人馬この所を馳通たりと申す。申陽猶豫して立けるが、陸賈が存亡を心許なく思ひ、洛陽の大路へ出たるに、商人と覺しき者五六人連て通けり。申陽馬を駐て汝等路にて箇樣の怪き人に遇ずやと問に、未だ遇ずと答ふ。申陽いよ〳〵怪み、馬を早めて五里ばかり來る處に、日すでに暮て、傍なる坡の下より一聲の鐵砲を響し、火把を振あげ一人馬を馳よせて、我は漢の大

樊噲受計擒申陽

樊噲

と好を結で其心を安ずべし。申陽限なく喜び、禮物を備て早々に打立せければ、郭靡と共に路を急で五十里ばかり出ける處に、忽ち鑼を鳴して一彪の軍馬路を遮り、眞先なる大將大音あげて、來る者は何の勢ぞ、誰を捉て此處を通らんとする、馬物の具を卸て渡さずんば、一人も生て通ることは叶ふまじきぞと呼る。郭靡怒て申けるは、欲心熾盛の山賊共、我は洛陽の大將郭靡なるを知ずや、今漢の張良を縛て彭城へゆく、汝もし耳目あらば、楚國の强大にしてわが河南王の勇を知ん、遲く退て頸を失ふこと勿れ。彼人大に笑て申けるは、汝鼠の輩みだりに楚國を强とし、申陽を勇ありとするか、我は小兒の戯と思ふなり、先汝が首を取んとて戟を舞して斬て蒐るを、郭靡迎へて二三合戰かと見しが、忽ち馬より斬て落されければ、相從ふ者ども周章騷で、張良をも打すて我さきにと逃走る。彼大將大音あげて、我は漢の樊噲なり、逃る者は一人も餘さず斬て棄んとて、急に追かけて了に陸賈を擒にす。張良林の下に坐し陸賈を引出させて申けるは、汝漢王に從て大恩を受ること三年に及べり、然るに今申陽を勸め、我を縛て項王に送んとするはなに事ぞ。陸賈が曰、わが漢王に從ふは、事の勢先生と異なることなし、先生の韓國を忘ざるは、某が魏を忘ざるが如し、然ればとて豈二心あらんや、先生は始終たゞ韓國の爲に讐を報ず、某も始終たゞ魏の爲に心を盡すのみ。張良が曰、汝みだりに言を巧

じて漢王の臣張良きたりて見えんことを求むと告ければ、申陽怪で陸賈に問て申けるは、今張良が來るは何故ならん。陸賈が曰、張良が來るは漢王の爲に說客をなし、大王を勸て漢に降らしめん爲なり、大王もし漢王に心あらば、張良が言に從ひ玉へ、もし項王に心あらば、乃ち張良を捉て項王に獻り玉へ、范增元より此人を惡めば必ず之を喜び、項王に薦て大王を重んずべし、是所謂る害一人而成大謀の道なり。申陽が曰、われ已に項王に仕ふ、今なんぞ漢に降らん。陸賈が曰、大王の心いよ／＼項王にあらば、某は此座を避ん、大王自ら張良に對面ありて、彼が言を開を待ず、急に武士を召て縛せ、彭城へ送て項王の御感に預り玉へ。申陽しかるべしとて張良を召入けり。張良久く門外に在て思けるは、箇樣に長僉議して時を移すは、必定陸賈が計にて我を害せんと企るなるべし、我料りしに違ずとて徐々と入りければ、申陽手に劍を提て殿上に座し、聲を擧て申けるは、張良こゝに來て漢の爲に說客を成んとするか、項王近ごろ詔ありて、張良が在所を知ものは速に生捕て彭城へ送り來れと觸らる、今思ざるに此に來れりとて、急に武士を下知して縛らせければ、張良言を出すべき樣なくあざ笑てぞ居たりける。申陽乃ち大將郭縻に士卒百餘人を付て、張良を彭城へ送らしむるに、陸賈が曰、郭縻が分としては項王に見て事を成こと能はじ、某も共に行て且は項王の齊梁を伐玉ふ消息をきゝ、又范增

漢王限なく喜び、名馬白璧の貢を受納めて、周叔に酒宴を賜しに、賓客の禮を用て飲食器用も皆漢王と一同なりければ、周叔心の中に思けるは、漢王は實に寛仁の長者なり、張良が云しに違はずと深く嘆服して、次の日暇を乞て歸んと云に、漢王手ら返簡を調へ、周叔に夥しく恩賞を賜ふ。周叔恩を謝して西魏に歸り、魏豹に見えて漢王の盛德を稱しければ、魏豹大に喜び返簡を披き讀に、其文に曰、

漢王手書拜付西魏王足下。邦聞王之名久矣。乃周畢公之裔、世爲賢王、德被魏土、誤爲楚屬、今知其非、幸蒙不棄、與漢結好、協力贊襄、以成王業。凡有謀猷、相賴輔翼、彊宇弘開、咸歸一統、懋著元功、魏基布展、帶礪山河、共享富貴、如有艱險、誓與爲助、王其鑒之。

魏豹見了て深く漢王の德に服し、此より西魏の要害を守て楚に反けり。

○樊噲受計擒申陽

西魏すでに漢に降りければ、張良又洛陽に行て河南王申陽を降さんとて、漢王に別れて打立けるが、密に樊噲、灌嬰を召て計を授け、三千餘騎を引て如此々々にせよと低語て、自ら從者五六人を引て洛陽へ赴く。此とき河南王申陽は、陸賈と國の政を議して居たる處に、外より報

曰、項王の人となりを察せずとは如何に。張良が曰、項王は人の小なる過を認て人の大なる恩を忘る、齊梁の兩國は恩ありて過なきに、今兵を起して之を伐、且も安きことなからしむ、我この國を見に、又無事なること能はじ。項王齊梁を平げて、勢に乘て此國に來らば、魏王なにの扶けを賴で防ぎ玉ふべきぞ、此大夫項王の人となりを察せざるなり。周叔答ふべき言なく、默然として居ければ、魏豹叱て申けるは、子房わが爲に長久の計を說、汝いかなれば無禮の言を出すぞとて、周叔を追退け、我子房を賴で漢に降らば、項王たとひ攻來るとも漢王の力を借て防べし、此久遠の計なりとて、降參の表を造り貢の用意をしければ、張良申けるは、大王の言まことに萬世の計なり。魏豹大に喜び、次の日周叔に表を持せ、貢を捧て張良と共に咸陽へ赴しむ。張良已に咸陽へ入て漢王に見え事の樣を奏しければ、漢王いそぎ周叔に對面ありて、表文を披き見玉ふに、

西魏王豹頓首稽首上言。派流支遠而終歸巨海、羣燕飛鳴而必棲梁棟、魏處西隅、未沾王化、仰聞漢德日升川至、制服三秦、而章邯受首、仁昭百粤、而齊楚畏威、天下歸心、諸侯順附、豹等願從王命、任爲驅使、土地人民皆屬統理、惟王鑒納、臣豹不勝佩服感戴之至。

王は寛仁大度ありて能人を用ひ玉ふ、某薦め申さば、必ず大王を重じ忠難相扶けて共に富貴を受玉ふべし。時に周叔屏風の後より踊り出て申けるは、大王必ず張良が言を聽入玉ふな、項王洩聞ば大軍を率して攻來らん、其とき何を以てか防ぎ玉ふべき、此遠きを思て近を忘るなり。張良これを聞て大に笑ひければ、周叔問て曰、先生なにを笑ひ玉ふぞ。張良が曰、われ大夫の强弱を知ず時勢を曉らず、項王の人となりを察すること能ざるを笑ふ。周叔が曰、强弱とは如何に。張良申けるは、秦の大將章邯は雍王に封ぜられて三秦を鎭守し、精兵二十萬を領す、之を西魏に較ば孰か强とし孰か弱しとせん、韓信一たび出て廢丘を攻とり、又章邯が首を斬て勢竹を破が如し、此を往日項王の九たび章邯と戰しに比せば、如何とか思玉へる、是大夫强弱を知ざるに有ずや。周叔が曰、時勢を曉らずとは如何に。張良が曰、天下に一定の時あり、又一定の勢あり、方に今時いまだ定らず勢も亦定らず、項王自ら强を恃で天命を曉ず、天下を圖ると云ども未だ其時を得ざるなり、關中に都せずして彭城に都す、諸侯に霸たりと云ども人の心を失ふ、未だ其時を得ざるなり。漢王は隆準龍顏雲氣ありて其上に現ず、芒碭に蛇を斬て神母夜なき、關に入とき刄に血ずして人の心みな服す、天下の時を得天下の勢を得こと只漢王にあり、大夫いま魏王を諫て、漢王に歸することを止るは、時勢を知ざるに有ずや。周叔が

漢王は大に悦び、速に張良を召て、韓信に引合せ、帥の禮を執て、張良を上座に請じ、宴を設け、心甚だ喜び、客の禮を以て酒宴をすゝめ、乃ち問て申けるは、今の世六國縱横漢楚地を爭ふ、先生の心を以ては何の國か能興らんと思へる、先生は深く世務を曉る、必ず興廢存亡の數を知り玉はん、ねがはくは我ために論ぜよ。張良が曰、もし天下の勢を論ぜば、漢は興て楚は亡ん、漢王は神母夜號五星相聚て天の祐る所あり、今三秦を定め咸陽を取て四方響の如くに應じ、兩月の内に五千餘里の地を得こと皆人望の歸する所なり、某は韓國の者なれども、漢王の咸陽に出玉ふと聞て、千里の遠を辭せず、速に行て見ることを求む、國々の諸侯も皆表を上て降を乞、齊の國梁の國は今勢強けれども心を傾て降り服す、某夜天文を見に、漢王の天下を取んこと必定なれば、今漢に服する人は、能天理を知時務を識ものなり、齊梁の大國も尚此の如し、況や其餘の諸侯をや、天人の應此の如なれば、漢の興るべきを知り、項王は強暴にして約に背て自ら霸王となり、諸侯を左遷し、義帝を弑して天下の人みな恨み叛く、今威強く力大なれども、楚は了に滅ぶべし、此賢愚を論ぜず、明に萬人の所レ知なり。魏豹これを聞て盃を捧て申けるは、先生の論を聞くに漢王決して天下に君たるべし、某いま項王の爵を受と云ども、孤立して長久なり難きを恐る、願くは心を傾けて今より漢に服すべし、先生わが爲に薦め導き玉へ。張良が曰、某素より大王の徳を慕て偶この國に來り見ゆ、大王もし漢に心あらば、漢

有べからず、大王急に齊を伏て又速に漢王を破り玉へ、漢王は心腹の患なり。項王此議げにもとて、急に兵を起して齊の國へ發向しければ、張良が使此由を聞て馳歸り、平陽の路に出て張良に逢、右の趣を告ければ、張良大に喜び、路を急で已に平陽の境に入ければ、山川の風景他國に替て地饒に民富り、乃ち魏王の宮門に至て、韓國の張良見えんことを求むと云ければ、西魏王魏豹これを聞て申けるは、張良いま何の爲にか來るべきぞ。大夫周叔申けるは、張良は說客なり、古の蘇秦張儀もその辯舌に及ばず、此は漢王の爲に來て說ものならん。魏豹が曰、彼もし說客ならば我寶劍あり、立どころに此狂士を斬ん。周叔が曰、張良は名天下に聞えて項王も亦誅することを得ず、大王たゞ禮を以て對面し、必ず其言を聽入玉ふな。魏豹げにもとて左右に命じて張良を迎へ入、禮了て申けるは、足下は漢王の臣なり、今なにとて此に來れる。張良が曰、われは素より韓國の臣なり、漢王往日暫く我を借て共に秦を伐、この故に秦を亡して後われ已に本國に歸れり、近ごろ漢王褒中より出て咸陽を取、又使を馳て累に我を招く、我世に望なき身なれども、漢王の仁德を念ひ、往昔知遇の恩を受しことを感じて、一たび行て對面し、相わかれて今本國に歸る、偶この國の路を通りて、大王の威名六國に重く路ゆく人も盛德を稱嘆するを聞て、我深く慕ひ仰ぐ、此故に一たび見えて渇仰の情を叙んと欲す。魏豹これを聞て

行天討以誅此僭亂凡庶民百姓亦當告諸天地人々可得而誅也今事人敬齋檄文早賜發兵會合諸侯共誅項籍無道明正其罪以讓有德天下萬民之幸也檄書到日早爲施行不宣。

とありければ、項王大に怒り案を打て申けるは、我田榮を齊王に封じ陳勝を梁王として、厚く恩を施す處に、却て妄に自ら尊大にして我に背て天下を圖んとす、我この間聞知と云ども虚説ならんと思しに、諸國へ檄文を傳てわが惡を披露し、兵を出して攻來んと料る、我速に平げずんば、大なる禍を惹出さん。范增申けるは、此は張良が詭の計なり、彼漢王と無二の心あり、往日大王に從て恩を受ると云ども皆彼が本心にあらず、漢王いま新に咸陽をとり、大王の急に兵を引て攻來り玉はんことを恐れ、詐て此計を用ひ、大王に先齊梁を攻させて日を延ん爲なり。項王の曰、いや〳〵張良は深く我に心あり、然れども多病にして世に望なし、何ぞ漢王を思て我を棄るの理あらん、今この事を告知すは、我往日の恩を報ぜん爲なり、我速に齊梁を伐て次に漢王を平ぐべし。范增申けるは、大王深く信じ玉ふな、張良は詐の計多し、然れども齊王田榮が謀反は久く隱なき事にて勢すでに大なり、大王いま咸陽へ向ひ玉はゞ、必ず急に來て彭城を攻ん、然る時は後に患ありて、大王爭か漢王に勝ことを得ん、剝床の患はまづ除ずんば

韓國司徒臣張良頓首、上言西楚霸王皇帝陛下。臣良蒙陛下不殺之恩、遣歸本國、得以營葬故土、優遊歲月、入山採芝、臨溪觀水、訪蓬萊於山洞、求眞丹於方外、仕途趦趄、無復前進、然雖遠處林泉、而此心未嘗一日忘陛下盛德也。近聞漢王欲召臣從事、臣力辭以疾、且無心於登涉久矣。豈獨一召不往、雖百召亦無往從之理。又有齊梁二國亦來召臣、臣亦堅志力辭、齊梁已知臣無心於功名矣、不復來召。其後有檄書傳至韓國、語言狂妄、意有圖天下之心。臣蒙陛下聖恩、既知鄰國作亂、安敢隱忍而不明言耶。臣料漢王見識欲得關中、如約即止、無復有東來之意。若齊梁二國傳檄各國、志不在小、深爲陛下後患。請即發兵屬意齊梁、制服其心、使無恐肆、則大事定矣。如或漢有他志、乃轉兵而西、一鼓可擒也、臣鄙見如此。惟陛下察焉。臣良不勝戰慄恐懼之至。

項王表を見了て、又齊の國の檄文を披き見に、

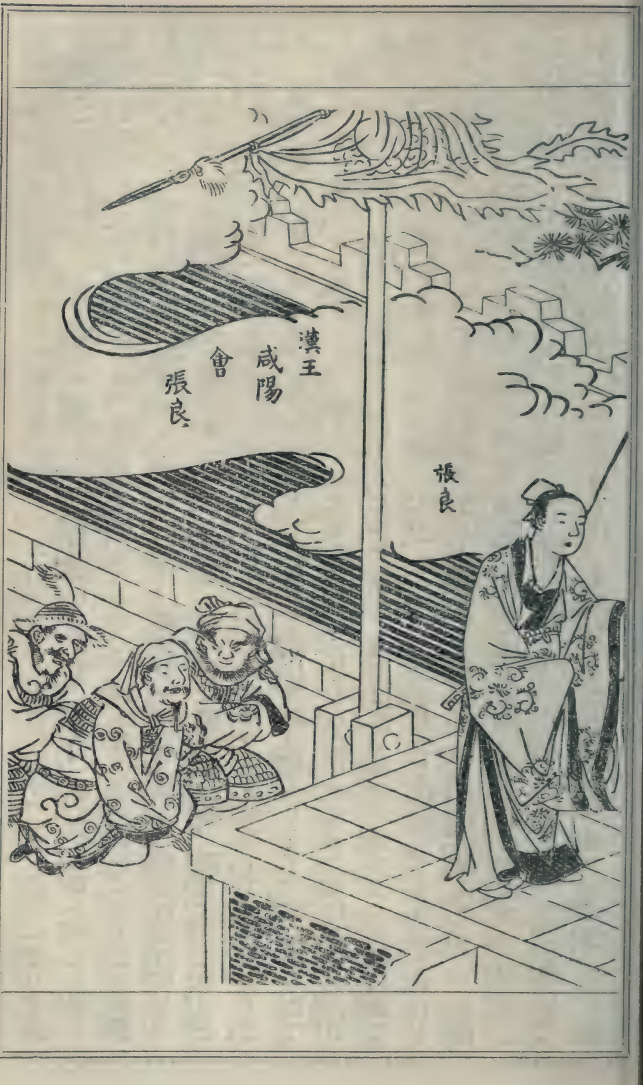
齊王田榮、梁王陳勝書拜諸王麾下。嘗聞天位以有德而居、至德以大公而盡、無德不足以居天位也、非公不足以盡至德也。項籍劉邦受懷王之約、先入關者王之、天下所共聞也。及劉邦兵不血刃而取關中、必如懷王之約、則劉邦當爲秦王矣。籍乃背約而左遷諸侯、大肆不道、陰弑義帝、既爲無德、又非大公、桀紂之流亡秦之續、非獨有國者、當奉

○張良説魏豹降漢

この時彭城には項王樂に耽て、漢の兵褒中より攻上ると告けれども、棧道やき絶たれば漢王いかゞして出ることを得んとて、事ともせずして居たりしに、追々早馬打て急を告ければ、救の勢を向んと議するに、或日又早馬きたり、三秦すでに破れて、咸陽は申すに及ばず數千里の地皆漢に降る。漢王いよ〳〵勢を得て、韓信を大將軍とし東に向て攻上ると注進しければ、項王大に驚き齒を切て申けるは、韓信胯夫なんの智惠ありて、我三秦を破り咸陽を取て漢王に威を震しむる、我卽時に打向て漢王を擒にし、胯夫を誅して恨を雪ん。范增申けるは、某しきりに薦て韓信を重く用玉へ、若用ること能ずんば、速に殺して後の患を除き玉へと申しに、大王聽玉はずして、韓信果して漢王に事て、今日此の如きの患をなす。項王あざ笑て曰、三秦王みな老革の鼠輩、咸陽にも能大將なくして皆韓王が爲に破られたり、然れども患とするに足ず、若わが大軍一たび向はゞ、漢王も韓信も悉く粉に成ん。時に外より人來り、只いま韓國の張良使を馳て表を上り、齊の國の檄文を送り來れりと報じければ、項王いそぎ使を召出して、表文を披き見に、表に曰、

る所に負ず、眞に漢王の洪福なりとて、又漢王の前に出ければ、漢王羣臣を悉く聚め、自ら盃を執て張良に酒宴を賜ひ、笙歌を奏して大に慶を述玉ふ。次の日軍の評定ありて魏豹、申陽いまだ服せず、陸賈行てより久く歸らず、楚の兵もし來らば如何すべきと問玉ふに、張良申けるは、陸賈が洛陽へ行しは、父母の故郷なれば一族に逢ん爲なり、何ぞ申陽に降參を說ん、況や魏豹は素より虛名を發して妄に自ら尊大なる者なれば、陸賈爭か說ことを得ん、臣願くは自らゆき、申陽、魏豹に逢て、機に隨ひ變に應じ、其心を鼓動して必ず漢に降らしめん、其のち韓元帥兵を引て東に向はゞ、天下つひに定らん。韓信申けるは、先生の妙計に有ずんば、申陽、魏豹いかでか漢に降るべき、陸賈が如きは、之に事よせて故郷へ歸らん爲なり。漢王宣けるは、先生昨日こゝに來て今日又遠く別ることは我心甚だ忍びがたし。張良が曰、天下いまだ定らず干戈紛亂の時、なんぞ安坐して食に飽ことを得ん、臣一の計あり、いま六國みな楚に叛て齊の國殊に盛なれば、表文を寫して項王を欺き、先兵を引て齊を伐しめん、臣その間に平陽洛陽へ行て利害を說ば、弓を張矢を放ずして、申陽、魏豹を降らしむべしとて、先表を作り使を彭城へ遣して項王に獻らしめ、其のち從者十餘人を引て密に平陽へ赴きけり。

申陽がねんごろに持成、久く一家を養ひ安じたる恩を思て言を出に忍ず、了に洛陽に留りて漢に回ることを忘れ居たり。この時咸陽には陸賈が回るを待て、申陽、魏豹が虚實を聞んと議せられけるに、久く回り來らざれば、漢王深く怪み玉ふ所に、張子房この比藍田に出て已に新豐まで來れる由、只今使を馳て告來れりと奏しければ、漢王手を打て、張良歸たれば我何をか患んと喜び、乃ち灌嬰、曹參を遠く城外へ出して迎へ玉へば、韓信も薛歐、陳沛二人に酒肴を持て出迎へしむ。程へて張良すでに朝門まで來れりと奏しければ、漢王殿を下て承德門まで立出、張良が來るを見て笑て宣けるは、久く先生に別れて我日夜慕ひ望めりとて、親ら手を取て入玉ふ。張良拜伏して申けるは、臣すでに大王に別ると云ども心は日夜大王の前にあり、往日漢中の路にて別るゝ時、臣關中に入て三の大事をなし、項王に都を彭城へ移させ、六國に說て楚を叛かせ、漢を興して楚を破る大元帥を尋ね出して、其後大王と咸陽にて出合んと約せしが、今日果して此の如し。漢王謝して宣けるは、朕先生の力に因て、再び咸陽に出ることを得たり、此功金石に銘して千載に傳ふべし。張良再拜して退き文武の諸大將に對面すれば、韓信近く寄て謝して曰、われ偏に先生の薦に因て漢王に重く用られ、今日つひに願ふ所を遂たり、身を終るまで盛德を忘れ候はじ。張良申けるは、元帥しきりに大功を建、威天下に震て某が薦


漢王咸陽會張良
張良

漢王

と限なし。父母語て申けるは、われ汝に別てより一日を送べき資も無りしに、河南王憐を垂て今に至まで飲食衣服を賜ふ、此に因て飢寒を免たり、汝速に朝見して供養の恩を謝せよ。陸賈是を聞て速に衣冠を整へ、行て申陽に見えければ申陽喜で申けるは、陸大夫往日漢王に從て西に向てより久く家に回ず、我共に事を議するものなくして日夜思ひ慕ふ處に、今日幸に逢ことを得たり。陸賈再拜して申けるは、某往日漢王に從て秦を伐、思ざるに漢王某を留て褒中に伴ひ行り、某又漢王の仁德あるを見て、棄に忍ず相從て三年を經たり、漢王近ごろ兵を出して三秦を破り咸陽を取、この故に某暇を乞て大王に見ん爲に來りたり、父母妻子久く大王の恩養を蒙る、某粉骨碎身すとも爭か此恩を報ずることを得ん。申陽問て曰、漢王の人となり如何なる人ぞ。陸賈答て曰、漢王は寬仁大度、人民爭ひ服して將士みな命を棄んとす、今韓信を元帥として三秦を定め咸陽をとる、四方の郡縣風を望で來り服す、眞に有道の君なり、必ず天下の主と成は此人にて候はん。申陽が曰、われも久く漢王の德を慕て、漢に歸せんと思へども、項王の威風強く盛なれば、若この由を聞ば、卽時に攻來んことを恐るゝなり。陸賈申けるは、漢王近ごろ兵勢大に振て、韓信計を用ること神に通ぜり、若漢の兵この處に來らば、速に出迎へて戰ひ玉ふこと勿れとて、其心初は申陽に利害を示して漢に降らしめんと思ひけるが、今

漢王往日早く咸陽に入玉へば、必ず關中の主たるべきに、項王强暴にして約に背く、我等日夜思ひ慕ひしに、今日又來り玉ふ、萬民の福なりと云て、簞食壺漿して喜びければ、漢王舊き宮殿を掃て暫く御駕を住め玉ふ。韓信文武の大將を引て拜禮了りければ、令を傳て民を安堵せしめ、酒宴を設て諸軍の勞を慰めらる。韓信奏して申けるは、咸陽破れたりと云ども、西魏王魏豹平陽に都し、河南王申陽洛陽に都して二人共に項王の命に遵ふ、項王もし兵を率ゐ來て此二人と會合せば、御方三方に敵を受て鋒を爭ひがたからん、料に咸陽の破たるを聞ば、項王急に來ること有ん、速に思案を運し、何卒奇謀の人を求て楚の爲に利害を說、項王に先齊の國を伐しむべし。今六國みな楚を背て齊の國殊に盛なれば、利害を說ば項王必ず齊へ向ん、臣その間に平陽洛陽を攻やぶりて、魏豹、申陽を御方となさば、關東こと〴〵く漢に歸して項王と衡を爭ふべし。漢王げにもと同じ、如何なる人か此謀を成ことを得んと宣ふに、中大夫陸賈すゝみ出て申けるは、臣往日陛下の西に向て秦を伐玉ふ時、洛陽にて初て見え相從て褒中に入、今に至まで已に三年、臣が父母妻子みな洛陽に在、臣ねがはくは洛陽に行て父母に見え、且は申陽、魏豹に利害を說て共に漢に降らしめん。漢王この儀然るべしとて、黃金十斤を賜て路の費を資玉へば、陸賈恩を謝して早々に打立、洛陽の舊宅に囘れば、父母妻子恙なくして對面し喜ぶこ

すでに打立て、密に涇滑の小路へ廻り覇陵の路に出て、彭城より來れる體に見せ、旗を眞先に進て咸陽に近付ければ、斥候の兵これを見て、司馬移、呂臣に告て申けるは、項王救の勢を向ふと覺て、覇陵の路筋より楚の旗幟を立たる勢しづ〳〵と來り候。司馬移、呂臣これを聞て大に喜び、矢倉にのぼりて望ば、其勢すでに城下に來り、われ等項王の命を蒙り、范亞父の計を受て、咸陽を救ん爲に來れり、速に門を開れ候へと呼はりければ、司馬移申けるは、救の勢ならば項王の信文あらん、試に見て門を開ん。呂馬通馬を打て城下に近づき符の札を與へければ、司馬移、呂臣考へ見に、紛なき項王の印ありければ、いそぎ門を開て迎へけり。呂馬通申けるは、後陣の勢いまだ來らず、待あはせて一度に入んとて暫く進ざる所に、日すでに暮に及で後陣の大勢馬烟を立て馳きたる。司馬移怪を成て申けるは、後陣の勢あまり大勢なれば、明日城へ入玉へとて、大音あげて後陣の勢しばらく住れと呼はりければ、眞先に進だる大將六七騎刀を舞して急に蒐入、番の者共を斬散せば、大軍喊を造て潮の如に攻入、司馬移、呂臣を忽に打取て、我は漢の大將樊噲、周勃なり、降る者は命を扶んと呼はるに、城中の勢聲を揃て、漢王は仁德の君なり、願くは降んと云。樊噲大に喜び、漢の赤旗を立て軍民を安じ、早馬を飛して漢王に報じければ、次の日御駕を促して城に入玉ふ。咸陽の百姓老たるを扶け幼を抱て出迎へ、

して防ことを得ん。呂臣が曰、早く夜を日に継で救を求め、我等小勢なりとも力を盡して城を守らば、范増定て計あらんとて緊く固て守りけり。去ほどに韓信は咸陽に近附て、先城中の様を候ひきかしむるに、城の守將司馬移、呂臣堅く守て出あはず、專ら救の來るを待と申ければ、韓信心に思ひけるは、咸陽の城廓は中々力攻にしては破ること能はじ、只計を用て速に取んとて、呂馬通を召て申けるは、汝漢に降てより何の功をも成ず、いま降參の兵を引て、汝が往日項王より得たる符の札を以て楚の勢に出立、彭城より救の勢きたれりとて、符の札を出して城門を開せよ、我伏勢を置て急に城中へ攻入ん、然時は咸陽を取こと皆汝が功なり。呂馬通が曰、元師の命我なんぞ背ん、然ども項王より得たる符の札は、ことく月日の不同あれば、如何して欺事を得ん。韓信が曰、酈生が陣に文士李眪とて左樣の物を改め飾に心きゝたる者あり、汝符の札を取きたれ、この者に命じて、信文を書改させんとて、急に李眪を呼よせて事の樣を告ければ、李眪札を見て月日の同じ樣に書改るに、儼然として分毫をも違へず。韓信限なく喜び、呂馬通に與て降參の兵千餘騎を授け、舊の如く楚の兵に出立て、涇渭の北より東南に向ひ、覇陵の路に出て咸陽へ到らしめ、又樊噲、周勃、靳歙、柴武に一萬の精兵を授け、呂馬通が跡より徐々と進せ、城門の開るを見ば、急に攻入て漢の赤旗を立よと下知をなす。呂馬通

れば、章邯前後を防ぐこと能はず、人馬散々に亂れて呂馬通、孫安等と十騎ばかりにて走りけるが、又漢の大軍に取圍れ命を限と戰ふ程に、箭瘡破て痛忍がたし、空く生取れて辱を取んよりはとて、自ら首を刎て失たりけり。此を見て季良、季恒等も亂軍の中にて打死しければ、呂馬通、孫安二人は馬より下て降人となる。韓信金を鳴して軍を收め、呂馬通、孫安を近く召て申けるは、汝二人漢に降る、是天命に遵なり、章邯早く降らば豈今日の死あらんや。孫安が曰、章邯勇を恃で某が諫を聞ず、了に今日の敗を取れり。韓信が曰、桃林の城には守る勢いか程かある。呂馬通が曰、城を守る勢五百人に過ず、其餘は皆百姓なり、我等門を開て迎ふべしとて、先に進で事ゆゑなく門を開せければ、韓信城中に入て民を治め、次の日降人を引て高奴に回り軍の樣を奏しければ、漢王大に喜び呂馬通等を重く用ひ玉ふ。韓信奏して申けるは、章邯すでに滅て後の患を除たれば、臣進で咸陽を取んとて大軍を率して進發す。咸陽を守る者は司馬移、呂臣二人なり。此間漢の兵三秦を取たりと聞、彭城へ急を告て救の勢を求ける所に、漢の大軍すでに扶風を過て攻來ると告ければ、城中の周章斜ず相議して申けるは、救の勢いまだ來ず、我等小勢なれば如何して戰ことを得ん、況や韓信計を用て三秦の強をも忽に攻とりたり、近ごろ咸陽の百姓漢王の來り玉ふと聞て、皆頸を延て父母を慕が如し、韓信もし攻きたらば、如何

して桃林へ推よせ、先章邯を誅して後の患を除き、其のちに咸陽を取て御駕を迎へ奉るべしとて、次の日曹參、周勃、柴武、辛奇四人の大將を伴ひ、一萬餘騎にて桃林へ發向す。この時章邯は箭瘡漸く平愈しければ、楚の救を待て廢丘を取かへさんと議する處に、韓信自ら攻來ると告ければ、諸大將に向て申けるは、韓信胯夫一旦の利にのりて尚止ことを知ず、こゝに來て戰んとす、汝等力を奮て此間の恨を雪めよ。孫安が曰、某よく思に只此城を堅く守り、救の大勢を待受て、其のちに出て玉ふべし、今かる〴〵しく戰はゞ、又胯夫が計に中ん。章邯が曰、我早馬を飛して救を乞こと數度に及ども、彭城路遠して項王の勢いまだ來ず、この陣もし漢の兵に圍れなば、力疲れ粮盡てこと〴〵く擒とならん、御方の利は急に戰ふにあり、遲滯すべからずとて、自ら呂馬通、季良、季恒、孫安等と五千餘騎を率して打て出ければ、韓信馬を進めて呼はりけるは、章邯すでに廢丘を失て猶われに敵せんとするか、速に降らば命を扶ん。章邯大に怒り胯夫快く我と戰はんやと詈て、馬を打て突てかゝれば、韓信が後より曹參、周勃打て出、火を散して戰ひ兩軍入みだれて鼓の聲天に震ふ。されども章邯が人馬漸々として疲れ弱り引色に成ければ、韓信下知を傳て短兵急に挫ぐ。章邯支こと能ず桃林へ退んとするに、辛奇、柴武兵を分て後の路を遮り、曹參、周勃前より進む。韓信いよ〳〵鼓を鳴して兵の氣を激しけ

たりければ、樊噲等申けるは、司馬公誤て楚に事ふ、其本心に非、いますでに漢王に歸す、ねがはくは元帥その罪を寛して舊爵に封じ玉へ、然る時は漢の爲に忠を盡ん。韓信乃ち武士に命じて縛を解せ、汝いまより前非を改て天道に遵へと云ければ、司馬欣再拜して恩を謝す。韓信先高奴城へ入て民を安じ、三秦すでに定たれば、此より咸陽へ攻入んとて、早馬を馳て漢王に奏しければ、漢王すでに廢丘を打立、櫟陽に三日逗留ありて百姓を賑し、其より高奴に入て韓信と會し玉ふ。

○漢王咸陽會張良

漢王高奴の城に入て民を安んじ、韓信が累に大功あるを見て、喜び玉ふ事限なく、近く召て、蕭何つねに元帥の大才を稱せしが、今果して如此と感じ玉へば、韓信申けるは、此臣が能にあらず、大王の天威に依て忽に三秦を平定することを得たり。漢王宣ひけるは、元帥すでに三秦を定たれば、咸陽は掌の内に在ん、いつか兵を進べきぞ。韓信申けるは、咸陽を取こと易と云ども、章邯廢丘を棄て桃林に陣をとる、漢の兵咸陽へ向はゞ、章邯又廢丘を取て險阻を守り、必ず御方兵粮の路を絕ん、然時は大なる患なり、大王暫く此處に在て郡縣を安じ玉へ、臣一軍を率

董翳を生取て後一同に彭城へ送り遣し、項王に獻ぜんとて降參の者を賞しける。次の日早天に董翳漢の赤旗を進て攻きたり、喊の聲を擧ければ、劉林、王守道打て出て戰んとするに、董翳申けるは、我汝等が相手にあらず、司馬欣に遇て一言を云ん。司馬欣これを聞て馬を一陣に出しければ、董翳罵て申けるは、汝天の時を知ず存亡を曉ず、項羽は子嬰を殺し秦の士卒を坑にして我ふかき仇に非や、我この故に漢に歸して汝を招く、汝いかなれば書簡をやぶり李芝を囚へ、昨夜叉董式を生取たるぞ、汝大言を放て、韓信を誅し樊噲を擒にせんと云り、今もし樊噲と唯一合戰ふことを得ば、我必ず馬より下て降人とならん。司馬欣大に笑ひ、汝早く樊噲を出せと云けるに、傍より一人臂をのべて、司馬欣を馬より取て引下し、大音あげて、我は是漢の大將樊噲なり、降ものは命を助んと云に、皆驚きさわいで地に拜伏し、ねがはくは漢に降んと云。劉林、王守道是を見て急に司馬欣を救んとするに、董翳前より攻かゝり、樊噲、柴武後より攻たりければ、殘り少に打れて我先にと逃走りけるが、劉林は樊噲に斬れ、王守道は柴武に生取れけり。諸軍司馬欣を縛て櫟陽に回りければ、韓信申けるは、項王は秦の仇人、漢王は秦に恩あり、汝は元來秦の大將なれば、漢王に從て楚を打時は、天理の當然に非や、然るに昨日董翳書簡を送て汝に喩せば、汝大言を放て無禮をなす、是いかなる道理ぞ。司馬欣首を低て默然

が樊噲を生取んと云し由を聞て、牙を咬で腹を立、急に進出て申けるは、某ねがはくは司馬欣と勝負を決し挈り來て一言の恨を雪ん。韓信が曰、御邊もし向んとならは、我ひそかに計を授んとて、耳を附て低語ければ、樊噲計を受、その夜董翳が陣に行て申けるは、我思ふに司馬欣は何とて甚だ無禮なる、足下の書簡を引やぶり、又李芝を獄に囚ふ、若早く生取て諸人に示さずんば、決して人の笑に遇ん。董翳が曰、われも深く之を恥とす、如何して司馬欣を擒にせん。樊噲が曰、若足下の近き一族を縛て、我等百餘人の兵と夜中に司馬欣が陣にゆき、降參の由を告ば、彼必ず眞なりとせん、次の日足下攻きたり玉ひて司馬欣と戰ひ玉ふ時、我等内にありて不意に司馬欣を生取ば、其軍主無してことぐく亂れん。董翳が曰、この計きはめて妙なり、幸に我長男董式は力の強き者なれば、これを縛てゆき玉へ、若他の者を遣さば、司馬欣疑ふ心あらん。樊噲大に喜び、その夜柴武と共に精兵百餘人を從へ、司馬欣が陣に行て申けるは、我等は原より楚の勢なるが、董翳に從て心ならず漢に降れり、然れども故郷を思ふ心しきりにして楚に回んと議する所に、董翳が長子董式が城を出て夜廻りするを見附、生取て此に來れり、ねがはくは舊に回て大王の手下に屬せん。司馬欣かぎりなく喜び、董式を引出させ、詈て申けるは、汝が父われと項王に事て王爵を受ながら、今なにとて漢に降れる、李芝と一處に囚置て、

馳レ書上聞、惟王鑒納。不宣。

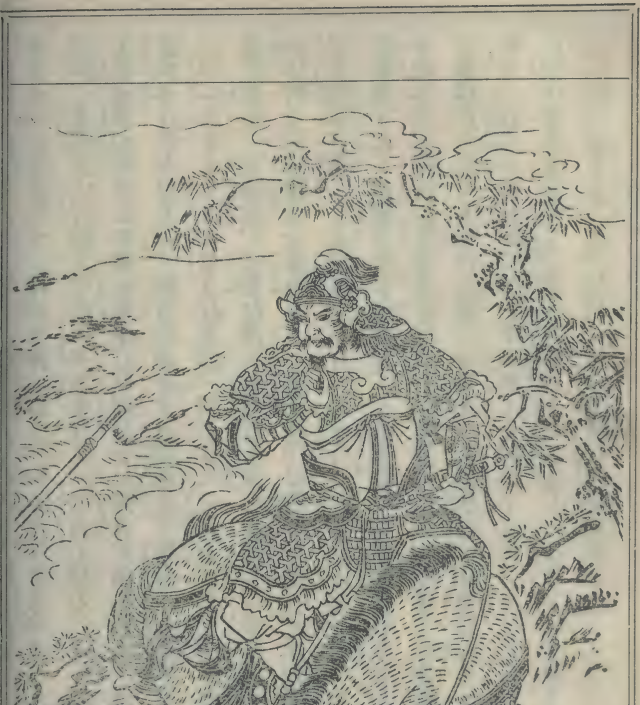
司馬欣見了て大に怒り、われ未一戰をもせずして、手を束て胯夫に降んことは、大丈夫の所レ爲に非とて、書簡を扯さき、左右に命じて李芝を追出させければ、李芝嘆じて申けるは、大王の兵數萬に過ず、大將は僅に三四人、いま章邯、董翳すでに破て此城外にたすけなし、項王遠く彭城に在て隣國みな漢に服す、況や大王、計韓信に及ず、勇樊噲に及ず、もし敗軍の後は家ありとも入がたく、國ありとも居ことを得じ、那時悔とも遲からん。司馬欣劍を拔て申けるは、汝は我を智勇なき人とするか、我いま樊噲を生取韓信を誅して後、又汝が首を刎ん。李芝笑て申けるは、大王漢の兵を破て、樊噲韓信を生取玉ふにも及ず、若漢の一陣を衝て一人の士卒を生取玉ふとも、必ず某が首を刎玉へ、某少も怨み候はじ、只恐くは大王一戰して韓信が手に入玉はん。司馬欣いよ〳〵怒り李芝を縛て囚へおき、劉林、王守道二人に一萬餘騎を付て先陣とし、自ら四萬餘騎にて後陣にそなへ、櫟陽を指ておし寄る。李芝が下部共逃かへりて董翳に見え、司馬欣が書簡を破り、李芝を囚て急に攻きたる由を告ければ、董翳この由を韓信に訴ふ。韓信笑て申けるは、量に無智の匹夫恰も砧の上の肉に似たり、我忽ちに生取ん。時に外より人來り、司馬欣五萬餘騎にて推よせ、此より五十里へだてゝ陣を取たりと告ければ、樊噲さきに司馬欣

ば、韓信申けるは、御邊もし忠功あらば、決して封王の賞あらん、今一言あり御邊に告ん、塞王司馬欣高奴の城にあり、漢の大軍せめかゝらば、定て城を出て防戰はん、凡そ人を勞し衆を動すは、兵の善者にあらず、願くは御邊書簡を以て司馬欣に降參を勸玉へ、漢王必ず舊官を安じて重く用玉ふべし。董翳が曰、元帥まづ城中に入て民を安じ玉へ、某が大將李芝と云者を高奴へ遣し、司馬欣に利害を說て招き降らしめん。韓信然べしとて、兵を進て櫟陽に入んとすれば、門の上に降旗を立て百姓みな香を燒て出迎ふ。韓信法を出して民を治め、固く軍勢の濫妨を戒ければ、百姓安堵して喜ずと云ものなし。董翳は李芝を使として高奴へ赴かしむるに、塞王司馬欣この比漢の勢向ふと聞て、城を三十里出て待かけたり。李芝陣中に入て對面し、董翳が書簡を獻ければ、司馬欣ひらき見に、其書に曰、

翟王董翳再拜塞王麾下。秦惟無道、諸侯離散、楚兵西來、勢不可敵、此時從雍王之命、率兵歸降、寔出不得已也。方今漢王寬仁大度、天下屬心、初約入關當爲王、後楚背盟左遷南鄭、天命靡常、惟歸有德、起自東征、所向無敵、韓信用兵彷彿孫吳、明脩棧道、暗度陳倉、智取散關、水淹廢丘、席捲而來勢如破竹。某順天意、昨已投降、蒙款以賓禮不失王爵、恐王孤立終難自保、唇齒之邦互相寒暖、同舟共濟患難爲命。茲差幕賓李芝

ひけるが、樊噲勇を奮て耿昌を斬て落す。吳倫是を見て驚き怕れ、馬を打て走りければ、韓信大軍を驅て掩殺するに、董翳一萬餘騎にて來り救ふ。韓信救のかゝるを見て、人馬を一處に屯しければ、董翳すゝみ出て申けるは、雍王あやまりて廢丘を破られ、汝胯夫みだりに志を得たり、我もし急に兵を起さば、汝はとく擒とならん。韓信笑て申けるは、汝は章邯が僕なり、我一戰して章邯を誅す、汝なんぞ妄に大言を放つぞ。董翳きゝもあへず槍を撚て突てかゝるを、韓信戟を舞して五六合戰ふ時に、樊噲、周勃馬を打て又左右より進ければ、董翳力及ず馬を返して逃わしるに、漢の大將辛奇、灌嬰二人兼て韓信が計をうけ、三千餘騎にて櫟陽の東の小路より董翳が後へ廻り、鼓の聲地を動し、四方より團々として取まきければ、董翳死を奮て圍を出、只一騎城下まで走けるに、漢の大軍又とり圍て聲々に早く降れと呼はる。董翳事の諧ざるを見て馬より飛おり、我勢究り力盡たれば、願くは漢に降んと云に、諸軍終に韓信が前に縛り來る。韓信自ら繩を解て上座に迎へければ、董翳拜伏して申けるは、亡國の俘不殺の恩を蒙る、豈元帥の重禮を煩さんや。韓信が曰、御邊は秦の名將、楚に事て王に封ぜられ、今非を改て漢に歸す、三軍鋒鏑の禍を免れ、百姓安康の福を蒙る、已に漢の臣なれば、何ぞ我と高下を分ん。董翳其志を感じ、某楚を棄て漢王に降る、一命を棄て元帥の命に從んと謝しけれ

韓信
定計
取
三秦


韓信

參兵を引て出去れり。韓信本陣に囘て、御方の勢を皆高き所へ移ければ、章邯これを怪く思ふ所に、忽然として四方より大水出きたり、勢山の碎るごとく城中に衝入ければ、人馬あわて亂て隨波逐浪死する者數を知ず。章邯は大に驚き、諸大將と千餘人を引て北の門より泳ぎ出、這桃林へ走りければ、韓信山の上より望見て、曹參に命じて塞とめたる水をきり流させ、半日の間に水こと〴〵く退きければ、城中に入て民を安じ、漢王を迎へ奉るに、近隣の郡縣爭て來り降る。司馬欣、董翳は漢の兵廢丘を攻ると聞て、救の勢を向んと議するところに、韓信囊沙の計を以て廢丘を水攻にし、雍王すでに桃林へ走て、漢の大軍廢丘を取たりと告ければ、翟王董翳大に驚き大將李芝を召て、韓信すでに廢丘を破て勢甚だ隆なり、この處人馬多からざれば、恐くは敵すること能はじ、先高奴へ使を馳て塞王司馬欣と力を幷せ、次に彭城へ早馬を飛して、項王に救を求べしと云ける所に、漢の大軍すでに劉家鎭まで推よせて、この城までは百里ばかりなりと告ければ、董翳まづ大將耿昌、副將吳倫に一萬餘騎を付て城外五十里に陣を取せ、自ら一萬餘騎にて三十里出て後陣にそなふ。去ほどに韓信大軍を進て櫟陽に推よせ、向に敵の陣あるを見て、漢の天兵向ふ所敵なし、汝等なんぞ降ざると呼はりければ、耿昌、吳倫大に怒て打てかゝる。韓信が後より樊噲、周勃馬を出してむかへ合せ、火を散して二十餘合戰

あらば、却て敗を取んとて、金を鳴して退けり。

○韓信定ㇾ計取㆓三秦㆒

章邯のこり少に打れて廢丘へ逃入しに、箭瘡以の外に苦痛しければ、四方を固く守て出て戰ふことなし。次の日韓信大軍を進て攻きたり、先向ひ城を構て諸大將一方一方を請とり、鐵砲火箭を打かけ、息をも繼ず攻けれども、此城四方みな大山そびえて、白水の大江麓を遶り、天下無雙の要害なれば急に落べしとは見ざりけり。叔孫通、張倉、二人韓信に見て申けるは、廢丘の守固して攻れども降ず、もし司馬欣、董翳等三秦の大軍を催して力を援けば、彌やぶること難からん、元帥ねがはくは計をなし玉へ。韓信が曰、われも亦この心ありて已に計を定たり、三日の内に必ずこの城を破べしとて、夜に入てひそかに曹參を伴て高き山に上り、この城麓に白水の流あり、西北より出て城の東南を繞る、御邊千餘人の兵を率て嚢に砂を盛て水の口を塞とめ、今八月の半なれば、秋水の漲を待て急に切て流し、又東南の河口に砂嚢を積で其水を遮ば、水の勢急にして直に城中へ流入べし、況や四方の切崖みな山石を以て疊あげたれば、水の勢に衝れて忽に倒れ破ん、然時は城中の勢みな魚腹の内へ入んと云ければ、曹

陣に到らざるに、樊噲、柴武三千餘騎にて待かけ、四角八方へ切ちらす、呂馬通、孫安は南の門より出けるが、半途にて孫安馬を駐めて申けるは、韓信この比驕り怠れる體を見するは、恐くは計ならん、我かるぐ〳〵しく進まば、却て其計に中ん、不如しばらく此處に陣を取て、密に御方諸方の合戰を伺はせ、明に漢の兵の備なきを知て攻かゝらば、我等必ず勝ことを得ん、若諸方の御方打負なば、我等は廢丘の本道へ出て追かくる敵を防で、御方の敗軍を救ふべし、御邊いかゞ思ひ玉ふぞ。呂馬通が曰、雍王われ等に命じて、漢の怠れるに乘て急に三方より攻合せんと云玉へり、然るに此處に留らば軍令に背の罪を得ん。孫安が曰、大將たるの道は、能計を運して彼を知己を知を本とす、我料るに韓信が兵を用ふる事、豈往日の武信君が比ならんや、呂馬通げにもと同じて、且く進まざる處に、追々早馬きたりて、漢の兵備ありて寄手みな打負たり、早く本道へ出て雍王を救ひ玉へと呼りければ、さればこそわが料りしに違ずとて、急に廢丘の路へ出けるに、漢の大軍急に追かけて章邯すでに危かりけるを、生手の勢三千餘騎道を遮て防ければ、漢の兵すゝむこと能はず、韓信救の來るを見て、急に兵を收めければ、大將張倉問て申けるは、章邯力つきて散々に走る、速に追て生捕べきに、纔なる救の勢を見て退玉ふは何事ぞ。韓信が曰、窮寇は追こと勿れと云り、況や夜ふけて地の利便あらず、敵もし伏勢

信が能にあらず、今日すでに其能を見る、何の疑ふことかあらんとて、諸大將の手配を定め、今夜漢の陣を刧すべし。季良、季恒二人は三千餘騎にて北の門より漢の左備に攻かゝれ、呂馬通、孫安二人は三千餘騎にて南の門より漢の右備に攻かゝれ、我は一萬餘騎にて西の門より漢の中軍を刧すべし。章平は耳の瘡いまだ痊ずんば、留て此城を守れとて、日の暮を待居たり。韓信は兼て章邯が漢の兵の驕り怠れるに乘て夜討せんことを料り、樊噲、柴武二人に三千餘騎を付て北の陣を守らせ、夏侯嬰、周勃に三千餘騎を付て南の陣を守らせ、中軍の兵を皆陣の後に出し置て、辛奇、靳歙二人に五千餘騎を授て中軍の左に伏せ、灌嬰、盧綰二人に五千餘騎を付て右にふせ、敵の退くを見て急に出よと約をなす。此をば知ず章邯は漢の兵の怠れるを打んとて、夜の二更に城門を開き、枚を啣で三方より打て出、章邯まづ漢の中軍へ推入けるに、人ひとりも見ざりしかば、扨は敵の計ありとて急に退き出んとすれば、忽ち合圖の鐵砲を響す程こそあれ、陣の後より漢の大軍打て出、引包で箭を放つこと雨の如し。楚の勢散々に亂れて七斷八續死する者數を知ず。章邯諸大將に扶られて漸々圍を出けるに、又中軍の左右より二手の勢打て出、喊を造て蒐たりければ、章邯命を捨て戰しに、右の肩をしたゝかに射られて、已に馬より落んとしけるが、這々にして逃のびたり。季良、季恒は此の門より出けるが、未だ漢の

檢するに、纔か二千餘騎に打あまされ、額を焦し手足を爛かさぬ者もなかりければ、章邯後悔して已ず、手分を定て固く城を守せ、櫟陽高奴へ早馬を飛して、司馬欣、董翳に救を求む。時に漢の大軍潮の如に攻きたり、城を圍で樣々に罵り辱めければ、章邯これを聞て大に怒り、我秦の大將として威六國に振ひ、今位雍王に封ぜられて三秦を鎭守す、然るに胯をくゞりし韓信に辱められて、門を閉て出ることを得ず、我何の面目ありて天下の人に向ん、早く門を開け、打て出て雌雄を決せんと云けるを、季良諫て申けるは、此は韓信罵り辱て大王の怒を發し、自ら打て出玉ふを待の計なり、たゞ堅く守て人馬を養ひ、救の來るを待て一度に伐玉へ。章邯なほ怒やまず、牙を咬で立たるに、鐵砲の聲絶ず、士卒報じて漢の勢我等が出ざるを欺き、或は馬より下て地に睡り、或は赤裸に成て詈り辱め候と告ければ、急に矢倉に上て見に、漢の兵人なき所に居が如く地上に伏て惡口しけり。章邯諸大將に申けるは、韓信昨日の戰に勝て驕り惰れること、以前の武信君、項梁が定陶にて我に討れし時の如し。季良申けるは、韓信が兵怠り倦で備なし、是兵法に忌ところなり、一夜討して滅し玉へ。孫安すゝみ出て申けるは、いや〳〵韓信は詐の計多き者なり、今怠たれる體をなすは楚の兵を欺くならん、侮て夜討せば却りて其計に落入べし。章邯が曰、昨日は我餘りに勝に乘しゆゑ、彼が計に中れり、韓

て出べき樣もなかりけり。章邯いかゞせんと身を揉ところに、季良、季恒走り來り、此なる山の腰に細路あり、鳳嶺に出べしと告ければ、馬を乘棄岩に取ついて三人つひに鳳嶺まで退き、大息ついで休けるに、喊の聲頻に起て火滿山に燒ければ、この處に住るべからず、我等三人馬物具を捨たれば恐くは擒にならん、路を求て回んとて、遙に灯の光見ければ、此を指南に尋ゆくに、人家三百餘宇相つらなりたる里あり、夜深方の事なれば門戸を閉て人音もせず、傍なる岡に舊き社ありければ、三人この内へ入て休ところに、遠く人馬の聲して出來る敵の勢ならんかとて密に聞ば、御方の兵兵の尋來れると覺て、敵谷の口に火を掛たれば進むべき樣なし、雍王恐くは亂軍の中にて亡玉はんなど物語しければ、季良走り出て見るに、士卒みな火把を持て眞先なるは楚の大將呂馬通なり。大に喜で雍王この社に居玉ふと云ければ、呂馬通馬より下て章邯に見ゆ。章邯問て曰、汝いかゞして此に來れる。呂馬通が曰、大王の勝にのりて漢の勢を追玉ふを見て、章平某に向て、韓信は詭の計多き者なれば、恐くは失あらん、一軍を馳て救べしと云り、某この故に千餘騎を引て出けるが、半途にて火の起を見て、大王の已に計に中り玉ふを知、谷の内へ入んとすれども進こと能はず、西南に向て雙岔の口より尋來れり。章邯大に喜び、社を出て廢丘へ回るに、又章平、孫安兵を引て尋來る。共に廢丘へ回りて兵を點

ぞ我に敵すべき。章邯いよ〳〵怒り、馬を飛して突てかゝれば、夏侯嬰又十合あまり戰ひ、松林の小路を指て逃わしる。章邯急に追かけ林の中を過る時、馬烟を揚て韓信が勢打て出、韓信こゝに在て久く待、速に降れと呼りければ、章邯笑て申けるは、胯をくゞりし夫こゝに在は、可惜首を失ん爲かとて、槍を撚てかゝれば、韓信戟を舞して五六合戰ひ、馬を打て逃走る。章邯馬を驅て追かくるに、跡より季良、季恒二人三千餘騎にて馳きたり、章邯を諫て申けるは、韓信いつはり負て敵を引、かるぐ〳〵しく重地に入べからず。章邯笑て曰、われ只漢の兵の盡く來んことを願ふ、一人ものこさず殺盡さん、御邊二人も力を極て攻かゝれ。時に士卒來て申しけるは、韓信あまりに追れて澗の中へにげ入れり。其外夏侯嬰と聞えしも赤裸に成て落失たり、急に追かけ玉はゞ、盡く生取にせん。章邯これを聞て長嘆し、胯夫まさに我に殺さるべし。進や者共と下知して、山際へ追て入けるに、山谷の際樹木生茂て敵ひとりも見えず。日すでに暮に及で、楚の大軍谷の口に馳あつまりければ、章邯急と心付て急に後陣より退かんとするに、競ひ來れる大軍なれば、紛亂して時を遷ところに、山の上に鐵砲ひゞいて四方より火もえ出たり。章邯大に驚き急に馬を取てかへせば、人馬上を下へかへして、我さきにと逃るほどに、踏殺さるゝ者數を知ず、僅なる谷の口を、敵又投火把を雨の降ごとくに投下ければ、火草木に燒付

を用ること三十餘年、量に胯夫なんぞ畏に足んとて、兵を引て出んとするに、漢の大軍すでに近付、先鋒夏侯嬰と云者、廢丘を二十里へだてゝ陣を取たりと申す。この時夏侯嬰は廢丘を指て攻かゝる所に、章邯打て出ると告ければ、且く陣を取て相待に、韓信兵を引て出きたり。夏侯嬰に低語けるは、章邯は秦の名將なれば、力を以て爭がたし、只計を用て擒にすべし、御邊もし戰はゞ、如此計にし玉へとて計を敎ければ、次の日兵を引て推よするに、章邯半途に出むかへ、大音あげて申けるは、漢王褒中に封ぜられて宜く分を守るべきに、如何なれば胯夫が言を聞て境を侵せる、早々に回らずんば、一人も生ること能はじ。夏侯嬰笑て申けるは、義帝始め約して早く關中へ入者を王とすべしと宣へり、我漢王刄に血ぬらず、子嬰を降して關中を定玉へば、天下の主となり玉べきに、項羽みだりに强暴を恃み約に乖て王となり、剰へ義帝を弑して大逆無道天下みな牙を嚙、この故に今仁義の師を出して無道を伐、汝早く頸を洗て刀を受べきに、陣前に出て舌を動は何ごとぞ。章邯大に怒り槍を撚て突てかゝれば、夏侯嬰刀を舞して十合あまり戰ひ、いつはり負てにげわしる。章邯兵を驅て追ければ、夏侯嬰山を遶て岡の上に馬を立、章邯再び我と快く勝負せよと呼はりければ、章邯あざ笑て申けるは、汝は敗軍の將、勝負と云こそ可笑けれ。夏侯嬰が曰、汝は年老て革ばがりなり、力すでに衰たれば、如何

○韓信火攻破二章邯一

散關の早馬しきりに打て、漢の大軍關を攻ること急なり、速に救の勢を向らるべしと告ければ、雍王章邯廢丘に在りて大に驚き、我棧道の未完からざるを以て、漢の兵いづること能じと思しに、何ぞ料ん、今散關を攻んとは、事すでに急なり、櫟陽高奴へ早馬を飛して董翳、司馬欣に報ずべしとて、手下の大將呂馬通、孫安等と馬を催ところに、章平耳を割れて只一人來り、涙を流して地に拜哭しければ、章邯色を失て、散關すでに破れたるか、漢の兵いかゞして棧道を越たるぞと問に、章平備に周勃、陳武が詐て降り、韓信が陳倉道より出て、内外より散關を攻取たる由を語ければ、章邯頭を掉て申けるは、范增兼て項王を諫て、韓信いまだ時に遇ず、若重く用る人あらば、必ず大なる憂をなさんと云しかども、項王更に用玉はざりしが、今果して此の如し、汝こゝに在て瘡を養へ、我此胯夫を誅して其恨を雪べし。諸大將止て申けるは、韓信は詭の計きはめて多し、必ずかるぐ〵しく敵すべからず。章邯嘆じて申けるは、我兵

べし。韓信が曰、散關已に破れたれども、三秦なほ怠て備なし、陛下且く此處に留玉へ、臣速に廢丘へ攻蒐り、先章邯を擒にして不日に三秦を定べし、陛下は使を馳て蕭何に兵粮を出させ、又人夫を増て早く棧道を造せて往來を快し玉へ。漢王げにもと同じて且く散關に留玉へば、韓信まづ章平を引出させ、其耳を割で廢丘へ放ち歸しむ。是は章邯に十分怒を發さしめん爲なり、乃ち令を傳て夏侯嬰を先鋒とし、辛奇を副て一陣に進せ、樊噲を二陣に備て力を援させ、直に廢丘を指て殺奔す、是所謂る明修棧道暗度陳倉なり。古より兵を用る者多しと云へども、二十日より内に散關を降すこと誠に比類なき樞要、韓信が東征第一の功なり。

周勃陳武取散關
樊噲
樊噲
韓信
辛奇

陳武
周勃
章平

んと呼る。章平是を聞て矢倉に上れば、姚龍、靳武百餘人の士卒を引て傍に立つ。韓信鞭を揚て申けるは、項羽無道にして暴虐をなし約に背て自ら位を竊み、却て義帝を弑したれば、天下の人みな齒を切る、今漢王兵を起して罪を正す、汝なんぞ手を束て降らざる、若關を閉て天兵を防ば、我立どころに首を刎ん。章平大に怒り、我は雍王の一族にして此關門の守たり、豈汝が如き胯夫に降らんやと云ける處に、傍に在ける姚龍、靳武急に章平が髻を取て引ふせ、即時に縛て門を開せければ、關上の軍士大に驚き騒ぐを、相從ふ百餘人の兵刀を拔て防ければ、救んとする者なし。姚龍、靳武大音あげて、漢王は仁德の君なり、天下こと〴〵く心を歸す、速降らば命を扶けんと云に、皆拜伏して降人となりければ、大に關門を開て漢の兵を迎へけり。元來この姚龍、靳武と申は、兼て韓信が計にて假に棧道を造らせ、詭て散關へ降參させたる漢の大將周勃、陳武二人なり。韓信內に入て五千の降人を懷け安じ、章平を引出させて申けるは、汝は章邯が一族、楚に事て妄に天兵を拒む、我いま首を斬んと思へども、料るに汝は癩狗の輩、我刀を汚すに足ずとて、且く軍政司に命じて囚へ置しめ、漢王の大軍來れりと告ければ、急に諸大將を引て出迎ふ、漢王散關すでに破れぬと聞て限なく喜び玉ひ、諸大將の拜禮了て宣けるは、散關は三秦の要害、將軍力を費さずして取ことを得たり、三秦これを聞ば膽魂を失ふ

かる。章平膽魂を失ひ、姚龍、靳武に向て申けるは、事すでに急なり、早く三秦王に告て救を求め、我まづ打て出て一軍せん、汝二人は堅く四門を守て敵に襲るゝこと勿れ。姚龍申けるは、少も怕れ玉ふな、某つねに人夫千人を分て、晝夜四方を巡らしむれば、何ぞ敵に襲はるゝこと有ん。章平喜び、自ら三千餘騎を引て關門を開きければ、樊噲大音あげて申けるは、章邯、司馬欣、董翳三人秦の士卒二十萬を誘て項羽に殺させ、みだりに三秦王となりて富貴を貪る、今天兵すでに來れり、汝早く門を開て降らずんば、一々に首を刎ん。章平笑て申けるは、漢王すでに褒中に封ぜられて心なほ足ず、妄に兵を出して命を失んとするか。樊噲大に怒り刀を舞して打てかゝれば、章平槍を取て迎へ合せ、戰ひ二十餘合にして叶ずして逃かへる。樊噲のがさじと追蒐れば、辛奇兵を驅て續て進む。章平殘り少に打れ、關門を閉て防ぎければ、樊噲兵を下知して鐵砲火箭を打かけ、息をも繼ず攻れども、要害堅固にして破るべき樣なし、時に元帥の勢來れりと告ければ、樊噲、辛奇出迎へて軍の樣を語るに、韓信山に登て四方を望み、章平すでに我計に落たりと心中密に喜て、大軍を手配して一度に火箭を射かけ、或は十餘座の風火砲を構て一齊に放ち掛たりしかば、山くづれ崖破れて城中の者共震ひ戰く。章平いよ〳〵驚き怕れ兵を下知して堅く守りければ、韓信自ら馬を出し大音あげて、關を守る大將に一言を云

○周勃陳武取二散關一

散關には大將章平少も用心することなく、姚龍、靳武に軍中の事を任せおき、時々人を出して棧道の樣を伺ひ聞しむるに、此ころ漢の大將孫興と云もの、樊噲と代て棧道を造る。人夫次第に減じて悉く疲れ苦と告ければ、姚龍申けるは、漢の兵出ると云は皆虛說ならん。靳武が曰、襃中よく治りて漢王心の儘に樂に耽る、豈遠大の志あらんや。章平笑て申けるは、さぞ有ん、我まづ漢王のかるぐ〵しく韓信を用て大將軍とするを見に、人を知ざること明なり、況や三百里の棧道を造るに、彼が如き人夫を用て、何の年にか完きことを得ん、漢王たとひ攻來とも我畏るに足ずとて、每日酒を飲で居たりしに、忽ち早馬來て只今漢の兵何くより出たるを知ず、此より五十里を離れて、大軍野にも山にも滿々たり。先鋒樊噲と書たる旗まつ先に見えて、五萬餘騎にて攻かゝり候ふと呼はりければ、章平大に驚て曰、漢の兵いづくよりか出たるぞ。姚龍、靳武申けるは、恐らくは傳る者の誤にて候はん、棧道未だ完からざるに、漢の兵いかがして來るべき、推量するに樊噲棧道を造て苦み疲れ、逃來て御方に降るならん、再びよく虛實を見て、其後に兵を催すべしとて時刻を移す處に、俄に喊を造り鼓を打て、樊噲兵を驅て攻か

しめん。夏侯嬰命を受て去ければ、韓信士卒に命じて漢王の消息を聞しむるに、寒溪河を過て徐々と來玉ふと申す。韓信兵を進て三岔山に到り、諸大將に申けるは、往日我漢に歸する時、この處にて路に迷ひ、追手しきりに蒐てすべき樣なく、一人の樵夫に遇て路を問しが、若は追手の者共樵夫に尋ねて、又わが跡を慕ひ來んことを畏れ、情なく樵夫を殺して路の傍に埋み土を掩て走たりとて、處の者を召て棺を造らせ、其屍を掘出して三岔山の松林島に改め葬り、石を疊で墳を築き、上に石碑を建て、大漢元年乙未秋八月七日、破楚大元帥淮陰韓信爲義士樵夫立と云二十六字を鐫、大將と共に祭を設け、周奇に命じて祭文を讀しむ、其文に曰、

大漢元年歲次乙未八月十一日壬戌破楚大元帥韓信謹以牲醴致祭于三岔山樵者之靈曰、嗟爾樵者遭世蹇迍、資身無策入山探薪、逢予問路指示要津、楚兵或至恐道往因、絕計斬爾、寔傷我仁、覆土爲記、慮防水濱、循途適漢素志乃申、職專閫外兵下三秦、道經岔口改葬爾身、師行忽劇未獲報君、君其有知鑒我眞純、尙享。

韓信ねんごろに祭り了て、處の者に廟を立て四時祭るべき由を命じければ、遺跡今に在とぞ聞し。

かりを率ゐ、山を越て二里ばかり行ければ、高き崖の麓に民家十軒あまり列れり、辛奇柴の扉を開て迎へければ、韓信草廬に入て老母を拜し、辛奇が妻を呼出して銀百兩を與へ、往日の恩を謝す。老母堅く辭しければ、韓信申けるは、是みな漢王の賜ふ所なり、母を養の資と成しむ、辛奇は我に從て楚を伐、大功を立て名を世に顯すべし、此ところ山深して老母を置べき地にあらず、われ告文を以て丞相府に訴へ、老母を南鄭に遷して養しむべし。辛奇喜に堪ず、再拜して謝しければ、韓信が曰、御邊の母は乃ち我母なり、御邊われに從て東に向ふ、何ぞ老母を此山中に留め置べきとて、軍政司に命じて告文を書せ、早く老母の家を南鄭へ移し、官祿を與へて養ふべき由を丞相府へ云遣しければ、辛奇淚を流して老母に別れ、妻に向て申けるは、我いま元帥に從て戰場に向ふ、汝よく老母に事て、平生の義に背くこと勿れとて、韓信と共に打立けり。韓信申けるは、此より大散關へは二日路を隔たれば、猶敵の知ざる間に、御邊案内者として樊噲と共に路を急ぎ、直に散關へ攻かゝれ、若急に破ること能ずんば我到るを待、辛奇命を受て樊噲と共に去ければ、韓信第二隊夏侯嬰を召て申けるは、御邊先陣に續て兵を進め、樊噲が散關へ攻かゝるを見ば、陣屋を構て軍馬を息め、少も動ずして氣力を養へ。樊噲が散關を破て後又御邊を先陣とし、急に廢丘を攻て章邯と戰はしめ、却て樊噲を第二隊として力を援

て罷り歸て候と告ければ、韓信嘆息して自ら來り見るに、果して始め見たりし在家一字もなかりしかば、力及ばず一日路すゝんで、亂石灘の石橋を過ける處に、向なる山の尾より一人の壯士、大なる虎を追て飛が如くに馳來る、兵共是を見て虎を打止んとて、槍を揃へて取卷ければ、虎逃るべき路なきを見て、岩の上に爬つき威を奮て彼壯士に飛かゝるを、壯士飛ちがへ槍を延て虎の頂を突ば、虎いよ〳〵驕て跳あがりけるを、壯士又喉を突て地に突ふせければ、兵ども簇り寄て亂槍に突死せり。韓信その働を見て大に驚き、自ら馬を出すに、彼壯士は乃ち太白嶺の辛奇なり、こは如何にとて對面するに、辛奇拜伏して申けるは、某この間棧道の修補頻なる由を承り、扨は往日約束せし將軍兵を起して楚を伐玉ふならんと存じ、夜を日に繼て馳參んとするに、未だ老母に告ることを得ずして延引せり、圖ざるに今日出會ことを得て平生の志に合へり。韓信も馬より下て申けるは、御邊に別れてより漢王に事へ、軍務に暇なくして音問にも及ず、昨日太白嶺の下を尋るに、水を避て家を移せりと申す、此に因て何を尋ぬべき樣もなかりしに、幸に相逢ことを得たり、我往日御邊の恩を受て、兄弟の約を成ぬれば、家に立よりて老母を拜すべし。辛奇が曰、將軍いま天下の元戎となり玉へば、往日の比にあらず、爭か輕々しく茅屋に入玉ふべき。韓信が曰、われ昔の恩を忘れず、何ぞ今日の勢に拘んとて、十騎ば

郷導官申けるは、月の如く見るは大蛇の眼なり、若前に近づく時は氣を吐こと雲の如し、此に觸る人は忽に死す、將軍たゞ早く歸り玉へ。靳歙大に怒り劒を拔て澗へ下り喚て蒐れば、大蛇は岩の下より三丈ばかり頸を延、毒氣を吐こと霧の如く、口を開て呑んとするを、靳歙ひらりと飛で傍なる大石に登り、喚く聲雷の如く、只一打に大蛇の頸を斬て落せば、林木動搖して澗水血を漲す。諸軍これを見て、あゝ斬たりとて、驚嘆する聲しばしは止ず。我先にと來り見に、長さ五丈ばかりの大蛇岩を纒て死だりけり。韓信申けるは、崑崙山は圍り三萬里の山なるが、上古には此山を一周する大蛇ありしと云傳へたり、今此の如くなる蛇あるとも怪む事にあらず、我往日楚を逃れて漢に歸する時、たゞ一騎この處を通りしが、幸にして此毒蛇に遇ず、倘その時出遇ば必ず害せられて、何ぞ今日に至らんとて重く靳歙を賞し、人馬を進めて太白嶺に近づき、大將盧綰を召て申けるは、我向に褒中へ入とき、太白嶺の下にて辛奇と云者に遇り、其人義氣甚だ盛にして我を留めて一宿せしめ、兄弟の約を成して後日に參り會んと云り、其家酒を賣て世を度る、御邊先達て尋ね行て此由を傳へよ、我對面して昔日の恩を謝すべし。盧綰承り五六騎を引て去けるが、須臾にして馳歸り、我太白嶺の下に到りしに、人家一字も見えず、人に尋ねて候へば、去七月に山水俄に溢れて、皆山の北へ家を移せりと申す、此に因

那時もし此河を渡らば、今は已に淮陰の故郷に歸らん。諸大將みな申けるは、是まことに天の祐なり、必ず元帥を留て漢の世を興させんとの意ならん、然らずんば棧道すでに絕て別に此路あることを知者なければ、我等みな褒中に死果べし、浩る奇特を後代に傳ふべしとて、山の頂に石を立て、漢相國邀二韓信一至二此一と云八字を刻み、摠じて巓崖峻谷鳥も翔りがたき所を藤を攀葛に取つき、上下みな故鄕へ歸る心を以て勇み踊て勞を忘る。特に先手より士卒走り歸て、亂山岩溪の間に大蛇ありて、兩の眼日月の如し、進むべからずと告ければ、韓信申けるは、毒蛇路を塞がば、射手百人を擇で山の際に入て身を掩ひ、鏃に藥を付て一度に射させ、多く鐵砲を打かけて毒蛇の飛かゝるを防ぐべし、然らずんば必ず失あらん。諸人尤と同ずる處に、一人進み出て申けるは、大蛇路を塞げばとて何ぞ多くの人を用ん、縱ひ滄海の蛟龍なりとも、某に敵することを得んや、願はくは只一人この大蛇を斬て棄ん。諸人驚て誰ぞと見れば、信武侯靳歙なり。韓信大に喜び、御邊の力誠に大蛇を屑ともせずと云へども、此深山下濕の地常に往來する人なければ、恐くは毒氣に中らん、酒を飲で行玉へと云ければ、靳歙巨觥を取て酒をのみ、士卒五六人を引て山の前に到りけるに、岩の際より淸水流れて、岸の下に明月かゞやき、電閃て腥風鼻を衝、寒氣肌を侵す。士卒みな怪で、只いま月の出るは如何なる事ぞと云に、

て百姓を治め安じ、農桑を勸めて刑を省き、稅を薄し善を擧、惡を罰して軍中へ兵粮を送り續けよ、是卿が職なり。蕭何再拜して曰、臣謹で王命を承る、願くは早く捷軍を報じ玉へ。時に大漢の元年乙未秋八月朔日、漢王三軍を引て已に褒中を打出玉へば、蕭何諸官を伴て遙に東門の外に送る。郡縣の百姓父老德を慕ひ別を惜で、道を遮て哭きければ、漢王も戀々として去玉ふ。蕭何は諸官と共に歸て褒中を守り、地方を安撫して民を治め、兵粮を送り出して漢の大軍を養ひけり。

○辛奇斬レ虎遇ニ韓信一

この時韓信は漢王に二日先達て進みけるが、棧道へは行ずして、陳倉の小路より孤雲兩脚山に到り、山の後の谷際より兵を進むれば、已に樊噲が先鋒の勢前に在て路を開く。夾江の水寒溪より流れ出て、勢甚だ急なるを、石を疊で過ゆけば、又斷岩絶壁屏風の如く立たるを、長き繩を下して魚貫して進む。又五里ばかり行て濶き路あり、樹木滋く生たりしかば、樊噲兵を下知して悉く砍ひらく。韓信諸大將に申けるは、我往日たゞ一騎褒中より逃來りし時、夜中に此寒溪の河邊に來る。折ふし秋水漲り溢れて渡るべき樣なかりける處に、蕭何追蒐て來り玉へり、

朕惟、古先明王之治天下也、以安民爲務、而安民之道、以教化爲先。是以上下相承、風俗淳厚、一國和平臻於至治。朕自治國以來、夙夜惓々志圖治理、建都南鄭、思與百姓共臻於道、以及天下、而爲一統、以此特加曉諭、使知爲善去惡趨吉避凶而爲永保身家之道。如居家者有一家之長、居鄉者有一鄉之長、爲一家之長者訓教子弟、講讀詩書、明達道理、父慈於子、子孝於父、兄愛於弟、弟敬於兄、尊卑長幼各循其序、毋相淩奪也、使一家之內仁讓浹洽親睦相和使爲一家之福、爲一鄉之長者、勸其一鄉之內、士農工商各居一業、士則修明義理勤習課業、農則力於田畝無欠賦稅、工則專於藝術毋作淫巧、商則用心生理、毋爲遊蕩、大小相安長幼和睦、毋爭鬪告訐而陷於刑戮、毋賭賻淫佚以墮于凶德、毋游手好閑以廢其生意、毋竊取人物以蹈於死亡、出入相友、守望相助、婚姻死喪鄰保相資。如此則一鄉之內、禮樂雍容風俗淳美、富壽安佚共享太平、而爲一鄉之福。故曰、作善降之百祥、作禍降之百殃、善惡之報不差毫釐。朕今約法三章見有定律、使宣爾等、來惓々開諭者、正欲爾等守法奉公咸歸良善。其有不遵朕誨仍蹈於惡者、明有國法、暗有鬼神、罪亦難逭。爾等欽之守之、毋忽故諭。

誥文了りければ、百姓に酒食を賜て悉く鄉に歸らしめ、蕭何を召て宣けるは、卿は褒中に留

蕭何
漢王

韓信暗度陳倉道

然れども此間晝夜事多して奏聞するに暇なし。漢王の曰、百姓父老われを慕て此の如し、速に此所へ來らしめよ。蕭何命を受て禁門の大使に傳へければ、朝門を開て入しむるに、數百人の百姓紛々として先を爭ひ、領を延て望み見る、番の者共無禮せんことを恐て、百姓よく謹で喧きことなかれと呼りければ、漢王宣けるは、是みな朕が百姓なり、番の者共驚しむべからずとて、殿階の邊まで出玉へば、年老たる百姓ども拜伏して申けるは、陛下この地に來り玉ひてより、風雨時に從ひ萬民業を安じて、堯舜の世に異なることなし、圖ざるに今日師を出して東征し玉ふ、何の時に歸り玉ひて再び民を治め玉ふべきぞとて、皆涙を流しければ、漢王宣けるは、朕暫く師を出して楚の強暴を滅し、天下の民の苦を救んとす、汝等業を安じて今日の別を哀むこと勿れ。父老又申けるは、陛下今日この地を離れ玉はゞ、如何なる人か留り守らん。漢王宣けるは、朕相國蕭何を留めてこの所を守らしむ、汝等少も患ること勿れ。父老これを聞て手を以て額を打て申けるは、蕭相國もし守り玉はゞ、我等なんの慮か有ん、是民の幸なりとて喜ぶこと限なし、漢王兼て古の法に仍て十里を一亭として、一亭ごとに亭の長を置、十亭を一鄉として、一鄉の內に三人の鄉老を置て、一人は民間の法令を正し、一人は耕作の事を掌り、一人は訴訟を決せしめ玉ひければ、此日三鄉老を召て誥文を作り諭して宣けるは、

廢棄隨長而取、身材長大者、挽弓挽弩、身材矮小者、持戟持戈、身力强壯者、執旌執旗、身力少弱者、鳴金鳴鼓、不能視遠者、專聽號令、不能聰聽者、專望風火、身肥者爲馬軍、身瘦者爲歩軍、日能食斗粟者、專爲前驅、日行二百里者、專探機密、灌嬰領四牙將、逐隊前行、張倉領三文士、隨軍後進、陸賈同二謀士、識地利之險易、叔孫通領八裨將、參行兵之可否、盧綰、靳歙爲主將之熊羆、薛歐、陳沛爲中軍之驍將、三軍如虎多士如雲。鼓動神威昭萬象、蕩開征旅起千兵。

漢王限なく喜び、軍馬すでに此の如くなれば、楚を破んこと難からずと宣ける所に、韓信奏して申けるは、臣は大王に二日先達て進むべし、大王は後陣の勢を率て徐々と來り玉へ、臣先散關を攻取て大王を迎へ奉るべしとて、先手の勢すでに進發しければ、漢王げにもとて暫く住り玉ふ。漢中の貴賤岐に立て大軍の通るを見物しけるが、古より師を用る今日の如くなる威儀を見ずと云て感嘆しけり。漢王次の日蕭何を召て宣けるは、朕さきに卿に命じて郡縣の父老を招き寄よ、親ら諭べきことありと云しが、猶未だ來らざるか。蕭何申けるは、數日以前より郡縣の百姓父老大王の東征し玉ふと聞て、今褒中を出玉はゞ三秦を定め楚を破て必ず咸陽に都し玉はん、然るときはいかゞして再び天顔を拜することを得んとて、夥しく朝門の外まで來れり、

兵みな天より下れるかと怪しまん、然る時は散闘を取こと掌にあり、願くは此事を密に漢王に奏して、御心を安じ玉へ。蕭何大に喜び急に朝廷へ回りけるに、夜深るまで漢王なほ寐玉はず。蕭何が奏する趣を聞て喜玉ふこと限なく、次の日大小の文武を引て已に褒中を打立玉へば、韓信この間調練したる軍馬四十五萬を四隊に配て進ませ、大將孫興を棧道へ遣して樊噲と代らしめ、樊噲を第一隊の先陣として猛將八員を指そへ、令を出して申けるは、凡そ山に逢ては路を開き、水に逢ては橋を疊み、暫も止るべからずとて、夏侯嬰を第二隊とし、猛將十人精兵二千餘騎を授て進しめ、若先鋒たゝかひ勝ときは、急に兵を驅て攻かゝり、先鋒もし負る時は、急に出て援け救ふべし、第三隊は韓信自ら猛將四十餘人を率、兵を四手に配て前後左右に備ふ、第四隊は漢王大小の百官を引て傅寛、周昌二人を監軍とし、前後を顧て軍中の緩急を奏すべしとて、一々に調度しければ、漢王東門より出て高き阜の上より望玉ふに、人馬强壯にして前後左右井々として亂れず。時に韓信調度の法を書寫して獻りしかば、漢王乃ち披き見玉ふに、其法に曰、

按二九宮四象八卦一、列二五行十干十二支一。隊有二陰陽一、陣有二前後一、將有二紀律一、兵有二行伍一、旗雖レ尙レ赤、而引レ軍開レ道者、則按二五方一。制雖レ爲レ王、而威儀號令則專二五伐一。人各有レ能、量レ材而用、人馬

と能はじ、漢の兵爭か出ることを得ん、然れども我等二人項王の命を受て來りたれば、此に留て守るべしと云ければ、章邯酒宴を設て持なし、敢て用心すること無りけり。

○韓信暗度㆓陳倉道㆒

去ほどに漢の破楚大元帥韓信人馬の手配を定め、明日打立つべしとて此趣を漢王に奏しければ、諸軍大に怪み面々相顧て申しけるは、樊噲棧道を造て猶いまだ完からず、元帥兵を進めて何くより出んと思玉ふぞとて、密に漢王に訴へければ、漢王いそぎ蕭何を召て宣けるは、棧道いまだ備らざるに、韓信朕を請て明日兵を出んと云は、何くより出んとの計ぞ、卿早く行て問きたれ。蕭何勅を承り、其夜本陣に行て韓信に對面し、元帥明日御駕を促して東征せんとす、漢王大軍何の路より進べきを知ずして御心深く疑ひ玉ふ、未審、元帥いかなる計かある。韓信が曰、丞相往日張良が棧道を燒とき、別に路ある事を知玉はん、今なにとて問玉ふぞ。蕭何が曰、往日別に路ありと聞しかども、未だ其詳なるを知ず、元帥いま樊噲に命じて頻に棧道を修補せらる、我この故に心疑へり。韓信が曰、これ明に棧道を造る體を見せて、三秦王に備なからしめ、我却て暗に陳倉の小路より進み、五日が内に散關へ到らば、三秦あわて驚て、漢の

けり。項王は都を彭城に遷てのち日夜酒色に耽り、宮殿を營で政をも治めざりしかば、范增時々諫れども更に用ず、此ゆゑに上下恨を含むもの多かりければ、右ては楚の天下長久なるまじとて、范增が心片時も安からず。或夜天文を見に、西南の方に旺氣盛に起り、將星處々に散亂しければ、これ必ず漢王褒中より起る兆なるべし、況んや韓信楚を叛て漢に降たれば、漢王必ず重く用ん、近年は項王仁政を修ず殺伐を專にして、人民恨を含み諸侯離れ叛く、六國時を得て齊の國殊に强大なり、漢王もし兵を起して攻上ば、天下破竹の如くならんと安き心も無りければ、此趣を項王に奏して、いよ〳〵三秦の守を固して漢王を防ぎ玉へと云。項王なんの怕かあらんとて初の程は從ざりけるが、再三に及んで季良、季恒二人に三千餘騎を授て、三秦を戒て共に漢中の道路を守るべき由を下知せらる。二人いそぎ廢丘に來りて、先雍王章邯に項王の命を傳へければ、章邯笑て申けるは、范增何とて思慮の過たる、無用なるに今守の勢を起す、我よく漢王の虛實を知りとて、向に章平が送し書簡を見せければ、季良、季恒申けるは、之を以て見ときは漢王は怕るに足ず、然れども范增日夜只韓信を漢王の重く用しことを恐る、我等却て思ふに、韓信は漂母に食を乞、胯を潜て辱を受、楚に事て用られず、今漢に歸して大將となるとも、人の心何ぞ服せん、況や棧道甚だ險阻にして、一年を經るとも修補するこ

月を限て造り了んことを責、しかれども山路險難にして一年にも完きことを得がたし、漢王いま韓信を大將とし、人馬を起して攻上らんとす、軍士恨み怒て一人も服せず、我等つねに耕作を業とすれども尤も武藝を好む、願はくは將軍に降て身を全することを得ん。章平が曰、汝等まことの心あらば、我留めて手下に用ん、此中に一組の大將はなきか。時に二人すゝみ出て申けるは、某二人は姚龍、靳武と云者なり、本は晋安郡の獵師なるが、漢王の召に依て、百餘人の士卒を引て棧道を造る、日夜責られて一飯をも得ず、此ゆゑに空く死んことを哀で、故鄕へは歸らず、諸人を伴て將軍に降る、願くは一飯を求て命を全し、太平の時を待て故鄕に歸らん。章平問て曰、漢王いかなれば韓信を用て大將軍としたるぞ。姚龍が曰、たゞ韓信が兵法を論ずるを聞て、蕭何しきりに之を薦む、漢王つひに大將とし玉へども、大將も士卒も皆服せず、樊噲ことに怒を含で、其外にげ去もの數を知ず、此ゆゑに漢王も已に後悔の心あり。章平これを聞て心喜び、汝等われに從て功を建よ、必ず重き賞あらんとて、手下に留て用けるに、姚龍、靳武心を盡して事ければ、章平試に軍中の事を治めしむるに、能わが意に合ひ、上下の人と睦じく交りければ、心の中よき佐を得たりと喜で、一月の内に二人を大旗牌官に任じ、漢の兵怖るに足ずとて、使を馳て三秦に告ければ、三秦も心を安じて川心することなかり

聞て申けるは、韓信は淮陰の胯夫、久しく楚に在て用られず、楚を棄て漢に歸す、その才なんぞ用るに足ん、漢王いかなれば人を知ず拜して大將軍とするや、況や韓信貧賤にして世の望に係らざれば、一旦大將となるとも人の心決して服せじ、然る時は何を以てか三軍を制せん、殊更棧道は天下の險阻にして三百里に連、張良こと〴〵く燒たれば、一年を經るとも修補することを得じ、此の如くにして兵を用んとせば、恰も小兒の戲に似たるべし。諸大將申けるは、范增さきに檄文を馳て常に怠ず用心すべき由を命じ、今章平又漢の兵の來る由を報ず、預め人馬を備へ、然るべき大將を章平に指副て固く散關を守しめ玉へ。章邯申けるは、棧道の修補廣大にして人馬急に進むこと能はじ、漢の兵もし來らば章平重ねて告知すべし、其とき軍馬を揃んに何の遲き事か有ん、我料るに今漢の兵の出ると云は、恐くは虛說ならんとて、章平が使を回しければ、章平もこれを聞て用心をもせざりけり。時に番の者共來りて、只今漢の兵百餘人棧道を修補して苦を受、樊噲を恨で逃きたり、御方に降らんことを願ひ候と告ければ、章平喜で我漢の虛實を聞んと欲す、速に呼來れとて悉く召て申けるは、汝等は何の者ぞ、いま如何なる故ありて降人となりたる、若少にても詐らば忽ちに首を刎ん。士卒みな申けるは、某等は晋安郡の民なり、漢王の命を受て棧道を造る處に、終日粮を賜ず、樊噲みだりに催促して一

玉ふな。樊噲が曰、われ早く漢王に人夫を乞んとて、早馬を馳て表を献て曰、

棧道工程甚大、人夫死者甚多。今奉ニ元帥將令一、限ニ一月之間一、飛ニ報完一レ工、如違ニ原限一、定以ニ軍法一從レ事。但念臣起レ自ニ豐沛一、未ニ敢悞一レ事、今計ニ棧道人工一、豈可ニ計レ日而完一、事在ニ迫急一、性命難レ保、伏望、陛下差レ人附ニ近郡縣一、量ニ撥人夫一或一二千名、儹レ工修レ完、以救レ燎レ眉。臣等不レ勝ニ恐惧感戴之至一、茲差ニ牙將季隆一、齎レ表上奏以聞。

漢王表を見了て急に御史周苛を普安郡へ遣し、一千の人夫を催促して樊噲が方へ送らしめ玉ふ。樊噲大に喜び、五十人を一隊として手配を定め、日夜に棧道を造らせて、或夜ひそかに周勃、陳武二人を招き、耳を附て適に陸賈が傳來りし韓信が計を低語、必ず外に洩し玉ふなと云ければ、二人命を受百餘人を引て夜中に忍び出、峯を攀葛かづらに取付て棧道を越て走りけるに、知もの一人もなかりけり。此時楚の大將章平と云者、大散關を固めて居たりけるが、彭城より范增が檄文きたり、漢王は尋常の人にあらず、今關中の虚なるに乘て、急に師を出して攻上る事有ん、散關は第一の守なり、常に用心して怠ること勿れと時々に警めければ、章平人馬を揃て緊く固て居たりしに、漢王此ころ樊噲に命じて棧道を造らせ、韓信を大將として攻上んとする由を傳きゝ、果して范亞父の計に出ずとて、早馬を立て三秦王に報ず。雍王章邯これを

難ければ、人々相顧て申けるは、此棧道を修補せんには、十萬の人夫一年を限るとも完く造ることを能はじ、況や一萬の人夫を以て、安んぞ一月の内に成就することを得ん。樊噲申けるは、韓信が軍令甚だ嚴し、主上又深く重んじ玉ふ、我等もし命に違ふ時は、これ軍令を犯すなり、成と成ざるとは彼定めて主張あらんとて、人夫を下知して怠る事なく、高き處には木を挿み、低き處には橋をかけ、隘き處は石を鑿せ、息をも繼せず精力を盡ほどに、諸人みな張良が妄に燒たるを罵り、又韓信が法令の嚴きを怕て、日夜に力を出しければ、木に打れ石に當て手足を傷るもの數を知ず、疲れ苦んで悲み哭く。樊噲力及ばず如何せんと憂る處に、大中大夫陸賈十騎ばかりを引て馳きたり、大將軍の命なり、軍馬すでに此に來る、棧道の修補必ず一月の限を違ふべからず、若約に背て人馬の滯りあらば、決して軍法に行ふべしと云ければ、樊噲叫で申けるは、三百里の棧道いかゞして一月の間に完きことを得ん、大夫わが爲に日限を緩し玉へとて、力の及ざる由を哭きければ、陸賈傍なる人を退け、樊噲が耳根によりて密に韓信が計を語る。樊噲これを聞て大に喜び、外に出て大音あげ、棧道甚だ險阻にして小勢にては一年にも完しがたし、我漢王に奏して人夫を請うけ、力を盡して修補すべしと云ければ、陸賈は相別れて歸りけるが、諸人の前にて樊噲に申けるは、大將軍の號令極めて嚴なり、必ず日限を誤

馬を調練す、今日完く熟しぬれば、陛下御駕を促して一覧し玉へ。漢王宣けるは、朕さきに將軍のよく人馬を制するを見たり、今すでに熟せば定て能法に合ん、朕なんぞ再び見るに及ばん。蕭何申けるは、主上必ず親ら行て御覽あるべし、明に元帥の兵を用ること、能紀律あるを知玉ふ時は、心を安んじて征伐して少も疑ふ事無るべし。漢王げにもとて、百官を率て陣中に至り玉へば、韓信文武の大將と遠く出て迎へ奉る。漢王乃ち將臺に上て見玉ふに、四方の人馬隊伍よく整ひ、旗幟嚴明にして前後左右井々として亂れず、起坐進退繩然として法ありければ、韓信に向て宣けるは、將軍の兵を用ること古の孫子、吳子にも超たり、今師を出して東に向んや。韓信が曰、臣吉日を擇んで大王の御駕を促し、師を出して楚を伐んと欲す、いま此にて問玉ふこと勿れ。漢王その心を悟て再び日限を問玉はず。將臺より下り玉へば、近臣膳を進め來る。漢王これを見玉ふに、多く山海の珍味を列ければ、只數品を止て餘はみな韓信に分ち賜ひ、諸軍を賞して朝に歸り玉ふ。此とき樊噲は一萬の人夫を率て棧道を修補しけるが、山路甚だ險阻にして岩石天に連なり、樹木枝を交て手を著べき樣なければ、心の中に思ひけるは、是定めて韓信自ら楚を伐べき計なく、我に僅の人夫を付て三百里の棧道を造せ、徒らに月日を延ん爲なるべしとて、周勃、陳武と孤雲山に上て見に、一帶の棧道高低縱橫、險峻なること鳥も翔り

○樊噲明造ニ蜀棧道一

韓信本陣に歸り樊噲を召て申けるは、御邊すでに先鋒の職に當る、今三軍よく熟したれば、漢王の御駕を促して日を擇んで打立べし、然れども蜀の棧道張良に燒盡されたれば、如何して出ることを得ん、御邊一萬の人夫を率ゐ、周勃、陳武と力を合せて、一月の內に棧道を修補せよ、日限を誤らば軍法に行はん。樊噲申けるは、元帥の命某乖くには有ねども、棧道は天下の險阻にして三百里に餘りたれば、如何して一月の內に修補することを得ん、元帥もし某を殺さんとならば、今この所にて殺し玉へ、某決して此命に從ふ事能ず。韓信笑て、事に臨で難を避るは不忠なり、御邊もとより忠義を懷く、當に力を盡して此大功を建、三軍を驅て進むべしと云ければ、樊噲堅く辭しては又法令を犯さんことを恐れて力及ばず打立けり。去ほどに韓信が人馬調練よく熟して、左に麾げば左へまはり、右に麾けば右へ廻り、前にまねけば前に廻り、後に麾けば後に廻る、四陣を合せて一陣とする時は長蛇となり、一陣を分て四陣とする時は四門となる、進退行レ法、啓閉有レ路、旗幟明にして金鼓誤らず、規矩準繩毫釐も爽ふことなくして、見る人欽服せずと云者なかりければ、韓信乃ち朝に出て奏しけるは、臣勅を承りて人

威ますく〳〵振ん。漢王げにもとて喜玉ふこと限なく、近臣周元臣に酒と羊とを持せ、勅書を捧て韓信が陣に至らしめ玉ふ。韓信これを聞て大小の將士と香を燒て出迎へ、金鼓を鳴して中軍に入、勅書を開て讀て曰、

爲將之道職專閫外。非法不足以制三軍、非明不足以服人心、故孫武殺吳姬、而其法遂行者非不知吳姬爲王之所愛也、然法不私於愛、故其法乃行耳。爾大將韓信殺殷蓋者非不知蓋爲寡人之所親也、然法不私於親、故誅一人而千萬人知儆。其用法實合孫武、深得爲將之道。朕心喜悅。故遣近臣周元臣、賫羊酒手勅以勉之。益勵別心以約束將士、早發東征以慰所望。故勅。

韓信再拜して賜をうけ、勅使を送り回して、次の日自ら朝に入て恩を謝す。漢王宣けるは、將軍の軍令まことに朕が心に合へり、豈深く賞せざらんや。韓信が曰、臣すでに閫外の職を受て、數千萬の民命ことごとく臣が身に係れり、若訓練法なくんば何を以てか三軍を正さん、一人法を私すれば、萬人みな乖く、然る時は臣決して陛下閫外の職を掌ること能はず、昨日勅を下して酒羊を賜る、諸の大將士卒みな敬で臣が法を知る、この恩粉骨碎身も報じ難しとて、再拜して退出せり。

は馳て入ことを許ず、いま酈大人これを犯す、何の法を以て正すべきぞ。曹參が曰、軍門に馳驟す、之を輕軍と云、首を斬て示すべし。韓信が曰、酈大人まことに斬つべしと云ども今勅書を捧げ來れり、其身の罪を免し、從者の首を斬んとて、酈生が馬取を門外に引出して殷蓋と共に誅殺し、二の首を陣門に掛ければ、大小の將士ふるひ怕れて、一人も高聲に言ものなし。酈生いそぎ逃歸り、漢王の前に頓首して申けるは、臣勅書を捧て韓信が陣に至る、馬を馳て入たるに因て、軍令を正し已に臣を斬んとす、然れども勅使なればとて臣が命を扶け、馬取を斬て殷蓋が首と軍門に雙べ掛たり、臣もし勅書なくんば決して生ることを得じ。漢王大に怒て宣ひけるは、朕勅書を馳て殷蓋を免す、韓信いかなれば無禮なる。蕭何申けるは、將在レ外君命有レ所レ不レ受、これ正に閫外の權にして大將たるの道なり。漢王の曰、殷蓋を斬たるは何ゆゑぞ。蕭何が曰、これ所謂る殺ニ權貴一以威ニ衆心一ものなり、然るときは三軍たゞ主上あることを知て敵國あることを知ず、兵法にも内懼ニ主上一者必勝、外懼ニ强敵一者必危と云り、大王すでに韓信を得たり、何ぞ楚の強きを憂玉はん。酈生申けるは、韓信軍威甚だ嚴にして能大將たるの道を得たり、今臣が馬取を斬たれども臣が心敬服せり、他日楚を破ん者は、必ず韓信ならん、大王この時勅書を下して賞揚し玉はゞ、諸將いよ〱謹み三軍法を守て、韓信が軍

ども、樊噲法を怕て救ふことを能ず。或人この體を見て漢王に報じければ、漢王いそぎ蕭何を召て宣けるは、韓信いまだ師を出さゞるに、我一人の大將を斬んとす、恐らくは軍に於て利あらじ。蕭何申さるは、大將の號令行れずんば何を以てか敵に勝ん、若殷蓋一人を惜で此法を廢ば、爭か三軍を制することを得ん、韓信が殷蓋を斬は軍法を正す者なり。漢王の曰、殷蓋は寡人が親しき者なり、重く罪を責るとも、豈これを殺の理あらんや。蕭何が曰、軍法無レ親とは古人の明訓、大王天下國家を治るに、親疎の分をし玉はんや。漢王いかに宣へども蕭何敢て動せず。時刻推移らば殷蓋が斬れんことを恐れて、急に酈生を召、汝早馬を飛して韓信が陣にゆき、朕が手詔を捧て殷蓋が命を扶けよと宣へば、酈生馬を飛して馳きたり、轅門の外にて武士共すでに殷蓋を斬んとするを、大音あげて呼りけるは、漢王詔あり、且く斬こと勿れとて、本陣へ馳入んとするに、轅門の番衆推止て申けるは、元帥命あり、軍中には驟べからずとて、酈生を馬より引下し、帳下に引居て訴て申けるは、酈大人馬を飛してあわたゞしく門に入、某等號令を守て捕へ來れり。韓信之を聞て申けるは、軍中不レ許二馳驟而入一、これ奸人の營を劫すを恐れてなり、酈大人素より兵法を知、いかなれば軍法を犯せる、想ふに主上の勅命を傳へ來れるならん。門を守る者申けるは、酈大人勅書を持來れり。韓信軍政司を召で問て曰、軍中に

て、妄に法令を云者なり、汝等早く牙將に報じて、我を入しめよと云ければ、番の兵この由を報じて次第に相傳るに、內より巡哨官進と云字を書たる大なる牌を持て門を開かせ、令に違て遲く來る者を入よと云。殷蓋少も怕れず、目を瞋し徐々として進み、元帥の帳下に至て、長揖して立ければ、韓信申けるは、漢王すでに詔ありて、われ又固く法令を定む、汝監軍の職に居て今まで何とて來らざるぞとて、晨を司る者に向て時刻を問ば、未の刻に近しと答ふ。韓信が曰、我曾て下知を出して卯の刻に來れと約せり、然るに午の下に至て出來るは、何とて軍令を輕んずるぞ、汝すでに斬罪に當れり。殷蓋なほ惧るゝ色なく、某すでに將軍の約を聞と云ども、今日遠きより親き人來りしかば酒を出して持なし、此の如くに遲參せり、願くは罪を免し玉へと云ければ、韓信左右を下知して帳前に縛らせ、怒て申けるは、汝聞ずや、大將たる者は命を受るの日より其家を忘れ、軍に臨で約束しては其親を忘れ、鼓を枹の急なるに至ては其身を忘る、汝すでに君の祿を受て、豈父子親戚のゆゑを以て國事を誤んやとて、軍政司を召で問て曰、殷蓋令に違て遲く來る、其罪いかん。曹參答て曰、軍と約して遲く來るは、慢軍の罪なり、斬て諸人に示すべし。韓信武士を命じて、轅門へ引出し速に斬べしと下知すれば、武士共急に殷蓋を引て出るに、殷蓋膽魂も身に泝ず、傍に樊噲があるを見て、累に咰すれ

其十三調用之際結舌不應、低眉俛首而有難色、此謂恨軍、犯者斬之。
其十四出越行伍、攙前亂後言語喧嘩、不遵禁訓、此謂亂軍、犯者斬之。
其十五託傷詐病以避征伐、扶傷假死、因而逃避、此謂詐軍、犯者斬之。
其十六主掌錢糧給賞之時、阿私所親、使士卒結怨、此謂弊軍、犯者斬之。
其十七觀寇不審、探賊不詳、到不言到、多則言少、少則言多、此謂悞軍、犯者斬之。

右の十七箇條かき寫して一册とし、一々韓信自ら元帥の印を押て、先漢王の聖覽に備へ、又軍政司曹參に命じて門々に張せければ、漢王長嘆して宣けるは、前日の人馬は眞に小兒の戯に似たり、今日の調度は三軍整々として、人の心惧れ服す、東に向て征伐すとも、寡人なんぞ患んとて、百官を牽て朝に歸玉ふ。次の日韓信五更に起て教場に出、中軍に座して諸大將を集れば、晨を司どる官人きたりて時を報ず、韓信一々に名を呼で諸大將を點檢するに、監軍殷蓋いまだ來らず、人馬を調練して漸く午の刻を過けるとき、殷蓋外より來て轅門に入んとするを、門を守る者推止めて、元帥今朝より人馬を調練して、各門皆大將の下知なければ人を通すこと能はず、今若し入んとならば、轅門の牙將に報じて、牙將傳へて軍政司に告、その後に入ことを許すと云。殷蓋これを聞て大音あげ、何ぞ瑣々として此の如なることを用ん、これ小人志を得

諸軍これを聞て懼れ粛みければ、漢王人馬の法あるを見て喜玉ふこと限なし。時に韓信元帥の本營に坐し、諸大將を聚て軍中の法令を定む。

其一聞鼓不進、聞金不退、旗擧不起、旗按不伏、此謂悖軍、犯者斬之。

其二呼名不應、點視不到、違期不至、動乖師律、此謂慢軍、犯者斬之。

其三夜傳刁斗、怠而不報、更籌違度、聲號不明、此謂懈軍、犯者斬之。

其四多出怨言、怒其主將、不聽約束、使教難治、此謂横軍、犯者斬之。

其五揚聲笑語、蔑視禁約、馳驟軍門、此謂輕軍、犯者斬之。

其六所用兵器弓弩絶絃箭無羽鏃、劍戟不利、旗纛凋弊此謂欺軍、犯者斬之。

其七謠言詭語造捏鬼神、假托夢寐、太肆邪説、鼓惑將士、此謂妖軍、犯者斬之。

其八奸舌利齒妄爲是非、調撥吏士、令其不和、此謂謗軍、犯者斬之。

其九所到之地凌侮其民、逼淫婦女、此謂奸軍、犯者斬之。

其十竊人財物、以爲己利、奪人首級、以爲己功、此謂盜軍、犯者斬之。

其十一軍中聚衆議事、私近帳下、探聽軍機、此謂探軍、犯者斬之。

其十二或聞所謀、及聞號令、漏泄於外、使敵人知之此謂背軍、犯者斬之。

調度動靜起伏ことごとく習はざれば、大敵に逢て一戰にも及ばじ、我平生隊伍の數調度の法軍中の紀律を寫して三冊とす、御邊今夜の内に書寫し、諸軍に分て法の如くに教へ玉へ。酈生拜伏して曰、將軍の神機妙算尋常の及ぶべきにあらずとて、夜中に書寫して諸軍勢に教へ習はしむ。韓信朝に入て右の趣を奏しければ、漢王喜で宣けるは、寡人大將足ず士卒少うして全く將軍の調度に任す。韓信退て又教場に到り人馬を手配して、大將を定め法の如く習しめて、令に違ふものは、首を斬て衆に示す、諸軍肅然懼れ警め、調練四十餘日を經て各隊よく整々たりければ、先中軍を設て隊伍を備へ、日を定めて漢王を迎んとす。或日漢王百官を率て教場にきたり玉へば、韓信出迎へて敢て拜せず、臣甲冑を帶して候へば、禮を行ふ事能はずとて、手冊を取て獻り、陛下ねがはくは聖覽ありて後諸軍勢に示し玉へと云ければ、漢王乃ち近臣に命じて高らかに讀しめ玉ふに、其詞に曰、

西楚霸王、上逆天命、放弑義帝、暴虐下民、罪惡貫盈、神人倶憤。朕先入關、約當爲王、見此強逆理當征討、已立韓信爲破楚大將軍。爾等大小諸將各隊軍士、聽其節制、隨其指揮、代命行誅、不侯奏請、爾等用命者榮、不用命者死、惟專閫外、惟擅征伐、爾其知省勿違朕命。

當不戰而收一統封疆萬年王業。恭惟陛下大德寛仁神武不殺、體乾之健、行巽之權、一怒安民效文王之大勇、三軍用命爲湯后之東征、强楚莫我敢承、叛秦孰能爲敵、執玉帛者招徠萬國、舞干羽者歡動兩階、長治久安有見于今日、平危定亂擧措於目前、臣信忝居將閫無補報于涓埃、佩服王言、實有慚於軍務、仰託天威於咫尺、願籌全勝之謀、偶合廟算於須臾、實得不傳之祕、巨魁獻首元惡力擒、敢雪左遷之讎、用復先王之約、臣不勝激切惓惓之至、謹表上謝以聞。

漢王見了て甚だ喜び、韓信に向て宣けるは、卿が奏する所を見るに、深く朕が意に合へり、然れどもいづれの時か師を出すべき。韓信が曰、項羽都を彭城に遷して久く西を顧ず、諸侯離散して、國郡備なし、此時に乘て陛下御駕を促して師を出し玉へ、臣人馬を調て先に進ん。漢王の曰、朕久く東に歸んことを欲す、卿早く人馬を調練せよ、朕親ら征伐すべしとて、樊噲を先鋒とし、曹參を郡政司とし、殷蓋を監軍と定めらる。韓信命をうけて退き、教軍場に出て人馬の蒐引を見るに、皆軍法を知ず進退を諳ず、隊伍紛亂して嚴整ならざりければ、酈生に向て申けるは、此の如きの人馬は只城を固め陣を守らしむべし、無事の時は苦からず、されども敵に對して雌雄を爭ふに至ては、士卒は大將を知ず、大將は士卒を知ず、隊伍の排列陣勢の

て悔れども及びがたし、ねがはくは心を盡して國に報じ、陛下知遇の恩を報ずべしとて、退て蕭何に見え、若丞相の救ひ玉ふに有ずんば、某いかでか誅戮を免るることを得んと云に、蕭何答て曰、將軍は漢の大臣國王に封ぜられんこと近きにあり、如何なれば小人の行に效て身を輕輕しくし玉ふぞ、今より心を盡して忠を激し玉へと云ければ、樊噲拜謝して此より韓信が下知に從ひたり。

○韓信執法斬殷蓋

韓信は大元帥の職を受て平生の望を達し、心深く漢王の恩を感じて、早く天下を定んことを思ひ、表を捧て恩を謝して曰、

大漢元年秋七月日、破楚大將軍韓信上言。伏以觀時制變、仰聖德之宏規、入蜀不爭、實明王之妙算、念此艱難之久、姑從東征之宜、大畧方敷興情胥悅。竊謂項籍乃秦國之餘孽、爲楚地之獨夫、左遷諸侯、放弑義帝、僭謀大位、而都彭城、擅假大權、而號西楚、誅子嬰於軹道、阬降卒于新安、大失人心、陰招天怒、懋生聖哲之主、宏開桓赫之師、仗義正名、除殘去暴、實將救民于水火、用圖解厄于倒懸、簞食壺漿、倒戈卸甲、三秦可傳檄而定、六國

鹵莽、唐突、儀從、言多亂紀、矯惑軍心、國法攸歸、罪當刑戮。但念豐沛元勳、鴻門護從、姑擬寛宥、以昭庶績、如再違犯、鈇鉞難免、請自聖裁、故議。

漢王表文を見了て、樊噲功を恃で無禮をなす、罪免れ難しと云ども、群臣の乞に任せて暫く罪を宥し、大將軍の下知に從はしむべしと詔し玉ふ。近臣この旨を傳へて、樊噲を放ちければ、樊噲自ら大將軍の幕下に伺候して罪を謝す。韓信對面して申けるは、功を建るは臣子の職、分を守るは臣子の大節、汝功ありとも何ぞ妄に自ら傲り放なる、幸に主上恩を垂て汝が重罪を宥し玉ふ、今より謹で國に報じ、奇功を立て名を金石に錄し譽を萬世に傳へよ。樊噲拜謝して退き又朝に入て恩を謝しければ、漢王近く召て宣けるは、汝豐沛より共に義兵を起して、累に功勞を立たれば、朕が心片時も忘れず、宜く恭み謙て志を激し君臣の分を保べし、況や汝が智惠張良に如ず、人を知こと蕭何に及ばず、此二人身にかへてすゝめ擧たれば、韓信まことに天下の奇才なるべし、然るに今半途に車を遮て大言を放つ、甚だ人臣の禮に乖けり、若蕭何が救ふに有ずんば、朕一旦の怒に因て、必ず汝を誅すべし、汝一旦誅せられて數年の功勞を廢せば豈惜まざらんや、然る時は親戚の情を絕、君臣の義を傷て、我をして身を終るまで安からざらしめん、汝いかなれば不智の甚しきぞと宣へば、樊噲涙を流して曰、臣一旦あやまり

紀律、故茲詔命爾等悉知。

蕭何詔を捧て此由を披露しければ、樊噲傳へ聞て大に驚き、自ら過を悔て、周勃等を呼で申けるは、我昨日あやまりて法令を犯す、漢王詔を下して罪せんとし玉ふ、諸公わが爲に丞相に見て、鴻門に危を救し功を以て今日の罪を免れしめ玉へ。周勃申けるは、主上の大將軍を拜し玉ふこと實に天下國家の爲にして、一人の私にあらず、昨日韓信が議論を聞に、眞に大將軍の才なり、足下御車を遮て之を止玉ひしこと甚だ無禮に似たり、今詔して罪を正し玉へども、足下素より大功あれば、丞相定めて宥し玉はんとて、諸大將を伴て丞相府にゆき、哀み告て申けるは、樊噲は開國の功臣、一旦あやまりて法令を犯すと云ども、又大なる罪なし、願くは丞相一命を助けて諸軍の心を安じ玉へ。蕭何申けるは、主上褒中に困られて日夜破楚大元帥を求玉ふ、今韓信を得て眞に國家の大幸、諸大將も東に向て故郷へ歸ることを得ん、然るに樊噲無知にして無禮の言を出し、主上の怒を發して詔すでに出て罪當に誅すべきに定れり、我思ふに樊噲往日の大功一同に義兵を起せし舊臣なれば、力を盡して救ふべしとて、酈生を召で表書を書せ、漢王に奏して曰、

大漢丞相蕭何等、議得樊噲所犯罪過、君命下頒已有明禁、戎事重務、令不可犯。樊噲肆行

○蕭何議罪釋樊噲

次の日百官朝に出て、齊く賀を述ければ、武士樊噲を朝門の外に縛て詔を待。漢王宣けるは、樊噲は朕が親戚なれども、妄に其功を恃み儀仗を突て狂言を放つ、甚だ人臣の禮にあらず、昨日已に縛り置たれば、法を正して三軍の戒とせん。時に蕭何近く進で申けるは、樊噲が罪まことに誅すべしと云ども、功勞の臣なれば殺すに忍ず、況や新に大將軍を拜して功ある人を殺んことは軍中の不吉なり、しかれども樊噲が心服せずんば、韓信なにを以てか號令を行ふことを得ん、大王たゞ詔を下して明に樊噲が罪を正し玉へ、臣等宜く相議して國法を廢せず、韓信が威令のよく行はるゝ計をなさん。漢王然るべしとて即時に詔を下し、樊噲を誅すべき由を下知し玉ふ。其詔に曰、

朕拜韓信、爲大將、據蕭何之三薦、會張良之角書、稽其抱負、聽其議論、知其爲有用之眞才也。今其職專闔外、東征伐楚、允協輿情、實合公議、當登壇行禮之際、前導肅淸已傳嚴令、乃有樊噲獨恃功高、恣肆狂悖、抗違國法、略無忌憚、一人作倡衆人罔定、矯惑軍心、有乖大體、下詔爾相國蕭何等、從公會議停當功難掩罪、宜當誅、懲此一人以彰

信が曰く、大王の勇猛なること項王に比せば如何ん。漢王の曰、われ爭か項王に及ばん。韓信が曰、臣も亦大王の項王に及はざるを知、しかれども臣嘗て項王に事て能その人となりを知り、今大王の爲に之を說ん。項王聲を揚て叱るときは千人みな廢る、然ども賢人を用ること能はず、是匹夫の勇なり、項王人を見て慈愛恭敬言語嘔々として甚だ親きが如く、或は人の病あるを見ては涙を流して食を分つ、然れども人の功ありて封爵を與るに至ては、手に印を握て印刓れども予ず、此所謂婦人の仁なり、項王天下に霸として諸侯を制すと云ども、關中に居ずして彭城に都し、義帝を弑して民を殘害す、名は霸王と云ども實は天下の心を失へり、今大王はよく天下の武勇に任ず、何ぞ誅せざる所あらん、天下の城邑を分て功臣に賜ふ、何ぞ服せざる所あらん、有名の師を興し故鄕を思ふ士卒を率て東に向ふ、何ぞ破らざる所あらん、三秦王秦の士卒を領する事數年、殺ところ數を知ず、項王秦の士卒二十萬を坑にする時、秦の民怨み骨髓に入、章邯、司馬欣、董翳等秦の地に王たりと云ども、民唯楚の强を畏れて心服せず、大王は關中に入てより秋毫も犯ず、法を三章に約して秦の民みな喜び、大王の天下に王たらんことを仰き願はずと云ものなし、いま大王兵を起して東に向はゞ、三秦は檄を傳へて定むべし。漢王これを聞て限なく喜び、韓信を得ことの晩きを悔み、壇を下て朝廷に歸り玉ふ。

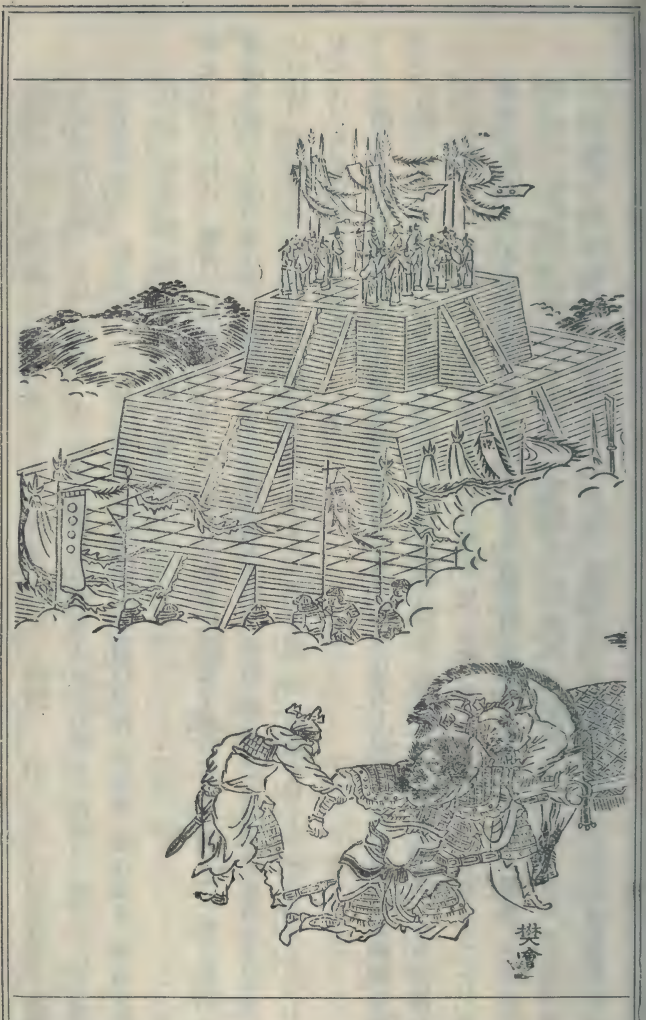
取財、開宮戀女、屠戮咸陽、而百里火飛、焚燒阿房、而萬民恐怖眞爲張横、實乃獨夫天厭
神怒死有餘、辜臣邦欲建義旗、拜信爲將、假弓矢以定四方、執鈇鉞而專殺伐、有鬼
神不測之機、抱滄海難度之志、國士無雙人中豪傑用以爲將、允孚公議、自天申之、保佑
命之、尚享。

祝文了りければ、漢王西に向ひ韓信を北に立て、親ら虎符、玉節、金印、寶劍を捧て、韓信に授けて宣けるは、今將軍を破楚大元帥に封ず、此より上天に至り下淵に至るまで悉く將軍の制に任す、若その虚を見ては行、その實を見ては止り、三軍を以て多を恃み輕々しく勢をなすこと勿れ、授命を以て重しとして必死をなすこと勿れ、身の貴きを以て人を賤んずること勿れ、獨謀て衆に違ふこと勿れ、强辯にして自ら飾ること勿れ、士卒と甘苦を同し三軍と寒暑を共にして欽で怠ること勿れとて、南面して坐し玉ふ。韓信再拜して謝して申けるは、古より國不可從外而治、軍不可從中而御、二心不可以事君、疑志不可以應敵と云り、臣已に大王の命を受て鈇鉞の威を專にす、豈力を盡し心を竭して知遇の恩に報ぜざらんや。漢王大に喜んで宣けるは、蕭何しきりに將軍の大才を稱す、將軍何の策を以てか寡人に敎ん。韓信が曰、大王いま東に向て衡を爭ひ、項羽に敵せんと欲玉ふか。漢王の曰、われ久く此心あり。韓

惟神知興衰、識成敗、達治亂、明去取、數雖有定而歸則在德、故強秦暴虐神絕其祀、項籍兇狼天豈冥祐。生民塗炭地土荒殘、爲人上者欲解倒懸之危、須仗希世之才、職專征夷、莫如韓信、仰賴神祇翊衞、啓迪行翼、吐納風雲、噓咈變化、拯救下民匡扶帝業、竭誠惟享、昭格于斯、尙享。

祝文了りければ、蕭何鈇鉞を捧て曰、漢王命あり將軍に鈇鉞を錫ふ、自今以後天に奉て征討し、無道を誅して民の爲に害を除き、天下の爲に福をなせ。韓信跪て之を受、又左右の人に與へければ、引禮官迎へて第三重の壇に登る。漢王北に向て龍章鳳篆を捧て中和の曲を奏せしめ玉へば、大史官祝文を讀で曰、

大漢元年仲秋戊寅朔丙午日、褒州漢中王劉邦、敢昭告于昊天上帝后土神祇曰、臣邦仰賴天地之德百神之威、肅清海宇、鎭撫萬姓、爲國求賢、禮敦三薦、故古人云、雖有强兵若無智將安得坐收人心風行八表也哉。是以拜韓信爲大將、專茲征伐之權、實爲生民之計、蕩天下之妖氛、扶乾坤之正氣、効黃帝拜風后、顓頊用武后、高辛拜祝融、大舜拜皐陶、殷湯拜伊尹、周武拜呂望、自古國亂浸夷無不拜將興師以伐不道。於今項籍乃亡秦之續橫暴西楚、乘鴟張之勢、踵崩壞之餘、大肆兇惡、恣意狂悖、背約爲王、弑君獨霸、刧墓


樊噲

漢王築壇
拜韓信
漢王
夏侯嬰
蕭何

亂る、今もし罪を正さずんば、諸大將みな樊噲が無禮に效ん、然るときは何を以てか楚を破んや、樊噲一人を惜で國家の大事を誤り玉ふな。漢王これを聞て大に怒り、武士に命じて樊噲を縛らせ、後日に罪を正さんとて、御車を進めて已に壇の前に至ければ、文武の百官を位階に依て立列ね、妄に諠して禮を失ふ者は首を刎んと下知して、鐵砲を三聲響しければ、引禮官韓信を引て第一重の壇に登る。滕公夏侯嬰は西に向ひ、韓信は北に向て立ける時、太史官 祝 文を讀で曰、

大漢元年仲秋戊寅朔丙子日、褒中漢王遣汝陰侯夏侯嬰、敢昭告于五岳四瀆名山大川之神曰、嗚呼天生衆庶、俾牧司之、牧司不善厥罪于誰。呂政暴虐、荼毒黔黎、位嗣項籍、子類不遺、弑君阬卒大逆罔辭。臣邦不忍、特建義旗、拜信爲將、救民立基、維神其冀、鑒玆在玆、尙享。

祝文すでに讀了りければ、夏侯嬰弓矢を捧て申けるは、漢王命あり弓矢を賜ふ、之を以て征伐を專にせよ。韓信 跪て此を受、左右の人に授ければ、引禮官又韓信を迎て第二重の壇に登る。丞 相 蕭何は西に向ひ、韓信は北に向て立ける時、太史官又祝文を讀で曰、

大漢元年仲秋戊寅朔丙子日、漢王遣蕭何相國、敢昭告日月星辰雷雨歷代聖帝明王之神曰、

に隨ひけるが、周勃等に向て申けるは、我等千辛萬苦を受て主上に從こと已に三年、いかなれば此餓夫に及ざる、大丈夫爭か其辱を受んやとて、急に馬より下て漢王の車の前に拜伏し、頓首して申けるは、御車を暫く住よ、臣一言を奏すべし、韓信は淮陰の餓夫、漂母に食を乞、胯をくゞりて辱をうけ、楚の執戟郎と成て今漢に來り、言を巧にして人を欺く、未だ一寸の功をも見ずして、大王親ら迎へて大將軍に拜し玉はゞ、項王これを聞て大に笑ひ、天下の諸侯も漢中に人なしと嘲ん、況や御方の軍勢韓信が大將軍となる由を聞て、氣を失ひ力を落さずと云者なし、人の心一たび變ぜば、何を以て三秦を平げ楚を滅んや、大王よく察し玉へ。漢王これを聞て少し猶豫する心ありければ、蕭何走り出て申けるは、樊噲無用の言を吐こと勿れ、鋒を衝て敵を破ることは汝等力を出すとも、策を運して勝ことを決し、鬼神不測の處に至ては、韓將軍より外に知ものあらじ、汝等たゞ韓將軍に從て下知を聞べし、如何なれば無用の舌を動して諸人の心を惑す、我不才なれども丞相の職に居て、大將軍を薦て事すでに定れり、汝みだりに小なる功を恃み、主上の前に出て無禮をなす、其罪決して宥しがたしとて、漢王に向て申けるは、早く樊噲を縛て獄に下し、今日の禮了て後首を刎て國法を正し玉へ。夏侯嬰も進み出て奏して曰、已に主上の詔を受、御車を備て行列を守る所に、樊噲みだりに大言を放て法を

漢王見了て、即時に灌嬰を奉行とし、一月を限て壇を築せらる、此とき韓信が大將軍となることと未だ外に披露なかりしかば、漢の諸軍壇を築くを見て、必ずよき大將軍を得べしと喜あへり。樊噲申けるは、我漢王と豐沛より起て關中に入、鴻門の會に危きを救て、この險阻の地に入、共に甘苦を同して誠に社稷の臣なり、今日壇を築て大將軍を拜し玉ふ、我ならでは有まじきと思ふなり。諸軍申けるは、只丞相の一人の大將を薦玉ふと承りしが、誰人と云ことを聞ず、若舊功の臣ならば、樊噲、周勃、曹參其外に出じとて、數日を經る處に、壇已に成就しければ、灌嬰朝に出て奏聞す。漢王この由を聞て、蕭何に宣ひけるは、壇すでに成就せり、日を擇で禮を行はん。蕭何が曰、臣すでに吉日をトひ定たり、先百姓に命じて官道を淸めさせ、諸大將士卒の手分を定て武具を調へ、大王齋戒して身を淸め、自ら韓信を迎て壇に上せ、大將軍に任じ玉へとて、用意こと〴〵く備りければ、已に其日に至て、漢王文武の百官を率て丞相府に到り、韓信を迎へて車にのせ西門より出玉へば、兩邊に立列ねたる旗は雲の閃が如く、金を鳴し鼓を打て、文官は峩き冠を戴て左に列り、武將は盔を映し甲の袖を重て右に進む、前代未聞の壯觀なり。初め諸の將士壇を築て大將軍を拜すと云を聞てみな勇み喜しに、漢王の自ら丞相府に到て迎へ玉ふを見に、淮陰の韓信なりければ、上下みな驚て色を失ふ。時に樊噲は漢王の後

て重しとし玉へども、臣必ず韓信が去んことを知る。漢王の曰く、しからば如何なる禮を用てか留べき。蕭何が曰く、大王もし韓信を留んと欲し玉はゞ、齋戒して日を擇び、高く壇を築て天地を祭り、黄帝の風后を拜し、武王の呂望を拜せしが如くにして、大將を拜するの禮を成さん。漢王の曰く、卿宜く事を議せよ、我必ず從はん。蕭何拜謝して宅に歸り、先この由を韓信に告て、壇を築く法を圖に寫し、六七日を經て圖すでに出來ければ、朝に出て漢王に奏す。其法に曰く、

壇高三丈象三才、濶二十四丈象二十四氣。壇中立二十五人、各穿黄衣、手執黄幡豹尾鈇鉞等件、按中央戊己土、以爲勾陳之象。壇東列二十五人、各穿青服、手執青旗、按東方甲乙木、以爲青龍之狀。壇西列二十五人、各穿白服、手執白旗、按西方庚辛金、以爲白虎之狀、壇南列二十五人、各穿紅服、手執紅旗、按南方丙丁火、以爲朱雀之狀、壇北列二十五人、各穿黑服、手執黑旗、按北方壬癸水、以爲玄武之狀。壇有三層、各具祭器祝文、週圍執雜色旗者三百六十五人、按三百六十五度、雜旗之外立七十二人、皆長大壯士、各執劍戟、按七十二候、壇之前從北而南、左右列文臣武將、中門築黄土甬道、直至壇下、四邊立四面鎮靜牌、每牌之下用一員牙將、立二十名軍士、如有諠譁失隊伍者、即時擒拏以軍法斬首、又用一員上將御車、出西門十里爲壇所。

通俗漢楚軍談　巻之六

○漢王築壇拜韓信

蕭何、夏侯嬰爭ひ諫めて、韓信を薦れども、漢王尙重く用玉はざりしかば、日夜心力を苦めけるに、韓信ある夜張良がすゝむる割符を出しければ、蕭何喜ぶこと限なく、次の日朝に出て漢王に見え、張良が割符を獻りければ、漢王大に驚て宣けるは、汝しばらく諫れども、我なほ心疑ひしに、何ぞ圖ん張良が割符あらんとは、天下の豪傑見る所みな同じ、扨は韓信實の大才あり、我眼闇して卿が忠愛の意に違へり、今日始て過を知、速に韓信を擧て大將とすべし。蕭何申けるは、臣が賢才を薦ること專國の爲にして一人の私にあらず、大王今張良が薦むる割符を以て、臣が申ところ濫ならざるを知玉ふ、然れども今韓信を大將とし玉はゞ、彼必ず此に任らじ。漢王の曰、大將に任じ重く祿を與て留むべし。蕭何が曰、もし韓信を留て用んとならば、大將を拜するの禮を盡し玉へ。漢王の曰、われ此處へ召て面のあたり封ずべし。蕭何が曰、大王素より無禮にして人を慢る、今大將を拜すること小兒を呼が如し、大王は官祿を以

たゞ一騎にて走りたるは、袋中の虚實を見すかし、楚に歸て范増に告ん爲ならんかと疑て、此の如く問ふならん、丞相日夜國の爲に心力を盡し玉ふ、若疑の御心あらば、某一物を出して諸人の心を安んぜんとて、懷より張良が授し割符を出しければ、蕭何怪んで燈を挑て披き見に、張良と別る時共に約束せし割符なれば、こは如何にと驚き、拜伏して申けるは、足下こゝに來て何とて久く此を出さず、我に晝夜心を苦しめ玉ひしぞ、漢王これを見玉はゞ、心の疑豁然として解ん。韓信が曰、某少より貧賤なれば、恐くは新に漢に來て一寸の功をも成ず、諸人決して疑ひ輕んぜん、此ゆゑに且く張良が割符を藏して、諸公の用べきを知て勸め擧玉ふを待、いま互に心を知て相交ること深し、此に至て割符を出さば、諸公の心いよ〳〵定らんと思ふ故なり。蕭何再拜して曰、足下は眞に天下の豪傑なり、尋常のなす所にあらず、明日この由を奏せんとて、先夏侯嬰に告知せ、相別れて明るを待。

未遭際、經濟隱郊墟、聖主空前席、元臣遠慮抒、嗟予駑力蹇、懷抱未曾舒、何日推輪轂、
絲綸罷釣漁、三秦傳檄定、群寇指揮除、破楚淸寰宇、勳勞首獨居。

韓信謠ひ了て夜痛く深ければ、漸く寐んとする處に、蕭何使を以て招き來らしむ。韓信衣を整て對面し、深更に及て丞相なほ寐玉はぬかと云に、蕭何申けるは、國事心に繫て枕を安じて睡ること能はず、足下楚にありし時、范增一人よく足下の才を知て項王にすゝむ、足下その時いかなる良策をか論じ玉ひし、願くは聞ん。韓信が曰、楚に在て范增より外に才を知ものなし、累にすゝむれども項王用ず、後に漢王棧道を燒玉ふと聞て、某表を上て此の如くに諫たりとて、表文の趣を詳に語るに、蕭何驚て申けるは、項王もし足下の表文を用ひば、楚の天下磐石よりも安して、大王空しく褒中に死せん。韓信が曰、項王某が表を扯やぶりて用ざりしかば、此より楚を去の心ありしに、後に陳平が計にて、范增彭城へ赴んとす、別に臨で項王に三箇條の警を遺し、第一は漢王を褒中へ入しむべからず、第二は咸陽を離るべからず、第三は重く韓信を用よ、用ること能はずんば早く殺せと云り、某すでに項王の用ること能はざるを知たれば、了に范增に殺されんことを恐て楚を逃て漢に歸す、他の心あるに有ず、丞相夜ふけて此事を問玉ふは、范增計の深き者なれば、某を間者にして褒中の樣を聞しめん爲かと思し召付て、又昨日

只その空言を聞て、元戎の重きに擢んことは我なんぞ容易にせん、丞相國の爲に深く此理を慮れ。蕭何が曰、大王の宣ふところ確論に似たれども臣が意と相違せり、孔子陳蔡に困られし、能なきにあらず、匡人に圍れし、勇なきにあらず、卒に行に老たる、是器用なきにあらず、今漢信が辱を受け食を乞たるは、乃ち君子の時を得ざるなり、官執戟郎に止るは、未だ其主に遇ざるなり、臣よく韓信が天下の奇才にして、實に元戎となすべきを知、たゞ其辯舌を取のみにあらず、臣丞相の職に在て、專ら賢を求ることを掌る、今賢を見て擧ること能はず、賢を擧て重く用ること能ず、此ゆゑに晝夜心を苦め、死を顧ずして大王と諫め爭ふ、願くは能察し玉へ。漢王の曰、今日已に暮に及べり、卿等且く退け、明日早天に出て朝廷にて事を決せん。

蕭何、夏侯嬰退て韓信に對面し、韓王明日事を決して足下を用んと宣へりと語に、韓信申けるは、恐くは漢王なほ猶豫して用玉はじ、二公樣々に心を勞して薦め玉ふとも皆徒事ならん。

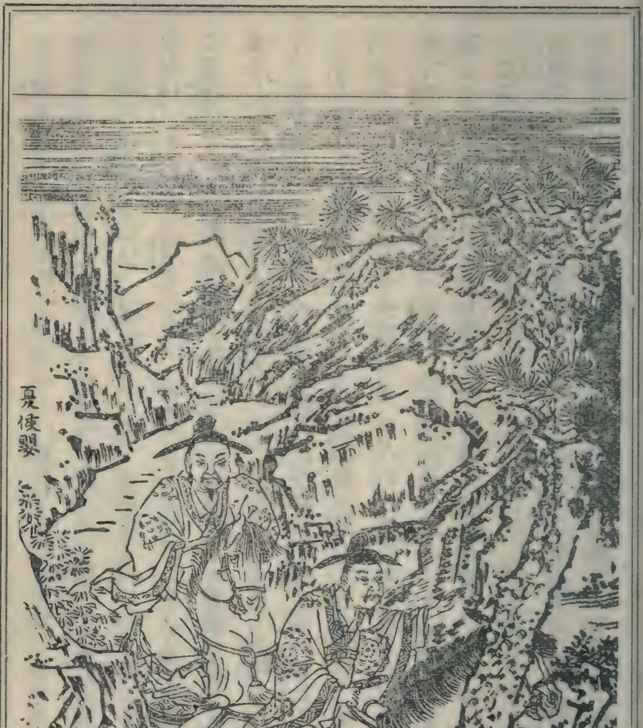
蕭何が曰、漢王もし足下を用ずんば、我等必ず官を棄て去んとて相別れければ、韓信は獨り蕭何が國の爲に心を盡すことを感嘆し、漢王の我貧賤なるを嫌うて重く用ざることを思ひ、詩を作て謠て曰、

趙括爲二秦將一、曾聞レ讀二父書一、世家循二閥閲一、門第笑二寒廬一、虎陷爭二拏兎一、龍藏見二小魚一、風雲

が曰、諸將は得やすく、韓信が如きは國士無雙なり、大王長く漢中にて老果んとの御心ならば、韓信が去をも顧ることなし、若項羽と衡を爭て天下を圖の御心あらば、韓信ならでは叶ふまじ、大王固く韓信を用玉はずんば、臣冠を脱官を罷て故郷へ歸り、他日項羽が爲に擒となることを免れん。夏侯嬰申けるは、丞相の云ところ實に國家の爲にして一人の私にあらず、大王その忠言を納て重く韓信を用玉へ。漢王の曰、汝等たゞ彼が議論をきゝ、僅に一節の能あるを見て、此の如くに驚く、我思ふに大將たるの道は、係る所きはめて重く、國家の安危、三軍の存亡、一人の上にあり、今一旦かる〴〵しく用て大將とし、わが三十萬の勢を授け、七十人の文武を統させて、此人の下知を聞しめんに、若汝が申如くに、三秦を下し項羽を破て天下を定る時は、誠に深く汝が今日薦め擧るの功を得たりとせん、もし或は議論に巧なれども行ふこと能はず、事に臨で足ざる時は、獨り我等が擒となるのみにあらず、三十餘萬の將士みな罪なきに死を受ん、其とき悔とも及ぶべからず。我かる〴〵しく韓信を用ひざるは此なり、況や韓信親死して葬ること能はず、是計なきなり、淮下に釣して漂母に食を乞、これ無能なり、市に胯をくゞりて鄉人に賤めらる、是勇なきなり、三年楚に事て官わづかに執戟郎に至る、是器用なきなり、古人も有二諸中一必形二諸外一と云り、韓信もし大將となるの徴あらば我必ず用ふべし、

の褒中に死果ることを免れんとて、相伴て丞相府に歸りけり。此とき朝廷には、百官みな丞相の出ざるを怪み居ける處に、周勃きたりて漢王に奏しけるは、關東より從ひ來れる諸大將、この間故鄕を慕てぬけ〴〵に逃去もの數を知ず、丞相蕭何も只一人走り出て、兩日に及べども歸り候はず。漢王大に驚き怒て宣けるは、蕭何豐沛より我に從て義兵を起し、今に至るまで片時も離るゝことなかりき、諸大將の逃去ものは、或は招き集て用ひたる者、或は勢盡て降參したる者にて、皆中途より相從へば、今日にげ去も怪むに足ず、蕭何は我と君臣の分あれども實は父子の如し、如何なれば今われを捐たるぞとて、起坐安からず、飮食倶に廢れて左右の手を失へるが如く、茫然として居玉ふ處に、禁門の大使きたりて、丞相蕭公一人歸り玉ふと奏す。漢王これを聞て半は喜び半は怒り、急に蕭何を召して、豎子われに從ふこと數年、いまだ片時も離るゝことなし、諸大將の逃去は怪むに足ず、汝如何なれば逃去たるぞと詈り玉ふに、蕭何申けるは、臣久しく大王知遇の恩を受て、漢國の丞相と成たれば、何ぞ心を變ずべき、臣が兩日出去たるは、夜を日に繼で逃去たる人を追かけて召かへし、大王の爲に天下を定るの計を成ん爲なり。漢王の曰、逃去たる人は誰人ぞ。蕭何が曰、淮陰の韓信なり。漢王又笑ひ詈て宣けるは、諸大將の逃去たる者多けれども、汝了に追ず、今韓信を追たりと云は詐ならん。蕭何

河を渡るならんと思ひ大音あげて、韓將軍なにとて情なき、相交ること已に一月、一旦辭せずして去玉ふは如何なる事ぞと呼はり、急に馬を馳て引住ける處に、跡より又馬を飛してきたる者あり、誰ぞと問ば、夏侯嬰と答ふ。蕭何喜で問て曰、滕公も韓將軍を追て來れるか。夏侯嬰が曰、某朝より退きたるに、倉門の大使あわたゞしく來て、韓將軍の東門より走たる由を報ず、我料るにこの間漢王の重く用玉はぬを見て、他國へ走るものならんと思ひ、揉にもんで來りしに、幸に丞相早く來て留玉へり。韓信これを聞て感嘆して申けるは、二公は眞に純臣なり、世の宰相たる者は、或は賢を嫉み能を妬み、獨り權を專にして諂佞を好み、己が見に偏執して人の言を用ひず、二公の如きは君の顏を犯して諫め爭ひ、國の爲に忠を盡し、力を極て賢才をすゝめ、己を屈して士に下る、古今いまだ希なる所なり、漢の天下必ず興るべし、況や今某を追て朝服をも脫ず、夜中に此山路を來り玉ふ、某何の才ありてか、此の如く慇懃なるや、願くは心を傾て門下の士とならん。蕭何その手を執て申けるは、古より士遇二知己者一死と云り、我深く足下の伊尹、呂望が才ありて、楚を滅して漢を興さんことを知ども、只漢王素より足下の貧賤なるを知て、未だ其大才あることを知玉はず、願くは足下暫く忍でわが薦め擧るを待玉へ、我夏侯嬰と力を盡して漢王にすゝめ、漢王固く用玉はずんば、我等も官を罷て故鄉に回り、こ


夏侯嬰
蕭何

蕭何月夜追韓信
韓信

て昨晩より馬を用意せしめ、夜中に旅装をなして、五更に京の門より走り玉ひしが、一首の歌を壁の上に書置玉へり。蕭何これを見に、その歌に曰、

日未明兮小星競光、運未遇兮才能晦藏。霜蹄蹇滯兮身寄殊鄕、龍泉埋沒兮若無鈍鋼。芝生幽谷兮爲誰與採、蘭長深林兮孰含其香、何得美人兮願從與遊、同心斷金兮爲鸞爲鳳。

蕭何歌を見て、足ずりして申けるは、我累に薦れども、漢王用玉はずして韓信つひに逃去り。今もし追蒐けて召回さずんば、天下の大事を誤るなりとて、從者五六人を引具し、朝服をも脱がず傳馬に乘りて京門に到り、番の者共に向て、汝等銀鬃馬に乘て劍を佩たる人を見ずやと問に、今夜の五更に此門を出玉ひしが、今は五十里も阻り候んと申す。蕭何いよ〳〵馬を早め、道ゆく人に逢うて一人の將軍を見ずやと問に、劍をさしたる人、銀鬃馬にのりて路を急で東へ走りたるが、六七十里も阻んと答ふ。蕭何は朝より退て、未だ朝餉を用ざりければ、民の家に入て飢を救ひ、馬を打て追かくるに、日すでに晩に及て、漸く寒溪の河邊に到りけり。時七月の半にて、夜靜にして江寒く、山路甚だ險して、此間の長雨に秋水溢れて渡るべき樣なく、山の端よりほのめき出る月影に、淺湍を尋ねけるに、遙の下に馬の斷ふ聲しけり。是必ず韓信が

信が才と比て其後に大元帥となさん。蕭何已ことを得ずして丞相府に歸り、韓信を招て天下の事を論じ、棧道を出て三秦を定め、楚を伐六國を定むるの計を問に、韓信色を正して申けるは、我素より丞相は能兵法に通じ玉ふと思ひしに、今これを見ば丞相その實を知玉はず、凡そ兵を用るの大事は、相レ機而動、隨レ時而變、預め言を以て論ずべからず、水の流れて形を制するが如し、戰ふに因て勝ことを知、鬼神も其妙を測べからず、父子も其旨を達すべからず、事に臨んで自ら妙計ありと云ければ、蕭何これを聞ていよ〳〵重んじ、深更に及で別れけり。

○蕭何月夜追ニ韓信一

韓信は家に歸て、此まゝにては漢王重く用玉はじ、たとひ張良が割符を出したりとも、衆人を服することを得じと思て、一の計を案じ出し、門を守る者に命じて馬を用意せしめ、我今夜遠方へ行んとて、夜未だ明ざるに、東門より出て走りけり。番の者共これを見て、急ぎ丞相府に行て告ければ、此時蕭何は朝より歸りけるが、此由を聞て大に驚き、この人もし逃去ば、我輩みな褒中にて老果べしとて、急に其家に行て見れば、門を守る者申けるは、韓大人我等に命じ

が曰、今こゝに大賢人あれども大王敢て用玉はず、是目前の近きを遣て、却て遠を求玉ふは誤なり。漢王の曰、大賢人は何くにかある、丞相すゝめば我必ず擢用ん。蕭何が曰、臣すゝめ擧んと欲すれども、又大王其人の貧賤なるを嫌て重く用玉ふこと能ず、却て賢人の心を失んことを恐る、然る時は四方の名士も爭か來て大王に服すること有ん。漢王の曰、丞相多く言こと勿れ、賢人とは誰人ぞ。蕭何頓首して申けるは、大賢人は淮陰の韓信なり。漢王の曰、卿さきに兩度まで此人を薦む、我この故に治粟都尉に擢づ、何ぞ用ずと云ん。蕭何が曰、これ等の官は韓信が才を盡に足ず、必ず大元帥の職に封じ玉はゞ、韓信長く此國に留ん、然ずんば又他國に去ん。漢王の曰、爵不レ可二以濫加一、祿不レ可二以輕々與一、韓信一月の内に兩度まで擢らる、今尺寸の功もなきに元戎の大任を加へば、舊より我に從て功勞ある大將みな怨み叛て、我賞罰の明ならざるを怒ん。蕭何が曰、古より聖帝明王の人を用ふる材に隨て之を用ひ、力を量て職を授く、韓信は棟梁の大才、いま大王これを用ること小なり、臣この故に累に薦む、舊より大王に從ふ豐沛の諸大將は功勞ありと云ども韓信が才に及ず、豈これを以て彼に較て輕重を失んや。漢王の曰、丞相しばらく待、張良われに別るゝ時、天下を尋て破楚大元帥の人を求め、若その人を得ば薦め來さんとて割符を遣せり、數月の内に張良が薦むる人あらば、韓

るに、韓大人職に遷り玉ひてより、此の如きの煩なし、願くは此人を長く住て此の賦稅を掌しめ玉はゞ、我等無窮の賜ならん。蕭何笑て曰、韓大人は賦稅を掌る如の才にあらず、汝等且く歸れ、我克之を議すべしとて、心の中に思ひけるは、韓信は等閑の輩に非ず、可レ大可レ小宜しからずと云ことなし、我力を盡して薦め擧んとて、次の日朝に出ければ、漢王近く召て宣けるは、我この間夢見も凶く、父母一族の事を思て心樂ず、何の日か東に歸ることを得ん、此地は久く住る處にあらず。蕭何が曰、昔し齊の景公獵場より歸り、晏子に向て、我この比不祥の夢を見て心不快なりと宣ふに、晏子申けるは、如何なる夢をか覽玉ひし。景公の曰、われ山に上れば虎を見る、澤に入ば蛇を見、是いかなる故ぞ。晏子が曰、山は元より虎の居ところ、澤は乃ち蛇の栖なり、何ぞ不祥とするに足ん、今國に三の不祥あり、未審、わが王知玉へるや。景公の曰、われ之を知ず、願くは聞ん。晏子答て曰、國に賢あれども知ず、一の不祥なり、知て用ること能はず、二の不祥なり、用ふと云ども擢て重任を授ざる、三の不祥なりと云り、今大王夢見の惡きも、賢士を重く用玉はざる故なり、臣つねに恐る、項王もし范增が計を用ひ、大軍を起して西に向はゞ大王何人を以てか防ぎ玉はん、是臣が日夜の憂なり。漢王の曰、我この處に來てより、遍く四方の賢を求む、國に賢あらば我何ぞ重く用ざるの理あらん。蕭何

に歸んことを思へども、施べき計なし、此に因て朝に出ることをも忘たり、明日早に出て奏を聞んとて、次の日朝に出玉へば、蕭何百官を率て國の政を議す。漢王宣けるは、我この間頻に故郷を思へども、未だ良計を得ず。蕭何が曰、東に歸ることは難からず、必ず破楚大元帥を得にあり。漢王の曰、われも常に之を思ふ。蕭何が曰、大王外に求ることなく、只韓信を用玉はゞ、必ず楚を破て天下を定めん。漢王の曰、韓信もと貧にして一身を養こと能はず、豈大元帥となりて項羽に敵することを得んや。蕭何具に韓信が算法妙に通じて一毫も差ことなく、陳を出して新に易の說を奏しければ、漢王の曰、これ一節の能なり、何ぞさのみ驚き異ん。蕭何が曰、一節の能と云ともこれを以て其餘を知べし、韓信は誠に大將の才なり、必ず誤り玉ふこと勿れ。漢王の曰、丞相しきりに韓信をすゝむ、我いま治粟都尉に陞すべしとて、近臣に命じて詔を傳しめ玉ふ。韓信これを聞て欣然として職に移り、數年倉の奉行として私ありし者を悉く追出し、斗斛の出入、賦稅の數を正して、民の賂を取しめず、明白なること毫釐も差ふこと無りければ、半月の内に百姓みな悅服して其公なるを感じ、浩る賢明の大人を得たれば、我等急々に貢米を納んとて、先を爭て來り收め、丞相府に行て訴けるは、我等貢米を收るに、今までは倉の奉行に賂の錢を費し、或は罵り辱られて、却て半年も上納を滯りた

侯嬰心安からず、漢王の重く用ざるを患けり。韓信連厫官に任ぜられて、倉中の米を點檢し、多きこと山の如しと云ども、その數を開除して一算も差へざりければ、下吏の者ども拜伏して、此職を司る人幾許と云こと無りしかども、大人の如く算法の明なるを見ずと云ければ、韓信笑て、量に此は一僕隷のする職なりと云けるを、蕭何傳へ聞て急に來り見えて申けるは、我足下を薦て大元帥に任ぜんと思へども、漢王いまだ大才を知ずして、且く此小官を以て試玉ふ、足下この職を司てより、多くの倉に山の如く堆き米をこと〲く點檢して、一算も差ことなきは、如何して此大數を知玉へるぞ。韓信が曰、算に小九の數、大九の數、丈尺の數あり、若よく此に通ずる時は、四海九州と云ども此算法の外に出ず、況や倉中の米を算るをや、昔し伏義の卦を畫せる六十四數、千變萬化、天地の度數も豈この算に洩ることあらんや。蕭何驚嘆して已ざりければ、韓信又申けるは、倉中に年を歷て陳く朽たる米多し、今陳を出し、新に易て民を濟ば、公私兩ながら便あらん、此又宰相の事なり、丞相ねがはくは之を行へ。蕭何喜び謝して曰、足下の教時の宜に合へり、我明日大王に奏して施行せんとて、丞相府に歸りけるが、心の內いよ〱韓信が才を奇なりとし、朝に出て大王に見んとするに、此數日朝に出玉はずと申ければ、內宦を以て奏すべきことありと云しむるに、漢王宣けるは、我この間しきりに東

しば計をすゝむれども項王用ず、此ゆゑに楚を棄て漢に歸す、臣等その才を試るに、古の伊尹、呂望、孫子、吳子にも劣ず。漢王笑て宣けるは、我沛縣に在し時曾てこの人を聞り、素り貧賤にして胯をくゞりて辱をうけ、漂母に食を乞て鄕人に輕じ侮れし者なり、丞相みだりにこの者を大將とせば、三軍服せずして、天下の諸侯笑ひ嘲るべし。蕭何が曰、古の大將貧賤より出る者多し、何ぞ貧富を以て人を論ぜんや、此ゆゑに伊尹は莘野の匹夫、太公は渭水の釣叟、甯戚は抱車の豎子、管仲は監車の囚夫なりしかども、能用ふる人あれば其才を展てつひに大事を定たり、韓信もと貧賤より出たれども、胸中の才まことに天下の奇士なり、大王もし用玉はずんば、彼必ず他國に去ん、是連城の璧を棄、和氏の寶を碎に同じ、漢王ねがはくは臣が言を聽て、急に韓信を用ひ玉はゞ、項王を滅して天下を得玉ふべし。漢王の宣く、汝等すでに賢士を薦む、我なんぞ用ざらん、召來れ對面せん。蕭何乃ち禁門の大使に命を傳て韓信を召しむるに、韓信心に思ひけるは、漢王われを召こと此の如く輕々しければ、決して重く用こと能はじ、且く對面して其樣を見べしとて、內に入て禮をなしければ、漢王宣けるは、汝千里を辭せずして來る、未だ其才を試ざれば、急には重く用がたし、今汝を連廒官とす、粮米を點檢してその職を怠ること勿れ。韓信少も慍れる色なく、恩を謝して退出しければ、蕭何、夏

勝負の機を決し、不窮の智を藏して、奇正相生じ、陰陽終始の分を明にして、然して後に仁以て之を容れ、禮以て此を立、勇以て之を裁し、信以て此を成、此の如くなる時は、成湯の伊尹、武丁の傅說、渭水の子牙、燕山の樂毅、みな我師なり、是某が大將たるの道にして、平日の養ふ所なれば、實を以て告申なり。蕭何これを聞て心深く奇なりとし、漢王まことに洪福あり、此の如きの大將を得玉へりとて、心の內喜で寐ること能はず、往日張良と別るゝ時、割符を我に與て、必ず破楚の大元帥たる人を尋て薦め來さんと云しが、韓信誠に大元帥に任ずべき者なりと思ひ、慇懃にぞ持成ける。この時韓信は、猶張良が贈し割符を出さず、我たゞ自己の才を顯して、重く用らるゝ期に臨んで割符を出し、古人求進の難に效んとて、數日蕭何が家に留り居たり。

○韓信爲治粟都尉

蕭何、夏侯嬰二人漢王に見えて申けるは、此ごろ招賢館にて一人の賢士を得たり、古今に通じ韜略を諳じて破楚の大元帥とすべき者なり、願くは大王重く用ひ玉へ。漢王宣けるは、賢士は何の人ぞ、姓名を聞ん。蕭何が曰、淮陰の韓信と申者なり、曾て楚に仕て執戟郎となり、しば

夏侯嬰
蕭何
韓信

蕭何深奇韓信才
漢王

ありて心緩もの、剛毅にして自ら用る者、懶懦にして人に任す者、この十過あれば大將とするに足ず、故に善兵を用る者は五才を具し、十過を去て攻に破ずと云ことなく、戰に勝ずと云ことなく、謀るに成ずと云ことなく、以て天下に敵なかるべし。蕭何が曰、當世の大將たる者は如何ん。韓信が曰、今の大將たる者は、或は計ありて勇なく、或は勇ありて計なく、或は己が能を恃んで人を用ず、或は外溫恭にして内慢り、或は高位に矜て貧賤を惡み、或は性驕傲にして下問を恥、或は己が能を揚て人の善を掩ひ、或は己が過を藏して人の非を彰す、是みな大將たる者の弊にして、今の大將みな之を行ふ。蕭何が曰、御邊もし大將とならば如何ん。韓信が曰、某もし大將とならば自ら誇にあらず、誠に古の兵法に遵ん、此を用るに文を以てし、之を齊るに武を以てし、此を守るに靜を以てし、之を發するに動を以てす、兵の未だ出ざるは山岳の如く、兵の已に出るは江河の如く、變化すること天地の如く、號令を出すこと雷霆の如く、賞罰を行ふは四時の如く、策を運すは鬼神の如し、亡て能存し、死して能生、弱して能強く、柔にして能剛に、危して能安く、機變測べからず、勝ことを千里に決して、天の上より地の下まで知ずと云ことなく、内よりして外、外よりして内、達せずと云所なし、十萬の衆、百萬の多き、力ずと云ことなく、或は晝にして夜、夜にして晝、兼ずと云ことなし、安險の理を定め、

楚を伐べきの時すでに至れり、若この時を失て東に向ずんば、齊魏趙燕の内に智者ありて兵を起し、先咸陽を取て次に三秦を定め、其要害を守りなば、漢の兵たとひ年老果るとも、褒中を出ること能はじ。韓信笑て曰、丞相なにとて我を欺玉ふぞ、適に棧道の燒たるは、必ず智ある人ひそかに丞相と計を定め、外に兵を出すべき道あるを知て、其後に棧道を燒たるならん、是項王をして西に向ふの意なからしめ、又漢の士卒東に歸る心を絶ん爲なり、此の如きの計は項王を欺き得べけれども、智ある人は欺くべからず。蕭何これを聞て大に驚き、再拜して申けるは、我褒中に入てより、四方の賢士を求れども了に此の如き高論を聞ず、我胷中快然として醉の始て醒が如し、私宅に伴ひ行て心靜に教を聞んとて、相共に丞相府を出て家に歸り、酒宴を設て持なし、大將は三軍の司命、國家の安危、一人に係りて大にして且重し、願くは大將たるの道を聞んと云に、韓信申けるは、夫大將には五才十過あり、五才は智仁信勇忠なり、智は不レ可レ亂、仁は能愛レ人、信は不レ失レ期、勇は不レ可レ犯、忠は不二貳一心、この五才ありて大將と稱すべし、十過は、勇ありて死を輕ずる者、急ありて心速なる者、貪て利を好もの、仁ありて殺に忍ざる者、智ありて怯ざる者、信ありて妄に人を信ずる者、廉潔にして人を愛せざる者、計

是天下の形勢を失ふなり、漢王は褒中に左遷せられ玉ふと云ども、威を養ひ力を蓄て、虎の山にある勢の如し、智者と云ども其計を用ること能はず、是天下の形勢を得なり、項王所向敵なし、天下の諸侯、外その強を怕て内に背叛の心を懐く、却て漢王の遠く褒中に在て、人民の心を懐け、賢を養ひ鋭を蓄へ玉ふに及ず、項王江中に義帝を弑して大逆をなし、荊襄湖南の民こと〴〵く怨み叛て其罪を討んことを欲す、不日にして大亂を成ん、然れども項王なほ之を知ず、妄に自ら強を恃む、是匹夫の勇なり、何ぞ天下の心を服することを得ん、漢王法を三章に約し秦の苛政を除き玉ふ、今褒中に左遷し玉へども、天下の望に屬せり、若し兵を起して東に向玉はゞ、百姓みな頸を引て來り服せん、天下一人も漢王の關中に王たらんことを願ざる者はなし、章邯、董翳、司馬欣三人も、心ならず楚に降て二十萬の士卒を坑にせられ、恨みな骨髓に入、項王これを封じて三秦王として、漢の兵を隔んとす、是まことに敵國を資るに利を以するなり、漢王の兵もし東に向はゞ、百姓こと〴〵く漢の爲に命を棄ん、三秦は檄文を傳て定べし、是天下の形勢、安危、治亂、强弱、論ずることを待ずして知べし、丞相なんぞ之を憂玉はん。蕭何が曰、御邊の言の如くんば、今兵を起して楚を伐べしや。韓信が曰、項王東に移て諸侯離れ叛き、百姓嗷々として、急に君を得んことを欲し、三秦怠て備なし、漢の兵

以てすべし、今丞相われを召に禮を以てせず、我何ぞ囊錐を脱して、自ら薦ことをせん。蕭何が曰、ねがはくは賢士の高論を聞ん。韓信が曰、昔し齊王瑟を好む、一人の賢士あり、能瑟を鼓す、齊王再三召れければ、賢士ある日齊の國に到る、齊王堂上に坐して、賢士に瑟を鼓と云に、賢士悅ずして曰、王もし瑟を好ずんば、臣何ぞ此堂に來て王を咫尺に見ことを得ん、王もし瑟を好で我に鼓せしめんとならば、宜く香を焚て座を賜ふべし、然らば我必ず心を盡して王の爲に瑟を鼓ん、今王われを召て奴を用るが如し、我何ぞ自ら身を賤して王の爲に瑟を鼓んと云り、古は瑟を鼓ものだも、尙王の傍に立ことを羞、況や丞相吐レ哺握レ髪の時に當り、爲レ國求レ賢の日、國を治るの道を聞くことを欲して座をも設ず、傲り放にして賢士に遇玉ふ、是某が早く故鄕に歸んことを欲して、此國に留らざる所以なり。蕭何これを聞て、自ら立て韓信を上坐に請じ、再拜して申けるは、われ不知にして賢を敬ふ禮を失す、幸に怪めらるゝこと勿れ。韓信が曰、丞相の士を求玉ふこと、實に國家の爲なり、某が來り見るも、心を傾て國に補あらんことを欲してなり、共に一人の私にあらず。蕭何問て曰、ねがはくは天下の形勢を論じて安危を決し、治亂を明にして審に強弱を說示し玉へ。韓信が曰、關中は百二の山河、天府の國、古より帝王の都を建る地なり、項王いま此地を舍て却て都を彭城へ移す、

○蕭何深奇韓信才

夏侯嬰その夜丞相府に行て蕭何に見え、具に韓信が楚を反て漢に歸する趣を語り、其才を試るに天下の名士なりと云ければ、蕭何申けるは、我素より韓信が名を聞り、此人貧賤にして淮下に釣し、漂母に食を受、市に出て胯を潛り、後に楚に事て執戟郎となれり、范增その才を知て累に薦れども項王用玉ず、この故に楚を棄て漢に來れり、只恐くは漢王此人の貧賤なるを知玉へば、如何に薦とも重く用玉ふまじ。夏侯嬰が曰、惜べし、此人未だ時に遇ず、若重く用られば、必ず大なる功を立ん、我明日伴ひ來るべしとて、次の日韓信を伴て丞相府に到りければ、一人内より出迎へ、韓信を引て堂上に進しむ。韓信堂中を見るに座をも設ざりければ、心中喜びずして立ちたる處に、蕭何出て申けるは、夏侯嬰深く御邊の才を稱す、我幸に見ゆることを得たり。韓信が曰、某楚に在て漢王聖明、丞相賢達にして、常に賢を求て渴するが如く、禮を敦し己を恭し玉ふと聞て、千里を辭せずして來り、數日を經て始て滕公に見ゆ、今又丞相に見えて早く故鄕に囘り、身を山林に遁れて、志を人の下に屈せざらんことを欲す。蕭何申けるは、御邊いまだ囊中の穎を現さず、何とて早く歸んと云る。韓信が曰、賢を求るは宜く禮を

武勇古今に秀たり、今御邊の言甚だ容易なり、是自ら誇ることの過たるにあらずや。韓信が曰、某千里の險難を經てこゝに來り、內に實學なくして空く辯舌に誇て人を欺かば、是狂妄にして自ら咎を求なり、漢の諸公は項王を恐れて及ずと云玉へども、某は小兒の如に存ずるなり、何ぞ武勇古今に秀たりと云に足ん。夏侯嬰が曰、御邊よく韜略を讀得たるか。韓信が曰、大將たるの道は、詩書を熟讀して深く成敗を知、上天文より下地理に到るまで、一として知ずと云ことなく、曉ずと云ことなし、何ぞ只韜略のみならん。夏侯嬰乃ち六韜三略を誦しむるに、口懸河の如く滔々として絕ず、又陰陽醫卜の書を誦しむるに一點も誤ず、又もろ／＼の武具を問に、兵器の根源、これを用るの法、一々に說示して知ずと云ことなかりしかば、夏侯嬰大に驚き、御邊は誠に天下の奇士、古今希有の人なりとて、我家に留めおき、靜に其才を量り見に、胷中の蓄る所、その限を知がたければ、我明日漢王に奏して必ず重く用べしと云に、韓信申けるは、先漢王に見ゆべからす、願は引て相國蕭何に對面せさせ、其のち足下よく相國と共に漢王に薦玉へ、然る時は漢王も某が用べき才あることを知玉はん。夏侯嬰げにもと同じて、われ今晩相國に見えて此由を語り、明日引て對面せしむべしと云ければ、韓信別れて旅館に出けり。

の手に塗せたれば、士卒みな寒氣を怕ずして、一戰に越の大軍を打破て、了に大なる功を成り、是同じ不龜の藥なれども、宋人は之を用て絹を洗ひ、二人の客は之を用て大敵を破る、大將たるの道も亦此の如し、よく兵書を誦ずるのみにあらず、善兵を用るを要とす。夏侯嬰が曰、御邊此の如く大才あり、久く楚に事へて大に用られざるは何故ぞ。韓信が曰、昔し百里奚虞に在しに、用ふること能はざりしかば虞了に亡び、秦に在て能用られしかば秦乃ち霸たり、賢者の才を展る只君の能用ると用ざるとにあるのみ、某楚に在て屢計を申せども楚了に用ず、後に范增再三すゝめしかども項王堅く從ず、我項王の決して用ること能ざるを知、此ゆゑに楚を棄て漢に歸し、功名を立んと欲するなり。夏侯嬰が曰、御邊楚に在て用られず、此故に大才を顯ず、今王よく用ば如何なる功をか立玉はん。韓信が曰、漢王よく我を用玉はゞ、巴蜀の兵を統て仁義の師を出し、京に向て楚を伐、まづ三秦を取、次に六國を降して項王の羽翼を去、范增を籌策に困しめて、數月の內に咸陽を定んこと掌の中にあり、只恐くは足下某を薦め擧ることと能はず、漢王も又用ること能はじ。夏侯嬰が曰、御邊すでに大言を出す、我その實學なからんことを恐る、項王聲を擧て叱るときは、萬人みな廢る、天下に縱橫すること已に三年、

嬰が曰、壯なるかな其志、御邊外に立たる榜を見たるか、其内いかなる才にか秀たる、願くは一言を以て其能を示せ。韓信が曰、榜に記せる十三箇條、某ことぐ〵く達せり、只この外に某が才あり。夏侯嬰が曰、十三箇條の外に秀たる才は何事ぞ。張良が曰、才兼文武學貫天人、出ては大將となり、入ては丞相となり、坐ら中原を鎭て、百たび戰て百たび勝、天下を取こと掌を反が如く、楚を破る大元帥となるに堪たり、是十三箇條の外なり、若その仔細を聞んとならば、われ明に其理を說ん、今十三箇條の如きは、僅に一節の能にして某が取ざる所なり。夏侯嬰大に驚き、階を下て座上に迎へ、再拜して申けるは、我素より大名を聞て未だ其面を知ず、今幸にこの地に來る、獨某一人の幸にあらず、實に天下社稷の幸なり、願くは金玉の論を聞かん。韓信が曰、世の大將たる者は、徒に兵法を知て能兵を用ること能はず、孫吳に熟し韜略を諳と云ども又取に足ず、必ず兵法を知て善兵を用る者を良將とす、昔し宋の國に、寒氣に逢て手の龜ざる藥を蓄る者あり、其家世々河の邊に在て絹を洗ふに、霜雪にも手龜ず、深く祕して人に傳ることなし、或時二人の客あり、銀百兩を出して藥方を習んと願ふ、其家相議して申けるは、終日絹を洗ても價を取こと少なり、今百兩の銀を得ば絹を洗ふに勝るべしとて、了に不龜の方を授けり、二人の客これを得て吳の國に赴しに、時境越王兵を興して吳を攻

一掌管錢粮出納有經足可以給軍餉者
凡人于十三件中内曉一件者、即赴招賢館報名、聽候考驗、果稱其實、奏請重用。立賢無方、不拘貴賤、盡心王事、務期報効、懋著功績、不次超擢。封侯拜相悉在此擧。敬玆告示。

韓信これを見て心喜び、所の者に向て、今賢人を招き薦ることを主るは誰人ぞと問に、滕公夏侯嬰なりと申す。韓信心に思けるは、我いま蕭何に見えて、張良が授し割符を出んは容易けれども、先夏侯嬰に見えて、我胸中の才を顯し、漢王に見て後に張良が割符を出さば、我碌々として人の薦に依て事を成ものに非るを知べし、古人も難進易退と云り、若進こと容易ならば、了に大に用られじとて、先名字を書記して夏侯嬰が家に到り、遠方の壯士きたりて見んことを請と云ければ、夏侯嬰出て對面し、其人物常ならざるを見て、此人は曾て名を聞及し者なり、今楚を反て遠く險難の地に來るは、必ず故あらんと思ひ、壯士いかゞして來れるぞと問に、韓信申けるは、某は楚の臣なり、項王の用ざるを以て、暗を棄て明に從ひ咸陽より來れり。夏侯嬰が曰、棧道燒絕て山路甚だ險し、壯士いづれの路より來れるぞ。韓信が曰、明主を求んことを欲して、藤を攀葛を引て遠く來る、心に期する所ありて勞することを忘れたり。夏侯

暇なし。進で衙門を見ば、前に招賢館の額を掛、兩邊に榜を立て十三箇條を記し、宜く人民等に悉く知しむべしとありければ、此を讀に、

一熟曉兵法深知韜略可爲元戎者

一驍勇過人斬將搴旗可爲先鋒者

一武藝出衆才堪驅使可爲散騎者

一諳曉天文善占風候可爲贊畫者

一素知地理深通險易可爲鄉導者

一心術公平爲人正直可掌紀錄者

一變機精明動能料事可爲議軍情者

一語言利便足能動人可爲說客者

一精通算法毫釐不差可爲掌書記者

一多讀詩書以備顧問可爲博士者

一素明醫學神聖功巧可爲國手者

一善能馳驟探聽機密可爲細作者

ひとり行玉はゞ、恐くは害あらん、某送り申んとて、腰に弓箭をかけ、長き槍を提て、相共に孤雲山に入、路々武藝を論じて第二日に寒溪に著、これより南鄭闕遙に見ければ、辛奇申けるは、南鄭已に程近ければ、某は是より別れ去んとて、路の樣を詳に指示す。韓信馬より下て傍なる酒店に入、二人酒を飲で申けるが、我この間御邊の志を感ず、他日わが楚を伐を聞かば速に來り玉へ。辛奇が曰、某いま褒中まで送り著奉んずれども、老母に知せずして出たれば、定て跡にて慕ひ哀候はん、此より家に回て、偏に將軍の大兵を起して楚を伐玉ふを相まち、一番に馳來べしとて、相別て去にけり。韓信馬を打て已に南鄭の境に入ければ、風俗これより引替り、老たる者は安閑にして壯なる者は奔走し、行人路を讓りて路に遺たるを拾ず。笙歌の聲處々に聞え、家々快く樂て、田野廣く開け、桑麻よく茂れり。又城中の體を見れば、六街三市、衣冠の文物風景奇絶にして、一望二百里が間、平川渺々として、南に劍門の固ありて、中に棧道の險あり、前は六路を通じ、後は大江に據て、荊襄の襟喉、秦隴の要害、民物康阜にして、國人つねに云、春は碧桃、紅杏、夏は蓮藕、葵榴、東籬の菊綻て金の如く、南嶺の梅開て雪に似たりと。美酒、嘉魚、香橙、晩稻の土産ありて、石頂闕、瀑布泉、盤雲塢、天漢樓、柱石堂、四照亭、娥眉山、青城山、錦屛山、峚山、赤甲、白鹽の風致ことぐく記に

が家に來て詩を題す、我汝を生捕て項王に送り、重く恩賞を被んと云。韓信驚て申けるは、汝漢の土地に居て褒中の百姓なり、如何なれば左樣に申ぞ。彼壯士笑て申けるは、我祖父は周の世に事て辛雷と云り、久く扶風に住居せしが、父辛金が時に至て、始皇の殘暴を避て太白嶺の麓に移り、酒を賣て家業とす、某は辛奇と申者なり、專ら獵を好で武藝に通ず、常に明主に遇て事んことを願ふ、昨夜飛虎、東北より嶺を越て來ると夢を見たりしかば、必ず貴客の來ること有んと存じ、今朝より獵にも出ずして待居たり、幸に將軍に逢、さきの言は戲て申せしなりとて地上に再拜しければ、韓信申けるは、御邊の體を見るに、堂々たる忠烈の大夫なり、今漢王寬仁大度にして天下の英雄を招く、何ぞ褒中に入て功名を圖ざる。辛奇が曰、われ久く此心あり、將軍もし漢王に見えば、決して重く用られ玉はん、他日兵を起して楚を破る時、ひそかに此路より出玉へ、此は路の程甚だ近くして、世に知もの少なり、將軍急にこの路より出て、三秦の備なきを討玉へ。韓信大に喜び、辛奇が手を執て申けるは、此事輕々しく外に泄し玉ふな、我他日楚を伐とき、御邊案内者として我に從ひて大功を建よ。辛奇その夜は韓信を家に住め、妻子と共に慇懃に持成ければ、韓信その忠誠なるを感じて、兄弟の約をなし、次の日打起んとするに、辛奇申けるは、此前は孤雲兩脚山なり、路の程險阻にして猛き虎あり、將軍

走ること能はず、不レ如　樵夫を殺しなば、縱ひ追手の勢來るとも、此路筋を知らずして皆棧道の方へ赴くべしとて、馬を止て樵夫を召かへし、髻を摑て一刀に刺殺し、山の麓に埋て後、再拜して申けるは、是わが情なきに有ず、已ことを得ざればなり、他日もし志を遂ば、必ず來て厚く葬り、今日の德に報ずべしとて、涙を流して馬にのり、敎の如く小松の林を過て亂石灘の石橋を渡り、娥眉の難處を越て太白嶺を下りければ、案のごとく麓に人家あり、馬より下て酒店に入、酒を飮で暫く息をつき、樵夫を殺せしことを憐で一首の歌を作り、酒店の壁に書付て曰、

陟二彼山路難一、崎嶇不レ可レ測、藤蘿結二層巒一、狐兎藏二幽黑一、怪哉此山險、峻坂有二萬億一、去レ天手可レ攀、廻轉苦二劬力一、迷黠竟何往、無レ由二問レ鄕識一、忽見採樵人、問レ我將二焉適一、勸レ馬立二山前一、栖云遊二川國一、樵人指二要路一、按レ圖無二差忒一、足レ知レ爲二忠亮一、孔云宜レ報レ德、楚兵忽恐至、受レ擒反自賊、斬レ爾絕二蹤迹一、實非二我薄刻一、留レ爾特山樵、存レ我爲二帝弼一、我當二萬夫望一、君死良不レ惑、無レ罪遭二霜鋒一、我心爲レ君惻、君德終圖レ報、君後我更植、蒼々秋月明、疑レ照二君顏色一。

韓信歌を謡て酒を飮ところに、一人の壯士來り、汝楚を背て漢に降り、路に樵夫を殺して今わ

近と寄て、只一騎道を早むる人は誰ぞと呼はる。韓信答て曰、われは李姓の人なり、褒中に行て一族を尋んとす。彼人申けるは、番所の割符を取來れるか。韓信が曰、證の簡あり、怪めらるゝなと云て取出せば、彼人披て見んとするを、韓信寳劍を拔て斬殺す。傍なる番所より之を見て、士卒五人追きたれるを、韓信一々に斬ころし西を指て走りけるが、跡より追手かゝらんことを怕れ、急に路をかへて山際へ入り、西南に向て走りけるが、重山峻嶺峩々として斷たる崖、幾千仭と云ことを知らず。澗水聲ありて松栢響を交へ、僅に細き路あれども、險阻にして通り難ければ、靜々と馬を歩せて、何か張良が教し陳倉の口へ出でんと心の中安からざる處に、一人の樵夫に行合たり。韓信馬を止て、陳倉へ赴く路筋を問に、樵夫柴を下して山路を指教へ、此より向の岡を超て小松の林あり、林を過れば亂石灘と云所に出て、一の石橋あり、橋を過れば娥眉嶺なり、此嶺きはめて險阻なれば、馬より下て超玉へ、其より太白嶺を越ゆれば麓に人家あり、其より孤雲兩脚山を過て、黑水を渡り寒溪を過玉はゞ、南鄭關に到玉ふべし、此路には猛き虎あり、必ず夜中に通り玉ふなと云ければ、韓信地理の圖を開て見るに、樵夫の言と少も違ず、大に喜で別れければ、樵夫も又柴を擔て去にけり。韓信心に思けるは、我番の兵を殺したれば追手定めて蒐るべし、樵夫もし此路より走たると告ば、急に追來らん、我馬疲れて

韓信問路殺樵夫

くんば、韓信かる〲しく通ることを得じ、汝二百騎を引て速に生どり來れ、我寸々に斬て諸人に示ん。鍾離昧命を受けて飛が如くに安平關へ到り、番の者共に尋れば、韓信關所の割符を持來り、項王の命に因て密に三秦へ下知を傳ると云り、某等これに因て通したり、此を過て已に四日に及べり、漸く漢の境に入ん、恐くは將軍追付玉ふこと能はじ、不如三秦王に報じて急に追しめ玉へ、棧道燒絕たれば容易く進み難からん。鍾離昧げにもと同じて、檄文を馳せて三秦に報じ、咸陽へ回りて韓信が關所を超て遠く逃のびたる由を奏す。項王笑て曰、すでに遠く逃去たれば力及ず、料るに此胯をくゞりし夫、何ほどの事をか仕出さんとて、呂臣、樅公二人を留て咸陽の守とし、用意一々に備りければ、大小の官人を引具して、彭城を指て打起けり。

○韓信問路殺樵夫

去ほどに韓信、安平關を馳通て又散關に到り、始の如く割符を以て番衆を欺き、其より三岔山の路筋に出て、山川の勢險阻なりければ、張良が贈し地理の圖を出して路の程を考へ、囊中の小路へ入んとせるに、跡より報事官の人と覺て、手に檄文を持たるが、馬を飛して馳來り、近

り范増は常に漢王を恐て、諸處の要害に番を置て、日夜怠らず守らせければ、韓信已に安平關に來りける時、番の兵推止めて、此は何くへ行玉ふぞと問。韓信件の割符を出して見せければ、關を守る大將禮を施して對面し、如何なる事有てか只一騎出玉ふぞと云に、韓信申けるは、項王某に命じて、密に三秦に下知を傳へしむ、此故に夜を日に繼で馳來れりとて、急に關を出て走りけり。此時陣門の番衆は、韓信明日回んと云しが、數日を經れども回らざるを怪み、范增に告て申けるは、一月ばかり已前に異き人夜中にきたり、韓信が家に宿して、何事やらん密に物語しけるが、其より韓信旅行の用意をなして、此ごろ只一騎城を出て友を尋ると號し、西を指て馳たりしが、今四日になれども回らず、恐くは逃去たるにて候はん。范增これを聞て色を失て申けるは、我この人を日夜心に掛て、適に項王に告て、必ず重く用玉へ、若用ること能ずんば、早く殺して後の患を絕玉へと云しに、圖ざりき今日遁れ去んとは、此者必ず褒中へ入て漢王に事ん、我心中又一の大病を得たり、急に追かけて生捕ずんば、我晝夜心を安んずること能はじとて、項王に見て右の趣を語る。項王大に怒て曰、韓信懦夫いま如何なれば我に反たる。范增が曰、韓信極めて大才あり、臣頻に陛下に薦しかども、陛下用玉はずして、今つひに逃去り、必ず漢王に事へて後日に陛下の大患をなさん。項王いそぎ鍾離昧を召て曰、關所の割符な

王怒て曰、朕會稽に義兵を起してより、向ふところ敵なし、凡そ逃去ものは皆不才の人なり、何ぞ惜むに足ん、遷都の事、朕が心すでに決せり、再び諫ることあるべからず、若强て止る者あらば、必ず韓生が如ならんとて、日夜に旅装を催ければ、范增力及ず長嘆してぞ退きける。この時韓信は張良に別れて後、頻に漢王に降んことを思ひ、素より都尉陳平が、項王を恨で漢王を慕の心あるを知ければ、或夜その宅に行て對面し、言を以て挑で曰、項王いま都を彭城へ遷す、恐くは漢王褒中より出て咸陽を取ん。陳平が曰、項王義帝を弑して、近日彭城へ遷んとす、忠言を拒で韓生を烹殺し、諸人の諫を用ざれば、安ぞ久く安きことを得ん、漢王は長者なり、了によく大事を成ん、御邊空く此にあらんより、早く楚を反て大才を天下に展よ。韓信が曰、我も亦この心あり、然れども路々に關ありて輕々しく通り難を恐る。陳平が曰、これ又易き事なり、我都尉の職に居を以て、關所の割符みな此にあり、われ之を御邊に贈ん、若割符あらば、關所を通るに何の難きことか有らん。韓信拜謝して曰、もし割符を賜らば千金の賜に勝らん、他日もし志を得ば決して盛德を忘れ候はじ。陳平が曰、御邊よく漢王に事よ、我も久からずして又漢に降ん。韓信割符を得て家に回り、次の日陣門の番衆に申けるは、我城外に出て友を尋んと欲す、明日必ず回べしとて、只一騎咸陽を出て西を指て走りけり。兼てよ

を圖ること能はじ、我等早く行て諫め留べし、今もし咸陽を離れば、漢王百日の内に褒中より打て出ん。季布が曰、さきに韓生遷都の事を諫めて、却て項王に烹殺されたり。范增が曰、漢王もし打て上らば、我等みな擒にせられん、諸人爭ひ諫て遷都の事を留べしとて、季布を留て彭城を守らせ、諸大將と共に咸陽へ回りけるに、咸陽の諸大將諸軍勢に至るまで、預め皆旅の用意をなして、二三日の内に打立と披露し、甚だ躁かりけり。英布等項王に見えて、義帝を江中にて弑たる由を告ければ、項王大に喜で吾心腹の患を除けりと云。范增申けるは、心腹の患は義帝に非して實は漢王にあり、若咸陽を離れて彭城へ遷り玉はゞ、漢王久からずして必ず褒中より攻上ん。項王笑て曰、棧道すでに燒絶て、殊に三秦の守きびし、漢王たとひ翅ありとも飛で出ること能まじ。范增が曰、陛下都を遷し玉はゞ三秦も心怠らん、漢王素より大なる志あり、必英雄の士を蓄へて陛下と衡を爭ふべし、棧道を出ること何の難きことか候はん、望らくは遷都の事を留り玉へ。項王聽ず、わが號令すでに出て、文武の臣みな旅行の用意備はれり、豈中ごろにして此を止んや、亞父の慮甚だ過たり、漢王は物の用に立人にあらずと云ければ、英布申けるは、事貴二先圖一機難二遙度一、陛下もし咸陽を離れ玉はゞ、恐くは人の心怠て此地の守緩からん、況や近き比は諸侯叛て逃去もの多し、陛下よく慮を遠し玉へ。項

老翁三人あり、人みな號して董公と呼。博く書を讀で道理を知たれば、一鄉の內甚だ敬ひけり。今日英布等が回るを見て、百姓に向て申けるは、義帝は有德の君なり、江中を尋ねて其屍を求め、郴州へ送て葬をなし、他日漢王を迎へて君とし、義帝の爲に仇を報ずべし。百姓みな尤と同じければ、董公年壯なる者を擇で江中を尋けるに、夜に入て水面に流る者あり、月影に映じて見えければ、急に引留め火把を擧げて見るに、身に衣服もなくて顏色生たるが如き人の屍なり。諸人みな義帝を見知ねば、如何と疑てよく〳〵見れば、兩足に玉環ありて、皆龍を刻めり。董公申けるは、是必ず義帝ならん、若尋常の人ならば、爭か足に玉環あらんとて、淨き帛を以て屍を包み、香を燒て祭をなし、郴州へ送て葬けり。されば今に至るまで郴州に義帝の墳ありて、四時の祭禮絕ずとかや。

○韓信背レ楚逃二咸陽一

英布、吳芮等兵を收めて彭城に到り、范增に逢て義帝を弑たる由を語りければ、范增大に驚き、長嘆して申けるは、義帝は昔日われ武信君と扶け立てて君とし、人望に循ふ者なり、何ぞ圖ん今日江中にて弑し奉んとは、甚だ人臣の道にあらず、項王もし都を彭城に遷さば、決して大事

圓を問玉ふに、皆奏して申けるは、適に白魚阻レ舟、風浪折レ桅たる上に、又今宵の御夢不吉の兆なり、夜あけば舟より登て再び彭城へ回せ玉へ。義帝宣けるは、朕今彭城を出て事すでに隱なし、然るに再び立回るは大體にあらず、況や天數定りありて人力の及ぶ所にあらず、假令いかなる日に逢とも何ぞ怕ること有んとて、次の日早天に舟を出し玉へば、大江の半にて英布、吳芮、共敖、大船を浮べて待奉り、大音あげて申けるは、臣三人項王の命を受て陛下を迎ふ、陛下ねがはくは玉符、金册を渡し玉へ。義帝詈て宣けるは、汝等紂を助て惡をなし、王命に遵ずして大江の上に兵を率て相待は、必ず朕を弑んとの心ならん。英布、吳芮等きゝもあへず、急に舟を推よせ、刀を拔て御舟に亂れ入、散々に薙で廻れば、斬るゝ者數十人、自ら江に沈む者多かりけり。義帝これを見玉ひ西を望て大に罵り、項羽逆賊豈天の罰を受ざらんやとて、了に江中へ飛入玉ふ。英布舟中の人を殺し盡して、舟を馳て回んとするに、南の岸に義帝を待奉る百姓をめき叫で、逆賊英布、汝項羽が惡を助て、罪なき義帝を弑し奉て天下を奪んとす、我等あまねく天下に告て、然るべき君を取立、義帝の爲に喪を發し、汝等が無道を誅して天下の恨を雪べしと罵りければ、英布大に怒り、岸に登て殺んとすれども、風の勢急にして岸に近付こと能はねば、彭城を指て回りけり。岸上の百姓みな哀み哭て去ける中に、年八十に及たる

義帝表文を御覽ありて、左右の臣に宣けるは、項羽累に人を馳て火急に郴州へ遷んとす、人臣の禮にあらず、若久く此に留らば、恐くは變を生ぜん、不レ如早く打立べしとて、日を定て郴州へ御幸し玉ふ。彭城の百姓道に出て地に拜伏し、義帝數年この所に御座ありて、鄉村安靜上下和睦、まことに有德の君なり、今日郴州へ遷り玉ふ、又いつの時にか見え奉んと云て、戀戀として別を哀む。義帝も御泪せき敢ず、已に大江の岸に舟を浮べ玉へば、白魚阻レ舟、浪風あらく起て桅を吹折ければ、今夜は岸に傍て御舟を留めけり。義帝その夜の御夢に、五色の祥雲龍舟を蓋ひ、香風しきりに吹て、何くともなく仙樂を奏し、二人の金童、一人の玉女御舟に來て、願くは陛下早く龍宮に幸して百官の朝賀を受玉へと申す。義帝宣けるは、朕いま郴州へ赴んとす、何ぞ此地に留るべき。金童申けるは、龍宮すでに天帝の命を受、御座を設て陛下を待、百官朝服してみな上淸門に出迎へり。義帝の宣く、龍宮は人間の所レ居にあらず、朕いかがして到るべき。金童申けるは、天帝すでに詔あり、陛下まことに君の德あれば宜く高位に居玉ふべし、然れども赤帝の子時を得て福德洪大なれば、陛下これに位を讓りて龍宮に遷り、水府を掌て天九の列聖に會し玉へ。義帝これを聞て舟より出んとし玉へば、水光天に接して波浪の響仙樂の如く、忽然として打驚き玉ふ。時に鼓の聲三更を報じければ、近侍の臣を召て

入て背に汗を流し退出して、咸陽へ早馬を飛し、いかに申せども義帝敢て彭城を離れ玉はずと告ければ、項王大に怒て曰、義帝は本民間の竪子、わが家の立て君とする所なるに、却て恩を以て仇とし、沛公と心を合て常に我を害せんと謀る、若早く除ずんば、後に大なる害を成んとて、九江王英布、衡山王呉芮、臨江王共敖を召て申けるは、汝等兵を引て東に赴き、大江の中に伏て義帝の來るを待、われ范增季布を催促して是非なく義帝を郴州へ遷さしめん、義帝もし江を渡らば、汝等出迎る體をなして、斬殺して江に沈め、大風に遇て舟覆りぬと披露して、天下の議論を塞げとて、三人の大將すでに打立ければ、彭城へ使を馳て、義帝に表を上る。

其表に曰、

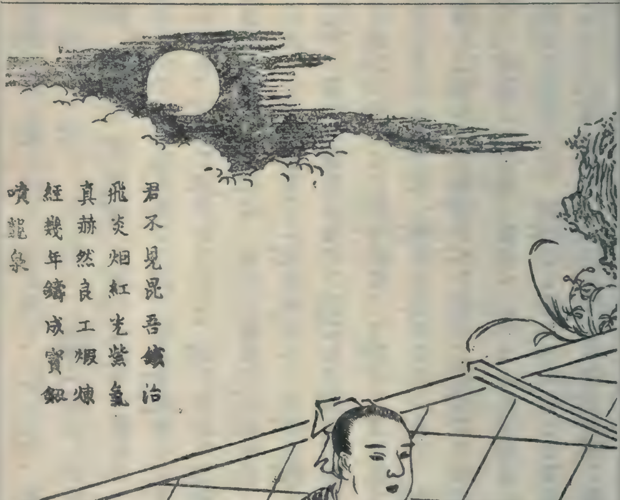
西楚霸王臣項羽、稽首頓首上言。伏以奉命破秦、直抵咸陽、子嬰受首。爰正國法、仰尊陛下爲義帝、實爲天下主也。然彭城路當南北之衝、乃用武之地、甚非陛下所宜居也。今郴州乃湖南名郡、左有洞庭、右有彭蠡、山水秀麗帝王之都也。請陛下幸臨以觀天下。今乃聽細人之言、不欲從吾所請、致使君臣有相疑之私。輦轂失壼漿之望、遮道來迎、終日稽候、一日之費何止萬金。爲民元后、于心何安、復差千戶項臣上書懇啓、惟速賜裁。不勝激切之至。

○項羽江中弑義帝

項王は諸人の諫を聽ず、都を彭城へ遷んとして、范増を催促し、早く義帝を郴州へ御幸なし申べしと責ければ、范増この由を奏するに、義帝宣ひけるは、古より君出令者也、臣奉君之令これを下へ達する者なり、昔日項羽われを立て君とし、天下の望に屬しかば、國々の諸侯競ひ來て、了に秦を滅せり、朕さきに約を定て、早く關中へ入ものを王と爲べしと云しに、今項羽約に背て自ら王となり、意のまゝに事を行て、剰へ朕を遠く郴州へ流んとす、首は朕が下に居て、今は朕が上に居んとす、是實に冠履を顚倒するが如し、甚だ人臣の禮を失せり、汝は項羽が亞父なれば、爭ひ諫て其過を正すべきに、自ら來て此事を申は、桀が惡を助る者なり、汝心に愧ずや。范増地に拜伏して申けるは、臣累に諫れども、項王更に聽ず、今又季布を馳て催促せしめ、日を定て咸陽を打立、直ちに彭城へ來て都せんとす、臣亦兩ながら離し、只陛下の所命なり。義帝宣けるは、汝は乃ち阿附の小人、大臣以道事君の體にあらず。范増恐れ

出、徑に褒中に下る時は、路の程二百里ばかり近し、將軍他日兵を起して打て出る時、此路筋より出て先三秦を取玉へ、此路筋は世に知者少し、將軍よく心中に祕して人に知しめ玉ふな。韓信が曰、われ謹で敎に從ん、先生は此より如何し玉ふべきぞ。張良が曰、われ項王の都を遷せるを見て、又蘇秦が遊說に效ひ、諸侯に遊說して楚に反かせ、項王の勢を分て西に向ふ意なからしめん、然る時は將軍心靜に人馬を漢中に養ひ、三秦を取て關中を定め、了に天下を圖る事を得ん。韓信拜謝して、某早々に打立べしとて、一夜密に計を議して、次の日張良出去ければ、韓信は預め旅行の用意を成て、外には淮陰の故鄉へ歸て、親き者に對面すべしとぞ披露しける。

適に遷都の事を諫むれども項王用ず、已に范増、季布を遣して、彭城に都を造る、天下の大事すでに敗せり、我早く身を逃れて故郷へ歸んと存ずるなり。張良が曰、將軍の論相違せり、良禽相レ木而棲、賢臣擇レ主而佐と云り、將軍の大才を以て何ぞ身を逃て淮陰の一釣翁となるの理あらんや。韓信長嘆して曰、足下今晩來り見て、言語人を動し議論衆を出たり、只劒を賣のみならず、決して深き心あらん、我さきより其動靜を見に、足下は韓國の張子房にては無か。張良坐を起て申けるは、我久く將軍の高名を慕て、幸に來り見ることを得たり、實に深き心なきにあらず、將軍すでに我を知玉ふ、我自ら隱すこと能はず、乃ち韓國の張良なり。韓信大に笑て申けるは、先生は人中の龍なり、我こゝを去て漢王に歸せんと欲す、願くは計を教玉へ。張良が曰、漢王は寛仁の長者、今褒中に身を屈すとも、了には能大事を成ん、將軍もし漢王に歸せんとならば、我一物あり將軍に送んとて、懐より封じたる割符を取出して申けるは、我往日漢王に別る時、蕭何と約を成て、若破楚の大元帥を尋ね得ば、此割符を以て薦め遣べしと云り。將軍これを持て褒中へ赴玉はゞ、漢王必ず重く用玉ふべし。韓信が曰、先生すでに蜀の棧道を燒玉へば、如何して褒中へ入ことを得ん。張良又袋の中より地理の圖をとり出して申けるは、此圖は乃ち山際の小路より斜岔を經て陳倉に入り、孤雲兩脚山を轉て雞頭山に


君不見昆吾鐵冶
飛炎烟紅光紫氣
真赫然良工鍛煉
經幾年鑄成寶劍
噴龍泉
張良

張良賣劍説韓信

の劍は、今漢に封ぜられたる豐澤の劉沛公に賣候き。韓信が曰、漢王いかなる德ありて、足下天子の劍を賣玉へる。張良が曰、漢王成湯の大德あり、隆準龍顏にして神母夜號、五星聚る、寛仁大度まことに天子の氣あり、前に芒碭山に白蛇を斬たる時、すでに天子の劍を賣與へたり。韓信又問て曰、宰相の劍は誰に賣玉へる。張良が曰、沛縣の蕭何に賣り。韓信が曰、この人いかゞ見る所あるぞ。張良が曰、蕭何は運を𦐂る元勳、干戈を用ずして全く仁義に伙、法を約し民を救て宰相の大才あり。韓信笑て曰、天子の劍宰相の劍は足下よく其人を得たり、今この元戎の劍を以て某に賣んとし玉ふ、某は無名の小子、大將の德無れば、恐くは此劍に負ん。張良が曰、將軍の胷中に養ふ所古の孫子、吳子に過たり、然れども未だ好君を知玉はず、昔千里の馬も伯樂に遇ざる時は、槽櫪の間に雜り奴隸の手に辱られて常の馬に異ならず、若一旦伯樂に遇時は、千里の騏驎となりて絕塵追電天下無雙なり、故に古人も向北長鳴天外遠、臨風斜控日邊還と云り、今將軍人の後に從て好君に遇ず、所以不知其爲元戎、若好君に遇て計用られ、言從れば變化風雲振動天地坐ら中原を鎭め、九襲の榮を享、人臣の貴を極めて何ぞ今日の如く碌々たらん。韓信これを聞て、覺ず長嘆して心頻りに動き、我足下の言を聞に明なること肝膽を照が如し、我この所にあること日久しと云ども、籌用られず言從れず、

得周防君子身、精光黯黯青蛇色、文章片片飄龍鱗、惡與交結遊俠子、從來親近英雄人、何年中道遭捐棄、淪落飄零古岳邊、莫道匣藏無所用、猶能夜夜氣沖天。

韓信常に劍を愛す、今此寶劍を見て、心の內頻に羨み求けれども、價を遣すべき資なきを恨み、足下已に二振の劍を賣し時、いか程か價を取玉へるぞと問に、張良申けるは、適に申す如く先その人を見て、次に劍を賣、價の多少を論ぜず、若其人ある時は價を取ずして之を贈る、久く將軍は天下の英雄なる事を聞て、自ら來て見ることを得たり、此まことに寶劍の主なり。韓信謝して曰、寶劍已に惠まると云ども、某恐くは其人に當るまじ。張良が曰、もし其人に當らざる時は、千金にも輕々しく賣ず。韓信限なく喜び、酒宴を設て持なし、此劍に名はなきかと問に、張良申けるは、悉く名あり、一は天子劍、一は宰相劍、一は元戎劍なり、天子の劍は乃ち白虹紫電、宰相の劍は龍泉太阿、元戎の劍は干將莫邪、共に八德なき人は、此劍を帶こと能ず。韓信が曰、何をか天子の八德と云。張良が曰、仁孝聰明敬剛儉學なり。韓信が曰、宰相の劍にも德ありや、張良が曰、あり、忠直明辨恕容寬厚是なり。韓信が曰、天子の劍宰相の劍共に八德あり、此元戎の劍は如何ん。張良が曰、廉果智信仁勇嚴明これ元戎の八德なり。韓信が曰、この寶劍みな天下の至寶なり、天子の劍宰相の劍は誰人に賣玉ひしぞ。張良が曰、天子

良久く沈吟しける所に、張良すでに階下に立たり。韓信月影に見れば、其人表常ならず、曾て面を見知たる人なれば、席上に迎て問て曰、足下いかなる人なれば某に遇んと云玉ふぞ。張良が曰、某は將軍と同鄕の人なりしが、幼より故鄕を出て外國にあり、先祖より家に傳れる寶劍三振ありて、眞に世に希なる寶なり、我價を論ぜず遍く天下の英雄を求め、先其人を見て次に劍を賣、已に二振は賣たれども、一振は未だ其人に遇ずして殘置り、今將軍は某と同鄕にして天下の英雄なる事を承り、劍を賣ん爲に來れり、今朝こゝに伺候すること半日、將軍外に出て歸玉はず、此ゆゑに暮に及で參たり、此劍暗臨黑水蛟龍泣、潛倚空山鬼魅驚、埋藏十萬年價直數千金、もし天下の英雄に遇ときは、錚然として自ら聲あり、强に價を取ことを求ず、物おの〳〵其主に歸す、將軍この劍を得玉はゞ、威令よく天下を制せん。韓信これを聞て心の内ひそかに喜び、近くよりて申けるは、某楚に事てより人に知れず、今先生寶劍を持來て示さる、願はくは一見せん。張良劍を取て與ければ、韓信燈の下にて拔て見るに、寶氣衝空、霜鋒射斗、鞘の上に細字に書たる歌あり、其辭に曰、

君不見昆吾鐵冶飛炎烟、紅光紫氣眞赫然、良工鍛錬經幾年、鑄成寶劍噴龍泉、龍泉顏色如霜雪、良工咨嗟嘆奇絕、琉璃寶匣吐氷花、錯鏤金環生明月、正逢天下起風塵、喜

玉ふとも、何の詮あらん、范增を大夫に比せば如何ん、范增だも諫むること能ず、我等況や范增に及ざるをや、是大夫の自ら死を取ゆゑんなり、大夫たゞ項王を怨ずして歌を造たる人を怨め、我思ふに此見物衆の中に、蜀の棧道を燒假に歌を造たる人も扮て在べしと云ひければ、張良之を聞て大に驚き、急に人の背へ躱かくれ、今日始て韓信を見知たれば、心の内ひそかに喜ぶ。韓信つひに韓生を烹殺しければ、見物の貴賤なげき惜ぬ者はなし。次の日この由を項王に奏しければ、項王急に季布を彭城へ遣し、范增が力を助て速に內裏を造せ、日を擇で都を遷んとすれども、大小の百官韓生が烹られたるを見て、一人も諫る者なし。韓信は獨り嘆て梁間巧燕住不多時と云て、外に去んとする心あり。

○張良賣劍說韓信

張良は韓信が住處を伺ひ聞て、昔日秦の宮中にて得る所の寶劍を携へ、その夜月明なりければ、韓信が陣門に行、番の兵に告て申けるは、某は淮陰の人にて韓將軍と同國の友なり、速に見んことを欲す、ねがはくは此由を報ぜよ、番の兵いそぎ韓信に告ければ、韓信怪で我淮陰に在し時、身きはめて貧賤なりしがば、交る友もなかりしに、今同國の友と申は不思議なりとて、

ると云の心なりと告ければ、項王大に怒り、老匹夫いかなれば朕を辱ると云て、左右執戟郎の者共に、この老賊を雲陽の市に引出だして油鑊にて烹殺せと下知すれば、韓信命を受て了に韓生を引て出たり。此由外に沙汰ありければ、見物の士民夥く群集しけるに、張良も其内に扮れて來れり。時に大なる鑊に油を沸して韓生を引出しければ、韓生大音あけて申けるは、咸陽の百姓みな能きけ、我今日烹らるゝ事、奸臣にして國を誤り法度を犯せるにあらず、項王妄に小兒の歌を信じて都を彭城へ遷んとす、我これを爭ひ諫て、却て此の如く烹殺さる、見よ見よ百日が内に漢王必ず褒中より出て三秦を取ん、此誠に楚人沐猴而冠なり。韓信これを聞て申けるは、大夫今何の爲に罵玉ふぞ、項王もし聞玉はゞ、禍又わが身に及ん。韓生が曰、皇天后土昭鑒不レ遠、われ國の爲に烹殺さる、是屈死にあらずや。韓信が曰、大夫遷都の事を諫て殺さる、人みな以て屈死とすれども、我は死の當然と存ずるなり。韓生が曰、われ何の罪ありて、汝死の當然とは申ぞ。韓信が曰、大夫久く諫議の職にあり、項王さきに卿子冠軍宋義を殺せしは、下として主將を殺なり、大夫何ぞ之を諫ざる、子嬰を殺し、秦の墓を撥き、阿房を焼、諸侯を左遷する時、大夫何ぞ諫ざる、又秦の降卒二十萬を新安にて坑し殺せし時、秦の民恨みな骨髓に入り、大夫なんぞ諫ざる、今事已に成て項王の心決せり、然るに強て諫め爭ひ

れを以て興り、秦は之を以て覇たり、陛下いかなれば小児の歌を信じて、此興王の地を棄玉ふぞ。項王あざ笑て曰、汝關中に都を定ん事を進む、朕が意喜ず、今朕が都を遷すに三の子細あり、一には我三年が間征伐して久く故郷へ歸らず、二には關中は山多くして平地少ければ、風景を望に眼宏からず、三には上天いま歌を降す偶然にあらず、朕が心よく天意に合へり、汝等必ず止ること勿れ。韓生又申けるは、陛下四海に君として如二日中一レ天、誰か謹んで仰ざらん、然るに如何なれば、故郷へ歸を以て榮華とし玉ふぞ、孟子も尺地莫レ非二王有一、一民莫レ非二王臣一と云り、豈一つの彭城のみならんや。項王笑て曰、普天の下みな朕がものなれば、凡そ居べきの地は朕が心のまゝにすべし。韓生が曰、さきに范增別に臨で、陛下必ず咸陽を離れ玉ふなと云り、是深く思ふことありて言を殘せしものなり、今何とて忘れ玉へるぞ。項王色を正して曰、われ天下に縦横して向ふ所敵なし、范增爭か朕が心を料り知ん、汝必ず多言することなかれ。韓生退て長嘆し、人みな楚人沐猴而冠と申が、果して此の如と云ければ、項王是を聞て陳平に如何なる事ぞと問。陳平隱こと能はず、これは陛下を訕るの言にて三の意を含めり、獮猴は冠を著と云へども心人にあらず、又獮猴は心久きに堪ず、人の冠を戴て心甚だ急躁なり、又獮猴は人の衣冠を被ども、了に人の性なければ冠も戴ては破らず、必ず弄び物にして破

出し、世間の様を聞せけるに、多の小兒この比怪しき歌を唱ければ、密に項王に告知しむ。項王心疑ひ、晩方に衣裳を更め私に出て窺ひ聞に、果して誠なりければ、小兒を召で誰人か此歌を教たると問に、夢に天より教玉ふと答ふ。項王大に驚き、此は我都を彭城へ移んことを天より告玉ふならん、況や咸陽は燒殘て荒たる地なり、早く故鄕へ歸て天の告に循んと思ひ、次の日諸大將を聚て申けるは、此ごろ上天歌を降して城中ことゞく之をうたふ、汝等なんぞ我に告ざる、歌の言に今有一人とは、乃ち朕が事を云ものなり、隔壁搖鈴、只聞其聲不見其形とは、朕天下に君たるの名はあれども、廣く外に傳らざるを云ものなり、富貴不還故鄕如衣錦夜行とは、朕已に天下を得たれども、此處に在て彭城へ回らざるは、錦衣を著て黑夜に行が如と云ものなり、歌の言よく朕が意に合へり、況や秦の宮室ことゞく燒たれば、急に內裏を造營しがたし、彭城は楚梁の地、淮河より北に九郡ありて、千里沃野、これ帝王の都を建べき處なり、殊更わが故鄕なれば、吉日を擇で都を彭城へ遷べし。諫議大夫韓生すゝみ出て申けるは、此歌は皆人の造り出せる言にて、上天の意にあらず。況や關中は古より都を建る地にして、山河の固四塞にして一面に當り、東に黃河、函谷關、西に大隴關、山蘭縣、南に終南山、武關、北に涇渭、潼關ありて、百二の山河三山八水沃野千里天府の國なり、昔し周はこ

を棄ずんば、安ぞよく物外の仙術を得ん。項伯その留ざるを知て、城外に送て別れ去ければ、張良咸陽を離れて衣服を改め、道士の體に扮れ成て又咸陽へ入、いつはりて風魔の發りたる人の如く市の巷を狂ひ廻りて、云言皆道理に循ず、腰に錢を付、袖に栗梨を藏し、麻の履をはき、身に道袍を著て、手に魚鼓を鳴し、口に道情を說て、或は古き寺或は壞たる廟の傍に狂蕩して錢を抛、栗梨を落して小兒を引ければ、近邊の小兒五人三人相伴ひ、道士の狂歌を聞んとて、日々に群り集る。張良錢を抛與へ、栗梨を授て樣々の戲言を云、日を經に多の小兒と狎親みければ、其中より一人聰明なる小兒を人なき處へ呼で、多く栗梨の類を與へて申けるは、我いま汝に歌を敎ん、今有二一人一隔レ壁搖レ鈴、只聞二其聲一不レ見二其形一、富貴不レ還二故鄕一、如二衣レ錦夜行一、汝よく之を習へとて、數遍敎へければ小兒よく習ひ得たり。張良又錢を與へて申けるは、汝諸の小兒に此歌を敎て、城中に散て謠はしめよ、若誰に習たるぞと問人あらば、我夢の內に人來て授たりと答へよ、然る時は百病生ぜずして壽命長久ならん、若これに背ば身に大なる禍あらん。小兒喜て去ければ、張良ひそかに衣服を改め、旅人の體に出立て、城中の樣子を伺ひ聞に、案の如く數十人の小兒相あつまりて彼歌を謠ふ、此とき項王は諸侯を左遷し、或は殺たる者多ければ、外にて人の議論せんことを恐れ、近侍の臣を商人に似て市の邊へ

じ、是なる堆き書策は、誰人の作りたるぞと問に、項伯が曰、これは諸國より項王に上る奏章、又は諸大將の諫奏等なり、我尚書令たれば此の如に寫し置り。張良先の表文を取て、是は何人の書たるぞと問に、項伯が曰、魯麟、周鳳未だ時に遇ず、此は淮陰の韓信と云者が上れる表なり、此人家貧して人みな賤ずれども、范增その才を知て項王に薦む、項王これを用る事能ず纔に執戟郎とす、適に此表を捧たりしに、項王怒て扯破り、却て罪に行んと宣しを、我樣々に乞て免る事を得たり。張良大に驚き、扨は先日鴻門の會に歌を作りし韓信なるかとて心の内密に喜びけり。其のち數日を經てつく〴〵と思けるは、故主の仇いまだ報せず、漢王褒中に在て日夜東に歸ることを思ひ玉ふ。項王強暴にして百姓恨み嘆く、我これを見ながら此處に長居して徒に暮すは何事ぞ、早く計を廻べしとて、屹と思案を定め項伯に向て申けるは、我已に浮世に望なければ、此より靜僻の地を求て心身を安く養んと存ずるなり。項伯再三留めて申けるは、先生こゝに來て未だ一月にも及ず、何とて早々に回んと云玉ふぞ。張良が曰、この處は繁華にして某が靜に心を養ふ地にあらず、足下故舊の好を以て、心の儘に歸らしめ玉へ、深く山林に入て名を藏し、仙人を尋て長生の術を學ん、嘗て聞、雲林夫人云ることあり、玉醴金漿、交梨火棗、當レ爲ニ山中許道士一、不レ爲ニ人間許長史一と、これを以て見ときは、若塵世の榮華

後收用西蜀之民、復取關中之地、此正審天下之勢、識天下之機。劉邦先得我心之同然矣。而陛下茫然莫之知也、左右將士不過惟知用武而承順風耳。陛下惟知獨勝、而以爲天下無敵。然不知敗亡之機已萌于不測之中、此臣不顧衆人之誚已、而敢爲陛下言之矣、爲今之計、莫若益兵嚴備巡哨邊關、收回章邯等三人別用、別選智勇之士、阻塞關隘、更收劉邦家屬拘於輦轂之下、建都咸陽、昭布仁義、整飾兵馬、訓練行伍、內求賢相外訪元戎、制服諸侯遵行周政。如此則劉邦不敢東向、而社稷有磐石之固矣。臣誠惶誠恐頓首拜首謹言。

張良見了て嗟嘆して已ず、一たびは驚き一たびは喜ぶ、驚く者は項王よく此人を用ば、漢の爲に大なる患をなさんことを恐れ、喜ぶ者は此奇妙なる士を見たれば、何とぞ漢の臣と成て破楚大元帥となさば、我故主の仇を報じ漢の王業も興ん、誰とも名をば知ねども磻溪の呂望莘野の伊尹にも劣ぬ大將軍の才なりと深く心に喜び、早く樓を下て項伯が回るを待居たりしに、良ありて項伯回り來て申けるは、先生ひとり寂寞として旅中の懶に忍ざらんとて、酒宴を設て持成ければ、張良半酣に至て項伯を引て後園に出、時なるかな百花爭ひ開けて我旅中の思を忘れしむと云て、書樓の邊に逍遙しければ、項伯迎へて了に樓へ上る。張良書籍を取て文字を論

り、張良一々開き見に、其中或は一偏の見あり、或は不通の說あり、或は私に人を薦め、或は讒を構て害を計の言ありて、悉く取に足ざりしが、又一つの表文を拔き見るに、其文に曰、

臣聞、治天下之道、貴審天下之勢、審天下之勢、貴識天下之機、勢者察虛實明强弱、知利害詳得失、然後天下可得而理也。不然則雖强勝一時、不過恃其勇力、終必敗亡、未足以與其勢也。機者辨興亡定治亂、窮幾微明隱伏、然後天下可得而圖也。不然則草莽倥傯苟可得國、終難久安、未足以會其機也。今陛下雖霸關中、人心未服、根本未立、民畏其强而已、懼其威而已、格其面而已。然强可弱也、威可仰也、而非心也、三者乃陛下之所恃、使一旦餒而不振、爲天下不可一朝居也、欲望長治、豈可得乎。此臣之所以寒心而爲陛下憂也。且劉邦昔居山東時、貪財好色今入關中、發政施仁、財物無所取、婦女無所幸、約法三章、收東人心、秦民悅服、恨不得爲關中主也。陛下入關、不聞善政、而惟見殺戮、聽讒邪之言、蹈嬴秦之弊、殺子嬰、掘驪山、燒阿房、大失民望、蓋不知勢之可立、機之可察、而弊端惡孽隱伏於天下、而未動耳。使劉邦一倡、諸侯響應、不期强而自强、不期勝而自勝、陛下之所恃者皆爲劉邦之所得矣。就如近日燒絕棧道、使陛下不疑其東歸三秦、不爲嚴備、然

て哀み哭き、頭を以て地を扣き、良まことに不忠、項羽に君を害せしむ是不世の仇なり、良正に君の爲に仇を報じて、肝腦地に塗るとも情に足ずとて、諸王子と葬を營み、數日ありて又咸陽へ來るに、中途にて項伯が迎の人馬に出合、晚に及て項伯が家に到る。

○項羽拒ㇾ諫烹ニ韓生ヲ

項伯喜て張良を留めおき、先生今より何に身を置んと思へるぞと問に、張良申けるは、故王已に死して某が身多病なれば老子玄默の術を効ひ、莊子が放蕩の遊を學び、箕山の巢許首陽の夷齊が跡を追て名利を罷て雲水を好み、是非を避て山林に入、仙人を尋て妙論を聞んと欲す、世間に奔走して名を後代に殘す事は、某が願にあらず。項伯是を聞て、張良が仕官の心なきを知、數日その家に留置て故人の情を盡しけり。項伯或日項王の召に依りて朝に出ければ、張良は獨り後園に出て花を見けるが、薔薇の咲亂れたる中に、小高き樓ありて、萬卷書樓と云額を揭たりしかば、古の言に欲ㇾ窮ニ千古事ニ朝暮作ニ書樓ニと云事を思ひ出し、閑に樓に登て見れば、左の方には古き書册數萬卷を積、右の方には諸國往來の文策諸官の奏章を堆く積置り。此は項伯尚書令たるを以て、諸方よりの奏狀まづ項伯に傳て項王に達す、項伯これを寫し置たるな

り、項伯に逢て恩を謝す。時に一人來て張良に告て申けるは、項王深く先生の漢王に從て、褒中へ入玉ひしを怨玉ふ所に、韓國の婿成來て項王に見え玉ふ。項王その來り見ゆること遲を怒り、讒者の言を用て了に韓國の王を殺し玉へり。此故に屍を收て昨日本國へ送り還せり。張良是を聞て、地に倒て大に哭て申けるは、我數代韓國に事へ、一旦始皇に滅されたれば、心を盡して仇を報じ、わづかに故主の後を立たる所に何ぞ圖ん又項王に殺されんとはと云て、一夜涙を流して睡こと能はず、夜すでに明ければ、項伯を辭して韓國へ回んと云。項伯が曰、先生久くこの所に逗留し玉へども、軍務に暇なくして心靜に舊日の交を語ることを得ず、今事定て少し靜なるに、何とて早く回んと云玉ふぞ。張良が曰、韓國の故主この比來て項王に見ゆ、項王某が漢王に從て褒中へ入たるを怒て、了に故主を殺玉へり、某これを聞て自ら死すること能ざるを恨む、この故に急に本國へ回て故主の屍を葬り、一族を安置して一月の內に又來ん。項伯が曰、然れども我早々に別るに忍ず。張良が曰、足下もし一日われを留玉ふ時は、是わが一日の罪を增なり。項伯申けるは、先生故主を葬て一月の內に又來んと云、我人を半途に出して迎ふべし、必ず約を違へ玉ふな。張良が曰、われ必ず來ん、只人を出して迎へ玉ふとも、外に沙汰し玉ふこと勿れとて、五六騎を引て夜を日に繼で韓國へ回り、靈前に祭をなし聲を放

り、死しては褒中の鬼となる、何か又棧道を修て本國へ回ることを得んとて、喚き叫ぶ所に、蕭何走り來て漢王に申けるは、大王必ず張良を怨玉ふな、張良昨日相わかるゝ時、棧道を燒ときは大なる利四ある事を云り。一には項王これを聞て、漢王再び東へ回る意なき者なりと思て、彼自ら用心すること無ん、二には三秦王心怠て常に備をなさじ、三には御方の勢にげ去ること能ざるを知りて能大王に事ん、四には諸侯爭て戰ふこと有とも、我兵を盜こと無らん、是四の利あれば必ず棧道を燒べしと約せり、必ず怨玉ふべからず。漢王大に喜び、我誤て子房を怨たり、速に進めとて、已に褒中に著玉ひければ、日を擇で王位に卽百姓を治め安じ玉ふに、漢の民その德を感じて悅服せずと云者なし。其後蕭何を相國とし、曹參、樊噲、周勃、漢嬰等に悉く官爵を賜り、諸軍を賞して賢を招き糧を貯玉へば、半年を過ざるに、國中よく治て道不レ拾レ遺、夜不レ扃レ戸、行人讓レ路五穀豐熟、家々に謠ひ悅ぶ。去ほどに張良は漢王に別て後、火を放て棧道を燒、鳳嶺に半日逗留して人馬を休め、鳳州より益門に出て鳳雛山に著ければ、向より一手の人馬出きたる。張良驚て誰人ぞと問ば、答て申けるは、我等は皆項伯が手の者なり、項伯棧道の艱難にして先生の勞れ苦み玉はん事を察し、某等に命じて迎へ回らしむ。張良大に喜び、項老昔の好を以て此の如に心を用玉ふ、誠に眞實の友也とて、相共に咸陽へ回

少則一二年必ず大王を東へ回らしめ奉ん。漢王宣けるは、果して先生の言の如ば、我いかなる苦を受とも少も怨ること無べし、先生若大元帥の人を薦て我に歸せしめば、何を以てか證據とせん。張良が曰、臣手づから一紙の割符を書て蕭何に渡し置り、大元帥の人を薦め來さば、蕭何定てよく大王に奏せん、且臣が大王と此間ひそかに申せし事共、よく御心を認て忘れ玉ふな。漢王涙を流し張良が手を執て宣けるは、先生千萬約に背こと勿れ、若東に回て太公に見えられば、我敢て父母を棄るに有ず、項王約に背て强暴なる故、已事を得ずして漢中に赴く、他日東に回て必ず孝養するの時あらんと、懇に傳へて玉はれ。張良謹で命を受、蕭何に別をなし、傍へ呼で密に低語けるは、此間申せし事足下よく心を盡して漢王を扶玉へ、我も楚を破るべき大元帥の人を尋ね得ば、適の割符を以て來らしむべし、足下意を用て薦用ひ玉へ。蕭何が曰、先生心を安じ玉へ、若割符を持來る人あらば、我必ず君に薦ん。張良諸大將と別をなし、五七騎を引て引回しければ、漢王は人馬を進て褒中へ入玉ふに、後陣の勢一度に哭き叫ければ、何事ぞとて後を顧玉ふに、火焔天を焦して黑煙地をつゝみ、三百里が間に燒あがりければ、漢王大に叫で宣けるは、是必ず張良が火を放て棧道を燒、われを東へ回ること能はざらしむる者ならん、諸軍勢も聲を調て張良を怨罵り、大に哭て申けるは、我等生ては關外の人とな

蜀の路は只今に比すれば、險阻なる事十倍なりき、秦の惠王六國を竝せ取んと欲して蜀を攻んとすれども、蜀に五丁の力士ありて神力敵する者なし、先これを除ん爲に鐵を以て大なる牛を五つ造り、詐て天下に沙汰し、鐵の牛毎日黃金五斗を糞す、秦の國是に因て强く富りと云ければ、蜀王これを實と思ひ、險阻を切開て鐵の牛を盜み取んとて、五丁の力士に路を作せ、つひに秦の國へ入けるに、彼牛は皆詐にてぞ有ける、其のち力士已に死ければ、秦の惠王兵を起して蜀を攻るに、路筋よく開たれば、了に蜀を滅せり、今四川の棧道と申は、此時に開たる道にて候。漢王すでに金牛の棧道を越玉ひければ、張良馬より下て申けるは、臣大王を送てこゝに來れり、是より暇を乞て本國へ回るべし。漢王大に驚て宣けるは、先生韓國を辭してより我に從て教をなす片時も離べからず、然るに棄て回んとならば、我今より如何せん。張良が曰、臣これより韓國に回て故主に見ゆと云ども、實は大王の爲に三の大事を成ん爲なり、一つには項王に說て、都を彭城に遷させ、關中を殘し留めて大王都を建の地と成しめん、二つには天下の諸侯に說て楚を叛て漢に歸せしめ、且項王に西を攻るの心なからしめん、三には大王の爲に漢を興して楚を滅す天下の大元帥の才ある人を尋て薦ん、臣この三の大事を成て咸陽にて大王の攻上り玉ふを待候べし、只願は大王萬に付て堪忍し玉へ、漢中に居玉ふこと多則三年、

れば、重山峻嶺鳥も翔がたく、棧雲に連て萬仭の青岩天に峭たるを見て、大に叫で申けるは、我等十死一生の戰を經てたま〳〵秦を滅したるに、故郷に回ることを得ずして、却て此の如く險難の地に赴く、若人ありて此難處を守らば、我等生て再び本國へ回ることを得ず、空く漢中にて死果べし、不レ如これより引回し楚と快く討死せんと云ければ、樊噲等皆尤と同じて、一度に喊の聲を擧、皆馬の頭を立なほせば、漢王も怒て宣けるは、我懷王の約を奉て、早く關中へ入者を咸陽に王とすべしと云しに、何ぞ料ん項羽前の約に背き、范增が言を聽て、我をこの險難の地に左遷せんとは、如レ之秦の降將を三秦王に封じて、我漢中の路を塞しむ、我この地へ一度入ては、後日に雲へ騰んは知ず、再び出ることを得がたし、三秦いまだ備を成ざる先に、早く引回して楚と生死を決すべし。張良、蕭何、酈生等いそぎ馬より下て申けるは、諸軍の一時怒を發して申す事を聞入玉ひて、天下の大事を誤玉ふな、漢中は險阻なれども大王の興玉ふ地なり、深く此地に在て軍馬を催して聚め玉ふとも、項王其虛實を知こと能じ、大王心靜に人馬を養ひ懷け、時を待て打で出、まづ三秦を定めて天下を圖り玉へ、今若諸軍の言を聽て東に回り玉はゞ、項王勢に乘て攻來んこと卵を壓が如ならん、其時悔るとも及ぶまじ。漢王げにもと怒をやめ、樊噲に命じて路を急せ、褒中に向て金牛嶺を越玉ふ。酈生申けるは、昔巴

りとぞ申ける。

○張良燒二蜀棧道一

去程に漢王諸大將に下知して、旅行の用意を急がせ、卽時に霸上を打立玉へば、咸陽の百姓此由を聞て、老たるを扶け幼を抱て路に出、こと〴〵く地上に拜伏して年老たる者數十人哀で申けるは、大王早く關中へ入玉ひぬれば、定て咸陽に王たらんと思ひしに、案の外に今漢中へ赴玉ふ、又いつの時か東に回り玉ひて、我等再び天顏を拜することを得んとて大に哭ければ、漢王宣けるは、汝等よく家業を理めよ、我他日東に回て再び汝等に對面すべし、百姓德を慕て皆遠く送んと云けるを、蕭何制して申けるは、項王の法度甚だ嚴なり、汝等これより回て罪せらるゝこと勿れ。百姓猶淚を流して別るゝに忍ざるを、張良急に樊噲に命じて軍馬を驅て進ませ、峽山の驛を經て本道を行事、九十里にして安平縣に到る。又四十里にして扶風縣に到り、四十五里にして鳳翔郡に到り、三十里を經て迷魂寨に到り、又三十里にして寶雞縣に到り、五十里にして大散關に到り、六十里にして淸風閣に到り、又六十里にして鳳州に到りければ、是より山川險阻にして棧道を進に、漢王の勢みな山東の人にて、了に險難の地を經ざる者どもな

へ入しめ玉へ、然る時は患なからん。項王の曰、我漢王を此所に留んと欲す、國に回さば、恐くは異心を生ずへし。陳平が曰、大王すでに天下に告て、漢王を巴蜀の主とし玉ふ。今又この所に留め玉ふ時は、信を天下に失ふなり、不如張良が諫に從ひ、漢王の父太公を人質として放して漢中へ入しめ玉へ、然る時は諸侯に信を失はずして、又漢王異心を生ずる事無ん。項王申けるは、議論已に定て漢王を此ところに留べしと云しかども、今ゆるして漢中へ入しむべし、豐沛へは回らしむべからず。漢王これを聞て佯て哭き哀玉へば、項王申けるは、卿早く漢中に入て巴蜀を治めよ、朕都を彭城に建て後卿が一族を迎へ取て苦に養ふべし、然る時は卿又孝養の道を失はざるなり。漢王拜謝して曰、臣深く大王の大恩を感ず、死すとも之を忘るべからず、臣早く漢中へ赴て大王の命に從ふべし。時に鍾離昧すゝみ出で諫て申けるは、前に范增相別るゝ時、必ず漢王を漢中へ入しめ玉ふなと云り、大王何とて忘玉へるぞ。項王の曰、彼が父母を彭城に留て質とす、彼何ぞ異心を生ずべき、況やわれ詔を出して天下の諸侯を封ず、若漢王を此に留めば信を天下に失はんとて、了に諫に從ざりければ、韓信之を聞て長嘆し、漢王を漢中へ入しめて、却て其父母を質とする事は、彼等が巧し計なり、他日父母を思ふの心を以て鷹の如く揚る勇を奮ひなば、我輩みな虜とならん、惜かな、范增が言みな徒事と成

我一人を住るは必ず殺んとの心ならん、如何して身を免ん。張良が曰、君の父母妻子みな豐沛にあり、明日項王に表を上て、一族を迎へ取んと望玉へ、臣其時計を用て君を救ん。漢王これに從ひ酈生に表を書せて、次の日項王に奏せらる。其文に曰、

聖王以孝治天下、而天下莫不歸于孝、使父子和睦、仁愛洽浹不變、時雍遂成至治。臣邦豐沛小民、從風西向、仰託鴻猷、受封王爵、天下之至榮千載之遭際也。臣身雖榮、父母妻子遠在故土、未得闔門共居以享天祿。意欲差人搬取、又不得親掃墳墓、榮歸故里、以彰陛下恩及存歿之德。伏乞留兵馬駐札咸陽、隻身領數騎赴豐沛、給暇限三月、搬取家小共沐王化、下情未敢擅便、伏惟聖裁、不堪惶恐之至。

項王見了て申けるは、卿故郷へ回て父母を迎へ來んと云、是人の子の親を愛する意なり、然れども其本心にあらじ、昨日卿一人この處に住れと云しに因て、斯の如く奏するならん。漢王の曰、臣が父年老て養ふ人なし、臣之を慕ふこと久し、然れども大王新に位に卽て、事多きに依て奏することを得ず、今諸の諸侯みな故郷に回て父母に見ゆ、臣獨り此に留て何か父母の面を見べきとて、涙を流して哀み玉ふ。張良進み出て申けるは、漢王を必ず故郷へ回すべからず、大王唯人を豐沛へ遣して、漢王の父母妻子を迎へとり、人質として留おき、其後漢王を漢中

て心中ひそかに喜び、次の日項王に表を上て曰、

國家以レ理レ財爲レ先、聖人以レ儉則爲レ本、財不レ理則出入無レ度、費用無レ經、財力盡而民必去矣。不レ儉則奢侈日臻、倉庫日虛、民不レ聊レ生而國必亡矣。陛下初登二大寶一。以レ民爲レ本、若不レ節レ用何以爲レ治。見今諸侯聚二集咸陽一、毎二一路諸侯一、帶二領本部兵馬一、不レ下二三四萬一。總約二大王一、約止二百萬一、所レ用不レ可二勝數一、倉庫空虛錢粮將レ盡、如二一路諸侯一支二酒食一十五擔、羊一十五隻、猪二十口、大牛五頭、麪二百斤、柴四十擔一、兵吏人等以二十萬一爲レ率。毎二名日一支二米二升、雜豆一升、料豆二升、草二束一通算毎日支二酒共三百擔、羊二百隻、猪四百口、大牛百頭、麪四千斤、柴八百擔、米二萬石、辨豆一萬石、料豆二萬石、草二萬束一、以二百萬一算來費用不レ貲。臣實寒心、若不二急令レ還レ國、百姓力難二支持一矣。伏乞聖裁、臣等下レ情不レ勝二懇切之至一。

項王表文を見了て申けるは、陳平が議する所極て好、もし天下の諸侯を久く住ば、數十萬の大軍日用の費咸陽の民を悩ん、速に其分國へ回らしむべしとて、新に封ぜられたる諸侯、五日の内に打立て國に回るべき由を觸させ、漢王一人は且く咸陽に殘り留るべしと下知しける。張良これを聞て急に漢王に見えければ、漢王の曰、項王今日國々の諸侯をみな許して回らしめ、

て百姓の云沙汰するを承るに、以レ臣封レ君古今罕レ有と申す、如レ此なる時は天下を服することを能はじ、臣思ふに、此時范增に然るべき大將を付て急に彭城へ遣し、義帝を遠く僻地に移して廢せるが如くならば、今より其命を用玉はずとも、大王自ら天下に君として百姓の議論を塞つべし。項王尤と同じ、范增に向て申けるは、亞父早く桓楚、于英二人を引て彭城に行、義帝をすゝめて郴州へ都を遷させ、其のち彭城を造營して宮室を建よ、是わが故郷なれば、自ら行て一見すべし。范增命を受て退き、桓楚、于英等と急に打立けるが、項王に告て申けるは、臣いま彭城へ赴く、只御方の大將大王の左右に在て御心を惑んことを怕る、臣三箇條の諫あり、大王よく心を認て片時も忘れ玉ふこと勿れ、第一は咸陽を離れ玉ふな、咸陽は古より建レ都の地にして、沃野千里天府の國なり、第二は執戟郎韓信を用玉へ、蓋し韓信は天下の元戎となるべき才あり、然れどもいまだ時を得ず、大王この人を舉玉はゞ、大將士卒をよく用て天下に敵する者なかるべし、大王舉用ること能ずんば、只速に殺し玉へ、恐くは他人に用られば、後に大なる患を成ん、第三は漢王を此所に留て、必ず漢中へ入しめ玉ふな、臣彭城より回て後に宜く此を料ふべし、此三箇條きはめて肝要なり、片時も忘れ玉ふこと勿れ。項王許諾して亞父早く行、われ三箇條の諫を忘じと云ければ、范增等相わかれて彭城へ赴けり。陳平これを見

も讐たりと云て、又殺す心を止にけり。漢王退て本陣に囘りければ、張良急に來て申けるは、君今日の危を知玉ふか。漢王の曰、知ず。張良が曰、君の洪福天より祐る者なり、項王の行か不レ行かと問は、答を聞て殺ん爲なり、君よくも讐をなし玉へり。漢王始て愕き、如レ此にて久しく此に留らば、必ず害に遇んと思ふなり、如何して身を免ん。張良が曰、項伯、陳平二人久く御方に志あり、臣この二人と密に計を廻すべし、君預め旅行の用意をなして項王の命あらば、即時に打立て出去玉へとて、私に項伯、陳平を呼よせ、范增が害せんとすること頻なるに因て、漢王早く身を遁んとす、然ども事を託て出べき計なし、二公必ず妙計あらん、願くは救玉へ、他日漢王國を保ば、決して今日の恩を忘れ候はじと云に、陳平やゝ久く思案して急度計を設け、張良が耳根に寄て箇樣々々と私語ければ、張良限なく喜び、此計極めて妙なりとて、相別れて數日を經ところに、項王天下の諸侯を封じて後、未だ此事を義帝に奏せず、適に霸王と成し時、使を馳て都を郴州へ遷玉へと云つかはしけるが、未だ其沙汰なき由を聞て、諸大將を集て申けるは、我天下の諸侯を封じて大事すでに定る、然れども義帝彭城に在て未だ都を遷し玉はず、汝等いかゞ料ふべき。時に陳平に進み出て申けるは、天に二の日なく民に二人の王なし、大王すでに天下に君として又懷王の命を受用ひば、是二人の天子あるなり、外に

強を好じ弱を侮る、項王勢大にして力強ければ、御方の軍勢も密に走て楚に歸せん、然る時は君いよ〳〵扶を失玉ふべし、三の害なり、此の如の利害あり、萬づ忍で自ら勵し臥レ薪嘗レ膽ば、王業も興り天下をも得玉ふべしと云ければ、漢王大に喜び、早く漢中へ入んと用意をし玉ふ。范增は日夜に漢王の事を心にかけて、其夜つく〴〵と思けるは、漢王は火德の人にして旗幟も皆赤を倚ぶ。漢中は西方なり、西は金を主る、金は火を得て成就す、此人もし漢中に居ば、必ず大事を成べしとて、急に項王に見て申けるは、大王今沛公を漢王に封じ玉ふ、彼甚だ不足の心あり、手下の諸軍も皆山東の者共なれば、忿り怨で心安からず、大王妄に懷王の約に背玉ふと罵る、只この時に心を決して殺し玉へ。項王の曰、われ已に漢王に封じて詔を出せり、今罪なきに爭か殺べき。范增が曰、漢王來て大王に見えば、我汝を漢中に封ず、彼地へ行か行ざるかと問玉へ、彼もし行と答へば、是自ら專にするなり、不レ行と答るは不足の心あるなり、大王これを罪して殺し玉へ。項王げにもと喜居たるに、次の日漢王幷に衆の諸侯來て見えければ、項王問て申けるは、我漢王を封じて巴蜀の主とす、汝彼地へ行か不レ行か。漢王答て曰、君の祿を食ものは、命を君の手に懸、大王何にとて行か不レ行かと問玉ふぞ、臣は譬へば大王の馬の如し、鞭玉ふ時は行、轡を攬玉ふ時は止る。項王これを聞て大に笑ひ、汝よく

能屈二于一人之下一、而伸二于萬人之上一ものは、湯武これなり、願くは漢中に王としてその民を養ひ懐け、賢才の人を用て巴蜀の兵を起し、却て三秦を攻取玉はゞ、天下をも圖つべし。張良も諫て申けるは、巴蜀は秦の左遷の地なれども、内には重山の固あり、外には峻岩の險あり、進んでは天下を幷べく、退ては險阻に仍て守べし、項王百萬の勢ありとも安ぞ我を攻ることを得ん。是まさに漢を興すの地にして武を養ふの處なり、君怒を止て快く打立、早々に漢中へ入玉へ、少にても不足の心を顯し玉はゞ、項王必ず事よせて害を成ん、范增日夜君を殺んと計る、君是を知ず、却て兵を動して項王と戰はんと宣ふ、楚の勢強大にして若戰ば御方ことごとく粉にせられん。漢王二人の諫を聞て喜で宣けるは、我謹で先生の敎に從ん。酈生申けるは、君漢中に居玉ふ時は三の利あり、咸陽に居玉ふ時は三の害あり、如何となれば、蓋し巴蜀の路は山川重々にして甚だ艱難なれば、人其虛實を知こと能はず、一の利なり、軍馬を調練して跋涉に慣ふ、二の利なり、君兵を起して打て出玉ふ時、手下の者皆故郷へ囘る事を喜で、力を盡こと十倍ならん、三の利なり、又三の害と申は、蓋豐沛は御方の兵共の故郷なれども、韓魏と境を接て我國の事洩易し、一の害なり、兵を起して楚を攻んとし玉ふ時、范增其淺深を知て能防ぐ備をなし、又虛を伺うて襲來ん、二の害なり、人の心は動きやすく、皆大を喜びて小を欺き、

とし、鍾離昧を右司馬とし、丁公を左將軍とし、龍沮を大司馬とし、季布を左司馬とし、雍齒を右將軍とし、劉存を後將軍とし、陳平を都尉とし、韓生を左諫議とし、武渉を右諫議とし、桓楚を大將軍とし、于英を引戰將軍とし、子琪を大將軍とし、韓信を執戟郎とす。其外泛々の輩は悉く記するに及ず、大に酒宴を設け慶をなして退散せり。

○陳平定レ計救ニ漢王一

沛公漢王に封ぜられて、霸上の陣に回り玉へば、諸大將みな色を失て申けるは、巴蜀は左遷の地なり、我君早く關中へ入玉へば、自ら咸陽を得玉ふべきに、今却て漢中へ左遷するは、必ず范增が計ならん、不レ若人々力を合せて項王と戰ひ、固く懷王の約に從て左遷の地に老果ることを免るべし、然らずんば何の時か再び故鄉へ回ることを得ん。樊噲すゝみ出て申けるは、諸大將の言よく我心に合へり、我願くは先手に進で快く項王と戰ふべし。漢王も大に怒て、我關中に王として咸陽に都する時は、これ懷王の約なり、今却て左遷の地に封ずるは何事ぞ、巴蜀の路は峻山重嶺峩々として纔に棧をかけて往來を通ず、爭か此地に住ることを得んと宣ひけるを、蕭何諫て申けるは、君いま漢中の惡き處に王たれども、猶空く死するに愈らずや、

蜀は咸陽より西南の隅にして乃ち秦の要地、山川險阻にして道路きはめて艱難也、今沛公を漢王に封じて巴蜀の主とし玉へ、然る時は關中の地に王たるなり、是約に負かざるに似たるべきか、却て秦の降將章邯、司馬欣、董翳三人を三秦王に封じて巴蜀の路を阻遮しめ玉へ、沛公譬ひ謀反の心ありとも、三秦王に支られて巴蜀より咸陽へ出ることを得ず、長く漢中に老死せん、是封賞に似て實は左遷なり。項羽が曰、この計甚だ妙なり、速に封賞あらんとて、軍政司に命じて一々に功勞を記錄せしめ、先沛公を漢王に封じ、都を南鄭に定て四十一縣を治させ、章邯を雍王に封じて都を廢丘に定て上秦の三十八縣を治させ、司馬欣を塞王に封じ、櫟陽に都て下秦の十一縣を掌しめ、董翳を翟王に封じ、高奴に都て中秦の三十縣を保しめ、申陽を河南王として、洛陽に都て河南の二十縣に主たらしめ、司馬卬を殷王に封じて、朝歌に都て河内の三十二縣を掌しめ、英布を九江王に封じ、六合に都て四十五縣を鎭せしめ、共敖を臨江王に封じ、吳芮を衡山王とし、田安を濟北王とし、魏豹を西魏王とし、張耳を常山王とし、臧荼を燕王とし、趙歇を代王とし、田横を上齊王とし、田郁を中齊王とし、鄭昌を韓王とし、陳勝を梁王とし、田榮を前齊王とし、田慶を前趙王とし、陳餘を北趙王とし、項莊を交東王とし、項正を春勝君とし、項元を安勝君とし、范增を丞相として尊で亞父と號し、項伯を尙書令

にて、内に石の柩を藏して鐵砲大弩を張たれば、少しにても動す時は、裡より鐵箭砲石迸り出て此内の者一人も生ることを得じ、只土を以て塡べし。項羽これに從ひ金銀珍寶を皆運び出して、其跡を塡させ、其のち阿房宮へ入て見に、三百餘里に建つゞけて華麗なること目を驚しければ、長嘆して申けるは、是天下の財力を費し盡して秦の亡る所以なれば、留め置べきに非ずとて、一齊に火を掛させければ、建列たる宮院こと〴〵く燒て、三月が間火消ざりけり。咸陽の民項羽が殘暴を見て驚き惶れて、日夜心を安んぜず。國々の軍勢も皆故鄕を思て怨る者多かりければ、諸大將これを患て、范增と議して申けるは、御方の軍勢久く此に逗留して恩賞をも蒙ず、故鄕を慕て變亂せんとす、如何して鎭むべきぞ。范增が曰、われ已に項王に此事を奏せんとの心ある處に、諸大將いしくも申されたり、同く奏せんとて、齊く項羽に見て申けるは、天下の諸侯諸の將士、大王に從て秦を伐、功勞を成て久く此に逗留す、願くは封賞を賜て、皆本國へ回らしめ玉へ。項羽が曰、これ能我心に合へり、功を論じて賞すべしとて、密に范增に向て申けるは、昔日懷王約を定て、早く關中へ入者を王と爲べしと云り、沛公われより先に關中へ入たれば、功を論ぜは宜く王に封じて咸陽に都を建しむべし、然れども沛公この要害の地に居ば、後に大なる害をなさんことを怕れて我心決せず、先生いかゞ之を議せん。范增が曰、巴

項羽封天下諸侯

心を快せんと欲す、強に財寶を望ばかりに非とて、次の日自ら十方の勢を引て驪山宮へ行て見れば、蒼龍籠殿宇、古栢映樓臺、明堂容萬馬、山勢隱千蛟、石欄盤白玉、神路貫天衢、左右に虎豹獅象を列ね、東西に文武の鐵衣郎を立て、門戸の壯麗なること百千年の模範をなし、陵寢巍峩として億萬歳の形勝あり。項羽馬より下て墳の前に到り、力を竝せて掘開べしと下知すれば、十萬の軍勢喚き叫で我先にと力を奮ひ、塵土天を遮り斧聲地を動して三日が間掘けれども、未だ實の穴を尋ね得ず。項羽下知を傳て、眞の穴道を知ものあらば重く賞せんと云に、英布進み出て申けるは、臣往日驪山の工役に差れ、人夫を統て寢陵を築たれば、内の樣を委く知りとて、士卒を下知して北より南に向て、深さ五丈長さ十丈あまり掘せければ、少し空地の處あり、又五六尺掘入ければ、忽ち石牌の樓門に到れり、門を開て内へ入ば、石城緊く閉て左右に石の龍ありて、一は升り一は降る、中門の管の木には大石を鑄入たれば、如何にすれとも開ざるを、鐵鎚を以て打碎くに、門の閫開けて大なる路あり、石を疊で砌とし兩旁に欄干を構たり。これを二里ばかり行に大なる墳門あり、推開て見れば、大殿、享殿、寢殿、三宮、六院を建列て、寢殿の中に始皇帝の石の柩を安置せり。其前に金銀六十萬斤、天下の重寶百二十種山の如くに積あげたり、士卒進んて柩を擊碎んとするを、英布制し止て申けるは、是は石の棺槨

何とて我に知せざると云に、張良申けるは、大王御尋なきに因て臣つひに財寶の事を說ず、秦の金銀財寶は孝王昭王より積貯て、始皇に至て富貴天下に比無りき、然ども始皇崩じて後、二世胡亥又驪山の下に陵を築て夥しく金銀を費し、餘る財寶を皆その墓へ收め入たり、項羽これを聞てやゝ久く案じ煩けるが、范增に向て申けるは、財寶悉く始皇が墓の中にあれば、皆掘出して士卒に與ん。范增が曰、始皇が墓の中には、平生その玩びし物を埋たる也、爭か財寶を收べき。張良笑て申けるは、老將軍知玉はずや、始皇が墓と申は方圓八百里高さ五十尺、珠玉を以て星斗とし、水銀を以て江河とす、金銀その槨を遶り百寶その前に連る、宮女數百人を殉葬して、六國より取收めたる珊瑚、瑪瑙、翡翠、琉璃の類ことぐく埋ずと云ふことなし、此ゆゑに每夜光を顯す、何とて財寶なしと宣ぞ。項羽いよく心動て頻に墓を掘んと云に、范增諫て曰、始皇無道なりと云どもこれ帝王の墓なり、故なくんば動すべからず、今若掘て其財寶を取ば、人皆墓を刧し玉へりと云ん、大王初て位に卽玉ふ、決して此事を止り玉へ。項羽が曰、始皇無道にして六國を併呑し、天下の財を費し天下の力を盡す、焚レ書坑レ儒百姓を殘暴して桀紂が惡に過たり、我いま子嬰を殺して其子孫を滅すと云ども恨未だ解ず、此故に墓を撥き屍に鞭て

て言ず、長嘆して退ければ、項羽重く張良を賞し、吉日を擇で大禮を行ひ、遍く遠近に告知せて自ら西楚の霸王と號し、懷王に尊號して義帝と稱し、江南に徙して郴州に都を立させ、實は其命を用ざりけり。

○項羽封二天下諸侯一

項羽すでに霸王と稱して諸軍勢に恩賞を施けるが、秦の財寶は沛公始め關に入し時、兵共爭て掠め取ければ、倉廩みな空虛にして財用足ず、此に因て范增を召て申けるは、我に從ふ大將士卒久く戰ひ苦で功勞多ければ、恩賞を與んと欲するに財用足ず、汝いかなる計かある。范增が曰、これ最易し、沛公早く咸陽へ入て財寶の所レ在をよく知り、此者を召て問玉へ。項羽げにもとて沛公を招ければ、張良これを聞て、急に使を馳て沛公に告けるは、霸王いま君を招は秦の財寶を問ん爲なり、速に來て見玉へ、若財寶の事を問ば張良よく知候んと答玉へ。沛公これに因て心を安じ、鴻門の陣に來玉ふに、項羽申けるは、汝早く咸陽へ入て秦の財寶の所レ在をよく知ん、詳に我に敎へよ。沛公の曰、某關に入て事多ければ、財寶を點檢するに暇なし、張良こそ能その所レ在を知候はん。項羽いそぎ張良を召て、汝もし財寶の所レ在を知ば、今まで

に卽、水を以て金を承百歳にして崩ず、相繼で三十一代共に六百二十九年也、周の文王殷の紂が無道に因て天下を三分して其二を有つ、武王すでに立て紂を伐て天子となり、木を以て水を承壽九十三歳にして崩ず、相續て三十六代共に八百六十七年、これ三王なり、克勤克儉に仁を敦し義を尙び、一身に私せずして專ら百姓の爲にす、治水の勞禱雨の勤紂を諫めて獄に囚る、是皆三王の盛德なり、大王これを用玉はんか。項羽が曰、われ王號を稱せんと欲すれども、若又王の次あらば我ために說示せ。張良が曰、王の次に五霸あり、齊の桓公、宋の襄公、秦穆公、晉文公、楚莊公これなり、天下の爲に殘を除ぎ暴を去、おの〱一國に霸として仁を好み義を尙び威武强大にして人みな恐る、大王これを用んや。項羽が曰、王號は古に宜しと云ども今に合はず、霸業は今に宜と云ども古に合ず、若古今を倂せて兼て之を有ち霸王と號せんに若べからず、我楚國に生たれば淮より北を西楚とす、汝等もろ〱の大將、今より我を西楚の霸王と號し、詔を作て天下に觸知しめよ。范增これを聞て急に止て申けるは、王號を稱し玉ふとも必ず霸號を稱し玉ふな、古人も大霸不レ過レ五、小霸不レ過レ三と云り、大王誤で張良が言を用ゆること勿れ。項羽が曰、五霸は天下を保こと最久し、況んやわが行ふ所よく五霸に合へり、今われ自ら立て霸王と稱す。張良いかんぞ我を誤ん、先生多言すること勿れ。范增は首を低

つく、在位百年にして崩ず、顓頊は黄帝の孫昌意の子、又姫姓なり、水を以て金を承北方に在て冬を主り、二十歳にして位に登り、水を以て官を紀す、在位七十八年壽九十八歳、帝嚳も又姫姓なり、木を以て水を承、亳州に都す、在位七十年壽一百五歳、帝堯姓は伊祁氏其母孕めること十四月にして生り、放勳と名く、眉には彩あり、豐下兌上十五歳にして帝摯を佐て唐に封ぜられ、二十歳にして位に登り、火を以て木を承、都を平陽に立、景星天に耀き甘露降り、鳳凰庭に止り、芝草郊に生じ肉脯自ら厨に生ず、在位五十年にして舜政を攝る事二十八年、壽一百十八歳にして崩ず、帝舜姓は姚字は都君、冀州に家す、土を以て火を承、年八十二歳在位五十二年にして大禹に政を攝らしめ壽一百歳にして崩ず、是五帝なり、蓋帝は天の號なり、德天地に配び干戈を動ず殺伐を行ず、揖讓して天下を有もの帝と稱す、大王これを用玉はんか。項羽是を聞て、心の中に我子嬰を殺し天下を征伐して、五帝に愧る事あれば帝號は宜かるまじと思ひ、乃ち答て申けるは、帝號は我心に思ふ事あり、汝又王號の來歴を示せ。張良が曰、五帝の後に三王あり、夏殷周是なり、夏の禹王姓は殷名は文命字は高密、堯之を司空とす、金を以て土を承安邑に都す、壽一百歳、相續て十九代共に四百三十二年也、殷は即ち帝嚳の後、姓は子名は履字は天乙、是を成湯と云、身長九尺聖德あり、桀を南巢に放て天子の位

容し玉はずと云ければ、項羽大に怒て曰、懷王は我家より立たる君なり、又征伐の功なし、何を以てか專ら約を主ることを得ん、況や天下を平定せしは皆わが力なり、今却て人の下に屈して命を聞は、大丈夫の志にあらず、我日を擇で自ら王と成ん。范增が曰、尊號を稱するは宜く古の道に順て意に合を用ふべし、張良は博く書を讀で歷代の事を能知り、召出して古の例を問、乃ち彼に名號を定めさせらるべし、彼が定むる所もし御心に合ふ時は、彼まことに大王に忠あるなり、若又御心に合はざる時は、彼乃ち大王を欺き昧すなり、早く國法を以て殺し玉へ。項羽これに從ひ張良を召て申けるは、我今關中に王たらんと欲す、然れども未だ尊號を定めず、汝は博く書を讀で必ず歷代帝王の號を知ん、今すでに我に事ふ、願くは古の例を斟酌し宜からん號を定めて天下の人を服せしめよ。張良これを聞て心に思ひけるは、是必ず范增が計にて我に名號を定させ、言質を取て項羽を疑せ、却て讒言を以て害せんと巧ならんと曉りければ、只古の例を語て彼が心の儘に定めさせん者をとて、乃ち答て申けるは、古より尊號に不同あり、臣委細に之を述ん、大王自ら擇で名號を定め玉へ、古の聖帝明王天下を有ては、必ず國號を立、三皇の後に五帝あり、五帝は少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜なり、少昊名は摯、字は青陽、姬姓なり、金德を以て天下に王たり、都を曲阜に建て鳳凰來儀す、故に鳥を以て官に名

やとて、涙を流して立ければ、項羽少し氣をしづめ、兵を引て秦の宮殿を見に、高樓層臺玉を磨き、千門萬戸金を鏤たれば、長嘆して申けるは、秦の富貴此の如にして自ら守ること能はず、誠に可レ惜可レ惜。范增が曰、是たゞ百姓を虐て人の諫を聽ざる故なり。項羽默然として言ず。了に本陣へ回りけるが、日すでに暮ければ、燭を燃させて范增を召、いま咸陽を取て傳國の玉璽を得、子嬰を殺して秦を滅たれば、天下一日も不レ可レ無レ君、われ自ら關中に王たらんと欲す、先生いかゞ思へると云に、范增申けるは、諸の大將身を棄て大王に從ふ者は、封侯の賞を被て子孫に流へ、攀龍附鳳して富貴を享ん爲なり、今大王の言よく諸人の意に合へり、然れども大王義兵を起の始、楚の懷王を君として、其命を受玉へり、今彭城へ使を馳て懷王の詔を受、其のちに王と成玉はゞ、名正く言順て天下の議論を免ん。項羽げにもとて急に項伯を彭城へ遣し、懷王に奏せしむ。懷王これを聞て宣けるは、我已に諸侯と約を定て、まづ咸陽へ入ものを王と爲べしと云り、今再び問は何事ぞ。項伯再拜して曰、魯公は功高く望重し、沛公は力弱く勢孤なり、願は魯公を王として關中を鎭め玉へ。懷王宣けるは、信は人君の大寶なり、我前約すでに定れり、今もし此を改めば、信を天下に失ん、汝速に回て前の約に背こと勿れ。項伯力及ばず急ぎ鴻門へ回て、懷王先約を定たるを以て、再三申せども許

に入て、秋毫も犯さず、法を三章に約して深く民の心を懐く、今大王民に恩を施ず、已に子嬰を殺して又咸陽の民を害せば、人の心離れ叛て天下得べからず。項羽が曰、われ天下の諸侯と秦の無道を誅す、子嬰は乃ち秦王なり、如何ぞ此を生て置ん、今百姓聲をそろへて、甚われを罵り辱む、是みな謀反する者なり、若殺し盡さずんば、必ず後の患を成ん。范増が曰、昔し魯君一人の罪なき宮女を殺せしかば、國中九年の水旱あり、景公怒て宮妃を殺せしかば、壺傾くこと三里、只罪なきに人を殺せば、皆飛蝗と化して五穀を害す、古人も一夫啣レ恨六月飛レ霜、一婦懐レ怨三年不レ雨と云り、今愁雲黒霧の起たるも、罪なきに子嬰を殺し玉ふ故に、上天も哀を成ものなり、況や多の百姓を罪なきに殺し玉はゞ、天の心に逆玉はんと諍て諫るに、咸陽喚叫で罵る聲止ざりければ、項羽いよ〳〵怒て范増が諫を用ず、英布を下知して、秦の一族八百餘人官人並に百姓四千六百餘人を斬殺させければ、屍は壘々として丘の如く、血は流て溝をなし、道行人も絶にけり。項羽怒の氣なほ已ず。咸陽の百姓男女を分たず殺し盡んと云を、范増聲を放て大に哭き、項羽が馬の頭を叩て諫けるは、昔し湯王の時天下久く旱す、湯王わが身を犧とし、桑林の野に禱て六事を以て自ら責玉ひしかば、遂に大に雨降れり、古の君は此の如くに身を民の爲に捨玉へり、今秦の民罪なきに悉く殺し玉はゞ、上天豈怒らざらん

始皇之孫扶蘇之子三世子嬰上言。伏以秦祚中絶、嬴圖失守、七廟亡祀享之禮、四海蹈塗炭之災、大喪人心、遂至瓦解、玉符西指、六國從風、黄鉞下臨、拏兇束手、威令衍不速之命、神武昭不殺之恩、臣嬰等非敢望祖廟以承宗、惟求守墳墓以延日、百口賀再生之福、一門沾重見之光、早賜生活、願投肝膽、周封不斷姫錫有根、湯王存夏后之宗、遂成六百之統、武王樹殷紂之后、乃開八百之基、大王繼殷周而王關中、存嬴秦以弘楚胤。臣嬰等下情無任戰慄恐懼之至

項羽これを聞て子嬰に申けるは、汝が祖父六國の子孫を虜にし、天下の百姓を害して患を汝に殘す、汝何の理ありてか説ん。子嬰答て曰、六國を滅せしは先祖始皇の所爲なり、臣が罪にあらず、大王たとひ臣を殺し玉ふとも、臣少しも恨なし、只咸陽の民二世の殘暴に逢て一日も安からず、幸に大王關に入て民再び天日を仰ぐ、願くは臣を殺して天下の恨を雪ぎ、民を安じて天下の心を復せよ、然る時は臣死すとも猶生ならんと、未言了ざるに、項羽目を瞋し英布に向て誅せよと云に、英布劍を拔て忽ち子嬰を刺殺しければ、須臾の間に愁雲漫々黒霧靄々として、秦の民哭き哀む聲、天を動し地に震ひ、沛公有徳萬代爲君、魯公不仁滅門絶戸と呼はりければ、項羽大に怒り秦の民を殺し盡んと云を、范增急に諫て曰、無用々々、沛公さきに關

よ君の德を稱して彼が惡を知ん。沛公これに從ひ、降王子嬰を召出し、汝さきに我に降る、一國の地を得て身を全せんと欲するの心ならん、我この故に誅するに忍ず、放して扶おく處に、圖ざるに項羽勢を恃み約に違て關中に王たらんと欲し、今日書簡を以て汝を求む、汝美女珍寶を擕へ行て、彼が貪而好殺の心を慰せよ、然る時は彼喜て命を扶ること有ん、速に行べしと申されければ、子嬰哀み哭て曰、われ已に沛公に降て生ることを得たり、今もし魯公に見えば決して命を全しがたし。秦の老人みな地に拜伏して申けるは、沛公は長者なり、寬仁にして人を愛す、我等これを棄て何くへか行ん。沛公の曰、項羽が武勇天下に敵なし、命に違ふ者は忽に殺さる、汝等早く此に降れ。老人皆曰、降るまじ降るまじ、不如何方へも逃奔て一命を扶らん。子嬰淚を流して曰、われ若逃ば咸陽の民悉く害に遇ん、我位に在こと數十日に過ず、又民に恩澤をも施ず、今身を逃んとして民を害することは所不忍なりとて、軹道を指て出ければ、向に數十萬の武士簇々として雲霞の如く、刀槍を列ねて凜々たること霜の如く、殺氣天を蔽て、項羽烏騅の名馬に乘つて眞先に進み、子嬰が降るを見に、子嬰頭に素練を纏ひ背に繩を繫て、口に欵狀を含み地の上に拜伏しければ、項羽その欵狀を取て讀しむるに、其表に曰、

○項羽殺二子嬰一稱二霸王一

項羽は鴻門に在て威風いよ〳〵強く、張良に欺れて沛公を殺んとする心なかりければ、范增苦諫すれども用ず、却て張良を留めて手下に用ひ、諸大將を集め申けるは、關中すでに破れて、玉璽我に屬す、然れども秦王子嬰尙未だ來て見えず、沛公が陣へ書簡を送り、早く子嬰を召捕て其頸を刎ば、天下自ら我に歸せんとて、使を馳て霸上の陣へ到らしむ。沛公書を得て披見に、

我與レ爾共伐二暴秦一、一掃二黔黎生民塗炭一。吾今入レ關已十餘月矣。三世子嬰久不二來見一、此必爾占悋不レ發、意或二他圖一、我統二大軍一與レ爾試レ武、爾以爲二何如一。

沛公見了て申されけるは、項羽約に違て關中に王たらんと欲す、此ゆゑに書簡を以て秦王子嬰が來て己に降んことを求む、是諸侯の口を塞ん爲なり、然れども我此を許容せずんば、恐くは合戰に及ん、若許容せば懷王の約に負ん、諸將いかゞ計を議せん。諸大將みな申けるは、項羽勢大にして敵すべからず、只子嬰を送て彼に渡し玉へ、彼もし子嬰を殺さば、天下いよい

楚の文王を殺さずして、楚つひに鄧を滅し、楚子は晉の文公を殺さずして、晉つひに楚子を滅せり、君いま沛公を殺さず、沛公必ず君と天下を爭はん、今これを放は龍を大海に歸し、虎を山へ入しむるなり、再び拘んと欲すとも能はじ。張良が曰、老將軍なにごとを云玉ふぞ、魯公の威天下に敵なし、力よく鼎をあげ、勢よく山を拔、力子弟を降し、九たび章邯と戰て、國々の諸侯膝行して怖れ服す、鄧侯、楚子が輩と天地懸隔せり、況や沛公關に入て、凡そ事自ら擅にせず、專ら魯公の來るを待つ、これを以て其大なる志なきを見べし、今これを文王、晉侯に比し玉ふは大に過たり。項羽が曰、沛公は懦弱にして物の用に立がたし、焉ぞ能大事をなさん、我患ることとなし、張良が云ところみな理あり、今より沛公を棄て我に事て事を議せよ。范增諫て曰、君さきには張良を殺んとして、彼が巧言に欺き掩はれ、今又用て左右に置玉はんことは大なる害なり。項羽笑て曰、先生の慮り遠きこと甚過たり、張良は一人の儒者、わが傍に在とも爭か我を欺き得ん。范增が曰、明害者猶可レ防、暗損者難レ測、君明に察し玉へ。項羽が曰、匣に寶劍あり、誰か我に當べきとて、遂に范增が計を用ず、張良は暗に笑て、此より且く項羽が陣に留り居たり。

彼大に喜で、凡そ事みな遠き計を忘るべし、然らば某從容として大事を圖ん、此所謂る小を捨て大を取なり。沛公げにもと許されければ、次の日張良、玉璽珍寶を携て又鴻門の陣にゆき、沛公昨日酒を過して、今日なほ病臥て起こと能ず、某に命じて謹で禮をなさしむと云て、項羽が前に捧ければ、項羽これを案の上に雙て見るに、溫潤の光ありて一點も瑕なし、まことに天下の重寶なりしかば限なく喜び、其内より照星の玉斗を取て范增に與へ、此まことの珍寶なり、先生これを玩べと云ければ、范增玉斗を手に取て地の上へ抛すて、劍を拔て撞碎き、唉豎子不足與謀、項王の天下を奪者は必ず沛公なり、わが輩みな沛公が爲に虜とならん、此寶なんの用にか立んとけ云れば、項羽怒て曰、爲臣之道、不敢齒君之輅馬、古も君賜食必先嘗、君賜生必畜之と云り、況や希なる玉の寶をや、我いま汝に賜ふに、忽ち碎くは如何なる理ぞ。范增が曰、齊の威王は、魏の惠王の寶とせし照車の珠を恥て、此珠よく照すとも車百乘に過す、我に賢臣四人あり、千里を照べしと云り、是古人賢を重じて寶を重ざるの道なり、今某が重ずるは沛公が首、乃ち天下の重寶なり、君却て老夫が言を聽ず、つひに機會を失て空く無理の物を受て喜び玉ふ、此某が心中に感激することありて擊碎たるなり、敢て君の賜を輕ずるに有ず。項羽が曰、沛公は懦弱にして大事を成こと能はず、我なんぞ患とせん。范增が曰、昔鄧侯、

怒を止て、某を霸上の陣に囘らしめ玉へ、傳國の玉璽、並に秦の重寶を取來て君に獻ん、君もし玉璽を得て位に卽、天下の主と爲玉はゞ、名正く言順ひて遠近こと〴〵く服せん、若いま某を殺し玉はゞ、沛公怖れて他國へ逃わしり、玉璽を他人に與るか、或は毀り棄て世に傳じ、君もしこの重寶を得玉はずんば大なる誤ならん。項羽これを聞きて急に張良を解ゆるさせ、怒を止て申けるは、子房が言ところ一理あり、若これを用ひずんば、天下の人わが怯を笑ん、況や干戈すでに定て四海みな我に歸す、量るに沛公は草芥の如し、爭か我に敵することを得ん、若范增が言を聽ば殆大事を失はん、汝早く霸上に囘り玉璽を取來て我に與へよ、若命に背かば、我必ず百萬の兵を率して、霸上の陣を微塵になさんと云ければ、張良拜謝して霸上に馳囘り、右の趣を告ければ、沛公大に喜び、今日先生の計に非んば、我千に一も生ることを得じとて、囘忠したる左司馬曹無傷を引き出して頸を刎らる。張良申けるは、項羽さきに君の辭せずして囘り玉ひしを怒り、急に伐んと議しけるが、某に欺れて怒を止、秦の玉璽並に重寶を取來れと云、與へずんば叶ふまじ。沛公の曰、玉璽は乃ち傳國の寶なり、必ず人に與ふべからず。張良が曰、天下を得ものは德にあり、寶にあらず、君もし玉璽を吝で彼に與玉はずんば、必ず合戰に及ん、然る時は彼が爲に擒とならん、不如かれが乞に順て、某明日携へ行て與へなば、

張良大に驚き、此世に絶たる賢士なり、何とぞして御方に爲んと思ひけれども、名を知ざれば力及ず、後に聞ば、項羽が執戟郎に封ぜし韓信にてぞ有ける。暫ありて項羽酒さめて、沛公を尋ければ張良急に進で申けるは、沛公酒を過して座すること能はず、この故に適に大王に暇を乞告て、霸上の陣へ回りしが、某を留て今日の恩を謝せしむ。項羽大に怒て曰、沛公われに暇をも乞ず、心のまゝに出去り、汝いかなれば言を飾て我を欺く。范增、項羽が怒を見て心喜び、急に見て申けるは、沛公外は柔弱なれども、内に奸雄の計あり、某さきに三箇條の計を勸しかども、君これを用玉はず、今かるゞしく心のまゝに回り去るは君を侮るなり、これ本は張良が所爲なり、必ず信とし玉ふな。項羽これを聞て彌怒り、武士に命じて張良を斬て棄よと云に、張良申けるは、君必ず怒こと勿れ、某は假に沛公に從ふ者なり、本韓國の宰相なれば、沛公は實の君に非ず、某なんぞ沛公が爲に詐を飾て君を欺ん、況や君は威天下に震ふ、誰か惧て服せざらん、若沛公を殺し玉はんとならば、掌を反よりも易かるべし、然るに何とて酒宴に事よせ、欺て殺んとはし玉ふぞ、凡そ人を殺に道を以せざるは良計に非、天下の人これを聞ば、魯公、沛公に勝こと能ざるを以て、鴻門の會と詐り出し拔て殺し玉へりと沙汰せん、然らばたとひ天下を得玉ふとも、名正く言順こと能ずして、千歲の笑と爲玉ふべし、願くは

る所にて候と、眼を怒して云ければ、項羽笑て申けるは、沛公此の如き驂乘あり、誠に天下の壯士なりとて、大に醉て倒れ臥ければ、暫ありて沛公厠にゆく體にて、陣門へ出玉ふ。丁公、雍齒又推止けるを、張良急に來て申けるは、魯公の命なり、衆の諸侯みな酒に醉たれば、門を開て囘らしめ玉へ、陳平又後に立て、早く門を開かるべしと云ければ、丁公、雍齒了に門を通けり。沛公此に於て靳歙、紀信、夏侯嬰等を從へ、山際の細路より馬を早めて霸上の陣に囘り玉ふ。この時范增は計一つも成ず、又項羽が前後も知ず醉臥たるを見て、心の內悶え苦み、大息ついて陣の後に嘆じ居たれば、沛公恙なく囘ることを得たり。

○范增奮激碎玉斗

張良は沛公を陣門の外へ送り出して、唯一人殘り留りけるに誰とも知らず、陣の後にて戟を彈じて歌を謠ふ者あり。其詞に曰、飢熊下山、揭石見蟻、呑之入喉、不妨咳嗽而出。危乎哉、危乎哉と。張良之を聞て、直人ならずと思ひ、密に其人を伺ひ見るに、面皮黃白にして神氣清爽なる壯士、手に戟を執、あざ笑て立たりければ、如何なる人ぞと問に、其人更に名を云ず。范老空費心、張良能識主、今日脫鴻門、他年鎭寰宇と、謠了て起去ければ、

頭の髪逆に竪上り、劍を提げ盾をついて立ければ、項羽驚て問て曰、壯士いかなる人ぞ。張良座を起て申けるは、沛公の驂乘樊噲と云ものなり。項羽が曰、いま何とて來れるか。樊噲が曰、某承る、魯公今日秦の滅びたるを賀して慶の酒宴を設け、上下を分ずこと〴〵く酒を賜ふと、然れども惟樊噲は早朝より門外に在て、已に午の刻に及べども、つひに一滴の酒をも得ず、腹中飢渇して甚だ忍難し、此故に魯公に見えて乞求ん爲に來れり。項羽左右の者に命じて、一斗をもる巵にて酒を賜へば、樊噲十分に受て一飲に飲つくす、又大なる彘の肩を賜へば、樊噲劍を以て切食ふ。項羽これを見て、壯なる哉汝又飲べきかと問に、樊噲が曰、われ死をだも避ず、焉ぞ酒を辭せん。項羽が曰、汝誰が爲に死んと思へる。樊噲申けるは、秦虎狼の心ありて、妄に人を殺せしかば、天下みな叛り、さきに懷王諸侯と約して、早く秦を破て咸陽へ入ものを王と爲んと宣へり、今沛公先咸陽へ入て、秋毫も財物を取ず、婦女幸する所なく、軍を霸上に還して專ら魯公の來るを待、身を苦て功高し、然るに封爵の賞なくして、反て小人の讒を信じ、功ある人を誅せんとし玉ふは、此又亡秦の惡を續ものなり、われ魯公の爲に之を取ず、いま項莊、項伯二人劍を拔て舞、その意專ら沛公にあり、われ刑戮を避ず進み來て、盛筵を冒ものは、一には飢渇の爲、二には沛公の爲に、此理申述ん爲なり、此我死をだも避ざ

でに沛公に服する心ありければ、張良が心を知て後より申けるは、魯公は性急なり、早く張良を通して玉璽を取來らしめよ。丁公、雍齒これを聞て、了に張良を出しければ、張良門外に出て樊噲を招て申けるは、今項莊劍を拔て舞ふ、其意つねに沛公にあり、事すでに急なり、御邊いまは古の申噲が莊公を救ひしが如し、忠は私を顧ず、勇は命を惜ず、今日鴻門の會沛公すでに危し、御邊もし命を捨て救ずんば、沛公千に一つも免れ難し、然る時は千載の下、申噲に愧ること有ん。樊噲が曰、事すでに迫れり、我ねがはくは申噲が君を救に効ん、危に臨で身を避るは大丈夫に非ずとて急に入んとするを、張良止めて申けるは、御邊且くまて、先われを入しめよとて、門の內へ入んとするに、丁公、雍齒又問て曰、傳國の玉璽を取來れるか。張良詐て衣の袖をかゝへ、玉璽此に在と云て馳通り、舊の座へ囘りしに、項莊、項伯なほ舞居たり。樊噲は鐵の盾を腋に挾み、劍を帶して陣門に至り、大音あげて呼はりけるは、今日鴻門の會に相從ふ者、早朝より來て外にあれども、都て一滴の酒をも賜らず、我自ら魯公に見えて、酒を賜らんとて進ければ、丁公、雍齒等曲者なり通すなとて、急に門を閉ぢけるを、樊噲ことともせず、力を出して門の閫を推に、陣門地に倒して、番の士卒壓殺さるゝ者數を知ず。樊噲直ちに中軍に馳入、劍を以て油幕を挑げ、つと項羽が前に寄て、怒れる眦こと〴〵く裂、

沛公
項伯
張良
陳平

鴻門會
樊噲排闥
項羽
范增
項莊

諸公子、何日得相見兮。

范増これを聞て心喜び、急に其人を召て見れば、乃ち項羽が一族に、項莊と云る勇士なり。便ち低語て申けるは、魯公は性剛なれども、中に決斷なき人なれば、今日の會は專ら沛公を殺さんとて、三箇條の計を設玉ひしかども、今に至るまで其儀なし、若今日沛公を殺し得ざる時は、後日に大なる患あらん、是難得の時なり、御邊劍を舞して座中に入り、一討に斬殺さば莫大の功ならん。項莊許諾し、座席に進で申けるは、軍中の樂はさまでの興もなし、某ねがはくは劍を舞して一笑に具んと、劍を拔て起て舞。その意つねに沛公にあり。張良これを見て直事ならずと思ひ、項伯に向て急度眴するに、項伯その意を曉り、座を起て申けるは、劍を舞には必ず對手あり、古より霜鋒交錯可以奪目と云り、某ねがはくは對し舞て興を添ん。項羽然べしと許ければ、項伯劍を拔て舞て入。項莊が沛公に向ふ時は、項伯身を以て蔽ひ藏す。此に因て樂闋まで討ことを得ざりければ、范増は齒を切て恨けり。張良は二人の舞を見て、項伯が心沛公を翼んとすれども、項莊が勇に敵すること能はじと思ひ、樂まだ闋ざるに、座を起て門外に出ければ、丁公、雍齒推止めて、何くへ出玉ふぞと問に、張良申けるは、沛公さきに秦の玉璽を携へ來れり、今これを取て魯公に獻んとす、丁公、雍齒猶疑て通さゞりしを、陳平す

を患ひ、暫ありて又項羽體を窺ふに、全く沛公を殺んとするの心なく、油幕の陰に伏たる兵も、未だ動ざりければ、今は第二の計を行べき時刻なりと思ひ、兼ての約束なれば、所レ佩の玉玦を三度まで動して累に眴すれども、項羽は心の内に、沛公は謙遜柔和にして物の用に立人にあらず、生て置とも何ほどのこと有ん、今日の會に若この人を殺さば、天下の諸侯に笑れんと思て、范增が計に從はず、范增は第二の計も成ざるを見て、心中あわて躁ぎ、今は第三の計を行て沛公に酒を强んと思ひ、兼て陳平に云含めたれば、目を動して其意を知しむ。陳平これを見て、大杯を取て沛公の前に到り、酒を勸めて其體を相るに、隆準龍顏にして天日の表ありければ、心の内に沛公は尋常の人にあらず、他日必ず天子と成らん、今范增が意に順ふ時は、反て天に逆なりと思ひ、此より項羽に酒を酙時は多く、沛公に酙時は少し、沛公も早く陳平が心を曉て、酒宴酣に及べども、遂に禮を失ひ玉はず。范增三箇條の計不レ成を見、座を起て外に出、長嘆して申けるは、今日沛公を殺さずんば、後日大なる禍あらん、不レ如勇力の大將に命じて一討に討殺させんと思ひ、誰か沛公を討べきとて其邊を見るに、陣の後に一人劍を彈じて歌を謠ふ者あり、其歌に曰、

我有二百寶劍一、出レ自二崑崙頂一、照レ人如レ照レ面、切レ鐵如レ切レ泥。兩邊霜凛々、匣上風凄々、寄二與

に約す、其罪二、大將を指向て函谷關を守せ、諸侯の兵を拒ぐ、其罪三、この三の罪あり、何とて知ずと云へるぞ。沛公の曰、某一言を以て心中の誠を顯さん、秦王子嬰勢極り力盡きて、頸を延て降人となる、我若速に殺さば、是獨擅にするなり、暫く扶け置て、魯公の來り玉ふをまつ、敢て放すに非、秦の法酷暴にして煩しく、百姓水火の中に在が如く、日夜懸望して救を待、われ關に入て、改ること一日遲き時は、民一日の苦を受る也、この故に急に之を改めて魯公の德を顯す、此故に百姓みな喜て曰、前驅の勢わづかに來て、已に民を愛すること如此なれば、跡より來る王の師は、いかばかりか民を憐玉はんとて、足を翹て魯公の來り玉ふを慕へり、又大將を出して函谷關を固めしは、全く諸侯を拒に非、秦の餘黨の復起んことを恐れ、他の盜と非常とを正さん爲なり、今日幸に相見ゆ、ねがはくは昔日の盟を思ひ、某が心を憐て其實を察し玉はゞ、乃ち人君の慈恩ならん。項羽はきはめて剛なれども、心淺き者なれば、沛公の言を聞て疑の心こと〴〵く解、自ら起て座席に請じ、我素より足下を疑に非、只足下の左司馬曹無傷、ひそかに書簡を送て事を訴ふ、此に因て疑をなせり、今直に足下の言を聞て喜にたへずと云ふ。沛公再拜して恩を謝し、衆の諸侯と揖讓して座定りければ、范增、張良、項伯も傍に列座せり。時に伶人樂を奏して、酒宴始りければ、范增は第一の計成ざる

宴を設て諸侯を會し玉ふと聞時は、必ず笙歌を奏して賓主樂を盡し、百姓を安ずるの道を慕、談じて秦の滅たるを喜び、舞謠て終日融々たらんと思ひしに、不レ圖に甲冑の勇士四面を守り、槍刀日に輝て金鼓天に喧く、殺氣凛々として人の心不レ安、みな避去んことを思はしむ、況や魯公九だび章邯と戰て天下を服すること、誰人か知らざらん、何人か惧ざらん、これ强に傲ことを用ひずして自ら强く、勇を言ずして自ら勇なり、何ぞ必ずしも箇樣に勢ひを張て、今さら人に知しむることをせん、今日の會、諸侯外に在りて魯公の全く賓主の禮なきを見て、皆惧れて内へ入ことを得ず、願くは能察し玉へ。項羽その言の一々理あるを聞て、下知を傳て甲冑の武士を皆陣の後へ退け、金鼓を止させ、自ら鎧を卸で衣裳を改め、急ぎ諸侯を迎へて内へ入しむ。丁公、雍齒等命を承り、門を開て諸侯を迎へけるが、相從ふ者共をば遮り止めて一人も内へ入ず。沛公は昔日項羽と兄弟の約あるを以て、座上へ進ず、階下に立て謹で禮をなし玉へば、項羽色を正して申けるは、御邊三の罪あり、此を知りや。沛公の曰、某は沛縣の亭長、たまく諸人に推れて兵を引て秦を伐、將軍の麾下に屬して進退みな將軍の命を待、なにごとか自ら放にして罪を冐せることの候ぞ、項羽が曰、御邊關に入て、降王子嬰を招て自ら之を放す、是ひとり擅にして王命を待ざる也、其罪一つ、民の心を懐ん爲に、秦の法を改て三章

づ〳〵と進ければ、丁公、雍齒等門を固て入ことを許さず、張良禮を施して、某は假に沛公に從ふ張良と云ものなり、魯公に見んとて來れり、此由を報じ玉へと云ければ、丁公内へ入て項羽に告て申けるは、只今假に沛公に從ふ張良と云もの、陣門に來て君に見んと申候、この處へ入候はんや。項羽が曰、假に從ふとは何事ぞ。范增が曰、これは韓國の張子房と云ものにて、韓に相たること五世、きはめて智謀の深き者なり、沛公秦に向ふ時、この者を韓王に借來れり、是故に沛公を扶く、今こゝに來るは、辯舌を巧にして君に說ん爲なり、先この者を斬て棄玉はば、沛公が一つの臂を絕なり、項伯これを聞て急に止めて申ければ、無用々々、魯公關中へ入て專ら天下の心を懷んとす、多く賢德の人を用ひずんば、何を以か王業を成ん、然るに如何なれば張良ほどの賢人を故なきに殺さんとし玉ふぞ、況や張良は某と舊き友なり、其才を愛し玉はゞ、某この者をすゝめて御方に從はしめん。項羽げにもとて丁公に命じて張良を招かしむるに、張良内に入て禮を施し、項羽が甲冑を帶し劍を横たへて坐したるを見て申けるは、某承る、古より明王の天下を治むるは、德を輝して兵を揚ず、よく世を御する者は、德に在て險に在ず、此故に大なる賈は深く藏して露ず、巨なる富は財を蓄へて侈ず、勢强ものは弱を示して暴ならずと、此みな老成の遠き慮にして、識見高ものゝ所レ爲なり、今魯公の鴻門に酒

を送て明日早く會に赴べしと答玉ふ。鴻門には沛公明日來らんと云を聞て、范増又項羽に申けるは、明日の會は重て得難し、君よく某が三箇條の計を忘れ玉ふな。項羽許諾して一々に用意をなし、丁公、雍齒二人に陣門を守らせて出入を正さしめ、酒宴を設けて待ち居たり。次の日早朝に沛公百餘騎を從へ、張良、樊噲、靳歙、紀信、滕公五人の大將と徑ちに鴻門へ來り玉ひしが、心の内不ㇾ安して、馬上にて張良に申されけるは、今日の會われ十分疑ひ怖る、恐くは害にあはん、先生いかゞ計を成ん。張良が曰、御心安く思ひ玉へ、某自ら計あり、但昨夜密に申せしことを御心に忘れずして、項羽が問ことあらば答玉へ、自ら無事なるべしとて、漸く鴻門に近付ける所に、向より項羽が勢、刀槍如ㇾ霜簇々として出來る。眞先なる大將は六安の英布なり。われ魯公の命を受、半途に出て沛公を迎へ奉と云て、馬より下て禮を施し、先驅して鴻門の陣に至る。沛公すでに轅門に進み玉へば、陳平と云もの道の傍に立て迎へ奉り、請じて內へ入しむ。沛公その邊を見玉ふに、夥しく武具を取雙べて、金を鳴し鼓を打こと頻なりければ、暫く立住て張良を召て申されけるは、此中の體を見るに、恰も戰場に似たり、全く酒宴の會にあらず、我內へ入べからず。張良が曰、君今此に到て進時は理あり、退時は甚屈す、若一足も回り玉はゞ、必ず其計に落入玉はん、暫くこの處に御待候へ、某內の樣を見て參んとて、し

招んとて、諸大將に用意をなさしめ、書簡を送て沛公を招く。使いそぎ霸上の陣に到ければ、沛公書を得て披見るに、

魯公項籍、書奉沛公帳下。初與公受懐王約、共伐暴秦、以安黎庶。幸今天兵西下、子嬰受首、關中收附、嬴氏族滅、神人咸悅。凱歌允奏、百工之績、三軍之勞、宜陳宴樂以慶亡秦。公爲元勳禮請端席。惟乞早臨以倡群僚。不宣。

沛公見了て諸大將を聚め、項羽われを招て鴻門に會せんと云ふ、この會甚だ危し、乃ち范增が計にて、必ず我を殺んとの企ならん、若かるべくしく行ば、恐くは其陷坑に落入ん、如何すべきと問玉ふに、蕭何申けるは、項羽勢大なれば、中々これに敵すべからず、不若返簡を調へ、辯舌の者を遣して、關中を項羽に與へ、君は別に一郡の地を求て身を安じ、軍馬を整て時を待て計を成玉へ。酈生が曰、この義わが心に合へり、我ねがはくは行て項羽に說ん。張良申けるは、いやいやこの義良策にあらず、昔伍子胥は平王に從て臨潼の會に赴きしに、十八箇國の諸侯ことごとく尊仰し、藺相如は秦に使して璧を完じて趙に歸る、天下今に至て此を賢なりとす、某不才なれども、願くは君に從て鴻門の會に赴き、范增に其計を用ること能はざらしめ、項羽に其勇を施すこと無らしめん。沛公の曰、全く先生の妙計を賴む、我行ずんば叶まじとて、返簡

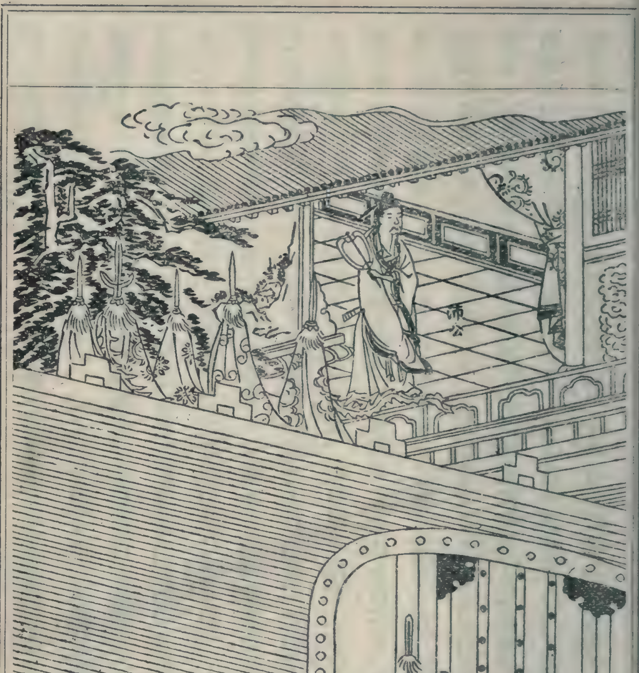
除かずんば、後に大なる患あらん、項老飽まで張良に欺れて、沛公を罪なしと云玉ふ、君必ず信じ玉ふな。項伯これを聞て色を正うし、先生もし沛公を殺んとならば、別に計も有べきに、何とて夜半に陣を刧して襲ひ伐んとはし玉ふぞ、是大丈夫の本意にあらずと云ひければ、項羽げにもと同じ、叔父の言理に當れりと云て、沛公を殺んとする心は止にけり。

○鴻門會樊噲排闥

項羽すでに項伯が言に從ひ、沛公を殺んとする企を止ければ、范增諫て申けるは、沛公は心腹の患なり、今これを誅せずんば、他日大なる害をなさん、君その時悔るとも晩からん、其三箇條の計あり、第一は沛公を招て鴻門に會し、彼が來つていまだ座席へ入ざる時、君自ら出むかへ、彼が關に入て後の罪を責て答ること能はずんば、急に劍を拔て斬殺し玉へ、此上計なり、第二は君自ら出迎ること能はずんば、油幕の陰に屈強の兵二百餘人を藏おき、沛公が座席に入りて後、某時刻を見あはせ、所佩の玉玦を動して合圖をなさん、其時兵を喚出して殺し玉へ、此中計なり、第三は沛公に酒を強て大に醉しめ、彼が醉中に禮を失ふを見て殺し玉へ、此下計なり、もし此計に從はゞ必ず沛公を殺すべし。項羽が曰、三箇條の計みな我心に合へり、早く沛公を

羽が曰、いや／＼項伯は我叔父なり、殊に忠誠の士なれば爭か囘忠の心あらん、先生必ず疑こと勿れ。范增が曰、項老たとひ囘忠の心なくとも、軍中の機謀は嚴密にして、鬼神も不レ能レ測を要とす、若少も外に洩る時は、却て禍を生ず、古人も機不レ密則害成と云り、今晩の合戰を且く止て、重て計を議し玉へ。その言いまだ了ざるに、項老囘り玉ふと告ければ、項羽いそぎ召て問て曰、叔父いづくへか出られたる。項伯が曰、わが舊き友に韓國の張良と云ふもの、沛公が陣にをり、我親き好あれば、今夜空く亡んことを憐み、密に彼を落さんと思ひ、自ら行て一言を説示し、幸に沛公が關中に入りてより行ふ所のことを問に、沛公素より別意なし、大將を遣して關門を固しは、他の盜を防ん爲にして、魯公を拒にあらず、財寶美女共に封じて外に動さず、專ら魯公の來るを待と申す、某想ふに沛公先咸陽を破らずんば、我等いかでか不レ血レ刃して容易く關中に入ことを得ん、此沛公が功ある所なり、人の功あるを小人の言に依て、却て害するは大なる不義なり、沛公明日自ら來りて罪を謝せんとす、將軍怒を止て快く持なし、大義を失玉ふこと勿れ。項羽が曰、われ叔父の言を聞に、沛公罪なきに似たり、然るに兵を動して之を伐ば、天下の人に笑れん。范增申けるは、某が沛公を殺し玉へと勸るは、沛公關に入てより、法を三章に約して人の心を懐け、實に天下を取んと謀る志あるを以て也、いま之を

杯を舉げて壽をなし、我聞、足下男子ありて未婚禮をなさずと、我幸に女あり、ねがはく
は婚姻を結て今日の德に報ぜん、望らくは足下再び本陣に囘り、我罪なきの實を告て、魯公の
怒を止玉へと申されければ、項伯謝して申けるは、兩家並び立て互に智勇を爭ふ、然るに我足
下と婚姻を結なば、恐くは人の議論を引ん。張良が曰、さな云ひ玉ひそ、魯公と沛公と懷王の
前にて約をなし、兄弟の盟をなして二手に分れて秦を伐、いま咸陽に入て事すでに定れり、足
下と婚姻をなすとも誰か怪べきとて、項伯が衣の襟を取て沛公の襟と結あはせ、張良劍を拔
て之を斬、各その半を分ちて好を結の定としければ、項伯了に許諾せり。沛公禮をなして又數
盃を傾玉へば、項伯拜謝して申けるは、明日早く鴻門に來て、直に項羽に見え玉はずんば、其
怒やむべからず、我今夜馳囘て、足下の罪なき由を申べし、然る時は無事ならんとて、相別て
出ければ、張良乃ち夏侯嬰に二十騎を付て遠く送らしむ。鴻門の陣には、范增其夜の二更の比
項羽に見えて時刻漸く近付たり。御馬を出さるべしと云ければ、項羽諸大將を呼あつむるに、
項伯一人見えざりければ、范增が曰、項老は何とて見えぬぞ。丁公答て曰、今日の晚方に只一
騎密に窺ふこと有とて、陣門を出て東の方へ走り玉へり。范增此を聞て、然らば輕々しく兵を
動すまじ、項老定て沛公にわが計を洩さん、沛公もし備あらば、御方却て其計に中らん。項


沛公
項伯

張良
項伯夜走救張良

く來り、張良に遇んと申す、この由を報じ玉へ。彼大將これを聞て又内へ入ければ、項伯その邊を望見るに、各營に旗幟を立て、兵の備嚴重なりしかば、心の内深く感じて、沛公は尋常の輩にあらず、後に天子と成んとて、范增が怖るゝも理なりと思ひけり。張良は中軍にて沛公と事を議して居たりけるが、外より報じて、張子房の友なりとて急に逢んと申す人ありと云ければ、張良これを聞て大に喜び、此必ず慶雲の兆ならんとて、走り出て見れば項伯なり。こは如何にとて迎へ入れければ、項伯ひそかに項羽が夜打の企を語り、早く伴て落行んと云に、張良申けるは、沛公さきに我を韓王に借來てより、寵遇きはめて厚し、今事の急なるを聞て、不レ顧は不義なり、先告知さでは叶まじ、足下しばらく待玉へとて、中軍に入て沛公に告ければ、沛公の曰、いかゞして禍を免れん。張良乃ち沛公の耳根に倚て計を低語き、出て項伯に申けるは、足下ねがはくは沛公に對面して、事の樣を告玉へ。項伯が曰、わが來るは專ら御邊を救ん爲なり、何ぞ沛公に見ゆべき。張良が曰、沛公は寬仁の長者なり、足下一たび見え玉へとて、强て内に伴ひければ、沛公衣を整て出むかへ、上座を讓て禮をなし玉ふ。項伯乃ち項羽が嗔る趣意を語ければ、沛公酒を勸て持なし、我關中に入てより、秦の宮室倉廩を鎖し、專ら魯公の來るを待て、敢て放に事を行はず、何ゆゑに疑ひ玉へるとて、一々罪なき由を語り、

治めて、何とていまだ休息せざる。沛公色を失て曰、われ力弱く勢少し、いかゞして項羽に敵せん。張良が曰、殺氣甚だ大にして十分危と云へども、內に慶雲ありて君を守護す、救ふ所あるに似たり、御心を安じ玉へ、如何にもして禍を免んとて、皆合戰の用意をなす。項伯は日の暮るを相待、只一人馬にのりて密に鴻門の陣を出でければ、門の前にて大將丁公推止めて、大王暮に及で何くへ出玉ふぞと問に、項伯答て、今急に事を窺ひ聞ことあり、この故に密に出ると云ければ、丁公拜伏して通しけり。元來項伯は、項羽が爲に叔父なりければ、上下尊び怕れて老大王とぞ申しける。項伯走る馬に鞭を加へ、飛が如く急ぐ程に、漸く霸上へ二十里ばかりに成ける所に、沛公の副將夏侯嬰と云もの夜巡りに出て之を見付、なに者なればあわたゞ布馬を早むるぞと問に、項伯が曰、われは張子房が友なり、事の急ありて對面せんことを欲す。夏侯嬰怪で作ひ來り、先門前の旗を守る士卒に命じて中軍へ右と報じ、相つたへて夜廻りの官析を三聲擊ければ、內より中軍の左の門を少し開て、一人の大將高聲に、何事かあると問ふ。夏侯嬰申けるは、某夜廻りに出たるに、誰とも知ず一人武具をも帶せず、馬を打てあわたゞし

天文を觀るに、雲五色を成て天子の氣あり、君早く討滅して禍を除玉へ、若延引して固本深根せば、恐くは動し難からん。項羽げにもと同じ、大軍を驅て霸上へ向はんとするに、范增又申けるは、輕々しく向ふべからす、兵法に十則圍之、五則攻之と云り、沛公十萬の勢を領して、樊噲、周勃なんど云る萬夫不當の大將五十餘人あり、況や早く關中へ入て、深く民の心を得たり、手下に智謀の士多ければ、常に怠ず備を成ん、御方大勢なりと云ども、初て此處に來りたれば、人馬疲れて容易に進み難し、某一つの謀あり、今夜の三更に精兵を選び、二手に分て霸上に向はゞ、必沛公を擒にせんとて、急に人馬をぞ揃へける。項伯これを見て心に思ひけるは、我友張良、沛公に從て霸上にあり、今夜御方の大軍その備なきを攻る者ならば、沛公の兵一人も生のこる者あらじ、張良も必ず亡ん。我幼より兄弟の交を結で、親こと骨肉に過たり、密に告て落さんとて、已に書簡を調けるが、いや〳〵是ほどの大事を、書簡にて知せんとせば、中途にて人に奪はれ、却て禍を引出ん、自ら行てこの事を語り、共に何方へも落行んとて、日の暮るゝを待居たり。此日張良は暮に及まで沛公の前にて事を相議し、退て外に出けるが、東南の方に一條の殺氣隱々として天に亙りたるを見て大に驚き、良久く望見るに、日の暮るゝに從て殺氣いよ〳〵起り、甚だ不吉の兆なれども、其内に慶雲あり

次の日一人の士卒項羽が陣に來り、沛公が手下左司馬曹無傷と云もの、大事ありて密書を獻ると云ければ、項羽開き見るに、其書に曰、

○項伯夜走救張良

臣左司馬曹無傷、頓首百拜、上啓魯公麾下、竊謂天下苦秦殘暴、百姓不能安於一日、幸賴明公神武、干戈西指、嬴氏束手、制伏諸侯、四海仰德。明公之功金石不磨也。若如沛公碌々不過因人成事耳。假借威力、僥々入關、正當掃廬候令、仰聽指揮。庶不沒人之善、而佐成王業可也。今乃遣兵據守、恐難支持。姑從昨命、習賺入關、意要整甲揮戈、與公爲敵、布告中外、必欲如約以王關中。臣雖沛公部下、而寔楚臣也。于心不甘、馳書上啓。非有素恨、寔爲天下之公論也。仰于明公察焉。

項羽見了て大に怒り、諸大將を召て申けるは、沛公が關中に王たらんとすること、證據すでに分明なり、今かれが手下の曹無傷、われに志を寄せて書簡を送れり、汝等いかなる計かある。范增が曰、沛公山東に居し時、色を好み財を貪りしかば、人みな輕じ惡みしが、今關中に入て財物無所取、婦女無所幸、民と三箇條の法を定て人の心を懐く、其志小ならず、われ又

われ幼より韓國の張良、字は子房と云ものと友たりしが、常に大將たるの道は、天文地理風雲氣象をよく知て、其のち兵を用ふべしと云て、時々教たりしゆゑ、その大略を知れり、先生ねがはくは指教よ。范增先步璇璣次に按經緯五星の躔度十二周天、二十八宿、九州の分野三百六十五度、晦朔、弦望、北辰、南極、左輔、右弼、一々に說示して、御方鴻雁川の陣を見れば、殺氣天を衝、將星甚壯にして、隱伏の間運氣不遠大。又霸上の方を望に、帝星耿々として龍成五彩、如水之始達、如日之方升。東井奎壁の光を聚め、霸陵眞命の象を顯し、雲籠旺氣、星照本宮。范增つく〴〵と見て項伯に問て曰、足下の心沛公を如何なる人と思玉へる。項伯が曰、帝星光を現して霸陵の旺氣に應ず、天運疑くは沛公に歸するか、我魯公の象は威武甚だ壯にして、殺氣剛風、只よく群雄を制するに應ずるのみ。范增嘆じて申けるは、昔日徐州に天子の氣起り、今日帝星又霸上に現ず、沛公まことに天運を得たり。項伯が曰、先生これを如何せん。范增が曰、禎祥は天文に現ると云ども、盛衰は本決於人事、申包胥も曾て天定固能勝人、人定亦能勝天と云り、われ已に魯公に事て豈二心あらんや、盡忠竭謀死して後に已ん、天文たとへ如此なりとも、何ぞ少も心を變ずべき、今夜の事惟足下と我と知るのみ、必外に沙汰し玉ふなとて、相伴て囘りけり。

沛公見了て、この事如何と議するに、張良申けるは、項羽勢大なれば、この關久く守ること能はじ、若彼に責やぶられば、御方は弱して勢すくなく、彼は強して勢多し、忽に擒にせられん、不レ如關を開て入しめ玉へ、某等よく計を成ん。沛公已ことを得ずして符節を遣し、關を開て項羽を入しむべき由を下知せられければ、薛歐、陳沛矢倉に登りて呼はりけるは、寄手の大將は何くにある、快く馬を出され候へ、申べきことあり。英布これを聞て進出ければ、薛歐申けるは、我等沛公の命を受てこの關を守るは、全く魯公を拒にあらず、他の盜を拒ん爲なり、沛公いま魯公の書を見て、早く關を開て迎へ奉るべき由を命ず、速に御入候へとて、大に關門を開ければ、英布この由を項羽に報じ、關中に入て鴻門に陣をとる。その後項羽密に間者十餘人を出して、沛公が咸陽に入てよりの行狀を尋聞しむるに、晩に至て盡く回り、此間沛公の行狀を明に告ければ、項羽心に思ひけるは、沛公が所存は、疑もなく懷王の約を違へずして、關中に王たらんとする者なり、然れども我力強く勢大なれば、彼を別の處に移して、自ら關中の王たらんとて、密に計を案じ居たり。この時范增も間者を出して、沛公の行狀を尋聞、心の中甚喜ず、その夜ひそかに項伯を召て、共に鴻雁川に出、高き阜に登て望見るに、萬籟無レ聲、一天の星斗爛々たりければ、范增問て申けるは、足下天文を知玉へるか。項伯が曰、

公の兵緊く守りて進み難しと告ければ、范増申けるは、沛公早く咸陽へ入りてこの關を守らしむるは、懐王に約せし如く關中に王たらんとの心なり、將軍苦戰すること三年、百計心を勞して、一旦他人の天下とならば、豈千載の恥ならずや。項羽が曰、料るに沛公が兵十萬に滿ず、強こと章邯に如ず、爭か關を固て我を拒ことを得ん。范增が曰、只早く兵を指向て關を攻させ、又書簡を送てわが軍の來れることを告知せ、前日盟て兄弟と成玉ひし好を違へず、諸侯の議論を免れ玉へ。項羽これに從ひ、英布に十萬の勢を付けて喚き叫で攻かゝらせければ、薛歐、陳沛かたく守て出あはず。項羽又書簡を封じて箭に挾み、關中へ射させければ、薛歐これを得て、早馬を馳て沛公に報ず。沛公ひらき見るに、其書に曰、

魯公項籍致書於劉沛公帳下。前日與公共受懐王之約、結爲兄弟、興兵破秦、誅此無道。今公得先入關。雖謀猷方略之速、然非吾之立懐王以服天下、降章邯以制諸侯、公何能以至此邪。乘人之功而奪爲己有、大丈夫所不爲也。乃今距關不欲吾入、然此關可能久距而不破乎。見今兵雄將勇、破關如拉朽耳。關破之後、公何面目以相見乎。幸早開關、仍存大義、庶不失兄弟之情。然破秦之功、先入之約、諒自有處也。公無惑焉。籍再拜。

へ入玉ふと聞り、然る時は定て天下の君となり玉はん、我等恨らくは此人に從はざることをと云ければ、項羽大に驚き、本陣に回て英布を召して申けるは、秦の士卒二十萬、さきに我に降りしかども、今謀反の心あり、我たまく出て立聞に、皆頭を交て物がたりす、不如早く除て後の禍を免れん、汝三十萬の勢を率してことぐく秦の士卒を殺し、只司馬欣、章邯、董翳三人を殺し留めよ。范增これを聞きて諍て諫れども、項羽つひに聽ず。英布乃ち三十萬の兵を引て、その夜秦の士卒二十萬をのこさず殺して坑に入けり。司馬欣、章邯等大に驚き、項羽に見えて一命を乞ければ、項羽が曰、汝等罪なし、畏るゝこと勿れ、我ひそかに竊ひ聞に、汝が陣の士卒みな謀反せんとす、我この故に殺して後の禍を除きしなりとて、次の日函谷關を指て進發す。この由沛公の方に聞えければ、樊噲申けるは、秦の富天下に十倍して、地勢きはめて強し、今項羽降卒二十萬を坑にし、大軍を驅て出で來る、其意必ず約に違て關中に王たらんと圖るべし、もし早く計を成玉はずんば、彼が大軍不日に來らん。沛公の曰、項羽もし此に來らば、我必ず關中を得ること能はじ、今いかゞ計を用ん。樊噲が曰、速に兵を指向て函谷關を守らせ、諸侯の勢を入しめず、秦の兵を催して自らよく拒玉へ。沛公しかるべしとて、薛歐、陳沛等を大將とし、函谷關を固め玉ふ。去ほどに項羽大軍を驅て、函谷關へ入んとするに、沛

に來るは、汝等が爲に害を除ん爲なり、汝等少しも懼るゝことなく、皆如故安堵せよ、我軍を還してこの處に屯するは、跡より來る諸侯を待合て、約束を定ん爲なりとて、悉く家に歸らしめ、諸軍を戒めて民の物を掠ず、下知に背ものあれば、首を刎て示されければ、郡縣の父老みな額を撫て、圖ざりき今日復天日を見んとはと云て、歡聲地を動して去にけり。沛公又秦の吏官に命じて、遠近殘ところなく此趣を告させらるゝに、人民喜で羊を牽、酒を携へて沛公に獻りけれども、沛公辭して不受。いま倉廩に貯あれば、我なんの乏こともなし、妄に民の財を費すまじと宣へば、人民いよ〳〵喜て、却つて惟沛公の天下に君たるまじきかとて患けり。

○范增算運觀天文

此とき項羽は、河北を平げて諸侯の兵を合せ、咸陽へ入んとて進けるが、日すでに晩に及ければ、大軍を住めて新城に屯し、項羽自ら軍中を夜巡し、密に秦より降參したる兵の陣を窺ふに、士卒相あつまりて低語けるは、我等さきに章邯に欺れ、錯て項羽に降れり、項羽專ら殘暴を行て賞罰明ならず、今沛公は寛仁大度にして殺伐を好まず、德を以て人を懷け、早く關中

公は天下を有んと思ひ玉ふか、徒に富貴の家の翁と爲んと思ひ玉ふか、凡如此華麗の物は、皆秦の亡る所以なり、沛公なんぞこれを用ひ玉はん、願は速に宮中を出て、霸上に還て陣をとり玉へ。沛公敢て從はざりければ、張良又諫て申けるは、古より內作色荒、外作禽荒、甘酒嗜音、峻宇雕墻、有一于此、未或不亡と云り、秦無道にして驕を放にせるを以て、君乃ち此に來ることを得玉へり、夫天下の爲に殘暴を除く者は、身儉素を行ふべし、然るに此に留て樂をなさんとし玉ふは、此まさに秦の無道を繼ものなり、且忠言は耳に逆ども行に利あり、良藥口に苦と云ども病に利あり、願くは樊噲が言を用ひて此處を去り玉へ。沛公げにもとて府庫を封じ宮門を鎖し、兵を引きて霸上に陣を取、諸侯の來るを待玉ふ。蕭何申しけるは、天下の民久く秦の法度煩しく苛を苦む、君これを約にして正し改め、寛仁を以て恤玉はゞ、盡く悅び服せん。沛公可然とて、次の日郡縣の父老を盡く霸上に召あつめ、われ秦の法令煩しくして、誹る者をば九族を夷げ、私語ものをば市に斬と聞り、此民の父母たる者の心にあらず、我懷王の命を受て秦を伐、早く關中へ入ものを王と爲んと約せり、われ今一番に入りたれば必ず關中に王たるべし、今より法を三箇條に定む、殺人ものをば誅せん、人に傷け又は盜をする者をば、輕重を論じて罪に行ん、この外秦の法度を盡く除き去べし、凡我こゝ

に哭き、了に此義に從て素車白馬にのり、玉璽を封じて宮中を出、軹道の傍に到て降人と成玉へば、沛公大に喜び、禮をなして對面せらる。子嬰の曰、某位に在て德なし、將軍の西に向ふを聞て、早く降て萬民を安ぜんことを願ふとて、玉璽を沛公に授らる。沛公の曰、汝すでに降を請、われ楚王に奏して一命を扶け、地を與て一生を安からしめんとて、降れる秦の子弟を皆一處に聚置玉ふ。諸大將みな申けるは、秦王無道にして民を苦む、誅せずんばあるべからず、なに故に宥し玉ふぞ。沛公の曰、はじめ懷王我に詔して、西に向て秦を伐しめ玉ふは、我よく寬仁にして人を安んずるを以て也、今人の降れるを殺さば、甚だ不祥なりとて、城に入て民を治め、三軍を賞し玉ふ。子嬰卽位より纔に四十三日なり。大軍こと〴〵く咸陽に入ければ、諸大將亂散て秦の庫內に打入、金銀財寶を分ちとりけるに、蕭何一人は一物をも取ず、只丞相府の圖籍を收て、暇の日沛公と共に考見ければ、沛公これより天下の地利、民數の多少、要害强弱の處を能知玉へり。沛公諸大將と咸陽宮へ入て見玉ふに、宮殿の莊麗三十六宮二十四院、蘭室、椒房、瓊樓、玉宇、盡レ善盡レ美たれば、心の內大に喜び、進で后宮に入て坐を設け、天下の重寶山の如く、紅顏の美女數千人、錦繡狗馬限なきを見て、秦の富貴如レ此、われ此に在て人の心を安じ、諸侯に相爭ふこと無らしめんと宣ひけるを、樊噲諫て申しけるは、沛

に計を用ひて關を破ん、今薛歐、陳沛二人に數十騎を授て、山の後の小路より忍で關を超て敵の後へ廻らせ、深山幽谷に火を付、烟を揚て敵の心を驚せ、我却て樊噲を先手として大軍を驅て關前より攻かゝらば、秦の大將前後を救ふこと能ず、關を棄て走るべしとて、薛歐、陳沛二人に精兵數十騎を授けて、乾ける柴を持せ、中に焰硝を籠て潛に小路より廻らしむ。この勢去て已に三日を過ければ、關の前なる大軍一度に喊の聲を揚、鼓を打て天地を動かし、我さきにと攻のぼる。秦の大將は酈生が囘てより心怠り、日夜酒を飲で何の備をもなさざりしに、俄に敵の大軍攻のぼりければ、上下あわてさわぐ所に士卒走來り、敵の勢はや關を超たりと覺えて、後に火を掛候と申す。こは如何にと驚て後を望見れば、火焰天に連て鐵砲地を動す。秦の軍ふるひ怕れて一戰にも及ず、我さきにと逃はしりければ、樊噲眞先に進で關上へ攻入、勢にのりて追かけたるに、討るゝ者數を知ず。韓榮等藍田まで落ゆき、敗軍を聚て陣を取ければ、沛公又夏侯嬰を先陣とし、自ら大軍を驅て潮の如に進み玉ふに、一支も支へず咸陽を指て敗北す。時に乙未年冬十月、五星東井に聚り、沛公敵を追て霸上に到る。三世子嬰この由を聞て大に驚き、如何せんと議し玉ふに、上大夫乎畢すゝみ出て申けるは、事すでに極れり、陛下早く軹道に出て沛公に降り、族滅の禍を免れ、生民の塗炭を救ひ玉へ。子嬰聲を放て大

一人のみに有ず、將軍もし民を恤の心あらば、早く關を開て沛公に降れ、然ば沛公必ず楚の懐王に奏して千金を賞し、萬戸侯に封じて重く將軍の功を謝せん。韓榮申けるは、我久く秦の祿を食て、危に臨で背ば不義なり、先生且く退け、我心しづかに思案せん。酈生退て出ければ、秦の諸將相あつまりて評議をなし、降んと云ものもあり、降るまじと云ものもあり。議論區々、わかれて關を守る心怠りけり。次の日酈生又きたり、韓榮に問て申けるは、將軍いかゞ心を決し玉へる。韓榮が曰、諸人みな降るまじと云、我いかんともすべき樣なし。酈生が曰、將軍降り玉はねども沛公深く御志を感じ、千金を送て將軍の德を謝せしめ、寄手の勢を暫く退けて、國々の諸侯の來るを相待んと欲す。韓榮が曰、われ沛公と敵國なり、何ぞ千金の贈ものを受ん。酈生が曰、將軍いま受玉はざれば、是沛公と交を絶なり、後日に天下の諸侯こと〴〵く來り聚り、力を合せて關を攻ば、破んこと目前にあり、其時將軍なんの面目ありて沛公に見え玉はん、不如今日この贈物を受て他日の好となし玉へ。韓榮が曰、然らば我且く權に之を受をさめ、專ら沛公の諸侯を語て和睦を調へ、戰を止て民の塗炭を救ひ玉はんことを望べし。酈生が曰、某よく此ことを申ん、推量するに沛公は寬厚の長者なれば、必ず和睦を調へ候はんとて、關を下て馳回り、沛公に見て右の趣を告ければ、張良が曰、この時を失ふべからず、速

ば、諸軍その屍を寸々にきり、三族を市に引出してこと〴〵く誅滅す。於是子嬰大禮を行て帝位に登り、三世皇帝と號す。百官萬歳を祝して賀をのべければ、子嬰宣ひけるは、朕いま帝位に登ると云ども、楚の兵境を侵して事急なり、如何して退くべき。百官みな申けるは、早く大將を選で嶢關を守らせ、其のち大軍を催して破らずんば、咸陽危からん、子嬰これに從ひ、韓榮、耿沛に五萬の勢を授け、嶢關へ馳向て朱蒯と共に守らせらる。

○沛公入レ關軍ニ霸上ニ

この時沛公の大軍嶢關を攻るに、秦の生手の勢勇猛にして能戰ひければ、數日進ことを得ず。張良これを見て、秦の兵勇猛なれば、いまだ輕々しく戰ふべからず、我よく秦の大將は多く賈人の子にして利を貪るを知れり、いま關下に夥しく旗幟を立て勢を張、山上に疑兵を設け、陸賈、酈生等が如き辯舌の者を遣して秦の大將に利害を說せ、金銀を與て其心を動し、備なきを窺て其不意を討ば、必ず大に勝ことを得んと云ければ、沛公これに從ひ、山々峯々に旗を立て、大軍の攻かゝる勢をなさしめ、密に陸賈、酈生を秦の陣へ遣さる。酈生先關に上て秦の大將朱蒯、韓榮に逢て申けるは、今秦無道にして百姓を悩す、天下兵を起して共に之を伐、ひとり沛公

て劍戟を閃しければ、二世皇帝事のかなはざるを見て、自害して失玉ひぬ。閻樂いそぎ回て趙高に報じ、二世すでに自害し玉ふ、丞相早く天下を定めよと云ければ、趙高乃ち百官を聚て申けるは、二世わが諫を聞ず、殘暴を專にし玉ひし故に、諸侯こと〴〵く叛き、百姓みな怨む、我この故に誅殺せり、素より秦は王の國なるに、始皇より帝と稱す、今六國の子孫自ら立て王となり、秦を滅して帝と成らんとす、況や秦の國は徒に名のみ大にして地小なり、今扶蘇の子子嬰を立て王とし、六國と同列して帝號をやめば、天下みな帝位を奪はんとするの心をかへして、秦を攻る者なからん、諸官いかゞ思へると云ければ、百官こと〴〵く尤と同ず。趙高乃ち二世皇帝を宜春苑に葬り、百官を伴て子嬰に見え、五日齋戒して身を淸め、玉璽を受て位に卽玉へと云ければ、子嬰これに從ひ、齋宮に入て齋し、密に二人の御子を召て宣ひけるは、趙高誅を恐て帝を弑し、百官の心を安ぜん爲に我を立て君とし、五日齋戒して大廟にて玉璽を傳んと云ふ、汝は韓覃、李畢と兵を齋宮の外に伏よ、期に臨て我疾と號して行ずんば、趙高必ず自ら來て我を請ぜん、汝其時この賊を誅して諸父の讐を雪げとて、第五日に疾と號して出玉はざりければ、案の如く趙高自ら齋宮へ來て、子嬰に見んとするに、門外より伏の勢打て出たり。趙高大に驚、閻樂はなきかと呼はる所を、李畢一槍に刺殺し、首を取て指擧けれ

服せん、然る時は我九族無事なるべし。閻樂、趙成、この計甚妙なりとて、千餘騎の兵を聚て諸處に喊の聲をあげ、鑼鼓を鳴して騒動し、賊徒すでに内裏に入たりと云沙汰して、閻樂自ら望夷宮の門に到り、兵を下知して番の者共を縛らせ、賊軍内へ入たるに、汝等なんぞ防ざるぞと責ければ、士卒みな申けるは、某等こゝを緊く守る、焉ぞ一人も妄に入もの有ん。閻樂怒て盡く首を刎させ、喚き叫で攻入に、百官驚き惶れて上を下へ反し、殺さるゝ者數を知ず。閻樂、趙成急に進んで内宮に入ければ、二世皇帝護衛の武士を呼玉へども、震ひ怖れて戰ふこと能はず。内官二人走り來り、二世皇帝を扶て逃んとするに、閻樂、趙成劍を拔て取かこみ、陛下驕暴にして殺伐を好み、遊樂に耽て民を恤玉はざりし故に、神人共に怒り、諸侯ことごとく叛く、これ自ら滅亡を求玉へる也、某等が不義に非と云て動し奉らねば、二世皇帝の曰、丞相は何くに在ぞ、見ることを得べけんや。閻樂が曰、不レ可レ見。又曰、ねがはくは朕が言を以て丞相に傳へよ、一郡を得て王たらん、此を許さんや。閻樂が曰、不レ許。又曰、ねがはくは萬戸侯たらん、許んや。閻樂が曰、不レ許。又曰、ねがはくは妻子と共に黔首と爲て諸公子の中に列ん、許んや。閻樂が曰、不レ許。二世皇帝大に哭き、哀求て不レ已ければ、閻樂申けるは、我丞相の命を受て天下の爲に君を誅す、君いかに宣ふとも、敢て丞相に報ずること能はずとて、兵を下知し

白き虎走り出て、御車の左の驂馬を齧殺せりと見玉ひ、打驚て御心安からず、急ぎ卜者を召て圓を問玉ふに、此は涇水の祟なり、遠く此宮を去て禍を避玉へと申ければ、望夷宮に移りて齋をなし、涇水を祭て白き馬を沈め、終日樂ずして居玉ひ、近侍の臣に向て、近ごろ諸方の賊徒なんの消息もなきかと問玉ふに、群臣みな涙を流して言ず、此はいかなることぞと責問玉ふに、群臣奏して申けるは、近ごろ楚の大軍東西より攻きたり、國々の諸侯こと〴〵く叛て奏を攻、咸陽の破ん事數日の內にあり。二世皇帝大に驚き、急に趙高を召るれども病と稱して出ざりければ、使を以罪を責、汝丞相の位に居ながら、賊軍城下に臨めども病に臥して不出、先に言を飾て讒を構へ、妄に李斯を誅せしが、今日の危き汝なんの理ありてか罪を免れんと云せらるゝに、趙高畏れ入て答ふべき言なく、手足の措どころを忘れて居たりしが、心に計を設て、咸陽の令閻樂は我壻なればとて陰に呼よせ、弟の趙成等數十人を一處に聚て申けるは、天子人の諫を聽玉はずして國すでに滅んとす、況や賊軍武關を攻て事甚だ急なり、今罪を我一人に歸して禍九族に及んとす、汝等も已に死人の一族なり、盡く誅せらるべし、これを免れん計を思ふに不如、詐て賊軍宮中へ攻入たりと披露し、汝等兵を引て內裏に亂れ入、早く天子を誅して公子子嬰を立て君とせよ、子嬰は扶蘇の子にして爲人仁厚なれば、百姓みな悅で

某久く眞命の主を求て常に君の徳を慕ふ、この比大軍の向ふ由を聞、この處に出でて待奉る、さきより戰を交へしは非ニ敢阻ニ天兵ニ、某が武藝の程を知しめん爲なり、願くは用て麾下の一將となし玉へ。沛公の曰、速に其名を聞ん。答て曰、某は洛川の灌嬰と申者、年少かりし時西川に行て商賣をなし、同伴五六人と紫關を通りしに、百餘人の山賊に出合たり、某一人劍を拔て迎へ戰ひ、大半首を刎て殘黨を追散せしかば、此より紫關の路煩なくして、居民今に至るまで某が名を稱す、近比二世皇帝の無道を見て、義兵を擧て三千餘騎を聚め、君の仁義を行ひ、諸郡風を望で服する由を承り、此に來て降を請ふ、ねがはくは一命を輕んじて秦を破先陣たらん。沛公大に喜び重く賞して留めおき、大軍を進めて武關を攻させらるゝに、此關は咸陽第一の要害なれば、秦の守將朱蒯と云ふもの緊く守て出て戰ふことなく、咸陽へ早馬を飛して救を求め、楚の大軍東西より秦を攻て事すでに急なりと報ず。丞相趙高これを聞て驚き惶れ、彌かくして天子に奏せず、大將を選で救の勢を向んと議するに、行んと云もの一人もなし。早馬急を告て日夜雪の飛が如く、關中すでに破れんとする由報じければ、趙高すべき樣なく、天子もし聞玉はゞ、必ず誅せられんことを恐れて、虚病して出でざりけり。二世皇帝は浩る事をも知ず、宮女を聚て晝夜あそび樂で御座けるが、或夜の夢に郊外へ出玉ひしに、林の中より

この時魯公項羽は五十萬の勢を率して、東の路條より進で秦を伐けるが、攻るに取ずと云ことなく、戰ふに勝ずと云ことなし。在々處々を放火して滿城に血を流し、殘暴を放にして人を恤むこと無りしかば、天下望を失ひて百姓悉く逃かくる。范增累に諫れども項羽更に用ず、心の儘に殺伐を行ひければ、手下の諸將も力及す、只威を畏れて皆安ず思ひけり。これにかはりて沛公は所レ到民を恤み、法を嚴にして秋毫も犯ず、專ら仁德を施し玉へば、人民喜び服して簞食壺漿して迎へずと云ものなし。是によりて大軍路に滯りなく、已に武關に近付ける所に、一軍路を攔て、二人の大將大音あげ、われ沛公に遇て一言を云んと呼はる。沛公の陣よりこれを見て、傅寬、傅弼二人馬を出し二十餘合戰ひけるに、彼大將勇を奮ひ、傅寬を活捕て傅弼を散々に打やぶり、又大音あげて申けるは、我沛公に遇んと云は他の意に有ず、今手下に三千の兵あり、共に力を併せて秦を破ん爲なり。張良これを聞て馬を陣前に出し、汝は何者ぞ、名を聞んと云ども、彼大將更に不レ答、われ但沛公に遇て名乘んと云。樊噲大に腹を立、汝は是名もなき匹夫、爭かわが君に見ることを得んと云まゝに、戟を舞して打てかゝり、二人十合あまり戰て勝負を分たず。沛公その勇を見て大に驚き、自ら馬を騎出して、來將いかなれば劉邦に遇んと云へると呼はり玉ふに、彼大將望見て急に馬より飛下、地に拜伏して申けるは、

し、將軍今暴秦を伐んとて仁義の軍を起し、適に使を馳て我國に粮を求む、我國新に立て貯なければ、命に應ずること能はずして張良を馳て罪を謝せしむ、將軍ねがはくは推察せよと云ければ、沛公の曰、われ殿下の國用に乏を知り、なんぞ強て粮を求めん、今張良計多して素より大なる志あり、暫くこの人を借て共に計を設け、軍馬を調て進發せんと欲す、敢て久く留んとに非、秦を滅して後は早々に歸らしめん。韓王の曰、張良は片時も離るべからずと云ども、將軍天下の爲に秦の無道を誅せんとの志ならば、暫く張良を借て助と成ん、秦を滅し玉ひて後は、約を背ず速に回し玉へ。沛公喜んで拜謝し、此より張良と食する時は桌を共にし、寢る時は床を同し、日夜古の兵書を論じ玉へば、張良一々說示すに、沛公豁然として通ぜずと云所なかりしかば、驚て申けるは、我昔し黃石公が教を受てより、人と兵書を論ずるに、茫然として知るものなし、今沛公に告るに、一字の滯りなくして素より諳じたるが如し、我數年よく讀て熟すと云ども、沛公の明白なるに及ず、誠に聰明仁智天授の主君也とて、心の內深く喜びけり。

○望夷宮二世被害

覺ず有ニ一代之君一、必有ニ一代之臣一と云て、心の内に思ひけるは、我來りて言を巧にし、沛公に說んと思しに、圖ざりき此の如ならんとは、是まさに我師黃石公が、眞の君を扶て名を萬世に傳へよと云しに應ぜり、今沛公に遇は直事に非とて、地に再拜して見えければ、沛公帳中に迎へて持なし玉ふ。張良申けるは、足下兵を起して秦を伐玉ふ、諸國風を望で來服して兵粮に不足なし、然るに如何なれば狂人の言を聞て、漢王に粮を借んと詐て此張良を招んとはし玉ふぞ。沛公この一言に心驚て答ふること能はざるを、蕭何傍に在て申けるは、我君粮を借は實は張良を借ん爲なり、先生の此に來るも實は我君に說ん爲なり、先生來り說んとして不レ能レ說ものは、我君をして心中に思ふこと有ゆゑならん、先生わが君を見て、往日博浪沙にて車を擊たる勇士に較べば、豈但百倍のみならんや、先生もし我君に從ひ秦を伐、韓の爲に仇を報ぜば、大なる功を立て勞せずして其志を遂ん。張良これを聞て地に拜伏し、某が心中すでに足下に見すかされたり、我いかにもして韓の爲に仇を報ぜんと欲す、願くは沛公に從て共に秦を滅さん、然れども此趣を韓王に告て其後に決すべしと云ければ、沛公限なく喜び、次の日大軍陣留を離れて均州の路より韓の國へ來り玉ふ。韓王この由を聞て城を出て遠く迎へければ、沛公大軍を外にとゞめ、酈生、蕭何、樊噲、張良等百餘騎を引て城に入玉ふ。韓王酒宴を設て持な

空無處假貸。敬遣使酈食其借糧五萬石。破秦之後加倍奉償。幸念征討之公非爲私費、
蚤賜發下以濟急用。雖無兵馬之助、寔得生民之天。臨楮懇切、萬惟垂照。不宣。

韓王見了て群臣に向て申されけるは、我國一旦秦の爲に滅されたれば、今新に立と云へども、貯たる物なくして國用猶足ず、豈他人を救に暇あらんや。群臣みな申けるは、沛公いま懷王の命を受、兵を起して秦を伐、これ天下の大義なり、已に使を馳て糧を借んと云、たとひ五萬石を借こと能はずとも、其半を與へて同盟の好を全うし玉へ、然ずんば恐くは大義を傷ん。韓王いかゞせんと案じ煩ふ所に、張良すゝみ出て申けるは、先快く沛公の使を持成玉へ、某自ら行て沛公に見え、無糧の實を告ん。韓王の曰、汝ゆかば能詞を巧にして、必ず兩國の好を失こと勿れ。酈生これを聞て計成就せりと喜び、兼て沛公と合圖を定め置たれば、相伴て來りける。張良路にて思ひけるは、酈生が體を見るに、この者糧を借んと云は假の計にて、實は我を沛公に從て共に秦を伐しめんとする者なりと心付て、直ちに進んで轅門へ入んとするに、樊噲出むかへて謹で禮を施す。張良これを見て、まことに開國の功臣なりと驚き、寨門の口に到りければ、沛公自ら蕭何、曹參、滕公、王陵等を引て出迎へ玉ふ。張良これを見れば、沛公隆準龍顔にして治國安民の眞君なるに、相從ふ蕭何、曹參等、皆是開疆展土の元勳なれば、

望にも劣ず、若この人を得玉はゞ、秦の破れざるを患玉ふこと勿れ。沛公坐を起て問て曰、これ如何なる人ぞ。酈生が曰、韓國の人に張良、字は子房と云者なり、韓に仕て五世相となる、曾て異人の術を受て、常に秦を滅して韓の仇を報ぜんと欲すれども、韓の國新に立て事いまだ調はざれば、時を待て輕々しく動ず、此人もし君に仕へば、天下は掌の内にあらん。沛公の曰、張良すでに韓國に仕ふ、如何して我に從ふべき。酈生が曰、某一の計あり、張良を誘き來て君に見えしめん、君その時好言を以て挑玉はゞ、彼必ず御方に事へん。沛公の曰、いかなる計ぞ。酈生が曰、君書簡を造て韓王に送り、今兵を率て秦を伐、六國の爲に仇を報ぜんとするに、軍中粮乏して急に進こと能はず、願くは同盟の好に兵粮五萬石を借玉へと云ば、韓の國新に立て粮少く、答ふべき樣なくして、韓王必ず張良を使として謝せしめん、然る時は計すでに成なり。沛公この義に從ひ卽時に書簡を調へ、乃ち酈生を使として韓の國へ遣さる。韓王これを得て開き見るに、其書に曰、

楚征西大將軍沛公劉邦奉二書韓王殿下一。

伏以、始皇無道、并二呑六國一、二世殘暴、罪惡貫盈、百姓嗷々恨入二骨髓一。今統二大軍一布二告天下一、仗ㇾ義除ㇾ殘以雪二世忿一。但兵行百里、日費二萬金一。所ㇾ少者但軍需耳。鄰近郡邑十室九

從ひ、即酈生を陳留へ遣さる。太守陳同素より酈生と好ありければ、後堂に迎へ酒をすゝむ。酈生申けるは、良禽相木而栖、賢臣擇主而佐、いま秦無道を極めて諸侯みな叛く、われ久く佯て酒狂をなし、遍く明君を求るに、意に合へる君なし、昨日沛公に見えしに、隆準龍顏豁達大度にして、仁義の師を行ひ、寛厚の德を布、西に行て秦を伐に、郡邑みな風を望で服す、太守この小城を守りて當衝要之地、若沛公の兵忽ちに來らば、强を以て弱を凌ぎ、一鼓して城を破らん、然る時は太守徒に頸を延べて死を受るなり、早く志を決して身を全うするの計を成玉へ。陳同これを聞て首を低、沈吟して申けるは、先生の所言一理ありと云ども、われ久く秦の祿を食て今叛に忍がたし。酈生が曰、二世殘暴にして天下の人齒を切る、昔し武王紂を伐て四海悉く悅服す、我獨夫紂を誅することを聞て、未だ其君を弑することを聞ず、二世は今の獨夫なり、何ぞ秦に叛と云ん。陳同これを聞て心決し、城を開て沛公を迎ければ、沛公、蕭何、曹參等と城中に入、民を安じて一月あまり逗留し、諸方の勢を招玉ふに、新に加はる勢五萬に及びければ、沛公深く喜び、此みな酈生が力なりとて、封じて廣野君とし、常に左右に居しめ計を問玉ふ。酈生申けるは、某君の厚恩を蒙て日々に相親むと云ども、未だ奇妙の功を立るに足ず、願は破秦大なる輔を薦ん、此地に一人あり、經濟の才を抱て湯の伊尹、周の呂

酈生使韓借張良

酈生げにもとて、王德と共に沛公の陣に來る。時境沛公は床に腰をかけ、二人の女に足を洗せて居られしに、酈生内に入長揖して拜せず。足下は秦を助て諸侯を攻んと欲し玉ふか、諸侯を率て秦を攻んと欲し玉ふかと云ければ、沛公酈生が甚年老て、言の内われを衝意あるを見て、詈て申されけるは、汝腐儒者、天下みな秦の苛法を苦こと久し、我懷王の命を受、西の路より秦を伐、天下の爲に無道を除んとす、何ぞ秦を助べき。酈生が曰、足下秦を伐て無道を誅せんとならば、是義兵を揚て天下を服せしめんとの心ならん、然るに何ぞ足を洗ながら長者に見えて、妄に無禮をし玉ふや、此の如くんば賢德の人離れ去て、足下誰と共に天下を治玉ふべきぞ。沛公これを聞て急に威儀を整へ、酈生を上坐に請じて申されけるは、我さきに先生の急に來るべきを知ず、誤て出て迎ふるの禮を失へり、幸に怪まるゝこと勿れ。酈生於是六國の縱横を說、秦の無道を言て、辯如懸河滔々として不絕ければ、沛公大に喜び、秦を伐の計を求玉ふに、酈生申けるは、足下いま四方より驅あつめたる勢十萬を率して、直に强秦に攻入んとし玉ふ、此羊を引て虎の口に入もの也、夫陳留は天下之衝、四通八達之地にして城中の貯きはめて多し、此を守る太守を陳同と云、某行て利害を說ば、必ず來て足下に降ん、もし陳留を取て根本とし、四方の軍馬を集めて、機にのりて關中を破らば、最上の軍ならん。沛公これに

す。進んで高陽に赴き玉へば、高陽の守將王德城を開て來り降る。沛公城中に入、王德が人に超たる才力あるを見て、御邊いまより我に從ひ、共に秦を伐て大業を扶よと申されければ、王德拜伏して申けるは、某素より將軍の麾下に從はんことを欲すれども、某もし此を去時は、高陽を治者なくして、百姓の望を失はん、この邑に酈食其と云賢人あり、家貧して酒を好み、醉時は高く歌を謠て小節に拘ず、此故に人みな狂人なりと云、年すでに六十八歲、外の容は取に足ざれども、胸には萬斛の珠を貯へ、腹には一天の星斗を羅ぬ、興衰の運を知治亂の機を知て、眞に希世の賢士なり、秦の殘暴にして焚書坑儒するを見て、假に酒を飮で佯て狂人となる者なり、常に人に向て、我終日昏醉すと云ども、若明主に遇ば必ず醒んと申す、將軍この者を用て別駕に任じ、朝夕事を謀玉はゞ大なる益あらん。沛公限なく喜び、乃ち王德を遣して酈生を招かせらるゝに、酈生宿酒いまだ醒ず、よろめき出て王德に對面す。王德しきりに沛公の德を稱し、我すでに先生を薦たれば、沛公用て別駕に任ぜんと宣ふ、先生大才を抱て久く明君に遇ず、沛公は寬仁の君なり、了に王業を成玉ふべし、速に出て仕玉へと云ければ、酈生が曰、われ曾て沛公は大度あれども賢人を侮ると聞り、今禮を以て迎ざるに、道を枉て人に從ば、恐は反て辱を取ん。王德が曰、先生素より機變に通ず、行て對面して其志を試玉へ。

通俗漢楚軍談　巻之三

○酈生使韓借張良

二世皇帝の三年春二月、沛公十萬餘騎にて彭城を打立、すでに昌邑と云里に到り玉へば、城門緊く閉て、數千の兵要害に支へて防んとす。樊噲これを見て、急に攻やぶらんと罵りけるを、沛公制して申されけるは、僅なる邑の小城なれば、たとひ好守るとも、我蹈やぶりて通らんこと掌を反が如ならん、然ども百姓久しく秦の政を苦む、わが大軍一度に蒐らば、滿城忽ち粉に成ん、わが軍を用ゆるは素より民を安ぜん爲なり、今强暴を行はゞ王者の師に非とて、兵を推へて進玉はず。城中の百姓此由を傳へ聞、我等秦の苛法を苦で常に水火の中に在が如し、今沛公の大軍所向みな服して、地方安堵如時雨之降、是に敵せば天に逆ふ也、彼もし怒を發して城を攻やぶらば、盡く害せられん、早く城を開て降らんとて、香花を具て城門を開ければ、沛公城に入て民を安んじ、法を出して三軍を戒め、妄に民の物を取ば首を刎んと下知せらる。此に因て百姓いよ〳〵恩を感じ、遠近風を望で降りければ、刄に血ぬらずして所向みな服

の太平を致べし、卿二人勢相ひとし、秦を攻るに東西に二條の路あり、宜く二手に分れて發向せよとて左右に向て、東西の路いづれか遠くいづれか近きぞと云玉ふに、群臣答て申けるは、二條の路共に遠近難易の分なし、須く二人鬮を拈て東西に分れて向はしめ玉へ。懷王この義然るべしとて、東西の二字を書て鬮を拈しむるに、沛公西に當り項羽東に當りければ、二人謹で命を受、軍馬を調て打起んとす。懷王宣ひけるは、卿等秦の無道を放にして百姓を惱を以て、我を立て楚王とし、人望に從んと欲すれども、我素より身弱く才淺して天下の望を塞に足ず、卿二人いま東西に分れて秦に向ふ、誰にても早く咸陽へ入たる者を王とし、後に入ものを臣とせん、必ず我約に負べからず、天下定るの後我を閑なる所に置て、心安く老を養はしめよ、專ら捷軍の注進を待と宣ひければ、二人地に拜伏して曰、臣等心を王事に盡し帝業を創立して長安に都を建んは素よりの願なりとて、日を擇で打立、定陶に出て勢を調へ、共に誓をなして兄弟の約をなし、項羽を兄とし沛公を弟とし、酒宴を設て諸軍を勞ひ、東西に分て進發す。

手下に馳加る大將には、蕭何、樊噲、曹參、周勃、王陵、夏侯嬰、柴武、靳歙、盧綰、丁復、周昌、傅寛、薛歐、陳沛、張倉、任敖等を先として五十餘人、その勢十萬に及り。項羽が手下には范增、英布、鍾離昧、桓楚、于英、丁公、雍齒、章邯、司馬欣、董翳、魏豹、張耳、陳餘、共敖、臧荼、龍沮等を先として百十餘人、その勢五十萬に餘れり。されども殺伐を専にして、仁愛の心なかりしかば、勢甚だ盛なれども百姓さらに服せざりけり。沛公は專ら仁義を行て敢て人を殺さず、廣く才ある者を求めて、百姓を恤み懷けられしかば、懷王も深く沛公を愛せられ、常に群臣に向て宣ひけるは、沛公劉邦は寛仁の長者なり、此人に征伐を掌らしめば、必ずよく郡國を輯じて百姓を安じ定ん。魯公項羽は威勢極て重く、天下の諸侯も震ひ怖て敢て仰で視る者なし、性暴く氣剛なれば我甚だ之を怖ると宣ひて、項羽が事を奏する時は、いつも座を起て對面し玉へり。時に細作咸陽より回り、二世皇帝ますく暴虐を放にして、趙高みだりに人を害し、百姓みな怨み背くと告ければ、項羽これを聞て懷王に申しけるは、臣久く軍馬を養ひ秦を滅して民の塗炭を救んと欲す、時已に至れり、速に進發せんと申ければ、懷王宣ひけるは、われ卿と沛公とに命じて二手に分て秦を伐しめんとす、卿今進發せんと云、是よく我意に合へりとて、沛公を召よせて宣ひけるは、秦無道を極めて天人共に憤る、速に伐て天下

て楚に降り、項羽と力を合せて關中へ攻入んとす、事已に急なりと告ければ、趙高大に怒り二世皇帝に見て、章邯等が謀反の心あるを常々奏し申せども、陛下急に沙汰し玉はずして、今果して十萬の勢を引て楚に降り候ふと申ければ、二世皇帝以の外に仰天し、降參せし諸將の妻子一族を市に引出して悉く斬せらる。章邯等この由を傳へ聞て、みな聲を擧て哀み哭き、項羽に見えて申けるは、秦の民怨み叛て函谷關を守る者なし、速に漳河を渡て徑に新安澠池に攻かかり玉はゞ、秦を破んこと易からん。項羽これを聞て范增と議するに、范增申けるは、御方の大軍久く外に在て、人馬勞れ財用足ず、此ころ懐王都を彭城に遷し玉ひて、百事いまだ調ず、況や秦の國兵強く民富で輕々しく敵すべからず、不如まづ彭城へ御回ありて懐王に見え、その根本を固して人馬の氣力を養ひ兵粮を貯へ、東西より秦を攻て、敵に首尾相顧ることを得ざらしむべし、今もし輕々しく其外を攻て、萬一彭城を敵に襲れなば、勞而無功のみならず、反て威名を損ずべし。項羽此義げにもとて、悉く人馬を收て彭城へ回り、秦の降人を引て懐王に見えければ、懐王宣けるは、將軍師を出してより累に大なる功を建、まことに金石に銘して千載に傳ふべしとて、大に酒宴を設て喜をのべ、諸大將に恩賞を賜りて、項羽を魯公に封じ劉邦を沛公に封じ玉ふ。この時沛公は南陽の諸郡を攻靡て、四方の賢人を招き玉ひければ、

往て審に虚實を探れ。陳豨又楚の陣にゆき、項羽に見て申けるは、章邯すでに降んとす、只將軍の舊き仇を念て、欺て害し玉はんことを恐れて輕々しく來ることを得ず。項羽が曰、大丈夫の一言は泰山よりも重し、我章邯を殺んと欲せば、豈別に計なからんや、苟も欺て殺すことは君子の爲所にあらずとて、箭を折て誓を成ければ、陳豨その箭を持て馳回り、備に項羽が詐なきを語る。章邯大に喜び、趙常を引出して首を刎、諸大將と十萬の勢を率して、悉く函谷關を出漳南を三十里隔て陣を取り、自ら秦の大將數十人を伴て楚の陣門に降りければ、范增下知を傳て其の勢の隊伍を整へ、武具を揃へ旌旗を列ねて十分に威儀を盛にし、三通の鼓を打て轅門を開しむ。章邯等内に入地に拜伏して涙を流し、項羽に告て申けるは、某趙高が讒言に因て、二世皇帝救の勢を發せず、反て詔を下して死を賜ひ妻子一族を獄に囚ふ、進退所レ歸なくして將軍に降ること、嬰兒の父母を望が如し、但し昔日定陶の戰に、不レ意に將軍の尊叔を害す、其罪萬死猶輕し、然るに全く寛宥を蒙て恩如二天地一、ねがはくは一命を棄て、上は將軍不殺の恩を報じ、下は三族屈死の仇を雪ん。項羽が曰、汝等すでに我に降る、よく忠を盡して國に報ぜよ、他日秦を滅さば富貴心の儘なるべしとて、酒宴を設て持成ければ、皆恩を謝して喜合り。函谷關を守る秦の大將咸陽へ早馬を飛して、章邯勅使を殺し十萬の勢を引

よく秦の爲に防ぐ故なり、章邯いま趙高に讒せられて、一族獄に囚はれ其身も死を賜ふ、此ゆゑに進退所レ歸なく、已ことを得ずして楚に降んとす、將軍もし舊き仇を念はず、恩義を以て其心を結び、用て手下の大將とし玉はゞ、彼深く恩を感じて將軍の爲に一命を棄ん、況や秦の頼とする者は章邯一人なり、章邯もし御方に歸せば、誰か秦の爲に守る者あらん、蓋し國に無主將これを虚國と云、將軍その虚に乘て長く驅て大に進み玉はゞ、秦を破んこと掌にあらん、今もし降を許し玉はずんば、章邯必ず他國へ降參して其君を援て楚に敵せん、然る時は秦未だ亡ずして又一の秦を增なり、古人も三軍易レ得一將難レ求、天與不レ取反受二其咎一と云り、將軍私の仇を忘れて、速に事を決し玉はゞ、實に天下の豪傑ならん。項羽これを聞て尤と喜び、卽時に陳稀を召て申けるは、我よく汝が言を思ふに、始め章邯が季父を殺せる仇あるを以て、降を許ざりしかども、國家の大計は人を用るを以て第一とす、此故に舊き恨を思はず、季父の仇は一人の私なり、人を用るは天下の公なり、章邯果して我に服する心あらば、舊日の恨を棄て必ず重く用ふべし、早く秦の使を斬手勢を引て漳南へ來らしめよ。陳稀喜で拜謝し、函谷關に回て右の趣を告ければ、章邯申けるは、われ御邊の薦に從ひ、勅使を斬て楚に降んと思へども、范增素より計深き者なれば、詐て我を欺き擒にして殺んとの工ならん、御邊再び

召よせて云て曰、章邯久しく困で汝に說客を成しめん爲か。陳豨が曰、兩軍相對して勢力共に疲れ、財用不足して百姓苦む、是たゞ不利於秦のみにあらず、亦楚の爲にも利あらず。項羽が曰、汝これを如何すべき。陳豨が曰、大將軍章邯秦に仕ること已に三年、身百戰を經て功勞多し、然るに內官趙高讒佞にして害せんと料る、此故に今秦の勅使を捕へ、其首を獻て楚に服せんことを願ふ、專ら赤子の父母を戀ふが如し、將軍いかゞ用ひ玉ふべきか。項羽大に怒り前なる案を拍て申けるは、章邯わが季父を殺せり、此千載の恨百世の仇なり、我つねに其首を碎て溺の器とし、日比の恨を雪んと欲す、爭か降を許べき。陳豨これを聞て天を仰で笑ひければ、項羽いよ〳〵怒て曰、汝何をか笑ふ、我劍を試んと思ふか。陳豨が曰、われ將軍の所爲は小にして失ふ所の大なるを笑ふ、夫大丈夫は爲國忘家用賢略仇、さきに章邯が將軍の季父を殺したるは、各その君の爲にする者なり、是人臣の忠にして、智ある人は必ず之を取、將軍なんぞ心に拘滯して氣量の不廣を顯し玉ふぞ。項羽なほ怒已ざりけるを、范增傍に在て、且く陳豨を退け玉へ、某申べき事ありと低語ければ、項羽乃ち陳豨に向て申けるは、汝しばらく外に出よ、我よく思案して事を決すべしとて、陳豨を外廳にて持成しむ。時に范增申けるは、將軍の勢大にして兩陣久く相對し、急に函谷の關を超玉ふこと能はざるは、章邯が

白起爲秦將、南竝鄢郢、北抗馬服、攻城略地不可勝計、而卒賜死。蒙恬爲秦將、北逐戎人、開楡中地數千里、竟斬陽周。何者。功多秦不能封、因以法誅之。今將軍爲秦將三歲矣。所亡失已十數萬。而諸侯竝起滋益多故。趙高素諛日久。今事敗壞亦恐二世誅之。故以法誅將軍以塞責、使人更代以脫其禍。君居外多內隙、有功亦誅、無功亦誅。且天之亡秦無愚智皆知之。今將軍內不能直諫、外爲亡國將孤立而欲長存、豈不哀哉。將軍何不還兵與諸侯爲從、南面稱孤、孰與身伏斧鉞、質妻子爲戮乎。陳餘百拜謹書。

章邯見了て諸大將に申けるは、陳餘が所言一理あり、我いづくに身を寄て禍を免れん。陳豨が曰、今諸侯みな秦に背て、六國の子孫新に立と云ども、人みな疑を抱て服する者少し、惟楚の項羽は功烈震一時、氣節蓋天下て、兵強く將猛し、此ゆゑに大國の諸候も膝行して命をきく、某料に他日秦を滅す者は必ず楚ならん、將軍もし楚に降り玉はゞ、王侯の貴に至り玉ふべし。章邯が曰、われ往日彼が季父の項梁を殺して、楚とは累世の仇あり、爭か我を用べき。陳豨が曰、われ願はくは將軍の爲に楚に利害を說示して、必ず事を成しめん。章邯然るべしと同じければ、陳豨馬にのりて楚の陣にゆき、秦の使楚の大將軍に見んことを願ふと云ければ、項羽

章邯等統レ兵征伐、喪レ師辱レ命、差レ官奏レ事、未レ有ニ明降一、乃敢輙回、上下之分殊爲ニ叛背一今差ニ騎將趙常一、往拘ニ繫頸一來見、順レ命不レ違尚有ニ酌處一。如復矯抗罪不レ容レ誅。惟詔奉行。

章邯等これを聞て大に怒り、勅使趙常が髻を掴で申けるは、我等一命を輕んじて親ら矢石を冒し、萬死一生の戰を經て限なき苦をうけ、楚の勢と九たび戰て十日あまり晝夜ねむることを得ず、糧盡て飢にのぞむ、是ゆゑに追々早馬を飛せて事を奏すれども、趙高隱して帝に知しめず、却て我等を罪せんとす、不レ如使命を殺してこの恨を雪んとて、已に劒を拔けるを、諸人推とゞめ今もし勅使を斬ば、臣として君を拒に似たるべし、不レ如暫く命を扶けて陣中に捕へおき、委細に事を奏聞し玉へと云ければ、章邯げにもとて趙常を囚おきけり。

○章邯避レ禍降ニ項羽一

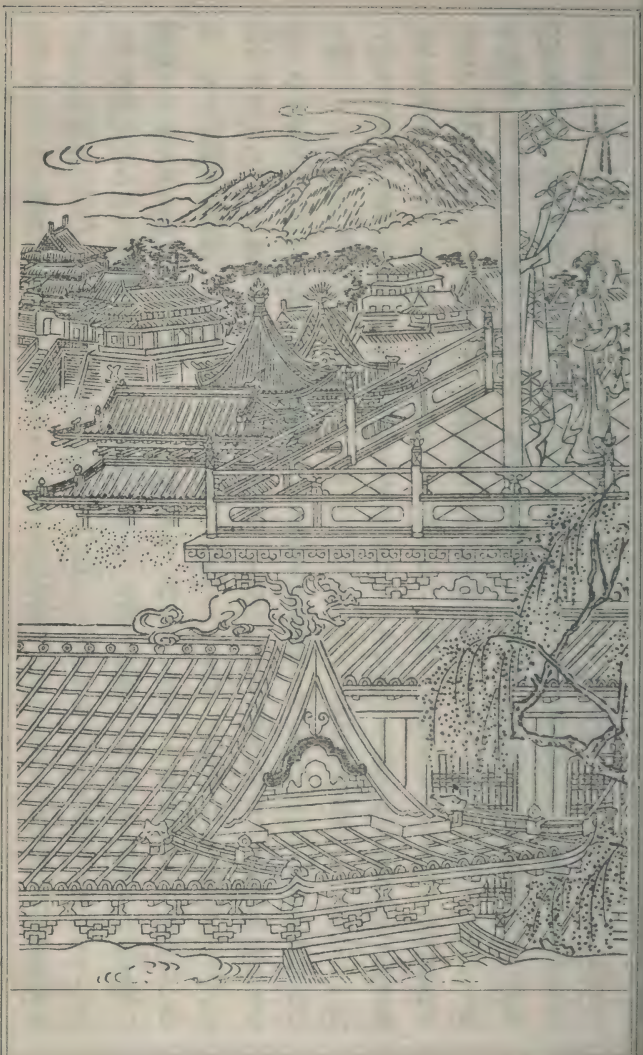
章邯しばらく趙常を殺さず、陣中に囚へ置て如何せんと議するに、陳稀申けるは、趙高すでに將軍の一族を捕へて獄に下せり、將軍縱ひ大なる功を立玉ふとも、誰か此を知もの有ん、一族の滅亡遂に免れ難し、不レ如早く趙常を斬て御志を決し玉へ。章邯猶豫して決すること能はず。數日を經る所に、趙の大將陳餘が方より使を馳て書簡を送れり。急ぎ披き見に、其書に曰く、

と申す。此に因て空く引回し、此由を告ければ、趙高瞋り怨で痛く四人の大將を責、二世皇帝に見えて申けるは、章邯、司馬欣等久く閫外を統て、一寸の功をも立ず、却て人馬を失ひ賊徒を引て都の內を騷動せしむ、法を以て論ずる時は、宜くこれに死を賜ふべし、早く大將を選で代らしめ玉へ。二世皇帝これに從ひ、乃ち趙高が姪の趙常を使として、章邯等に早く都へ回るべき由の詔を下し玉ふ。司馬欣は夜を日に繼で函谷關へ到り、章邯に見えて趙高が權を專にして放に事を行ひ、讒言を以て帝を惑し、將軍を害せんと計る、某この由を聞て速に馳かへり候と告ければ、章邯大に驚て曰、內に奸臣あり外に勁敵ありて、兩ら難の時なり、我いかゞすべきとて、董翳等を聚て計を議するに、董翳が曰、趙高奸謀を設て、妄に人を害す、一言の下李斯三族を滅されたり、今もし我等を怨ば必ず大なる禍を引出さん。時に陳豨と云る謀士、この比咸陽より來て傍に在けるが、趙高すでに三家の妻子一族を捕て獄に下し、天子の詔を假て將軍を召かへし、李斯が如くにせんと計る、手勢を引て詔を拒玉はゞ、猶活ることを得玉ふこと有ん、若詔に順て咸陽へ回り玉はゞ、決して害に遇玉ふべしと云ける所に、外より報じて趙常勅使として來れりと告ければ、章邯等いそぎ出迎へて詔を聞に、その詔に曰、征討之命出二於天子一。閫外之寄實主二於元戎一。建豎二功勳一、威振二海內一、必克乃濟、庶付二委託一。爾

伐せしめば、賊徒自ら滅ぶべし、況や箇様の事には傳説の誤あるものにて候ふ、今章邯が注進もなきに輕々しく内官の言を聞て、何とて臣を罪し玉ふぞと、言を飾て云ければ、二世皇帝是に惑され、又心を安じて遊樂をなし玉ふ。趙高退て思ひけるは、章邯救を求れども我これを隱して帝に奏せず、此ゆゑに密に内官の者共に通じて、帝に知しめたる故に、我今日かゝる責を被れる者なりとて、數日牙を呀で章邯を怨ける所に、長史司馬欣只今章邯が使として、事を奏聞せん爲に函谷關より來れりと告ければ、趙高まづ我自ら對面すべし、朝門の外に行て待しめよと云。司馬欣これを聞て、朝門の外に行て三日まで待けれども、趙高未だ對面せず。司馬欣深く恠み、金銀を與て門を守る者共を欺き、趙高が家の僕を語ふて事の樣を尋ぬるに、僕告て申けるは、丞相つねに章邯を怨て、敗軍の罪を正んと云玉ふ、足下今こゝに來れるは是網の中に入なり、不如對面せずして早く回り玉へと敎ければ、司馬欣大に驚き、急に馬に打のり夜を日に繼で咸陽を出函谷關へ逃回れり。趙高はこれを知ず、三日が間司馬欣を留めおき、其間に章邯、董翳、司馬欣が京に殘り住れる妻子一族を搦め捕、重く罪を正さんと計て、門を守る者共に司馬欣を連來れと下知しければ、二日以前に逃去たりと申す。趙高大に怒り手下の大將四人に命じて急に追しむるに、更に跡影も見えず、路行人に尋ぬれば、三百里は隔り候はん

諸侯楚を扶て攻ること急なりければ、防ぎ支ること能はずして、日夜早馬を馳て救を求れども、趙高かくして帝に奏せず、百官これを聞て愁ひ哀むと云ども、害せられんことを畏れて言を出す者なし。或時二世皇帝後宮に入て休み玉ひ、未レ睡して御座ありけるに、傍なる宮女ひそかに内官と物語して、今日早馬の來りし消息は如何にと云に、内官申けるは、章邯九たび戰ひ負て三十萬の兵を失ふ、楚の大軍不日に關中へ攻入んとす、我等いかゞして身を全せん。二世皇帝これを聞て、床の上より起あがり其者共を召て、如何なる事ぞ明に申せよと宣ひければ、内官みな涙を流して申けるは、今天下の諸侯こと〴〵く秦を背て、章邯三十萬の兵を失へり、楚の勢不日に攻來らん、臣等この事を物語せり。二世皇帝大に驚き、汝等如何して知たると問玉へば、答て申けるは、内外一人も知ざる者なし、陛下たゞ趙高に惑されて知玉はず、速に救の勢を催して民の塗炭を免れ玉へ。二世皇帝いそぎ趙高を召て大に詈り、汝大小の政を攝て、今天下變亂し國家危急なれども朕に知せず、日夜朕が前に在て欺き諛ふ、其罪市に斬べしと宣ひければ、趙高冠をぬいで頓首して申けるは、臣は丞相の員に備り、只理内の事を治めて、陛下の坐ら太平を享玉はんことを欲す、賊徒を征伐するが如きは大將軍章邯、王離等が身にかゝれり、臣一人爭か内外の事を兼治ることを得ん、今もし使を馳て章邯等が罪を責、別に大將を選で征

李斯が力なり、陛下もし天子と成玉はゞ、地を分て王侯にも封じ玉はんと思ひしに、今に至るまで其沙汰なければ、彼つねに深く怨る心あり、適に彼が長男李由三川の郡守となりて、楚の盗と密に通ぜり、況や李斯外に在て權威の重きこと陛下に過たり、楚人と往來すること實に野心ある故なり、能々これを察し玉へ。二世皇帝これを信じて深く李斯を疑ひ玉ひければ、李斯この由を聞て、趙高が我を害せんとする心あるを曉り、上書して趙高が罪を奏聞しけるに、二世皇帝宣ひけるは、趙高は精廉にして下通二人情一上よく朕が意に適ふ、朕素より趙高が賢なるを知る、然るに卿何とて此を誚れる、朕若趙高なくんば、誰を用てか政を治ん、卿いま阿房宮の造營を止むれども、阿房宮は元來先帝の造り玉ふ所なり、卿天下の盗賊を禁ずること能はず、朕が造營を禁じて先帝の志に背き、不孝の名を取しめんとす、是上不レ能レ報二先帝一次に不レ能レ忠二于朕一、なにを以て丞相の位に居ぞとて、延尉の官に命じて糺問させらるゝに、通じて社稷を覆んとせしこと、五刑を論ずるに腰斬すべしと申しければ、即ち李斯が三族を咸陽の市に傳へて悉く斬せらる。李斯其子を顧て申けるは、吾欲下與レ爾復牽二黄犬一俱出二上蔡東門外一、逐中狡兎上、以爲レ樂豈可レ得乎とて、父子聲を放て哀み哭き、三族を滅されけるこそ哀けれ。此時大將軍章邯は函谷關を固めて居たりしが、兵粮乏して人馬つかれ、國々の



趙高指レ鹿ヲ為ス馬ト

を得ず。或日趙高己が威勢の程を試ん爲に、一疋の鹿を二世皇帝に獻て馬なりと云ければ、二世皇帝嘆じて宣ひけるは、丞相なにとて誤れる、此は鹿なり馬にあらずとて、近侍の臣に向て、馬か鹿かと問玉ふに、敢て答へざる者もあり、或は馬なりとて趙高が意に阿る者もあり、又は直に鹿なりと云て爭ふ者もありけり。趙高その言を聞て、鹿なりと云し者を皆密に殺しければ、百官いよ〳〵怖て、此より國の政を言ものなし。丞相李斯は趙高が一人權を專にするを見て、日來樂まざる色ありければ、趙高この者を生て置てはよかるまじとて、或時李斯に向て申けるは、關東の諸侯こと〴〵く秦に背て、章邯三十萬の勢を失ふ、國家岌々として寧からざるに、天子つねに遊樂に耽り玉ふ、況や阿房宮の造營甚だ浩大にして國の費莫大なり、我は本宦者なれば、諫を進ること能はず、足下ねがはくは諫て此を止め玉へ。李斯が曰、天子つねに深宮の中に在て、朝に出玉ふことなければ、諫を申べき樣なし。趙高が曰、われ時を窺て足下に知しむべし、其時に天子を請て奏聞し玉へとて、二世皇帝の宮中に酒宴を設け、宮女を聚め舞謠て遊び玉へる時を窺ひ、李斯に報じて只今事を奏し玉へと告ければ、李斯實ぞと思ひ、いそぎ朝に出て三度まで天子を請じけり。二世皇帝大に怒て宣ひけるは、朕こゝに在て樂をなすに、李斯何事の出來て輕々しく事を奏する。趙高申けるは、沙丘にて太子を易し計は本

喜び、國々の諸侯も招ざるに來り服して、威風いよ〳〵盛なり。此故に一日に五十里三十里づつ進みしかば、秦の敗軍は皆遠く落のびたり。范增諫めて申けるは、章邯行方しらず逃失て、諸侯みな將軍に降る、是まことに天人の應なり、將軍化レ家爲レ國の計今日にあり、然るに何ぞ輕々しく親ら矢石を冒して窮寇を追かけ玉ふぞ、況や三日の間に九たび戰うて、秦の兵三十萬を破り玉ふこと、古今未だ聞ざる所なり、某愚意を以て料に、不レ如暫く漳南に御陣を屯して、人馬の氣力を養ひ玉へ、二世皇帝は昏闇にして征戰の苦を知ず、趙高は妬忌の小人なり、章邯は大に敗軍の後援の勢を乞ども、思ふ樣に調ずして、心に疑を懷て必ず內變を生ずべし、其時を期うて虛に乘て伐玉はゞ、將軍の神武秦を滅さんこと掌の內にあらん。項羽が曰、是よく我心に合へり、謹んで先生の教に從はんとて、漳南に陣を取て未だ進ず。此時二世皇帝は日夜酒色に溺て遊樂に耽り、內官趙高を愛して天下の政を一人に任せらる。此に因て趙高みだりに逆威を專にし、若少にても己が意に順はざる者あれば、隱に事を託て罪に落しけるゆゑ、百官ふるひ怕れて阿り諛はざる者はなし。章邯は打殘されたる兵十萬を引て、漳河を渡て函谷關に陣をとり、追々早馬を立て救を求め、天下の諸侯みな秦を背いて、楚の項羽勢彌つよく秦の地を攻なびけて、事すでに急なりと告けれども、百官みな趙高を怖て、帝に奏すること

陳餘急に矢倉に上て見るに、果して秦の勢こと〴〵く破れければ、城門を排て内よりも打て出でたるに、章邯いよ〳〵亂れて前後を顧ること能はず。五六騎を引て這々落行けるを、英布一軍を率してのがさじと追かけ、城の東門にて秦の章平が救の勢に出あひ、章邯を打棄て章平と三十餘合ぞ戰ひける。章平敢て戰を好ず。章邯を扶けて、曲陽の小路より走りけるに、秦の大將周熊、王官二人一軍を引て來り救ひければ、英布も此より引回し、桓楚と一手に成て項羽にぞ見えける。趙王歇秦の勢の退きたるを見て、窮鳥の籠を出たる思をなし、大將張耳、陳餘に命じて、城外に酒宴を設て楚の人馬を勞ひ、項羽を城中へ迎んと云に、項羽申けるは、未だ城に入べからず、章邯が戰ひ破れたるに乘て、直ちに秦の地に攻入、こと〴〵く根を絶べし、若城中に入りて日を送らば、章邯又氣力を直して急に破り難からんとて、季布、鍾離昧二人に二十萬の勢を付て、楚の城外に陣を取せ、生捕たる秦の大將王離、渉間を斬て軍神を祭り、自ら三十萬騎にて又章邯を追かくる。

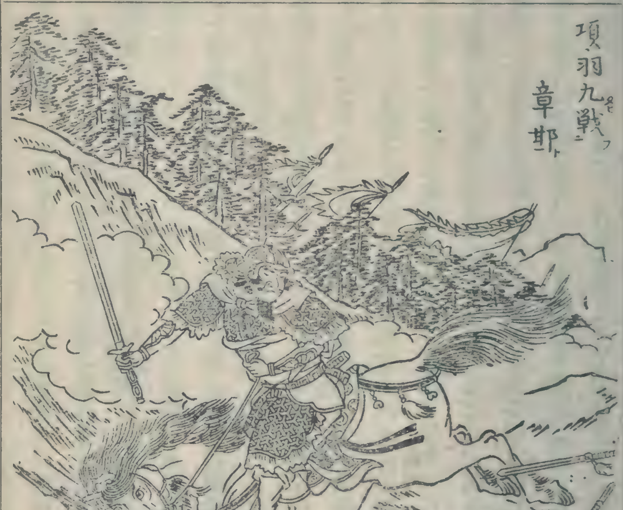
○趙高指㆑鹿爲㆑馬

去ほどに項羽三十萬の精兵を率して、章邯を追て進みければ、路々の百姓簞食壺漿して迎へ

却て二手の精兵を敵の伏勢の來るべき路に置て悉く打やぶり、勝に乘て三方より追討にし玉はば、秦の勢一人も生のこる者あらじ。項羽然るべしと喜び、密に英布を召て、一萬餘騎を授て南の路より向はせ、桓楚に一萬餘騎を付て北の路より向はせ、自ら三萬餘騎にて中路より推よせける。章邯は秦の敗軍を集め、李遇、韓章等と議して申けるは、楚の勢連日勝にのる、今夜も必ず夜軍をせんと覺るぞ、李遇は五千餘騎にて南の坡の下に埋伏し、韓章は五千餘騎にて北の坡の下に埋伏し、楚の勢來らばその後を取きれ、我は司馬欣等と本陣の後に伏せて、前後三方より取卷て、忽ち項羽を擒にせんとて、今や來ると待かけたり。去程に其夜の初更の比、楚の勢みな枚を啣み、南北に分れて打起ければ、項羽自ら三萬の精兵を率して中路より秦の本陣へ推よせ、行こと五十里ばかりにして、鼓を鳴し鑼を敲き夥しく鐵砲を放て喊の聲を揚ければ、秦の兵すはや敵の寄たるはとて、大將章邯本陣の後より打て出る所に、李遇、韓章散々に成て逃かへり、南北の伏勢みな楚の勢に破られたりと告ければ、章邯色を失て、先項羽を支んとするに、限なき楚の兵南北より責來りしかば、秦の軍大に亂れて陣屋を棄て、我先にと逃走る。項羽南北の御方勝たるを見て、急に人馬を驅て入れ亂て戰ひ、終夜二十里ばかり追蒐て、趙の城下まで來りければ、城の内にも鼓の聲喊の聲を聞て、項羽が救の來れるを知り、大將張耳、

うて勝負いまだ分れず。時に項羽が大勢馳來り、喚き叫で蒐たりければ、章邯支ること能はず、散々に成て已に危き所に、一手の勢きたり救ふ。是秦の大將孟防なり。楚の軍いよ〱進んで火を散して戰ひ、桓楚馬を交へて孟防を打取ければ、章邯膽を冷して西を指て敗北す。桓楚これを見てよき敵と思ひければ、飛が如くに赶かくる。章邯は人馬共に飢疲れて戰ふべき力なく、跡をも見ずして走けるが、小高き坡を超るとて、倒て地上に落ければ、桓楚槍をのべて突んとする所へ、山の間より一手の勢きたり救ふ、是乃ち秦の大將韓章が勢なり。桓楚を支へて戰ひ、章邯を扶けて回んとするに、早于英が兵馳きたり、韓章と入亂れて戰うたり。暫ありて項羽又後陣の大勢を引て攻かゝりければ、韓章夥しく討れて逃わしり、秦の大將李遇が一萬餘騎にて叩たる陣中へ入て一手になる。項羽つゞいて追蒐けるが、秦の軍勢みな要害に陣を取たるを見て、輕々しくは進まず。暫く人馬の息を休めて兵粮をつかひける時に、夕陽西に傾ければ、范增ひそかに項羽に向て申けるは、秦の兵みな高陽の坡の下に陣をとる、推量するに彼等今夜楚の勢の夜討せんことを恐れて、本陣には人衆を措ず、悉く外に伏て寄來る者を後より包で討んと計るべし、若敵の計に就て計を用ひば、章邯を擒にせん。項羽が曰、先生いかなる計かある。范增が曰、將軍自ら兵を引て秦の本陣に向ひ、鼓を鳴し鑼を打て攻かゝる體をなし、

楚の陣と三十里へだてゝ屯割しければ、蘇角申けるは、楚の勢終日の戰に勝傲て人馬疲れたれば、今夜は定めて油斷すべし、某騎馬の精兵をすぐりて、東の路より楚の陣の後へ廻らん、將軍は西の路より推寄、兩方より夾んで攻玉はゞ、首尾相顧ることを得ずして悉く亂るべし。是兵法の攻レ所レ不レ守なり、全く勝ことを得ずとも、其鋭氣を挫ぐべし。章邯この義げにもとて、蘇角に一萬餘騎を授けて東西に分れて推よする。蘇角は自ら神妙の計なりと思ひ、直ちに楚の陣に到て窺ひ見れば、立たる旗幟も齊からずして、轅門をも閉たりしかば、しすましたりと勇み喜び、咄と喚て蒐入けるに、人ひとりも無りければ、驚て急に出んとする時、一聲の鐵砲ひゞきて四方より火をかけ、喊の聲地に震ふ。扨は敵の用心あるぞとて、西の路に走りければ、左より桓楚、于英右より雍齒、丁公四方へ兵を分て餘さじと取こむる。蘇角大半討れて圍を出ること能はず、東の山路を望で走りければ、鼓角天に喧しく喊の聲地を動して、一人の大將かけ出、無謀の匹夫楚の項羽を知ずやと云まゝに、馬を交へて只一槍に突殺す。章邯は鼓の聲喊の聲を聞て、蘇角が討れたるをも知ず。兵を引て進む所に、忽然として鼓の聲ひゞき、楚の勢潮の湧が如くに攻きたる。秦の兵みだれ騒で、夜すでに明方に及ければ、我さきにと逃走る。章邯は御方を落さん爲に、自ら後陣に支て引けるを、英布一軍を率して打てかゝり、五十餘合戰


項羽九タヒ戰フニ
章邯ト

騎たる馬は烏騅の駿足なれば、たゞ一騎飛が如くに進んだり。章邯追手の續ざるを見て、踏止りて項羽と戰ひけるが、叶はずして逃んとする所へ、秦の大將渉間一軍を引て馳きたりければ、項羽直に馬を交へて渉間と十合あまり戰ひ、槍を住て腰より鐵の鞭を取出し、渉間が頭を打碎んとするに、渉間急に躱んとしけるが、左の肩を打れて馬より落。章邯これを見て、大將宋文を出して項羽を防せ、渉間を救んとする所に、楚の勢すでに馳きたり、英布、桓楚等眞先に進んで戰ひければ、秦の兵夥しく討れて、章邯這々に逃のびたり。時に日已に晩に及ければ、項羽敵の伏勢あらんことを恐れて肯て追ず、金を鳴して軍を收め、陣屋を構て休みけるを、范增申けるは、將軍深く敵の地に入玉ふ、日すでに晩たれば、敵の夜討を用心し玉へ。項羽が曰、軍師の言よくわが機に合へり、手分を定て相待べし。范增乃ち小山の口に陣屋を造て諸軍を宿し、態と本陣の内には柴を多く積、外に旗幟を立おき、桓楚、于英、丁公、雍齒四人を召て曰、御邊みな手勢を率して山の間に埋伏し、本陣に火の掛るを見ば、四方より打て出て敵の囘る路を塞げ。四人命を受て出ければ、又英布を召て申けるは、御邊は一軍を西の路に伏て、秦の後陣の勢つゞかば路を遮て追退けよとて、手分こと〴〵く定りければ、項羽と本陣に在て敵の來るを待。去ほどに章邯は敗軍を集て、這々蘇角が構たる陣に入、司馬欣、董翳等を待合せて

○項羽九戰章邯

司馬欣、董翳等のこり少に討れ章邯に見えて、英布が武勇あたり難きに、項羽兵を引て已に河を渡れり、急に備をなし玉へと云ける所に、追々早馬きたり。項羽河を渡て釜を破舟を沈め、命を棄て戰はんとて、勢甚だ盛なりと告ければ、章邯いそぎ秦の大將王離、涉間、蘇角、孟防、韓章、李遇、章平、周熊、王官等を召て申けるは、項羽が勇三軍に秀たれば、中々力を以ては戰ひがたし、汝等各一軍を率し、九箇處に分れて陣をとり、我自ら彼と戰ふを見ば、入かへ入かへ攻合せて、楚の勢の深く重地に入を候ひ、九箇處の勢を一手になし、引包んで打やぶるべしとて、手分を定めて待蒐たるに、項羽すでに寄きたり、章邯が眞先に進たるを見て、牙を咬で申けるは、逆賊汝わが季父を殺したれば、此不共戴天の仇なりとて、槍を撚て突てかゝる。章邯迎へて五十餘合戰ひ、叶はずして五里ばかり走りければ、王離一軍を引て打て出、項羽と二十餘合ぞ戰うたる。項羽槍を止めて王離が突んとするを、急に身を避て馬をかけよせ、鎧の上帶を摑で地に投ければ、楚の勢簇り寄て王離を縛て回りけり。章邯これに怕れ馬を打て走りければ、項羽大音あげて、逆賊いづくまで逃るぞと呼はり、兵を驅て追かくるに、

欣、董翳馬を雙て打て出たり。英布斧を提て、火を散して戰ふ所に、俄に秦の軍亂れ騒で、思も寄ぬ後より、項羽兵を驅て攻かゝる。司馬欣、董翳大に驚き、英布を打すてゝ走りけるに、河南の陣屋はすでに楚の兵に奪はれ、河より北へ走て散々にぞ成にける。項羽全く利を得て、敵の棄たる輜重數を知ず取あつめ、つひに河を渡て北の岸に到り、胡牀に腰をかけ、手に劍を取りて後陣の渡り畢を待、その後こと〴〵く舟を沈め、釜甑を碎き廬舍を燒すてゝ、軍中に三日が間の粮を持せ、下知を傳へて申けるは、秦の軍久く趙を圍で、人馬みな疲れたり、汝等一足も前へ進んで、急々に打やぶれ、退く心あるべからず。諸軍これを聞て、皆一同してねがはくは將軍に從て命を限に戰はんと云ければ、項羽大に喜び鼓譟して攻かゝる。時に范增ひそかに鍾離昧に向て申けるは、項將軍急に章邯を破らん爲に、釜を破舟を沈め、僅に三日の粮を持玉ふ、若三日の内に勝ことを得ずんば、人馬必ず飢疲ん、我思ふに密に人を遣して、後陣の兵粮を早く河南の岸へ運しめん、是もし三日の内に勝ことを得ずんば、河南へ退て人馬を休めん爲なり。鍾離昧嘆服して、先生まことに遠き慮ありと云ければ、范增ひそかに人を遣して、後陣の兵粮を催促しけり。

だ乏きに、日夜酒宴して娯をなし玉ふは何事ぞ、秦の兵は強して趙の兵は弱し、弱を以て強に敵す、將軍なにを以て秦の敝に乘ことを得ん、且武信君新に亡びて、懷王日夜心を安んじ玉はず、今楚の兵を悉く將軍に授け王ふは、專ら趙を救ん爲ばかりに非、實は秦を破て前日の恨を雪がん爲なり、國家の安危この一擧にあり、然るに將軍いま士卒を恤まず、終日私に酒宴し玉ふは、是社稷の臣にあらずと、色を正して申けれども、宋義更に用ひざりしかば、項羽深く恨み、次の日自ら劍を拔て進み出、大音あげて申けるは、宋義ひそかに宋襄を齊の國へつかはし、共に謀反の企をなし、空く此に日を送りて、齊の兵を待て楚を取んとす、我ひそかに懷王の旨を承り、宋義を誅して三軍に諭すとて、宋義が逃んとするを、髻を掫んで頸を刎ければ、諸將みな地に拜伏して申けるは、首め楚の後を立しは將軍の家なり、將軍いまこの逆臣を誅し玉ふ、誰か從はざらんとて、項羽を推て假に上將軍と號し、急に追手を遣して宋襄を齊の境にて斬殺させ、桓楚を使として事の樣を懷王に奏せしむ。懷王この由を聞て、鍾離昧に節を持せて使とし、項羽を大將軍に封ぜられしかば、項羽恩を謝して勇み喜び、英布を先陣の大將とし、精兵二萬餘騎を附、河を渡て秦の陣に攻かゝらしむ。章邯これを聞、いそぎ司馬欣、董翳に兵を分あたへ、南の岸に陣を取て防がしめんとするに、英布が勢急に推寄ければ、司馬

を圍で日久し、今氣たゆみ志惰て、人みな戰ふ心なし、我此處に屯して、坐ら其體を窺ひ、敝に乘て一たび討ば、章邯必ず擒とならんとて、徒に四十六日を過しければ、項羽申けるは、秦の大軍城を圍で、趙の士卒死する者大半に及べり、我すでに此處へ來り、急に進んで其外を討ば、趙の勢内より應ぜん、内外夾んで秦を攻ば、章邯いかゞして敵することを得ん、箇樣に空く日を送らば、城中いよ〳〵弱りて悔るとも及ぶまじ。宋義が曰、いや〳〵搏レ牛之虻不レ可三以破二蟣一、これ志大なるに在て、小なるに在ざる也、たとひ章邯戰ひ勝たりとも、其勢みな疲れ弱らん、我却て其敝に乘ば、一戰して必ず破らん、若章邯かたざる時は、我勢にのりて西に向はんに、又やぶらんこと必せり、此わが兵勢せずして坐ら勝負を見の計なり、馬にのり武具を執ては、我御邊に及ばずと云ども、坐ら策を運すことは、御邊又われに及ばじとて、下知を傳へて申けるは、縱ひ三軍猛きこと如レ虎、狼ること如レ羊、貪ること如レ狼と云ども、強して號令に從はざる者は斬て棄んとて、密に嫡子宋襄を齊の國へ遣して、齊王の宰相と成んことを望ましめ、日夜たゞ酒を飲で徒にぞ暮しける。時に寒氣甚して大雨數日ふり續き、士卒飢凍て怨る者多かりければ、項羽又宋義に見え、御方の將士勇猛にして急に進んで秦を伐んとす、然るに將軍この處に久く留り、近年飢饉打つゞいて、人民みな食に飽ず、況や陣中の兵粮甚

章邯楚の軍を破て後、直ちに河を渡て趙の國へ攻入ければ、趙王歇、大將張耳、陳餘二人に兵を授け、打て出て戰はしむるに、秦の大軍勢大にして潮の如に進む。張耳、陳餘防こと能はず、終夜にげ走て鉅鹿の城に栖こもり、早馬を立て項羽に救を求む。此時項羽は陳留に在て、宋義范增と議して申けるは、秦の軍趙を圍で勢甚盛なり、御方は武信君の喪に遭て兵みな氣を失ふ、懷王ひとり盱眙を守玉ひて、如何なる變あらんも料がたし、不如都を彭城に移して、別に遠き計を運さんとて、直ちに盱眙に囘りて、事の樣を奏しければ、懷王武信君が討れたるを聞て、聲を放て哭玉ふ。項羽申けるは、武信君新に亡びて、御方の鋭氣すでに折たり、今章邯が大軍鉅鹿を圍で、趙の國すでに破んとす、趙もし破れば、章邯直ちに此處へ攻來ん、不如早く兵を調へて打て出、我王は都を彭城に移して、掎角の勢を張玉へと云ども果ざる所に、趙王早馬を馳て救ひを求むと報ず。懷王いそぎ其使を召て、事の樣を問玉ふに、使答へて曰、秦の兵三十萬鉅鹿を圍で一月に及ぶ、趙の軍中粮盡て人馬死するもの數を知ず、事すでに急なり、大王憐で救ひ玉へと云ければ、懷王大に驚き、即時に宋義を大將軍とし、項羽を副將軍とし、范增を軍師とし、二十萬の勢を發して趙の國を救はせらる。宋義命を受て打立、すでに安陽に到て陣をとり、兵を按へて不動。いかなる野心か發りけん、諸將に向て申しけるは、秦の兵趙

勢の亂れ立たる習なれば、互に自ら踐踏して、討るゝ者數を知ず、我先にと逃失て、了に陣屋を棄て走りけり。秦の兵勝にのりて殺して、夜の明方に至り、外黄より陳留に入て陣をとり、勢又大に振ふ。沛公この由を聞て、急に來て救んとするに、楚の敗軍ちり〳〵に成ければ、力及ず、宋義等と雍丘に退き、項羽に對面して武信君が討れたる由を告るに、項羽大に叫で地に倒れ、われ幼より父を失ひ、叔父の養によりて人となり、兵法を習て天下の大義を思立しに、功業いまだ成ず、中道にして別る、我心碎るが如し、今より如何すべきとて、聲を放て哭けるを、范增申けるは、國の爲に身を捐るは、臣子の大節盡る也、武信君の命數如此と云へども楚の大業すでに成れり、天下風を望て附屬ふ者五十萬に餘れり、將軍よく其志を繼で、秦を滅し楚を興し、武信君を追封して、廟を立て祭り玉ふ時は、將軍の大孝畢なり、何ぞ女童の如に泣悲ことをせん。項羽これを聞て謝して申しけるは、先生の教われ謹で從んとて、兵を率して定陶に到り、宋義、沛公と會合して、一處に陣を屯し、孝を掛て武信君項梁が屍を定陶に葬り、此より兵を進めて陳留へ赴けり。

○項羽殺二宋義一救レ趙

て、敵を防の計は大なり、將軍よく慮り玉へ。項梁大に怒て申けるは、我會稽に兵を起してより向ところ敵する者なし、量るに此ほどの小城を攻落んに、何の難きこと有ん、章邯數箇度の戰に人馬大半討れて、我名を聞ても膽を冷し魂を失ふ、今なんぞ城を出て我陣を劫こと有べき、汝無用の下輩、いはれなきに計を申て人の心を迷す、早々に退けとて、韓信を逐出しければ、卿子冠軍宋義急に諫て申けるは、戰勝て將驕り卒惰る者は必ずやぶる、今御方の勢久しく城下に在て氣たゆみ心惰る、秦の兵圍れて城中に在と云ども、數日人馬の鋭氣を養ひ、殊に章邯は秦の名將にして善用レ兵、ねがはくは韓信が言を棄玉ふな。項梁いよ〳〵不レ聽、思ふに章邯なに程の事をか仕出さんとて、酒を飲で娛居ければ、手下の勢も怠り荒で用心せず。章邯は緩兵の計を用ひて飽まで敵の心を驕らせ、今は好時分ぞと思ひければ、或夜精兵をすぐりて皆口に枚を啣ませ、二手に分て忍やかに城を出、楚の陣を窺ひ見れば、燒棄たる篝火かすかにして上下よく睡入て出合人も見えず、すはやとて合圖の鐵砲を響すほどこそあれ、金を鳴し鼓を打て、大軍一度に打て入ば、楚の陣中上を下へ返して、槍よ刀よと騷動す。項梁は酒に醉て起ること能はざるを、諸人たすけて轅門まで出〻いまだ馬に乘ざりければ、秦の大將孫勝と云ものに一刀に斬れたり。宋義英布等走り廻りて、敵は小勢ぞ、さわぐこと勿れと禁れども、大

て城陽に住り玉ふ。英布は章邯を追て定陶に到りければ秦の兵すでに城中へ入、固く守て出あはず。英布城の麓に陣を取て日夜戰を催せども、章邯更に出ざりければ、徒に日を送ところに、武信君項梁後陣の大勢を率して來れり。英布迎へ見て右の趣を語るに、項梁申けるは、秦の兵勢窮り力竭て城中へ逃こもる、救の勢の來らぬ先に、速に攻落べし、何ぞ徒に日を送らん。英布が曰、章邯一戰に負たりと云ども、人馬元より雄壯なれば、恐くは急に破り難からん。項梁叱て申けるは、汝大將として謀なく、此程の城を攻んとて、何とて空く日を送れる、我大軍すでに來れり、無用の舌を動して御方の氣を隕こと勿とて、諸軍を下知して夥しく雲梯をこしらへ、喊を作り鼓を打て息をも繼せず競ひ進むに、城の中より鐵砲を飛し火箭を發こと雨の如なれば、梯こと〳〵く火もえ付きて、寄手みな慌翔ところを、四方の矢倉より大石大木を投かけたりしかば、楚の軍死する者數を知ず。項梁なほ退ず、又數百輛の衝車をこしらへ、鼓譟して攻けるに、章邯鐵の鎚に長き鎖をつけ、兵に命じて投打せければ、衝車みな打碎かれて進こと能はず。項梁元より性躁き者なれば、城の落ざるを見て、累に怒を發しけるを、執戟郎韓信諫て申けるは、大軍久く城下に屯す、恐くは秦の兵御方の怠れるを窺て、密に夜討すること有ん、堅く御用心なくんば、反て禍に逢玉ふべし、今城を攻るの計は小にし

英三人に五千餘騎を授て項羽が力を扶け、秦の勢を散々に蒐やぶる。章邯夥しく討れて五十里引て陣をとり、諸大將に向て申けるは、楚の軍いきほひ盛にして戰を交がたし、我まさに緩兵の計を用ひて、彼が將驕り兵惰て油斷するを伐ん、然る時は一戰して功を成ん、今若力を以て項羽と戰はゞ、人のみ死して益あるまじとて、固く守て出ざりけり。項羽は思ふ儘に捷軍して本陣に回り、項梁に見えて合戰の樣を語り、明日大軍を二手にわけ、秦の陣を打やぶらんと云ければ、項梁大に喜び、章邯は虚く名のみ高けれども、年老力乏して物の用に立がたし、我明日こと〴〵く打取んとて、酒宴を設て諸將と娯をなし、歌を謠て醉を盡し、次の日項羽を中軍とし、英布を右にそなへ、沛公劉邦を左にそなへ、大軍鼓を鳴し喊を造て推寄ければ、章邯一支も支ず陣屋を捐て逃わしる。楚の勢いよ〳〵勢に乘てすき間もなく追蒐ければ、秦の軍あらけて三方へ走り、章邯は定陶へと志し、司馬欣、董翳は濮陽へ走り、李由は雍丘へ走る。楚の勢これを見て三手に分れて趕かけ、項羽自ら雍丘へ向て李由に追つき、戰三合ならざるに、一鎗に刺殺す。沛公は司馬欣、董翳を追て城陽に到り、一日一夜三百里の路を馳ければ、蕭何諫て申けるは、古より窮寇莫追と云り、若敵の伏勢ありて、思ひ寄ず御方の疲たるを討ば、如何して戰ふことを得ん、不如この處に住て其變を御覽候へ。沛公げにもとて暫く兵を屯し

破て魏の國を平げ、此處へ攻來んとす、如何計を用べきぞ。項梁が曰、臣自ら打向て先章邯を誅し、直ちに秦を平ぐべしとて、項羽范增等と二十萬の勢を率し東阿の麓に推よせ、あはひ三十里隔て陣をとり、項羽一陣に馬をすゝめて、秦の大將章邯に遇て申べき事ありと呼はりければ、章邯諸の猛將を左右に備へ、門旗の下に馬を出す。項羽大音あげて申けるは、秦の二世無道にして趙高惡を肆にし、汝が輩黨を結で民を害す、此魚の釜の中に遊で其死を知ざるに似たり、剩今兵を發して關を出る、眞に笑つべき事なり、早く降らば一命を扶くべし。章邯が曰、われ上國の大兵を率して所レ向敵する者なし、汝は乃ち湖南の鼠賊、妄に楚の後を立て盜をなす、何ぞ天人の應と爲に足ん。項羽きゝもあへず鎗を撚て突てかゝれば、章邯馬を交て三十餘合戰ひ、叶はずして引退く。項羽兵を驅て逃さじと赶かくる所に、秦の大將李由路を攔て戰んとす。項羽眼を怒して、汝何者ぞと叫びければ、李由ふるひ怕れて、乘たる馬も不レ覺、二十歩ばかりしさりけり。項羽烏錐の龍馬に鞭を加へ、急に趕かけ鎗をのべて、李由が背を胷板へ已に突洞さんとする所へ、司馬欣、董翳二騎あわたゞ布馳きたり、李由を推隔て二十餘合ぞ戰ひける。項羽事ともせず威を振て戰ひければ、司馬欣、董翳つひに馬を打て逃かへる。項羽兵を下知して追打にすゝみければ、武信君項梁重地に入て失あらんことを怕れ、又英布、桓楚、于

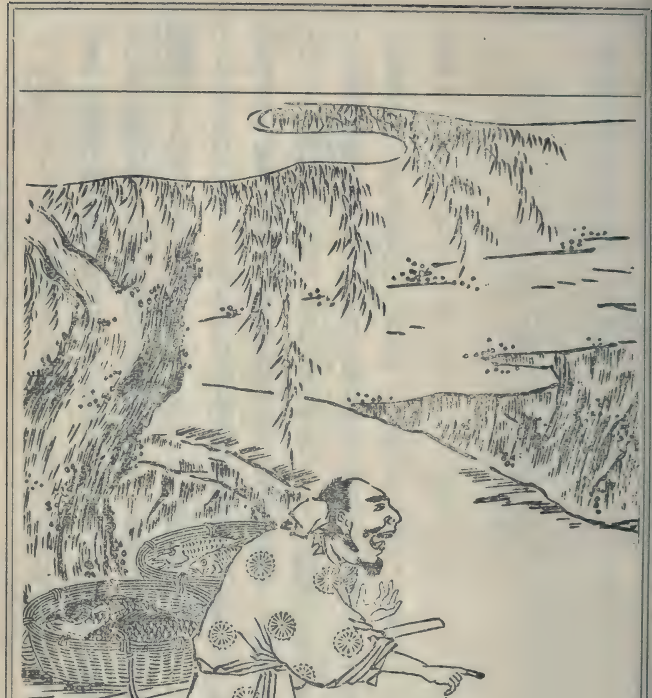
先大將項明に三萬餘騎を附て魏を救しむ。章邯救の來るを見て、司馬欣に齊を防せ、董翳に楚を防せ、自ら後陣にぞ續きける。齊王田儋兵を進めて先近付ければ、司馬欣兵を兩旁の山際に伏置、自ら千餘騎を率して迎へ戰ふ。齊の兵その小勢なるを欺き、勇み傲りて進ければ、司馬欣いつはり負て逃わしり、思ふまゝに敵の馬の足を疲らかし、急に取て回せば、俄に金鼓を鳴して伏の勢兩旁より起り、箭を放つこと雨よりも繁し。齊王大に驚き、急に退かんとしけるが、流矢に中りて馬より落、つひに司馬欣に斬れければ、齊の兵みな散々にぞ成にける。楚の大將項明も已に魏を救んとて近付けるに、秦の大將董翳半途に出て待かけ、時うつるまで戰ひしに、秦の兵みな遠路に疲て墓々しく勇ず、散々に蒐やぶられて三十里引退く。項明勝にのりて追かくる所に、章邯後陣の大勢を引きて出來り、李由を眞先に進めて董翳を救ふ。楚の勢あまりに長追して、一日一夜戰ひ疲れ、秦の生手に揉立られて、大將項明すでに李由に斬て落されければ、楚の三萬餘騎のこり少に討れて、右往左往に散亂せり。浩りしかば秦の大軍いよ〳〵勝傲りて、潮の湧が如く魏の國へ攻よする。魏王咎救の敗れたる由を聞、右ては孤城まもり難からんとて、西の門より楚國を指て走りければ、章邯つひに魏を平げて、東阿と云ところに陣をとる。此由楚國へ聞えければ、懷王いそぎ武信君項梁を召て議せられけるは、秦の大軍兩國の救を

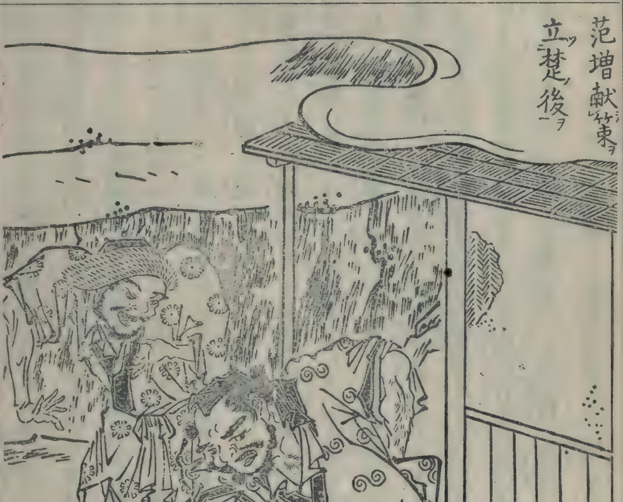
通俗漢楚軍談　巻之二

○章邯切レ寨破ニ項梁一

項梁楚の懐王を取立、盱眙に都を立て、劉邦、陳嬰と會合し、威風遠近に振て、秦を攻んと企る由咸陽へ聞えければ、秦の丞相趙高大に驚き、大將軍章邯を召て申けるは、近年盗賊諸國に蜂起して百姓を掠惱と云ども、さまでの事は有まじと打措しに、今楚の大將項梁盱眙に屯して諸方の勢を合せ、勢に乘て攻上んとす、諸國の早馬急を告ること已時なし、征伐もし延引せば由々しき大事に及ん、御邊速に馳向て盡く誅滅せよ。章邯申けるは、某すでに天子に奏して打向んと存ずる所に、今丞相の命を蒙る、古より兵貴ニ神速一と云り、早々に發向して捷軍を報ぜんとて、李斯が嫡子李由竝に司馬欣、董翳と云三人の猛將を伴ひ、三十萬の勢を率して函谷關より出、六國の子孫時を得て、皆國々に蜂起すと聞、先魏の國を平げて、次に楚を伐んとて、魏の境へ推よする。魏王咎小勢にて出で戰ふこと能はず、堅く要害を守て齊楚の兩國へ救を求む。齊王田儋これを聞て、兵を引て打出ければ、楚の懐王も武信君項梁と相議し、

に、漂母怒て、大丈夫の士自ら一飯を得の助もなし、我哀んで食を進む、何ぞ報を望べきと申けり。韓信釣たる魚を市に携へ行て售んとするに、腕立する少者共これを辱めて申けるは、汝はいつも劍を帶て此へ來るが、何の用に立んと思ふぞ、汝もし勇あらば劍を拔て我を刺ころせ、刺殺すこと能はずんば、我胯の下をくゞれ。韓信兎角の問答にも及ばず、頭を俛て胯の間よりくゞり出ければ、市の人みな笑て、臆病者なりとぞ嘲ける。然れども許負と云人よく人相を見けるが、韓信に向て、君は王侯の相あり、當に天下の元戎となりて、富貴心の任なるべしと云けるを、韓信笑て、我一日もの食べき資もなし、何ぞ富貴を望べきとぞ申ける。此時楚に仕てわづかに執戟郎となり、常に不足の意ありけるが、後に漢に仕て大將軍に任ぜらる。漢の天下を定めしは、專ら此人の力なり。




范増献策東
立楚後
韓信

これ萬全の計ならん。項羽この義可レ然とて、此趣を武信君に告、懐王に奏して、大軍盱眙を指て進むに、漸く淮河に近付ければ、向より一手の勢出きたり、旌旗の動ところ、紅の光あらはれ、劍戟の閃く時、紫の氣生ず。范増のぞみ見て大に驚き、只今きたる勢は尋常にあらず、其中必ず天運を得たる人あらんと云ける所に、一人馬を躍せて出來りしかば、之を見るに、堯眉舜目隆準龍顔堂々として帝王の氣あり。范増頭を低て思けるは、此人こそ眞に天子となるべき運に當れり、我誤て楚に仕たりと、後悔やゝ久して、誰ぞと問ば沛公劉邦なりと申す。芒碭山に白蛇を斬てより、豐西にて十萬の勢を聚め、項梁が楚の後を立たる由を聞、夏侯嬰、樊噲等と力を援ん爲に來れる也。武信君大に喜び、共に淮河を超て盱眙に到り、陳嬰と會合して都をかまへ、武信君は泗水の邊に出て大軍を屯剳す。此時に淮陰の韓信と云もの來て、用ひられん事を願ひければ、武信君その容の瘦衰たるを見て不レ用けるを、范増累りに勸て、此人外は如レ此なれども中に深き智謀あり、已に來て見たれば、卽ち留て用玉へ、もし棄玉ふ時は、求レ賢の路を塞なりと云けるゆゑに、執戟郎官に封じて韓信を住置けり。此より前に韓信淮下に在て魚を釣けるが、貧にして終日不レ食、傍に漂母とて絮を洗ふ女あり。其飢たる色を見て、憐て一飯を與ければ、韓信その志を感じて、我のちに富貴にならば、重く此恩を謝せんと云

けるが、再三に及て、膚に貼たる舊き衫を取出し、此を見て知玉へと云。鍾離味よく〳〵見るに、襟の上に文字ありけるが、甚だ分明ならざりしかば、日影に向て伺ひ見るに、楚懷王嫡孫米心、楚太子夫人衛氏と云字ありて、其外國寶の記錄と覺しき書付ありければ、扨は疑ふ所なしとて、拜伏して君臣の禮を行ひ、王社の長と共に送りて淮西へ回り、事の子細を告ければ、項梁斜ならず喜び、吉日を擇で、米心を立て君とし、懷王と號す。此は楚の後を立たることを隱なく人に知しめん爲に、祖父の謚を以て號とせり、義帝と申は是なり。其のち母の衛氏を王太后と尊號し、項梁自ら武信君と稱して、項羽を大司馬副將軍とし、范增を軍師とし、季布、鍾離味を都騎とし、英布を偏將軍とし、桓楚、于英を散騎とし、以下の諸將こと〴〵く封賞ありて、酒宴を設て喜をのべ、王社の長には黃金五十兩、綵帛一束を賜て回しける。浩りしかば楚の勢日々に盛にして、國々の諸侯望風きたり順ふ。楚國の大將に宋義と云者、江下に蜂起して兵を聚けるが、項梁が楚の後を立たると聞て、三萬餘騎にて來り加はる。項梁對面して懷王に見えしめ、封じて卿子冠軍と號し、秦を伐の計を議するに、宋義申けるは、淮西は楚の地なれども分內狹して都を立がたし、今楚の大將陳嬰と云もの兵を屯して盱眙にあり、此處へ行て一手になり、盱眙の城を要害に構て根本とし、其後西に向て秦を伐ば、攻る時は可レ破退く時は可レ守、

多の童に打れても、更に慍れる色もなし。鍾離昧これは如何さま怪き者なりとて、密に童子を召て、何故に右は打るゝぞと問に、答て申けるは、彼等は皆この地に父母ある者共なり、我は獨り孤にして王社の長が家の奴なれば、常々に彼等に侮らる、我向に彼等に向て、汝等は父母あれども皆百姓の子なり、我は孤にして人に從ふ奴なれども本は王侯の子孫なりと云しを、彼等怒て如ㇾ此に打擲せり。鍾離昧が曰、汝王侯の子孫と云は、先祖の名字いかなる人ぞ。童子申けるは、我幼より此處にあれば、王侯の子孫とは聞しかども先祖の名を知ず。鍾離昧再三責て問ければ、童子急に逃去んとするを、抱き止めて低語けるは、汝が容よの常ならず、後に必ず貴からん、今もし實を露して我に告ば、我乃ち汝を以て君とせん。童子やむことを得ずして申けるは、我今年十三歳、この處へ來て已に八年に及べり、嘗て老母の申せしは、汝は楚の懷王の嫡孫なりと、此故に王侯の子孫なるを知り。鍾離昧かぎりなく喜び、急ぎ童子を扶て馬にのせ、王社の長が家に行て、童子の母を出せと云ければ、王社の長その故を知ず、驚き惶て申けるは、某は山村の農夫、なんの國法に背ことありて如ㇾ此に罪せらるゝ、大人幸に宥し玉へ。鍾離昧が曰、汝を罪せん爲にあらず、只速に童子の母を出せ。王社の長ふるひ戰き、老母の衣服を更させ、引て草堂に出ければ、鍾離昧ちかく寄て、童子の來歷を問に、老母初の間は隱

るがる布すゝむべからずと云ければ、范增申けるは、陳渉は貪利小人なれば、共に事を議するに足ず、今一戰に滅たるは、六國の後を立て君とせず、自ら王位に卽て、急に富貴を享んことを思て、遠大の計なき故なり、將軍義兵を興し玉ひて四方の民きたり服する者は、將軍世々楚の大將なれば、必ず楚王の子孫を取立て君とし、秦の無道を誅し玉はんことを思ふ故なり、某よく料に、早く楚王の子孫を尋ねて君とし、人望に從ひ玉へ、然る時は天下みな喜で、項將軍は自ら己が爲にせず、楚の後を立て秦を滅し、六國の仇を報ぜん爲なりと云ん、如此なる時は、此天下の大義なり、人の心悅服して諸侯爭て來り從ん。項梁この義よく我心に合へりとて、范增を尊で軍師とし、四方へ人を配て楚王の子孫を尋させける。されども楚國は秦の始皇に滅されてより、子孫無遺國脈すでに絕て、尋訪べき跡も無れば、空く囘りて其趣を報ず。項梁重て鍾離昧に命じて緊く尋しむるに、鍾離昧心に思ひけるは、楚國すでに秦に滅されたれば、子孫たまく遺る者ありとも、遠く逃れ藏れて必ず城市の中には在べからず、定めて田夫野人となりて名を藏し、深く忍でぞ在んとて、山林民屋のこる所なく尋ぬれども、是ぞと思ふ其ゆかりもなし。餘りに求かねて、或日南淮の浦へ出たるに、多くの童あつまりて羊を牧けるが、一人の童子を赶蒐て散々に打擲す。この童子容貌つねならず、生れつき淸秀なりけるが、

して禮をなさしむるに、先生幸に降臨を許さる、願は心を盡して今より我不及を匡し玉へ。范增再拜して曰、將軍は世々楚を扶け、今この義兵を起して無道を誅す、天下誰か服せざらん、某は區々の老叟、料に何の才德ありてか此重禮を蒙るや、願くは犬馬の勞を辭せず、力を盡して王業を扶け、知遇の恩を報ずべし。項梁喜ぶこと限なく、項羽と共に天下の事を議せしむるに、范增が機謀まことに鬼神不測の妙ありければ、上下みな敬ひ尊びけり。其のち人を遣して陳涉が消息を聞しむるに、陳涉兵を率て陳の國を攻とり、勢漸く震ければ、陳王の位に即て大業を圖玉へと勸る者多し。張耳陳餘と云る二人の大將これを諫て、將軍萬死の計をなして天下の爲に暴惡を除んとす、然るに今陳の國を取て忽ち王位に卽玉ふ時は、此天下に私を示なり、只ねがはくは速に兵を率して西に向ひ、六國の後を立て秦の爲に敵を多くし玉へ、敵多き時は秦の勢わかる、將軍その虛に乘玉はゞ、自ら王業を成玉ふべしと云けれども、陳涉つひに不聽、自ら陳王と號して彌兵を催ければ、二世皇帝いそぎ秦の將軍章邯を大將とし、司馬欣、董翳を副將とし、打向て追討させらるゝに、陳涉一戰に利を失て散々に落行けるを、手下の大將莊賈と云もの、私に殺して秦に降れりと告ければ、項梁大に驚き、我諸侯を糾し合せて、共に陳涉を助け、力を合せて秦を伐んと思ひしに、何ぞ料ん忽ちに滅んとは、我か

孫呉が機を藏し、年すでに七十に及て身を蓬蒿の中に棲しめ、草木と共に朽果んとし玉ふ、是太公望が文王に遇ざるが如し、豈不レ惜や、今項梁は楚の項燕が後、文武並全く、義に仗て兵を起し、四方響の如に應ず、久く先生の德を戀て、某に命じて幣禮を致しむ、願くは先生辭することなく、平生の大才を展て天下の塗炭を救玉へ。范增これを聞て、心の内に楚の天運を算見て、其後に答をなさんと思ひ、いまだ輕々しく幣禮を受ざりければ、季布地に跪て累りに懇望す。范增申けるは、我久く二世皇帝の殘暴にして民を惱を知て、常にこの無道を誅する者なきを恨む、御邊いま項將軍の命を受、遠く來て我を召、この機よく我意に合へり、御邊しばらく退け、明日志を決して幣禮を受ん。季布拜伏して申けるは、某幸に先生に見えて千金の玉を獲が如し、若明日を待ば、恐くは事の變あらん、先生ねがはくは辭すること勿れ。此に依て范增やむことを得ず、遂に幣禮を受納め、季布を堂上へ請じて酒を進めて一宿せしめ、其夜心静に天運を考るに、楚は眞の天命を得たる君に非れば、足を跌て良久く長嘆し、輕々しく幣禮を受たることを後悔しけるが、大丈夫一言すでに出ては、萬金にも不レ易と思ひ直して、次の日季布と共に草廬を出、項梁が陣へぞ赴ける。項梁自ら出むかへ、上坐に引て申けるは、我先生の名を聞て、日夜思ひ慕ふと云ども、軍務に暇なくして見ることを得ず、昨日季布を遣

を推て進發す。

○范增獻策立楚後

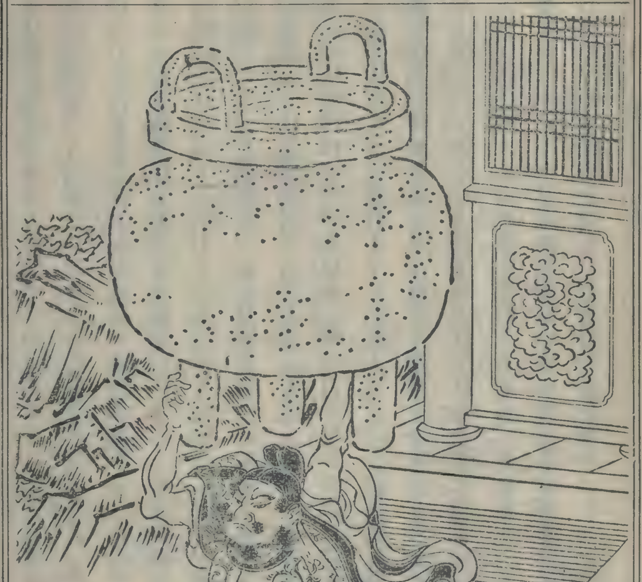
項梁が軍威ます〱盛にして、諸大將と秦を伐の計を議するに、季布すゝみ出て申けるは、淮陽の居巣に范增と云ものあり、年すでに七十に及て、智謀は古の孫子、呉子にも過たり、若この人を得玉はゞ、天下は半年の内に定らん。項梁が曰、われも久く其名を聞り、汝速に行て我ために招き來れ。季布命を受、幣帛を具て居巣に到り、處の者に范增が家を問ば、此より三里ばかりを隔て旗鼓山と云山あり、城市の喧を嫌て、常に此山中に閑居し、輕々しく人に逢玉はずと答ふ。季布直に旗鼓山へ到り、此彼を尋ぬるに、幽なる柴の廬に、琴を彈音しければ、疑もなく是なりと思ひ、立よりて窺ひ見れば、一人の老翁、蒼顔鶴髪にして腹に隱甲兵、胸に藏妙算、飄然として不凡が、琴を閣て問て曰、こゝに來るは如何なる人ぞ。季布謹で幣帛を捧げ、跪て申けるは、某は楚の項梁に從ふ季布と云もの也、方に今秦の政無道にして、英雄蜂の如に起り、各郡守を殺して諸侯に應ず、是みな百姓の爲に害を除て、天下を安ぜん爲なり、故に一藝一能の士こと〴〵く用ひられんことを願ふ、況や先生經濟の畧を抱き、

一人の大將風神峻烈にして威武雄健なるが、馬を躍して出來れり。項羽大音あげて、汝何者な
れば、我大軍を阻んとするぞと問ければ、答て申けるは、我は六安の英布と云もの也、古より
兵出るに名あれば之を正兵と云、汝みな無名の師、ひそかに淮南を超、紂を資て惡を爲んとす、
我この故に討止んとす。項羽が曰、われは楚の大將項燕が後に、項羽名は籍と云もの也、秦の
無道を見て會稽に義兵を起し、八千の子弟を降し、十萬の勢を率て、楚の爲に仇を報じ、殘
暴を除て天下の苦を救んとす、何ぞ無名の師と云ん。其言いまだ了ざるに、桓楚一陣に馬を
出し、英將軍早く降れ、我すでに楚に服せりと呼はりければ、英布これを見て、急に馬より飛
でおり、路の傍に拜伏す。項羽問て曰、桓楚元より此人を知たるか。桓楚申けるは、英將軍
の武雄天下に敵する者なし、往日驪山の役を逃れ、江を渡て某が家に來る、某約を成て、賢德
の君を求め共に功を立て、富貴を圖んと云り、近ごろ淮南に兵を聚ると承りし程に、使を馳
て招んと思ひしに、今幸にして出合たり、此人は六安より出て、少かりし時罪を使して額に黥
せられし故に、世には黥布とも號し候。項羽かぎり無喜び、引て項梁に見しむるに、英布申け
るは、某久く好主を求るの心あり、願くは今より將軍に從て力を盡さん。項梁喜て曰、千軍は
易レ得、一將は難レ求、いま御邊を得たるは、萬里の長城を獲が如しとて、酒宴を設て持成、兵

拜して約を固し、帶たる寶劍を解て定とし、人馬の騷亂せんことを恐れて、早々に別をなし、會稽城に回りて、于英、桓楚を引具し、項梁に見えて事の由を告ければ、項梁かぎり無よろこび、二將の糾々として英勇なるに、相從ふ八千の子弟こと〴〵く精鋭なれば、心勇ずと云ものなし。又澤中より出たる馬を引せけるに、其長一丈高さ七尺にして眞の龍馬なりければ、名付て烏騅と號す。項羽又虞氏を約せし趣を語るに、項梁申けるは、汝義兵を起してより、人の心順ひ附て英雄の士きたり集る、此の如なる時は、天下を定むるに何の難ことか有んとて、吉日を擇で虞氏を娶り、其一族虞子期と云ものを用て大將とし、十日ばかりを過ける所に、四方より集る勢すでに十萬に餘りければ、さらば江北へ渡て秦を伐んとて、日を定めて打出る。會稽の百姓路を遮て、君こゝを棄去ば誰か民を治る者あらんと嗟ければ、項梁申けるは、往日われこの城を取時、かりに軍馬を屯して大業を圖んとの心なり、今大軍久く住ば、恐くは百姓を傷ん、早く江を渡て秦を伐、天下の爲に殘暴を除べし、他日もし事を成ば、會稽千年の賦税を免さん、汝等みな心を安じて家業を理めよ、必ず賢德の太守きたりて此處を保べし。百姓これを聞て喜て回りければ、項梁人馬を催して進發するに、誰とも知らず一手の勢ゆく前を遮りて、人を通さずと告ければ、如何なる者やらんとて、項梁自ら出て望み見れば、旗を眞先に進めて、

來り玉ふ、願はくは民の爲に害を除玉へ。項羽これを聞て、桓楚于英等を作ひ澤の畔へ行て見れば、案の如く件の馬水中より躍出、哮怒て前に近付、兩足を騰て人を齧んとする體をなしけるを、項羽をめいて走寄、鬃を揪で馬の背に飛のり、澤の邊を馳めぐること十遍あまりに及びければ、馬は次第に弱て汗を流し、躍り駭ること能はざりしかば、徐々と歩せて二里ばかり回りけり。村中の百姓みな驚て地に再拝し、喜ぶ聲しばしは鳴も靜ず。其内より一人の老翁すゝみ出長揖して申けるは、某等久く將軍の威名を仰ぐ、幸に今この處へ來て民の害を除玉ふ、願くは暫く人馬を住て某が茅屋に入玉へ、酒を勸て渇仰の情を叙ん。項羽つひに諸將を引て其家に入ければ、老翁喜て酒を進む。項羽いかなる人ぞと名を問に、答て申けるは、某は虞姓也、村中の參會に第一の列に居を以て、人みな虞一公と號す、將軍は御年幾許ぞ、又内室ありや。項羽が曰、われ行年二十四歲、いまだ妻を迎ず。虞公が曰、某年老て只一人の女子あり、聰明貞靜にして輕々しく笑語ることをせず、幼より書を讀て、大義に通ぜり、其母五鳳鳴ニ于室一と夢を見て、此子を生たれば、後に必ず貴からんことを知る、久く婿を擇で今に至まで不レ嫁、いま將軍を見るに、力よく鼎をあげ、勇敵ニ萬人一、乃ち蓋レ世の雄なり、願くは某が女を與んとて、虞姫を呼出しければ、項羽これを見るに、蘭姿蕙質傾國の色世に絕たりしかば、虞公を再

項羽會稽
城ニ興ス兵ヲ
于英
桓楚


項羽

下たとひ義兵を起し玉ふとも恐くは力足ざらん、願は足下の勇力を試て、若萬人に敵する力あらば、我等二人相從はん、不レ然時は是所謂畫レ虎不レ成、反類レ狗と云の諭に同じ。項羽が曰、いま何を以て我力を試玉ふべき。桓楚が曰、山の下に禹王の廟あり、前に大なる石の鼎ありて、重さ幾千斤と云ことを知ず、足下もし此を推倒して又よく起し玉はば、力まことに天下に無レ敵と云つべし。項羽しからば行て見候はんとて、相共に山を下て古き廟の前に到て見れば、果して大なる鼎あり、高七尺圍五尺にして重さ五千斤と云傳たり。乃ち立よりて一たび推ば、其鼎忽に倒たるを、又引起して三ヶ度に及けるが、強ちに力を出せる體にもあらず、いと易げに見えければ、于英桓楚驚て曰、足下の力まことに天下に敵すべし。項羽笑て申けるは、是等の事を何ぞ奇特とするに足んとて、又衣を攘て鼎の足へ手を入、中に持あげて廟を三遍走り廻り、輕々と舊の處に打置て顔色をも變ぜざりしかば、于英桓楚地に拜伏して申けるは、足下は眞に天神なり、我等ねがはくは命を棄て相從はんとて山上へ伴ひ囘り、酒宴を進めて持なし、次の日人馬を引倶して打出る所に、百姓數十人あわて翔て來りければ、如何なる子細ぞと問に、答て申けるは、塗山の澤の中に黑き龍住みけるが、化して馬となり、毎日南阜の村へ來て、哮る聲地を動し、走り廻て田を傷ふ、これを制すべき樣なし、幸に將軍この處へ

人これを聞て再拜し、ねがはくは義兵に從て民の苦を救んと云ければ、項羽喜て了に二人を都騎に封ず。浩りしかば郡縣風を望て爭て歸服し、いまだ十日を過ざるに、數萬の精兵を得て號令甚だ嚴明なり。或日季布鐘離昧申けるは、夫事を立んと思ふ者は、先武略の大將を得て共に力を扶協べし、不然時は孤立して功を成こと能はず、今會稽塗山の麓に、于英桓楚とて二人の勇士あり、八千の精兵を領して山林に嘯き聚り盜賊を業とす、若この者を招き用ひて大將とし玉はゞ、大なる援ならん。項梁かぎりなく喜び、項羽自ら行て招き來れと云ければ、項羽卽時に打立、季布を案內者として塗山に到けるが、先辯舌の者を使として、楚の大將項梁、裨將項羽を遣して二將軍に見しむ、共に武具を携ず、大義を陳て民を救ん爲なりと云せければ、于英桓楚いそぎ出て對面す。項羽申けるは、秦無道を放にして英雄蜂の如に起る、天下この殘暴を除て民の塗炭を救んことを願はざる者なし、二將軍世に希なる才あり、當に天下の爲に害を除べきに、如何なれば跡を山林に藏して、徒に月日を送玉ふぞ、我いま叔父の項梁と兵を起し秦を伐て六國の爲に仇を報じ、殘暴を除て民を救んと欲す、久く二將軍の大名を仰て自ら來て大義を說、もし力を合せて王業を成んとの心あらば、願くは山を下て項梁を扶玉へ。桓楚申けるは、秦無道なりと云ども勢猶強し、若蓋世の雄に非んば、敵すること能はじ、足

願くは我を扶て共に功を立玉へ。項梁許諾して家に回り、項羽に私語て申けるは、大丈夫の士は宜く自ら立て事を成べし、豈欝々として久く人の下に屈んや、我よく殷通を見るに大なる志なき者なれば、了に王業を成こと能はじ、不レ如この者を殺して會稽城を奪取、諸方の兵を驅促して早く事を興んと思ふ也、われ明日汝を作ひ殷通が前に出て計を議せん、汝は懷に劍を藏して速に刺殺せ。項羽可レ然と同じて次の日相共に殷通に見て、秦を伐んと議する時、項羽目を怒して申けるは、我家は楚の大將項燕が後にして、曾て秦に害せられたれば、是誓て不二倶戴一天の讐なり、汝は久しく秦の祿を食て此處の太守たり、然るに今叛逆の企をなす、大なる不忠なり、我いま汝を殺して人臣不忠の戒と爲んとて、劍を拔て殷通が頸を斬、大音あげて申けるは、殷通郡守として秦に背んとす、此故に已に殺せり、今より項梁を立て會稽の太守とす、若從はざる者あらば、皆この頸の如ならん。諸人驚き怖て地に拜伏しける所に、外より殷通が大將季布、鐘離昧と云者二人馳來り怒て申けるは、入二其邦一殺二其主一、奪而自立は非レ義、いかなれば殷通を殺したるぞ。項羽が曰、在二殷通一爲二叛臣一、在二項梁一爲二義主一、いま海内すでに亂る、秦の地を借て、楚の爲に仇を報ずるは天下の大智なり、御邊二人もし我に從て共に暴秦を伐、六國の後を興さば、萬世不朽の功ならん、何ぞ區々として殷通を念とし玉ふぞ。二

蕭何、曹參諸人と相議し、劉邦を沛の縣令として民を治んと云。劉邦固く辭して申されけるは、方に今天下亂れて諸侯國々に蜂起をなす、苟も立主不善、これ百姓を害する也、われ德薄く才疎にして、恐くは民を治ること能はじ、但宜く賢德ある者を擇で縣令とせよ。百姓みな申けるは、久く劉邦の奇才ありて、大に貴からんと云ことを聞知れり、況や卜筮にも劉季最吉と云り、君もし縣令と成玉はずんば、我等こと〴〵く逃れ去ん、此に依て劉邦辭することを得ず、了に立て沛の縣令と成ければ、此よりして沛公とぞ申ける。蕭何、曹參、樊噲等、沛の父老を引て一同に喜をのべ、旗幟を立て皆赤き色を尙ことは、蓋し赤帝の讖に應ぜり。陳渉と交浩りしかば、十日を過ざるに沛中の子弟相あつまりて、其勢三千人に及びければ、交を結て共に秦を伐んとす。

○項羽會稽城興兵

項羽は叔父の項梁と久く會稽に隱れて居たりしに、會稽の太守殷通と云もの、秦に背て旗を揚んと思ふ心ありければ、密に項梁を招て申けるは、秦の世滅んとして豪雄蜂の如に起る、われ此地を保て民の心よく服す、今兵を起して大儀の計略を運さんとす、御邊幸に此處へ來れり、

佐ると號して、却て外より人衆を招き、我を欺て沛縣を奪んと巧かとて、引出して斬んと怒けるを、諸人哀で一命を乞請けり。其夜蕭何、曹參同志の者數十人と城を超て劉邦に見え、縣令不才にして共に大事を議するに足ず、公いま勢大なり、若この時に乘て沛の城を攻とり、暫く人馬を屯して義兵を興し、諸國の勢を招玉はゞ、四方響の如に應じて、後には天下を圖つべし。劉邦申されけるは、御邊もし我を佐るの志あらば、何とぞ計を運し、沛の城門を開て縣令を殺し、賢德の君を立て人望に遵ば、大事必ず成就せん。蕭何申けるは、城中の百姓みな驚き亂れて不安、今夜書簡を箭に束て城中へ射いれ、百姓に利害を陳示さば、必ず內變を生じて、不日に城を下べしとて、其夜書簡を作りて城中へ射入ける。其書に曰、

天下苦秦苛法久矣。民不聊生豪傑並起。我今倡義聚衆、從公議擇沛主、往應諸侯共成大事。如爾開城早降、免致屠戮、如若罔順天命、城破之日玉石俱焚、後悔何及也。

城中の百姓これを見て、密に議して申けるは、劉邦は爲人尋常にかはりて、實に天授の威あり、今兵を率して城をかこみ、蕭何、曹參も已に降れり、城もし破れば我等みな殺されん、不如早く降人となりて、禍を免れんとて、急に府中を襲て縣令を殺し、城門を開て降を請ければ、

横たはりて通るべき様なし、別の路より落行て禍を免るべし。劉邦きゝもあへず、壯士路をゆく、何の畏ことか有ん、皆われに從ひ來れと云て、衣を攘て急に走り、劍を拔て大蛇を截て兩段となし、路を開て通りければ、相從ふ者みな驚き、劉邦平生臆病にして物の用に立人にあらずと思しが、今力を奮て勇なること如此、よの常の所及に非と云て、共に芒碭山の澤中に隱居ければ、沛中の子弟尋來て從ふ者多かりけり。近邊の百姓共蛇を截たる處へ行て見るに、年老たる嫗あり、毎夜きたりて哭哀みければ、皆怪をなして、蛇を殺して民の害を除たるに、汝なにを哭ぞと問ば、嫗答て申けるは、我子は乃ち白帝の子なり、大蛇と化して此路へ出たるに、先の夜赤帝の子に斬れたり。此に因て我歸ところ無を哭なり。聞人いよ〳〵怪み、此は何さま妖物ならんとて、杖を以て撃んとしけるに、嫗は消が如に失たりけり。去ほどに劉邦蛇を斬てより、四方より來り從ふ者數百人、漸く勢を振て猶澤中に居たりしに、沛の縣令に從ふ蕭何、曹參と云もの二人、秦の暴虐を放にして賦税を重し、天下怨み叛て亂れんとするを見て、共に計を運し、縣令を取立て旗を揚んとする心ありければ、密に與力同心の兵を聚め、樊噲と好あるを以て、劉邦をも招きける。劉邦これを聞て喜て馳來り、數百人の兵を從へて勢稍盛なりければ、縣令これを見て驚て後悔し、蕭何、曹參を責て申けるは、汝等は假に我を

れ、二人の女あり、一人すでに劉邦に妻す、其妹を呂須と名づく、君に與て妻と爲んは如何に。樊噲再三辭しけるを、劉邦申されけるは、今日は誠に千載の奇遇なり、一日の内に呂公二人の女を以て我等に許す、公の相レ人すること若違こと無んば、他日われ等二人妻子を保の助あらん、樊噲勿レ辭とて、醉を盡して別れけり。其ころ州郡より人夫を召上せて、驪山の麓に始皇帝の陵を造せらる。此に因て沛縣よりも人夫を聚め劉邦に授て上せけるが、半途にて逃去もの多かりけり。劉邦心に思けるは、人夫如レ此に逃去ば、驪山へ行著ん時には、一人ものこり住る者あるまじ。然る時は我いかゞして罪を免れん、不レ如これより身を逃んとて、豐西の澤中に至て、相從ふ者共に向て申けるは、汝等縣令の命を受て驪山の公役に赴、長く苦勞を經て、何れの日回んと云ことを知ず、逃去者は已に生ることを得べけれども、住りて我に從ふ者は皆苦み疲て空く死せん、汝等これより逃れ去て一命を全せよと云ければ、士卒みな申けるは、秦の法度甚だ緊ければ、我等は逃去て生ることを得べけれども、君いかゞして罪を免れ玉はん。劉邦申されけるは、汝等みな心の任に逃去れ、我も此より身を隱さん。士卒かぎり無よろこび、拜謝して思ひ〳〵に去けるが、其内に年壯なる者十餘人、劉邦を捨るに忍ず、其夜酒を飲て小徑より潛に走去けり。時に先へ進んだる者共馳回て申けるは、行前に長十丈ばかりの大蛇徑に

んずれども、時いまだ不至故なり、若一旦時を得ば、その貴こと不小とて、息女呂顔を妻せて壻にせんと云。女房怒て申けるは、適に我女を沛の縣令に嫁しめんと約して、今又かゝる賤き者に妻せんとは何事ぞ。呂文が曰、これ汝が輩の所知にあらずとて、劉邦を迎へて酒を勸め、われ君の相を見るに、貴こと不可言、ねがはくは我女を以て君が箕箒の婦と爲ん、君必ず勿違。劉邦申されけるは、我三事未立、一には幼して學ず、二には力弱して無勇、三には貧して不能自贍、これを以て爭か公の女を娶ことを得ん。呂文が曰、わが意すでに決せり、君必ず勿辭とて、夫婦ねんごろに酒を勸めて一家の交を結び、劉邦の還を送て門外へ出ければ、忽ち一人の勇士身材堂々として威風凜々たるが出來り、劉邦を長揖して、數日御邊に遇んとて尋しに、今幸にして遇ことを得たりと云。その聲雷の如なりしかば、呂文心の内に、此は眞に盛なる世の諸侯と云つべき人物なりと思ひ、劉邦を尋ぬるは如何なる人ぞとて、招き入て名を問に、答て申けるは、某は沛縣の人に樊噲と云もの也、身貧して狗を屠て世を度る、此間劉邦を尋ねて此處へ來れり、足下は又いかなる人ぞ。呂文が曰、某は單父の呂文と云者なるが、久く沛の地に客居す、常に君の名を聞て、今幸に相遇ことを得たりとて、酒を進て問て曰、君すでに內室ありや。樊噲が曰、某幼より貧賤にして、父母もなく妻子もなし。呂文が曰、わ

けるは、我等大雨に碍られて日限を違たれば、頸を刎られんは必定なり、假令幸にして罪を免れたりとも、何を期すともなく漁陽を戍居て、徒に疲死ん、壯士不死則已、死則擧大名耳、王侯將相寧有種乎、いま秦の政亂れて天下こと〴〵く怨む、我等とても死んずる命を、義兵と號して民を救ひ、事もし不成ば快く討死して、世に名を傳んと思ふは如何にと云ければ、相從ふ者共みな尤と同じける。さらばとて壇を築て天地を祭、盟をなして大楚と號を立、先大澤鄕を攻とり、蘄邑を屠て東國へ打向ひ、陳の國に到ければ、相集る勢すでに數萬人に及べり。其外武臣兵を趙の國に興し、劉邦は沛に起り、項梁は吳に起り、四海縱橫天下紛亂。二世皇帝は酒に溺れ色に淫して、日夜遊樂に耽り玉へば、事を奏する者ありても、終日に見ることを得ず。此時沛の豐邑に劉邦字は季と云人あり。其母曾て大澤の堤に休居たりしに、神と會合すと夢を見て打驚き、忽ち雷電晦冥して交龍天に出現せり。此よりして娠たる子なり。爲人隆準龍顏にして、左の股に七十二の黑子あり。廣く人を愛して施を好み、豁達大度にして家業を修ず。秦の亂を平げ楚を滅して、四百年の基を開きし漢の高祖と申は是なり。年すでに壯なるに及て、泗上の亭の長となりけるが、甚だ酒色を好ければ、諸人みな輕んじけり。されども單父の呂文と云人、劉邦の爲人不常を見て申けるは、劉邦酒色を好を以て、諸人をな輕

外にあり、兄弟一族の都の内に在ものと、内外より亂を成ことも有ん、盡く誅せんと宣ひけるを、扶蘇の御子に子嬰とて有けるが、諫て申されけるは、蒙氏は數代功を累たる秦の大臣なり、今無故にこれを棄て新き人を用ひ玉はば、群臣不服して、士卒の心も離れ反ん。二世つひに聽ず、蒙氏の九族を殺し盡べしと詔を下されければ、蒙恬上郡に在て此由をきゝ、吾積功于秦二三世、いま精兵三十萬を統たれば、此を以て謀反せんに、何の不足ことか有ん、然れども義を守て妄に爲ざる者は、不敢辱先人之教、不忘先王之恩也と云て、自ら毒を呑で死ければ、二世皇帝これを聞て、其一族の命ばかりを扶けて、遠く蜀の國へ移し玉へり。

○劉邦芒碭山斬蛇

李斯趙高が常に所忌は、扶蘇蒙恬二人なりしに、已に殺して外に憚こと無れば、二世を勸て專ら殺伐を行はしめ、天下の政を心の儘に執行ふ。此に因て遠近こと〴〵く恨み、盜賊蜂の如に起て、山東、山西、河南、河北、吳楚の間には、軍馬の騷動やむ時なし。此ころ楚人に陳涉、吳廣と云もの二人、漁陽の番に赴んとて、秦の士卒九百人を預り、大澤と云鄉まで出けるが、大雨に遇て路に逗留し、定の日限相違しければ、必ず斬罪に行はれんことを知て、士卒に向て申

藥酒短刀ニ自決。其將軍蒙恬稱レ兵在レ外、不レ能レ匡ニ正國威一、本欲レ加レ誅、以ニ築レ城之工未一レ完、姑留督理、故茲詔示、想宜ニ知悉一。

扶蘇詔を聞て涙を流し、われ常に直諫せしを以て、深く恨て死を賜ならん、速に毒を飲で亡んと申されければ、蒙恬止めて申けるは、天子久く臣に大軍三十萬を授て此處を守せ、殿下を以て監軍とし玉ふ、此天下の重任なり、然るに今故なきに死を賜は、恐くは詐ならん、不レ如直に御對面ありて、能その實不を聞さだめ、其後に死玉はんに、何の晩ことか候はん。扶蘇申されけるは、父の命すでに出たり、理不レ可レ違、もし詐ならんことを疑て直に尋ね問ば、彌不孝を增なり、勅使こゝに在、なんぞ實不を論ぜんやとて、毒酒を飲で薨じ玉ひければ、蒙恬その屍を抱て哀み哭き、三軍もこと〴〵く涙を流す。閻樂いそぎ回て右の趣を告ければ、李斯趙高今は心安しと喜て、始皇の靈車を守護して、井徑九原の道より咸陽宮へ回り、始めて喪を發して崩御の事を披露し、詔と號して胡亥を位に卽て二世皇帝と仰ぎ、九月に始皇を驪山の麓に葬り、數萬の珍寶を埋め、宮女の子なき者を多く墓の中へ殉葬しけり。浩りしかば李斯趙高いよ〳〵權威を專にして、天下の制法を嚴し、百姓を殘暴して、大臣公子ともいはず妄に誅罰せしかば、四海うらみ叛て、干戈諸處に競起る。或時二世皇帝群臣に向て、蒙恬久く大軍を統て

今日の權その存亡君と我等とにあり、若遺詔を守て太子扶蘇を帝とせば、權柄必ず他人に歸して、君も遠國に退けられ玉はん、然る時は焉ぞ身を安ずることを得ん、此に依て密に遺詔を改め、君を帝位に卽て、共に富貴を享んと欲す、君いかゞ思し食候ぞ。胡亥申されけるは、兄を廢て弟を立るは、是彝倫を亂る也、父の命に違て自ら擅にするは不孝なり、人の位を奪て害之不仁なり、三の者は理に逆ひ法に背く、恐くは天下不服、われ此に遵べからず。趙高が曰、不然、信小節而失大事、守微義而泥遠圖、これを不達と號す、況や時不可錯、權不可假人、君早く御心を決して、後に必ず悔玉ふな。胡亥これを聽て、卿等但宜く事を議せよと申されければ、趙高大に喜び、李斯と共に遺詔を書改め、胡亥に位を讓り、扶蘇に賜死と披露して、閻樂と云ものを使として上郡へ遣す。閻樂も素り始皇の崩御を知ず、車の前に拜伏して勅命の趣を承り、馬を早めて上郡へ下向しければ、扶蘇勅使ある由を聞て、蒙恬と共に遠く出迎へ、謹て詔を聽玉ふに、其詔に曰、

三十七年七月十三日、始皇帝詔曰、三代以孝治天下、而敦大本、父以此立倫、子以此盡職、違此悖理、逆常非道也。長子扶蘇不能仰承休德、闢地立功、乃敢上書誹謗大肆狂逆、父子之情似若可矜、而祖宗之法則不可赦。已詔立胡亥爲太子、廢爾爲庶人、賜

こと多年、今より大小の事務みな卿に任す、太子扶蘇は仁愛にして君とするに足り、朕さきに誤て遠方へ出せり、速に召て玉璽と遺詔とを傳へよ、卿等よく匡し輔て、心を王事に盡せ、朕が遺言必ず輕々しく洩こと勿れと云了て崩じ玉へり。在位三十七年壽五十歳なり。第二の御子胡亥幷に趙高、李斯、内官五六人の外は此を知もの無りければ、彌深く隱して喪を發せず、轀涼車の中に載て歸りけるが、食を進め事を奏すること平生の如く、七月の暑氣に遇て其臭氣を混さん爲に、車の後に多く鮑魚を載けり。次の日趙高ひそかに李斯に向て申けるは、大丈夫一日も不レ可レ無レ權、もし權なき時は、爵祿去て身危し、我いま遺詔を改て胡亥を立て君と爲んと欲す、足下いかゞ思玉ふぞ。李斯が曰、先帝すでに遺詔あり、人臣の分として爭か之を改べき、御邊必ず亡國の言を出すこと勿れ。趙高が曰、足下の才智を以て太子に寵せられんこと蒙恬とは如何ん。李斯が曰、われ不レ及二蒙恬一。趙高が曰、太子扶蘇は明にして決斷あり、常に足下と不レ睦、もし立て君とせば、必ず蒙恬を丞相とし、足下の官を剝て庶人となし、了には害を加べし、何とて此を悟玉はぬぞ。李斯良久く思案して申けるは、御邊の言一理あるに似たれども、我は但先帝の遺詔に背に忍ず。趙高が曰、遺詔に遵ふ時は身危く、遺詔に負時は身安し、此二の間足下いづれを取玉ふべきぞ。李斯げにもと同じて、了に趙高と共に胡亥に見て申けるは、

んと欲す、豈小勇を好んや。項梁この言を奇なりとし、常に義兵を興さんと思ふ所存ありければ、此日始皇に怪られんことを恐れて、共に呉楚の間に逃れ、潛に天下を圖の志あり。其ころ東郡と云處へ天より石隕て、上に始皇死而地分と云六字を刻り。何ものの所爲なるぞとて、御史の官に命じて遍く糺問し玉へども、更に不知ければ、石の傍なる居民を悉く誅して、其石を燔棄らる。李斯奏して申けるは、陛下諸國を巡狩し玉ふこと數年、祥瑞妖怪こも〴〵現れて、一も信とし難し、不如鑾駕を促して咸陽へ還り、邊庭の備をなして、郡國を撫安玉はば、垂拱して天下無事ならん、若如此に遠く巡狩して民を動し玉ふ時は、反て事の端を引出して、陛下しばらくも御心安かるまじ。始皇此理まことに朕が意に合へりとて、御車を促して兗州まで回り玉ひ、夢に東海の龍神と戰ひ、敵すること能ずして急に逃んとし玉へども、滄波茫茫として出べき樣なく、如何せんと畏れ哀玉ふを、天より赤き龍降りて一口に呑たりと御覽じて、打驚き玉ひけるが、此より神思恍惚として五體困倦し、沙丘と云處に到て彌重く成ければ、密に李斯を召て宣ひけるは、朕先年東海を塡て龍神を犯せり、今龍神と戰ふ夢を見て此病を得たれば、恐くは快復することを得じ、朕もし崩じてのちは、太子扶蘇を上郡より招き返し、秦の位を嗣しめて、天下を失はしむること勿れとて、傳國の玉璽を解て李斯に授け、卿事朕

始皇帝は東國を巡狩して徐州の地面に來り玉へば、風景他國に易て、禾黍鋪ㇾ田桑麻よく長ぜり。時に百姓一莖に九の穂ある禾を獻りければ、始皇喜玉ふこと限なく、嘉禾の出る昔より目出度祥瑞なりとて、重く百姓に恩賞を賜り、此より東南に行て沛縣を巡り玉ふに、雲氣しきりに起て、瑞光天に亙りければ、李斯を召て宣ひけるは、朕先年高に登て、東南の方に雲氣の起を望み、深く怪きことに思て如ㇾ此諸國を巡察す、不ㇾ意この地なり、必ず異人あるべし、汝よく尋ね極めて、倘異き人あらば、早く殺して後日の患を除け。李斯申けるは、雲氣の出沒變態不ㇾ定、陛下必しも深く慮り玉ふこと勿れ、今もし故なきに人を尋ねば、百姓騷動して却て禍を惹出すべし。始皇げにもと御許容ありて、直に會稽の方へ巡行し玉ふに、會稽の市に人多く聚たる中より、年の程二十餘なる壯士走り出、始皇無道なり、我これを殺んと云て劍を拔けるを、傍より一人急に引止め、無用々々、大丈夫の士は當に萬世の功を立べし、豈刺客の流に效んやと云ければ、其人尤と同じて止りけり。此は楚の大將項燕が後に、下相の人に項羽名は籍と云もの也。止めたる者は其叔父に項梁と云もの也。項羽幼して父を喪ひ、項梁が家に養れけるが、初め學ㇾ書不ㇾ成、又學ㇾ劍不ㇾ成。項梁怒て、汝如ㇾ此にして何を爲んと思へるぞと責ければ、項羽申けるは、書は人の姓名を記し、劍は一人に敵するのみ、我は但萬人の敵を學ば

る、又五日すぎて早々に來れ。張良家に回り、夜の五更に起て來りけるに、老人又樹下に坐して怒て申けるは、孺子なにとて懶惰なる、又五日すぎて速に來れ。張良重ねて宵より樹下に行て待居たりしに、半時ばかり有て老人來れり。張良再拜して月影に望み見れば、皮の冠を戴き、黄なる道服を披て、竹の杖を攜へ、飄々然として眞の神仙なりければ、地上に跪て、願くは教を受んと云に、老人申けるは、汝年少して力強く、骨格清奇なれば、他日世に顯れて帝王の師とならん、幸に今相逢、まことに千載の奇遇なり、汝に三卷の祕書を授く、奇謀神算恐くは孫子吳子も及ぶこと能はず、功成身退こと、仲連范蠡と云とも過べからず、汝よく韓の爲に仇を報じ、眞の君を扶立て、名を萬世に傳へ、日月と光を爭べし、後十年して汝必ず興ん、十三年を經て天谷城の東に一の國君を葬らん、其時空地の内に一片の黄なる石あらん、此乃ち我なりと云て、行方なく失にけり。張良奇異の思をなし、三卷の書を得て家に回り、日夜これを觀るに太公望が兵書なり。此書を觀てより、自然に心胸の豁なる樣に覺えければ、靜に其理を工夫して、猶項伯が家に藏居たり。

○趙高矯詔立胡亥

三公

張良下邳遇黃石公
酒飯
張良
蒼海公

けるゆゑ、此日も恙なく難を逃れ玉へり。早御林護衛の武士共取圍で蒼海公を生取ければ、始皇詔して、何人に頼れて我を殺さんとはしたる、拷問せよとて責させらるゝに、蒼海公目を怒して、われ天下の爲に無道を誅せんとす、何ぞ人に頼るゝこと有んと詈ければ、又趙高に命じて勘問させらるゝに、蒼海公自ら車の柱に觸て死したりける。始皇いよ〳〵御心不レ安、これは必ず朕を狙ふ本人あらん、遍く尋求よとて、天下に觸をなし玉へども、了に知もの無りけり。張良は始皇を打損じて、脚に信せて逃わしり、下邳と云ところに項伯とて親き友ありければ、暫く此家に藏居たり。項伯は楚國の大將項燕が一類なり。張良ある日下邳の城外に出て逍遙し、圯橋の邊に立居たるに、黄衣を披たる老人橋の上を通るとて、はいたる履を泥の中へ墜し、張良に向て、孺子わが履を取て得させよと云ければ、張良老人の仙風道骨世の常ならざるを見て、急に飛下て履を取、跪て獻る。老人履を著て歩けるが、又泥の中へ墜して、初の如く張良に取て得させよと云。張良少しも辭せず、又跪て獻る。如レ此なること三度に及ければ、老人よろこび、此子可レ教とて、橋の傍なる茂りたる樹を指ざし、後五日すぎて、汝早く此處へ來て我を待て、我汝に一物を授ん、必ず約を違ること勿れと云て去ければ、張良その言に乖ず、五日すぎて早朝に來りしに、老人早く樹下に坐して申けるは、汝長者と約して何とて遲く來りた

道なりと云玉へり、必ず天下の爲に暴秦を除の心ならん、若われを用ひ玉ふこと有ば、願くは力を盡して共に始皇を殺べし。張良申けるは、此は事を論ずる處にあらず、我家に來玉へとて、伴て同く囘り、如何なる人ぞと名を問に、答て申けるは、某は黎姓にて、常に海邊に住居するを以て、蒼海公と呼る、力世の常に超て、重さ百斤の鐵鎚を使ふ、足下の體たゞ人に非るを以て、如此告申なり、ねがはくは足下の姓名を聞ん。張良申けるは、我は張良字は子房、五代韓に仕て宰相となる、今韓すでに始皇に滅されたり、此故に千金を以て壯士を募り、何とぞ始皇を殺して先君の讐を報ぜんと思へども、今に至るまで其人を得ず、今日御邊に逢て平生の願足れり、始皇無道にして、天下の人みな切齒、御邊もし之を誅して、六國の爲に讐を報ぜば、人民徳を仰で、其名は萬代に遺るべし。蒼海公許諾して、われ誓て力を盡んと云ければ、張良無限よろこび、密に始皇の消息を窺ひ聞に、數日を經て陽武縣を巡狩し玉ふ由を告る者あり。さらば馳行て狙んとて、蒼海公を伴て博浪沙と云ところに到り、高き阜の上より見居たれば、果して始皇の乘玉へる車と覺て、黄羅の蓋を張せたるが眞先に進て、相從ふ車馬雲霞の如し。蒼海公これなりと見て、阜の上より走下り、彼鐵鎚を投付たるに、眞先なる車は念なく碎て微塵に成けり。されども始皇は元より用心深く、若や人の狙ことも有んとて、いつも副車に乘玉ひ

邊庭に征戰の勞なく、朝野に奸邪の患なく、郊原に蝗蝻旱潦の災なく、百姓に疲倦艱辛の苦なく、五穀よく登て天下安樂なる、是を太平の時節と云。諸人又、當時秦の政をいかゞ云べきぞと問に、趙三公申けるは、當時は法度甚だ緊ければ、我敢て不可說。諸人みな、外に聞人もなし、願くは當時の政を論じ玉へと云けれども、趙三公いかゞ思けん、只首を掉て答ざりけり。張良これを立聞して、いかさま尋常ならぬ者なりと思ければ、自ら進み出て申けるは、汝秦の政を說こと能ずんば、よく我等が說をきけ、始皇無道にして男は耕ことを得ず、女は織こと能ず、父子夫婦わかれ離れて、我は北の方長城を築き、東は大海を塡、五嶺を修し、阿房を建て、焚書坑儒、大逆を肆にして、民しばらくも不安。趙三公これを聞て大に驚き、張良が高き冠を戴き博き帶を著て、面美玉の如なるを見て、直人ならずと思ひ、急に起て走り出るを、諸人ひき住て如何なる故ぞと問に、趙三公申けるは、汝等は命を惜ぬか、當時始皇が法度緊して、頭を交て物語する者あらば、市に引出して誅せんと觸たり、長居して其人に捉るなとて、飛が如に去ければ、一座の老人けにもと怕驚て、盡く走出けり。張良これを見て大に笑ひ、愚人わが機を知ず、却て我を畏るゝかと云て回んとするに、忽ち傍より相貌堂々として長一丈ばかりの壯士出來り、張良が袖を控て申けるは、適に足下の言を聞に、始皇を無

す、今陛下重く之を繩し玉ふ、恐くは天下安かるまじと申されけるを、始皇大に怒り、汝いかなれば朕が意に逆ぞ、今より中國に居こと勿れとて、北の方上郡へ遣して、蒙恬が軍を監せしめ、猶も東南の雲氣を怪く思しめし、亂をなす人や有んとて、又東國を巡狩し玉ふ。近年山東の國々は打つゞき飢饉して、百姓みな安からざるに、御車の通る處、一日に數萬の金銀を費しければ、百姓多く逃かくれて、怨嗟ずと云ものなし。

○張良下邳遇黃石公

其ころ韓の國に張良字は子房と云ものあり、五代まで韓の國に仕て宰相となり、始皇に國を滅されて、常に故主の讐を報ぜんと思ひ、千金を以て天下の壯士をもとめ、何とぞして始皇を殺んと狙けり。或日淺山と云處を過て、傍なる酒店を見れば、多くの老人酒を飲で樣々の物がたりをし、天下の變化古今の興廢を論じけるが、其中に趙三公と云る老人あり、五百年以前には、天下太平にして人民みな快く樂みたりと云ふ。諸人いかなるを太平と申ぞと問ば、趙三公答て曰、熙々たる風景、皞々たる年光、黎民鼓腹、笙歌の聲不絕、三日一風、風不鳴條、不摧林木、五日一雨、雨不破塊、不傷禾稼、盜賊不生して夜不扃戶、行人讓路て、道に不拾遺、

洞とし、一册の書を取いだす。上に天籙祕訣と題せり。乃ち盧生に授て申けるは、此書を始皇に授て詳に見せしめよ、内に生死存亡の數あらん。盧生書を取てその仔細を問んとするに、彼人又石上に臥、眼を合せて言ず。此に依て爲べき樣なく、咸陽へ囘りて始皇に見え、東海茫茫として徐福が行衛を尋問べき跡もなく、東華の頂へ登て異人に逢、一冊の仙書を授りしに、直に陛下に獻れと申候きとて、彼書を上りければ、始皇これを御覽あるに、外に天籙祕訣と題して、内には歴代の遷り易る圖をなし、蝌蚪の文字を以て書たるが、皆隱し言にて、中々世の常の人の曉べきにあらず。李斯に命じて字義を釋せしめ玉ふに、亡レ秦者胡也と云る語ありければ、扨は秦の天下を亡べき者は北方の胡ならんかとて、太將蒙恬に人夫八十萬を授け、中國と胡の疆に、高く萬里の長城を築せ、夥しく國用を費し、民の嗟を積で、却て秦を亡ものは御子胡亥なることを知玉はぬこそうたてけれ。其後東は大海を塡、西は阿房宮を建、南は五嶺を修し、殿閣を造り連ねて、工作の絕る間もなく、先王の制法を更て、肆に事を行ひ、其過を人の議論せんことを恐れて、李斯が敎を聽て天下の書籍を燒廢、侯生盧生なんど云る者を先として、儒者と呼るゝ者四百六十餘人を土坑へ入て塡ころし、若頭を交て物がたりする者あらば、市に引出して誅せんと觸ければ、太子扶蘇これを諫て、儒を學ぶ者は皆孔子を以て法と

暑を覺ず、甲子を知ず、此中に長生不死の藥あり、これを服せば壽命無レ窮べし。始皇宣けるは、卿この仙山を見たるか。宋無忌が曰、方士徐福と申もの、曾て東海に至て、蓬萊方丈の中に、多くの仙人鶴にのりて逍遙するを見たり、今臣が家にあり、召寄て問玉へ。始皇いそぎ召よせて、長生不死の藥を求べき樣を尋玉ふに、徐福申けるは、藥を求ること尤難と云ども、大船十艘を造て、童男童女各五百人、金銀珠玉飲食器用の物を載て臣に授玉はば、東海に行て不死の藥を求來ん。始皇無レ限よろこび、詔を下して大船を造らせ、用意ことごとく備りければ、徐福つひに東海を指て出去り、其のち杳に何の音信もなかりければ、徐福が行衛を見て參れとて、又盧生と云る儒者を遣さる。盧生詔を受て海邊まで出けるが、烟波渺茫として、見るに膽冷く、何くを指て出べき樣なかりしかば、長嘆して空く囘り、始皇の罪に行玉はんことを畏れて、直ちに太岳の山中へ入、仙人の跡を尋ねて東華の頂へ登りたりしに、頭は蓬の如く、面垢つきたる人、石上に臥居たり。盧生これは如何さま異人ならんと思ひ、前に近付て見れば、其人起て問て曰、こゝに來るは何ものぞ。盧生が曰、われ始皇帝の命を受、長生不死の藥を求んとす。其人笑て申けるは、天數すでに定りて、大限のがれ難し、世上安ぞ長生不死の藥あらん。盧生その言の不レ凡を見て、再三長生の道を乞求ければ、其人側なる石を推て

ば、始皇つひに後宮の美人を伴ひ、東園に御幸し玉ふ。其行装盡善盡美たれば、花柳も色を添て、千紫萬紅一時の榮を極たり。始皇やゝ久く花下に逍遙し玉ひ、顯慶殿に登て坐し玉ひしが、不覺伏几ねむり玉へり。時に何やらん物の響音して、天地震動し、紅の日輪御前に落たりしが、身に青衣を披て、面は鐵の如く、眼に重瞳ある小兒、東の方より走來り、日輪を抱て去らんとするに、又紅衣を披たる小兒、南の方より馳來り、汝なにとて日輪を取んとする、我天帝の命を奉たり、速に還せと呼はりて、互に爭うて打合けるが、青衣の小兒、初の間は力強して、紅衣の小兒を連打こと七十二度。されども紅衣の小兒肯て倒ず、力を出して一度打たれば、青衣の小兒地に倒て死たりけり。此に依て紅衣の小兒日輪を抱て南を指て去けるを、始皇聲を揚て、小兒しばらく住れ、汝は如何なる者ぞと問玉ふに、小兒答て申けるは、我は是堯舜の裔、豐沛に生れ、先咸陽へ入て義を興し、四百年の基を立と云すてて、南を指て走去けるが、雲掩ひ霧起て、紅の光ひらめきければ、始皇忽然として夢打驚き、つくゞと御思案あるに、皆不吉の夢なれば、わが秦の天下つひに他人の物となるべきかと思し食て、御心不安宮中へ還せ玉ひて、群臣と長生不死の藥を求め、萬世までも天下に君たるべしとぞ議せられける。宋無忌申けるは、東海の中に三の仙山あり、十洲三島蓬萊方丈の諸山、八節如春、四時清朗にして寒

に起、複道を上阪に通じて、夥しく工作を興し、宮室を創立して諸國の美女をえらび聚め、人間の遊樂不レ極と云ことなし。或時群臣に向て、古の聖王は天下を巡て民の風を視玉へり、朕これに效て巡狩せんと欲す、如何あらんと宣へば、群臣みな申けるは、昔より有道の君は天下を巡行して民間の苦疾を觀る、所レ謂坐二明堂一而聽レ政なり、若つねに九重の深に居玉はば、天下の利病いかゞして知玉ふべき、陛下よく古意に合ひ玉へり。始皇つひに御駕を促して隴西を巡狩し、偶雞頭山の高に登りて望玉へば、東南の方に雲氣ありて、五色の光隱々たり。近侍の臣に、あれは如何にと問玉ふに、宋無忌と云もの答て申けるは、雲氣の出るに各不同あり、祥雲彩雲霽雲慶雲は皆まことの雲なれども、今の雲氣は雲にはあらず、大に貴氣なり、龍五色を成て其應不レ小、これ陛下ならでは鎭ること能はじ、親ら東南に巡狩して、寶を以て鎭玉はば、此氣自ら消すべし。始皇げにもとて、直ちに東國を巡行し、鄒嶧山に登て、石を立て功德を錄し、東嶽太山を封じて、自ら帶せられたる太阿と云寶劍を山の麓に瘞め、淮水を超て、其より南郡に到り、咸陽宮へ還幸なりぬ。されども常に東南の雲氣を怪く思しめして、御心樂み玉はざりければ、之を慰奉ん爲に、群臣奏して申けるは、此間打つゞき天氣融和にして、御園の花あらそひ開け、春風催レ興時節にて候に、など欝々として御座候ぞとて、寶輦を飾けれ

宋無忌

始皇巡狩
望雲氣
李斯
趙高

通俗漢楚軍談

夢梅軒章峰

巻之一

○始皇巡狩望雲氣

夫明王の得時而興る、必有所命。故に能建不朽之基而福祚長く子孫に流る。秦詐力を以て海宇を幷呑し、萬世に帝たらんと欲せしかども、三世にして滅び、高祖義を唱て匹夫より起り、大漢四百年の業を開く、是龍戰虎爭終に所以歸其主なり。つらく〳〵史の所載を考るに、陽翟の賈人呂不韋、娠る女を莊襄王に獻てより、呂政秦の統を嗣で六國を滅し、われ德兼三皇功過五帝たれば、皇帝と尊號を立て、天下の耳目を新にせん、今よりわれを以て始として、第二世第三世につたへ、綿延して位を萬世に及さんとて、自ら始皇帝と稱せらる。此より邪侈日に長じて、天下を三十六郡に分ち、兵器を銷し、十二の金人を鑄て國の富を示し、章臺を上林

卷之十一

張良躡レ足封ニ韓信一……四九一
項羽伏レ弩射ニ漢王一……五〇三
廣武山漢楚大戰……五〇九
項羽欲レ烹ニ太公一……五二二
界ニ鴻溝一漢楚約レ和……五二九
漢王成皐會ニ諸侯一……五四二

卷之十二

漢王大兵出ニ成皐一……五五一
季布周蘭諫ニ項羽一……五六三
九里山十面埋伏……五七三
張良吹レ簫散ニ楚兵一……五八三
項羽悲歌別ニ虞氏一……五九〇
項羽烏江自刎……五九七

卷之十三

漢王卽ニ帝位一封ニ功臣一……六〇五
田橫義士死ニ海島一……六一三
婁敬議レ遷ニ都咸陽一……六二〇
高祖僞遊ニ雲夢一……六二八
陳平計解ニ白登圍一……六三六

卷之十四

張良託ニ赤松子遊一……六四九
陳豨破ニ番兵一背レ漢……六五六
高祖御駕駐ニ邯鄲一……六六五
呂后未央斬ニ韓信一……六七一
蒯徹淮陰葬ニ韓信一……六八〇
醢ニ彭越一賜ニ諸侯一……六八七

卷之十五

英布反レ漢被レ擒……六九五
四皓羽ニ翼太子一……七〇三
張良從ニ四皓一歸レ山……七〇九
高祖長樂宮拒レ醫……七一五
惠帝卽レ位享ニ太平一……七二五

卷之六

漢王築㆑壇拜㆓韓信㆒……二二一
蕭何議㆑罪釋㆓樊噲㆒……二三一
韓信執㆑法斬㆓殷蓋㆒……二三四
樊噲明造㆓蜀棧道㆒……二四三
韓信暗度㆓陳倉道㆒……二五〇
辛奇斬㆑虎遇㆓韓信㆒……二五七
周勃陳武取㆓散關㆒……二六三

卷之七

韓信火攻破㆓章邯㆒……二六九
韓信定㆑計取㆓三秦㆒……二七六
漢王咸陽會㆓張良㆒……二八五
張良說㆓魏豹㆒降㆑漢……二九六
樊噲受㆑計擒㆓申陽㆒……三〇三

卷之八

王陵迎㆓太公㆒歸㆓咸陽㆒……三一三
樊噲擒㆓司馬印㆒……三二〇
陳平逃㆑楚歸㆑漢……三二八
董三老遮㆑道說㆓漢王㆒……三三六
項羽大戰㆓彭城㆒……三四二
隨何說㆓英布㆒歸㆑漢……三五八

卷之九

韓信滎陽見㆓漢王㆒……三六九
韓信車戰破㆓楚兵㆒……三八〇
魏豹背㆑漢被㆑擒……三八八
王陵母伏㆑劍自殺……三九七
韓信斬㆓夏悅張仝㆒……四〇八
背水陣韓信破㆑趙……四一五

卷之十

反間計范增憤死……四二七
紀信滎陽詐降㆑楚……四三七
周苛樅公守㆑城死㆑節……四四七
漢王走㆑趙奪㆓韓信印㆒……四五七
童子外黃說㆓項羽㆒……四六二
齊王怒烹㆓酈食其㆒……四七三
囊沙計韓信斬㆓龍沮㆒……四八二

通俗漢楚軍談目錄

卷之一

始皇巡狩望ニ雲氣ヲ……一
張良下邳遇ニ黄石公ニ……八
趙高矯レ詔立ニ胡亥ヲ……一四
劉邦芒碭山斬レ蛇……二〇
項羽會稽城興レ兵……二六
范增獻レ策立ニ楚後ヲ……三五

卷之二

章邯刧レ寨破ニ項梁ヲ……四五
項羽殺ニ宋義ヲ救レ趙……五一
項羽九戰ニ章邯ト……五六
趙高指レ鹿爲レ馬……六三
章邯避レ禍降ニ項羽ニ……七二

卷之三

酈生使レ韓信ニ張良ヲ……八一
望夷宮二世被レ害……九〇
沛公入レ關軍ニ霸上ニ……九六
范增算レ運觀ニ天文ヲ……一〇一
項伯夜走救ニ張良ヲ……一〇六
鴻門會樊噲排レ闥……一一三
范增奮激碎ニ玉斗ヲ……一二五

卷之四

項羽殺ニ子嬰ヲ稱ニ霸王ト……一三一
項羽封ニ天下諸侯ヲ……一三九
陳平定レ計救ニ漢王ヲ……一四六
張良燒ニ蜀棧道ヲ……一五四
項羽拒レ諫烹ニ韓生ヲ……一六〇
張良賣レ劍說ニ韓信ヲ……一六八

卷之五

項羽江中弑ニ義帝ヲ……一七七
韓信背レ楚逃ニ咸陽ヲ……一八一
韓信問レ路殺ニ樵夫ヲ……一八五
蕭何深奇ニ韓信才ヲ……一九七
韓信爲ニ治粟都尉ト……二〇四
蕭何月夜追ニ韓信ヲ……二一〇

通俗漢楚軍談序

嬴氏失鹿群雄相追。漢高之起於豐沛、寬仁而懷衆、量才而能任。項羽之殘忍印刓不予、撥墓弑君而失信於天下。宜哉垓下之一敗、卒爲漢見併也。實知順天者昌、逆天者亡。向使項羽能從范老之諫、用韓彭陳英之徒、漢高豈得開四百之基乎。間東道逸士就予求記漢楚興亡之事。故考諸史小說、著通俗漢楚軍談十五卷、以貽之云。

元祿庚午仲春　　夢梅軒章峯序

女童幼も尙ほ之を愛讀したるは好く人の知る所也。作者夢梅軒章峯は元祿時代の人、傳詳ならず。通俗唐太宗軍鑑、通俗兩漢紀事の著あれども、最も廣く行はれたるは本書也。但し本書は八卷以下筆者を異にすること跋に見ゆ。

今本書を校訂するに當りては、古版本を原として假名遣を正し、句讀點を一定して勉めて通讀の便を圖りたれども、特に送り假名は原本に從ひ、其他文字語句の疑はしきものは、妄りに私意を加へて改竄するを避けたり。

明治四十四年十二月

校訂者　石川核

緒言

通俗漢楚軍談十五卷は、漢楚興亡の事蹟を敍したるものにして、古來通俗三國志と相竝びて、支那軍談物の雙璧と稱せらる。時代は、秦の始皇が阿房宮建立に始まり、漢、天下を統一し、高祖死して惠帝嗣立するに終る。其間群雄竝び起り、劉邦項羽互に衡を爭ひ、天下を擧げて戰亂の巷と化す。記事波瀾に富み、筆致亦簡勁にして而も委曲を盡し、卷を追うて興味益々深きを覺えしむ。

本書は一部の書の飜譯又は飜案にあらず。廣く諸史小說を涉獵し、之に作者の想像を加へて脚色せるものなり。されば其內容も、殺伐悲慘の事實のみを記さず、まま義理人情の纏綿を描ける一篇の歷史小說にして、婦

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

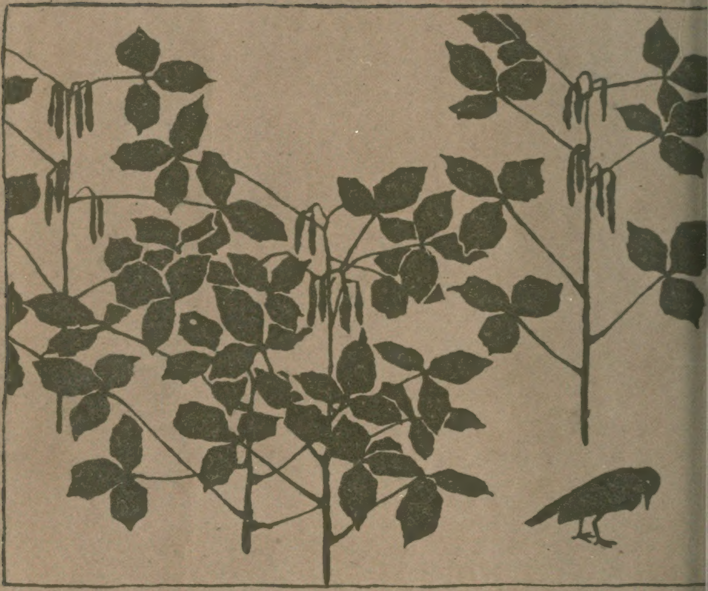
PL
795
B6T8

LIBRARY
SEP 08 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

通俗

漢楚軍談

全



PL
795
B6T8

Bobaiken, Shoho
Tsuzoku kanso gundan

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫